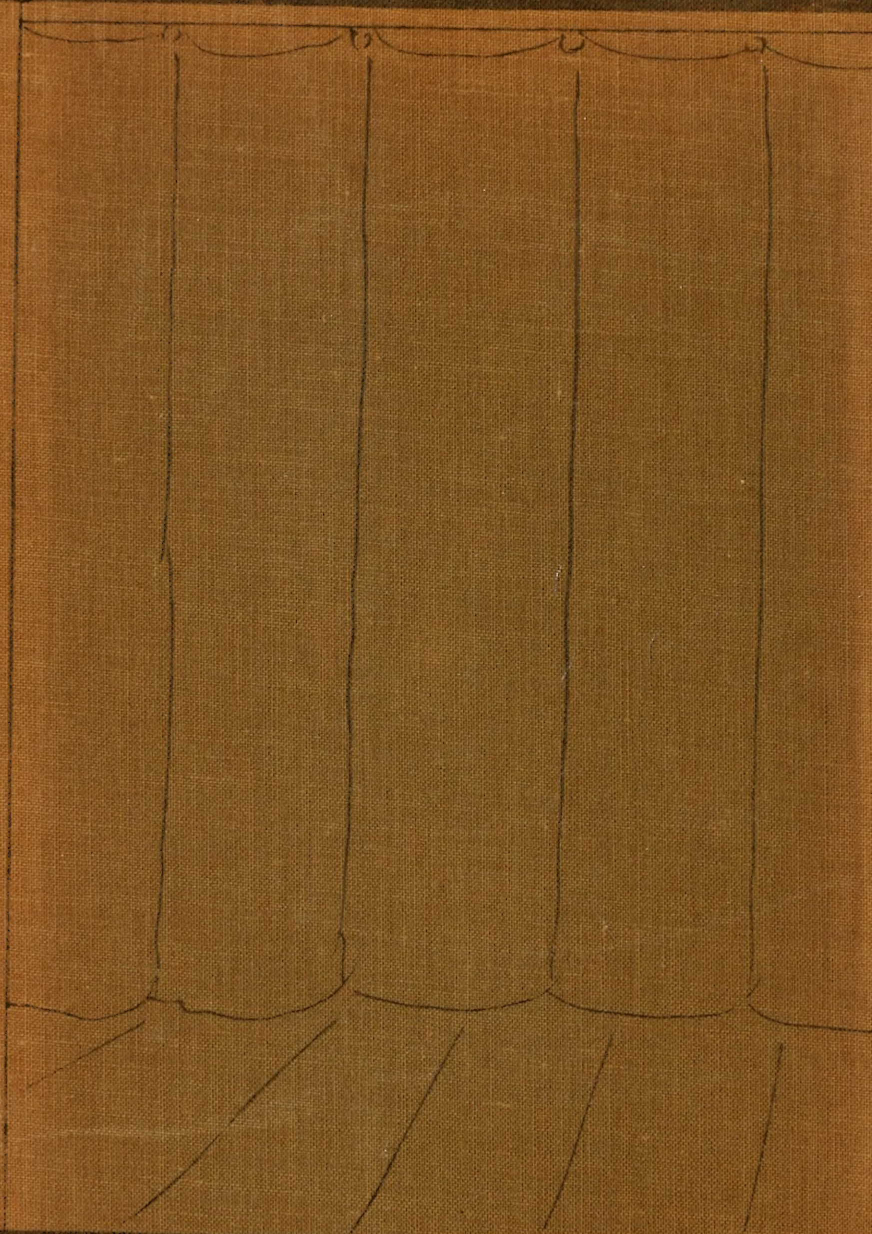


PL
764
N54
1931
v.25

East
Asiatic
Studies

Nihon gikyoku zenshū

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/nihongikyokuzens25toky

日本戲曲全集
第二十五卷

小說脚色狂言集

東京
春陽堂版

PL
764
N54
1931
V. 25
LIBRARY
SEP 26 1966
UNIVERSITY OF TORONTO
1126443

日本戯曲全集　第二十五巻　目次

小説脚色狂言篇

白妙の人喰ひ馬にえいと放せしつる音は覘ひくろはぬ古歌の判だん血すじにからむ
捕り繩に思はずそろふ破傷風の良薬あはれ催ほす一節は音色やさしき

嵐山の名笛

花魁莟八總

名木八株

傾城の八文字は閨の勝鬨
里見の八犬士は廓の先陣

その大寄を爰に見立てゝ煩悩の犬張子にぽんと打つたる筒先は當り外さぬ玉の因縁
戀路に焦す茶毘の火に姿搔消す不思議の道術再び手に入る一腰を抜けば玉散る

村雨の名剣



初演の繪番附

花魁莟八總

大序

洲崎社の段
館山城の段
落葉峻の段

役名──里見治部太夫季基。里見侍從之助。麻呂小五郎信時。安西三郎景連。赤岩一角。井野丹次。柿崎太郎市。蕪戸訥平。錦織頓次。籠山逸藤太顯行。竈三寶平。奈古の七郎。天津兵内。柚木朴平。同娘、戸山。傾城、玉梓實ハ七郎娘單節。同姉娘、屯手。大塚番作一戍。同女房、手束。傾城、雛衣。同、戸巻。亭主、品七。仲居、お光。同、お倉。同、お總。同、お里。同、お信。泡雪奈四郎。金鞠大輔孝德。山下柵左衛門定包。管領、山内顯定。

造り物、向う奥深に淺黄幕。見附け築地の塀。上手に見事な宮の門、その右に石の鳥居、玉垣。所々に石の燈籠。下手には花見幕を打つ。見事な梅の木。上より紅白の梅の吊り枝を下ろし、すべて洲崎の明神門前の體。そこに床几二三脚、毛氈掛け直しある三味線入りの神樂にて幕明く。直ぐに向うにて

皆々　返した／＼。嘘を返した。

ト矢張り右の鳴り物にて玉梓、伊達の傾城の形。後より雛衣、戸巻、傾城の形にて、侍從之助、衣裳羽織、若殿の拵らへにて、後より一角、信時、丹次、太郎市、訥平、頓次、いづれも衣裳羽織大小にて、品七、茶屋の亭主。お光、お倉、お總、お里、お信、仲居の形。禿二人、この人數銘々の笹に短册を附け持ち出る。これを持たぬは侍從之助、信時ばかり。後より上下の侍ひ、釣り臺に銚子杯、提げ重、菓子盆、料紙、硯、銀の瓦燈、金の茶碗、いづれも高蒔繪、隨分結構なるを入れ荷ひ、その外、供廻り大勢、皆々囃しながら本舞臺へ來る。

返した／＼。嘘をば返した。

品七　サア、やう／＼洲崎の明神さまへ來た。これから互ひに嘘をば取替へる神事の始まり。サア、囃しながら神

前へ行つたり〳〵。
信時　待て〳〵。品七、其方や赤岩一角どのは、様子を知つての事であらうが、若殿と身共とは、品七が何やら面白い趣向があると、大勢に云うたに依つて、此やうに浮れては來たものゝ、見れば銘々の笹に短册を附け、嘘をば返した〳〵とは、マアなんの事ぢや。
品七　ハ、ア、流石の信時さまも、さてはその事を御存じはござりませぬか。
信時　イヤ、身共よりは若殿が、御不審に思し召す。ちよつと様子を申し上げい。
品七　左やうなら語つてお聞かせ申しませう。先づ嘘返しの神事と申すは、都島原の廓にて、毎年正月十五日の夜は、太夫天神引舟遣り手、禿花車から仲居まで、恐らく廓中の男女が打寄り、其やうに色紙短册を笹に附けて島原の内にある最愛天神、また幸ひ天神とも申す神前に參りて、嘘をば返すと云うて、互ひに色紙短册を取替へて戻る。これを都島原嘘返しの神事と申し、それを象つてこの洲崎の末社の内に、天神さまのあるを幸ひ、このお國へ參り合つた、大磯の君達を連れて、天神さまの神前で、互ひに替へる色紙と短册。嘘返しの神事の謂れ、何分斯くの通りでござります。
信時　若殿、お聞きあられましたか。
ト侍従之助、ウン〳〵と頷く。
一角　信時どの、拙者も亭主品七が指圖で、此やうに短册をつけて參つたも
丹次　何卒、若殿様の御機嫌よく
太郎　御遊興あるやうにと存ぜしゆゑ
頓次　返した〳〵、嘘をば返したと申すも
納平　謂れを聞いて合點が參つた。
雛衣　わたしらも様子ば知らねども
戸巻　品七さまの云ひつけで、この色紙短册。
みつ　今の講釋で因縁が
女皆　解つたわいなア。
玉梓　ほんにわたしも恥かしい、殿様と一緒に、その明神さまへ參るのが嬉しさに、皆さんと一緒に來ましたわいなア。
信時　イヤ又、大磯の廓で全盛の玉梓どの、誰れあらう當安房の國の主、里見治部太夫季基の若殿、侍従之助さまに思はるゝとは、怪しからぬ果報者。
玉梓　若殿様のお情の嬉しさ、推量して下さんせ。併し、

廓の繼路には、云ひ交した殿御の心を引いて見ようと、ちよつと外の揚屋へかゝるも、座敷ばかりの酒事に、心は飛び立つやうに思うても、わざ／＼遅う持たせかけ、行つて見れば隙がいつたの遅いのと、それが口舌の始めとなり、引ッ張つて見せたり、退くの退かぬのと負け惜しみ。花車さま頼んで仲直りの手管。それが勤めの樂しみと、朋輩衆の話しは聞いたれど、皆樣の云ひつけで、殿樣に腹立てさしまするは成らぬので、口舌もひぞる事もならぬゆゑ、ほんに辛氣でならぬわいなア。

くら　そりや尤もでござんす。わたしらへも嚴しい云ひつけ。

ふさ　御機嫌を損じる事は

仲皆　ならぬわいなア。

　ト其うち侍從之助、いろ／＼こなしあつて

侍從　イヽヤ、タ、太夫、今夜ク、廓の意氣地、ク、口舌せう。オヽ面白い。ダ、大事ない。コヽ今宵口舌せう。

　ト始終、口籠つて云ふ。信時、聞き兼ねて

信時　イヤ／＼若殿、そりや御無用にもなされい。あなた樣にはお產れつき、言舌も通らぬゆゑ、兄山下定包どのの云ひつけ、廓の御遊興も、隨分と仰せの通り仕り、お腹を立てさせぬやう、ナウ、一角どの。

一角　左やうでござる。若殿樣をお慰めの爲、家老定包どのゝ云ひつけ。それゆゑ我れ／＼も廓の者どもに打交り、お供の役目。若殿の御前にて、いろ／＼のほだえも、憚りには存じますれど、これも即ち御奉公。

丹次　御家老山下定包どのゝ云ひつけで、廓の者を當國へ呼びつけ、我れ／＼も御遊興のお相伴。

頓次　今日で五十日ばかりのほだえ續き。堅い屋敷の侍ひ氣質は、どこへやら忘れ切りました。

太郎　毎夜々々の御酒宴遊興。なんと有り難い事ではござらぬか。

訥平　有り難いやら樂しいやらで、餘りの事で後が恐ろしう存じまする。

品七　イヤモウ、分けて有り難いは、私しにござります。何程雜用揚げ代がかゝつても、定包さまから遣はされます。太夫樣も今日身請けが濟んで、年季證文は定包さまへお渡し申してあれば、屋敷へ呼び寄せての當座、太夫さまが窮屈に思し召したら惡いとあつて、外の太夫樣方仲居、禿に至るまで、このお國へ揚詰めの體。金銀の攫み取りとは、この時でござりますわい。

頓次　廓の亭主が金欲しからぬは、神武以來これが初めてであらう。

皆々　ハヽヽヽヽ。

信時　それと云ふも、兄定包どのゝ指圖ゆゑ。有り難いと思へ。

品七　エヽ、有り難うござりまする。

侍從　ノヽ信時、ソヽそんならオヽおれと、タヽ太夫は、クヽ口舌ならぬか。

信時　イヤモウ、御無用になされませ。ナウ、いづれも。

一角　左やうでござります。この事ばかりはお止まりなされませ。

侍從　エヽヽ、折角タヽ樂しんで居たものを、タヽ太夫。

玉梓　イエ／＼、皆樣のお心遣ひ。もう止しになさんせいな。

侍從　ウン／＼。

品七　時に、この睦返しの神事、見れば若殿樣と信時さまの短册がない。早うお書きになつて、お取替へになさりませ。

信時　如何にも、若殿と一緒に認めて渡すが、マア短册には何を書くのぢや。

品七　イヤ、歌でも詩でも、或ひは發句でも、出鱈目に書く下へ、銘々の名ばかり書き、好いた者と取替へたがようござります。

玉梓　申し信時さま、わたしは殿樣と取替へうと思うて、鳥もなく鐘も聞えぬ里あらば、二人濡る夜の隱れ家にせんと、可愛らしいこの和歌を、書きましてござんすわいなア。

女皆　玉梓さんの、きつい思ひ込みやうぢやわいなア。

戸卷　わたしは、誰れを戀ふとの主も定まらねば、散る散らず聞かま欲しさを故郷の、花見て歸る人も逢ひなん。と、この歌を書いたわいなア。

雛衣　わたしは、色に出にけり我が戀は、との歌を書いて置きましたわいなア。

みつ　こちや又、伊勢物語の八つ橋の歌。

仲皆　その餘りは、大方品七さまの代りばかり。

禿一　七夕の歌を書いてもらうたわい。

禿二　わたしらは汐干の歌。

品七　汐干とは蛤蜆、七夕とは土器と云ふ心でござりまする。

太郎　身共は卽ち武藏野の歌。

丹次　某は、千松島の片歌。
信時　して、頓次、訥平の兩人も、つき召されたか。
頓次　拙者は常から不調法者ゆゑ、附き事は大得手もの。さりながら、餘程上達いたした。お聞き下され。逢ふ事は猶かた原の夜はなく、晝は消えつゝ頭かく山。なんとどうでござりまするな。
一角　そりや道行やら歌やら、譯が解りません。
訥平　拙者は又、格別あの雛衣太夫に執心でござるから、どうぞ彼奴と取替へようと存じ、新物を致した。お聞きなされ、雛衣の雛衣の、お敵を締めて寢ようとて、思ひ出だせば立つ雛かな、とは不調法。
一角　なか〳〵出來ました。
侍從　タヽ太夫、信時、リヨリコ料紙硯持て。
信時　ハツ。
　ト信時、硯持ち行く。侍從之助、さら〳〵と書いて
侍從　イヽ一角、これを見い。
一角　ハツ。
　ト短册取つて
花と見つ傾城どもが立ち姿。こりや發句を遊ばされましたな。

侍從　ドヾどうぢや〳〵。
一角　なか〳〵面白い事でござりまする。
信時　また若殿には格別なものぢや。
品七　なんと遊ばされましたな。もう一遍お聞かせになつて下さりませ。
一角　花と見つ傾城どもが立ち姿。なんと面白いではないか。
品七　ハヽア、花と見つ傾城どもが。どもとは差合ひぢやござりませぬか。
一角　何を馬鹿者。扣へて居らう。
品七　ヘイ〳〵。
　ト後へ寄る。
一角　これにて玉梓どのと、お取替へなさりませ。
侍從　オヽさうせう〳〵。
一角　サア、信時どの、貴殿はどうでござるな。
信時　拙者も只今仕りまする。
　ト紙硯を取つて
常にあの戶袋に心をかけて、口說いても得心せぬが、今日の神事を幸ひに、取替へて日頃の思ひを晴らす。さう思へ。

ト太郎市の方を見ながら、短册を書いて、一角に見せ
これを御覽じ。

一角　こりやなんでござる。

信時　ドレ〳〵、讀んでお聞かせ申す。抱さかされさてさ
ねさたい。なんと、どうでござるな。

一角　そりやマア、なんの事でござるな。

信時　ハテ、抱かれて寢たいと云ふ事へ、サの字を入れた
が、これを專ら人が云ひますで。

一角　ハテ面白い御趣向。サア、これより神前へ參つて取
替へる神事。若殿樣には、イザお越しあられませう。

侍從　ナ、成る程、サ、タ、太夫。
ト玉梓の手を取りて
ミ、皆の者。

皆々　ハア、。
ト辭儀する。

品七　ハア〳〵、そのハアでは堅い〳〵。矢張り神前まで
囃して參りませう。

信時　オ、、それがよい〳〵。戸卷は身共と一緒に。
ト手を取れば

戸卷　エ、、嫌ぢやわいな。

ト振り切る。訥平、雛衣の手を取つて

訥平　われらは雛衣。

雛衣　エ、、嫌ぢやわいな。

女皆　ても、よい受けな。

玉梓　サア申し、殿樣。

皆々　先づお入りあらせませう。
トまた右の囃子になる。
返した〳〵、腔をば返した。
ト皆々囃しながら上手の門の内に入る。信時、ソツと
立戻る。景連、衣裳羽織、深編笠にて、橋がゝりより
出て、笠を取る。合ひ方になる。

景連　信時、いよ〳〵侍從之助は爰へ參り居るな。

信時　これは安西三郎景連どの。

景連　信時、兼ねて其方と申し合せた通り、彼の儀につい
て景連、わざ〳〵これまで參つたのぢやワ。

信時　成る程、兼ねてこなた樣と申し合せし通り、首尾よ
う行けば拙者が出世。

景連　某兼ねて里見の家を望むは、同じ國を領しながら、
治部太夫が支配を受け、この身は郡代も同然。その氣遣
ひさ。それゆゑ其方と云ひ合せし通り、上使に立つたる

その席にて、何かの手筈。間違うては面倒。
信時　イヤ、お氣遣ひにならるゝな。若殿侍從之助をしくじらすは、先達てお手に入つたる、彼の里見の重寶、村雨丸の劍。
景連　寶藏の番人、犬山道策を手にかけ、奪ひ取つたるこの村雨丸。兼ねて帶刀いたし居れば、劍の紛失が一つの越度。
信時　今一品の嵐山の名笛も、何者が奪ひ取つたやら、紛失いたせしとあつて、寶藏の鍵預かり、犬川衞士は云ひ譯の爲切腹したれば、誤まりだらけの侍從之助。
景連　義成が上洛に附き添ふ役目は、日頃より支へ立つる金鞠大輔、大塚番作、この兩人に申し附け、互ひに功を爭はせ、遺恨を含ます我が計略。
信時　そこは幸ひ、大輔めも番作めも、日頃より劍術の高慢。その勝負の勝なる方には、上洛の供をさせても、寶が無ければ云ひ譯立たず。負けたる者には面恥かゝせ、自滅さするはなんの手間隙。
景連　忠臣の聞えある杉倉氏元は、先達てより國遠して、行くへ知れず、殘るは山下堀内兩人。義成親子は兼ねての手段。それにつき信時、其方が心底見拔きしゆゑ、奪ひ取つたる村雨の劍を預け置く。隨分大切に守護いたせよ。
ト景連、刀を差出す。
信時　畏まつてござる。さりながら、三本差すも異なものなれば、暫時こなた樣のお刀と取替へて。
景連　成る程、聢かに取替へ置くぞ。
ト互ひに刀を取替へて
信時　この上はこの劍を預かり、こなた樣のお望み、追ツつけ叶ひませう。
景連　その時は家柄と云ひ、其方も立身出世。
信時　只それのみ願ひまする。
景連　然らば身共は立歸らう。
信時　御歸宅あつて、何かの手番ひ。
景連　密事もあれば、後より熟談。
信時　景連さま。
景連　信時、さらば。
ト唄になる。兩人こなしあつて景連は花道、信時は上手へ別れ入る。在鄕の中へ神樂を打交ぜて、向うより七郎、浪人の中親仁にて、懷中に子を抱き、曳手、世話の着流し、旅の形にて連れ立ち出でゝ

曳手 申し、父樣、もう爰が洲崎の明神さまでござんすわいなア。
七郎 ほんになア。孫を愛しながら歩くので、ツイ來たわいなう。
曳手 お年寄りのしんどからう。その坊は、わたしが代つて抱きませうわいなア。
七郎 イヤ／＼、大事な可愛い孫を抱いて居れば、懷でほやほや笑ひ居る。祖父が樂しみ、滅多にやわが身に抱かされぬ。時に曳手、折角わが身の願ひ、在所から爰まで來て、屋敷へ行つたのに、彼の人が居ぬで殘念な。
曳手 サイナ、折角來たのに他行とやら。どうぞ晩方に行つて待ち合せて、お前頼んで下さんせいなア。
七郎 ハテ、娘のわが身の願ひを、おれに如才があらうか。よい次手ぢやに依つて、この坊めが顔を、妹に見せてやらうと思うて、館山の下屋敷へ行つたところが、これも家に居ず。
曳手 サア、聞けば、この洲崎の明神さまへ參りやつたとの事。妹は玉梓と云うて、大磯では名高い全盛。人に尋ねたら、ツイ知れませうぞいなア。
七郎 サア、どうぞ妹めに、早う逢ひたいものぢやが。

ト此うち臆病口より玉梓出て、兩人を見て
玉梓 オヽ、お前は父樣、姉樣ぢやござんせぬか。
曳手 ヤア、其方は妹、單節ぢやないか。
七郎 ほんに娘の單節。コリヤ／＼、われに逢はさうと思うて、孫を連れて來た。サア／＼、ちよつと顔を見い見い。
ト子を連れて行つて、玉梓に渡すを取つて
玉梓 わたしもこの間は、坊の便りも聞かず、案じて居りました。父樣、ようマア連れて來て下さんしたなア。
曳手 サイナウ、其方も知つて居やる通り、父樣がお屋敷に居やしやんした時、親々の云ひ號けして下さんした夫、金鞠大輔どのゝお目にかゝつて。
七郎 サア、娘の曳手を呼び取つてもらはうと思うて、相談に行つたれば、大輔には他行。ア、今思ひ直せば、以前の那古の七郎と違ひ、今では上總の土百姓。大輔が娘を呼び取つてくれるか、くれぬかは知らねども、雁は八百、やりかけて見る心ぢや。
曳手 その次手に、館山のお屋敷へ行つて、其方にも逢はさうと思うて、それで爰まで來たのぢやわいの。
玉梓 そりやマア、よう來て下さんしたなア。その代りに

お前の事は氣遣ひさんすな。云ひ號けの大輔さまは、わたしが云ひ交した殿樣の御家來なりや、殿樣に賴んで、お前を女房に持つて上げて下さんせと、大輔さまへ云ひつけてもらふわいなア。

七郎　イヤ、そりや惡からう。

玉梓　エヽ。そりや又なんでえ。

七郎　ハテ、おれも以前は里見の家中、聊かな事で浪人して、母が大病、人參代にこの妹單節を、大磯の廓へ勤め奉公に出して、今幸ひと若殿の侍從之助さまと云ひ交し、コレ此やうに子まで生したれど、おれが素性を必らず必らず若殿樣に云ふな、隱して置けと云ひつけて居つたはな、もし今でも歸參が叶うた時、若殿樣のお胤を宿した傾城は、那古の七郎が娘。その庇にて元の武士に立歸つたと云はれては、先祖より傳はつた那古の苗字に疵がつく。それより矢ッ張り貧しくても、上總の土百姓が筋が立つと、常々云ひつけた通り、姉が事も素性の事も、必らず／＼若殿に申し上げるな。

玉梓　サア、そりやよう合點して、深く隱して居りましたわいな。

曳手　あゝ云ふ堅い父樣の氣性ゆゑ、その坊を產み落しやると、在所へ連れて行て育てるワ。男のお子ぢやに依つて、國の繼目などゝ卑劣な願ひはせぬと云ふ、昔氣質。

玉梓　サア、その時わたしが懷胎の事を、殿樣に云うたれば、一家中の手前、大殿樣への聞え、必らず密かに育ててくれいと仰しやつたゆゑ、お前方に今お世話になりますわいなア。

七郎　ハテ、若殿のお胤でも、腹は賤しいおれが娘の產んだ小さ。例へ國の繼目にすると云うて、迎ひがござつても、滅多には渡さぬ。

トこの時、上手より

訥平　太夫どの／＼、玉梓どのはどれへござつた。

曳手　妹、其方を呼ぶは誰れぢやや。

玉梓　今日殿樣や皆樣と、この明神さまへ參詣。わたしを呼ぶのは、家中の衆でござんせう。

七郎　そんなら爰に行逢うたら面倒な。サア／＼姉、おぢや。

玉梓　ア、申し、父樣、折角ござんしたのに、まだ話したい事もござんす。姉樣と一緒に、どこぞでちよつとの間、待つて居て下さんせいなア。

七郎　イヤ、まだ金鞠大輔が屋敷へも行かねばならぬ。曳

手、妹があのやうに云ふ事。あの向うの馬場先の茶屋へ
行つて、待つて居やうか。

玉梓　どうぞさうして下さんせいなア。

ト七郎、抱子を受取り、懐へ入れると上手より

訥平　玉梓どの〳〵。

七郎　そんなら何もかも後に。

曳手　妹　待つて居りますぞや。

ト唄になり、七郎、曳手、こなしあつて橋がゝりへ入る。玉梓、後見送るうち、訥平出でゝ

訥平　太夫どの〳〵、玉梓どの、これにござつたか。先程より一遍探して居りました。

玉梓　そんなら殿様が呼んでかえ。

訥平　イヤ、殿様ではござらぬ。御家老山下定包さまが、こなたにこの文を、密かに渡せと仰しやつたれど、人目があつて差扣へ居つた。お受取りなされい。

ト懐より封じた文出して玉梓に渡す。

玉梓　定包さまからこの文をわたしに。又いつもの通り

トこなしあつて封を切る。

御覧も御面倒と存じながら、また〳〵文して申し上げ候ふ。

ト後は口の内にて読みて

エヽしつこい。また此やうな。

ト狀を打ちつけようとして、思ひ入れあつて、ひん捩り懐へ入れる。

訥平　太夫どの、御家老よりの御狀は、何用でござつた。

玉梓　サア、定包さまからのお文は、ほんにあらう事か、あるまい事か。

ト云はうとして

サア、殿様を隨分大切にせよとの、お文ぢやわいなア。

訥平　ハテ、天晴れの忠臣でござるなア。

トこの時、臆病口より侍従之助、信時一角、暮明きの人数皆々出て

信時　これは玉梓どの、先程より若殿のお召し。これにて何してござつた。

玉梓　サア、わたしはなア。ソレ、最前の殿様のお發句を失うたに依つて、もし爰に落してはないかと、それで探して居ましたわいなア。

信時　ハテ、失うたらお願ひ申して、また書いてもらうたがよいわサ。

侍従　タ、太夫、ダ、大事ない。ホ、發句が失せたら、マ

マまた書いてやる〳〵。

ト この時、兵内、上下大小にて出る。

頓次 若殿、これにござりまするか。

兵内 貴殿は天津兵内どの、なんぞ火急な御用でもござつたかな。

兵内 イヤ、別儀ではござりませぬ。先達てよりお噂のある、室町どのよりの御内意として、安西三郎太夫景連さま、程なく館山のお下屋敷へお入りとの事。それゆゑ大殿治部太夫さまには、即ちお上使迎ひとして、はや下屋敷へお入りでござれば、御歸館あつて然るべう存じまする。

一角 成る程、御上使のお入りあれば、大殿樣にもお入りは必定。イザ若殿樣にも、早々御歸館あられませう。

信時 イヤ〳〵、一角どの、兵内どの、何も其やうにお急きになるな。館山のお下屋敷は程近し。御上使がお入りあつてから、お歸りあつても遲かるまい。

洒平 左やうでござる。それよりは爰に暫しが間、御遊興あるが御身の藥。

頓次 物堅い屋敷の窮屈より、これでゆる〳〵お慰みあるがよろしうござる。

侍從 オヽ、さうぢや〳〵。ジヨ〳〵上使の來るまでは、イヽ、去なぬ。ヒヨ〳〵兵内にも、一角にも、ソヽ、さう思へ。

一角 すりや、それまで御歸館ないか。

兵内 大殿樣が、早お入りあつても

太郎 矢張り、これにて御遊興。

ト 立役四人、顏見合せ、困つたこなしにて

四人 ハテ何ともハヤ。

ト 在鄕唄になり、向うより朴平、世話親仁の形。戸山、木綿やつし世話娘にて、朴平を負うて出て花道にて

朴平 ヤイ戸山よ。おれが云ふ所へ、早く連れて行かつされ。

戸山 申し父樣、もう爰が洲崎の明神さまでござんす。參詣なさんせや。

朴平 イヤ〳〵、明神さま面白うない。向うに大勢人が居る。ちやつと向うへ連れて行け〳〵。

戸山 アイ〳〵、畏まりました。

ト 戸山、朴平を負うて本舞臺へ來て、皆々の前へ行く。

頓次 ヤイ〳〵女め、若殿の御前、見苦しい。下がり居れ

下がり居れ。

訥平　下がり居らぬか〳〵。

ト口々に云ふ。戸山、悸りして元へ戻る。

朴平　ちやつと連れて行かぬかいやい〳〵。

戸山　アイ〳〵。

トまた行きかける。

頓次　まだ〳〵慮外な。下がれと云ふに下がり居らぬか。

戸山　アイ〳〵。

トまた戻りかける。

朴平　ハテ、連れて行かぬかいやい。エヽ、何を愚圖々々と。ちやつと連れてうせぬかいやい。

ト戸山の肩へ摑みつく。

戸山　アイ〳〵、連れて參ります〳〵。

トまた行きかける。

頓次　ヤイ女め、あなたをどなたと思ふ。この國の主、里見治部太夫さまの若殿、侍從之助義成さまぢや。

訥平　それに慮外な、老ぼれめを連れて、御前間近く、身の程知らぬ下司女郎め。

頓次　切捨てに致さうか。

トきつとなる。戸山、悸りして

戸山　アヽ、申し〳〵、お待ちになつて下さりませ。左やうとも存じませず不調法、お赦されて下さりませ〳〵。

ト云ひながら花道へ行つて

コレ申し父様、向うにござるはこの國の若殿様、連れて行きたうはござんすが、今のやうに、慮外ぢやの切捨てぢやのと、侍ひ衆が叱つてぢや程に、わたしやどんな目に遭うても構ひはせねど、お前に怪我があつたら惡うござんす。これから小湊の誕生寺の方へなりと、また七浦へなと連れて行つて遊ばしまする程に。

朴平　イヤ〳〵、嫌ぢや〳〵。小湊も七浦も、昨日行たぢやないか。おのれ、侍ひが叱るを幸ひ、連れて行きたうないのぢやな。

戸山　アヽ、なんのマアお前、そんな事ぢやござんせぬ。連れて行てからが、お前の慰みには。

朴平　イヤ〳〵、吐かすな〳〵。親の云ふ通りにせぬ、茲な不孝者めが。

ト體をゆさぶる。

戸山　ア、申し、もう堪忍して下さんせ。向うに連れて行きますわいな。

朴平　そんなら料簡してこますから、早う連れてうせう。

戸山　アイ〳〵。
　トこなしあつて、本舞臺へ來る。
納平　ヤア、性懲りもない女郎め、また連れてうせたか。
頓次　重々の慮外者め、いつそ老ぼれ共に打ち殺して。
　ト兩人、刀の柄に手をかける。此うち一角、兵内は上手に扣へ、太郎市、丹次は下手、侍從之助、玉梓、信時、女中皆々は床几にかけ、湯飲み居る。戸山、恟りして逃げる拍子に、朴平を落す。朴平、痛い〳〵と云ふ。戸山、介抱せうとする。頓次、訥平、やかましう云うて嚇す。戸山あちらを留め、こちらを留め、兩人を留めて
戸山　ア、申し〳〵、マア〳〵、お待ちになつて下さりませ。私しはこの青瀧村に住みまする者でござりまするが、天にも地にもたつた一人のこの父さん、内に居ては屈しる。方々を連れて歩けと申されますに依つて、此やうに方々見物さします。只今も向うへ行きたいと云はれますに依つて、それで連れて參りましたが、この國の若殿樣とも存じませず、段々の不調法。父さんが知らしやんした事ではござりませぬ、私しばかり、どのやうなりとなさつて、年寄つた父樣は、どうぞ御料簡になつて下されませ。お慈悲でござります。拜みます。どうぞお殿樣へ、よろしくお詫びになつて下されませ。
　ト拜み廻る。
頓次　イヽヤならぬ。二人ともに腕廻せ。
朴平　アレ、怖いわいやい。ちやつと連れて逃げいやい。
　ト戸山の脊中へ取りつく。
納平　動いたら手は見せぬぞ。
　ト極めつけるゆゑ、戸山、ウロ〳〵する。
侍從　ア、あれシ、靜めい。
一角　兩人、待たつしやれ。
頓次　ハツ。
信時　若殿の御前をも憚からぬ、慮外な女郎め、なぜお留めなさるゝな。
一角　イヤ〳〵、信時どの、最前より若殿も拙者も、見請けますれば、女が慮外は親孝行。それゆゑ若殿のお免しの御意でござりませう。
侍從　オヽ、ユヽ免してやれ〳〵。
玉梓　ほんに女中に似合はぬ、親御へ孝行なお人。爰へ呼んで、父御も慰めてやつたがよいわいなア。殿樣。
侍從　オヽ、親子のソヽその者を、爰へ呼べ〳〵。

一角　其方が孝心に免じて、若殿のお許し。近う參れ〳〵。

戸山　ハイ〳〵、有り難う存じます。サア〳〵、父様、お許しが出た。ちやつとござりませい。

ト朴平を連れて行く。

一角　ヤイ、その者は其方が眞實の親か。

朴平　イエ〳〵、此奴はわしが爲には繼子でござります。しかも七つの年から世話して育てゝ、今あのやうになつて居つても、甲斐性のないゆゑ、親に不自由な目をさしますわいの。

戸山　イヤモウ、私しに甲斐性がござんせぬゆゑ、年寄つた父様に、不自由な目をさしますが、悲しうござりまする。

品七　ハヽア、さてはこの頃噂のある、靑海村の親孝行とは、こなた様の事か。

戸山　イヤモウ、どうぢや存じませぬ。

兵内　誠に忠孝全きは、その身に幸ひを得るとある。女に似合はぬ、ハテ、奥床しい者ぢやなア。

朴平　なんの、奥は廣い事はござりませぬ。釜の前かけて六疊敷に、親子夫婦の三人住ひ。此奴めは大極道でござります。その證據には、朝は暗いうちから起きて、山稼ぎをして、戻ると茶を沸かして、わしにばかり飯食はして、酒飲ましたり、好きな鯖や鰯を買うて、おればかりに食はして、淋しうなると此やうに連れ歩いて、内へ入れば肩を揉んだり足を擦つたり、寢ると蒲團を叩きつけて置き居る。あのやうな極道が、ようあつた事でござります。

丹次　コリヤ〳〵、そりや一々善い事ばつかり。

太郎　それを極道などと申す、おのれが極道ぢや。

玉梓　ほんに孝行な娘御を、あのやうに云ふ親御。日頃が思ひやられるわいなア。

雛衣　あれ見やしやんせ。見かけから怖い爺様ぢやわいなア。

みつ　わたしらも、あんな舅さん持つたら、悲しい事で

女皆　あらうぞいなア。

朴平　アレ〳〵、聞き居つたか。おのれが極道ぢやゆゑ、おりや皆様に笑はれるわいやい〳〵。

ト戸山を散々に打擲する。

品七　コリヤ〳〵、親仁、そりや貴様が無理ぢやぞよ。其やうに打擲すないの。

戸山　ア、申し、お構ひになつて下さりますな。常々父様

の腹の癒る程叩かれませぬと、機嫌は滅多に直りませぬ。
一角　唐の伯奕は、母が打つ杖の弱りしを歎きしとある。それに劣らぬ女の孝行。
侍從　オ、、ア、あの者に、サ、酒をやれ〳〵。
太郎　ハッ。
ト銚子杯を持つて行き
若殿の仰せ。女、有り難う頂戴いたせ。これも全く孝心ゆゑ、仇に思はず頂くがよい。
戸山　これは〳〵勿體ない、お國の若殿樣のお杯を下さりますとは、冥加ない仕合せでござりまする。
ト杯を頂く。朴平引ッたくり
朴平　こりや、おれが飲むのぢや。注ぎ居らう。
戸山　アイ〳〵、こりや殿樣のお酒ぢや程に、味はうてあがれや。
ト戸山注ぐ。朴平飲む。皆々朴平を憎がる。品七見兼ね、菓子盆を持つて行き
品七　コレ〳〵姐よ。酒は親に取られた。貴樣には、このお菓子を遣るぞや。
ト紙に包んでやる。
戸山　これは〳〵、重ね〳〵のお情。エ、、有り難う存じまする。
ト頂く。また朴平引ッたくり、紙にてぐる〳〵と包みて
朴平　このお菓子は、おれが後に食ふのぢや。
ト袂に入れる。
納頓　でも、云ひやうない親仁め。
戸卷　あの親御が憎てらしい程、あの娘さんが
女皆　いとしいわいなア。
頓次　エ、、いつそ親仁めを。
トきつとなる。戸山留めて
戸山　ア、申し、お待ちになつて下さりませ。例へ父樣がどのやうな事さんしても、孝行にするが子の道ぢやさうにござります。父の恩は高い山、母の恩は深い海と申しますとやら。
品七　ハテ、貴樣、ませた事知つて居るなう。
戸山　イエ、私しは何も存じませぬが、近所の物識りなお人の話し。父親の恩は須彌山とは、富士の山より高い山、母の恩は蒼海より深いとは、龍宮よりまだ〳〵深い所ぢやげにござんす。そりや兩親には、どのやうに孝行にし

ても飽足りませぬ。鳥や雀は小さい折に、親鳥に餌を持つて行て食べさす。鳩は親のとまつて居る枝より上へは飛ばぬとやら。鳥さへ孝行にするもの、人間が親に孝行にするは當り前。親在す時は遠く行つて遊ばぬものぢやげにござんす。なぜと云へば、内にはこの子は、どこへ行つて居る、病など發りはせぬか、目は舞ひはせぬかと、親の因果で子の事を案じるもの。その親の心を休める爲、早う戻るが一番の孝行。親の光りは七光りとこそ。いま若殿樣のお菓子ぢやの、御酒ぢやのと頂きます。なりや親と云ふ者は有り難い忝ないもの。それをウカ〳〵と親の事を思はぬは、大きな阿房。人間ではない畜生同然と、サア、聞きまして、それからは私しは、あの父樣が大事ぢや〳〵と思うても、まだ孝行が行き屆きませぬに依つて、打たれたり叱られたり致しますが、孝行なと思うて居りますけれども、矢ツ張り不孝なに依つてゞござりますわいなア。

ト此うち侍從之助、始終を聞いて居て思ひ入れあつて、つか〳〵と花道へ行く。皆々慌てゝ留めて

玉梓　申し殿樣、こりやどこへ行かしやんすぞいなア。

皆々　若殿樣、いづれへお出でなさるゝな。

侍從　サ、サア、オ、大方今日で五十日ばかり、シ、下屋敷でア、遊び。ソ、それぢやに依つて

皆々　いづれへお越しなさるゝた。

侍從　ヤ、屋敷へ行て、オ、親人の御機嫌、ウ、伺ふ。コ、コ爰離しや。

ト玉梓を振り切り、橋がゝりへ走り入る。

玉梓　コレイナア、わたしも一緒に行くわいなア。

ト玉梓、後追うて走り入る。

雛衣　玉梓さん、わたしらも共に

女皆　行くわいなア。

ト女形皆々走り入る。

一角　この上は、いづれもお供。ござれ。

ト一角先に、立役、家來皆々附き從ひ入る。

品七　エヽ、埒もない事で若殿のお歸り。エヽ、忌々しい。

訥頓　イザ、信時さま。

信時　サア、兩人來やれ。

ト兩人を連れて橋がゝりへ入る。

品七　エヽ、なんの事ぢや。おれも行かずばなるまい。

ト　これも走り入る。合ひ方になり、朴平、戸山殘る。

臆病口より大輔、上下大小にて出る。

大輔　親子の者、出かした。

朴平　若旦那大輔さま、仰せの通り娘と二人、首尾よくやり負ふせました。

大輔　ホウ〳〵、出かした〳〵。

戸山　申し父様、兼ねて噂さしやんした若殿様とは。

山平　オヽ、この若旦那様の事ぢやわい。

大輔　コリヤ朴平、それなるは其方が娘戸山とやら。今日は大儀であつたなア。

戸山　ハイ〳〵。

ト俯向き辭儀する。

大輔　若殿侍従之助さま、お産れつき癇氣に依つて、舌を釣り言舌も通らず、少しの事でもお氣に障れば、逆上して猶々御病氣の障り。それゆゑ一家中も心を措き、隨分御機嫌に逆らはぬやうにとあるを幸ひ、佞人どもの益す蔓り、大磯の廓より、この館山の下屋敷へ、遊女を召し寄せ、晝夜を分かたず御身の奢り。某、思案を以て、其方達を頼み、我れと我が身に御得心になつて、御上使お入りのお下屋敷へ、お歸りあつたは思ふ坪。これと申すも、其方達が働らき。過分なるぞよ。

朴平　これはマア、有り難い若旦那のお詞。元私しは親旦那、金鞠八郎さまに中間奉公。ナニガ、若い折には力自慢で、大層な喧嘩を仕出し、下手人に取られ、お手討にもなる所を、命を助かり、お金まで下され、今では女房子を控へ、青海村で杣の商賣。其うち親旦那にはお果てになり、せめては御恩の百分の一、お送りましたいと思ふ矢先、あなた様のお賴み。なんでも首尾よう仕負ふせませうと存じて、娘と二人で魂膽しまして、ほんにモウ三文程の御恩返しでござりまする。

戸山　最前お前が叱らんした時には、合點しながら怖かつたわいなア。

朴戸　ハヽヽヽヽ。

ト兩人笑ふ。

朴平　イヤ申し、大輔さま、いま若殿様のお身持ちについて、佞臣ありと仰しやつたは、そりや、白妙の人喰ひ馬めの事でござりませう。

大輔　ナニ、白妙の人喰ひ馬とは。

朴平　あなたはよもや御存じあるまい。外でもないこの館山の家老、山下定包。

大輔　すりや、某が推量の如く、下々にても定包を。

朴平　サア、人の口には戸が立てられぬと、民をせたげ身を高ぶり、常々拜領の白馬に乗り歩き、農業の最中も構はず、僅かの科にも成敗重く、國の守りに等しきその勢ひ。そこで皆定包を憎み立て、白妙の人喰ひ馬と申しまする。

大輔　サア、身も開かぬにはあらねども、元この館山は、父八郎が預かり。その後、某若年につき、今の家老は山下定包。左やうの噂あるにもせよ、荒立てゝ詮議のならぬは、しかとした證跡を見屆けし上でなくては。

朴平　エヽ、もし彼奴が仕業にて、お家の爲にならぬとありや、多くの人の爲にもなる事。御恩送りにこの身を捨てゝも。憎さも憎し。彼奴を一打ち。

ト云ひかけると、大輔、あたりを窺ひ押へて

大輔　アヽコレ、何事も追つての熟談。

ト戸山も聞くと云ふこなし。朴平こなしあつて

朴平　成る程、マア、それも、しかとは云へぬ世間の取沙汰。イヤ、時に私しは、もうお暇申しませう。

大輔　成る程、大儀であつた。親子の者。

朴平　ハイ、左やうなら若旦那樣。

大輔　靜かに歸らつしやれ。

朴戸　おさらばでござりまする。

ト唄になり、朴平、戸山、連れ立つて橋がゝりへ入る。あと大輔、兩人を見送り居る所へ、七郎、矢ツ張り子を抱きて、曳手と連れ立ち出でゝ

七郎　曳手、妹はお屋敷へ去にはせまいかなア。

曳手　サア、きつう隙が入りましたわいなア。

ト云ひ／＼出て來て、大輔と顏見合せ

七郎　ヤア、こなたは金鞠大輔どの。

大輔　オヽ、さう仰せらるゝは那古の七郎どの。

曳手　ほんに父樣、大輔さまぢやわいなア。

大輔　御息女曳手どの。

曳手　ても、よい所で、お目にかゝりましたわいなア。

ト嬉しきこなし。大輔、七郎が手を取つて上座へ直す。

七郎　百姓の高上がりは緩怠。矢ツ張り

ト下がらうとするを、大輔留めて上座に直し

大輔　イヤ／＼、七郎どの、いま御浪人になつても、以前は里見の同家中。親どもの御朋輩、分けて懇意の仲、御息女曳手どのには、云ひ號けの緣もござれば、先づ／＼。

七郎　ムウ。大輔どの、そんなら以前の云ひ號けの緣があ

るゆゑ、いま浪人しての土百姓でも、上座に直して下さるか。

大輔　ハテ、益體もない。何を仰せらるゝ。

七郎　娘喜びや。其方が願ひ叶うたぞ。

曳手　父様、思ひがけなう、大輔さまのお顔を見て、わたしや嬉しうてならぬわいなア。

　トこなしあつて

大輔　さうして、七郎どのには、見れば赤子を抱き、爰へは何用あつてお出でになつたな。

七郎　イヤ、この子はちつと仔細あつて預かり者。また娘を連れて爰まで來たは、有やうは、こなたにお目にかゝらう爲、屋敷へ行たところが他行。思はず逢ふは盡きせぬ縁と云ふもの。こなたに分けて頼みと云ふは。

　ト云はうとして

娘、委細の事は大輔どのに、其方、直に云や。

曳手　父様とした事が、それがどうして私しが、あなたに云はれるものかいなア、矢ツ張りお前云うて下さんせいなア。

七郎　サヽ、後ではおれが云ふが、初手はマァわが身云やいなう。

曳手　イエ、どうあつてもお前が。

七郎　ハテ、わが身が。

曳手　イエ、お前が。

　ト兩人せり合ふ。

大輔　ア、これはしたり七郎どの、曳手どの、御兩人とも其やうに仰せらるゝは、この大輔に仰しやり憎い儀でござるかな。

七郎　イヤ、さのみさうでもなけれども。

曳手　つい父様が仰しやつて下さんすりや、解る事ぢやわいなア。

七郎　ぢやてゝ、おれが口から。

　トぐづ〳〵と云ふ。大輔、思ひ入れあつて

大輔　エヽ、聞えました、七郎どの、御息女曳手どの、拙者と親どもが云ひ號け致した、大方その儀でござりませう。

曳手　アイ〳〵左やうでござりますわいなア。

七郎　成る程、こなたと娘は幼な子の時から、云ひ號けであつたれど、聊かな過りで浪人して、今では上總へ引込んでの百姓業。娘は段々年がいて嫁入り盛り。しかも大柄ゆゑ老けて見えるが、前の事を忘れず、明暮れこな

たの事ばかりを云うて、案じて居るゆゑ、親の身では不便さまさり

曳手　父様の仰しやる通り、前の云ひ號けの名はあつても今では百姓の事なり、押しつけ業な。大輔さまは里見家では御家老格なり、よもや私しを呼び取つては下さりますまいと、父様が仰つしやる。私しもさう思うたれど、女房とは慮外、腰元なりと端下なりと仰しやつて、あなたのお屋敷へ行て、御用が聞きたいばつかりに、ナア、父様。

七郎　モウ、毎日々々あのやうな事云うて、おれをいぢる。せん法盡きて今日連れて來て、屋敷へ行たも、以前の云ひ號けと云や異なものなれど、娘が願ひの通り、腰元ぢやと思うて、どうぞ呼び取つて下さるまいかと思うて。

大輔　ハテ、過ぎ行かれし親どもの契約。いま御浪人あつても、貴殿は百姓であらうが、町人でござらうが、一旦の契約を變じては、侍ひではござりませぬ。

七郎　ムウ。そんなら以前の通り、アノ娘は。

大輔　以前の云ひ號け。矢張り拙者が女房ではござりませぬか。

七郎　娘、聞いたか。

曳手　エヽ、お嬉しう存じまする。

七郎　そんならいよ〳〵、こなたの屋敷へ呼び取つて

大輔　表向きの祝言いたさうが、爰にてお目にかゝるは思ひがけない俄かの儀。また何か用意仕り、吉日を選み此方から迎ひを遣はさうから、暫らくの延引を、ナウお二人。

七郎　イヤモウ、それを聞けば、例へ一月二月延引してもナア、娘。

曳手　私しがやうな不束な者を、女房に持つて下さります事なら、例へ一年でも百年でも、待つて居りますわいなア。

七郎　何を嘘を云ひ居る。晩からでも行きたい氣ぢやあらう。

ト大輔と顔見合して

ハヽヽヽヽ。

トこの時、橋がゝりより依助、奴の形にて出で

依助　お旦那様、これにござりまするか。

大輔　あわたゞしい。何事ぢや。

依助　ハツ、瀧田の御家老、堀内藏人さまより火急の御

狀。
ト手紙を出す。大輔受取り、披き見て
大輔　ナニ、堀内藏人どのより書狀とは、こりやコレ御上使御入來の上、内見に入るべきお家の寶。
ト恟りして、ちやつと氣を變へ、手紙を懷へ入れて
大儀であつた。これも大方白妙の人喰ひ馬。
七郎　何も氣遣ひな事ではござらぬかな。
大輔　イヤ、さしたる儀でもござらぬ。御上使にもお入りとあれば、先づ今日は。
七郎　歸らいでなんと致しませう。必らず其うち日限を。
大輔　後より吉辰の選み、お知らせ申しませう。曳手どのにもその心で。
曳手　アイ〱、わたしやモウ、日本晴れがしたやうなわいな。
大輔　遠方の所なれば、今宵は手前が屋敷で一宿あれ。明日屋敷より送らせませう。
七郎　なんの役體もない。百姓すりや達者な。まだ外にちと用事もあれば
曳手　どうで後方、お屋敷まで參りませう。
大輔　然らば後刻、御意いたすでござらう。

七郎　そんなら聟どの。
曳手　大輔さま。
大輔　御老人に心を附けて、靜かに。
曳手　アイ〱。
七郎　サア〱、娘おぢや。
ト唄になり、七郎曳手、いそ〱として向うへ入る。
大輔あと見送り
大輔　ハテ、頑丈な老人。ムウ、それは格別、御上使入來の上、若殿のお繼目願ひの御上使に、なくては叶はぬ彼の二品。ハテナア。
トぢつと思ひ入れ。合ひ方になり、上手より番作、着附け、馬乘り袴にて、家來一人連れて出て來て、大輔を見て
番作　ヤア、金鞠大輔どの、爰に居召さるか。
トこれにて大輔、顏を上げて番作を見て
大輔　さう云ふ貴殿は、大塚番作どの。
番作　今日當館山のお屋敷へ、御上使入來につき、大殿のお供して參りし次手、當洲崎の社へ、お家の武運長久を祈る參詣。して、貴殿には。
大輔　それはよくこそ。拙者とてもその通り、この程若殿

侍従之助さまには、日頃御遊興の餘り、今日當社へ御參詣と承り、大殿にも館山のお屋敷へお入りとの事。即ちそのお迎ひ旁々。

番作　して、若殿には、いづれにござるな。

大輔　先刻御歸館いたされました。

番作　それは重疊の仕合せ。それにつき、今日御上使のお入りは、若殿のお繼目、御上洛の儀と存ずるが、そのお供に附き從ふ役目の儀、お聞きあつたか。

大輔　如何にも。そのお役目は貴殿と、斯く申す大輔、いづれぞ一人と承り及びました。

番作　それにつき、山下定包どのゝ勸めにて、御自分と拙者に試合のさせ、勝ちたる者に御上洛のお供との儀でござる。

大輔　すりや、上洛のお供には、兩人が試合の上、勝目に依つて相定めるとある、アノ定包どのが。

番作　依怙贔屓なき取捌きと、大殿の御意でござるが、貴殿は如何思し召したな。

大輔　そりやハヤ、君命なればもだし難く、殊に若殿御上洛のお供なれば、所詮貴殿との試合には、及ばずとも、お相手になつた上。

番作　そりや拙者とてもその存心。所詮貴殿のお相手には及ばずとも、ならぬまでも試合に相勝ち、この役目を相勤めねばなりますまい。

大輔　誰れしも武士は恥ある者。上洛のお供に、附くか附かぬの晴れの勝負。

ト兩人始終、思ひ入れあつて

番作　その勝負に勝つたるところが、なくて叶はぬ名笛。イヤサ、なくて叶はぬ、イヤ、銘々の手練の覺え。

大輔　此方にも寶の、イヤ、爰で勝負は時の運。未熟ながら身を凝らし、貴殿のお相手になりませうわい。

番作　尤も武士はさうあるべき事。こりや、拙者も工風を凝らし、試合に勝つて御覽に入れう。

大輔　すりや、アノ貴殿が。

番作　御自分様にも、見事拙者が。

大輔　お相手になるはこの身の譽れ。

番作　その刻限は申の上刻。

大輔　拙者はお先へ。大塚どの。

番作　金鞠大輔どの、後刻

大輔　御意得るでござらう。

ト互ひに氣を持たせ、試合に負けうと云ふ心意氣に

て、花道と本舞臺で顔見合せ、氣を變へ、目禮して大輔、依助を連れて花道へ入る。番作あと見送りて、思ひ入れあつて

番作　大輔が今日の詞、どうやら身共の心を察してござる。こりや、どうあつても立合ひには。

トわざと負けうと云ふ思ひ入れあつて、フト家來を見て

是非とも勝たねばならぬわえ。

トこなしあり、神樂になり、橋がゝりより手束、着流し、屋敷風の拵らへにて、逸藤太、馬乘り袴にて、連れ立ち出で

逸藤　サヽ、斯うお越しなされい。

手束　どうぞお目にかゝりたいものでござりまする。

ト云ひながら出て、番作を見て

ヤア、それにござるは、夫番作どのぢやござりませぬか。

番作　オヽ、其方は女房手束。籠山逸藤太どのではござらぬか。

逸藤　大塚番作どの、御內室が貴殿を尋ねてござるから、大方洲崎へ御參詣と存じ、これまで御同道申したのでござる。

番作　それはハヤ、御苦勞千萬。これへお掛け下され。

逸藤　イヤ、お構ひになるな〳〵。

ト番作、逸藤太、床几へかけて

番作　手束、手前は爰へ何用あつて參つた。

手束　サア、私しは御臺樣より大殿樣へ、お伺ひの御用にて、館山のお屋敷まで參りましたところ、逸藤太さまにお目にかゝり、お話しを承りますれば、今日館山のお屋敷にて、御上洛のお供のお役目につき、あなたと金鞠大輔さまと立合ひの上、勝つたる方がお供の役に定まるとやら。そりやマア、ほんまの事でござりますかいな。

逸藤　これはしたり、手束どの、氣の惡い。拙者がなんぞ僞はりを申すやうに。この間よりその噂、なんの相違がござらう。ナウ、番作どの。

番作　如何にも逸藤太どのゝ仰せの通り、大殿より直々に仰せ出され。なんのそれに相違があらうぞ。

手束　そりやマア、何より有り難い大殿樣の仰せ。さうしてマア金鞠大輔さまにも、御存じでござりますかえ。

番作　ハテ、只今も爰にて大輔どのに出合ひ、その事を申したところ、誰れも願ふ晴れの役目、身共を相手は望む

ところと、勇み進んで行かれたが、それがどうした。
手束　サア、さう承りましたゆゑ、なんでも相手は金鞠さまなり、さう云ふ晴れな立合ひに、もし御如才はあるまいけれど、必らずお負けにならぬやう、洲崎の明神さまへもお願ひ申さう、勝負が聞きたさに、龍山さまをお願ひ頼み申して、參詣をして參りませうと存じまして。
番作　ナニ、それを其方が小差出た。馬鹿な奴が。
逸藤　イヤ、番作どの、お叱り下さるな。御内室は夫を思ひ、その位の儀は有勝ち。斯く申す逸藤太なども、弓は引き方とやら申して、貴殿の贔屓。殊に我れ〳〵の組は、二階堂の門弟、番作どのにはその高弟。師匠勝りの貴殿なれば、そりやハヤ、金鞠大輔どの位の相手は、一向苦にはなりますまいが、もしこの試合に負けた時は、上洛の供に外れ、未熟不鍛練ゆゑなどゝ、一家中の物笑ひにもなりますれば、必らずともに御油斷召されな。お心得下されい。
番作　これはハヤ、御深切のお心添へ、有り難う存ずる。これもハヤ時の運でござれば、一概に勝つとばかりも申されねど、相手は金鞠大輔どの、さのみ苦勞にも存じませぬて。

手束　サア、その大輔があなたの癖。逸藤太さま始め、大勢のお組下が、あのやうに案じてござる事。必らずお負け下さらぬやう。
番作　ハテサテ、女のべり〳〵と喧ましい。この勝負に相勝たば、直ぐに若殿のお供して御上洛。なりや其方は、永らくの留守をせねばならぬ。ハア、その他行を祈つて居るのぢやなア。
手束　ア、なんのマア、そんな事ではござりませねど、例へ一年二年お留守でも、大事の夫が晴れのお役目。それゆゑお供に外れては、あなたばかりかお組下の、お顔まで穢れる事と存じまして。
番作　イヤ〳〵、さうではあるまい。試合の勝負よりは、身共の留守を樂しんで居るのであらう。
手束　アノマア、氣の廻つた仰しやりやう。
番作　それでもてまへが餘り嬉しがるから。
手束　イエ〳〵、あなたが。
番作　イヤ其方が。
　　ト兩人、せり合ふ。逸藤太分けて入り
逸藤　これサ〳〵、如何に若い夫婦合ひとて、途中で女夫諍ひは御無用に召され。

番作　でも、餘り口をきゝ過ぎますから。
逸藤　ハテサテ、もうようござる。これはさて、迷惑な役目でござるわい。
手束　イヱ、ありや御自身の氣の通り。
番作　ハヽヽ。成る程、逸藤太どのゝ仰せの通り、お心安いに任せ、夫婦諍ひの取扱ひ役を申し附けた。眞平御免下されい。
逸藤　なんの／＼、それも御内室の仰せらるゝ通り、貴殿に引けを取らさぬやうに存ずるから。
手束　いろ／＼の事云ひまして、逸藤太さま、お免し下されて下されませ。
逸藤　それはさうと、最早御上使にもお入りでござらう。手束どのには御家來をお連れになり、御參詣をなさるがよい。
番作　成る程、先刻より餘程の隙取り。手束、其方は早々參詣いたして來やれ。
手束　ハイ、左やうなら私しは、參詣いたして參りますから、必らず今も申した通り
番作　ハテサテ、しつこい。この番作の胸にあるわい。
手束　左やうなら逸藤太さま。

逸藤　サヽ、お越し下されい。
手束　ドリヤ、明神さまへ願うて來うか。
ト唄になり、家來を連れて上手へ入る。番作逸藤太殘つて
番作　ハテ、女と申す者は、さしてもない儀を、馬鹿なものでござります。
逸藤　イヤ、左やうではござらぬ。先刻も申す通り、必らず引けを取らつしやるな。
番作　ハテ、ようござる。お案じ下さるな。併しもう、お館へ參つてもよい時刻。御同道仕らうか。
逸藤　サヽ、お越し下されい。お供申さう。
番逸　然らばお先へ參る。
ト兩人、花道へ行きかけ
先刻、金鞠が詞の樣子。いづれ今日の立合ひには
逸藤　ものゝ見事にお勝ち下されい。
番作　さうする時は彼の詮議を。
逸藤　なんと仰せらるゝ。
トこれにて、番作、思案を變へて
番作　サア、參りませう。
ト唄になり、兩人連れ立ち、向うへ入る。チョン／＼

にて返し。

造り物、通りの二重。見附け金襖。上手に筧附手水鉢。二重の上手に景連、衣裳社衽に改め、二重の下手に里見治部太夫季基、大殿の拵らへ、社衽にて、後に小姓二人扣へ、平舞臺に近習大勢扣へ居る。すべて館山下屋敷の體。太鼓謠にて道具納まる。太鼓謠直ぐに打上げる。

景連　里見治部太夫どの、兼ね〴〵の願ひに任せ、侍從之助義成どのへ、跡目を讓り、隱居願ひを開き屆けの使者として、近く管領山內顯定どの參着の筈。それに付き室町將軍義教公より御懇望たる、當家の重寶村雨丸の名劍、まつた嵐山の名笛。身共に內見の役目仰せつけられたが、檢めませうか。

季基　安西景連どのには、御內見のお役目、御苦勞千萬に存じまする。先達てより病氣の某、隱居願ひ相叶ひ、悴侍從之助に跡目仰せつけらるゝは、この上の大慶はござらぬ。村雨丸の劍、嵐山の名笛は、先祖の軍功に依りて申し受け、家の重寶と存ずれど、義教公の御懇望とあれば、何しに違背仕らう。この上ながら萬事よろしく、お執成しの程、願はしう存ずる。

景連　御子息侍從之助どのは、疾より武將へお目見得もあるべきところ、長病とあつて未だ上洛もなきゆゑ、侍從之助どのの病氣の樣子、とくと見屆けよとの、これも室町どのより御內意でござる。

季基　ハヽア、成る程、悴侍從之助、疾よりお目見得も出させんと存ずれど、年積るに從うての長病、醫療手を盡すと雖も、未だ快方仕らず、追つて保養の加へ、急ぎ上洛の致させませう。

景連　すりや、治部太夫どの、義成どのには、いよ〳〵病氣でござるとな。ハテ、長病でござるなア。

ト詰まるこなし。此うち、向うより、バタ〳〵にて侍從之助、玉梓、雛衣、お光、仲居皆々附き、後より一角、信時、兵內、丹次、太郎市、その外付き從ひ出る。季基、思ひ入れあつて

季基　コリヤ〳〵悴、室町どのより御上使がお立ちなされてござる。

侍從　ハ、ハツ。

ト下に居る。皆々もヅツと下に居る。

一角　すりや、今日の御上使には。

信時　安西三郎太夫景連さまでござりまするか。
季基　如何にも。
ト侍從之助、ズツと前へ出て
侍從　ア、安西三郎景連さまには、お役目ゴ、御苦勞に存じまする。
景連　ムウ。すりや御子息侍從之助どのには御病氣とあるが、何も打臥しての病氣でなく、辛苦にもならぬ吃りでござるか。
季基　それゆゑにこそ、お目見得の延引。
景連　ハヽ、何日まで待つても、生れついた吃りが癒らうか。病氣々々と云ひ觸らし、お目見得延引しては方途がない。廓遊びで奢りの條々、兼ね〴〵上聞に達しあるぞ。
季基　すりや、悴侍從之助が。
景連　オヽ、云ひ譯は滅多にやござるまい。
トこの時、向う揚げ幕より
定包　その申し譯は山下定包、それへ參つて仕りませう。
ト合ひ方になり、定包、燕手𧘕𧘔、大小にて出る。皆皆見て

信時　ヤア、こなたは兒者人。
季基　定包、其方の出仕、待ちかねたわい。
侍從　コ、ヽ、ヽ、コレ、オ、定包か…景連さまが。
定包　サア、ようござります。お心を措かれまするな。御病氣の障り、先づ〳〵落ちついてござりませう。
トよき所へ直る。
玉梓　申し定包さま、どうぞ殿樣のお心の納まるやう
雛衣　申し譯をあなた樣が。
定包　如何にも、大殿にも若殿にも、何もお案じなさる〻儀はござりませぬ。憚りながら景連さまには初めて。拙者儀は里見家にて、館山の政事を預かる、山下柵左衛門定包、お見知り置かれ下さりませう。
景連　ムウ。して家老定包が、侍從之助の云ひ譯とは。
定包　ハツ、お次にて樣子を承はりますれば、村雨丸の劍、嵐山の一節切、右二品の寶差上げ、若殿侍從之助に上洛を致させよとの、御上意ではござりませぬか。
景連　如何にもその通り。シタガ、侍從之助は、あの通りの吃りなれば、武將へお目見得は心元ない。
季基　定包、悴があの生れつき、お目見得の程が。
定包　お氣遣ひあられまするな。拙者が居りますれば、何

かの取計らひ、若殿にもお目見得の致させませう。

侍從　コ、、、コレ定包、ソ、某がドヾ吃りでゴ、、ゴ御上洛して、ヨ、、、義教公へオ、、お目見得シ、、シしたり、デ、、殿中で、ショ、、、諸大名にワ、、笑はれるが、メ、、、、面目ない。

ト悄れる。

定包　ハテ、ようござりまずると云ふに。お心を揉まれずと、落ちついてござりませい。

信時　イヤ兄者人。若殿の吃り、推して御上洛あつては、成る程都での物笑ひ。武將の仰せを御評議の役目など、仰せつけられた時は、あの吃りで勤まりませうか。

定包　何をおのれが小差出た、お家の取捌き。扣へ居らう。

ト睨みつける。信時、モヂ〳〵して扣へる。

一角　アイヤ定包どの、言舌も通らぬ若殿ゆゑ、今日までお目見得延滯。それにお目見得をさせましては。

定包　ハテサテ、若殿のお目見得の儀は、拙者が思案にある。何れも、ちよい〳〵口差出すは扣へてござれと云ふに。

ト一角ハッと扣へる。景連せゝら笑うて

景連　ハ、、、名に負ふ家老の定包でも、寶は見事差上げやうが、片輪者の侍從之助を、都室町へお目見得をさゝうより、四條磧で見世物に出すがよいわサ。

ト玉梓、兵内、一角と顏見合せ、ムッとするこなし。定包、顏にて押へる。

景連　なんぢや〳〵。身共の詞に違ひがあるか。その爲の上使の役目だ。何もかも相糺すぞ。

定包　糺すとは、そりや何事をな。

景連　侍從之助が放埒を。アレあの如く大礒の傾城遊女を館へ引入れ身持ち惰弱。ヤイ定包、其方は、この云ひ譯をすると云つたが、云ひ譯あるか。

定包　ござりまする。

景連　なんと。

定包　ヤイ、弟小五郎、それへ出い。

信時　ハッ。

定包　若殿身持ち放埒は、其方が仕業。若殿を託つけ、何ゆゑ自身の奢りはひろいだ。

信時　イヤ、全く以て廓のお供は、若殿の云ひ附け。

定包　如何にも、若殿には彼の如く御病氣ゆゑ、欝散の爲鎌倉江の島と御遊覧の次手、大礒通ひもお勸め申したれ

ど、おのれが萬事取計らひ、色と酒と勸め込み、若殿を科に取つて落さんと云ふ、其方が企み。

信時　アヽこれサ〳〵兄者人、何を仰せらるゝ。

定包　知るまいと思ふか。兼ねて相搆りあつて、事を謀る證據のこの密書。

ト懷中より狀を出して

「兼ねて申し合せし通り、侍從之助に隨分奢りを勸め、傾城遊女を館山の城內へ引入れ、それを越度に云ひ立て、我れ〳〵が熟談の通り致すべく候ふ」宛名は麻呂小五郎どの、御存じよりと、この一通。

信時　南無三それを。

トかゝるを見事に投げる。景連、立ち上がるを、季基、尻目に見る。景連、ちやつと扣へる。

定包　若殿を蔑ろにするは、一物ありと極まつたり。身が眞實の弟なれど、母方の姓を繼がし、麻呂の苗字を讓りしに、兄の名を賣る曲者め。弟とて容赦はない。但し縛し上げて同類を白狀ささうか。

信時　サアそれは。

二人　サア〳〵。

ト詰め寄せる。信時かゝるを、其まゝ蹴倒し、リウリウと胸打ちに打ち据ゑる。

定包　身が弟とて人も恐れ、敬ふをよい事にして附け上がり、若殿に奢りを勸める人非人め。動いたら眞二つぢやぞ。

ト刀を振り上げる。ハイ〳〵と信時、蹲る。

なんと、御上使樣、若殿の放埓は、弟小五郎めが勸め。元を糺して末納まれば、若殿の放埓ではござりませぬぞ。

景連　イヤナニ、その儀は。

定包　但し弟めを、この所で吟味いたさうか。

景連　イヽヤ、明白に小五郎が科、侍從之助に科はない。

定包　然らば弟めは。

ト信時を引立て

錦織丹次、蕪戸訥平、此奴を阿房拂ひに致せ。

訥平　アイヤ、その儀は。

定包　身共が云ひ附け、苦しうない。

一角　アイヤ定包どの、小五郎どのゝ一旦の越度なればとて、とくと諫言を加へ、誤まつて改むると、元の通りに、ナア若殿樣。

侍從　オヽさうぢや。コヽヽ小五郎がスヽヽ勸めも、モ

モ元よりソ、某がオ、愚から。

玉梓　ほんに、殿樣のお氣に入りの小五郎さま、惡いとは云ひながら、もう堪忍して、矢ッ張りお側に、ナア。

定包　イヤ、此奴を若殿のお側に置けば、御身の大事。仇にこそなれ、恩は知りませぬ。殊に兄弟の緣あれば、拙者が潔白。兩人の者、下部の者に云ひ附け、此奴を叩き出せ。

兩人　すりや、どうあつても小五郎どのを。

定包　容赦いたすと爲にならぬぞ。

トきつと云ふ。兩人、氣味惡さうに信時を引立てる。信時、刀を大事に差して立ち上がる。景連、心遣ひのこなし。丹次、訥平、定包の顏色を見てわざと

丹次　ヤア／＼家來ども、小五郎どのを早く

訥平　門前よりぼッ拂はせい。

侍ひ　ハア、、、、。

ト皆々割り竹を持ち出て

サア、立たつしやい。

ト信時、景連と顏見合せ定包を怨めしさうに眺めて

信時　ア、、なんの事ぢや。たうとう壺をかぶつたはおれ一人。

侍ひ　こま言云はずと、ござれ。

信時　サア、行くわい。

家來　サア、キリ／＼ござれ。

トしか／＼あつて信時、ぼやき／＼、丹次、訥平附き添ひ、侍ひ三人も割り竹持つて向うへ入る。

季基　政道に私しなき定包の計らひ。神妙々々。この上は二品の重寶、景連どのへ内見に入れよ。

定包　ハッ。若殿、二品の重寶を。

侍從　ムウ。

ト侍從之助、奥へ入り、小姓二人附き添ひ入る。

一角　廓の者どもは玉梓を伴ひ、早く歸りやれ。

女皆　アイ／＼。そんなら一緒に、玉梓さん。

ト玉梓も立たうとする。

定包　イヤ／＼、玉梓、其方にまだ用事もあれば、矢ッ張りこれに。

皆々　アイ／＼。そんなら皆さん、去ぬるぞえ。

ト女形皆々、しか／＼あつて橋がゝりへ入ると、侍從之助、奥より小姓に寶の箱を持たせ、前へ出る。

季基　伜、二品の寶、持參いたしたか。

侍從　ハ、ッ。

季基　先祖より傳はりし嵐山の名笛、村雨丸の劍を、改めて御上使へ。
侍從　ハ、ハツ。
　ト紐を解き、蓋を取り、兩方ともに中に寶なきゆゑ、悄りウロ〳〵する。
皆々　ヤア、すりや二品の寶は。
季基　紛失いたしたか。
侍從　ハツ。
　ト當惑のこなし。玉梓ハツと思ひ入れ。景連ゑせ笑うて
景連　へ、、、。なんぼう定包が云ひくろめても、どうで侍從之助は縫目の恥。ハ、、、、。
　ト嘲弄する。季基、思ひ入れ。定包は構はず居る。
季基　何にもせよ、大切なる寶紛失とあつては。
　ト合點のゆかぬこなしにて、落ちたる書き物取上げ箱の內より落ち散りしこの書き物。
　ト開き見る。
一角。詮議の手掛り。早く讀み上げい。
一角　ハツ。「一つ傾城玉梓、其方樣へ金子七百兩にて身請け。」

　ト讀みさし、悄りして、また一通を開き
「覺え、一つ玉梓揚げ代雜用諸入用金子八百兩。」
　トまた悄りして又ちやつと止める。
景連　一角とやら、大切な詮議の手掛り。何ゆゑ讀まぬ。
一角　ハツ、これは。
季基　何ゆゑ讀まぬ。早く讀み上げい。
　ト景連、立ちかゝる。
景連　讀ますば身共が讀む。
　ト引ツたくる。
一角　イヤサ、その儀は。
景連　詮議の手掛り、扣へ居らう。
一角　ハツ。
景連　なんぢや。「一傾城玉梓、其方樣へ金子七百兩にて身請け致させしところ實正なり、右金子受取る上は、玉梓儀は其許樣お心任せになさるべく候ふ、玉梓親方若狹屋氷六、月日」。宛名は里見侍從之助さま。
　ト悄りして又一通の方を開き
「覺え、一つ、玉梓揚げ代雜用諸入用、金子八百兩、慥かに受取り申し候ふ」これも宛名は侍從之助さま。こりや傾城の揚げ代と、身請けの一札。里見家の重寶、村雨

丸の劍、嵐山の名笛とは、これでござるか。誠に名譽。
ト季基に突きつける。季基、立ち上がり侍從之助を引きつけ

季基　ヤイ悴、これまで病氣といたはり置いたれど、かゝる場所では容赦はならぬ。サア、この書き物が如何して、寶の箱の内にあつた。サア、云ひ譯せよ。云ひ譯なければ、里見の家の大事ぢや。

一角　申し若殿様、この證文が如何して箱の内より出ました。仔細をちやつと仰せ上げられい。

近習　若殿様、どうでござりまするな。

ト侍從之助、物よう云はず、ウロ〳〵して居て、右の書き物を定包の側へ持つて行く。膝叩いたり舞臺叩いたりして、いろ〳〵跪く。

侍從　コ、、、コレ、サ、、、定包。

ト書き物を擴げ見せても、定包、きよろりとして居る。

季基　定包、萬事を計らふ其方。押靜まつて居つては濟まぬ。寶の詮議を早く致せ。

一角　コレサ、定包どの、大殿の御意と云ひ、押默つてござつては

兵内　この場は濟みますまい。

頓次　定包どの、どうでござる。

ト定包、ヂロリと見て

定包　知りませぬ。

皆々　ヤア。

定包　イヤサ、この定包は若殿の儀、申し譯を致さうと存じても、こればかりは富樓那の辯でも叶ひませぬ。惡い事と云ふものは、どうも包まれぬ。その若殿、二品の寶を賣り拂ひ、傾城を請け出したり、廓の放埒にしめされた事、斯う現はれしは天命。拙者も何卒と存じても、その儀ばかりは何ともハヤ。

侍從　イ、イ、ヤ、ク、、、、廓通ひと太夫の身請けも、ソ、其方達が〳〵。

定包　何を云はつしやる。若殿、どうでござる。とつくりと仰しやれ。

ト侍從之助、だん〳〵取逆上す程物云へぬこなし。

侍從　サ、、、指圖ぢや〳〵。

ト焦るを、玉梓見兼ねて

玉梓　さうでござんす。揚げ代の事も身請けの事も、定包さん、皆お前が。

定包　コレサ傾城、身共が其方を身請けしたらば、證文の宛名に山下定包とある筈。これには畢竟侍従之助さま。ナア、侍従之助さまとなア、

ト指にて一々数へ

ぢやに依つて、身共は知らぬ。

季基　すりや、定包、其方は。

一角　その證文を受取る事は

定包　露聊か存じませぬ。

ト空嘯いて居る。侍従之助、エヽと思うてよう云はず、これよりムン／＼とばかり氣を急いて、季基の側へ行て辭儀したり、いろ／＼とあつて又、定包の側へ行て、心を靜め物云はうとして、胸撫で下ろしても取逆上せて居る體。玉梓、始終ウロ／＼と附いて居て、介抱する。侍従之助グツと唾呑み込み、氣を落しつけて

侍従　定包。

定包　なんでござる。

トかぶせかけて云ふ。また逆上せて

侍従　ソ、其方に、ア、、預けたく／＼

定包　狆が何ぞのやうに、預けたく／＼。

侍従　コ、、、この書……

定包　シヨ／＼／＼とは何の事ぢや。これサ、其やうに跪かずと、心を落ちつけて、あれは斯う、これは斯うぢやと、一つづゝ合點のゆくやうに云はつしやれ。承はらう。

侍従　ソ、、其方が

定包　ア、拙者が

侍従　オ、、おれに。

定包　こなたは。

ト段々耳を續けて行く。

侍従　ソ、、それならなア。

定包　措かつしやい。こなたの云ふ事聞いて居ると、何時までもかゝらうやら知れぬ。高が其方の身持ち放埒で、寶を賣り拂ひ、傾城を身請けして、御上使や大殿の前で云ひ譯なさる、その科身共に引請けてくれいと云はつしやるのか。さうか／＼。

ト此うち侍従之助、さま／＼口惜しがる。定包の顔見詰め體を悚はして居る。

頷づかつしやるは、さうか。さう云ふ事なら何ゆゑ、疾にも拙者に密かに云うて置かつしやれぬ。斯う云ふ場所

になつて、主從のよしみぢやと云うて、斯る明らさまに現はれてから、各々がよく御存じ。猶さらこなたに憎しみがかゝる。

ト侍從之助、鬢の毛をむしつたり、口嚙み齒ぎしりして口惜がり、泣き落す。これにて玉梓、キツとなり、身拵らへして

玉梓　殿樣、氣違ひさしやんすな。樣子は知れましたわいなア。

ト侍從之助、解つたかと云ふこなし。玉梓、定包の側へ行く。

玉梓　コレ定包さま、お前はお侍ひに似合はぬ、さもしい心でござんすなア。

定包　傾城。わりや何を云ふ。

玉梓　イヽエイナア。表向きには殿樣のお僞顏で、心の底は恐ろしい、罪に取つて落さうと云ふ企み事。こりや皆お前の、戀の意趣でござんせうがな。

定包　ナニ、戀の意趣とは。

玉梓　サア、これまでわたしに惚れたと、段々文で口說かしやんす。ほんにお前をさう云ふ惡人とは知らず、殿樣の御家來、殊に何かの指圖、わたしが事も引請けて世話して下さんすお前ぢやに依つて、現在のお主の相方のわたしを、いろ／＼と口說かしやんすけれど、殿樣のお耳へも入れず、今日の今まで露知らさず、隱して居たが口惜しいわいなア。

トこれを聞いて侍從之助、猶さら腹立ちのこなし。玉梓を引退け、突き退けて

侍從　ソ、、、そちや。

ト玉梓を指さし、定包が胸倉を取る。定包突き倒す。玉梓、侍從之助を介抱して

玉梓　サア／＼、道理でござんす／＼。マア、わたしに云はして下さんせ。

ト侍從之助をなだめ、定包が側へ行き、最前の文を出して

玉梓　コレ、それになア、今日も今日とてこの文を、あの諂平面に託づけさしやんしたぢやないかいなア。

ト定包、髭撫でて居る。

玉梓　憎さも憎し。一角どの、この文、御上使樣や大殿樣の前で、大きな聲して讀んで下さんせいなア。

ト一角に渡す。一角取つて開き

一角　ナニ／＼「御覽も御面倒ながら、又文して申し上げ

參らせ候ふ、誠にこれまで拙なき水莖にて、心の丈を云はせ參らせ候へども、お返事もなきは、あまりつれなく勤めのお身には情と云ふものはないものと存じ候ふ、但し外の風に靡かぬとは、里見と云ふ手活けの花あるゆゑと諦らめ、ふつゝりと思ひ切らうと存じ候うても、只面影の忘られず、起きては現、寢ては夢。」

ト兵内半分取つて

兵内　しんぞ思ひに沈む程、せめては身共が切なる心、露ほども思し召し下され候はゞ、二度とは云はず、たつた一度の逢瀬を、神かけて願ひ入り參らせ候ふ、何卒何卒その返事を、松に時雨の濡れて乾かぬ磯の袖、汚さぬ間に賴み上げ參らせ候ふ、めでたくかしこ。」宛名は、千束の玉梓の君參る、思ひに時雨るゝ山下より。

皆々　ハテ、御家老に似合はぬこの文。

兵内　定包どのが、玉梓どのへ、斯う云ふ文を渡さつしやるとは

皆々　思ひがけなき儀でござる。

玉梓　なんと、あの文が慥かな證據。戀の意趣に殿樣を、科に取つて落す企みでござんせうがな。

侍從　ア、、云ふフ、、、、文で、オ、、おのれがコ、、コ心が、ミ、、、、皆知れた。

一角　忠義と見せる不忠の定包。

兵内　あの狀があるからは、寶もこなたが

皆々　盜んだのか。

定包　馬鹿つくす毛二才め。あのやうに玉梓に狀を附けたは、うツ惚れたゆゑ。寶の事は身共は知らぬぞ。斯う顯れ出す上からは、これサ吃りどの。

侍從　エ、、エ、。

定包　傾城の玉梓は、身共に下され。女房に持つて抱いて寢る。

玉梓　エ、、憎てらしい。まだそんな事を。

定包　玉梓、これ程に思うて居る身共。餘り憎うもあるまいがな。

玉梓　チエ、、こなたはなう。

定包　若殿のたわけが現拔かした筈。美しい者ぢやなア。

一角　この滿座にて家老の身として、面目をも思はず

定包　戀は曲者、平日發明な身共なれども、思案の外ぢや。ナア若殿。是非玉梓は、拙者が申し請けましたぞや。

ト此うち侍從之助、いろ〳〵身を焦り、無念口惜しい

思ひ入れあつて、キッと立ち上がり
侍從　ジ、、、重々の慮外。おのれ。
ト脇差抜いて定包に切つてかゝる。摺り抜ける。逃がさぬと急き切つて、刀もしどろに立廻り。皆々立騒ぎ、振り切り、いろ／＼よろしくあつて一角、玉梓抱きとめて
一角　先づ／＼若殿。こりや御短慮な。
玉梓　尤もでござんすけれど、マア、待つて下さんせ。
侍從　ム、、ム、、。
ト頭を振つて氣を焦ろ。
季基　小姓ども。藥湯を持て。ソレ、氣を鎭めさせい。
皆々　先づ／＼。
ト皆々留める。矢張り侍從之助は氣を揉む。玉梓、思ひ入れあつて手水鉢の水を柄杓にて掬ひ
玉梓　マア／＼、これを。
ト侍從之助に吞ます。腹立ち紛れに侍從之助、グッと吞む。直ぐに血を吐く。いろ／＼苦しみ、ウンと悶絶する。
皆々　ヤア、こりや若殿樣が
玉梓　氣を揉ましやんしたか。血を吐いて。

季基　ナニ、悴は相果てたか。
皆々　ヤア。
ト皆々立ち騷ぎ驚ろく。定包、衣紋直し、季基を元の處へ据ゑ、立役皆々を引退け、印籠より藥を出して毒味をして、侍從之助に服まし、景連季基の前へ手を突いて
定包　御上使の御上意にもどかず、二品の償も差上げ、若殿侍從之助、近々に室町義教さまへ、お目見得の致させませう。
季基　定包、なんと。
定包　拙者が配劑、若殿の吃りは全快いたしましたぞ。
景連　すりや定包、侍從之助を。
定包　生れ付いたる吃り、大殿の歎き、御總領はありながら姬君なれば、御次男ながらも里見の跡目。何卒御本腹いたさせんと、醫療に手を盡せども、空しく心を盡す折から、吃りを癒す幸ひの秘藥、心の臟をも痲痺逆上させ、その藥を與ふれば、忽ち本腹の趣き。お目見得の儀急がん爲、拙者が御立腹させ、斯くの仕合せ。
季基　すりや、悴が吃りを癒し
一角　御上洛を急がん爲

丹次　こなた樣の惡事の段々。
景連　すりや、定包は。
定包　惡と見せたも若殿に、藥を用ゆる拙者が配劑。
玉梓　そんならわたしに
定包　誠の戀慕でよいものか。若殿にお氣を揉まさん爲。
玉梓　それとは知らず最前から
一角　拙者等までが雜言過言。
皆々　眞平御免下さりませう。
ト此うち侍從之助、ムツクリ起きて、定包を見てキツとなり
侍從　おのれ定包、よくもこの侍從之助に色を勸め、忠臣顏にて太夫が身請けまでさして、その證文をばこの中に
ト かゝるを、玉梓一角、兩方より留めて
定包　申し若殿樣、定包の惡事は、皆あなたのお爲でござります。
玉梓　申し、逸まらずと、とつくり樣子をお聞きなされませいなア。
侍從　イヽヤ玉梓、其方に橫戀慕と云ひ、今の狀を見ては、どうも堪えられぬ。

ト此うち皆々、侍從之助のせりふに心付いて
皆々　ヤアヽヽ、若殿樣の言舌が解りまする。
玉梓　申し、お前の吃りが癒りましたわいなア。
侍從　何を云ふ玉梓。おれが自由に云はれるなら、あの定包にマア、一部始終を詰め開きして
玉梓　それヽヽ、其やうに吃らずに物仰しやるは
侍從　なにを玉梓。
ト思ひ入れあつて
誠に、おりや舌もつらず、心の儘に云はるゝは、親人樣、御上使樣。太夫、一角、その外一家中の者ども。ヤアヤアヤア、ホイ。
トいろヽヽ思ひ入れあつて呆れて
こりやどうぢや。
定包　若殿、こなた樣の吃りを癒さんと、勿體ない、御主人に向つて惡口雜言も、心氣を揉まし、秘藥を與へ、御本腹いたさせん爲でござりまする。
侍從　そんなら太夫に惚れたと云ふも、寶の箱へ證文を入れて置いたも、おれに心を揉まし、吃りを癒さん定包の計らひであつたか。
玉梓　アイ、さうでござんすわいなア。

侍從　エヽ、忝ない。定包、てもよう腹を立てさせてたも
つたなう。
季基　悴が吃りは、定包が計らひにて本腹すれば、お目見
得の上洛も心安し。
景連　して、二品の寶は。
定包　イヤ、その儀は粗略なきやう、寶藏に納めござれば、
若殿持參いたされますれば、御安心下されい。
一角　それに付き若殿、御上洛のお供は、金鞠大塚兩人の
うち
兵內　何れにお極めなされますな。
季基　ホヽウ、その儀も定包の指圖の如く、兩人に試合を
させ、勝つたる者が附き添ふ役目。
定包　景連さまにも上段の間にて、兩人が勝負を御覽旁々
御休息。
景連　成る程、最前よりいろ〳〵の事見物して、はつと退
屈。奧へ行て休息仕らう。イザ、治部太夫どの。
季基　悴、景連どのを饗應の用意申し附けよ。
侍從　ハツ、畏まりました。
定包　何れも。金鞠大塚の兩人を呼び出し、奧庭に於て立
合ひ、勝負を早く見屆け召されい。

皆々　ハツ、畏まつてござる。
季基　然らば景連どの。
侍從　親人樣にも
皆々　先づお入りあられませう。
ト唄になり、右の一件奧へ入り、定包殘る。橋がゝり
より侍ひ大勢出て手を支へ
皆々　定包さま。
定包　其方達は、兼ねて云ひ附け置きたる通り、大殿の歸
るさは、身共が乘替への白馬にな。合點か。
皆々　心得ました。
定包　行け〳〵。
皆々　ハツ。
ト橋がゝりへ引返し入る。と內にて
納平　金鞠大輔どの、大塚番作どの。
頓次　試合の勝負が、お供の役目。
皆々　用意がよくば、立合ひ召されい。
ト內にて聲する。定包、思ひ入れあつて
定包　これで大方、萬事の手番ひ。
トちよつと笑みを含む。チヨン〳〵返し。
直ぐに白囃子になる。

造り物、三間の二重舞臺。兩方落ち間、網代塀、その前に中黑の紋附きの幕を張り、屋體の鴨居にも幕を絞り上げ、右庭は棧敷の心。右平舞臺上手に大輔、社杯にて、上を刎ね、番作、下手に同じ拵らへ、双方竹刀を持ち、立合ひの見得。上手に兵内、太郎市、丹次、頓次上下にて扣へ、下手に逸藤太、奈四郎、三寶平、これも社杯にて扣へ、その他侍ひ大勢扣へ、白囃子、掛け聲にて道具納まる。

ト矢張り白囃子の中へ變つた誂らへの鳴り物入り。大輔番作、兩方より負けよう〳〵とする立廻りに仕組みあつて、トゞ大輔の太刀尖危ふくなるゆゑ、番作附け入るやうにして、我が太刀を落さうとする。大輔、我れより釣る心にて他を見る。皆々、ヤア〳〵と聲を掛けながら、捨ぜりふにて勵まし居るゆゑ、大輔是非なく思ひ切つて、番作の太刀を打ち落す。大輔ハッと面目ない心にて後へ退る。皆々大輔を仰ぎ見て

皆々　大輔どの、お手柄〳〵。

ト逸藤太方、急いたる心にて

逸藤　イヤ〳〵、兵内どの初め何れも。初太刀は番作どの付け入られ、太刀尖六七分、大輔どのに當つたれば、勝負は双方互角でござる。

兵内　甲乙なければお供の役目。

奈四　こりや異なものになりました。

兵内　イヤ、互角とは申されぬ。大輔どのが勝でござるぞ。

逸藤　そりや又なぜ〳〵

兵内　尤も初太刀は鋭く付け入るとは雖も、目前竹刀を打ち落され、それを互角と申されますかな。

丹次　あんまり意氣勢、張らつしやるな。勝を勝と申したが

皆々　我れ〳〵の誤まりかな。

逸藤　サアそれはな。

兵内　なんとでござる。イヤ大輔どの、さぞ御滿足でござらう。

三人　イザ、御前へ參らうではござらぬか。

大輔　身共の手柄は當座の面目。

ト番作に目を掛け

イヤ、暫らく休息いたして、後より參らう。

ト肩衣着て、チッとこなし。兵内、本意なきこなしに

て

兵内　逸藤太どの。こりやどう致したものでござらう。

逸藤　各々方には君の御前へ、この様子を申し上げられい。

兵内　殿の御跡職に證もあるまい。お立ちの用意申し附けい。

侍ひ　畏まつてござりまする。

丹太　然らば大輔どの。

皆々　後刻御意得ませう。

ト唄になる。皆々上手の幕の内へ入る。大輔は上手、番作は下手に俯向き、ヂッとして居る。逸藤太一人殘りて番作の側へ詰めかけ

逸藤　番作どの、イヤサ大塚番作、日頃よりおてまへは、我れ〱が組頭、殊に劍術柔術は、我れ〱が高弟なればと、尊敬すれば附け上がり、手練の高慢、それゆゑ今日の勝負を取持つたに、今のはありや何の態。大輔どのに打ち据ゑられ、常々の廣言にも似合はぬ負けざま。御上洛のお供に附くか附かぬの晴れの勝負。あの通り打負けても無念にはないか。口惜しうは思はぬか。侍ひらしい性根があるなら、腹を切るわいなう。何として〱、腹を切るやうな所存もあるまい。我れ〱までが面汚し。御主人への申し譯、恥辱を雪ぐ思案さつしやれ。アノ茲な大腰抜けめが。

ト唄になる。惡口云うて大輔が方を見て眺め廻して上手へ入る。この時、逸藤太、懐中より密書落し入る。番作ヂッと顏を上げ、後を見て、フトこの密書を拾ひ上げて、大輔を見て、ちやつと懐中へ入れる。大輔これまで默然として居て、この時ホッと吐息つき、あたりを見廻して

大輔　大塚番作どの。

ト番作顏を上げて

番作　ハッ、大輔どの、イヤハヤ、面目もなき仕合せ。

大輔　當時里見の一家中には、竝ぶ者なき貴殿の手の内。それに變りし今日の仕合せ、大輔一圓合點が參らぬ。

番作　これは存じも依らざる御意。拙者未熟の手の内にて、及ばぬ事と存じながら、お相手に選まれしは、この身の大變、さりながら、劍術柔術に於きましては、幼少より心を凝らしましたれば、當時一家中には云ふに及ばず、凡そ諸國にも手に立つ者は……イヤサ、こなた樣には及びたへたる儀でござるが、それは格別、この番作が折入つて、お頼みの儀がござる。お聞き屆け下されうか。

大輔　この大輔にお頼みとな。
番作　お聞き屆け下されうや。
大輔　品に依つてどうも斯うも。して、その仔細は。
番作　先づ以て忝ない。その頼みと申すは。
　　トこなしあつて、あたりにある梅の一枝折つて差出し
　その梅の一枝。
大輔　ムウ。この梅の一枝を以て、拙者にお頼みとは。
番作　明けて云はれぬ梅の謎々。その判斷を承はつた上、何かの事をお頼み申さんが爲、只今の立合ひも
大輔　ナヽ、なんと云はつしやる。
番作　イヤサ、業に拙なき未熟の手の內、打負けしは悔んで歸らず。何卒その花の心をお察しあつて
大輔　イヤ、大輔は不承知でござる。
番作　なにと仰せられるな。
大輔　頼みやうが氣に入らぬ。
番作　ナニ、願ひやうが御意に入らぬとは、何事がお心に障りましたな。
大輔　イヤサ、ずんと障りました。身不肖なれども金鞠大輔、鎗術馬術の業は御身達に劣らねど、劍術柔術は、二階堂信濃之助が流儀を傳へ、師にも增りし貴殿の手練。今の試合に勝を讓り、それを囮にその花の心を頼まんとは、しやれぬ。如何やうなる事なりとも、頼まれまいものでもなけれど、試合に勝つたが嬉しさ、オヽと云うて承知しさうな身共ぢやとお見やつたか。其方の心に引競べ、武士に似合はぬ卑劣の仕方。金鞠大輔、不承知でござる。
　　トきつと云ふ。番作、ウムと思ひ入れ。大輔も思ひ入れあつて
　とサア、斯やうに申すは、僞はり飾らぬ武士の表。竹馬の友たる貴殿の頼み。無下になすべき孝德ならねど、詞を立てるも武門の意地。
番作　サヽ、左程までに思はれなば、その謎々を
大輔　いま一應判斷の致した上で
番作　貴殿の意地を通すとも
大輔　和殿の心底立つるとも
番作　色こそ見えねその梅の
大輔　アイヤ、闇には香さへ隱るゝぢやなア。
　　ト梅の枝を持ち、兩人思ひ入れあつて、唄になり、大輔、梅を眺めながら上手へ入る。番作殘りて、思ひ入

れあつて

番作　先刻龍山逸藤太が、懐中より落ち散りしこの密書。

ト懐中より出して口の内にて讀む。此うち下手幕の影より、番作女房手束、出かけ、いろ／＼こなしあつてツカ／＼と番作が側へ行く。

手束　コレ申し、番作どの。

ト番作これにて愕りして、ちやつと状を隠し

番作　エ、、何者かと思ひば女房手束。いつの間にこの所へ。愕りするわい。

手束　エ、、愕りどころか、コレ、わたしや口惜しうて口惜しうてなりませぬわいなア。

番作　後先も云はず無念なとは、そりや何が無念な。

手束　これが無念にならうてなりませうか。あなた、お負けなされたのでござりませうがな。最前あれ程に申さるゝば、心丈夫に思ひながら、様子を聞かねば氣がゝりなと、小蔭に隠れて窺へば、逸藤太どのが今の雑言。日頃から家中の噂にも、お前に及ぶ相手と云ふは、よもやあるまいと、人も譽むればその身も自慢。大切な晴れの勝負。あなたがお負けなされて濟みますか。それで濟みますかいなア。姫御前のわたしでさへ、コレこの胸が張裂けるやうに思ひます。腑甲斐ないと云はうか。エ、、お前はなア。

ト舞臺を叩いて云ふ。番作、思案して居る。

番作　これは又怪しからぬ。コリヤ女房、勝負は時の運に依るもの。強いが勝ち、未熟が負けるに極まつたものでもない。それをなんの、其やうに申す事はないわい。

手束　エ、、てもよい口な逃げ口上。モウ／＼／＼、歯痒うて／＼ならぬわいなア、わたしも井野丹蔵が娘の手束。大事の夫に恥辱を取らせ、どうおめ／＼と人に顔が合されませう。いま一應殿様にお願ひ申して、物の見事に試合に勝ち、恥辱を雪いで下さんせいなア。

番作　其方が云やるやうに申したとて、再度の勝負お聞き届けがあらうか。殊に以て相手は金鞠大輔、彼れは父八郎より忠勤の家筋。側へその身が勝つたりとて、大切な寶の詮議

ト云はうとして氣を更へ

サア、大切な上洛のお供、試合に負けたは某が未熟から。今さら何とも致し方があらうかい。

手束　そんならどうしても大輔どのに、勝つ事はならぬかえ。エ、マア、腑甲斐ない。其やうな心とは、今の今ま

で、わたしや知らなんだが口惜しい。エヽモウ、愛想もこそも盡き果てたわいなア。

番作　すりや、身共が未熟に愛想が盡き果てたとか。ハテよく見限つたものぢやなア。

手束　アイ、其やうな卑怯未練な夫には、よう連れ添うては居りませぬ。さつぱり夫婦の緣を切り、暇の狀を下さんせ。

番作　すりや、暇の狀をくれよとか。そりや丁度合うたり叶うたりと申すもの。何にもせよ、勝敗を爭ふもの、一人が勝つ時は一人は負ける。それを嫌と申して、女の方から暇をくれ、愛想もこそも盡き果てたとは、ハテ、天晴れな女ぢや。よい〳〵此方もさう云ふ女房持つて居つては、腰が張つてならぬ。望みの通り暇をくれたぞ。

手束　イエ〳〵、口ばかりでは證據になりませぬ。暇の狀をサア、いま書いて下さんせ。

番作　離緣狀を爰にて書けか。オヽ、書いてやるわサ。

トあたりを見て、フト刀を持ち出し

幸い〳〵、現在の女房にさへ、卑怯者と見限られる侍ひが、差添までには及ばぬ事。暇の印にこの一腰。サヽ、これ持つて早く歸りやれ。

ト小刀を手束に渡す。手束取つて

手束　そんならこの一腰が、暇の印でござんすか。ほんにマア、これ程に恥かしめても、お前は何ともござんせぬかえ。

番作　望みの通り暇をくれたる、女が入らざる世話ぢや。キリ〳〵早く立つて行かうてや、

手束　今のやうに云ひましたも、なんのわたしが好き好んでぢやござんせぬ。女の身でさへこれ程に思ふもの。何卒いま一應殿樣にお願ひ申して

番作　ハテ喧ましい。離緣の女に詞は替さぬ。

手束　そんならどうでも。

番作　キリ〳〵立つて行けと云ふに。

トきつと云ふ。手束、ホイと當惑のこなし。唄になり、手束、接穗なき思ひ入れにて、投げ首をして悄々と下手へ入る。あと合ひ方。番作、思ひ入れあつて

夫を思ふ女の心、さこそあらう。さりながら、武士を捨て恥を凌ぐも、これ皆主家の爲なれば覺悟の前。いでこの上は御劍詮議が肝要。ソレ、

トつか〳〵と花道へ行く。この時上手の幕の內より大輔出て

大輔　折られたる人に匂ふや梅の花。
番作　なんと。
大輔　番作どの、暫らくお止まり下され。
番作　ムウ。
　トつか／＼と立戻る。大小入りの合ひ方になる。
大輔　サ、、解けてぞ心明かし合ふ、梅の一枝手折られし
孝德どの、すりや先刻の梅の謎々。
は、これぞ即ち落花狼藉。花を散らせる村雨の、劍は疾く
より紛失せしゆゑ、その盜賊を詮議の間、若殿の守護を
拙者に任せ、御身は殘りて在所を探し、もしや知れざる
その時は、腹かつさばいて日延べを願はん貴殿の心底。
金碗大輔、感心いたした。
番作　すりや、拙者が寸志をお察しあつて
大輔　若殿の御上洛に附き添ひ參らんにも、いま一種の嵐
山の名笛も、紛失いたした。
番作　ヤ、、、。すりや嵐山の名笛も。
大輔　寶藏を穿ち紛失とあつて、鍵預かりの犬川衞士は、
云ひ譯の一通を殘して自殺したれば、室町御所へ差上ぐ
べき二品の寶紛失。例へ若殿御上洛なさるゝとも、云ひ
譯立たず。それゆゑ殿の面前にて、勝負に打負け、何事
もこの身に引請け、腹かつさばきて日延べをば、願はん
ものと思ひしに、却つて身共の勝となり、謀りし手段も
鶍の嘴。
番作　ムウ。さうとは存ぜず某は、村雨の太刀詮議の日
當は、お側に附き添ふ佞人ども、的は狂はぬ今日の試合
にも、最眞々の爭ひも、こなたと拙者に遺恨を含ませ、
兩虎挑んで爭ひ時、一虎潰えるその計略。それと悟つて
勝負に打負け、彼れらが心に油斷をさせ、寶を無事に取
り得る所存。
大輔　割符を合す互ひの心底。二品の寶紛失も、慥かに彼
れと心は附けども、迂濶に云へぬお家の大事。心憎きは
安西景連、彼れに一味の籠山逸藤太、麻呂の小五郎の兩
人、窃かに送りしその密書を、手に入れて斯くの通り。
　ト大輔取つて見せ
大輔　誠に麻呂籠山の兩人へ、御存じよりと記せしは、慥
かに安西景連が手蹟。彼の一品と記せしは、寶の事に相
違はあるまい。
番作　その小五郎信時めは、先刻追放うけしと聞き、幸ひ
試合に打負けし、恥辱を云ひ立て國遠して
大輔　寶の在所相知れなば

番作　その時こそは歸參の手土產。
大輔　ホヽヽ、忠義は厚き大塚氏。
番作　例へ犬塚と異名は請けても。
大輔　主君の爲には粉骨碎身。
番作　やがて吉左右お知らせ申さん。
　トこの時、内にて
呼び　御上使のお立ち。
番作　ナニ、御上使のお立ちとや。
　トまた内にて
呼び　大殿の御歸館。
大輔　我が君にも御歸館とあれば、身共はこれよりお見送り。
番作　拙者はお側の佞人どもを呼び出し、信時の行くへ知れ次第、直さま國送。
大輔　番作どの、死は一旦にして易し。
番作　生は全うして難し。
大輔　晉の豫讓は炭を吞み
番作　越王は尿を嘗む。
大輔　ムウ。番作どの、お別れ申す。
　ト所知入りになる。大輔こなしあつて奥へ入る。番作思ひ入れある所へ、手束、出かけ居て、この時、ツカツカと出て番作の袂を扣へ
手束　コレ申し番作どの、誤まりました〳〵。料簡なされて下さりませいなア。
　ト泣き落す。番作、思ひ入れあつて
番作　その身よりの望みに任せ、離縁いたした女に、詞替さぬ。袂を扣へて無禮千萬、そこ放せ。
手束　イエ〳〵、なんぼでも放しませぬ。最前あのやうに云ひましたも、夫に引けを取らしとむなさばかり。どうぞ料簡して、元の夫婦になつて下さんせいなア。
番作　すりや、先刻よりの樣子を、何もかも合點が行たか。
手束　アイ、ようお負けなされた、お出かしなされた。さう云ふ深いお心とも知らず、最前の無禮過言、お詫びの仕樣がござんせぬわいなア。
　ト手を合し詫びる。
番作　其方が夫を思ふも、身が御主人を大切に思ふのも、事こそ變れ道は一つ。よいワ。この度は料簡して遣はす。以後はキツと嗜なまうぞ。
手束　そんなら元の夫婦になつて下さんすか。エヽ、嬉し

うござんす。エヽ、忌はしい、離緣の印のこの刀も、元の通りに納まれば、以後はキッと嗜なみまするでござりまする。

トいそ〳〵とする。

番作　この上は今日の恥辱を云ひ立て、この場より國遠して、寶の詮議するが第一。

手束　エヽ、そんならこの場から。

番作　其方は屋敷へ歸つて、何かの調度。先づそれまでに奥へ參つて、ナ、合點か。

ト囁く。聞き取つて

手束　アノ、逸藤太を始め組下の衆を

番作　ちと密かに用事で御意得たいと

手束　アイ〳〵、合點でござんす。

番作　サヽ、ちつとも早く〳〵。

ト手束、裾をからげ、奥へ入る。番作、後を見て、衣紋繕ろひ、思ひ入れある所へ、奥より逸藤太、訥平、丹次、奈四郎、三寶平出て

逸藤　番作どの、拙者に逢ひたいと云ふは御自分か。

番作　如何にも。

逸藤　こなたのやうな卑怯未練な仁には、口きくも面倒だ。用事がありや、キリ〳〵と云はつしやい。

訥平　イヤモウ、日頃から二階堂の印可まで受けた、柔術の名人ぢやと、人も許さぬ自惚れ高慢。

丹次　最前金鞠どのと立合ひに、ガタ〳〵慄への酷い負けやう。組下の我れ〳〵までが面汚しだ。

奈四　いま内儀を以て、逸藤太どのを呼び出した、相談と云ふは外ではあるまい。

訥平　もう一度立合ひの仕直しを願ふのでござらうが、所詮悶えてもゆかぬ事だ。

逸藤　イヤ、各々になんの左やうな相談ではござらぬ、ハテ、わしでも恥を知らば、のめ〳〵と人に顏は合されぬ筈。それもいとはぬ臆病者。腹切らうにもえゝ切らず、大方浪人の下拵らへ。我れ〳〵を呼び出して、合力でも賴むのでござらう。ナウ番作どの、さうか〳〵。

番作　ハヽヽ、勝負は時の運に依り、勝つも負くるも世間ある慣ひ。おてまへを呼び出したは、外にちと内談もござれば。

逸藤　ソレ、何れもお聞きなされ。金鞠が竹刀に打ち叩かれ、牛蒡ほどな尾を振つた大塚番作から、よい口な内談などを聞いたとて、どうで碌な事ではあるまい。何れも、

大殿のお供いたさうではござらぬか。
訥平　左やう致さう。サヽ、お越しなされい。
ト構はず行かうとする。番作、こなしあつて
番作　二品の寶の盗賊。そこ動くな。
皆々　何がなんと。
ト逸藤太と顔見合せ、ぎつくりする。
番作　逸藤太、この密書を見やれ。覺えがあらうが。
ト密書を突き出して見せる。逸藤太、愕りしながら
逸藤　ムウ、その書狀が何とした。
番作　龍山麻呂の兩人へ、御存じよりと書いたるは、正しく安西景連が手蹟。彼の品は一味合體の印、慥かに其方に預け置くとの文面。こりやコレこの程紛失せし村雨の名劍。嵐山の名笛。その二品であらうがな。
逸藤　イヽヤ知らぬ、覺えない。彼の品とばかり書いたるを、二品の寶とは、何を以て何を云ふのだ。
番作　例へ如何やうにあらがふとも、一味合體の印とあれば、聞き捨てられぬ惡事の結構。
逸藤　ヤア。
ト四人顔見合せ、ハッと思ふこなし。
番作　誠に寶の盗賊と、睨掛けられて其方が、心當りの面構へ。なんと動きは取られまいがな。
逸藤　それ知られたら、何れも。
四人　オヽ、合點ぢや。
ト一時に抜いて切り付ける。番作烈しく立廻つて、四人をポン／＼と當て、直ぐに逸藤太と立廻り、グッと引き、竹刀振り上げて
番作　サア、斯うなつてはあらがはさぬ。眞直ぐに白狀ひろぐか、さなくば素首討取らうか。二品の寶詮議せん爲わざと大輔に勝を讓り、面前の恥辱を取つても、忠義は忘れぬ我が心底。うぬら如きに解るまい。サア、白狀いたすか、討取らうか。サヽ、返答ぶて。ナヽなんと。
ト咽喉へ刀を當てようとする。逸藤太慄へながら
逸藤　アヽ、コレサ／＼、短慮千萬な。何もかも白狀するから、心を靜めて聞くがよいわサ。
番作　然らば速やかに白狀せよ。
逸藤　所詮斯うなつては隱しても隱されまい。仕方がない。安西景連に頼まれて、村雨の劍をば小五郎信時が預かり居れと、先刻兄の定包どのに、勘當せられて追放になつたれば、劍を持つて上方へ逃げたに相違はない。それより外に何事も、存ぜぬ／＼。

番作　ムウ、すりや村雨の劍は我が推量の通り、信時めが奪ひ取つて、追放の身を幸ひに、逃げ去つたに相違はないか。
逸藤　この場にたつて嘘言は申さぬ。斯う白狀いたしたからは、命ばかりはお助け下され。
番作　まだそればかりではない、嵐山の名笛も、一味のうぬらが奪ひ取り、隱し居るに相違はあるまい。
逸藤　マヽ、これサ／＼、覺えがあらば云うてもしまはうが、劍の事より餘の儀は知らぬ。
番作　エヽ、コレ、うぬが詮議もしたけれど、心急かるゝ信時が行くへ。名笛の事はしかと知らぬか。
逸藤　なんの、僞はりは申さぬと云ふに。
番作　よいワ、よく白狀いたした。助け置かれぬ奴なれど、生け置くも後日の證據。命ばかりは助けくれる。
ト　むごう突き放す。逸藤太、フラ／＼立ち上がつて刀を差し、身繕ろひして皆々に活を入れながら
逸藤　なんの、一味合體の解つたところが、別に變つた惡事はせまいし、心覺えのあるだけは白狀したれば、云ひ分あるまい。なんと何れも、心が付いたか。
ト四人氣が付き
四人　エヽ、酷い目に會はしたな。
逸藤　心が附いたら、とてもの事、疊んでしまやれ。
四人　オヽ、合點ぢや。
ト　また番作に切つてかゝるを、よろしく留めて
番作　及ばぬ事にうぬらが腕立て。村雨の劍詮議の爲、信時が後を追ひ、國遠する番作が旅出立ち。うぬら一々、首を並べて觀念せい。
逸藤　ヤア、ほざいたり太平樂。國遠の餞別には、うぬが素首取つてくれう。と云うて身共は逃げたいものぢや。
ト　御用に身拵らへして橋がゝりへ逃げて入る。其うち番作、相手と程よく立廻つて、キッとなり
番作　ヤア、卑怯な逸藤太め。
四人　こま言云はずと、くたばつてしまへ。
ト　切つてかゝる。立廻つて一々刀叩き落すと、皆々橋がゝりへ逃げて入る。番作追ひかけうとして小戻りして
番作　エヽ、命冥加な蜻蛉めら。討取りたりとて刀の穢れ。先づそれよりは差當り、信時の後を追ひかけて、村雨の劍を奪ひ返し、やがてめでたう歸參の手土產。
ト　衣紋繕らうて立ち上がる。三寶平、窺ひ居て、うぬ

　とかゝるを投げて
ムウ。ソレ。
　ト凛々しく向うへ入ると、橋がゝりより逸藤太、袋入
　りの名笛を持ち出して、向うを見て
逸藤　ても、ひやいの事。すんでの事に番作めに、この名
　笛を奪ひ返される所。次の間の額へ隱して置いたが、勿
　怪の幸ひ。イデこの上は素知らぬ顏で、大殿の御供。ソ
　レ。
　ト行かうとする。一角此うち窺うて居て、前へ出て立
　ち塞がり
一角　籠山額行。マア〳〵待ちやれ。
逸藤　オヽ、さう云ふは赤岩一角。なんの用ぢや。
一角　いま小蔭より見るところ、何か怪しいその袋。正し
　くそれは嵐山の名笛。
逸藤　何がなんと。
一角　犬川衞士が預かりの、寶藏へ入つて奪ひ取つたるそ
　の名笛。何者に頼まれた。眞直ぐに白狀しやれ。
逸藤　すりや、これが嵐山の名笛と
一角　睨んだ眼は違ひあるまい。
逸藤　ハテ、よう推量したものぢやなア。

一角　サア、足元の明るいうち、此方へ渡せ。
逸藤　邪魔さらさずと、そこ退かう。
一角　イヽヤ退かぬ。名笛渡せ。
逸藤　エヽ、面倒な。
　ト切つてかゝる。一角キッと留めて、これよりちよつ
　と立廻りあつて、トヾ逸藤太、向うへ逃げて入る。一
　角キッとなつて
一角　うぬ、何方までも。さうぢや。
　ト凛々しく走り入る。チョン〳〵返し。
　ト暮れ六ツの時計、あと獨吟になる。
　元の通りの二重。筧、手水鉢の道具へ戻る。獨吟納
　まると、所々に銀燭臺ともしある。奥より玉梓、廣
　蓋に侍從之助の衣裳を載せ、後より侍從之助、羽織
　衣裳にて出て
玉梓　申し殿樣、爰で着替へさしやんすかえ。
侍從　オヽ、爰で着よう〳〵。わしも今まで舌がもつれた
　ゆゑ、部屋住みであつたが、此やうに本腹はする、義致
　公へお目見得すれば、直ぐに國の守。その時は其方はお
　部屋樣。なんと旨いものであらうがな。

玉梓　ほんに、物云はしやんすに苦がなうて、わたしも、ほんまに落ちついたわいなア。

侍從　イヤ、落ちつかぬ事がある。今までおれが物が自由に云はれぬゆゑ濟ましたが、心得ぬ事がたんとあるわい。

玉梓　こりや聞かねばならぬわいなア。わたしは何にも覺えはないが、それに何か合點がゆかぬ事があるえ。

侍從　あらいでかい。あるかないか、其方が心に聞へやい……と、こんな事がとんと云へなんだわい。

玉梓　エヽ、なんと云はしやんすぞいなア。

侍從　オヽ、云はいぢや。わりやなんぢや、をかしな事をするな。そんな氣休めなら餘所で云へと、サア、口舌せうなら委らぢやわい。ナウ、太夫。

玉梓　何をじやら〳〵と云はずと、早う裃を着替へしやんせいなア。

ト下の方をあてがふ。

侍從　コレ〳〵太夫、これは下と云うて後から着るものぢや。ソレ、そちらの方おこしや。

ト裃を着せる。侍從之助着ながら

さうぢや。それからコレ、その山形の物を後の縫ひ目へ當てや。さうしてから、その紐を持つて後から抱きつきや。

玉梓　アイ〳〵、委かえ。

ト後より紐を持つて抱きつく。侍從之助とつくりと裃を着て

侍從　どうやら斯うやら裃は着せられた。

玉梓　ほんに、ようしたものぢやなア。

侍從　ドレ〳〵、その提げ物。

玉梓　アイ〳〵。

ト渡す。侍從之助、腹の痛むこなし。

侍從　アイタヽヽヽヽ。

ト腹抱へ苦しむ。

玉梓　なんとさしやんしたえ。癪でも發つたのかえ。

ト介抱する。侍從之助こなしあつて

侍從　イヤ、もうよい〳〵。

ト橋がゝりよりバタ〳〵にて、兵内走り出て

兵内　若殿樣、これにござりまするか。

侍從　天津兵内、あわたゞしい、何事ぢや。

兵内　ハツ、只今大殿樣には、景蓮さまのお見送り相濟み、直さま瀧田の御本城へ御歸還の道筋、犬掛村にかゝると

ころ、數多の狼藉者打ち合せて、お乘り物目がけ切つてかゝる。某も大殿大事と働らくうち、山下定包どのお出で、狼藉者を切り散らし、大殿にもお怪我なく、卽ち定包どのゝ乘換への白馬に乘せ參らせ、定包どのには大殿のお乘り物にて、お供いたされてござりまする。

侍從　すりや、親人にはお怪我はないか。

兵內　ハツ、拙者も御供に心が急けば、これより直ぐに。

おさらば。

ト云ひ捨てゝ凜々しく走り入る。

玉梓　申し、お聞きなされたか。大殿にはお怪我はないといな。

侍從　サア、定包が供に附けば氣遣ひはない。

ト此うち又病むこなし。

侍從　アイタ、、、、。

玉梓　また痛むかえ。今の知らせでハツと思はしやんしたに依つて、癪が發つたのかいなア。

侍從　アイタ、、、、。怪しからぬ。ツイに此やうな事は覺えぬがなう。

玉梓　きつう痛むなら、お藥を取つて來うかえ。待つて居やしやんせ。

ト奧へ行かうとする。侍從之助苦しみながら

侍從　ア、コレ〳〵、藥よりは今の知らせと云ひ、どうやら胸騷ぎがして……一角は居らぬか。定包は親人のお供なら、コレ、大輔に逢ひたい程に、呼んでたも〳〵。

玉梓　アイ〳〵。合點でござんす。

ト玉梓、奧へ入る。侍從之助、だん〳〵苦しみながら手拭にて腹を卷き苦しむ。大輔、奧より走り出て

大輔　若殿、御急病とや。お心持ちは如何でござりまする。

侍從　オ、大輔か。待ち兼ねた。五體はこの通り惱亂して

ト血を吐きかゝる。大輔介抱して

大輔　何にもせよ脈體を。

ト膝に抱へ兩方の脈を見てキッとなる。

眼中どよみて脈もしどろこりや。コレ、正しく鴆毒の業。若殿、なんぞ思ひ當りはござりませぬか。

侍從　最前定包が某へ、吃りを癒さんと秘藥を與へしが、それより外に。

大輔　誠にその通り、言舌も解りしは、して〳〵、その秘藥とは。

侍從　某に知らさぬやうに、心氣を揉まし、逆上さして用ひたる藥は、筧よりあの手水鉢。

大輔　ムウ。この手水鉢。

トつか／＼と行て柄杓にて掬ひ、萬年青へかけると、萬年青バッタリ萎れる。大輔悔りして

これこそ毒藥。こりや良藥と云うて、定包が用ひたは、鴆毒に相違はないわい。

トきつとなる。侍從之助悔りして

侍從　ヤア／＼、さては定包が騙かつて毒藥を。

大輔　すべて鴆毒を用ゆる時は、腹中よりなすところの病苦は、一度は癒り、一時を待たず毒藥廻りて、命を失ふと聞く。先刻朴平が噂にも、若殿に放埒を勸め、民を虐げて遺恨を含ませ、里見の家を横領せん謀略。定包の名は呼ばず、白妙の人喰ひ馬と呼び名をする由。噂に違はぬ人非人の定包め。

侍從　そんなら腹を立てさせたも、忠義顏で病氣本腹させたも、皆彼奴が謀り事であつたか。チエ、口惜しい。

大輔　して／＼、定包は。

侍從　親人の御供して、本城瀧田の城下まで。

大輔　差當つたる若殿の敵は山下定包。さうぢや。

ト駈け出さうとする。侍從之助苦しみ、血を吐き、のたる。これを見て駈け戻る。

大輔　若殿のこの有樣。これを捨てゝは。コレ、お氣を慥かにお持ちなされませう。

ト抱へて介抱する。此うち下手より朴平、裝付け、山刀を差し、弓矢を持ち出て

朴平　若殿、お氣遣ひなされますな。憎しと思ふ山下定包。この朴平が矢先にかけて、若殿の敵討つてお目にかけませう。

大輔　ヤア、其方は杣木朴平。いつの間に。

朴平　先程洲崎でお別れ申し、娘を連れて去にましたが、心ならぬ御上使のお入り。それゆゑ疾に紛れ込み、委細の樣子は承はりました。

大輔　オヽ、故主を忘れぬ其方が志し、過分々々。身は若殿の御介抱。その間に早う。

朴平　心得ました。犬掛の山手を越え、先へと廻つて落葉畷。

大輔　山刀では覺束ない。心覺えのこの一腰。

ト刀を遣る。朴平受取つて寢刃を合して

朴平　これさへあれば大丈夫。おのれ、白妙の人喰ひ馬

め。
大輔　夜駈けと云ひ殿の供。誤まつて仕損じな。
朴平　朧月夜も目當ての白馬。遠矢を以て。
大輔　オヽ天晴れ。ちつとも早く。
朴平　心得ました。ソレ。
　トう矢手挾み橋がゝりへ走り入ると、直ぐにバタ〳〵にて奥より玉梓、白湯を持ち出る。橋がゝりより曳手、七郎、矢振り子を抱き走り出て大輔を見て
七郎　ヤア、こなたは聟どの。
大輔　七郎どの、どうして爰へ。
曳手　ヤア、妹も爰に居やるか。
玉梓　ほんに姉さん、よい所へ來て下さんした。殿様が俄の御病氣。
七郎　サヽ、最前こなたの素振りと云ひ、怪しからぬ胸騒ぎ。
曳手　それゆゑお前を尋ねて參じたところ、若殿様の御病氣とやら。
七郎　して〳〵、御病氣はどう云ふ様子。
大輔　コレサ若殿、お心を慥かにお持ちなされませう。
玉梓　殿様、お心を慥かに持つて下さんせいなア。

　ト両方よりキッと云ふ。侍從之助心付いて
侍從　コレ玉梓、定包が薬と云うて與へたは、ありや毒ぢやといやい〳〵。
玉梓　エヽ、エヽ。
　ト大愕りにて下に居る。七郎、曳手も駈け寄つて
七郎　ナニ、毒薬を注いで定包が。コレ申し若殿、お見忘れになりましたか。那古の七郎めでござりまする。
侍從　誠に七郎。其方は先つ頃、勘當を受けしが、無事であつたか。
七郎　ハッ、今日これへ參りましたは、これなる娘を大輔へ、云ひ號けの縁あれば、便りしところ計らざる若殿の御病氣。お心慥かにお持ちなされませ。
侍從　オヽ、大輔々々。
大輔　ハッ〳〵。
侍從　いま果てる某が、頼みと云ふは、親人には御老年と云ひ、何卒姉上伏姫を後見として、コレこの玉梓と某が仲に、疾より儲けし一人の男子あり、今日の只今まで、何者にも知らさねど、この小兒を護立つて、成人の後は里見の家を繼がせてくれよ。紛れぬ證據は某が、自筆を以て認めし臍の緒の書附け。

ト此うち大輔、恟り。七郎、曳手、玉梓、いろ／＼思ひ入れ。

大輔　ムウ、すりやこの玉梓どのとの御仲に、若君御誕生ありしとな。

ト七郎、懷中より子を出し

七郎　モシ若殿、その若君は、コレこの幼な子。とくとお顔を御覽なされい。

ト侍從之助に見せる。侍從之助見て

侍從　ム、。すりや、これが身が悴か。

大輔　殿の御手のかゝつたる、傾城玉梓と云ふは、云ひ號けの曳手どのとは、姉妹であつたよな。

七郎　今日まで娘に口止めして、若殿にも御存じなけれどその玉梓こそ、斯く申す七郎が娘でござるわいなう。

侍從　さては以前の家來、那古七郎が娘であつたか。チエエ嬉しや。いま俄に見たる我が子の顏。主從親子盡きせぬ縁。コレ大輔、瀧田の家老堀内貞行にも申し聞かせて、必らずともに悴が事を、頼むぞよ。

大輔　お氣遣ひなされますな。不思議に解る御落胤の系圖。この大輔、身を粉に碎き、お世繼に立てませう。

侍從　七郎々々。

七郎　ハツ／＼。

侍從　親人の勘氣は請けても、玉梓が親とあれば、某が舅。この幼な子の成人を、大輔ともに心を合し、敵定包を討たせてくれよ。

七郎　お氣遣ひなされますな。こなた樣の敵は、七郎が討ちまする。

侍從　まだ／＼心にかゝるは、親人の路次の程。叛逆人の定包が、附き添ひ居れば心がゝりな。

大輔　イヤ、お氣遣ひ遊ばされな。以前の家來杣木朴平に申し付け、若殿の敵定包めを、討取るやうに申し付けました。

七郎　イヤ、定包は討取るとも、それに一味の奴原もあれば、幸ひ見知らぬこの七郎、見え隱れに大殿の御供。

大輔　ナニサマ、某は若殿の御先途を見屆けん。御老人の御苦勞ながら。

ト子を抱き取る。七郎、身拵らへして

七郎　オヽ、合點ぢや。ソレ。

ト合ひ口差して橋がゝりへ走り入る。此うち侍從之助、いろ／＼苦しむ。曳手、玉梓、兩方より介抱する。

大輔　七郎どのに頼めば、大殿に氣遣ひはなし。この上は

侍従　若殿には、御病氣の分になし、本城瀧田へ送り參らせ、貞行どのと事を計らん。お心丈夫に思し召されませう。
侍従　オヽ、段々の世話忝ない。玉梓、曳手とやら。大輔、さらば。
玉梓　そんならあなたは。
侍従　南無阿彌陀佛。
玉梓　アヽコレ申し。
　ト三方より抱へる。侍従之助バツタリ落入る。玉梓、曳手、泣き落す。
玉梓　儚ないお別れになりましたわいなア。
曳手　オヽ、悲しいは道理ながら、殿樣の御遺言通り。
大輔　イヤ、若殿御逝去あるとても、御病氣届け相濟むまでは、油斷ならざる一家中の心底。迂濶に若殿の事は申し出されぬ。
曳手　成る程。して、あなたのお心は。
大輔　身共が思案は。コレ。
　ト曳手に囁く。
曳手　ムウ。そんなら此まゝ妹諸とも。
大輔　一先づ上總に身を忍び、隨分人に知らさぬやう、御成人を待つが肝要。心得たるか。
曳手　若君諸ともわたしが預かり、密かにお供いたしませうが、して又あなたは。
大輔　我れはこれより殿の御死骸、御病氣の體にもてなし、お乘り物に附き添うて、瀧田の館へお供の用意。
曳手　そんならわたしはこの隙に。
　ト玉梓の手を取る。
大輔　ちつとも早う。
曳手　合點でござんす。サア、妹おぢや。
　ト泣き入る玉梓の手を取り、子を抱へたまゝ橋がゝりへ走り入る。大輔見送りて、侍従之助の死骸を見て、ムウと手を組み、思案のこなし。見得にてチョン〳〵返し。
　向う黒幕、見事なる松の幹。兩方とも蘆原のあしらひ。上より松の吊り枝。空より月出る。靜かに本釣り鐘にて、合ひ方、道具納まる。
　ト向うバタ〳〵にて、朴平、返し前の形にて、弓と矢を持ち、本舞臺へ來て、向うをキツと見て
朴平　犬掛の山手を駈け拔けたれば、定包の戻るを待つには屈竟一。主家の怨敵、國の仇、幸ひの月明りに、人喰

ひ馬めを只一矢に。

トあたりを見廻すうち、向うの戸屋の内にてホイ〳〵と人聲する。朴平キッとなつて

あの人聲は慥かに定包。松の梢に身を潜めて。ソレ。

ト松の吊り枝を見込み、見得になる。所知入りになる。朴平、蘆原へ駈け込むと、向うより定包の紋付いたる高張り提灯二張、後より同じく紋付きの箱提灯を持たせ、大殿季基、𧘕𧘔、白馬に乗り兵内附き添ひ、後より家來供廻り隨分大勢、箱提灯持ち出て花道にて

季基　天津兵内。

兵内　ハッ〳〵。

季基　餘程夜も深更に及んだ。この所は何と申す。

兵内　この所は落葉坂。瀧田の御城下には程近うござりまする。

季基　ムウ、落葉坂。

ト心にちよつと當る思ひ入れにて

者ども參れ。

皆々　ハア、、、。

トまた所知入りになる。本舞臺へ來ると、エイと弦音して、季基の咽喉へ差し金にて矢當る。ヲア、と苦しみ落馬する。皆々悔りして

皆々　ヤア〳〵、この體は。

ト皆々立ち寄り介抱する。この時、馬は上手へ跳ねて走り入る。兵内、皆々を制して

兵内　ヤア、何れもうろたへる場所でない。遠矢を放つて射とめし曲者。草を分つて探し召され。

皆々　心得ました。

トどん〳〵大バタ〳〵にて、供廻り東西へ別れ入る。兵内、死骸を介抱して居る。向うバタ〳〵にて季基、早替り七郎の役にて走り出て、兵内を見て

七郎　ヤア、天津兵内どのか。

兵内　貴殿は那古の七郎どの。

七郎　如何にしても氣遣ひと、見え隱れにお供せしが、してして大殿には。

兵内　遠矢に當つて御落命。

七郎　ヤア〳〵、して〳〵その曲者は。

兵内　只今詮議最中。

七郎　チエ、。若殿と云ひ、斯う一時に。

兵内　若殿が如何なされたな。

七郎　定包が計略にて、若殿には毒死。

兵内　ヤア〳〵。すりや若殿にも。
ト此の時、蘆原少し動く。兩人キッとなつて囁き合ひ、木隱れすると、ゴンと本釣り鐘、小凄き合ひ方になり、朴平、蘆原よりヌッと出て弓と矢を捨て
朴平　若殿の仇敵、國を亡ぼす山下定包、異名に呼んだ人喰ひ馬めも、たつた一矢。悪事の報い思ひ知つたか。
ト季基の吹替への死骸を踏み躙る。七郎、兵内、拔き刀にて兩方より
七郎　さてこそ曲者。
兵内　主人の敵。
ト切つてかゝり。朴平、兩人を相手に立廻りあつて、七郎を一かせ切る。兵内がゝるを烈しく立廻り。ポンと切つて七郎に止め刺し、ホッと吐息つき
朴平　エ、、面倒な支へ立て。これも定包に一味の奴等。これで故主の忠義も立ち、御恩も少しは送ると云ふものとても事に定包めが首を取つて。ナ、ソレ。
ト月影に透かしながら、季基の死骸を見て、愕りして何遍も見直し、また後の七郎の顏を見て、兵内の顏を改め、大いに愕くりして、ウロ〳〵として
ヤ、、、、こりやコレ定包と思ひの外、白馬に乘つたは大殿樣、附き添うたは那古の七郎、天津兵内、ヤアヤアヤア。
ト愕りして死骸引立て
南無三方、定包めが何時も乘つたる白馬目當に月夜影、なんでも此奴と狙ひつめ、咽喉笛かけて射込みしは、定包ならぬ大殿樣。主人の仇と切りかけしは、悪人ならぬこの二人。ヤ、、、、こりやどうぢや。
ト大愕りにて、撞となる。その時、ズドンと本鐵砲の音して朴平に當り、ウンと苦しむこなし。倒れると、向うバタ〳〵にて定包、野袴、ぶッ裂きにて、手に種ケ島を持ち、後より乘り物一挺、これに中黑の紋付きの高提灯と箱提灯とを持たせ、家來大勢連れて走り出る。橋がゝりより丹次、太郎市、諸平、以前の供廻り皆々出て
皆々　ヤア、あなたは御家老定包さま。
定包　大殿を殺めし曲者、主君の敵と定包が、飛び道具を以て打ちとめ申した。何れも灯し。
皆々　ハッ。
ト提灯差出す。定包、いろ〳〵改め見て
定包　ムウ、こりやコレ大殿始め、天津兵内、いま一人は

先年勘氣を請けし那古の七郎まで、この曲者が手に掛りしと見ゆる。

皆々　誠に、こりやコレ、那古天津の兩人。

ト皆々、悧りのこなし、定包、朴平の刀を取つて改め見て

定包　後日の證據のこの一腰。何を申すもこの曲者を、討取りしは當座の敵。只この上は大殿の御死骸、この乘り物にて、瀧田の館へ御供召され。

皆々　畏まつてござりまする。

ト乘り物へ吹替への死骸を舁き入れる。

定包　この曲者はじめ、七郎兵內の死骸も片付け召され。

皆々　心得ましてござりまする。

ト三人の死骸を皆々にて片付ける。定包、一腰を見て思ひ入れあつて

定包　ア、、如何なれば今日一日に、大殿始め兵內、七郎も、非業の落命。

ト憂ひのやうに云うて、ちよつと舌を出して

ヲレ、お乘り物。

皆々　ハア〳〵。

ト所知入り早めて、この人數皆々橋がゝりへ靜かに入る。直ぐにバタ〳〵にて、上手より、奈四郎は玉梓、三寶平は曳手、子を抱きしまゝ出てキッととまり

玉梓　殿の御最期を驚ろきもせず、こりやわしらをどうさんすのぢや。

曳手　その上、幼な子を抱いて居る者を引立て、こりや何所へ連れて行かんすのぢや。

奈四　ハテ知れた事。惚れてござる定包さまへ連れて行て、手柄にするのぢや。

三寶　又この女郎めが懷中の子悴は、慥かに義成が產ませた餓鬼であらうがな。

曳手　そんならお前方も、皆定包と一味の衆ぢやなア。

奈四　オ、、今日の仕儀も皆、定包さまが兼ねての計らひ。

三寶　今やう〳〵合點がいたか。サア〳〵、キリ〳〵失せう。

玉梓　チエ、口惜しい。さう云ふ事と知つたなら

曳手　殿樣の御最期もあるまいもの。殘り惜しい。

奈四　サア、怪我まくらぬうち、玉梓うせろ。

三寶　このちつぺいも、此方へ渡せ。

玉梓　エ、、否ぢや否ぢや。爰放しや。

曳手　女と思ひ侮つたら、手は見せぬぞ。
奈四　何を小癪な。
トこれより玉梓を後に圍ひながら、曳手ちよつと立廻りあつて、トヾ片手に刀、片手にて玉梓の手を引き、兩人を橋がゝりへ追ひかけ入る。直ぐに向うより逸藤太、袋入りの名笛を持ち逃げて出る。後より一角、追ひ駈け出て、本舞臺にてキツとなり
一角　サア、最早叶はぬ籠山賴行、その嵐山の名笛、此方へ渡せ。
逸藤　執心の深い一角め、嵐山も東山も、そんな事は知らぬわい。
一角　今となつてはあらがはさぬ。サア、尋常に此方へ返せ。
逸藤　何を小癪な。
トまた立廻るうち、中通りの敵役四人、尻からげ頬かむりにて出て、一角に切つてかゝるを、キツととめて
一角　こりや、うぬ等も一味の惡人ばら。
逸藤　ヤア面倒な。疊んでしまへ。
四人　合點ぢや。
ト四人相手に立廻りになり、鳴り物入りの合ひ方になる。いろ／＼立廻りあつて、トヾ逸藤太に切つてかゝる立廻り。また四人支へる。これより皆々、虎の子渡しの立廻りになつて橋がゝりへ走り入る。チヨン／＼一セイ、本釣り鐘にて、右の大木引き取る。吊り枝は引き上げ、向うの黑幕切つて落す。返し。

造り物、向う打拔き遠見に聳えたる岩山。よき所に辻堂。兩方袖山、谿川の流れ、隨分小凄き好みにて、本釣り鐘にて道具納まる。
ト直ぐにバタ／＼にて、上手より玉梓逃げて出て、よき所に悶絶すると、又バタ／＼にて曳手、所々に傷を負ひながら、矢ツ張り子を抱き、奈四郎三貫平も手を負ひながら切り結び出て、兩人を相手に立廻りあつて、兩人をボン／＼と切る。これも悶絶する。本釣り鐘にて、正面の辻堂の内より顯定、野袴、ぶツ裂き、異風なる頭巾にて、ツカ／＼と出て、玉梓と曳手を見て、ちよつと思ひ入れあつて、側に落ちたる守り袋を取上げ、龕燈にて透かし見て
顯定　ナニ／＼、嘉吉三年八月二日の誕生、名は又太郎、名乘りは義實、父は里見侍從之助義成、母は上總の何某

の娘單節。

ト讀み、悑りして懷中に居る子を取上げ、とつくりと見て、守と共に懷に抱き取り、呼子を吹くと、東西より黒の袴、ぶッ裂きの侍ひ四五人、黒の袢天、股引の家來大勢出て、ハッと平伏する。

顯定　者ども。その二人の女を介抱いたせ。

ト印籠抱つてやる。家來、ハッと玉梓曳手の兩人を介抱して藥を呑ませる。

皆々　コリヤ女、心を付けよ。

トきつと云ふ。兩人ウンと心付く。双方とも顏見合せ

玉梓　マア、姉樣。

曳手　オ、妹か。

ト兩人ウンと又仰け反る。家來皆々、キッと取押へ

皆々　心を慥かに持て。コリヤ女。

トきつと云ふ。兩人また心付き、キッとなつて

玉梓　ほんに最前から御介抱と云ひ

曳手　さうしてマア、あなた樣は。

顯定　當國の主、里見治部太夫季基が内緣。

皆々　管領山内顯定さま。

トきつと云ふ。これにて赤子笛吹く。顯定、コレと押へて不審がる。兩人これにてとつくりと眺めて

玉梓　そんならあなたは、噂に聞いた

曳手　御家門の顯定さまか。

トまた反りかけるを止めて

顯定　コリヤ、この女は深手を負ひしと相見ゆる。何ゆゑのこの有樣。樣子を聞かしやれ。どうぢや。

玉梓　申し、殿樣は定包の爲に、毒に中りて果敢ない御最期。

顯定　ナニ、侍從之助は鴆毒に中り。ムウ。

ト悑りする。

玉梓　その殿樣の御遺言、世を繼がせよとの大事のお胤を惡者どもに支へられ、姉樣のこの深手。

顯定　ムウ……其方の三方の緣ねる小兒は、コレ爰に。

玉梓　ほんに、申し姉樣。

ト曳手に顯定の抱いて居る子を見せると、赤子笛吹く。

曳手、キッとなつて

曳手　ヤア、若君にはお怪我はないか。

顯定　何を申すもこの深手。コリヤ、氣遣ひ致すな。この小兒は母諸とも、この顯定が預かり、里見の家の世繼に致しくれるぞ。

玉梓　あれ聞かしやんしたか。コレ姉樣。
曳手　段々のお情。チエヽ忝ない。
ト　がつくりとなる。玉梓、取りつく。三寶平、奈西郎起きて
三奈　樣子は聞いた。その子倅。
ト　兩人かゝるを家來二人立廻つて
家來　さうして此奴は。
顯定　切つてしまへ。
家來　ハツ。
ト　ぽん〳〵と兩方にて見得よく切る。
顯定　不思議に手に入るこの幼な子。マヽ、血筋の緣で。
ト　曳手ウンと落入る。玉梓ワツと泣く。顯定、子を眺める。チヨンと木の頭。
あつたよなア。
ト　思ひ入れながら子を抱きつける。家來皆々平伏する。この見得よろしく。

幕

二段目　瀧田城の段　富山洞の段

役目＝管領、山内顯定。里見後室、五十子御前。同息女、伏姬。蟹崎十郎照武。鮎原首胤度。牡蠣崎小次郎。非野丹次。蓼毛酷六。妻立戸五郎。傾城、玉梓。同、戸卷。同、雛衣。同、舟虫。同、窓居。腰元、稲木。同、度引。同、かなめ。同、鈴音。同、手枕。赤岩一角。籠山逸藤太。忍び、根五郎。八房實ハ犬神使ひ眼八。富山の神童。金鞠大輔孝德。山下柵左衞門定包。堀內藏人貞行。杉倉木曾之助氏元。

造り物、通り二重舞臺。見附け金襖大模樣、瓦燈口、すべて瀧田館の體。右二重に妻立戸五郎、着附け社杯、大小にて扣へ居る。この次に戸卷、舟虫、窓居、傾城の形。度引、かなめ、腰元の形、梅の花笠にて、禿二人、皆々座敷踊りの體。蓼毛酷六、大小上下にて、これを制して居る。平舞臺よろしき所に鮎原胤

度、蜑崎照武、上下にて兩方に分れて反り打ちて居る。牡蠣崎小次郎、非野丹次、その外近習三四人双方に扣へ、この見得、踊り三味線、踊り掛け聲のうちへ本神樂を打込み、幕の内より

醋六　ヤア、かしましい。女ども、默り居らうぞ。

戸五　兩人とも靜まらつしやれ。

ト　これにて幕明く。踊り地掠めて矢ッ張り本神樂。

照武　この蜑崎照武が、寶詮議して、伏姬君を宿の妻に申し受けるぞ。

胤度　イヤ、鮎原胤度が役目を果むらば姬君を娶るのサ。

度引　わたしらがこの姿は、御家老藏人さまの仰せつけ。

皆々　なぜ踊る事が法度ぢやえ。

醋六　ヤア、なめ過ぎた女ども。なんぼう藏人どのがお許しでも、アタかしましい、踊る事はならぬぞよ。

戸卷　コレ醋六どの、其やうに沒義道には云はぬものぢや。大殿樣はお果てなされ忌中なれど

窓居　若殿樣が御病氣ゆゑ、お氣慰めのこの踊り。殿樣のお居間へは行く事ならぬと

舟虫　間を隔てゝ、踊りの手拍子。陽氣を催ほすこの御趣向は、御家老さまの思ひつき。

かな　大磯の廓から呼び寄せて、お傾城やら腰元やら、打交へてこの踊り。

度引　わたしらも慰みに踊るなら、苦い顏するばかりが見得でもござんせぬ。ちとお前方も

皆々　踊らしやんせいなア。

醋六　まだ〳〵此奴、藏人どのの云ひ譯を笠に着て、べりべりと口答へ。若殿侍從之助さまには、この程館山のお館にて、上洛のお用意最中、俄の御病氣差發り、卽ち御家老藏人どの一人、御病床へ近附き、我れらにさへ御對面なき程の御大病。それに何ぞや、面白さうに腰元端下に、廓の女郎までも打交へての大踊り。それが何ぞの藥にならうか。馬鹿な詮索。

戸五　その上、大殿治部太夫さまには、館山よりの歸るさ、落葉畷にて不慮の御最期。その曲者の柚木朴平、卽座の仇に山下定包どのが討取つたれど、朴平は金鞠大輔が以前の家來。大殿に恨みあつて、家來に云ひつけ、大輔が討ち申せしと、評議極まり、大輔らに閉門させ、上を下への館の轉倒。賢を賢として色に替ゆと、兩人が爭論も、時節を辨まへぬ致し方。

胤度　サア、それと申すも、室町どのへ差上げる二品の寶

紛失。この詮議仕出しなば、その恩賞として伏姫君を下されんとある、御臺所よりの仰せ渡し。

照武　そりや御自身ばかりでもない、何者にもせよ、寶さへ詮議して差上げなば、伏姫君を下されんとの事。この照武が申し請けて見せうと云ふのぢや。

胤度　ハヽヽ、この胤度と同し願ひの蟇崎照武。伏姫君を宿の妻に望むとは、誠にそれが猿の人眞似。

照武　鮎原首、そりや御身が事だ。この照武にお遣はしある姫君を、同じやうに縁邊の訴訟とは、それが鵜の眞似をする烏同然。

胤度　誠に猿は、佛の金色を見て嘲笑ふとやら。

照武　彼の烏めが、おのれが鳴く聲を、鷲の神音と思ひ、月夜を晝と取違へる阿房烏め。

胤度　彼の山のこけ猿めが、里へ下りて物を盗むに、その音に驚ろき、我れと我が耳を塞ぐあわて猿め。

照武　ムウ、この照武を猿と云うたな。

胤度　おてまへ。また某を烏とは。

照武　オヽ、身共が願ひ

胤度　イヤ、某が縁邊を

兩人　なぜ妨げる。

五十　兩人待ちや。

兩人　あのお聲は。

戸五　御臺所。

照武　五十子さま。

兩人　ハツ。

ト兩人扣へる。踊り地やんで、序の舞となると、瓦燈口より五十子御前、裲襠にて出づる。後より女の童の子役二人附き出で、五十子御前は褥の上に直る。腰元は上手、傾城は下手に坐る。戸五郎、酷六、照武、平舞臺へ下り、双方へ分れて扣へる。矢張り本神樂入りの合ひ方になる。

五十　鮎原首胤度。

胤度　ハツ。

五十　蟇崎十郎照武。

照武　ハツ。

五十　兩人が爭ひの様子、一間の内より詳しう聞く。其方達が望む伏姫は、自らが産み落せし時より、七歳の春まで、晝夜ともに泣き止む間なき煩ひたるゆゑ、當國洲崎岩室の行者へ祈誓をかけしに、仁義八行の文字を記せし、數選りの玉の珠數を授かり、姫が襟に掛けさせしよ

り、初めて泣き止み、その日より平癒して、今まで無病に成人に及ぶ。然るに美人の聞えありとて、鎌倉兩管領を始め、近國の諸大名より、婚姻を取結ばんと、毎度の進めに及べども、その身の宿業を思ひ、幼少より出家の望み。この程我が夫には不慮の御最期。また跡目なる侍從之助は病氣とあつて、堀内藏人が預かり、只一人も通さぬ病床。室町どのへ差上ぐべき二品の寶も紛失。國の爲また家の爲と思ふゆゑ、姫へもその旨云ひ聞かせ二品の寶の詮議、仕出かせし者あらば、例へ家來の中になりとも、伏姫を娶合さんと自らが料簡。その在所さへ分らぬうち

戸五　御臺所の仰せを云ひ立て、伏姫君を望む兩人。

階六　何とも以てその意を得ぬ致し方。

五十　して、寶の詮議の目當ばし、あつての事か。

ト嵐度、腰に差したる刀。照武、懐より袋入りの御朱印を出して

嵐度　萬死を出でゝ一生を保つ、神餘光義と合戰の折から忠勤の現はせし功に依つて、この嵐度がお預かりありし、落葉小篠と號せし刀。紛失の村雨の名劍の代り、室町どのへ差上げる拙者が所存。

照武　我が君神餘を亡ぼさんとお旗揚げの折、第一番に到着せしは某が譽れ、即ち勳功に依つて預かり奉る八千丁の御朱印。紛失の嵐山名笛の代りとして、室町どのへ差上げる某が手段。なんとこれでも伏姫君は、申し請けられさせぬかな。

戸五　ドレ、その御朱印。

ト取りにかゝる。照武、手をかくるを直ちに

然らば落葉小篠の刀。

ト嵐度の刀に手をかける。右の通りあつて、キッとなり

嵐度　妻立戸五郎。

照武　コリヤ、なんとしめさる。

戸五　イヤサ、兩家の譽れ、刀と朱印を拜見せうと存じて。

照武　拜見したくば追つての事。

嵐度　先づ差當る此方の願ひ。

照武　イヤ、蟇崎照武が望み。

嵐度　是非姫君は嵐度が

照武　見事和殿が

嵐度　おんでもない事。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト兩人、柄に手をかけ詰め寄る。

五十　ソレ。靜めよ。

皆々　御意ぢや。靜まらつしやれ。

嵐度　イヽヤ、武士が詞は

照武　反古にや致さぬ。

嵐度　是非とも伏姫君は、いづれ一方へ片附けて

兩人　申し請けう。

ト又反り打つてキッとなる。

五十　その兩人の爭ひも止まるやう、自らが扱ひ。双方とも武士の廢らぬ、取捌きはこの二行の文字。

ト懷より如是畜生發菩提心と書きたる書附けを出して渡す。兩人取つて

嵐度　御臺樣より我れ〳〵がお扱ひとあつて

照武　如是畜生發菩提心と書いた一紙は。

五十　日頃信ずる洲崎岩室の行者、自らが枕上に立たせ給ひ、夢中に授かるその文字を、鮎原嵐度須崎照武、兩人とも、とくと判斷いたして見や。

嵐度　すりや、この文字を

照武　我れ〳〵兩人に。

五十　自らが心の扱ひ。

嵐度　如是畜生發菩提心。

五十　それ仁義禮智忠信孝悌の八行は人にあり、菩提心は一切衆生、人畜生ともにあらざる事なし。

嵐度　ムウ。八行五常は人にあり。

照武　これはそれに引替へて

兩人　如是畜生發菩提心。ムウ。

ト思案のこなし。樂打ちあげる。

階六　ありやもう法事の終り。

五郎　御臺所には奧殿へ

五十　兩人ともに、その返答は。

兩人　思案の我れ〳〵、暫時の御容赦。

五十　そんなら後まで。

兩人　とくと判斷。

五十　奧で返事を待ちますぞや。

皆々　先づお入りあられませう。

ト唄になり、この一件皆々奧へ入ると、直ぐに序の舞になり、奧より稻木、腰元形にて振り袖にて逃げて出る。階六追ひかけ出る。稻木に抱きつき

階六　コリヤ、しめたぞ〳〵。

稲木　エヽ、悪い事なされますないなア。

酷六　なんの悪い事を致さう。稲木どのヽ、日頃から目顔にて知らせど素知らぬ顔。心の丈を云はうとも、物堅い屋敷の内。そこで人目を忍び文。せめては一度は手に觸れて、色よい返事を、これサ、頼むぞ〳〵。

ト無理に稲木が懐中へ状を入れ、じなつく。稲木突き退けて

稲木　エヽ、嫌らしい。左やうな淫らな事は、わたしや嫌でござんすわいなア。

ト文を捨てる。

酷六　すりや、如何やう申しても。

稲木　しつかう仰しやると、御前様へ申し上げまするぞえ。

酷六　云はつしやれ。こなたが云はつしやると、身共も云ふぢや。

稲木　そりや何をえ。

酷六　一角どのヽ事を。

稲木　エヽ。

酷六　一角さまと譯のある事、よく存じて居る。小次郎どのが箱入り娘、一角の上がり膳でもいとひはない。願ひ叶へてたび給へ。南無稲木大明神。

ト稲木に無理に状持たせ、抱きつきにかゝる。

稲木　エヽ、アタ嫌らしい。エヽ、この一角さまも何してぞ。早う戻つてくれたがよい。

酷六　イヤ、一角はこの間から行くへが知れぬ。大方出奔でもしたものであらう。そんな男より、身共が心に従ひ給へ。南無稲木大明神。

ト又抱きつきにかゝる、

稲木　エヽ、嫌ぢやわいなア。

酷六　もう斯うなつたら、嫌でも應でも抱いて寝る。

稲木　アレイ〳〵。

ト酷六、稲木を追ひ廻すうち、向うより「姫君の御歸館」と呼ぶ。業平出の謡らへの合ひ方になる。稲木、花道へ逃げて行く。酷六追つて行くと、向うより子供の腰元二人、次にお經机を持たせ、腰元二人、次に里見伏姫、書而伏姫の姿。後より手枕、鈴音、柏木、しもと、腰元にて、花手桶に梅の活けたるを持たせ、後の者は姫の手道具、料紙短冊箱を持たせ、次に社杯股立ちの侍ひ、八ツ房の犬を眞紅の紐にて引いて出る。後より上下の侍ひ、皆々守り刀、挾み箱など手の明か

ぬやうに持ち、花道にて稲木、子役の中を逃げて行く。伏姫を見て恟りする。伏姫、構はず稲木と入れ代る。酷六、取違へて伏姫に抱きつかうとして、顏を見て恟りして

酷六　ヤア、あなたは姫君。

稲木　伏姫君さま。

伏姫　父君おかくれ遊ばして、物忌みのうちと云ひ、愼しむべき自らなれど、この程より岩室の行者さまへ、お願ひ申せし家の納まり。また御上使も今日お入りあるとの事。それゆゑ何かと願ひの參詣。今やう〳〵と下向しましたわいなう。

酷六　それはハヤ、御奇特の御參詣。

稲木　さぞかしお草臥れ遊ばしませう。

手枕　マア〳〵、あれへ。

皆々　お越し遊ばされませう。

トまた右の鳴り物となり、この人數、本舞臺へ通る。この時以前の文落ちてあるゆゑ、伏姫、手枕に云ひつけ拾はす事あつて、二重の好き所へ坐る。稲木、手枕、その外腰元は二重の下手へ坐る。敵役の女形、上下侍ひ、八房は平の下手へ坐る。戸五郎奥より出で

戸五　これは〳〵伏姫君には、奥殿にござる事と存じたにいつこれへお越しなされました。

稲木　お姫様には、大殿様の御忌中なれど、日頃よりお願ひもあれば、洲崎岩室さまへ御參詣遊ばし、若殿侍從之助さま御病氣、御平癒のあるやうにと、お忍びの御參詣でござります。

戸五　それはハヤ、御奇特千萬に存じます。

稲木　姫君御寵愛の八房は、何處へお越しなさるゝも、腰附きのお供。さぞ草臥れたであらう。奥へ連れ行き、扶持を與へ召され。

侍ひ　ハツ、畏まりましてござります。

ト侍ひ、八房を連れ、橋がゝりへ入る。

酷六　イヤ又、大名の物好きは格別。鳥か猿を飼ふところを、姫君のお供には犬を引くとは、わんの事やら、合點が參らぬ。ハヽヽヽ。

戸五　何を酷六の馬鹿な事を。イヤ、姫君には、よく〳〵のお願ひがあればこそ。よく御參詣をなされました。

伏姫　徒歩路をひらうて戻り道、酷六には又、稲木を捕へ、今のは何事。

酷六　エヽ、アヽ、今のは。

稻木　それはアノ酷六さまが、わたしを捕へて。
酷六　不義と見せたは不義の詮議。この稻木どのは、行くへの知れぬ赤岩一角と不義せしゆゑ。
戸五　ナニ、一角と、この稻木が密通せしとな。
伏姬　その一角への濡れ文は、これかや。
ト以前の狀を抛る。
酷六　ヤア、こりや今の。
ト手に取上げ、ギックリ詰まる。
戸五　封じを解いて早く讀みやれサ。
酷六　ア、滅相な。
伏姬　兼ねて赤岩一角とは、夫婦にしたき親の願ひ。人の七難より我が身の十難。達てとあれば、その文を讀み立て、詮議さしやうか。
酷六　アヽ、それには及びませぬ。
伏姬　サア、何事も云はぬが花であらうぞや。
戸五　すりやあの文も。
ト酷六が顏を見る。
酷六　段々とのお志し、有り難う存じまする。
ト悄げる。
戸五　ハテ、馬鹿々々しい。それよりは、奧殿にも佛事の終り。その間に酷六、最前の事を、合點か。
酷六　ハツ、心得ました。イザ、姬君にもお佛間へ。
戸五　イヤ、姬君には、拙者が密かに申し上げたき儀もあれば、貴殿には早く／＼。
酷六　左やうならば姬君樣、後刻お目にかゝりませう。
ト酷六、奧へ入る。始終合ひ方。
伏姬　妻立戸五郎、自らには何の用事。
戸五　イヤ、外の事でもござりませぬが、大殿樣には御逝去、また若殿には御病氣。室町どのへ差上げる二品の寶も紛失。それゆゑ御臺所の仰せには、二品の寶詮議して差出すものならば、姬君を宿の妻に下し置かれんとの事。それを蟹崎照武、鮎原胤度の兩人が役目を乞ひ受け、その樣子悟り切つてござる姬君を、申し請けると爭うて居りましたぞえ。
伏姬　濁り江に暫し宿れる影を見よ、誠の月の曇りやはする。母上の仰せはさる事ながら、自らは幼少より、岩室の行者樣の御利益は受けながら、罪障深き姬御前の身。殊には深き願ひもあり。開くもうるさい。それと定めし心は、疾からこの通り。
ト伏姬、指圖する。手枕、守り刀を出す。伏姬、髮を

切る。仕掛けにて、髻切れる。伏姫、水晶の珠數を手に取上げ合掌する。

皆々　これは。

伏姫　君をのみ思ひ掛籠の玉櫛笥、一生殿御を持つまいと、思ひ切つたこの黒髪。又この珠數は自らが、洲崎の行者樣より授かりし、仁義八行の玉の珠數。襟に掛くれば一切の、障化を拂ふとの御誓ひ。これをもどかぬ自らが心。

戸五　すりや、一生尼御で。

伏姫　身は墨染めの世捨て人。母上のお尋ねあらば、お心に障らぬやう、申し上げてたもいなう。

戸五　エ、、聞えました。左やうならば、鮎原も蜑崎も、お心に入りませぬか。そんならいつそこの戸五郎。

伏姫　ヤ、なんと云やる。

戸五　サア、日頃焦れて思ひの丈。そのお姿を見ては、どうも堪えられませぬ。

ト抱きつきかゝるを振り放し

伏姫　最早佛へ仕ふる自ら。穢らはしい。其方へ行きや。

戸五　イヤ、まだ手入らずの尼御樣、たつた一度のお剃刀。

伏姫　母樣へ申し上げうか。

戸五　それぢやと申して。

トまた寄るを、横面びつしやり叩いて

伏姫　慮外者めが。

トきつと云ふ。戸五郎、平舞臺へ飛び下り、ハツと蹲まる。

ホヽ。ドレ、御靈前へお供へ申さう。

ト唄になる、伏姫先に腰元皆々、花筒など奥へ持つて入る。戸五郎、後に殘りて

戸五　エ、、折角味ようやりかゝつたものを、今のびつしやり、慮外者めが、ドレ御靈前へお供へ申さうか、チヤンと唄になり……ア、、なんの事ぢやい。

トぐんにやりとなる。この時向うにて

呼び　お上使のお入り。

ト觸れ込む。向うを見て

戸五　ナニ、お上使のお入り。この趣きを御家老樣へ。

ト奥へ行きかけると、奥より定包、貞行、衣裳上下にて、後より酷六、小次郎、丹次、頓次、酌平、九念二、皆々社杯にて附き添ひ出て

定包　室町どのより御上使とござる。各々方には無禮なきやう、出迎ひ召され。

皆々　ハア、。

ト　これにて定包、貞行、入れ替つて、貞行先に定包、戸五郎、醋六と段々に並よく並び、出迎へて

貞行　御上使これへ、お通り

皆々　あられませう。

ト大鼓謠になり、向うより山内顯定、着附け長上下、懷に日明けの子を抱き、小姓二人後より、すが里、乳母の拵らへにて守り刀を持ち、近習二人附き添ひ、花道よき所にてとまる。

藏人　御上使樣には、何人樣と存じの外

定包　管領たる山内顯定公。

兩人　思ひがけなきこの御入來。

顯定　珍らしや山下定包、堀内藏人、出迎ひ大儀。室町どのより仰せを蒙むり、臨時の上使。

藏人　遠路の所、御苦勞千萬。

定包　イザ先づこれへ

皆々　お通りあられませう。

顯定　役目なれば、罷り通るであらう。

ト大鼓謠にて顯定、舞臺二重よき所へ合引にかゝる。定包、藏人、その外人數並よく分れながら、序の舞になる。

藏人　御家門なれば、よく御存じなれど、堀内藏人貞行。

定包　相家老山下柵左衞門定包。その外一家中の面々。

藏人　御上使の趣き、仰せ聞けられ下されませうならば

皆々　有り難う存じ奉ります。

顯定　この程室町將軍義教公より、仰せ下されし嚴命。安西景連より承りながら、役目たる侍從之助は、今に病氣平癒せぬ由。御懇望の二品も差出さず、其まゝにて延引いたせば、急ぎ義成に上洛させ、二品の寶も差上げるやう、君命に依つて内縁たる山内顯定、何か力を添へん爲向うたり。この旨承知いたしてよからう。トサア、これまでは君命。さて、計らざる當家の騷動、政事を預かる兩家老、さぞ心勞にあらう。この趣きも懇ろに、妹五十子にも傳へてくりやれ。

五十　御上使樣お出迎ひの爲、五十子それへ參りませう。

ト合ひ方になる。中の舞にて、奧より五十子、襠補にて、腰元しもと、柏木、附き出で二重の下座へ直る。

顯定　オヽ、妹五十子。計らざる季基どのゝ死去の樣子。逐一に承知いたした。室町どのも格別の思し召し、有り難く御請け申されよ。さるにても汝を始め、一家中の愁

傷祭し入る。
五十　有り難き兄上のお詞。有爲轉變の世の習ひ。存じがけない夫の御最期。折柄義成が病氣と云ひ、味氣なき有様と、諦らめながら女の愚痴、御推量下さりませう。
顯定　我れも繋がる家門のよしみ。役目を乞ひ請け來りしも、跡目評議、寶の詮議、この兩様を開かん爲。
定包　こは有り難き顯定公のお詞。義成早速上洛も仕るべきところ、只今御臺所の仰せの如く、任せぬ急病。
藏人　それゆゑにこそ、斯く申す藏人始め、諸士の者ども、薄氷を踏む心地の折柄、御家門たる顯定公の御入來ゆゑ、我れ／＼が喜び、この上はござりませぬ。
定包　見請けますれば顯定公には、見馴れざる小兒を抱き御座あるは、如何なる仔細でござりまする。
顯定　不審は尤も。この小兒の儀は、ちと仔細あつて、身が目にとまり、途中にて拾ひ取り、養育いたし遣はす所存。一つは當家へ好き土産。イヤサ、當家へ參るに好い道連れ。

トこの時、赤子笛吹き、いぶる事あつて

オヽ、泣くな／＼。

ト乳母すが里に指圖して、抱き取らせ

先づ何は差措き、ほゞ聞けば、季基横死せられし折から、家來たる金鞠大輔が一刀、傍へに落ち散りありしとやら。して大輔は如何いたした。
戸五　大殿の御逝去の節より、家中一統、大輔に面縛いたせど
酷六　毛頭覺えこれなき事申し立て、罪には伏せぬ横道者。
戸五　ソレ、頓二訥平、幸ひ御上使のお入りの折から、大輔これへ引立てて來さつしやれ。
兩人　心得ました。いづれもござれ。
侍ひ　ハツ。

ト向うへ行かうとする。この時、揚げ幕の内より

大輔　イヤ、引立てるに及ばぬ。御不審の一々、金鞠大輔それへ參つて、申し開き仕りませう。
皆々　なんと。

ト早笛になり、向うバタ／＼にて大輔、着附け社杯にて、大小を差し、ツカ／＼と出る。訥平頓次、それと指圖する。小次郎、丹次、九念二、大輔の向うへ立ち塞がる。大輔、一々入れ違ひ、花道よき所にてちよつと立廻りあつて、双方へ分れ、キッと取卷く。大

輔、本舞臺を見て

大輔　こは管領たる顯定公。御臺所。ハッハッ。

ト　とん／＼と立廻りて、大小を下に置き、ハッと平伏する。あと序の舞。顯定、大輔を見て

顯定　何者と思ひしに、金鞠大輔、これへ來やれ。

藏人　ソレ、金鞠大輔どの。

定包　顯定公のお召し。早く／＼。

戸五　イヤ／＼御家老、罪人たる大輔を

酷六　顯定公の御前近くは

顯定　イヤ、苦しうない。許す／＼。

五十　ソレ、お召しなされる。近う／＼。

大輔　ハッ／＼。

ト　戸五郎、酷六、始め敵役皆々遮ぎするを、大輔、油斷せぬこなしにて、大小を後へ廻し、氣味合ひあつて靜々と本舞臺へ來て下座に附く、

顯定　金鞠八郎が忰大輔。

大輔　ハッ。

顯定　當家の主、治部の太夫季基が横死ありしは、其方が所爲なる由、家中の風聞。さすれば汝は大罪人。いよいよ其方覺えがありや。この儀どうぢや。

五十　大輔が日頃の忠節、殊に父金鞠八郎が忠死とあり、よもやとは思ひながら、御死骸の側にありし刀と云ひ、朴平と云ふ曲者は其方が家來との事。一家中の疑ひも無理ならず。云ひ譯あれば、眞直に申し上げい。なんとなんと。

大輔　ハッ、御意を返すは畏れあれども、三代相恩の御主、何恨みあつて弑し奉らん。この儀はとくと御賢察なし下されませう。併し、大殿の横死の折から、これなる山下定包どの、飛び道具を以て打ちとめられし柚木朴平と云ふは、我が父八郎が家來なれば、お疑ひあるも御尤もなれど、この身に取つては夢聊か

戸五　覺えないとは云はれまい。大輔、御身が仕業に相違はないわサ。

酷六　達ては證據はこの一腰。人も知つたる御身の差し料。なんと覺えがあらうがな。

ト　口明けの一腰を出して見せる。大輔見て、思ひ入れあつて

大輔　如何にも覺えある拙者が差し料。

戸五　大殿の御遺骸の側に落ち散る一腰。

酷六　それをば御身は、覺えがないと申し開くか。

大輔　くれました。
兩人　そりや何者に。
大助　以前の家來朴平に。聊かの功名あるゆゑに、先達て遣はしました。彼奴、何ゆゑに刃向はんや。御運の事とは云ひながら、なか／＼彼れら如き手にむざ／＼と、御最期あらん謂はれなし。こりやコレ正しく
　ト定包の方を見て、ちよつと氣味合ひあり
戸五　イヤ、さうは拔けさせぬ。刀をくれし朴平こそ、以前の家來。其方こそ殿を恨み、人知れず討取れよと刀を與へ
酷六　まさかの時は朴平に、罪を塗りつけ遁がれん爲の計略。それとも知らず大殿の歸りを待ち受け、よつぴきひようと矢を放ち
酷六　討ち奉つたに相違はあるまい。
照武　さすればコレ皆汝の仕業。主を害する罪人。
頓次　なりや逆磔刑はお定まり。イデ、我れ／＼が
皆々　成敗を。
　ト皆々キッとなる。
定包　イヤ、待たつしやれ。差し料の一腰が、その場所にないにもせよ、朴平は金鞠が家來。人も面體を知つたる者を、大輔が頼みさうな事もあるまい。
藏人　誠にこりや定包どののお詞の通り。畢竟金鞠氏の身に取つては無實の災難。只何事も心を定め、申し開きの工風を召さるが肝要ならん。
戸五　これは又如何なる事。斯樣に慥かな證據があらば、彼奴が討取つたに相違はござらぬ。我れ／＼が爲には殿の怨敵、キッと糺さにやなりませぬ。
酷六　左やうとも／＼。これサ大輔、最早遁がれぬ。只今見せし一腰が、拔きさしならぬ慥かな證據ぢや。
戸五　誠は家來朴平に申しつけ、まツ斯う／＼と有やうに、云つてしまはつしやい。
　ト兩方より詰めかけて云ふ。大輔手を組み、ヂッとしてゐるゆゑ
酷六　エヽ、これ程に云ふに、死太い性根。
兩人　云はずば、斯うして。
　ト兩方よりかゝるをキッと捕へ、ヂロリと眺め
大輔　ハヽヽ、御深切忝ない。どのやうなる證據があつても、主君を害する大輔ではござらぬ。よし又大殿の御最期も、我が犯せし罪にもせよ、言上すべき方々にこそ申せ、貴殿達には滅多に申さぬ。御上使の御前、立ち騷

いで尾籠千萬。ざわ〳〵せずと
ト兩人を振り拂ひ
お下にござれ。
戸照　ヤア、なめ過ぎたその一言。ソレ者ども。
皆々　大輔、お立ちやれ。
ト引立てにかゝる。ちよつと立廻りてキッとなり
大輔　若殿の御病氣、お家の安否聞くまでは、滅多に自由になり申さぬ。何を馬鹿な事を。
ト立廻りてキッと留まる。この時向うバタ〳〵にて赤岩一角、籠山逸藤太、口明けの形、臑ぎかけにて、矢張り笛の袋入りを取り合ひ出て、花道よき所にてキッととまる。皆々これを見て
戸五　ヤア、其方は赤岩一角。
酷六　相手は籠山逸藤太。
皆々　この有樣は。
逸藤　山下堀內を始めとして、その外一家中の面々。こりや堪らぬ。
ト逃げうとするを、立廻りにて押へ
一角　何れも、お聞き下されい。この程館山の館にて、惡事に一味の逸藤太。

逸藤　なにを。
ト振りほどくを立廻りて
一角　怪しく思ひ窺へば、安西景連と心を合せ、所持する寶は嵐山の名笛。
皆々　ヤア〳〵。
一角　それゆゑ館の騒動を、思ひながらもこの仕合せ。紛失の寶、盜賊諸とも、召し連れ歸つてござりまする。
トよろしく立廻りて、逸藤太を押へ、笛の袋を取上げる。
藏人　ホホウ、出かし召された一角どの。その笛これへ。
一角　ハッ。
ト一角、本舞臺へ逸藤太を引立てながら來て、藏人に笛を渡す。逸藤太、それをとかゝる。定包、拔打ちにポンと切る。皆々恟りして
皆々　ヤア、これは。
顯定　季基不慮の横死と云ひ、黑白の評議も分明ならぬに、あの若者の働らきにて、引立て來る詮議の種のその曲者、一言半句の問ひ狀もなく、みだりに打つて捨てたる定包の心底。ハテ、何ともハヤ。
ト顯定こなし。

定包　ハツ、御上使の御面前、血をあやせしは拙者が誤まり。併しながら、政事は小鮮を煮るが如く、公を存じ、名箭さへ手に入らば、惡事に荷擔の澁藤太、この定包が成敗いたすに、最早御異存はござりますまい。
顯定　すりや、罪の疑はしきは輕く計らへと、譬へを引いて其方が計らひ。
定包　なか〳〵。
藏人　天晴れ頓智のお計らひ。貞行などは及ばねど、定かにそれと。
定包　ヤ、、なんと。
藏人　サア、定包どのゝ御心中。藏人感心仕つてござる。
　ト思ひ入れあつて、ヂツと扣へる。顯定もこなしあつて
顯定　治部太夫どのには不慮の横死。また義成には病と云ひ、何れに愚かならねども。定包、其方はさぞ心勞にあらうなア。
定包　御推察の通り、伏姫君には藏人どの、若殿樣にはこの定包が附き添ひたれば、一入心を苦しめ居ります。
顯定　さうあらう。義成介抱は元より、其方が心に叶ふ者があるが、なんと近附きになる心はないか。
定包　若殿の御介抱になる、某が心にも叶ふ者とは。
顯定　す、、この所へ呼び寄せうか。その女を此方へ通せ。
　ト向うにて
皆々　サ、、ちやつと行かしやんせいなア。
　ト華やかなる鳴り物入りの合ひ方になる。花道より玉梓、衣裳裲襠、傾城の形にて、後より度引、鈴子、廓風の拵らへにて附き添ひ出て、花道にとまる。
定包　ヤア、其方は。
皆々　傾城玉梓。
玉梓　定包さま、皆々さま、許して下さんせい。
　ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、よき所へ坐る。女形は下手へ並ぶ。鳴り物納まる。玉梓フト大輔を見て
玉梓　ヤア、お前樣は、どうしてこれに。
　ト云はうとするを、大輔、打消し
大輔　ハテサテ女、何を申す。御上使お入りの場所と云ひ、詞多きは品少なし。何も云ふな。イヤサ、控へて居らうぞ。
　トいろ〳〵仕方して呑み込ませる。

玉梓　オヽ、辛氣。なんぢややら、マア、斯う見たところが、そこらが差合ひだらけ。斯う云ふ一座で恥かかうとは知らなんだわいなア。ほんに、傾城に誠のないと、小唄にまで唄はれはするものヽ、眞實誠の深切は、傾城より外にはごさんせぬわいなア。惜しからぬ命を長らへ、斯う云ふ所へ來たは、皆ソレ、そこにござるお殿樣の御教訓で、死ぬるにも死なれぬ入り譯。せめてどうして斯うしてと

ト定包の方見て大輔に云ふ心意氣。大輔、ハッと思ふこなし。顯定ヂッと定包を見る。

オヽ、辛氣。あんまり堪え／＼たので、どうやら積が發りさうなわいなア。

顯定　定包、只今これへ參りし傾城、其方が心に叶はぬか。

定包　顯定公のお連れなされし伊達女、何者と存ぜしに、若殿の御寵愛にあづかりし傾城玉梓。この程騷動の日より、行くへ知れぬと聞きつるに、ハテ、無事で居つたな。

五十　すりや、兼ねて噂に聞きし、侍從之助が寵愛せし、玉梓と云ふが、あの傾城。ハテナア。

藏人　この藏人とても、兼ねてより腰元端下の噂に聞けど、この程の騷動にて、心附きたる玉梓どのヽ行くへ。顯定公のお召し連れありしは、何よりのお心添へ。

玉梓　逢ふは別れの始めとは、勤めする身は殊更に、よう心得ては居るものヽ、云ひ交した若殿樣は御病氣。お屋敷へさへ上がられず、いつそこの身を尼法師とも姿を變へ、思ひ切らうとしたれども、流石命のつれなきに、寄るべ定めぬ流れの身。顯定さまのお目にかヽり、今日このお館へ全盛顏で上がつたも、思ふお方に逢ふ心。わしや捨てられた捨て小舟、いつ浮かむ瀬がある事ぢやわいなア。

定包　すりや、この館へ參りたさに。

ト持たせかけて云ふ。

玉梓　アイナア。

戸五　大切なお跡目の評議の席へ、御上使樣。

酷六　得知れぬ小兒を抱き抱へ、傾城を召し連れられし

皆々　お心はな。

顯定　元は賤しき傾城なれど、侍從之助と云ひ交せし玉梓を、召し連れ參りしは、定包へ身共が寸志。

定包　なんと仰せられます。

顯定　イヤサ、家國の儀につき、心を痛める其方の慰さめ、積る欝憤を晴らさん爲。
定包　すりや、アノ拙者に。
玉梓　粹な浮世に一人寐もならず、行くへ定めぬ苦界の中に、寄るべを辿るわたしが身の上。
藏人　ハテ、心あり氣な顯定公の御進物。御賢慮の程、何ともハヤ。
顯定　女の結れる黒髪には、猛き大象も繋ぐとやら。
大輔　褒似妲妃は色を以て、國を亡ぼす世の諺。
定包　大切な評議の場所へ
顯定　なまめく女も欝晴らし。
酷皆　餘りと申せば。
ト　きつとなつて立ち上がる。顯定、ちやつと、すが里に抱かした子を眺めて
顯定　ア、コレ、小兒が怯える。ても怪しからぬ大きな聲な。
定包　これサ、何れも方、何事でござる。顯定公のお心添へ、おてまへ達も寛ろいで、傾城どもに評議を召されい。
酷皆　でも賓の詮議、跡目の落着。

顯定　ハテサテ、二品の寶のうち、嵐山の名笛は、斯く手に入る上からは、若殿の御病氣全快次第、室町どのへも云ひ譯立てば、先づ申し譯の爲、名笛を差上げるがお家の納まり。
藏人　如何にも、とくと改め、顯定公へ差上げん。
ト　云ひながら、袋より笛を出して見て、恟りして
ヤ、、、こりや眞赤な似せ物。云ひ譯には相成らぬ。
一角　エ、、なんと御意なされまする。
藏人　そも嵐山の名笛と云つぱ、その尺一尺八分の一。こりや似ても似つかぬ似せ物なるわい。
一角　すりや、その名笛は似せ物とな。チエ、、是非もない。
ト　五十子、藏人、大輔と三人の方を見て、ヂツとなる。定包始め敵役ふせ笑ふ。
戸五　なんぢや悧巧らしう、名笛を取返したなぞと、馬鹿らしい似せ物を以て、逸藤太はくたばり損。
酷六　時ともなしにビク／＼さして、なる事ぢやない。若輩者の差出ずと、ちよ／＼こなつて居さつしやい。
訥平　殊に御上使始め、御臺所の御前。
頓次　無禮のないうち、早くお次へ立つて行きやれ。

一角　ムウ。

ト立ちかゝるを大輔、次へ立てと額にてする。一角、思ひ入れあつて是非なく橋がゝりへ入る。

戸五　サア、大輔どの、名籍は似せ物でござつた。所詮いつまで探しても、役に立たぬ事に氣骨を折らうより、先づ差當つて貴殿の落着。早く主殺しの科に落ち、逆磔刑が悲しくば、腹でも切つて

階六　イヤ〳〵、戸五郎どの、所詮大輔どのは腹切る事は御存じあるまい。御上使の御前、とてもの事に我れ〳〵が、教へて進ぜう。

ト双方より大輔に詰めかけて云ふ。

顯定　イヤ〳〵兩人、大輔未だその罪に落ちざるうち、逆磔刑はさて置き、腹切るにも及ぶまい。ナウ定包。

定包　ハッ、御尤もの仰せ。武士の身は相互ひ、殊に大輔どのには、實父八郎どのより忠義の家柄。

戸五　イヤ〳〵、科極まりし大輔を、庇ひ召さるゝ定包どのゝ御心底。この儀は差措き、御家門は內證、御上使の顯定公、御詮議なさるゝ筈を、腹切るなと御意なさるゝはな。

顯定　さればサ、四海の政事は利法權の三つを以てすと。その辨まへなき汝等が裁配。予は家門たりといへども、當時は足利どのゝお覺えめでたく、管領職たる山內顯定、室町どのゝ御上使だぞよ。

戸五　エ、イ。

ト恟りして、ちやつと扣へる。

顯定　その面前をも憚らず、私しの料簡を以て罪を糺すか。

戸五　イヤ、全く以て。

顯定　無禮千萬、控へ居らうぞ。

戸五　ハ、ア。

ト眞面目になつて後へ引込む。

顯定　とサア、表を糺すは誠の武士に出合うた時。斯く愚智無智の輩に向ひ、申し聞かすは、予も又愚智と人の笑はうぞ。ハ、、、、馬鹿らしい。

ト戸五郎始め敵役皆々キッとなる。定包、顏で押へる。

戸五　重々畏れ入りましてござりまする。

玉梓　さうして、わたしはどうせうえ。

顯定　ハテ、其方は奧へ參つて、折を見合せ。

ト額にて定包を教へ

隨分ともに機嫌をとれサ。

玉梓　ほんにさばけた殿ぢやわいなア。

御前　先程より餘程の間、さぞ御退屈遊ばしませう。

藏人　寶の詮議、若殿の御病氣。何か評議仕るうち

顯定　先づ奧殿へお入りあつて、暫しの間御休息。

大輔　姬君伏姬さまにも御對面。

定包　すりや、後程までに落着いたすとな。

藏人　キッと御返答仕りませう。何は格別、設けの席へ、お入りあつて然るべう存じまする。

定包　ソレ、何れも、御上使御饗應の用意を申つけやれ。

皆々　畏まりてござりまする。

顯定　ナニ金鞠大輔、寶の詮議、其方が落着、彼れを見これを推す時は、種々の心勞察しやる。薄雲のかゝる小夜の春の月。

ト定包に當て、氣を又替へて

サア、心靜かに思案の洒落。

大輔　お情籠る御上使様のお詞、委細承知奉つてござりまする。

顯定　然らば方々。

五十　イザ、御案内。

藏人　先づお入り

皆々　あられませう。

ト唄になる、五十子御前先に顯定、玉梓、定包、戸五郎、酷六、敵役皆々、女形も附き、奧へ入る。後に藏人、大輔殘る。藏人、あたりを見廻し、件の刀を取つて大輔と顏見合す。

藏人　大輔どの。

大輔　堀内氏、先刻より何かの儀を申し入れるところ、御上使始め諸公の面前。それゆゑに御遠慮申して。

藏人　イヤモウ、同じ館にありながら、某は若殿の御病床離れねば、思はず御疎遠。何は然れ、貴殿にお尋ね申したい一儀がござる。暫らく苦しうござるまいか。

大輔　此方よりも幸ひの折から、一言申し入れたい儀もござれば。

藏人　それは重疊。然らば近う。

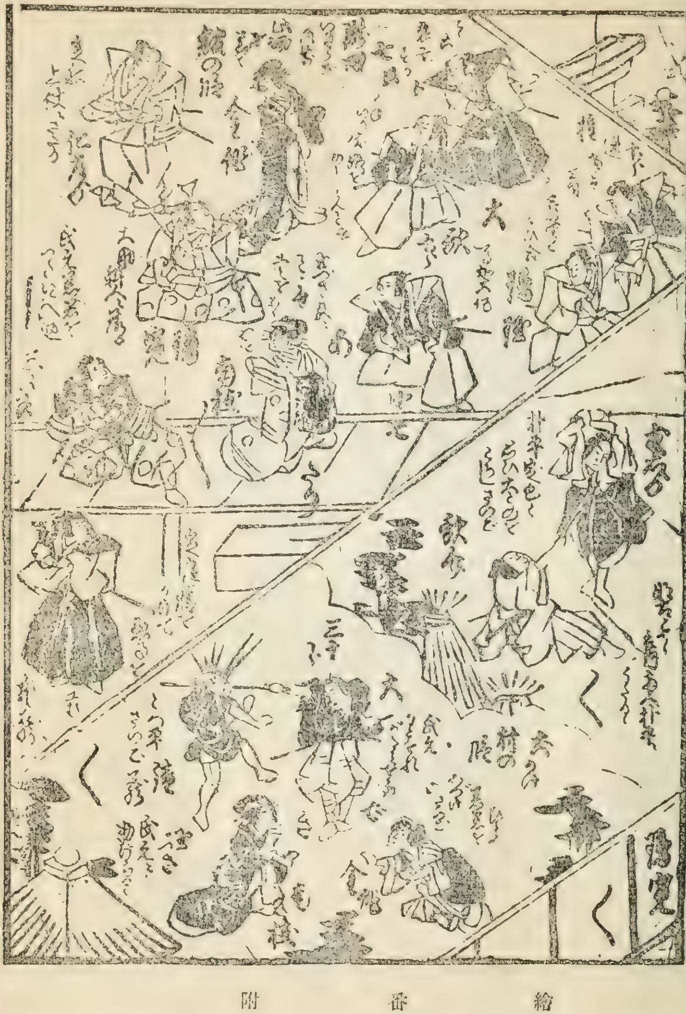
大輔　御免。

ト双方、平舞臺にじり寄る。

藏人　さて、早速お尋ね申したいは、只今戸五郎が持參の一腰、いよ〳〵貴殿より柚木朴平とやらに、遣はされたが實證でござるかな。



初　渡　の



繪番附

大輔　如何にも、朴訥ながら朴平も、忠義を磨く心底を感じ、この程騒動の日、平館のお下館にて、彼の者に取らせました。御家老たる貴殿に向ひ、ナニ僞はり申しませうや。

藏人　然らば、いよ／＼大殿を殺害なせしは、金鞠大輔、其方に極まつたわナ。

　トきつとなる。大輔、悔りして

大輔　ア、イヤ／＼、貞行どの、大殿を殺害したのを、この大輔などとは、何を以つて。毛頭この身に覺えがござらぬ。

藏人　ヤア、覺えなしとは卑怯の金鞠。戸五郎爺の尋ねし時、先頭くれしと詞の轉々。この程家中の噂にも、大殿の御最期は、其方が仕業なりと取り／＼の沙汰。然れども某は、父八郎よりの竹馬の朋友。其方が幼少より、よく心底を見抜きあれば、よもやと思ひ過せしが、前後揃はぬ只今の詞。大殿の御最期、慥かに其方が仕業であらう。來づ差當る大殿の敵。尋常に覺悟いたせ。

　トきつとなり詰め寄る。大輔止めて

大輔　御尤もの疑ひ。併し、その儀に就て貴殿まで、申し入れたき仔細あり。

藏人　イヤ、この期になつて何云ひ譯。人非人の其方に論は無益。いま手にかける。覺悟いたせ。

　ト坐りながら右の一腰にて切つてかゝろ。大輔これを支へ、双方本手の立廻りを、にじりながらあつて

大輔　サ、お急きなさるは尤もなれど、これには段々仔細のある事。心を靜めて藏人どの、申し譯の一通り。

　ト藏人おこつく。とん／＼と立廻つて、キッと留める。

お聞き取り下されう。

　ト兩腰投げ出し、どつかと座す。ウ、と擬聲。鼓入りの合ひ方になる。

一人端麗なれば一國亂を發すの譬へに違はず、心得難きは山下定包、若殿侍從之助さまに放埓を進め、大磯の遊君玉梓に戀慕して、殿の用金を以て身請けなし、我が手に入れん下心。この程館山の下館にて、大殿の面前にて、その惡逆の顯はれんとせし時、若殿の言古を癒さんとて、筧に仕掛けし柄杓こそ、鴆毒に相違なし。暫らくあつて毒氣發し、黒血を吐いて即座に御死去。けはしき場所に駈けつけたるは、我が舅那古の七郎。云ひ號けの女房が妹と云ふは、若殿のお手のかゝりたる傾城玉梓。中に

儲けし若君あつて、人知れず舅が養育。伏姫君に後見を賴み、行く〳〵その若君に世を繼がせよと、若殿の御遺言。まつた山下定包は、上の名を借り、民を虐げ、過役をかけて責めはたれば、人皆山下定包の名を云はず、白妙の人喰ひ馬と異名を呼ぶ出。憎さも憎しと以前の家來、杣木朴平が逸り男に、殿の敵を討たんと、我れに代りて駈け出せば、その一腰を彼れに與へ、大殿の路次危ふしと、舅七郎どのを御供に立たせ、我れは若殿の御亡骸を、御病氣の體にもてなせしが、お供はさは知らずして、大殿は落葉畷の歸り道、おのれが一味の者どもに狼藉させ、忠義顏に後より駈けつけ、君が乘り物とおのれが乘馬、乘り變りたる計略とも知らず、無慘や大殿には、白馬目當に朴平が、さてこそ定包ござんなれと、恨みの矢先に御落命。舅七郎天津の兩人、殿の敵と朴平に、討つてかかつてこれも同士討。その間違ひも兼ねてより、彼れが企みの罠にかゝり、朴平を討取つて、主君の敵を討ちしと高振り、證據の刀は大輔より、朴平に送りしと云ひ立て、罪に取つて落さん計略。サ、その隱謀と知りながら、明らさまに詮議のならぬは、若殿の御身の上。跡目評議が極まらねば、大殿と云ひ、若殿まで、一時に御死去あつては、里見のお家相續も覺束なく、殊に二品の寶物の紛失。彼れこれ以て定包を、洗ひ立てられぬこの程の心勞、御推量あれ藏人どの。

ト愁ひのこなしにて云ふ。藏人聞き取り、こなしあつて

藏人　さてこそ〳〵、審らかなる申し譯。某も正しくそれと思へども、只今の如く申せしは、その心底を聞かん爲。若殿の毒殺、大殿の不慮の御最期。これ皆定包が計略と知りながら、二品の寶のうち、何れなりとも詮議仕出だし、玉梓どのゝ企み落されし若君の、行くへ求め、伏姫君を後見として、里見の跡目定まるまで、惡人ながらも定包が隱謀、迂濶に詮議もならず。とは云へ、今日御上使の返答には、ハテ、何をがな。

ト手を拱き思案のこなし。大輔にじり寄つて

大輔　アヽイヤ、お氣遣ひ召さるな藏人どの。騷動の砌より、心にかゝりし玉梓どのゝ行くへ。御家門の顯定公、お連れなされし上からは、懐に抱かせられし幼な子こそ、慥かに若殿の御落胤。證據は即ち義成公の御直筆にて、年號月日を記せし臍の緒、この儀を貴殿にお賴み申せば、疑ひかゝる拙者の身の上。御上使への云ひ譯に

は、腹かッさばいて相果てる所存。

ト腹を切らうとするを、よろしく留めて

藏人 その身の云ひ譯、殿の遺言、某に相違し、御上使の申し譯、腹かッさばいて相果てる貴殿の心底は、この藏人が存じて居れど、斯くまで傾むくお家の存亡、餘所に見捨てゝ、切腹あつては、譜代蒙むる高恩な、いつの世にか報じ召さるゝ。

大輔 イヤ、その意見は御尤もなれど、間違ひとは云ひながら、家來朴平が粗忽の罪、主にかゝるこの身の越度。此まゝに存命なしては、お家の政事正しからずと、世に謳はれん。この儀をとくと御賢察あつて、貴殿より某へ、改め切腹の仰せつけられ、掟を立てるがお家の爲。右のあらまし貴殿まで、申し置きなば、この身の安堵。例へ御成敗は、牛裂き逆磔刑に行はるゝとも、覺悟の大輔。これ御覽下されい。

ト上衣を脫ぐと、下に白無垢に六字の名號書いたるを脫ぎかげ、首に珠數を掛け居る。藏人、感心の思ひ入れにて

藏人 ホヽウ、天晴れ功あつて賞せず、罪あつて誅せずば、世に屈する事能はずと、掟を立てる貴殿の心。

大輔 すりや、その儀をとくとお聞分けあつて

藏人 今改めて某より、金鞠大輔孝德へ、切腹の申し附くるぞ。

大輔 ナニ、切腹お許し下さるとな。

藏人 如何にも。併し、數代の軍功少なからぬ金鞠の名蹟、無實の罪に穢さん事は、如何にしても殘念至極。今の虛名を拂ふべき、苦肉の計略、某とくに存じ附きたり。

大輔 ナニ、虛名を拂ふ計略とは。

藏人 貴殿ならで、外に行ふべき者はない。

大輔 して、その仔細は。

ト藏人フト腰に差したる扇を見て

藏人 卽ちこれなる扇面なり。

ト廣げたまゝに渡す。取つて

大輔 むさゝびはこぬれ求むと足引の

藏人 山の獵男に逢ひにけるかな……むさゝびの、こぬれ求むと足引の

大輔 山の獵男に逢ひにけるかな。すりやアノ山の獵男を。

藏人 承知か。

大輔 ム、ウ。

兩人　ト思案あり。訥平、六郎、黑裝束にて窺ひ居て
　兩人覺悟。
　ト切り込む。藏人、六郎を捻ち上げる。大輔、訥平を押へ、頭巾をかなぐり
大輔　妻有六郎、蕪戸訥平。
藏人　佞人どもは斬ち切り捨て。
　ト訥平、大輔を振りほどき、藏人にかゝるポンと切る。六郎、大輔にかゝるを、ちよつと立廻りて
大輔　此奴は此まゝ詮議の囮。
　ト押へる。藏人、ムウとうなづき、血刀を差出すと、大輔、訥平の頭巾にて血を拭く。このはずみよろしく、序の舞早めて、チョン／＼返し。
　造り物、一間の間、二重亭屋體、兩方落ち間、網代塀。上手、風雅なる枝折り門、兩方に山吹の盛り、柴垣、燈籠などのあしらひ。右二重の上に定包、狀を讀み居る。下に根五郎、忍びにて扣へ居る。この見得よろしく道具納まる。
　ト序の舞打ち上げる。合ひ方になる。定包、狀讀みしまうて
定包　ムウ。すりや、兼ねて一味合體なしたる、彼の在村より催促あれば、事性急に取計らへとある、景連よりのこの文體。
　ト懷中より封じ狀を出だして
　疾より認め置いたるこの返書。其方直さま景連どのに手渡しせよ。
根五　ハツ、畏まつてござりまする。
定包　行け／＼。
根五　ハツ。
　ト橋がゝりに入る。此うち上手より玉梓、矢張り襠裲にて切り戸の傍に窺ふ。定包、右狀を取上げて
定包　我が父神餘長狹之助光義は、先年里見季基が手に亡びたれば、父の欝憤散ぜん爲、我が素性を深く包み、季基親子を討取つて、家國を押領なさんと計りしも、事大方に成就したれば、この上は館の奴ばら皆殺しとなし、父の孝養に備へんは目のあたり。アラ心地よや、喜ばしやなア。
　トこの時ゴンと本釣り鐘。少し小凄き合ひ方。金銀の蝶數多飛び交ふ。定包キッとこれに目を附け
　ハテ心得ぬ。時は黄昏、草の褥に眠らずして、庭にこぼ

る丶山吹の、花に戯むる數多の小蝶。
玉梓　山吹や、傾城に子はありながらとは、我が身の上。お情受けし殿の、何卒お家の納まるやうと、お願ひ申してこの館へ、來た事は來たが、一向に底意の知れぬ人心。
定包　これにて思ひ合すれば、蝶は平家の紋どころ、我が父神餘光義は平家の末葉、戯むれ遊ぶ有様は、里見の家は源氏の末、亡ぶる時節を知らすものか。
玉梓　七重八重にも咲く花の、みの一つだになきものに、命を捨てゝもお家の爲、功を立てよと云ふ事か。
定包　莊子は化して胡蝶となる。
玉梓　こぼるゝ花は、この身の落花。
定包　心得難き
兩人　事ぢやなア。
　トこの時兩人顏見合せ、合ひ方止む。蝶飛び去る。定包こなしあつて
定包　そちや傾城玉梓。
玉梓　お前は定包さま。ア、苦し。わたしやきつう醉うたわいなア。
　ト酒に醉うた思ひ入れにて

許して下さんせい。
　ト枝折門明けて内へ入る。
定包　玉梓、そちや何ぞ見たか。聞いたか。
玉梓　イヽエ、わたしやなんにも。
定包　いよ／＼見ぬか。
玉梓　アイ。
定包　それ聞いて。
玉梓　申し定包さま、お前は爰にたつたお一人、何をして居やしやんす。わたしやモウ、御上使さまのお側に居て、酒の相手に、わたしやきつう醉うたわいなア。
定包　玉梓、今參つたは、この定包が心を探らん爲か。
玉梓　エヽ。
定包　色で仕掛けて問ひ落すと云ふ事も、久しいものぢやてや。
　ト煙草のむ。玉梓こなしあつて
玉梓　殿御に別れて居る身と、古い疵は、誰が取上げる人もなく、月日の立つに從うて、以前の戀しさ。
定包　信田の森の古狐、化け負ふせて恨みし、サア、葛の葉の、風に靡いて裏返つたか。
玉梓　世は元忍ぶと、このお屋敷へ來たも馴染みだけ。

定包　すりや、二世までと云ひ交した、侍從之助さまの事は忘れ
玉梓　遠ざかる者、日々に疎しとやら。
定包　アノ、それで身共に。
玉梓　可愛がつてもらはうと思うて。
定包　でも、恐ろしい者ぢやなア。
玉梓　眞實でござんすわいなア。
定包　そりや誠にか。
玉梓　誓文、底から。
ト定包の膝へもたれて思ひ入れ。
臈く氣ぢやわいなア。
ト定包、思ひ入れあつて、ちやんと居直る。
定包　知るまいと思ふか。こな女郎め。山内顯定が連れ來りしは、うツ惚れた身共ゆゑ、色で蕩らして寶の詮議。われに浮か／＼乘らうかい。
玉梓　さりとては、きつい廻り氣な。その心中立ては互ひに打解け。
ト懐へ手を突ッ込みにかゝるを、振り放し
定包　ハテ、性急な持ちかけやう。
玉梓　それでもほんまに思ふもの。

トまた手を突ッ込む。連判狀引き出だす。定包キッと留めて
定包　玉梓、こりやなんとするのぢや、
玉梓　むづかしさうなこの濡れ文。
定包　イヤ、其方などが欲しがるものぢやない。
ト兩人ちよつと取り合ふと、バラリとほどける。兩人、端をキッと持つて見得となる。
玉梓　こりやコレ慥かに連判とやら。
定包　それ知るからは。
ト連判狀を引ッ取り、刀を拔いて切りつけると、玉梓飛んで下手へすさつて、キッと見上げる。定包、刀振り上ぐる。この見得よろしく、チョン／＼返し。
造り物、三間の間、常の二重。向う金襖。上手柳の廻り、緑張りの塗り骨障子屋體、この内には床の間。正面には違ひ棚、下手は少し後へ寄せて本塗り高欄附きの廊下。向うの見切りは數奇屋造り、この前に紅梅の立ち木、白紅の梅の吊り枝、見事に下ろし、屋體の飾り本緣附き、隨分風雅にあるべし。平舞臺の上手に井戸あり、人の出入りあり。右二重の眞中

に伏姬、白無垢の齋附け、尼の形にて、側に硯臺を置き、上に書物を載せて本を讀み居る。この側に經机、これに普門品を置く。棚の前に手道具を置き、水晶の珠數など置きある。すべて道具は雲上あるべし。側に稻木、戶卷、雛衣、手枕、窓居、度引、鈴音、舟虫、柏木、しもと、かなめ、八房の膳を拵らへて居る。下手の方に結構なる褥の上に、八房、この膳に坐つて居る。この所、緩やかな琴入りの合ひ方にて道具納まる。

ト　皆々銀燭臺に火を點して

稻木　サア／＼、八房のお膳は、マア出來たわいなア。

舟虫　そのお忙がしい中に、お姬樣の御剃髮。

戶卷　何やら彼やらとお取込みの中でも、この犬のお膳拵らへ。

窓居　ほんにマア、同じ畜生に生れても、この八房は仕合せ者。

度引　それ／＼、誰れあらう、里見の姬君の御前と云ひ、結構な褥の上に

かな　この膳の三つ膳附きのこの御馳走は、人間も及ばぬ果報。

鈴音　この三人のお傾城達も、身請けなされてお姬樣のお宮仕へ。

窓居　姬君樣のお情で、廓の勤め遁がるゝと云ふ、こんな嬉しい事はござんせぬわいなア。

雛衣　わたしも御家老樣がお召し下され、廓から來た者ゆゑ、詳しい樣子は知らねども、變つた物好き。

柏木　その上お姬樣は、昔の小野の小町とやらも及ばぬ御器量。

戶卷　廓にたんと姬御前もあれど、お姬樣と比べては墨と雪。

度引　世に珍らしい御器量でありながら、御緣附きなされず、あの美しい黑髮を切り捨て

雛衣　尼御前になりなさるゝは、ほんにどうしたお心ちやぞいなア。

稻木　サア、それに付いては、深い御心願のある事さうで、室町の御前樣や管領より、御緣組みをお進めあれど、お聞入れはないわいの。

手枕　その上、姬君樣のお心に入つた殿御なりや、どのやうな人でも聟に取らうと、仰しやるに七里けつぱい。

雛衣　ほんに、こちらの身の上なりや、好いた男は持ち次

第、好きな事は仕次第ぢやになア。

戸巻　それに、こちらも辛い勤めをば、お姫様のお庇にて、浮かみ上がつたお腰元、有り難い事ではないかいなア。

皆々　ほんに、さうぢやわいなア。

ト此うち伏姫、本を読みしまひ、硯臺を退け

伏姫　思ひゆく闇の人はなか／＼なきものをと、慈鎮和尚の古歌もあり、古へは翁丸と云ふ犬は、勅勘を蒙むり捨てられしと云ふ事は、清少納言の双紙にも残りある事。皆の衆にも、さぞかし不思議に思やらうが、この八房は自らが、幼少の時この城下にて、父上のお目にとまり、斯程までに聞分けよき、人に近き者はなしとて、御秘蔵なされ、障化拂ふ為にとて、自らが側に置き、この年月飼ひ馴れしが、今日ぞ浮世の輪廻を離れ、佛の道に仕ふれば、これは罪生消滅為、取分けて姫御前は、五障三従の障りある者。深い願ひの事もあり、父上にはお別れ申し、いよ／＼重なるこの世の宿業、二つには、弟が病氣平癒、祈らん為、三つには好まぬ夫定め、進めらるゝがうるさゝに、浮世を捨てしこの剃髪でござるわいたり。

鎌六　それはアア、何とやらむづかしい。

戸巻　ひよんなお願ひで

皆々　ござりまするな。

ト稲木こなしあつて前へ少し出て

稲木　姫君様に申し上げまするも憚りなれど、今お館には寶紛失、何者にもせよ、その寶を詮議して差上げる者には、恩賞としてあなた様を、宿の妻に遣らんとある、御臺様の仰せ渡され。それを、いま御剃髪なされましては。

伏姫　サイナロ、母上のお進めに従へば、望みある自らが、心も好まぬ夫定め、又一旦誓つたる、佛の道にも背くと云ふもの。

稲木　もし御出家をお立てなされば、紛失の二品も、お手には入らず、さある時にはお家の大事と、憚りながら存じまする。

伏姫　成る程、稲木の云やる通り、自らが誓ひを立つれは、家の大事、親への孝も立たぬ道理。と云うて還俗する時は、佛へ一旦誓ひたる、自らが望みも叶はず。ハテ、どうしたらよからうなア。

ト思案のこなしにてヂツとなる。

〽寄る邊定めぬ船なれや。

ト棹の露の獨吟になり、伏姫、フト側に居る八房を眺めて側へ引寄せ

コレ八房、其方を自らが側に置く事、數ふれば早十年餘り。畜類ながらも恩を知らう。今自らが身の難儀。もし飼ふ主の恩を報ぜんと思ふ心あらば、紛失なしたる家の寶、その盜賊の首諸共に、自らが前へ持つて來やれば、浮世を捨てた伏姫が、夫と定めるは其方ばかり。自らが身の難儀を、助けうと思ふ心はないかや。

ト八房、領く。伏姫、これを見て

オヽ、領きやつたは、心得やつたか。もし自らが望みを叶へなば、知行を與へ行ひ、分地ささうか。但し物の詞でも授けうか。

ト八房と呼ぶに頭振る。

頭を振るは、望みはないか。そんなら自らが夫と定めうか。コレ八房、どうぢやぞいなア。

ト八房の頭を撫でる。八房、尾を振り、領き喜ぶこなし。

戸卷　姫君樣には、何を御意遊ばすやら。戯れも事と品に依りまする。

雛衣　心無い畜生に、樣々の事御意遊ばす。

度引　こりや御座興で

皆々　ござりまするか。

伏姫　イヤ、座興でない。生中佛門に入つたるこの身。殿御と云ふは持たぬ心。また五代史と云ふ文にも、昔唐土高辛氏の時、磐瓠と云へる犬ありて、敵陣へ忍び入り、手柄をせしとの例しもある。畜生とは云ひながら、もしや神佛の御利生にて、共に力を添へられて、寶無難に手に入らば、名を呼ぶばかりの自らが夫。例へこの身は畜生の妻と呼ばるゝとも、佛の誓ひも破らず、親への孝も立つと云ふもの。

稲木　すりや、それ程までに、御身をお責め遊ばしても

戸卷　もしお賴みが

皆々　お手に入らば。

伏姫　犬に添ふのも身の潔白。自らが心の切なさを、皆の衆も、推量してたもいなう。

皆々　お道理でござりまする。

稲木　ハツ、姫君樣、先程のお詞の下りました金碗大輔どの、切腹の儀を御不便に思し召され、母君樣へお願ひ申し、お聞き濟みありし上は、片時も早う最後の經文、授けておやり遊ばしませ。

伏姬　それよ、大輔が切腹は家の掟。父上始め那古天津の人々まで、朴平とやらに討たれ、朴平は又定包に討たれしとの事。討つては討たれ討たれては討つ。未來の苦患も思ひやられて。

稻木　それゆゑその最後の際に

伏姬　一句の敎化も佛の敎へ。

手枕　ソレ、大輔どのを伴はしやれ。

侍ひ　ハ、、、。

〽いづく泊りと白波の。現に過ぐる身の程は

トまた獨吟になり、橋がゝり內にて

サア大輔どの、お立ちなされ。

ト大輔、白無垢社杯に改め、侍ひ四人、手燭を持ち引立て出る。此うち女形、皆々あたりを片附ける。伏姬の前に經机を直す。大輔、平舞臺に坐る。伏姬、思ひ入れあつて

伏姬　金鞠大輔、それへ出や。

ト二重の前へ出る。大輔摺り寄り

大輔　ハッ、御主人の惣領姬君、佛門に入らせられ、心月尼公。拙者金鞠八郞が悴なれども、幼少の時より館山の館に罷りありて、若殿侍從之助さまに添へ置かれば、久しくお目見得も仕りませぬ。私しの最期の際に、有り難きお示し下されますとの儀。この上ながら未來の導引、願ひ上げ奉る。

伏姬　宿世の業とは云ひながら、修羅の巷に身を果す金鞠大輔。未來の土産は、この普門品。

〽夢は果敢なき春の夜の。

トこれにて伏姬、フト大輔の顏を見て、チッと思ひ入れ。大輔は我が形を見て、愁ひのこなしにて俯向く。伏姬、皆々を見て氣を替へ

伏姬　コレ、皆の者、大輔をこれに置き、次へ立ちや。

皆々　ハッ。畏まりました。

〽いつしか明けて卯の花も、菖蒲も分かぬ五月闇。

ト右の女形、廊下へ皆々八房を引いて入る。侍ひ四人は橋がゝりへ入る。伏姬、後を見送りて

伏姬　大輔、今自らが戴かす普門品、其方、嬉しう思やるかや。

大輔　ハッ、有り難き尼公の御厚志。誰れあらう里見の姬君、直々の御讀誦、有り難う存じまする。

伏姬　其方も嬉しう思うてたもるかや。

大輔　兼ねて覺悟は致しながら、如何に宿業なればとて、

この身に思はぬ不忠の汚名。また二つには若殿の御病氣。所詮彼の君を以て、御跡目と評議を立てねば、御惣領の姫君は、あつても斯くの通り御發心。只これのみが心がかり。

ト愁ひのこなしにて泣き落す。伏姫、始終思ひ入れあつて

伏姫　大輔、其方、年は幾つぢや。

大輔　ハツ、即ち今年二十四歳でござりまする。

伏姫　花ならば、まだ蕾とやら云ふのぢやなう。

大輔　陽炎の夕、夏の蟬、今相果てる大輔は、蕾と申すのでもござりますまい。

伏姫　天晴れ悟り。尼法師の自らも及はぬ詞。

大輔　未來を助かる大恩教主。イザ、示しの程を。

伏姫　ほんにさうぢやなう。

〽花橘の香を留めて。

トこれにて伏姫、普門品を開きて

妙法蓮華經、普門品第二十五を、ならば二十四。

大輔　エ、●

ト顔を見る。伏姫、見入つて氣を替へ

伏姫　爾時無盡意菩薩、即從座起偏袒右肩、合掌向佛而是言、世尊觀世音菩薩、以何因緣。

ト讀みながら大輔を見て

金鞠大輔、近う寄りや。

大輔　ハツ。

ト少し摺り寄る。

伏姫　もそつと近う寄りやいなう。

大輔　畏まりました。

トにじり寄つて辭儀をする。

伏姫　コレ、顔を上げや。

〽昔忍ぶの摺り衣、袖のみ濡れて干しかぬる。

ト大輔、少し顔を上げる。伏姫、大輔に見惚れて、手に持つたる經文を落す。大輔ソツと拾ひ、伏姫の手に渡す。伏姫、よい男ぢやと云ふ思ひ入れにて

伏姫　でも、よい男子。若有無量百千萬億、衆生受諸苦惱聞是音菩薩。

トよろしく大輔の側に思はず立寄る。大輔アリ／＼と後しさりする。伏姫、矢張り付き行くゆゑ

大輔　イヤ／＼、姫君には、こりや何となされまするなア。

伏姫　こりや……これは未來の引導ぢやわいなう。

大輔　でも其やうに押しかけてお出でなされましては。

伏姫　ハテ、未來の引導は自ら。この世の引導は其方。コレ大輔、近う寄りや。ハテ、大事ない、もそつと近う寄りやいなう。オヽ辛氣。どうでも其方、尼は嫌ひぢやと見ゆる。そんなら自らは、もう尼になりやせぬわいなア。

大輔　エヽ。

伏姫　アヽ、もうお經も嫌。袈裟も嫌。

ト經巻も袈裟も、珠数ともにそこへ抛り付ける。大輔一々惘りする。

伏姫　大輔、恥かしい事ぢやが、有やうはの、疾から其方に。

大輔　エヽ、なんと仰しやる。

伏姫　眞實惚れて居るのぢやわいなう。

ト顔を隱して云ふ。大輔、呆れたるこなしにて、ソツと伏姫の顔を覗く。伏姫も顔を上げ、双方一時に顔を見合せ、大輔ツツと立ち上がる。伏姫慌てゝ留める。

また獨吟になる。

〽棹の露にも泪にも、玉緒をかけて頼みつる、契りし人は文にのみ、宿世如何なる報いかは。

ト兩人よろしくあつて、キツと留めて

コレ、待つてたも。其方は何も譯を知りやらぬかいなう。それならば猶の事、自らが心の切なさ、聞いて思ひを晴らしてたもいなう。其方の親八郎は、戰ひ毎に譽れを取れど、露聊かも恩賞を受けず、然らば其方が一子大輔を、我が聟となし、分地させんと仰しやつたは、其方も自らもまだ幼ない時。その時八郎はこれを受けず、主君の聟と相成る時は、榮耀の爲と誹りやせん、さればとてこれを否むは、主の恩義を背くに似たりと、この事を書き殘し、八郎はその日切腹。功成り名遂げて身退くとの、八郎が志し感心遊ばし、その縁結びは思ひ止まり、金鞠の悴大輔は、その身の兄とも夫とも、大切に思へよとの父上のお詞。まだ幼な氣の自らを、一旦夫と仰しやつた其方の事、顔見る度に思ひも增り、外の殿御は持つまいと、心の操立て通し、深い願ひのあると云ひ立て、出家を遂ぐるは、輪廻の絆を切らうばつかり。せめて最後の經陀羅尼を瞞かして、自らも暇乞ひする心も、顔見て又亂るゝ煩惱。悟り切つたる自らでも、女子に生れた因果ぢやもの。どうマア獨り殺されう。これ程思ふ心の内、ちつとは屆かぬ事かいなう。

大輔　お志しは有り難けれど、あたたと拙者は主と家來。科極まつたこの大輔。殊には今宵戌の上刻。
伏姫　サア、腹切つて死にやるなら、自らも一緒に。
大輔　ア、、滅相な。
伏姫　君が一夜の情には、妾が百歳の命も、露塵程も惜しみはせぬ。
大輔　おやと申して、其やうな因果な事が。
伏姫　否と云やれば、今爰で死なうか。
大輔　ア、、滅多な事をなされますな。
伏姫　そんなら望みを叶へてたもるか。
大輔　サアそれは。
伏姫　サア。
大輔　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
伏姫　どうぞ叶へてたもいなう。
ト大輔はひつたり抱き付く。チヤン〳〵と初夜の時計鳴る。腰元皆々手燭を持ち出で
舟虫　様子にあれにて聞きました。お教化と思ひの外、打つて變つた戀話し。お姫様の思し召し、日頃の願ひ。丁度合うたり叶うたり。

戸卷　姫君様の戀聟なりや、お命乞ひもなされませう。得てこんな事には寸善尺魔。
雛衣　佛様の泣きあまり、その涙のこぼし所は、アレ〳〵あのお座敷で
手枕　佛臭いお髪を解きあげ、三衣も振り袖と改めて、互ひの固めは枕が仲立ち。
窓居　お床もちやんとしつらうて、しつぽり話す閨の内。
度引　大輔どのを連れまして、又もや御意な變らぬうち。
皆々　サア〳〵、お越し遊ばせいなア。
大輔　おやと申して、拙者めは。
伏姫　エ、、つツとモウ、おぢやいなう。
〽よしや吉野の花も雪も、雲も浪もあはれ世に。
ト唄のうち大輔逃げようとするを、寄つて無理に上手へ押しやる。上手緞張りの障子引拔く。内に結構なる吊り夜着、几帳、括り枕なぞ置いてある。銀燭臺灯り、伏姫この内へ入ると、女形皆々大輔を押しやり、兩人よろしくあつて
伏姫　今宵こそ日頃の思ひ。
大輔　でも拙者めは。
伏姫　エ、、モウ。

と大輔を引寄せる。
稲木　さらば閉帳。
オ、嬉し。
〽あはよや〳〵。
ト几帳を前へ引き廻す。綟張りの障子一面に入れ、皆
皆こちらへ來て
手枕　サア〳〵、どうやら斯うやら、片付いたわいなア。
雛衣　わたしらもこの間、奥でなんなりとして遊ばうわい
なア。
戸巻　ほんに、さうせうわいなう。
皆々　サア〳〵皆さん、ござんせいなア。
ト皆々奥へ入ると直ぐにバタ〳〵にて、上手の障子を
蹴上げ、大輔、伏姫、袋入りの名笛を取り合ひながら
出てゝ眞中の二重へ出て
大輔　ヤア、伏姫君には、なんとなさるゝ。
伏姫　ヤア、錦の袋に入りしは、疑ひもなき嵐山の名笛。
サア、此方へ渡しや。
大輔　錦の袋は大輔が父の形見。必らず粗忽申されな。
伏姫　ヤア、愚か〳〵。自らが日頃念ずる、岩室行者へ誓
ひをかけ、何卒國の敵、寶の在所、知らしてたべと願ひ込
んだる甲斐あつて、合點のゆかぬ其方の心底。わざと教
化の示しに事寄せ、色を以て懐中を探り見るに、案に違
はず名笛の盗賊。父上を討つたるも、其方が業に極まつ
た。サア、その名笛を此方へ渡しや。
大輔　仔細あつて名笛は、奪ひ取つて所持いたせど、季基
公を殺めし事は、存ぜぬ知らぬ。
伏姫　この期に及んで卑怯の云ひ譯。自らが成敗する。覺
悟しや。
トかゝるを大輔、刃物を打ち落し、伏姫を引付んとす
る。この時定包、ツカ〳〵と出て來て、ツイと分け入
る。
定包　金鞠大輔、そこ動くな。
伏姫　ヤア、其方は山下定包。
大輔　すりや、最前からの様子をば。
定包　殘らず承つた。色に事寄せ寶の詮議は、ホ、、ウ、
天晴れ女儀の發明、お出かしなされた。
大輔　伏姫が計略にて、斯くまで包む我が本心、見顯はさ
れしか。エ、殘念や。
定包　イヤ、悔まれな金鞠大輔。この定包は、これより汝
と同腹中。

伏姫　ヤ、、そんなら其方も。
大輔　ナニ、某と同腹中とは。
定包　さりとは本心の明かしやうが、遅い〳〵。某兼ねてこの里見の家を横領せんと思ひ立ち、家中の者は大半身方。
伏姫　ヤア〳〵。
定包　日頃より某を、討たんと計る輩もあらんと、兼ねての防ぎ、大殿の乗り物と、我が乗馬と乗り變つたは、この身の高運。
大輔　それと知らねば朴平が、一矢に射たも勿怪の幸ひ。
定包　朴平は又身共が討取る。後腹病まぬ古今の上首尾。殘るは伏姫只一人、其方に娶合せて、因みを結ばん我が所存。
大輔　ムウ、さては侍從之助どのを毒殺せしも、元よりこなたの計略よな。
定包　季基が面前にて、吃りを治す妙藥と云ひしは、鴆毒を寛に仕掛け、うま〳〵服ませし上、義成が落命。
伏姫　さては弟義成も。ヤア〳〵。
大輔　跡目の願ひに室町どのへ、差上ぐる嵐山の名笛。合體の印、お渡し申す。
定包　イヤ、その名笛は眞赤な似せ物。
大輔　ナニ、その名笛を似せ物とは。
定包　オヽ、サ、嵐山の名笛は、景連に預け、また村雨丸の劍は、弟信時に渡しあれば、何時取らうとも心安し。
大輔　すりや、二品とも、景連信時が所持いたすとな。
定包　即ちこれは一味徒黨の連判狀。披見の上、血判しやれ。

ト懐中の連判狀を出す。大輔取つて

大輔　難なく開き取る寶の行くへ。
伏姫　一味徒黨の連判狀。
大輔　伏姫君。

ト連判狀を伏姫に渡す。

伏姫　大輔。
大輔　ござりませ。

ト伏姫、連判狀を持ち、奥へ走り入る。定包、恟りして大輔にかゝらうとする。大輔、ちよつと立廻とて井戸の中へ飛び込む。定包、ツカ〳〵と井筒に片足、抜き身にて中をキッと見込む。掛け煙硝パッと立つ。ドンと太鼓を打つ。靜かに遠寄せになる。定包、又ツカツカと立ち上がり、向うをキッと見て

定包　ムヽ、さては彼れらが手段にて、我が大望を探らん爲に、大輔、伏姫戀慕の體に見せ、連判狀を奪ひ取らん企みであつたか。ハテ、小ざかしい。

ト此うら揃ひの捕り手八人、窺ひ出て長柄にて

捕手　捕つた。

ト打つてかゝるを立廻りて

定包　間近く聞ゆる遠責めは、我れを取卷く手段なるか。

捕手　捕つた。

トこれより誂らへの鳴り物、中へ遠責め打ち、八人を相手に面白き立廻りあつて、キッと見得になり、見付け一面に下がる。捕り手ポン／＼と中より投げ出し、定包、簾を引破り、書面の通りの見得、よろしく、チョン／＼返し。

造り物、一面の筋塀。矢張り紅白の梅の吊り枝。早舞ひの中へ遠責め掠めて打ち、道具納まると、戸五郎、醋六、東西より走り出で、よき所にて行き合ひ

醋六　ヤア、貴殿は戸五郎どの、怪しからぬ事が起りました。

戸五　されば、伏姫と大輔が計略にて、定包どのゝ叛逆を見顯はしたる樣子。

醋六　こりや我れ／＼も、滅多に油斷はなりますまい。

戸五　なにサ／＼、そこらはぬからぬ定包どの。氣遣ひはござるまい。併し、兼ねて山下氏の云ひつけ。彼の犬神の術を得たる者は、お心當りがござつたかな。

醋六　その儀は拙者が組下に、眼八と申す者、犬神を遣ふ事、妙を得る者がござるゆゑ、呼び寄せ置きました。

戸五　オヽ、それは幸ひ。急ぎその者に申し含め、八房を寵愛する伏姫なれば、彼奴を悩まし、富山の奥へ連れ行く手段は、コレ。

ト囁く。

醋六　すりや、八房に姿を變へさせ。

戸五　早くござれ。

醋六　心得ました。

ト橋がゝりへ入る。赤岩一角、以前の形にて窺うて居る。

戸五　先づこれでよし。この上は定包どのに力を添へん。ソレ。

ト行きかゝる。一角、ツカ／＼と出て、戸五郎を引戻し

一角　惡事に一味の妻立戸五郎。待て。
戸五　ヤア、其方は赤岩一角。
一角　定包景連と心を合せ、主君に刃向ふ人非人め。そこ動くな。
戸五　何を小癪な。者ども。ソリヤ。
ト別の揃ひの軍兵八人出て、一角に切つてかゝる。戸五郎立廻つて、上手へ走り入ると、一角皆々を相手に面白き立廻りあつて、トゞ皆々を橋がゝりへ追うて入る。
ドンチヤン掠めて、橋がゝりより八房の犬、口に笛と景連が首を咥へ出て來る。後より眼八、黑の忍び四天にて、所々に斑ある衣裳にて、ツカ〳〵と出て八房をポンと切り、この首と笛の袋を取つて頷き、口に咥へ、上手へツイと入る。ドンチヤン打上げて、チヨン〳〵返し。
造り物、一面の通りの高二重。舞臺向う金襖。上手筋違ひにお錠口の體。切り襖の所、錠戸になる。二重の下手に伏姫、下げ髮、振り袖、元の伏姫の姿にて、上手に顯定、着附け長社杯にて立ち身。平舞臺下手には八房、矢張り口に景連の首、名笛を咥へ居る。すべて書面の通り。側に胤度、社杯、立ち身にて手燭を差しつけて居る。稻木、雛衣、鈴音、窓居、度引、柏木、戸卷、皆々手燭差出し居る。この見得序の舞にて道具納まる。
胤度　ハテ心得ぬ。いま八房が外面より、咥へて來るは正しく生首。
伏姫　佛門に入りし身を、大輔に戀慕の體に見せたるは、父への孝を立てん爲。合點のゆかぬはこの有樣。
顯定　姫が寵愛のその八房、心ありげな立振舞ひ。もしや家中の者どもに過ちせしか。血汐に染みて面體は分らねども、口に咥へし錦の袋、仔細があらう。胤度、ソレ。
胤度　ハツ。腰元達、水を持たつしやれ。
ト角盥に湯注を持つて來る。胤度、水にて首を洗ひ、口に咥へし袋を取る。此うち矢張序の舞。胤度、首を改めて
胤度　こりやコレ、見覺えある安西景連が首。
伏姫　ナニ、景連が首を何時の間に。
胤度　口に咥へしこの袋。イザ、御覽下さりませう。
ト小柄にて口をこちあけ、伏姫に渡すと、伏姫、袋を

伏姬　ほどきて見て
吹き下ろす方は高根の嵐のみ、音つれ安き秋の山里。一首の歌を蒔繪せしは、紛ふ方なき嵐山の名笛。

ト名笛を顯定取つて

顯定　誠に、こりやコレ嵐山の名笛。

ト首を取つて

こりや慥かに安西景連が首級。ムウ、この二品を八房が何所より持ち歸りしぞ。ハテ、その意を得ぬ。

トこの時チャン／＼打込みにて、向うより井野丹次、股立ち拔刀にて走り出で

丹次　ハッ、顯定さまへ申し上げます。

胤度　あわたゞしい。何事ぢや。

丹次　ハッ、金鞠大輔どの、安西の陣中に押寄せしところ、何者の仕業にや、敵將景連が首討取つて行くへ知れず。聞くより敵は俄かの敗亡。殘りの奴等一人も殘らず討取りては候へども、寶詮議の目當の景連相果てたれば、何國に寶のあるとも知れず、大輔どのにもこの儀に當惑。一旦お知らせ申さん爲、立歸りましてござりまする。

胤度　イヤ、その儀なれば氣遣ひ無用、いま景連が首諸とも、嵐山の名笛も手に入つたれば、殘るは逆臣山下定包、取逃がさぬやう申し聞かせよ。

丹次　然らば此まゝ引返さん。何れも御免。

ト打込みにて向うへ凜々しく走り入る。

伏姬　ムウ、そんなら最前自らが、身に迫る難儀の事を云ひ聞かせしが、その恩を返さん爲、景連が屋敷へ忍び込み、寶諸とも取返しておぢやつたかいなう。

顯定　假初めの畜生ながら、姬の難儀を思ひやり、八房が働らき。ハテ、愛い奴ぢやなア。

胤度　斯く寶手に入るは、姬君の御高運。八房の手柄。オオ、出かした／＼。

顯定　イヤ、この上は義成は、愛妾玉梓に出來たる幼な子義實を以て、里見の世繼。伏姬も安堵しやれ。

伏姬　エヽ、忝ない。これと云ふも八房の働らき。ソレ、腰元ども、八房を連れて行き、褒美を取らしや。

皆々　畏まりました。サア八房、立ちやいなう。

ト綱を引く。少しドロ／＼にて、引立てども動かず、伏姬を見詰めて居る。

胤度　コリヤ八房、次へ立て／＼。

ト引立てにかゝるを引拂ひ、伏姬の裾を啣へる。

伏姬　エヽ、何をするのぢやぞいなう。

トこれにて顯定、伏姬を退け、キッと見る。

顯定　ハテ心得ぬ。今この八房が有樣を見るに、內は瘦せ眼落ち、相好變つて常の犬と同じからず。正しく喜怒の情を生じて、主を害する相現はれしは、何にもせよ怪しき次第。イデ試みに某が。

ト長柄の鎗を取り、リウ／＼と扱き、キッと見得になる。小鼓入り合ひ方。

如何に八房、理も非も知らぬ畜生に、問答するは益なけれど、愛する主が恩を知らう。伏姬に執心して、障化をなすとは奇怪至極。キリ／＼そこを立去らずば、目に物見せん、覺悟せよ。

ト鎗にて突いてかゝる。この時藏人貞行、連判狀を三方の上へ載せ出て、キッと留める。

藏人　待つた顯定公

顯定　其方は堀內藏人。

藏人　畜生づれに、手を下さるゝは誤りの程。先づ／＼お鎮まり遊ばされませう。

ト思ひ入れあつて鎗を放す。

顯定　科なき畜生を手にかくるは無益なれど、姬の障化を救はん爲。

藏人　イヤ、綸言は汗の如く、出でゝ再び返らぬ諺。伏姬君お心もなく、假初めのお詞も、犬はなか／＼忘れもせず、姬君のお望みを叶へしは、不思議の條々。

伏姬　成る程、藏人が詞無理ならず。戲むれ事とは云ふものゝ、藺相如が勇ありて、夜光の璧は取り得るとも、返し難きは口の科。實に災ひは門に伏す、犬に似合はぬこの場の仕儀。大功あるも恩賞に、この身を妻と八房が、思ひ込んだるものならん。今更これを變ずる時は、畜生より劣ると云はれん。只何事も前生の、業報と思ひ定め、畜生道へ落ちるとも、政道に僞はりなき、定めの掟は崩されぬ。

藏人　ナニ、すりや八房が功を立てしゆゑ、今さら約束を違へなば、政道を僞はるに似たりと思し召し、現在畜生の八房を、夫と定める御所存よな。

顯定　ホオ、流石の伏姬、天晴れの悟り。これを思へば伏姬の伏の字は、人として犬に隨ふ。これ前表でがあつたよな。

ト皆々愁ひのこなしにて、チッとなる。此うち五十子御前、裲襠にて奧より出かけ聞いて居て、この時ツカツカと前へ出て

五十　コレ伏姫、そんなら其方は八房の犬に、その身を任してまで、家の掟を立ちやるのかいなう。

ト伏姫に取りついて泣き落す。伏姫、愁ひのこなし。

伏姫　母上、因縁事とは云ひながら、情ない身の成行き。

五十　オヽ、道理とも尤もとも、今日につゞまる跡目の評議。紛失の寶のうち、一品なりとも取り得ずば、御上使への云ひ譯立たず、兎やせん斯くととつ追ひつ、思案に胸もふさがるうち、又もや其方がこの災難。後に殘つたこの母は、どうなると思やるぞいなう。

伏姫　母上のお悔みはお道理なれど、何事も前世の宿業。今日につゞまる家の大事と、心一つに八房へ、云うたる事の誠となり、畜生道へ生きながら、導かるゝ因縁事。自らは、よう諦らめて居りますわいなア。

五十　オヽ、道理ぢや、可愛やなア。

伏姫　八房が手柄して、名笛再び元へ戻り、國の敵の亡びる上は、室町どのへ少しの云ひ譯。また跡目の事は伯父君様が、在しますれば氣遣ひなし。今ぞ誠の菩提心。

ト合ひ方になり、伏姫、水晶の珠數取上げ、戴く。少しドロ／＼にて、珠數の文字替りし心にて、伏姫、いろいろと見て恟りして

ヤヽ、こりやコレ珠數が。

トいろ／＼眺め見て

母上様、藏人も、この珠數の文字を見て、迷ひを晴らして下さりませいなア。

ト珠數を五十子御前に見せる。藏人これを取つて見て

藏人　誠にこりや、今までありし仁義八行の文字は消えて、如是畜生發菩提心と變りしは。

五十　すりや、昨夜自らが、枕に立ち給ひし、洲崎の行者さまの授けし文字。

顯定　オヽ、五十子どのが夢中に授かる文字に化し、伏姫が計らずも、犬に嫁すのも同因同果。

伏姫　三千世界を尋ねても、畜生道へ生きながら、我が身を捨てゝ犬に添ふ、因果な者が又一人、廣い世界にあらうかいなう。

五十　これを思へば唐土の、王昭君が胡國へ嫁す、悲しみはまだな事。

伏姫　身は穢さねど生中に、顔見合さんも面伏せ。この八房が心に任せ、何國如何なる深山へも、この身を伴なはれ、亡き人々の菩提を弔はん。

五十　ヤヽ、そんならこなたは、どうあつても。

伏姫　只一日の孝もなく、世に朽ち果つる自らが、心の内を、御推量なされて下されませ。
藏人　すりや、いよ〳〵八房に伴はれ、御出國のお志しとな。
伏姫　櫻木を碎きて見れば花もなし、かをりは春の今にこそあれ。
顯定　オヽ天晴れ、顯定感心いたしたわいやい。
藏人　コリヤ八房、姫君戯むれのお詞なれど、名笛取り得し功に依りて、汝に取らす。必らず身に過ちなきやう、お供申せ。
五十　それ〳〵、せめて門前まで、姫を見送りや。
腰元　畏まりました。
伏姫　隨分御無事で。
五十　其方も健で。
顯定　やがて逢ふべき時節もあらう。
伏姫　おさらば。
皆々　さらば。
胤度　ソレ、姫君のお供召され。
皆々　ハアヽ。
ト唄になり、伏姫、八房に伴はれ、後より女形皆々、經机經卷、料紙硯を持ち、後より社杯侍ひ四人付き添ひ、花道と舞臺にて双方愁ひのこなしにて、靜かに向うへ入る。五十子御前、後見送り
五十　兄上、藏人、悲しい別れをしましたわいなう。
ト泣き落す。この時バタ〳〵にて、橋がゝりより照武、小次郎、社杯の上を刎ね、走り出て
二人　何れも、これにござりましたか。
藏人　蟇崎照武、牡蠣崎小次郎、あわたゞしい、何事なるぞ。
照武　ハツ、侫臣山下定包、廣庭へ引出し、召捕らんとせし所、家中の者は大半味方。
小次　手ひどく働らき、攻めあぐんで見えますれば、金鞠大輔と一手になり、只今戰ひ眞最中。
照武　この趣き、言上仕りまする。
藏人　よし〳〵。この上は御上使のお立ちの後にて、某も加勢いたさん。小次郎には金鞠に力を添へよ。
小次　ハヽ、畏まつてござりまする。
ト橋がゝりへ引返し入る。
藏人　また蟇崎照武どのには、伏姫君を伴ひ行きし、八房の後を付け、落ちつく先を見屆け來やれ。

照武　すりや拙者は馬上にて。
藏人　少しも早く。
照武　心得ました。ソレ。
ト凜々しく橋がゝりへ入る。チヤン／＼の時計鳴る。
胤度　ありや最早戌の上刻。
顯定　ナニ、戌の刻とな。この上は上使の役目。
ト五十子御前は名笛、藏人は連判狀、胤度は景連の首と、一品づゝ顯定の前に置きて
五十　名笛の盜賊、安西景連の首討取りて、名笛諸とも室町どのへ差上げるが、延引の申し譯。
藏人　今一品の村雨丸と、大殿のお二方の怨敵、定包の首級は、やがて手に入れ差上げまする。
顯定　ホヽウ、某とても緣に繫がる家門のよしみ。事の落着見屆ける上には、直さま都へ立歸り、室町どのゝ御前よしなに執成し致さん。ヤア／＼、その小兒、これへ伴へ。
すが　ハアヽ。
ト腰元二人にすが埀、抱子を連れ出る。近習大勢付き添ひ出でる。藏人、子を見て
藏人　若殿の御寵愛、玉梓どのは、定包が本心探らん爲、色に事寄せ附け寄つて、定包が爲に敢へなき最期。今際に若殿の事申されしが、すりや、その小兒は、
顯定　これこそ侍從之助が落胤。この程館山の騷動の夜、忍び忍びに當國を巡檢の折から、大掛の山手にて、玉梓が姉たる曳手と云へる女の最期。抱きし小兒に付しある守は、義成より自筆を以て、年號月日を記せし臍の緒。顯定預かり養育せん。また嵐山の名笛、景連が首級諸とも、室町どのへ差上げ、紛失の劍詮議のうち、日延べの儀は顯定が執成し得させん。
五十　エヽ、有り難きそのお詞。
藏人　萬事よろしく顯定公。
顯定　直さまこれより發足せん。
胤度　某は大手先までお見送り。
近習　我れ／＼どもは都へお供。
ト序の舞になる。顯定先に女形三人、子を抱き付き添ひ、胤度、近習皆々花道へかゝる。顯定、抱子を見て
顯定　如何なればこの綠子、父に離れ母に離れ、今また國に離るゝとは、果報拙なき者ながら、顯定斯くてあるからは、兎も角も守り育てゝ、再び家の榮えを見せん。

必らず氣遣ひ致されな。

五十　殘る方なき兄のお情。

藏人　この上ながら御前よろしく。

頼定　承知いたした。五十子、藏人、さらばぢやぞよ。

藏人　ソレ、御上使のお立ち。

皆々　ハア、ゝ。

ト頼定先に皆々付き添ひ、向うへ入る。後に藏人、五十子殘り、愁ひのこなし。この前より酷六、戸五郎、拔刀にて出で

兩人　者ども、ソリヤ。

ト捕への捕り手、八人出で

皆々　動くな。

トきつと取卷く。兩人キッとなつて

五十　主に刃向ふ人外ども。

藏人　うぬら、こりや、なんと致す。

戸五　定包公の計略にて、館の奴ばら皆殺し。

酷六　物な云はせな。ソレ者ども。

皆々　覺悟せい。

藏五　何を小癪な。

トこれにてドンチャン嚴しく、兩人皆々を相手に立廻り。藏人、戸五郎始め皆々を橋がゝりへ追うて入る。酷六窺ひ、五十子に切つてかゝる。薙刀にて五十子、酷六をポンと切つてキッと見得になり、この見得にて兩人よき所へ其まゝセリ下ろす。チョン／＼にてこの道具其まゝ御所返しになる。

造り物、高二重、蹴込みを返すと、一面の岩山となり、この上に二間ばかりの石の洞、向う打拔き眞中に瀧の流れ。兩方峨々たる山の書割り、右二重より花道へ掛けて筋違ひに道をかけ、兩方嶮しき深山。舞臺前、谷川の體、浪のうれ、後に顔の映る仕掛あり、東西に見事なる松の幹、梅の立ち木、同吊り枝、蔦葛纏ひ、下手に程よき岩、人の出る事あり。切り幕の所打拔き。すべて岩山。二重の下手、平舞臺の上手、ともに蘆芒。二重の洞の前に菰を吊り、空より滿月下がり、淨瑠璃出語り臺。いつもの所に並よく並び、瀧の音、一聲にて道具納まる。

ト一聲の謠にて、直ぐに淨瑠璃になる。

〽行く雲の、頃は二月の春の空、消え殘りたる泡雪や、安房の富山と聞えしは、麓に廣き流れを帶び、松柏自

ら聳えて、半腹に一つの洞あり、軒に絡みし蔦葛、昔も今に人や住む、里見季基が息女伏姫は、八房の犬に伴はれ、家を思ひて世を捨つる、世に捨てられてこの山に、籠るは我が身のみならずと、悟れば輕き身の上と、思ひ捨てしぞ痛はしゝ。

ト後めりやす。コイヤイ水の音。よき所にて右の洞の菰落ちる。内に伏姫、書面の形。珠數を衿に掛け、經卷を前に置き、木の葉を寄せて上に坐り、經を讀み居る體。側に硯箱、經机置きあり、伏姫、經を下に置きながら

伏姫　月に半輪の雲もなく、山々は萬樹の蔭、蓼々たる水の音、颯々たる松の聲の外、訪ふ人もなきこの山路。アア、如何なれば味氣なや、安房上總の國主、里見季基が娘と生れながら、親同胞に死別れ、一旦佛門に入りし身を、主の爲に寶を取り得し、八房の犬に伴はれ、この山へ來る折から、母上のお嘆き、別れた時の俤が、目にちらついて忘られず。同じ國にありながら、また一度お顏を見る事さへ、ならぬと云ふは生きながら、畜生道へ落ちた身が、どうマア人に顏が合されう。淺ましい身の成行きぢやなア。

へ返らぬ嘆き繰り返し、又さめ〴〵と泣き給ふ、涙は露と結ぶらん、稍ありて顏を上げ。

アヽ、我れながら不覺の嘆き。何事も宿世の業報。瀧田の館を出づる時、法華經八軸と料紙硯は身に離さず、珠數は猶更にあり、賴む所は神佛、經文讀誦の功力にや、八房も耳を傾むけ、心を澄ます人の如く、自らを見返らず。木の實と蕨を餌食にするが、先刻駈け出でた儘未だ歸らず、彼の關守りの牛佛、犬の經文喜ぶは、古き文にも間々ある事。皆經文の功德に依り、幸ひこの月影に木の葉を拾ひ、偈文を書き、この谷川へ流しなば、未來を賴む御佛の御心に叶ひやせん。オヽ、さうぢや〳〵。

ト一人頷き立ち上がり、硯の水を汲まんとて、空に隈なき月影に、歩み寄つたる谷川の、流れに添うて麓より、笛の音幽かに聞ゆれば、伏姫耳を欹立て給ひ。

トこの淨瑠璃のうち、伏姫、硯を持ち、平舞臺へ下り、前の流れを汲まうとする。この時向うの戸屋の内にて草笛の音する。伏姫、こなしあつて向うを見て

ハテ、心得ぬあの笛の音。この山には昔より、樵木山賤さへ通らぬと聞きたるに、こなたを指して笛の音の、幽かに聞ゆるは、草刈り童の迷ひ入りしか。但しは何者ぞ、

障化の者の自らが心を試すか。兎ても角ても捨てたるこの身。何憚りて逃げ隱れん。如何なる者か、見屆けん。

〽見るや山路の阻道を、牛の脊中に腰打掛け、笛吹きすさむ草刈り童、夜の夜道をいとひなく、牛に任せて歩み來る。

トこの淨瑠璃の切れに、床のめりやす、賑やかな鳴り物を交へ、尤も始終附き笛にて、向うより神童、草苅りの童の形にて、鎌を腰に差し、天鵞絨張りの牛の脊に横乘りにして、草苅り籠を脊負ひ、草笛を吹きながら出で、鳴り物一ぱいに來て、花道にてとまる。牛に任せの淨瑠璃にて納まる。伏姫これを見て

人跡絶えたるこの深山路へ、殊さら夜の道と云ひ、牛追ふ業も心得ず。コレ〳〵童、こなたはいづれの里の子ぞ。

〽樣子聞かんとのたまへば、童子はにつと打笑ひ、持つたる笛を襟に差し。

神童　オヽ、わしはこの山の麓の者。お師匠樣の云ひつけで、藥を取りに來たのぢやわいなう。

伏姫　オヽ、それはマア、年端もゆかいで大儀な事。さうして、こなたの師匠と云ふは、何國の人ぞ。

神童　オヽ、この麓にも居やしやつたが、又或る時は洲崎へ行たり、常には人の病を癒し、人の善惡を見分る易者。

〽もしこの人の藥を飮めば、萬病治せずと云ふ事なし。めどぎを取れば未來を知り、當てずと云ふ事なし、それに仕ゆる者なれば。

ト花道にて牛の脊に居ながら振りあつて

こなたの身の上、よう知つて居る。この國の主、里見季基どのゝ娘御、伏姫どのであらうがの。

伏姫　自らが事を知つて居て、易の道も詳しい樣子。それなれば猶の事、今自らが行く末を、其方、占なうてたもるかや。

神童　オヽ、問はずともこなたの吉凶、詳しう語つて聞かせませう。

〽語つて聞かせ申さんと、牛の脊中を木傳ふ猿、伏姫君の越し方を、今見る如く語りけり。

トこの淨瑠璃にて神童、本舞臺へ來て、下手の竹藪を小楯に、牛の脊より平岩へ踏み掛け下り、舞臺の眞中へよろしく直る。牛は竹に括り付け置いて

そも〳〵御身。

〽岩室の行者へ立てし誓ひこそ、輪廻を離れし出家の願ひ、家の爲とて黑髮の、解けぬ迷ひは八房の。

　トのり。

伏姫　オヽ、その飼ひ犬に伴はれ。
〽この深山へゆくりなく、訪ふ人もなき谷間より、來て鳴く梅の鳥さへも。
　トこの淨瑠璃にて差し金付きの鶯上手の梅の枝に遊ぶ。鶯笛頻りに鳴く。伏姫、梅が枝折らうとする。鶯飛び去るに、伏姫こなしあつて枝折り取る。
〽人影させば立去りて。
　トのり。
折り取るまじとありとしの。
〽なしとて花に笑みを添へ、渡し給へば遠慮なく。
　トこれより床、二上りのめりやすになり、伏姫、梅が枝を神童にやる。神童これを取りて平舞臺へ下りる。床、變つためりやすになり、この時上手の梅へ鶯また來て遊ぶ。神童これを追ふ。鶯、下手へ飛ぶ。この仕組みよろしく
〽この梅による八房の、いと不思議さは數々の。
　ト伏姫よろしく床のノリになり
オヽ、去年の秋より人知れず、月の廻りも重うなり、胸苦しいは何ゆゑぞ。
〽それこそお腹に懷胎して、身に孕む事早六月、いやこの身に夫はなきものを、何とて胤を身ごもるべき、あゝをかしやと袖おほふ。

神童　イヤ、男ないとは云はれまい。
〽八房と云ふ夫の出來、例へ契りはこめずとも、間々ある慣ひ唐土の、宋の后の黑鐵柱、近くは近江の賤の女が、積に惱んで撫でる手に、手孕み村の名を殘す。
伏姫　そんなら常に愛情の、その心が通じてや。
神童　自然と懷胎、疑ひなし。
伏姫　そんならアノ、ヤアノ\く……ハア、
〽姫君あるにもあられぬ思ひ、心亂れつ忍び兼ね、聲を限りに泣き給ふ。
　ト神童二重舞臺へ寄つて、伏姫を介抱して
神童　その歎きは尤もなれど、まだ\く申す事こそあれ。
〽その八房は館にて、こなたに先立ちこの世を去り、種々の手柄を殘し置き、その生れ子の八犬士、法華經の功力にて、里見の家に譽れを上げん大勇士。
今しも守護の八房こそ。
〽障化の入れ替り、御身に仇こそなすべけれ、その珠數こそは授かる守、諸除怨敵悉皆罪滅、必らず油斷し給ふ

な。
我れは仙師のお待ち兼ね。
〽さらば〳〵の聲諸とも、曳き綱させいほらせいと、牛の鼻面玉葛、追うて行くへは春霞、消えて形はなかりけり。
ト大ドロ〳〵にて伏姫、留めるを振り切つて、牛とともに神童を碪にて消す。
〽姫は無明の眠り覺め、猶疑ひは晴れ間なき、涙の雨にむせ返り、嘆き沈ませ給ひしが。
伏姫　さても〳〵情なや、淺ましや。畜生連れの八房が、胤を宿すの身孕りしのと、エヽ、恥かしや、口惜しやなア。さるにても今の童子こそ不思議なる、我が行く末と越し方とを、今見る如く告げ知らせ、霞の如く消え失せしは、もしや神佛の化神なるか。思ひ合せば館にて、寶を取り得し誠の犬は相果て、この深山へ伴ひ來る八房こそ、障化の物であつたよなア。抑々なんの恨みありて、この身に祟をなすやらん。思へば〳〵誠の畜生道、我が身をつんざく劍の山路、生き長らへて恥を見んより、障化の八房手に掛けて、自ら共に自害し、お腹の中の怪しみを開き、悟りの道へ導き給へ。

〽心に覺悟極めつゝ、默念として座し給ふ。
ト伏姫、珠數にて拜む。ドロ〳〵になり、八つの玉の文字、變る思ひ入れにて、キッと見る。床と囃子打ち合はせの誂らへの合ひ方になる。
ハテ、怪しやな。元この珠數は自らが、幼少の時室の行者、姿を化して授け給ひし以來、八つの玉に仁儀禮智忠信孝悌の八つの文字。この禍ひを受けし折、如是畜生發菩提心の八字と變りしが、再び元の八字に戻りしは、さては佛果を得さしめ給ふ印なるか。エヽ、有り難や、忝なや。猶も成佛得脱を、なさしめ給へ〳〵。
〽いで〳〵身をも清めんと、立ち寄る流れの水邊に、映る月影怪しの面。
ト伏姫、舞臺端の流れへ手水使ひに行く。この時、前の流れ、仕掛けにて犬の顏、水に映る。伏姫、ハッとこなし。あたりを見て、八房も犬ゆゑ悔りして、犬の顏になると思ふこなしにて、此うち始終薄ドロ〳〵。
•
〽ハッと驚ろき飛び退きしが。
トよろしく飛び退く。床と囃子の打ち合はせ、誂らへの合ひ方になる。こなしあつて
ハテ、不思議や。いま水に映りし我が姿、常にはあらで

八房の、形と變り見えたるは。ハテ……ムウ。
ト手に持ちし珠數を衿に掛けて又水を見る事。
〽ときめく胸を撫で下ろし、怖々ながら差覗けば、映るはおのれが影ばかり。
ト矢張り床の打ち合はせの合ひ方。伏姫、手に觸る珠數に心付き、いろ〳〵思ひ入れ、心落ちつかし、再び覗いて
ヤア、この珠數を衿に掛くれば我が面影。エヽ、有り難や。猶も家の榮守らせ給へ。身の終りを守らせ給へ。
〽珠數押揉んで禮拜し、覗けば又も變化の姿。
ト珠數を手に持ち、後に隱し、水を覗く。また薄ドロドロにて、水に犬の顏映る。
〽折からさつと嵐につれ、谷川の流れを切つて、馳け戻る八房が、自然生なる山の芋、啣へながらに尾を振つて、姫に食事を進むる有樣。姫は手早く珠數にて打つ、打たれて犬のたぢ〳〵〳〵、續いて打たんと追ひ廻し〳〵、岸の岩根にすつくりと。
トこの淨瑠璃のうち、山颪しの鳴り物烈しく、二重の上手より、八房、山の芋啣へて直ぐに平舞臺へ下り、伏姫にそばえる。伏姫心得、珠數にて打つ。八房、二重へ逃げて上がる。伏姫追うて行き、經卷を開き、犬に差しつける。犬は切り穴へ消えて、掛け煙硝バツと立つ。二重の下手の岩、仕掛けにて割れる。眼八、犬の頭を首に頂き、四天、異形の拵らへにて出て、直ぐに伏姫に切つてかゝる。立廻りよろしく、この間犬ドロドロ、燒酎火燃える。
〽眺め入つて立ちたりしが
ト床の亂れになり、誂らへの立廻りよろしく、伏姫、キツと見得になり
さてこそ〳〵、家の大事と心の空虛に附け込み、里見家に怨みある者、八房が姿に變じ、自らが家の根を斷ち、葉を枯らすに極まつたよなア。
トきつとこなし。眼八—なにを—と又切つてかゝる。誂らへの立廻り、いろ〳〵あつて、キツととまる。直ぐに囃子早めて、合ひ方、山颪し烈しく、雪大分降る。
アレ〳〵〳〵、今降る樹々の淡雪は、安房の里見の家の恥。元よりこの身は夫もなく、その妊娠を此まゝに朽ち果てなば、いつかは開かん迷ひの種。さうぢや〳〵。
ト懷劍にて、眼八を突きのめして、直ぐに腹へ突ツ込む。チヨンと黑幕下ろす。舞臺二重の奥深に一面の張

り物を被せて、此うちへ稲妻やうの光り物、篝の仕掛けにて見せる。

ト伏姫、後向きにて、これをキッと見て

ア、嬉しや。最早童子が教への詞、雪に雪ぐの辭あつて、神の結びし腹帶も、解けてぞ殘る八犬士。世の大勇士と仰がれて、里見の家の柱礎ならんと、神の示現に僞はりなくば、今ぞ晴れ行く心の曇り。悟れば迷ひの雲もなく、ア、嬉しや、喜ばしやなア。

トちつとこなし。眼八、起き上がつて切つてかゝる。

〽常はかよわき女氣も、一念凝つたる一期の力、大の男をゐのころ投げ、互ひに挑み爭ふ折から、撲と響きし筒音に、かゝりし件の曲者は、犬骨折つて高股を、討たれてそこへのたばり伏す、姫も痛手に堪り得す、其まゝどつと伏し轉ぶ。

ト淨瑠璃にて立廻り。好き程に本鐵砲の音して、伏姫眼八、これに中てられて、ドッと倒れる。これにて向うの張り物黒幕、東西ともに上がる。

〽千茅芒も踏み分け〳〵、右手に鐵砲引提げて、現はれたる金鞠大輔、谷間をきつと見渡せど、狹霧も深く忍び足。

ト花道よき所に芒原を出し、この中より大輔、書面の形、鐵砲を持ちて、本舞臺をキッと見る。床三丁めりやす、大輔窺ひながら本舞臺へ來て二重へ上る。

〽探り躓く隙化の亡骸、心に頷づき蹴り返し、見やる側には、今際の伏姫、こは仕損ぜしか殘念やと、呆れて共に茫然たり。

ト大輔、眼八が死骸蹴飛ばし、伏姫を見て仰天のこなしにて、後にどつかと坐る。

〽始終とつくと物蔭より、窺ひ見透かす二人の曲者。

ト大輔キッと伏す。とまりにゴンと本釣り鐘。上手の蘆原を開き、定包、好みの形、忍び頭巾にて悠々と二重より下手へ下りる。大輔、涙を拂ひ、定包の鐺を取る。ちよつと立廻りになると、平舞臺の下手蘆原より氏元、棒茶筅狩倉の形にて弓矢を持ち出て、この中へ入る。双方見得になる。夜神樂をかぶせたる誂らへのだんまり鳴り物になる。三人云ひ合せの立廻りよろしくあつて、二重の伏姫、起き上がり、苦しみながらこの中へ入る。定包、大輔、刀を拔き合す。伏姫、これへ珠數かける。この珠數、空へ投げる。左右の窓蓋一時に下りる。舞臺の四人、一時に空を見る。八つの玉

バッと空に現はれる。これを思ひ／＼に見込むとチョンと木の頭。これにて左右の窓蓋、一時に引き上げる。双方引ッ張りの見得よろしく

幕

ト幕の外へ「これより次幕に至つては十三ヶ年計り相立ち候ふ狂言、左やうに御一覧下されませう」と書きたる貼り紙の口上書き出す。

三段目　簸川村の段　番作内の段

役名――荘官、蟇六。同女房、亀篠。同娘、濱路。下女、お殿。同、お鶴。同、お品。下男、脊助。甘利掠藏。木尾叔內。百姓、糠介。畑上語路五郎高成。巫子、榊。百姓、畑六。犬塚番作。同一子、犬塚信乃戍孝。

造り物、向う奥に淺黄幕、上手に鳥居の出しかけ、注連を引き、この次に石垣、裾は草土手、前に石燈籠、下手藁屋根の綺麗なる茶店、斜かいに見せて、横手に竹垣、水引、暖簾、葭簀にて一間床、味醂、燒酎、白酒の壺、駄菓子を賣る店、この側に、簸川村、若中休息所と書いたる張り札を立て、所々に櫻の立ち木、程よき所に御神燈と記せし長提灯を、雨覆ひつけにして五張並べ、その外いつもの御神燈の提灯数多並べ、舞臺眞中に青竹にて見付け臺を飾り、村の若い者大勢、この見付け臺を飾り居る見得。神次郎、権次郎、着付け輕衫にて共々手傳ひ、造り花を結びつけ、提灯を吊り、木綿の天幕張りなどして居る。この側に鳴平、茶店の亭主、前垂れがけにて、そこらを片附け居る。すべて田舍祭りの拵らへよろしく、賑やかなる鳴り物にて幕明く。

神次　サア／＼、それをそちらへ引ッ張つたり。

ト木綿を廣げる。

若衆　オッと合點ぢや／＼。

ト端を取つて、水引にかける。

神次　オヽ、其やうにしたら、花が皆落ちてしまふわいの。

皆々　靜かにせう／＼。

ト皆々ワヤ／＼云うて居ると、向うより糠介、百姓の

捹らへ、ばつち尻からげにて、青物を一荷にして、啣へ烟管しながら出て來て、本舞臺へ來て、荷を下ろし

糠介　皆の衆、えらう捹らへが出來るの〳〵。

鴎平　隣り村の糠介どの、お前の方も祭ぢやが、何も出さぬの。

糠介　オイナゥ、前方には話しもごんしたが、ナニお前、若い者めが、とんと心が揃ひやんせん。

神次　イヤモゥ、こんな事と云ふものは、神いさめぢやゆゑ、心が揃はぬと、なか〳〵出るものぢやないて。

神次　イヤ〳〵、若いもんらが擧つても、あの村ばかりは自由に出る事ではないてや。

皆々　そりや又なぜに。

權次　大庄屋の蟇六どのが、どう云や斯う云ふと、酢でも酒鹽でも行くこつちやないで、ナウ糠介どの。

糠介　ソレイナウ、あの仁には皆懲り〳〵ぢや。

皆々　ハ、、、、、。

鴎平　時にこなさん、これをどこへ持つて行かんすのぢや。

糠介　これかの、こりやおれが畑の作物ぢやが、御神事の日にや、毎年變らず、この宮の神主様が買うて下さるゆゑ、今年も變らず持つて來やんしたてや。

鴎平　ハテ、一年に一度の祭ぢやに、こなたも休んだがよいに。

糠介　イヤモゥ、祭ぢやとて喰はずに居られず、それで據なう働らくのぢやで。

鴎平　エ、、こなさんも慾張つて、蟇六どのに似て來たの。

糠介　何を云はんすやら。ドリヤ、お神主様へ行て來うわい。

ト鳴り物きつばりとなり、糠介、上手へ入る。向うよりこの鳴り物にて、榊、着流し、日傘をさし、下男一人袱紗包み持ち、附いて出て、花道にてとまり

榊　久助、わしをお宮へ送りやつたら、直ぐに去んで、およしに彼の所へ、ま一遍行てたもと云やえ。

久助　ハイ〳〵、畏まりました。

ト本舞臺を見て

榊　オ、、練り物の見付け臺が出來てある。

久助　ア、、綺麗な事でござりまする。

榊　サイナウ、ドレ、側へ行て見ませうか。

ト本舞臺へ來て

どなたも御苦勞でござりまする。

ト挨拶する。皆々矢張り右の飾り物拵らへながら

皆々　ハイ〳〵。

神次　オヽ、榊さま、今日は御苦勞でござりまする。

榊　神次郎さん、お前、お世話人ぢやさうな。

神次　ハイ、モウなんぢや譯が知れませぬ。

榊　イエ〳〵、斯う云ふ世話と云ふものは、まめになけりや出來るものぢやござんせん。

神次　時に榊さま、お前、去年から來てぢやが、榊さまと云ふ名は巫子樣ぢやに、ついに神樂所に居やんすを見んが、一體どう云ふものでごんす。

榊　サイナア、聞いて下さんせ。わしや巫子と云ふものではござんせん。このお宮附きの榊と云ふは、私しが伯母樣、年に一度の神事さへ勤めればそれで濟む、下地からの定め。所に、この春死なしやんしてから、跡取る者がないゆゑ、據なう頼まれて、わたしはちつとの間の、代り役でござんすわいなア。

檀次　成る程、さうであらうとも。巫子で居ては、ソレ隣り村の壇

ト榊ハツと思ふこなしあつて、わざと

榊　エヽ、だんとは、何でござんすえ。

檀次　だん〳〵團子、隣り村の團子は、旨い事ぢやと云ふ事。

榊　エヽ、こちやどうぢや知らぬわいなア。

ト顏背向ける。

神次　サア、飾りが出來た。片附けうぞ。

皆々　合點ぢや。

榊　ドレ、わたしも神樂所へ行きませうか。

ト鳴り物きつぱりとなる。銘々捨ぜりふにて榊も供を連れ、皆々一緒に見付け臺を舁きながら、鳥居の内へ入る。鴫平は殘りて

鴫平　ねつから門が騷がしいので、埃だらけぢや。

トそこら片附けて居る。神樂になり、向うより繪笹、庄屋の女房の拵らへ、着付け前帶抱へにて、お連れ、上の下女の拵らへにて、日傘をさしかけ、次に濱路、娘の子、振り袖、結び下げ。お殿、下女にて、日傘さしかけ、後よりお鶴、誂らへの箱に猫を入れて持ち、お品は惣袋持ち出る。この後に椋藏、粗内、袴、一本差しにて、春助、小者の形にて、ぼつとせ、辨當包みな

脊負ひ出て、花道よき所にとまり
女皆　モシ、お家樣、あなた、お辛どうござりませう。
龜笹　イヤ／＼、わたしは何ともないが、いとや、わが身は、定めて足が痛むであらう。ちつと負うてもらやいなう。
濱路　イエ／＼、賑やかなで、辛どい事はござりませぬわいなア。
龜笹　さうかや。時にお二人の衆ども、この宮の神事は、なんと賑やかではないかいの。
椋藏　なか／＼左樣でござりまする。別して當年は練り物が出來れば、囃子を見ようと思うてか。
粂内　殊の外群集でござりまするて。
龜笹　サア、それぢやに依つて、砂埃が立つて、頭が眞白にならうかと、大抵氣にかゝる事ではない。
ト頭を撫でゝ見る。
春助　お家樣、お前は頭が氣にかゝるか知らんが、おら又この辨當が氣にかゝるで。
椋藏　成る程、持ち重りがするゆゑ。
春助　イヤ、早う食ひたうてぢや。
れん　エ、、門中でそんなさもしい事を云ふものかいなア。
椋藏　ホ、ウ、彼れこれと云ふうち鳥居先。
粂内　幸ひあれなる茶店。
れん　暫らくお休み
皆々　なされませいなア。
龜笹　オ、、さうしませう。サア、おぢや／＼。
ト鳴り物きつはり、皆々本舞臺へ來て、上手へ濱路、その次へ龜笹、お連、お殿、椋藏、粂内、お鶴、お品、下手に春助、各々居並ぶ。鵙平、茶を持ち出て
鵙平　これは大塚のお家樣、よう御參詣なされました。
龜笹　オ、、鵙平どの、今年は作もようて、御神事も賑はひますの。
鵙平　ヘイ／＼、有り難い事でござりまする。どなたもお一つ上がりませ。
ト銘々に茶を持ち行く。お鶴の抱いて居る猫を見て
時に、をかしな事をお尋ね申すやうなれど、いつお見請け申しましても、猫を連れてお歩きなされまするが。
龜笹　イヤ、そりや斯うでござる。こなた衆も知つて居やる通り、元わしが父親と云ふは、安房の國里見のお家來大塚匠作と云ふ一廉の侍ひ。里見のお家沒落の前の年、

父御は死なれ、跡目は弟の番作に立てさせ、この大塚は先祖より領地もあり、それをわしが片附け、領に取つて、蟇六どのと云ふ養子を取つて、夫婦が悪心持たねば、今五ケ村兼ねた庄屋の役。また弟の番作は、主人のお家亡びたる時、討死もする事か、どこの國へか逃げて行くへ知れず、女房を拵らへて産ましたが、あの悪さ者の信乃親子三人。この大塚へ戻つて來れど、身に誤まりがあるかして、姉の元へもよう來ず、村中頼んで親子三人が、うろ／＼暮らし。貧乏を苦にしてやら、弟嫁の手束とやらも死んでしまふ。生き殘つて親子の外に、與四郎とやら云ふ飼ひ犬、それは／＼手にも足にも合ふ事か、あたり近所の犬を咬み伏せ、村中を暴れ歩けど、番作は知らぬ顔する横着者。胤腹は一つなれど、心はわしと裏表。村の家へ氣の毒ゆゑ、時々わしが腹立てると、旦那どのが云はつしやるには、犬は百姓にいらぬ物、益あるものを飼ふがよいと、それから猫を飼ひ始め、いつとなしに不便さまさり、可愛うて／＼、今ではこの娘の濱路が、弟とも思うて育て居ますのぢやわいなう。

春助　ハアヽ、それで此方の村中が。お家様の事をえらいにやん作者ぢやと云ふのか知らん。

との　アレ、又ひよかすかと、黙らしやんせ。

春助　オツトセウ。

ト口を押へる。この時、茶屋の内にて屋體囃子になる。

椋藏　オヽ、こりや賑はしい事ぢやワ。

籾内　コリヤ鵙平、其方が内と見える。

鵙平　ヘイ、村の若い衆が練り物の打ち囃子、わたしの所で稽古して居られまする。

椋藏　其方が内で稽古かいやい。

鵙平　いと様のお慰みに、御覧じましたら、どうござりまする。

龜篠　ほんに、こりや好い慰み。いと、わが身、見せてもらやるか。

濱路　アイ、わたしは見たうござりまする。

龜篠　そんなら大事あるまいかの。

鵙平　モシ、そこが大庄屋様の御威光でござりまする。

春助　そりやこそ、常からぽん／＼云ふのは爰ぢや。

籾内　エヽ、てんまめ、黙り居ろう。

春助　オツと、黙るぞ／＼。

椋藏　サア、御内室、濱路さま諸とも。

皆々　お越しなされませぬか。

龜笹 ても氣の毒でならぬわいなう。

ト鳴り物きつばりになり、この人数皆々茶店の内へ入る。鳥刺しの鳴り物になり、鳥居の内より三太、前髪の脊中に子を脊負ひ、この外八九才より十一二才までの子供十七人、めんない千鳥しながら出で

皆々 めんない千鳥。

三太 手の鳴る方へ／＼。

ト口々やかましう云ひながら、捉まへ歩く。鴨平、出て

鴨平 エヽ、子供等、やかましい／＼。淩ひの邪魔になる。皆外へ行から／＼。

ト云ひ捨てにして入る。

三太 ヤイ／＼、やかましう云ふなと、お家様が叱つてぢや。皆黙れ／＼。

ト子供皆々靜まる。合ひ方止む。

寅松 又吉よ、まだ信乃は出て來んな。誰れぞ行て呼んで來い。

岩松 イヤ／＼、内へ誘ひに寄つたら、まだ手習ひをしまはぬゆゑ

皆々 よう行かぬと云うて居た。

ト三太、向うを見て

三太 イヤ／＼、あそこへ信乃が出て來たわい。

皆々 オヽ、イ／＼。

ト招く。戸家の内にて

信乃 オヽ、イ／＼。

ト賑やかなる鳴り物入りの合ひ方になり、向うより信乃、幼な立ち、信乃繪面の通り、振り袖、女子の形にて、與四郎犬を繩附けて、引ッ張りながら出る。

三太 信乃、いつまで手習ひして居るぞい。

皆々 最前から待つて居たわい。

信乃 オヽ、さうか。おれな、最前から來たいけれど、皆書いてしまはんと、父様に叱られるわい。サア／＼、皆來い來い。

ト子供皆々信乃の側へ寄る。

さうして、今まで何して遊んで居た。

三太 こちらな、今までめんない千鳥して居た。

信乃 盲目鬼は面白うないワ。

寅松 なんぞして遊ばんかい。

信乃 そんなら斯うせう。いつものやうに、軍事して遊ばうか。

皆々　さうせう〳〵。

トこれにて下手の竹垣を潰し、人数に合して大きな子には短かい竹、小さい子には長い竹一本づゝ持たせ

信乃　コリヤ、皆これを持て〳〵。

トあたりを見廻し、茶店の端にある塵叩きを見て、取つて來て

サア〳〵、兩方へ別れい〳〵。

ト子供を兩方へ分けて

この與四郎はおれが馬ぢやぞ。

ト犬に跨がり

サア、この采配を振り廻すやうに、附いて廻れよ。ソリヤソリヤ。

ト大小入りの合ひ方になり、采配を振る。皆々合點ぢやと、附いて廻り、信乃のぐるりを廻り、直ぐに花道へ行き止つたり。

ト埃叩きを下げる。皆々花道へ止まる。

ソリヤア〳〵。

ト采配上手をさす。子供皆々先へ戻る。

サア、これから突きこくらせうか。

ト犬より下りる。

皆々　さうせう〳〵。

信乃　そんなら斯うせい〳〵。

トまた子供の大小を分けて

ソリヤ行け。

ト采配振ると、右の竹にて突き合ひ

皆々　ソリヤア〳〵〳〵。

ト一時に竹にて突き合ひ、長き竹の子供、大きな子供を突き伏せる。小さい子供一時に

皆々　エイ〳〵オヽ。

ト皆々喜ぶ。

信乃　さうぢや〳〵。わいらも大きうなつて、軍する時になんでも今の竹のやうにして、あつちが強うても、一人や二人は役に立たぬ。なんでも人をたんとにして、長い物で滅多無性に突き倒したれば、子供でも滅多に負ける事ぢやない。皆合點か。

三太　信乃よ。これからいつもの土手の上で、山の大將して遊ばうかい。

信乃　イヤ〳〵、おりや又、父樣の藥取りに行かにやならぬ。

岩吉 もつと遊んでから行かれい。
信乃 そんなら、もちつと遊ばうか。
皆々 さうせい〳〵。
三太 これから蛇の尾取ろせうか。
信乃 それせう。サア、皆段々に並べ〳〵。
ト子供皆々、段々に帯を持ち並び
皆々 蛇の尾取ろよ〳〵。
トまた鳥刺しの合ひ方にて、やかましう云うて遊ぶ。下手茶店より、椋藏、籾内、出で
籾内 これは又やかましい餓鬼めらぢや。
椋藏 エヽ、やかましいわえ。
籾内 皆あつちへうせう。
ト叱りつけると、子供皆々靜まる。信乃、ヂッと兩人の顏を見て
信乃 エヽ、だんない。蛇の尾取ろ〳〵。
トやかましう云ふ。
椋藏 ヤイ〳〵、うぬら、やかましいと云ふに、靜まり居らぬか。
籾内 見りや皆この村の子供、今日は當社の神事、大庄屋の蟇六どのゝ御内室始め、我れ〳〵まで參詣。
椋藏 神いさめの練り物囃子を聞き居るに、ザワ〳〵とやかましい〳〵。
籾内 うぬら、外へ行かねば叩き殺すぞ。
ト子供追ふ。
皆々 ソリヤ〳〵。
ト逃げうとする。信乃、留める。
信乃 コリヤ、逃げない〳〵。怖い事はない。待て〳〵。逃げずと爰で遊べ〳〵。
ト子供皆々後へ戻る。
籾内 ヤイ〳〵、うぬは番作が子悴。おのれ、年端も行かぬ形をして、いつとても口答へ。怖くないとは、よう吐かした。うぬ、ま一度云うて見され。
信乃 オイ、村のおつ様、もう一遍云ふのかえ。なんの怖からうぞえ。
籾内 ナニ、怖くないとは、そりや又どうして。
信乃 譯云うて聞かさうか。コレ、わしらが爰に居るのは、なんぢやえ。
椋藏 知れた事。遊んで居れば、わいらも慰みであらうがなう。
信乃 そんなら又、お前方が練り物の囃子聞いて居るのは、

なんぢやえ。

籾内　あれか。あれも慰みぢや。それがどうした。

信乃　ソレ見やんせ。お前方も慰み、わしらも慰み。其うちに子供の方は遊ぶのが商賣ぢや。

椋藏　ナニ、商賣ぢやとは。

信乃　サイナ、こん中にも、子守りして居る者もあるワ。泣かしたら惡い依つて、何なとして遊ぶのぢや。それぢやに依つてマア商賣同然。お前方は村に事が出來るか、陣代の殿樣に何ぞ事があつたら、行て働らくが商賣。練り物見るが商賣かえ。

籾内　ヤア。

信乃　ソレ見やんせ。そんなら子供の遊ぶ商賣をやめて、殺されるものならば、皆殺してもらはうやい。

椋藏　サアそれは。

信乃　皆殺されい〳〵。

皆々　オヽ、さうぢや。切つてもらへ〳〵。

ト子供皆々兩人の側へ體を突きつける。兩人持てあますこなし。此うち糠介、籠かたげ、啣へ煙管にて、上手より出かけ、これを見て恟りして、この中へ分けて入る。

糠介　コリヤ、子供等よ、どうしたものぢや〳〵。

ト皆々を支へる。信乃、糠介を見る。

信乃　コリヤ待て〳〵。糠介のおつ樣ぢや〳〵。

ト云ふゆゑ、皆々片脇へ寄る。椋藏、籾内擬勢する。糠介、留める。

糠介　椋藏さま籾内さま、樣子は最前から聞きましたが、子供等の事、モウ〳〵、料簡しておやりなされませ。

椋藏　オヽ、糠介かいやい。高が小供なれば、何にも此方に頓着はなけれど

糠介　イヤ、左樣な事ならよけれども、もう堪忍してやらつしやりませ。コリヤ、子供等も、よい加減にほたへて置けいやい。

皆々　アイ〳〵。

籾内　時に椋藏どの、龜笹どのにも、お待ち兼ねでござらう。

椋藏　成る程、我れ〳〵も今の後を、もそつと承はらうではござらぬか。

籾内　左樣に致さう。糠介、世話であつた。

糠介　なんのお前樣。

椋藏　籾内どの、お出でなされい。

ト神樂きつぱりになり、兩人茶店へ入る。糠介、信乃を見て

糠介　信乃よ、手の痛む父樣を拋つて置いて、また惡あがきかい。

信乃　イヤ、おりやお宮參つて、戻りにお藥を取りに來たのぢや。

糠介　ソレ見い。用があつて來ながら。サ、、ちやと行て來い〳〵。

信乃　アイ。皆さん、そんならまた明日遊ぼう。

ト犬を引いて行かうとする。

糠介　コリヤ〳〵、その與四郎を引いて行たら、また道草で隙が入る。其奴はおれが預かつて連れて去ぬ程に、われ一人ちやつと行け。

信乃　ムウさうか。そんなら大事の犬ぢやけれど、預ける程に、安產連れて去んで下されや。

糠介　ハテ、よいわいやい。

信乃　宮へも連れて參つて下されや。

糠介　サア、合點ぢやわい。

信乃　怪我さして下さるなや。

糠介　ハテ、よいと云ふに。

信乃　ドレ、お藥貰うて來うか。

ト早き唄になり、信乃、橋がゝりへ入る。糠介、後見送り

糠介　悧巧なやうでも、どうやらすると椀白でならぬ。時におりや、今お宮からの戻りなれど、信乃めがあのやうに賴んで行たりや、この犬を連れて參らざなるまい。

三太　そんならおいらも一緒に參らう〳〵。

皆々　參らう〳〵。

トわや〳〵云ふ。糠介、困つたこなしにて

糠介　わいらも來るのかい。來る事は構はぬが、ほたえ散らかして、犬を煽てるには困るわえ。

皆々　ホイ〳〵。

ト皆々ちよろかす。

糠介　ソレ〳〵、口もつかぬに、もうそれぢや。

皆々　ホイシ〳〵。

ト糠介、留めるうち、犬は下手へ行かうとする。

糠介　コリヤ、お宮へ參るのぢやわい。

ト綱を引ッ張る。犬、ワンと云うて、糠介に咬みつかうとするゆゑ、悄りして

ハアイ。

ト綱を放す。犬は勢ひ込んで下手へ駈け込む。子供皆皆、ホイシ／＼と云ひながら、追ひかけ入る。

これはまた困つたものを預かつたわい。

ト困つたこなし。後追うて入る。あと神樂にて向うより蟇六、着付け袴、羽織、一本差し、後より語路五郎、野袴、ぶッ裂き、大小、次に下男一人、尻からげ、上下、挾み箱持ちて、風呂敷包みつけ、花道にて

語路　これはよき所でお出會ひ申した。

蟇六　左樣でござる。今日お越しと存じましたら、宅に扣へお待ち申すに。

語路　なんの／＼、拙者よりお宅へ參らうと來かゝるところ、これにてお目にかゝつたは、幸ひと申すものでござるてや。

蟇六　時に、愚宅へお越しなさるゝは、何の御用でござるな。

語路　在鎌倉の主人より、急觸れの飛脚到着。貴殿へも御狀が參つた。

蟇六　ナニ、大石氏より火急の御狀。

語路　左樣でござる。

蟇六　然らば、先づあれへお越しなされませう。

語路　左樣仕らう。

蟇六　サア、お越しなされい／＼。

ト右の鳴り物になり、本舞臺へ來て、語路五郎は上手へかゝる。蟇六はその次へ、下部は下手へ。

さて、只今の仰せ、急觸れの御狀とあれば、なんぞ氣遣はしい儀ではござらぬかな。

語路　イヤ、何も氣遣ひな儀でもござらぬが、この頃扇ケ谷定政、叛逆の企てありとて、鎌倉には上を下へと騒ぎますれば、急ぎ定政を攻め亡ぼさんと、評議とり／＼。主人大石兵衞どのにも、一方を攻めかくるべき役目を承はる。彼の地に罷りある一家中の者ども、今日書狀を披見するや否、俄かにその心構へを致して、急に矢尻を磨きまするてや。

蟇六　成る程、それならば定めて兵粮手當の御狀でござらう。あはれ拙者も力量の勝れましたれば、その戰ひに附き添ひ、一合戰いたして見たいものでござるてや。

ト此うち鳥居の内より、榊、巫子の形にて出かけ、蟇六を見て、嬉しやと思ひ入れ。

語路　成る程／＼、貴殿にもさう思はるゝも尤も。拙者は又、願うてもなきこの度の戰ひ。日頃より精進の凝らし

習ひ覺えし軍學の奥儀を見知らせ
ト鹿爪らしく仕方をして云ふ。此うち榊、紙を丸めて蟇六に拋る。蟇六、フト榊を見て、今は惡いと顏にてする。語路五郎、これ知らずに
先づ先陣は魚鱗に備へ、敵方の變に應じて鶴翼に敷きかへ、或ひは遁甲八門の陣を張り、孫子や呉子はまだな事、彼の司馬の仲達を惱ませし、諸葛孔明が眼のあたり、顯はれ出でしかと、敵味方一統に恐るゝばかりの智略を顯はし、末世の記錄に殘さんと思へば
ト講釋師のやうに云ふ。此うち蟇六は榊と氣味合ひ。語路五郎、フト蟇六を見て
コレサ、蟇六どの〳〵、コレサ、コレ、如何なされた。
コレサ、蟇六どの。
ト大きな聲で云ふ。蟇六、愕りして
蟇六　ハッ〳〵〳〵。
トこれにて榊、ちよつと隱れる。
語路　貴殿、今の
ト蟇六の眞似をして
ありや何をして居召された。
蟇六　エヽ、今のれきかな。

ト同じくして
エヽ、ありや……ムウ、斯うでござる。
語路　どうでござるな。
蟇六　ソレ、貴殿の軍慮甚だ面白う存じて、拙者もその手に加はりし心にて、鎗合せの覺悟でござる。
語路　エヽ、何かな。鎗合せのお心かな。
蟇六　左樣でござる。
ト此うち語路五郎、榊をチラリと見て
語路　ナニサヽ、それなれば貴殿も、合戰がお好きと見えます。
蟇六　イヤ、左樣にもござらぬて。
ト兩人顏見合せ
兩人　ハヽヽヽ〳〵。
語路　時に蟇六どの、主人大石より貴殿への書狀、お渡し申す。
ト狀を出す。蟇六、爰では面倒だと云ふ心にて
蟇六　アイヤ暫らく。その御狀、貴殿御所持下されい。
語路　とは又、何ゆゑな。
蟇六　さればサ、大石氏には重役、そのお頭より參りし御狀、斯樣なる途中にて披見いたすは、憚りに存ずるか

ら、神職座敷を借り請け、それにて拝見仕らうと存じて。

語路　ナニサマ、五ヶ村の庄屋を兼ねる蟇六どの、こりや斯うありたきものでござる。

蟇六　イヤモ、何とぼしござらうやら。

ト頭掻く。

語路　イヤ〳〵、なか〳〵のお心がけ。武士も及ばぬ貴殿の鎗。そこで彼の合戦が、なされたくて〳〵。

蟇六　ヤア。

語路　それで只今の鎗合せ。畑上語路五郎感心いたした。ソレ、神主屋敷へ案内申せ。

下男　畏まりました。

語路　然らばお先へ参り、御待ち申す。

蟇六　畑上氏、後刻。

ト唄になり、語路五郎、こなしあつて、鳥居の内へ下部連れ入る。榊、直ぐに出て、蟇六を捉へ

榊　モシ、旦那様、なぜあなた、この頃はお越しなさらんかいなア。

蟇六　これは如何な事。畑上語路五郎どのゝ手前、面目を失うたがや。

榊　お前は面目とやらを失なはしやんしたか知らんが、わたしやお前の顔が見えぬに依つて、大抵や大方、案じて居た事ぢやござんせぬ。

蟇六　何を云ひ居るやら。この頃は公用向きで忙がしさにてまへの顔が見たくつても、参つて居る間がないからぢや。

榊　なんの嘘ばつかり。内のお家様の側にばつかり、引ッ附いて居やしやんすのであらうがな。エヽ憎やの。

ト尻抓める。蟇六、ぐにや〳〵となつて

蟇六　アイタヽヽ。こりや怪しからぬ蚊が喰ふ事ぢやて。

榊　アイ、わたしやどうで蚊でござんせう。しかも草深い所に居る藪蚊でござんす。その代りにこれから、神主様の座敷へ連れて行て、お前の血を吸ひ取つて〳〵、お前をいぢる程に、さう思はしやんせえ。

ト寄り添ふ。

蟇六　ア、コリヤ〳〵、晝中に人が見る。ちと遠慮しやれ。

榊　そんならお前、嫌ひかえ。

蟇六　イヤサ、さうではなけれど。

榊　けれどなら、サア、ござんせいなア。

葉六　でも、年にも不足もないに。

榊　エ、、人にばつかり物思はして、オ、辛氣。

ト無理に手を取らうとする。此うち龜笹、茶店より出かけ、これを見て、腹立て、ツト中へ分けて入る。

龜笹　コレ、旦那どの。

トこれにて兩人、恟りして

葉六　ヤア、其方は。

龜笹　お早うございましたなア。

トつんと拗る。と辻打ちの合ひ方。

葉六　ア、、こりや一向益體ぢや。

龜笹　益體とは、何が益體でございますえ。

葉六　サア、その益體は〱、オ、、さうぢや。今日の神事、定めて神主宅では馳走であらうが、鯛ならば燒くがよい、燒くがよいから燒く鯛ぢやと申したのぢや。

龜笹　エ、、左樣かいなア。益體の事仰しやるからは、エエ、何かえ、あの女中樣はお端下かえ。どなたでござりますえ。

葉六　ア、、あの人か。ありやアノ巫子どのぢや。

龜笹　その巫子どのが、あなたに何の用あつて。

葉六　エ、、イヤサ、ナニ、オ、、それは連合ひの烏帽子を誂らへに、ではない。エ、、さりとては怪い事ぢやなア。

ト無性に煽ぐ。榊、爰まで顏を袖にて、窺ひ居て、この時ムツとして

榊　オ、、この方は、なんぢやぞいなア。アタなめた。人をお端下かなんぞとは、引きこなした物の云ひやう。

龜笹　イヤコレ、巫子樣とやら。引きこなしたか、引きこかしたか知らぬが、ありやわたしの大事の殿御。お前の側に置く事はならぬ。サア、こちらへござんせいなア。

ト引ツ張つて行くを

榊　イエ〱、やる事はならぬわいなア。

龜笹　ならぬと云うて、どうさんす。

榊　斯うするわいなア。

ト有り合ふ物を抛る。

龜笹　それをお前に負けてよいかいの。

トまた打ちつける。

榊　そんならわたしも斯う。

ト兩方より茶店の物を抛る。

葉六　こりや又、益體が募つて來た。

ト一つづゝ片附ける。此うち鳥居の内より禰宜一人、

走り出て

爾宜　オヽ、榊どの爰にか。神樂講が待つてござる。早う、ちやつと〳〵。

ト榊、知らぬわいなア、と捨ぜりふにて、物抛るを、無理にこざれ〳〵、と上手へ連れて入る。龜笹は矢張り怒つて居る。蟇六、氣味の惡いこなしにて

蟇六　ドレ、身共もちやつと。

ト行かうとする。龜笹、よろしく突き廻して胸倉取つて

龜笹　コレ、旦那どの。

蟇六　なんぢや。

龜笹　下に居やしやんせ〳〵。

ト引据ゑても立つて居る。

エヽ、マア、下に居やしやんせいなア。

ト無理に引据ゑる。蟇六、また立つ。なまめいたる合ひ方。

旦那どの、こなた、どうして此やうな胴慾な氣にならしやんした。そも馴染みを數ふれば、二十一年三月となる。始めのうちはどれ逢ひて、人目を忍ぶ憂き艱難。只その中にも樂しみは、三世相を逆樣に見て、初め惡うて後がよいと、世間晴れての女夫となり、晝も夜さりも共稼ぎ、引ツ附き合うて暮らせばこそ、身上もようなりや仲もよし、人も羨やむ夫婦仲。その女房を振り捨てゝ、あの若若しい女子面に乘り替へるとは、移り氣な、そりやお前胴慾ぢや。あんまり酷い〳〵わいなア。

ト大泣きに泣き落す。蟇六も思ひ入れあつて

蟇六　ハア、誤まつた〳〵。元身共は薄い身の上、フト馴染んだ其方の縁で養子に入り、今五ヶ村の束ねまでして、樂々と暮らすのも、云はねど知れた其方の庇。その女房を振り捨てゝ、外の女子に惡性する氣は、微塵毛頭なけれども、フトした事からあの女、引くに引かれぬ譯となり、引ツかゝつたは我が誤まり。併し、譯もさらりと立てゝしまうた程に、堪忍して、大目に見てたも。アア、よい年をして仁體らしう、娘にも持ちさうな者を捉へ、じやらくらも面白ない。必らず叱つてたもんなや。コレ、あやまつた。女房ども、これぢや〳〵。

ト拜む。龜笹、落ちついたこなしにて、手を拂ひ退け

龜笹　ア、勿體ない。女房のわたしになんの詫び。罰が當るわいなア。シタガ、そりやモウ、女子狂ひも男の高下、怨むまいとは思へども、女の淺はか、必らず愛想つかさ

ぬやう。
蟇六　なんの變つてよいものかいなう。
龜笹　わたしもそれ聞いて、落ちついたわいなア。
　ト双方こなし。
蟇六　時に、最前語路五郎どのが見えられ、重役大石氏より某へ參りし書狀、拜見いたして來う。
龜笹　して、どこにお出でなされるえ。
蟇六　大切な御狀、この所でも披くも恐れ。神職方にて披見せんと、先刻より待たして置いた。
龜笹　そりや打ッちやつて置かれますまい。ちつとも早う。あなたもお出で。
蟇六　其方も濱路を連れて
龜笹　追ッつけそれへ參じます。
蟇六　そんなら女房ども。
龜笹　旦那どの。
蟇六　待つて居るぞよ。
　ト唄になり、蟇六、鳥居へ入る。この時茶店の内よりお品、お鶴、猫を抱いて、春助、附き出て來て
しな　モシ、お家樣、もう御參詣なされまするか。
龜笹　オヽ、さうしませう。して、いとはや。
つる　矢張り御覽じてござりまする。
龜笹　して、紀二はや。
つる　爰に抱いて居りまする。
龜笹　二人の衆はや。
しな　これも見て居てゞござりまする。
龜笹　殿はや。
つる　いと樣に附いて居られます。
龜笹　旦那はや。
しな　そりやお前が知つて居やんせう。
龜笹　ほんに、さうぢやあつたなア。
　ト下手バタ／＼にて、犬逃げて出る。與四郎の犬追はへて出る。子供皆々ホイシ／＼と、けしかけながら附き出る。初手の犬、茶店へ逃げ込む。これに驚ろき皆皆片隅へ寄る時、お鶴、紀二の猫を取落す。この時與四郎の犬、直ぐに猫を咬へて振り廻す。皆々惘りして
皆々　アヽ、アレ／＼、與四郎めが。
龜笹　紀二を咬へ居つた／＼。コレ、誰れぞちやつと踏んでたも／＼。
春助　オイ／＼、皆早う來たり。どうで猫めが殺されようわい。よい態ぢや／＼。

龜笹　オヽイ〳〵。
ト茶店の内より椋藏、籾内、この外幕明きの若い者、地白赤の模様の引張り、揃への囃子役の心にて、銘々思ひ〳〵の持ち物、棒、竹、閂など持ち出て來る。此うち與四郎、猫を振り廻し抛りつける。人數皆々與四郎を追ひかけ入る。龜笹、打ちつけられたる紀二の猫、死にたるを見て、癪の發るこなし。女形、春助、椋藏、籾内、これは益體ぢやと、捨ぜりふながら水をかけなど、仕組みよろしくあつて、龜笹、心附き

龜笹　オ、紀二よ、可哀さうな事したなア。
ト猫を抱き上げ、うろ〳〵物の云はれぬこなし。椋藏、籾内を引ッ張り猫突きつけ、どうせうと云ふこなし。
コレ、二人の衆、一體あの與四郎めは、爰へ誰れが連れて來たのぢや。

椋藏　慥かに糠介めが連れて參つた。

龜笹　ソレ、呼んで來て下され。
ト急き込んで云ふ。

籾内　オヽ、承知いたした。
ト下手へ走り入る。龜笹、猫に獅嚙みつき

龜笹　オヽ、紀二、可愛いやい〳〵。可愛い事をした。これを内へ。

椋藏　ハヽア、なんでござる〳〵。
ト此うち龜笹、猫に頬摺りしたりして

龜笹　敵を取つて下され。エヽ、マア、あの犬めはどこへ行き居つた。エヽ、咬みついてなりと恨みを晴らさいで置かうか。紀二よ〳〵。可愛い事をしてのけたなア。
トいろ〳〵あつて泣き落す。上手よりバタ〳〵にて、與四郎犬、大分手を負ひし心にて、逃げて出る。蟇六、手鎗を引提げて、後より以前の人數皆々、ソリヤ〳〵と口やかましう云ひながら追ひかけて出て、與四郎は花道へ逃げ入る。

皆々　たうとう逃がして退けた。
ト蟇六、鎗を捨てゝ

蟇六　エヽ、殘り多い。元よりあの畜生めを引連れ參つたは、信乃めと糠介とやら。彼奴、このあたりにへちまへ居れば、椋藏、早く糠介めを呼んで來やれ。

椋藏　心得ました。
ト下手へ走り入る。龜笹、やう〳〵起き上がり

龜笹　旦那どの、紀二はこんな目に遭ひました。

蟇六　オヽ。

龜篠　どうしませう。
蟇六　道理だ。
龜篠　なんとせう。
蟇六　尤もだ。
龜篠　どうせう〳〵、どうせうぞいなア。
　ト猫を抱りつけて泣く。
蟇六　大事ない。オヽ、大事ないわサ。
龜篠　旦那どの、我が子に勝る可愛い紀二を殺されながら
大事ないとは。
蟇六　この一儀より恨みを返す手段がある。
　トきつと云うて、氣を替へ
糠介めは。
若者　まだ來ませぬか。
蟇六　早く呼べい。
　トつかうどに云ふ。皆々悄りして
若者　ハア、イ。
　トこそ〳〵人數半分ばかり入る。
蟇六　先づ糠介めを呼び寄せて
龜篠　オヽ、紀二が敵を
蟇六　討取る事は何より易い。

　ト云はうとして、また氣を替へ
糠介めは。
若者　まだ來ませぬ。
蟇六　エヽ、早く呼べ。
若者　ハア、イ。
　トこれにて殘りの者皆々入る。
蟇六　爰が日頃の意趣晴らし。
龜篠　存分仕返し仕拔かねば
蟇六　庄官たる役目にかゝはる……糠介めは。
下女　まだ參じませぬ。
蟇六　うぬらに云はぬ。娘を守れ。
下女　ハア、イ。
　ト返事して、茶店へコソ〳〵入る。蟇六、後を見て
蟇六　サ、これからがわが身と談合。
龜篠　エヽ。
蟇六　日頃義者張る犬塚番作。取つてしめるは今この時。
龜篠　アヽコレ、あたりの人目、漏れては大事。
蟇六　尤も。
　トちよつと思案して、竹にて字を書くこなし。
コリヤ、ナ。

ト書いて見せる。龜笹、讀み取つて

龜笹　成る程、さうなつたればなア。

ト鏡袋の小杉へ紅筆にて書く。

蓁六　ムウ、それにこそ。

ト又書いて見せる。

龜笹　斯う致せば。

ト書いて見せる。

龜笹　そんならわたしが。

蓁六　斯う云ひかけう。

龜笹　すりや、糠介めに。

蓁六　彼奴とて油斷はならぬぞ。

龜笹　そりや心得て居りますわい。

トこの時下手にて

椋藏　どうばつても、もう叶はぬ。

籾内　サア〳〵、ちやつとうせう〳〵。

糠介　こりや又、困つた事ぢや〳〵。

ト云ひながら引ッ張られ出る。龜笹、俄かに腹立て顏
して

龜笹　ヤイ糠介め。

ト咬みつくやうに云ふと、恟りして

糠介　へイ〳〵。

龜笹　爰へうせ居れ。

トもぢ〳〵とする。

エヽ、うせ居れやい。マア、おのれはなア。

ト居直る。合ひ方。

其方があの與四郎犬めに云ひつけて、紀二を咬み殺さしたのであらうがの。

糠介　ア、モシ、お家樣、どうしておらが。

龜笹　イヤ〳〵、さうぢや〳〵。

糠介　ぢやて、お前樣、云ひつけたてゝ、そんな事に辨まへのないのが、畜生ぢやござりませぬか。

龜笹　よい口な事云ひ居るな。おのれが業ぢや〳〵。

糠介　そりやお前樣、あんまり無理な。

ト云ふをかぶ　かけて

龜笹　なんぢや無理を云ふ。サア、また腹が立つて來た。無理な事云ふ龜笹ぢやない。さう云やれば仕樣がある。皆の衆、もそつとこちらへ連れて來てたも。

糠介　エヽ、モシ、おらはモウ。

ト逃げうとするを、兩人捉へて

龜笹　動きあがるな。

ト引立てる。糠介、意地張る。

亀笹　おのれマア、これからどうするぞ。

ト立ちかゝるを、蟇六、留めて

蟇六　コリヤ〳〵、待て亀笹。

亀笹　ちやてゝあなた。

蟇六　サヽ、其方が申すも一理あれど、立ち騒いで見苦しい。

亀笹　でも、彼奴が理窟たらしい。わたしを非理ぢやと。

蟇六　ハテ、よいわサ。善悪は身共が糺す。ざわ〳〵せずと。

亀笹　エヽ、おのれを。

ト糠介にかゝるを

蟇六　靜かに居やれサ。

亀笹　ハアイ。

ト下に居る。蟇六、糠介を見て

蟇六　コリヤ糠介、爰へ來い。

糠介　イエ、おらは爰が。

亀笹　勝手はならぬ。あれへ行かう。

糠介　でも、どうやら。

蟇六　怖くとも、うせ居らう。

糠介　ヘイ〳〵〳〵。

ト顫へながら、少し向うへもぢり出る。

蟇六　今これより聞いて居れば、聞分けなきが畜生とは、尤もに聞ゆれど、畜生ながら愛する者の恩は知る。人に物を敎へられ、斯樣な事を仕出かすも間々ある事だ。

糠介　エヽ。

蟇六　サア、この蟇六に、何意趣あつて致したぞ。

糠介　ナニお前樣に意趣を持つて、どう致しませう。

蟇六　意趣ない者が、なぜ紀二郎を喰ひ殺させたぞ。

糠介　そりやお前、おらはちつとも知らぬ事。

蟇六　吐かすな。云ふな。

ト頭押しに咬みつける。

糠介　そりやお前、其やうに仰しやれますれば、致し方もござりませぬが。

トぐづ〳〵云ふをかぶせかけ

蟇六　イヤ、仕樣がある。これよりうぬに役人兩人を差添へ、番作めに對面させ、事の始末を申し聞かせ、あの畜生めを引ッたくり、存分にせにや腹が癒ぬわい。

トこれにて糠介、少し心の落ちつくこなし。

糠介　成る程、おらに人を附けさつしやつて、あの與四郎

を取つて戻り、存分にさつしやるとは、さらりと譯が解つてある。高が畜生、番作どのにこの譯云うて來るは、なんでもない事ぢや。さうせう〳〵。成る程、お前様の仰しやる通り致しませうから、さうさつしやつたら何事も。

蟇六　イヤ、まだ濟まぬ。番作始め信乃まで、遁がれ難き科があるわい。

糠介　ヘン、まだ外に、なんぞござりまするかな。

蟇六　オヽ、番作親子はさて措き、うぬも即ち同罪だワ。

糠介　エヽヽヽ。

ト大きに惘り。

蟇六　何も今更驚ろく事ぢやない。コリヤ、うぬが覺悟の前だ。

糠介　大庄屋様、何もおらは覺えはござりませぬが。

蟇六　吐かすない。うぬが大罪の様子と云ふは。

ト懐より破れし書狀を出して

これ見居らう。

糠介　そりやなんでござりまする。

蟇六　當所の陣代大石氏、鎌倉の管領に隨ひ、上野白井に在城する、扇ケ谷定政を攻め亡さんと企てに依つて、兵粮催促の急御狀。先刻畑上語路五郎どの、わざ〳〵これへ持參しられ、即ち神主の座敷を借り請け、拜見いたせしその折柄、彼の畜生めは勢ひ猛く走り入り、四足にかけ、まツその如く、ばらりずんと引裂いたわやい。

糠介　エ、エイ。

蟇六　畜生ながらも見捨て置かれず、手鎗を取つて與四郎めに、數ケ所の疵は負はせたれど、猶も狂うて駈け出せしは、定めて宿に歸り居らう。大切なる御書を破却の科。畜生法度を知らずと雖も、飼ひ置きし主はその科遁がれず。また彼の犬めを狂はせしは糠介其方。

糠介　エヽ、そんならおらまで。

蟇六　犬は遁がれる事ありとも

糠介　こちらが科は助かりませぬか。

蟇六　オヽ、くどいわい。

糠介　ワアイ。

ト大泣きに泣き落す。

ア、今日は如何なる惡日ぢや。思ひがけもない犬めが仕業。御教書とやらが破れたから、その科で番作どの親子、おらも遁がれぬ科人となり、もし殺されたその時にや、嬶やちつさめはどうならう。モシ、大事の書き物が

破れたら、お前様も御難儀ではござりませうが、常から年貢の負ひ目の重なつてある、恩義のあるお庄屋様。難儀さしますやうな事、思ひつく糠介ぢやござりませぬ。爰の所を聞き分けて、どうぞお上へお詫び事を、なされて下さりませ。

蟇六　エヽ、ぐづ〳〵と幾ら云つても叶はぬ儀を、しみらしつかう吐かしたるは、エヽなにか、うぬらが科をこの蟇六一人にかぶらせて、高見から見物するのか。

糠介　ナニ、さうではござりません。

椋藏　左様でなくば覚悟いたせ。

糠介　覚悟するなら、こんな願ひに致しませぬ。

籾内　致さにや科に落してしまへ。

糠介　ぢやて覚えのない事を。

蟇六　覚えないとは、身共に塗りつけるか。

糠介　エヽ、ナニ滅相な。

椋藏　然らば早く云つてしまへ。

糠介　サアそれは。

籾内　サア。

糠介　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

糠介　ハア。

蟇六　面倒な。引ツ立てい。

椋藏　ハツ。

ト両人して引立てにかゝる。蟇六も立ち上がる。亀笹、此うち聞いて居て、両人を引き分け、糠介を囲うて

亀笹　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

ト程よく留め、蟇六に向ひ

最前から仰しやりますやう、皆御尤もでござりまするが、いま糠介が申しまする通り、妻子の嘆きとあるからは、誰れしも心に覚えのある事。身につまされて胸つぼらしく、フツとわたしが心に浮んだ事もござりますれば、この事につきまして、わたしやあなたへ、お願ひ申したい儀がござりまする。

蟇六　ナニ、身に願ひとは何事ぢや。早く云やれ。

亀笹　イヤ、別の儀でもござりませぬ。あの科人糠介を、今暫らくの間私しへ、お預けなされて下さりませぬか。

蟇六　ナニ、あの科人めを。

亀笹　ハイ、ちと心に思ふ事もござりますれば、是非とも暫し私しへ

蟇六　預けくれらうが、例へふるなの辯舌でも、この云ひ譯

は立つまいぞよ。
龜篠　そこをわたしが思案して、申し開かするその間。
蟇六　身共にこの場を除けよと云ふのか。
龜篠　どうぞ暫らくこの場をば
蟇六　退き居るうち神職方にて
龜篠　畑上さまへこの由を
蟇六　談じ居るうち、申し開かせよ。
龜篠　そりや心得て居りまする。
蟇五　ムウ。
ト双方目顔にてこなしあつて
然れば其方に預けたぞよ。
ト唄になり、蟇六、鳥居の内へ入る。この時糠介は手を組みて、思案して居る。龜篠、椋藏、籾内、殘り、龜篠、思ひ入れあつて
龜篠　糠介どの、思ひがけない災難にて、さぞ當惑でござらうなう。
糠介　ヘイ〳〵、御推量下されませぢやが、あなたにも先刻には
龜篠　サイナウ、可愛い紀二を殺されて、おのれやれとは思うたれど、敵を取れば下の痛み。人の上に立つ程、心辛いものはないわいのう。
糠介　左樣なものか存じませぬが、畢竟今日のは時の災難。
龜篠　サア、好いも惡いも根を問へば、畜生から起つた事。と云うて此まゝではお上への云ひ譯立たず、また科を糺せば其方は元より、番作親子も繩かけて、鎌倉へ引かねばならぬ。信乃と云へばたつた一人の甥御の事、憎しと思へど番作は、はしをり鏡の弟なり、其方は下の百姓なり、誰れ憎しとは思はぬゆゑ、一圖の夫をすかし宥め、暫らくの間延したも、どうぞ云ひ譯の筋を拵らへて難儀を救ふ事、もしやと心を遣ふわしが氣を、糠介どの、推量して下されいなう。
トわざとしいをりなる。
糠介　ア、これは一番御尤もな事ぢや。日頃の事はさて措いて、何がなしに云ひ延ばしては下さりましたが、なんぞお前によい御思案が。
龜篠　サア、フツと案じる其うちに、よい便りを得ました。
糠介　エ、してその便りとやらは、どう云ふ事でござりまするな。
龜篠　サア、云ふも憂し、云はぬも辛き事ながら、云はねばならぬこの場の仕儀。日頃から往來せねば、直々に聞

きはせねど、弟の番作が所持して居る、村雨と云ふ劍こそ、もと安房の國里見の重寶。兼ねて室町將軍より、御懇望の品と聞く。主人と賴む里見家は、沒落して跡もなく、浪人の身には要らぬ寶、兼ねて御懇望こそ幸ひ、今度の誤まりを云ひ開きには、その劍を差上げて、科を詫びたら、番作親子は云ふに及ばず、かゝり合ひの其方まで、遁がれぬ罪科を助かると云ふもの。

糠介　ヘエ、、そんならこちとらの罪を助かる氣なら、その村雨とやら夕立とやらの刀を

龜篠　差上げさへすりやよけれど、片意地なあの弟、よもや得心はしやるまい。よし間入れたその上でも、今までの我を以て、蟇六どのへも手を下げて、鎌倉への執成しを賴まなけりや世間も濟まず。とは云へ、弟の番作は片意地者、姉が心を疑うて、なか〱ウンと承知はすまい。さうなる時は親子は死罪。其方も差詰め卷添への科は遁がれぬ。この事を云はん爲の、命をちつとの間も預かるわしが心の切なさ、思ひやつて下されいなう。

糠介　ア、モシ、親は泣き寄り、旨い物は他人が食ふと、いま難儀の折を見かけてのあなたのお情。成る程、お前樣に代つて、おらが舌の根の切れるまで、番作どのに云ひ宥め、あの人の心を和らげ、その劍とやらを鎌倉へ渡すやうに、邪が非でもやつて見ませう。

龜篠　オヽ、よう云うてたもつた。そんなら其方がさうさへしてたもつたらば、わしが嬉しさ。

糠介　イヤモ、犬も歩めば棒に合ふと、たんと云ひたい事はなけれど、此方の身にもかゝつた事。併し、番作どのに物云ふは、とつくりと思案して行かねば、行く事ぢやござりませぬ。

ト手を組む。

龜篠　サア、そりやとつくりと思案してたも。併し、ちつとの間と夫に願うて、預かつたこなた、長うはならぬ。

椋藏　イヤ、我れ〱も糠介に附き添ひ

籾內　番作方まで參りませうわい。

龜篠　オヽ、それ〱、マア、糠介どのは表向きの便りをして、紀二が事を云うてたも。ア、、あれが事を思ひ出すと、また一倍悲しうなつて來ましたわいなア。

椋藏　それは御尤も。その儀は拙者が承はる。

籾內　番作に對面して、彼の犬を受取り歸り

椋藏　敵は取つて上げまする。

龜篠　どうぞさうして下されい。それを思ふと、ちつとも

早う。

椋籾　サア糠介、行からではないか。

糠介　サア、行きますは行きますが。

　ト ぐづ〳〵云ふ。

龜笹　糠介、わが身今、邪が非でもと云やつたぢやないか。

糠介　サア、さうは申しましたが、あの番作どのにや、常住物を教へてもらふが、その人に教へてかゝるは、困つたものぢや。

龜笹　ナニ困つたもの。ムウ、こなたがそれ程困る事、無理にと云ふは否なものぢや。なんとせう、せう事がない。併し糠介、其方の命にも係はつた事、可哀さうにと思ふゆゑ、聞入れなくば仕様がない。そんなら其方は矢ッ張り科人。ドレ夫に。

　ト 上手へ行かうとする。糠介、慌てゝ留めて

糠介　アヽ、モシ、待つておくれなされませ。行きます〳〵。

龜笹　行てさへたもるなら、わたしも嬉しい。

椋籾　サア、ちつとも早う。

糠介　ハイ〳〵。

　ト 立ちながら、そろ〳〵と歩き

とつとモウ、いろ〳〵の事で拍子に乗つて、むづかしい事を安請合ひに請合うたものぢやに依つて。

椋籾　ナニ、安請合ひとは、どうした事ぢや。

糠介　サア、安請合ひに、どうぞ納めてくれりやよいが。

　ト 此うち龜笹、兩人に目くばせして、早う行けとする。兩人心得、糠介の後より附いて行く。

椋藏　もしどうあつても番作が

籾内　承知せぬその時は。

龜笹　番作親子は勿論、その糠介も首はコロリぢや。

糠介　エヽエイ。

龜笹　コレ、どうぞ首の落ちぬやう。

糠介　そりや心得て居りまする。

龜笹　どうぞ其方を頼んだぞや。

糠介　この首にや替へられませぬ。

　ト つまらぬ顔して、ツイと向うへ入る。兩人後より附いて入る。糠介、後見送り

龜笹　先づこれでよい。併し、口文盲のあの糠介、どうぞ首尾ようやればよいが。

　ト この時鳥居の内より蟇六、出て

蟇六　女房龜笹。

亀笹　旦那どの。
蓑六　して、糠介めは。
亀笹　サイナ、どうやら斯うやら云ひ聞かして
蓑六　番作方へ參つたか。
亀笹　アイ。
蓑六　オヽ、出かした〳〵。
亀笹　さうしてあなたは、今まで何をしてお出でたえ。
蓑六　されば聞きやれ。畑上どのに對面して、これから後より番作方へ、參らるゝやう云ひ合ひ置いた。
亀笹　それで丁度よい手番ひ。追ッつけ紀二の敵も打てる。
蓑六　日頃意趣ある番作親子、取つて締める鍵の戸の
亀笹　もし彼方から碎けて出て、彼の村雨が手に入つたら
蓑六　滸我の在村どのへ差上げたら、褒美の金は掴み取り。
亀笹　さうなる時は榮華のし次第。
蓑六　巧い事の勢揃へ。
亀笹　その祝ひ事に、どうぞしませうか。
ト手を取る。
蓑六　これは如何な。門中でもしや人が
亀笹　見て笑うても大事ないがな。

蓑六　とは又どうして。
亀笹　わたしとお前は、なんでござんす。
蓑六　ハテ、そりや知れた
ト頭へ手を上げる。
亀笹　ほんぼの
ト嬉らしうする。蓑六、呑み込み
蓑六　夫婦ぢやないかい。
ト脊中トンと叩く。
亀笹　オヽ、嬉しやの。
トひつたり抱かへつく。チョン〳〵。返し

造り物、三間の二重、これに上手一間の高障子屋體。見付け青壁、納戸口、前側竹縁、上手の落ち間、物置、雪隱、切り株に鉢の手水鉢、竹の破れ垣など取合せよろしく、下手には糠介が住家の入り口、藁屋のかゝり、縄暖簾。右二重に番作、惣髮、切繼ぎの形、四十餘りの拵らへにて、炬燵にあたり居る見得。信乃、返し前の拵らへ。すべて繪面の通り肩揉んで居る。下手舞臺に畑六、百姓の形にて、作り物を拵つて來て、藁畚、鍬を側に置き、煙草のみて居る。礎

番作　入り靜かなる合ひ方にて、道具納まる。

番作　これは畑六どの、御免下され。信乃よ。もうよいもうよい。

ト番作、居直る。信乃、片附ける。

畑六　ア、先生、どうしたものぢや。矢張り其まゝでお出でなされませ。

番作　でも、餘りこれでは。

畑六　ハテサテ、御病氣の御身ぢや。いつもとは違ひます。さう慇懃では迷惑いたします。マヽ、其まゝ〳〵。

番作　左様ござらば矢張り此まゝ。

畑六　時に先生、御病氣はどうでござるな。

番作　イヤ、この節は金瘡の痛み嚴しく、その上風を引き添ひ、再發して、誠に困りますてや。

畑六　それは御難儀でござりませう。

番作　成る程、醫藥にも手を盡しくれられまするゆゑ、心強く思ひ居れども、殆んど堪えかね、困り入りまするてや。

畑六　イヤ〳〵、隨分ともに養生が第一でござりまする。時に今日は、所の祭で、庄屋の意通惡どのが家内連れで、囃子を見に行かれたげな。

番作　左様かな。一向存じませぬてや。コリヤ信乃よ、其方は見かけなんだか。

信乃　アイ、最前ちよつと見ましたが、コレ小父様、矢ッ張り紀二郎を連れて居たかいの。

畑六　ソレイヤイ、どつこへ行くも、あの野良猫を連れて歩き、我が子同然。村中が云ふには、そりやその筈ぢや。あの爪が庄屋どのには入用ぢやといなう。

番作　ハヽヽヽ。併しながら、農家に於ては犬などは不用なもの。それゆゑ鼠を制する猫を飼はるゝは、大庄屋どのゝ心得は、また別物でござるて。

畑六　何を云はしやるやら。そんな事に心の附く庄屋どのなればよけれど、なか〳〵さうではないてや。あの野良猫を可愛がるも、こな様方親子への面當て。その證據には、爰の息子には女子の風さすは馬鹿ぢやと、以前今の濱路と云ふ女子の子を貰うて、負けぬ氣で、これまで犬を飼うても、爰の與四郎犬に咬み伏せられて叶はぬゆゑ、犬をやめにして、猫と出かけたのぢや。

番作　イヤ、あなたから左様でもござるまい。蟇六どのは五ヶ村の支配も召さるゝ人物。なに些細な意趣を含まるる儀もござるまい。

畑六　ハテサテ、人に逆らはぬ結構なお人ぢや。時に今日は、與四郎は內に居ぬなう。
信乃　小父樣、與四郎は、ひどい目に遭うたわいなう。
畑六　ヤア〳〵、どうしてぢや〳〵。
信乃　最前父樣のお藥を貰ひに行く時、連れて行たら、お宮の前で糠介の小父樣が、與四郎を預かつて、連れて去んでやらうと云はんすゆゑ、預けてお藥取りに行た後での。
畑六　ハヽア、また庄屋どのゝ家內の奴等が、ひどい目に遭はしたか。
信乃　可哀さうに、疵だらけにしをつた。おりや聞かんのぢや〳〵。
番作　これはしたり、僅か畜生の事にて、怒りを發するは愚人の至りと、今の先に云ひ聞かしたぢやないか。
信乃　でも、おりや腹が立つてならぬもの。
番作　まだ〳〵。うぬも番作が忰でないか。常に素讀などさせ置くを、なんと讀み居るのぢや。
　　ト きつと云ふ。信乃、アイと指を啣へる。畑六、氣の毒のこなし。
畑六　エヽ、とつとおれが來て、埒もない事尋ねたゆゑ、コレ息子、叱られても笑やせぬぞや。また今度おれが仕返しして
　　ト 番作へ氣兼れして、信乃の側へ行て、小聲になる。
仕返しにどえらい丸太で、グワンと犬の代りにどやしてやるワ。何も貴樣がせいでも、おれがしてやる。
　　ト 信乃、矢張り堅うなつて居る。番作、ちよつと睨む。
アノおれとした事が、云はいでもの事云うて、阿房らしい。息子叱らして
　　ト 藁苞に躓き
オヽ、肝心の事を忘れて退けた。ちつとばかりぢやが、今日は祭の事ゆゑ、畑の神祭り、はぢけ豆を持つて來ました。
　　ト 前へ出す。
番作　これは〳〵、相變らず有り難う存じます。こりや珍物ぢや程に、佛前へ捧げ、後はそこへ退けて置け。
畑六　コレ息子、ちやつと直して置いたり。ハヽヽ、今日は祭で、若い奴等が晩には又、騷ぎ居らう。息子、後で遊びに來うぞや。
　　ト 門口を覗き
オヽ、日足も大分たけた。斯うしては居られぬ。番作ど

の、また明日來ませう。

番作　もうござらしやるかな。

畑六　息子、去んで來うぞや。

ト唄になり、信乃、藁畚提げて納戸へ入る。畑六は鍬かたげて、橋がゝりへ入る。番作、後見送りて

番作　いま畑六の噂では、大庄屋夫婦が神事をかこつけ、參詣せしとある。先刻與四郎が疵を蒙むり歸りしが、隣村での事と聞いて、さては與四郎を打たんと計れども、猛くして手に廻らねば、祭休みを幸ひに、若い者を語らひ、蟇六夫婦が手を負はせしものなるか。併し大勢にて取圍めばとて、手に合ふべき彼奴ならねど、疵を受けしもこれ天命。なに畜生如きに疵を負はせて、恨みを晴らす彼れ等が存心。ハテ、馬鹿々々しや。イヤ、些細な事を思はんより、ドリヤ・この程の日記をば認め置かう。

ト罫本に日記を書く。茶摘み唄になり、向うより糠介、矢張り手を組み、案じながらソロ〳〵出て、花道にて、これより先に椋藏、籾内、返し前の形にて、糠介が先に立ち出る。

椋藏　コレサ糠介、番作には在宿か。尋ねて來やれ。

ト云うても糠介、耳へ入らぬこなし。

籾内　コレサ糠介、コリヤ糠介。

ト大きな聲する。

糠介　ハイ〳〵、なんでござりまする。

椋藏　なんとは、今申しつけた事、われ耳へは入らぬかい。

糠介　何やらでござりまする。

籾内　馬鹿者め。見りやこれへ參る道すがら、何か思案ばかり致してトボ〳〵と、コリヤ、なんぞ思案いたす事でもあるか。

糠介　さればでござりまする。お前方も知らしやんす通り、大庄屋のお家様が、理窟だらけの事を仰しやるゆゑ、ほんに尤もなる事ぢやと、思うて圖に乘り、安請合ひに請合つたものゝ、とつくりと思案をすりや、日頃から堅くろしいあの番作どの、常住意見に合うて居るおらが、理窟らしい事を云うたとて、聞入れがあらう筈はない。こんな事なら請合はなんだらよかつたと、思うて見るとおらが命、ヤレ怖やの怖やの。矢ッ張り番作どのに理窟を持つて行くがよいと思へど、おらは常からあの人の顔を見ると、なんぢや知らぬが氣味が惡い。その人に理窟を云ふものぢやから、こんな術ない事はござりませ

んに。

椋藏　ハヽヽ、何を吐かし居るやら。例へ如何やうに番作が陳じても、今度の一件ばかりには定めて閉口。

糾内　左樣とも。コリヤ糠介、何も案じる事はない。事の委細は、此方より申しかけるワ。

糠介　何分よろしうお頼み申しまする。

椋藏　サヽ、案内いたせ。

糠介　アヽ、どうぞ納めてくれればよいが。

ト先に立ち、唄になり、本舞臺へ來て、門口でぐづ／＼しながら、アヽまゝよとズッと入る。番作、振向き

番作　オヽ、糠介どのか。

糠介　ハイ／＼。

ト云ひながら、ホイと門口へ出て、また花道へ行くうち

番作　よくござつた。マヽ、これへ／＼。

ト本を讀みながら云うて、あたりをフト見て

糠介どの、どれへござつた。糠介々々。

ト呼ぶ。と返事しながら、花道眞中の兩人が側へ行て

番作どのは内に居られまする。

椋藏　さうか。糾内どの、ござらつしやれ。

糾内　先づ／＼貴殿から。

ト糠介と入れ代り、門口に來て、番作は糠介か居ぬゆゑ、不思議な顏して、

番作　たつた今見えた番作どのが、其まゝ出られたは。

トそろ／＼と下へ下り、門口へ來る。この時外の三人は入り、出合ひ頭に顏見合せ

オヽ、糠介どのか。

糠介　ハイ／＼。

ト後へ寄る。番作、兩人を見て

番作　お連れの御兩所。

椋糾　御免なされい。

トズツト入つて、上手へ通らうとする。

番作　アイヤ／＼御兩所、貴公達は兼ね／＼お見請け申す村役人の方々、何用あつて手前宅へ。

椋藏　ハテ、參るべき仔細あつて、わざ／＼來た我れ／＼兩人。

糾内　それへ參つて安座の上、申し入れう。

番作　左樣ござらば兎も角も。

トこなしあつて、二重へ通り、眞中へ坐る。兩人は上手へ、糠介は門口に、踞ばうて居る。

それに居召さるは糠介どのか。

糠介　ハイ〳〵。

番作　サヽ、爰へお入りなされい。

糠介　左様なら御免下され。

ト もぢ〳〵と内へ入る。

番作　これはハヤ、平生お心安いに似合はぬ今日の仕儀。

ト合點のゆかぬこなしにて

これには定めて仔細がござらう。

糠介　ハイ、イヤモ、これにはだん〳〵

番作　様子ござらう。サヽ、どうでござるな。

椋藏　アイヤ〳〵、その儀は我れ〳〵申し入れう。斯うでござる。今日當地五ヶ村の庄屋たる蟇六どの、御家内打連れ立ち、氏神簸川八幡宮へ參詣の折柄、貴所の飼ひ置かるゝ與四郎とやら申す犬の爲に、蟇六どの寵愛の、紀二郎と云へる小猫は咬み殺されました。

籾内　畢竟畜生の爭ひ、申し入るゝは大人氣なけれど、蟇六どのがこれまで、數多の犬を飼ふと雖も、貴殿の犬に疵つけられ、相果てた事は度々でござる。

椋藏　されども此方には、穩便の儀を存じて、一度も恨みを申さず、双方に飼ひ犬あればこそ爭ひの端も引き出せ誠に能なき事なりと、思ひ返して犬を飼はず、女童の愛づるに任せ猫を飼ひしに、これ又、今日、貴所の犬の爲に一命を失ふ。

籾内　犬同士の爭ふは致し方なし。猫は犬に爭はず、顔を見れば逃げ出すもの。それを追ひつめ咬み殺せしは、犬に罪あり。それゆゑ犬を申し請けて、猫の仇を報ふ存心。

椋藏　事の起りはあれある糠介、與四郎犬を怒らせし罪人なれど、その儀は差措き、證人として連れ參つた。仔細詳しく演舌して、貴所の飼ひ犬受取り歸れと、村長の云ひつけ。

籾内　この上は、イザ番作どの。

兩人　飼ひ犬をお渡しなされい。

ト小むづかしう云ふ。番作、始終えせ笑うて居て

番作　イヤ、え、渡すまい。

兩人　とは又なぜに。

番作　村長よりの使者なりとも、口上の趣き、その意を得ぬゆゑ。

兩人　そりや又どうして。

番作　云はるゝ通り理に似たれど、それは人倫の知るとこ

ろ。畜生は五常を知らず、絶えて法度を辨まへず、弱きは強きに征せられ、小は大に伏せらるゝ。さればこそ猫は鼠を喰へども、犬に絕えて勝つ事なし。また犬は猫に誑つくれど、狼に戰ふ事叶はぬ道理。これ皆力の足らざるところ。形の大小に依つたるもの。もし犬を猫の敵とせば、猫を鼠の仇と申すか。左樣な事は人倫の上にある事。畜生の爲に事々しう、仇討の沙汰ある事、番作承知いたさうか。

兩人　ムウ、サそれは。

番作　何事やらんと存ぜしに、ハテ、理に疎き村長ぢやよなア。

ト煙草のみ、空嘯く。この時外より

語路　村長の理は暗くとも、上への掟は立てねばなるまい。

ト語路五郎、返し前の形にて、ズツと內へ入る。

番作　ナニ、上への掟を立てよとは、して、こなたは。

語路　當地の陣代たる大石が家臣。

兩人　畑上語路五郎高成さま。

ト此うち糠介、ウロ／＼して居る。

語路　コリヤ／＼土ほぜりめ、何れへうせ居る。

糠介　ハアイ／＼。

語路　うぬ、身動きすると打ち放すぞ。

番作　アイヤ／＼、畑上氏とやら、彼れは僅かの土民でござれば、僅かの事にも驚ろきまする。先づ靜まり下されい。して、お尋ね申さうには、貴殿の仰せ、上への掟を立てよとは、そりや如何ていな儀でござりまするなア。

語路　その儀は彼れめが事明白に存ずるゆゑ。コリヤ、土ほぜりめ、逐一に番作に申し聞かせよ。

糠介　イヤモ、おらは御免なされて下さりませ。

番作　ナニ、彼れが委細存じて居るとな。糠介どの、如何ていの儀でござるな。

糠介　サア、お前樣に云はにやならぬ事ぢやけれど。

番作　サア、承らうか。

糠介　今はどうも。もつと後で。

番作　それでは事が相解らぬ。

糠介　ぢやて　お前樣へ。

番作　サ、、云はつしやれ／＼。

ト膝摺り寄せ、糠介、上心にて、ムウと唾を呑み込み

糠介　サその樣子尋ねさつしやれいでも、云はにやつまらぬおらが身の上。一通り番作どの、マア、聞いて下され

今日は所の祭なれど、隣村の神主様へは、毎年鰌の大根や蕪や豆をば、馴染み買ひに買はしやるから、持つて行た戻り道、爰の息子が與四郎犬を引きながら、あの二人の衆とやつさもつさ。直ぐに中へ飛び込んで、挨拶をしたその後で、コリヤ信乃よ、塩梅の悪い父様を抛つて置いて、どうしたものぢや、ちやつと内へ去なんかと、叱つて見たりや、イヤおりやお薬取りに行くのぢや、ア、さうかい、そんならちやつと行て來い、與四郎はわしが預かつてやらうと云へば、温順な爰の息子、直にホイと行てしまうた。殘つた子供は腕白者、何が與四郎をば嬲てるゆゑ、それから彼奴が狂ひ出し、あたりの犬を追ひかけ、どう云ふはずみやら、庄屋どのゝ紀二郎猫を咬み殺し、お宮の方へ驅け込んだか、その折神主のお座敷には御陣代より大事の御狀、大庄屋どのが讀んでござつたその中へ、與四郎めが座敷へ暴れ込み、その大事の書付け引破つたとやら云ふ事で、日頃に增した庄屋どのゝ腹立ち。一體犬めは、誰れか爰へ連れて來たと、せいらくあつたところ、ありや信乃が引いて連れて來たを、糠介が預かつたと、なんの云うても云はいでもの事を、サア。それから又怒り出して、糠介連れて來いと、それから亂騷ぎ、幾度も／＼呼びに來る。せう事なしに行たところがかみ樣もとッ捉まへ、紀二郎猫が殺されたと、咬みつくやうに云はつしやる。また庄屋どのには、破れた狀をおらに突きつけ、鎌倉どのへ云ひ譯立たぬ。破つた犬は頓着なし。マア差當る科人は糠介めと、睨めつけられたその時の事、思ひ出すさへ身の毛が立つ。一體又あの與四郎めも、どえらい事を仕出かし居つた事ぢやなア。

　ト顫へながら云ふ。

番作　アイヤ／＼糠介どの、すりやその大切な狀を、與四郎めが、引破つたに相違ないかな。

糠介　サア、なんぢや知らんが、破れた狀を見せさつしやつた。

番作　すりや我が飼ひ犬が四足にかけて、その書狀をば引裂き捨てしとか。ムウ。

　ト少し當惑のこなし。

語路　相違があつてならうかい。彼の畜生めが踏み裂きし御狀は格別、大切なるはその砌り、共に破れし管領の御教書だワ。

番作　して又、なんの仔細あつて、村長方へ管領家の御教書が到來いたしたな。

語路　ヤア、いらざる事聞き事。併し、聞きたくば云つて聞かさん。當所の陣代大石氏、管領許我の成氏卿に從ひ在鎌倉。然るにこの程上野白井の城主たる、扇ケ谷定政、叛逆の色現はるゝゆゑ、急ぎ定政を攻め亡ぼせよとの、室町どのよりの仰せに任せ、即ち兵粮を運送の御狀。まつた管領職より主人大石へ、一方の攻め口を仰せつけられし御教書。右の二通を彼の旅川村神主方にて蟇六へ相與ふる、某が面前にて、彼の畜生めがばらりずんと引裂いたのだワ。

番作　ナニサマ、鎌倉より到着いたしたる二通の書狀、委細は相解つた。して又、貴殿より仰せられし、上への掟を立てよとはな。

語路　大切な御狀、畜生めに引裂かれ、此まゝにて鎌倉へ立歸つて、主人へ對して申し譯が立たぬ。それゆゑ犬を狂はせし、元の起りはあれなる土民め。

ト 糠介、首すくめる。

まつたその飼ひ主は犬塚番作、貴殿でないか。ぢやに依つて兩人とも、鎌倉へ引立て參つて、上への掟を立てるのサ。

番作　イヤ、そりや貴殿の勝手料簡、番作はえゝ致さぬ。

語路　でも、其方が飼ひ犬より、かゝる珍事が出來たでないか。

番作　されば、事の起りは犬の科。彼れらは元より五常を知らず、制禁も辨まへざるがこれ畜生。こりや云はずとも知れた事。引連れし者を始めとして、飼ひ主などが何知らうや。

語路　然らばこの儀は、此方どもの麁相ぢやとサ、云やるのか。

番作　さほど大切なる書狀をば、人立ち多き神事の只中、殊に練り物打つその中などにて、混雜する神主の宅、狂ひし犬の駈け込むやうな端近にて、披見召さるゝ各々方の、誤まりではござらぬか。

語路　ヤア、非を理に云ひなす佞辯邪智。この所にて論は無益。

椋藏　この上は鎌倉へ引立てん。

語路　引立てい。

ト 椋藏、番作の腕取りにかゝる。見事にポンと返す。糠内、又うぬがと腕に取りつく、番作、金瘡の痛むこなしにて、片手にて抱へるを見て、糠介、これはと番作へ寄らうとする糠内を踏み飛ばす。椋藏、また番作

を羽掻い責めにしつかと組みつく。其まゝに立ち上がり、振りほどき蹴返し、籾内を見事に投げる。語路五郎、うぬと切りかけるを、番作、キッと見る。糠介、氣遣ひ寄らうとする。

三人　うぬ、手向ひか。

ト きつとなる。

番作　オヽサ、ずんど手向ひするが、非を理に枉げるとのお詞。尾羽打枯らせし番作なれど、左樣な所存いつかな覺えず。

語路　ヤア、覺えないとは云はさぬ〳〵。例へ畜生にもせよ、御教書にお据ゑなされしは管領職の御印。此まゝに差措いては、我れ〳〵の誤まりより、管領のお怒りにも係はる儀だワ。

番作　成る程、管領の御印据わりし御教書を、破却の儘にも相濟むまい。その申し譯の一條は、拙者がとくと考へ申し譯の種を拵らへて見ませう。

語路　さうべん〳〵とは罷り成らぬ。

番作　ならぬとなれば仕方なし。管領職のお怒りにも係はるとあるゆゑ、とくと思案のめぐらし、兎も角も否やの返答仕らんと申すに、その差別もなく、無二無三に引立て參れと、管領より御内意でもござつたかな。

語路　イヤ、全くさうでは。

番作　然らば貴殿の御差配か。

語路　イヤ、左樣でもござらねど。

番作　但しは暫らく猶豫召さるか。

語路　サア。

番作　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

番作　達て引立て參らんと仰せらるれば、浪人なれど以前は武士。貴殿を始め、陣代庄屋の相手はいとはぬ。神餘滅亡の砌りより、久しく血を見ぬ太刀先を、お振舞ひ申さうか。

ト 語路五郎、行き詰まる思ひ入れ。

語路　ムウ、よくござる。暫時が間待ち申さう。

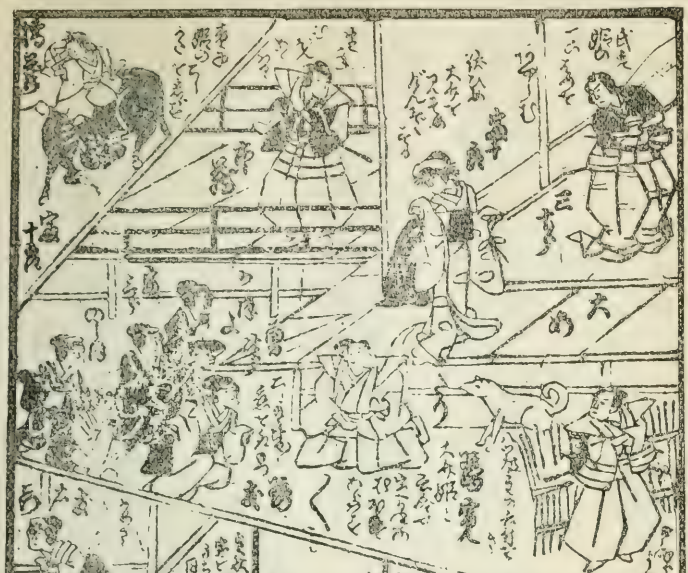
番作　しかと御合點なされたか。

語路　なんとせう事がない。その代りに、コリヤ糠介、先刻其方が聞いた通りナ、ソリヤ。

ト 刀の眞似をして

われが聞いた通り、イヤサ、鎌倉へ引立てるぞ。

糠介　ハイ、そりや御大儀樣でござりまする。



初演の



繪番附

椋藏　して、我れ〴〵への
籾内　返答は。
番作　おてまへ達の勝手にしやれ。
椋籾　うぬ、さう云つては。
　　トきつと反り打つ。
語路　ハテサテ兩人、もうよいわい。
番作　でも、あまりと申せば。
語路　ハテ何事も
糠介　後方までに。
番作　有無の返答。
椋籾　然らばそれまで
語路　犬塚番作。
番作　御使者、ア、御苦勞だな。
　　ト詰めるやうに云ふ。敵役兩人、うぬと擬勢。番作、ムウと笑ふ。チヤンと唄になり、語路五郎、兩人連れ橋がゝりへ入る。番作、手を組み、ムウと思案する。糠介、接穗のない思ひ入れあつて、そろ〳〵と門口へ出て、隣りの我が内の繩暖簾の内へ、半分頭入れてヂツととまる。去んでは詰まらぬと思ひ入れあつて見合す。番作、ヂツとなつて

ア、計り難きは人心と、庄屋の蟇六が、女房龜笹と某は、胤腹變らぬ兄弟にて、我れ未だ幼少の頃、父大塚匠作どのには、里見季基公のお見出しにあづかり、某諸とも房州瀧田へ引移り、この大塚には少しの領地あるゆゑ、姉龜笹は母諸ともこの地に止まり、母は當座に歿り、殘るは姉の龜笹一人。また親人には本國にて御臨終。その後お家滅亡の折柄、主家の重寶村雨の劍詮議の爲、金鞠大輔と云ひ合せ、女房手束諸ともに國遠なし、古主の家の再興する時節もがなと、故郷大塚へ參り見るに、姉龜笹は蟇六とやらんを養子に定め、所領田地も其まゝに、大塚の苗字を名乘り、はしをり鏡の兄弟たる、某をさへ寄せつけぬ我まゝの振舞ひ。賴む木の葉に露漏れば、足を止めんは無益の至り。安房へ歸つて兎も角もと、心積りの其うちに、女房手束が身ごもりて、産み落せしは悴の信乃。男子は成長しにくきものと、手束が望みに任せて、女姿に育てしところ、幸ひ悴は無事に成長。母は産後に空しく相果て、所の者の情にて、もだし難くも當地に止まり、現在實の兄弟なれど、音信不通の姉聟。同性を名乘らんは爭ひの元ならんと、苗字の上に一點加へ、犬塚と名乘る某。その犬ゆゑに今日の災難。いま畑上と

やらんが申す通り、管領の御敎書を踏み裂きしに相違なくば、その罪主の身にかゝると、申す詞も一理あり。その誤まりを云ひ開く、思案をとくとせずばなるまい。

ト思ひ入れあり。此うち糠介、番作の聲を聞いて、又そろ〳〵と門口へ來て、これを聞いて居て、サア爰ぢやと云ふ思ひ入れにて、思はず

糠介　なるまいとも〳〵。此方も聞き事、云はにやならん所ぢやて。

ト云ひながら、スッと入る。番作、愕りして

番作　オヽ、糠介どの。

糠介　ヘエイ。

番作　思案をせずばなるまいとは。

ト立ちかゝる。

糠介　こりや矢ッ張り去んで來う。

ト出ようとする。

番作　イヤ〳〵糠介どの、思案をせずばなるまい、また云はにやならぬと仰せられしが、そりや何事でござる。

糠介　イヤサ、それは。

番作　それはとは。

糠介　エヽ、斯うでござる。マヽ、さう居合ひ腰では氣が急いて云へるものぢやない。氣を靜めて、マヽ、とつくり聞いて下され。

ト番作、ムゥと居る。合ひ方になり

最前庄屋どのが云はるゝには、ヤイ、われが引いて來た犬なれば、この大事の狀を破つたのは、おのれが云ひつけたのに相違あるまいと云はるゝゆゑ、アヽ滅相な、畜生に物云ひつけたとて、なんのその通りにしませうかいのと、サ小理窟も云うて見たれども、なんの聞入れがあらう、無理無體にどこへやら連れて行くと、でつかい眼で睨めつけた程に、どうなる事ぢやと案じたところが、鬼の目にも涙とやら、常々忌々しいと思うて居た、こなたの姉御龜篠どのが挨拶で、たうとうおらを預かつてくれられました。

番作　して〳〵姉が、なんと申したな。

糠介　サア、これからがむづかしい話しよ。龜篠どのが差向ひで云はるゝには、あゝ可愛や、此まゝでは、おらは元より、番作親子も遁がれぬ罪科、アヽ、どうぞして助けてやりたい、救うてやりたいと、とつおいつの思案の上、オヽ、思ひ附いた事がある。この罪を云ひ宥め申すには、弟の番作が持つて居る、夕立とやら村雨とやら云

ふ、むづかしい名の刀がある、それは兼ねて室町どのとやらが入用な品ぢや、それを鎌倉へ持つて行き、今度の科を詫びしたら、お聞濟みのあるは知れた事と、聞くとおらは飛び立つ思ひもし、その刀を差上げたら、番作どの親子は元より、おらが身にも凶事はないか、ヤレ嬉しやと云うたれば、イヤ／＼さうばかりでは濟まぬ。この事を鎌倉へ申し上げねばならぬゆゑ、弟の番作にも、よい加減に我を折つて、蟇六どのに手を下げて頼まねば、兄弟のわしは構はねど、世間の表が立たぬ程に、この通りにとつくりと、こなたに云うてくれいとて、さま／＼の割口說き。

ト此うち番作、さては劍と云ふ思ひ入れ。

そこでおらが思ふには、日頃は憎いと思へども、親は泣寄りと、おらが仕合せ。番作どの、我强いも事に依る。實は身の差合せとやら。大事の物でもござらうが、その太刀を蟇六どの夫婦の衆へ手渡して、事なう濟まして下されいなう。

番作　すりや、龜篠どのが劍の事を。ムウ、何は兎もあれ、破却なしたるその御敎書、糠介どの、こなた、しかと見とめさつしやつたか。

ト糠介、頭搔いて

糠介　それはサア、こなたも常々知つての通りに、おらは無筆。只ツイ御敎書と聞いたばつかり。

番作　さてこそ我が推量の通り。

ト きつと思ひ入れ。糠介、得心さうなと心得て

糠介　こなたの氣には、なんと思はしやるか知らねども、村長に手下げしやつたとて、さのみ耻にもなりますまい。殊にお家は姉御なり、上の者にあやまるは當然。何事も子に見替へて、その刀を彼方へ渡し、この罪を助かつて下され。コレ、番作どの、頼みます／＼わいなう。

番作　御敎書は事實にもせよ、この罪を償はんと、村雨の御劍、鎌倉へ持參なすとも、聞立てなき時は無益の沙汰。太刀だに管領へ差上げなば恙なしとは何者が定めましたぞ

糠介　そりや、こなたの姉御龜篠どのが。

番作　ハテ、それとても、下より上を計る道理。

糠介　エ、。

番作　差出して事濟めば、一先づ鎌倉へ引かれて後、參らすとも遲きにあらず。畑上とやらへ返答こそ、遲刻いたさば彼れこれ面倒。ドレ。

ト立ち上がるな、糠介、扣へて

糠介　コレ番作どの、我強うは云はしやれど、こな樣の子と云うたれば、天にも地にも信乃一人。ちいとの間も科人に、したい事はあるまいがな。

番作　心苦しう思へども、命代りに相渡す、村雨の劍と云ふも、身共は覺えず。

糠介　そんなら、その村雨とやらは、お前の手にも。

番作　有りさへすれば渡しもせうが、生先ある悴の爲に。

ト心にて覺悟極めたと云ふこなし。糠介はこれを知らず

糠介　その耻を捨て身を捨てるも

番作　また子の爲に思ひ返すか。

糠介　何も知らぬおらまでも

番作　子ゆゑの闇にとつ追ひつ

糠介　例へ命を取らるゝとも

番作　我が身を忘れ武を捨てゝ

糠介　姉御の心を無足にせず

番作　何れの道にも思案をめぐらし

糠介　胸にとつくり手を置いて

番作　姉夫婦に別心ないか。

糠介　おらはずんとさう思ふが。

番作　ア、イヤ、心こそ心に問はゞ今さらに。

糠介　エヽ。

番作　心の駒に、手綱ゆるすな。

トちよつと向うを見て、糠介と顔見合せ、痛む腕押へる。唄になり、こなしあつて、納戸へ入る。糠介、後に思案して

糠介　ア、どうやら斯うやら云ひつけられただけの事は云うて退けたが、一應や再應で、得心さつしやるやうな番作どのぢやない。又おらが云ふだけの事、百倍も知り拔いて居さつしやるお人。龜笹どのゝ云やつしやる通り劍を鎌倉へ差上げて、詫び事するはよけれども、向うに聞かにや詮ない事。殊に村雨とやらの劍は覺えぬ、持つては居ぬ。それでは龜笹の云はれたが追つかけか。こりやこの譯を庄屋どのへ行て

ト外へ出かけて

待てよ、番作どのが、マア思案して見ようと云はつしやるを、抛つて置いて向うへ行たら又お目玉。ま一遍も番作どのに云うて見ようか。爰がおらが思案どころ。今奥へ行きしなに云はつしやつた、心の駒に手綱ゆるすなは弛めと云ふ事。心を弛めな油斷すな。

ト　ふつと思案の當つたこなし。

一　黨心の悪い人ぢやに依つて、必らず共に手綱ゆるすな。

ア、そんなら。

ト　向うを見て、膝を叩きて、呆れたるこなし。口あんぐりと開く。この見得にてチョン〳〵返し

造り物、二間の屋體、見付け古き唐紙に草紙の腰貼りの襖、上手は前側にて通り、破れ壁の腰板、竹窓の下手は二重に腰壁のある欞子にて見切り、前側一こまひ程の丸木柱、破れ壁の欞子窓、網代組みの腰板、これより下手へ取續き櫻の大木、草井戸、竹組みの釣瓶臺、この側に藁をかけて犬の寢所、屋體の上は竹簀の天井、上より劍の竹出る仕掛け。前、挽臼の飛び石、櫻の吊り枝、すべて繪面合ひよろしく二重の上に番作、掛け硯にて書置を認めたる見得。靜かに碪入りの合ひ方にて、道具納まる。

ト　番作、書き終つて

番作　斯く遺書を認め置けば、主家の成行き、悴が行く末心安し。イデこの上は。

ト　小さき位牌を出し、机の上に直し、少し退つて手を仕へ

我が父大塚匠作光盛どのゝ尊靈へ申し上げる。我れ不幸にして出國なし、力を盡し身を碎き、お家の重寶村雨の劍は、漸く手に入りしが、我れ出國のその後にて、口惜しや主君のお家は、佞臣山下定包が爲に滅亡して、忠義の武士は殘らず討死。折角劍は取り得ても、差上ぐべき主君なければ力なく、某これを守り奉り、前の管領山内顯定公の御養育ある、義成公の忘れ形見、義實君の成長あつて、里見再興の時節もあらば、その時こそ御劍を、悴信乃に持參させ、再び大塚の名跡も取立てんすものと計る年月、今日計らずも難を蒙むり、その禍ひを避けんと思はゞ、主家の寶を失ふのみか、末代里見のお家は立たず。この災難の元を糺せば、慥かに彼れらが御劍を、奪ひ取らん計略と、知つてそれと詮議のならぬは、悪人ながらも現在の、姉に向つて弓引くは、血を血で洗ふ我が身の恥辱。所詮病み疲れたる我が命を捨て、仇敵たる姉聟、姉の心を休め、悴を彼れらに養育させ、時節を待つて主家の再興、御劍もその時差上げ、忠義を立てさす我が存念。やがて冥途に赴かば、御對面な申せども、いま相果てる際の申し譯、お聞き届け下さりませう。

ト合掌して
とは云へ我れ果てなば、まだ稚けなき伜が嘆き。さぞや恨みん、不便やなア。
トこの時、本釣り鐘ゴンと打つ。櫻散る。番作、あたりを見て
我れながら不覺の嘆き。ア、、散るワ〳〵。草木心なしとは云へども、いま散る花はこの身の知死期。ア、、散るも櫻の手柄ぢやなア。
〽こぼるゝ花も身にあたる、秩父颪の夕風に、お風召すなと一間より、信乃は日頃の親思ひ、提げつゝ出づるはなだ色、殿中羽織後より、父が脊中にそつと掛け。
トこの淨瑠璃のうち信乃、襖を明け、ふせん蝶の紋の附きたる振り袖、畫面の形にて、殿中羽織を持ち、片手に膳椀を提げ、ソツと出て番作の後より着せ、下手へ居て
信乃　父樣、夕風に當つてお身の毒。日は長けれど夜食の雜炊、たんと參らず、物欲しうはござりませぬか。
番作　イヤ〳〵、身を動かす事がなければ、三度の外に何をか喰はん。其方は欲しうはないか。一夜越しの雜炊は味ないものぢや。餘計にあらば、其方が溫めて食べるがよい。サ、、これで溫めるがよいぞよ。
〽云ひつゝ火桶引寄せて、はや埋み火を掻き立つれば。
信乃　ア、、父樣、わしは欲しうござらぬゆゑ、與四郎にも遣りましたが、物たべる氣色もなし。あれがあのやうに怪我したのも、皆連れて居たわしが誤まり。いま糠介の小父樣が云はしやつた、御教書とやらの事もほんまなら、父樣には構はぬ事。わしさへ科人になつたなら、それでも濟まうが、もしもわしが居ぬ時には、明日から誰れが父樣の介抱せうぞと思へば、諦らめながら今更に、命が惜しうござります。
〽打涙ぐむ有樣に、父は猶更聲曇らし。
ト番作、火桶の灰掻きならしながら、愁ひのこなし思ひ入れあつて
番作　ホ、、その嘆きは理りなれど、何事もこれ天なり命なり。必らずともに悔むなよ。最早汝もコレ、今まで無事に成長いたしたれば、少しは物の聞分けもあらう。いま改めて某が、云ひ聞かす仔細あり。
〽よく聞けやつと小膝を進め。
先刻糠介が申せし事、其方も聞いたであらう。御教書破却せしと云ふは、跡方もなき拵らへ事。かばかりの企み

にて、小兒などは誑らかすとも、某は欺むかれんや。こりやコレ正しく蟇六夫婦が計略にて、兼ねて所持する村雨の、御劍を取らんが爲、御教書破却に科を云ひ立て、情と見せて龜笹が、老實なる媒介をすかし、欺き取らん彼れらが企て。斯く浪々に朽ち果てゝも、肌身離さず村雨の劍を所持するその謂れ、語り聞かさん、承はれ。抑も村雨の劍と云つぱ、我が主君、安房上總兩國の主たる、里見治部太夫季基公の家の重寶、然るに嘉吉のその昔。

トこれより肥前節の合ひ方

室町どのより懇望あれば、若殿義成公の繼目の規模に、差上げんすその折柄、寶藏を穿ちて劍は紛失。家の家臣金鞠大輔と申し合せ、御劍詮議のその爲に、手束もろともその場を出國。所々方々と尋ぬるうち、美濃の國垂非なる、金蓮寺のほとりにて、侫臣山下定包が、弟たる、麻呂小五郎信時に出逢ひしかば、彼の村雨の盜賊と、聲かけ合せて只一打ち。難なく劍取り得しに、我れ出國のその後にて、定包が叛逆にて、主家は滅亡、こは口惜しや殘念やと、あせれど悔めど詮なき事。まだも賴みは若殿の落胤、義實公は御家門たる、先の管領山内へお預かりあつて、彼の館にて御養育との事。この若君の御成人を待ち、劍もろとも汝を連れ行き、お家再興なさんずと、時節を見合すこの年月。蟇六夫婦はこの事を、知るべきやうはなけれども、何者に聞きしやらん、その劍を奪ひ取らんと人を語らひ、價高く買はんと云はせ、或ひは夜陰に戸尻を窺ひ、盜み取らんとせし夜もあり、彼れ計略を施せば、我れ又種々の備へあつて、遂に望みの叶はねば、口惜しくも思ふ折柄、今日計らずも飼ひ犬の、御教書破却を幸ひ、御太刀を取らんず惡企み、鏡にかけて映すが如し。なに一振の劍なんぞ、惜しむにはあらねども、重恩ある主家の賜物、我が一命に替へるとも、餘人の手には渡されず。汝が成長なせし上、彼の御劍を携へて、義實公へ奉り、身を立てさせん我が存念。長の年月隱し置いたる、劍なれども今月今宵、改め汝に讓るべし。

〽見よやと聲をかけ、硯の小刀片手に取り、梁張り日當にハツシと打てば、ドツタリ落ちる竹筒の、割れて中より顯はれし、劍の袋の紐解く／＼、取出す一腰拔き放せば、實に村雨の名も知るゝ、俄に降り來る雨の音、信乃は目近く差寄つて、鍔元より切尖まで、瞬きもせず打守り。

トこの淨瑠璃のうち、番作、天井をキッと見込み、片

手に硯箱の小刀を取つて、エイと打ち上げる。太き丸竹の筒、パッタリ落ちる。仕掛けにて二つに割れる。中より錦の袋入りの劍出る。番作、手早く取つて、明りを見せいと額にてする。信乃、手燭に火を灯し差出す。兩人キッと見る、薄ドロ〳〵にて雨車になる。

信乃　ハテ心得ぬ。今この太刀を拔くや否、今まで冴えたる夕月も、雲隱れしてアレ〳〵。

番作　假に降り來る雨の足。これぞ名に呼ぶ村雨の、水氣を催ほす劍の奇瑞。

信乃　そんなら兼ね〴〵お話しのあつた、主君里見の家の重寶、村雨と名けしは

番作　拔けば玉散るこの名劍。殺氣含んで拔き放せば、現はれ出づる御太刀の雫。

信乃　不思議を見るは今目前。

番作　寶に千載の寶と稱せん。

信乃　世にも稀代の名劍ぢやなア。

〽親子は顏を打合せ、稍打眺め居たりしが、番作刃を丁と納め。

ト兩人キッと眺めて、番作、チョンと納める。雨車やむ。

番作　如何に悴、これを汝に讓る上は、その樣にては相應せず。髻を短かく切り、今よりその名も改めて、犬塚信乃戍孝と名乘り、父の遺命を相違せよ。兼ねては二八の春を待ち、男にせんと思ひしかど、再發なせしこの金瘡、長病に苦しむ果、所詮存命思ひも依らず。

信乃　そりや何事を仰しやるぞ。例へ金瘡に苦しむとも、本復の期を待たず、今お果てなされんとは、御教書破却の云ひ譯に、我れに代らん御心。

〽勿體なやと云はせも果はず、番作から〳〵と打笑ひ。

番作　ヤア、御教書の儀は僞はりなれば、搦め捕らるゝ苦もなし。さりながら、我が姉の企みにもせよ、糠介を以て其方が事、懇ろに云ひ來しこそ幸ひ、死する期近き我が命、目のあたりに腹掻き切つて、汝を姉に賴み置かん。

信乃　イヤ、心得ぬそのお詞。蟇六どの夫婦の衆、親しき一家でありながら、刃を研ぎ合ふ仇敵、それと知りつつ我れを預け、お腹召すとは合點が行かぬ。

番作　その疑ひは尤も至極。先刻認め置きたる我が書置。

ト以前の遺書を取出して

これぞ即ち我が遠計。今より姉の手を借つて、無事に汝を養育さすやう、認め置いた遺書を以て、必らず劍を人

手に渡さず、深く包んで成長なし、主家の再興に力を添へ、忠義の武名を輝かせよ。

〽早これまでと村雨の、太刀を再び取上ぐれば、慌てふためきその手に縋り。

信乃　後の事まで思し召し、御自害あるも、これ偏へに、我が子の爲のいつくしみ、背くではなけれども、それと定まる事もなく、今お腹をなされては、狂ひ死と人も云はう。是非止まつて下さりませ。

〽殺しはせぬと縋りつき、只さめ〴〵と泣くばかり、父も名殘りは盡きせねど、斯くては果てじと聲勵まし。

番作　ヤア、うつけ者め、死すべき時に死なざれば、死に勝る恥多し。主家滅亡のその時に、殉死を止まり、十餘年の命を長らへ、今また子孫の上を思ひて、いつまでか長らふべき。思ひ立つた我が存念、妨げ致すか、不孝者め。サ、、爰放せ。

信乃　イヤ〳〵、例へどのやうに叱られても、こればかりは留めまする。免して下され、コレモシ。

〽刀の柄に縋りつき、もぎ放さんとあせれども、小腕に及はぬ悲しさ辛さ、父は手疵の痛むも苦にせず、放せ放せと怒りの高聲、開けど放さぬ一生懸命、果しなければ番作は、心強くも振り放し、我が子を膝に敷きながら、氷の如き太刀引拔き、腹へぐつと突き立つれば、こは何とせん悲しやと、身を悶えても盤石の、父の重りに引敷かれ、なんと詮方泣くばかり、手負ひは息をほつとつき。

トこの淨瑠璃のうち、兩人よろしくあつて、信乃、髮ほつるゝ事あつて、トヾ番作、信乃を引敷き腹を切る。信乃、大泣きに泣き落す。また雨車。

番作　コリヤ〳〵悴、斯く裏を掻いて突き立てたれば、今更悔んで詮なき事。泣くな悔むな。

信乃　アイ〳〵。

番作　必らずともに我が遺言忘れぬやう、忠義の武士と仰がれよ。さりながら、これぞ親子の一世の別れ。

〽信乃の手を取り引寄せて。

よく顏見せてくれいやい。

〽我強き父も今際には、保ち兼ねたる荒涙。

四十餘年の張り詰めし

〽弓矢の意地も恩愛の、嘆きに濡らす袖の雨、落ちて流れて鐵上川、いとゞ水嵩まさるらん。

番作　ア、、今さら悔んで詮なき事。この上はちつとも早く、介錯いたせ。

信乃　ぢやと云うて、これがマア。
番作　いつまで苦しみかけるか。
信乃　さうぢやなけれど、否ぢや〳〵。
　ト頭振りて泣く。
番作　ヤア、未練者め、うぬも番作が悴でないか。
信乃　それぢやと云うて。
番作　エヽ、卑怯者め。
　ト睨みつける。
信乃　そんなら介錯しませうわいなう。
番作　オヽ、出かす〳〵。イデこの上は冥途へ赴むき、主君の殉死に遅れし云ひ譯。ソレ。
　〽心静かに双手をかけ、キリ〳〵と引廻す、刃の露と諸ともに、信乃は手早く拾ひ上げ、思ひ切つたる介錯に、首は前にぞ落ちにける、かゝる嘆きの折柄に、俄に響く人寄せ太鼓、信乃は空しき父の體、抱きかゝへて伏したりしが、亂れし髪を掻き上げて、外面に響く物音に、耳そば立てゝ突立ち上がり。
　ト番作に介錯して、大泣きに泣き落す、よき程にドンドン太鼓を打込む。信乃、キッとなつて立ち上がり。
信乃　ハテ心得ぬ。遥かに聞ゆるあの遠巻き。今こそ爰に合戰あつて、公に叛く者は、必らずこれを討つとは聞けど、あたりに叛逆あるではなし。ムウ。
　〽仔細ぞあらんと御劍と、書置しつかと取納め、振りの袂を引きちぎり、父の頭を押包み、いで善智識の引導受け、清く成佛なさしめんと、一人頷くその所へ、息もすた〳〵糠介が。
　ト糠介、橋がゝりより、尻からげにて走り出て
糠介　コリヤ〳〵息子よ、番作どのが腹切つたを、最前の役人が聞きつけ、大事の科人が死んだらば、わが身やおれを取逃がすまいと、近所の奴等を呼び集め、追ッつけ爰へ來るといやい〳〵。
信乃　ムウ、すりや父の最期を漏れ聞いて、御教書破却の科人と
糠介　何がなしに引ッ縛らう。ぢやつと大庄屋の伯母の所へ。
信乃　イヤ〳〵〳〵、父の遺言耳に殘り、腹綿に沁んであれど、假初めにも科あるこの身。伯母様に任すは本意でない。
糠介　そんなら一旦立退く氣か。それもよからう。併し、其まゝで行かれもすまい。



初演當時



の　錦　繪

ト始終ドン〳〵静かに太鼓打つ。

アレ〳〵、だん〳〵に太鼓が近うなつて來る。そしてマア、もう今朝からのもや〳〵で、腹がへつて堪らぬ。われも定めてへつたであらう。旅の用意もせにやならぬがいよ〳〵わが身も立退くか。

信乃　オヽ、一先づ爰を逃げ延びて、後しての後に身を任さん。

〽包みを腰にしつかと結び、父の亡骸隠すやら、旅の用意の何それと、心急ぎの折しもあれ、畑上高成どつと押寄せ。

ト向う戸家の内より

語路　参れ〳〵。

ト糠介、向うを見て

糠介　ソリヤ來をつたぞ。

ト糠介は飯があるかと捨ぜりふにて、納戸へ入る。此うち向うより語路五郎、襷、鉢巻、討手の形、捕り手大勢連れて出る。信乃、太刀を腰に差し、首の包みを腰に附け、二重へ腰かける。語路五郎、本舞臺へ來て

語路　如何に大塚。

ト乗り地になる。

犬侍ひの番作めに、先刻腹ごろ嚙み合うたが、まだらまだらと埒明かず、討取らんとは思へども、いぬる振りして窺はせば、ちんころ〳〵とくたばつたは、一物あるに極まつたり。唐犬叶はぬこの上は、信乃め捕つたと續いてかゝれ。來い〳〵〳〵〳〵〳〵。サア返答は、わんとわんと。

〽わんと〳〵と呼はつたり、身繕ろひして大塚信乃。

信乃　オヽ、面白い〳〵。

ト乗り地になる。

父のこの世にあるうちは、女子の形にてあつたゆゑ、指さししられて笑はれたが、御遺言を聞く上は、もう今日からは大人役。力試しがして見たい。斯う見渡したおつさん達、力のありそな人はない。一人づゝは面倒な、一度にかゝりや。

〽一度にかゝれと仁王立ち。

トこれより鳴り物になり、皆々一時にかゝる。信乃、程よく立廻つて、天井へ駆け上がる。皆々見失うて、兩方へ別れ入る。

〽むら〳〵ぱつと逃げ散つたり、いでこの隙に立退かんと、心用意の糠介が。

ト床の合ひ方、ドン／＼かすめて、奥の襖より

糠介　サア／＼、草鞋ぢや。脚絆はあつた／＼。

ト云ひながら出て、最前の信乃が持つて出た膳見附け

オゝ、爰に膳も飯もある。息子よ、どこへ行た／＼。

ト天井鴨居の上より、信乃、首出して

信乃　小父さん。おりや爰に居る／＼。

ト糠介、これを見て

糠介　アゝ、途方もない所へ上がつて居るな。サア、爰へ下りて、われも一膳食てから行かんかえ。

信乃　オゝ、さうしやんせう。小父さん、お前も食はんせんか。

ト云ひながら、天井より飛び下りる。糠介、膳を据ゑて

糠介　イヤ、おりや今、奥で食べて來たワ。サア／＼、ちやつとちやつと。

ト信乃、飯食ひにかゝる。始終ドン／＼、糠介、ウロウロして

アゝ、モウ、あのドン／＼には、氣味が悪うてならぬ。

ト捨ぜりふながら、脚絆を廣げ、草鞋をすげなどして居る。信乃、一膳食うて

信乃　もう一杯下んせ。

糠介　オツトシヨ。

ト飯を盛るうち、捕り手二人、信乃の後より、コリヤとかゝるを、振りほどいて、立ち上がるうち、糠介、飯を盛つて

ソリヤ。

ト差出す。信乃、二人を捻ぢ伏せ、飯を取つて食ふ。この時、向う戸家の内より

皆々　ソリヤア／＼。

ト大勢の聲する。糠介、ウロ／＼して

糠介　また來居つたぞ。

信乃　ドレ何所に。

ト食ひながら、門口へ出ようとする。二人、コリヤと取りつく、程よく門口へポン／＼と投げて、上へちよつと上がつて延び上がり、キツと見得。向うを見て、また飯を食うて

茶を下んせ。

糠介　オツトシヨ。

ト土瓶を持つて行く。ちよつと立廻りて、信乃の持つて居る茶碗へ移す。捕り手おこづく。茶こぼれうとす

ると、信乃、ドツコイとポンと投げて、がさ〳〵と掻き込む。捕り手又、コリヤとかゝるを、ポンと投げて

信乃　もう一杯。

糠介　まだかい。

ト盛りにかゝる。大勢出て、双方へかゝる。糠介も飯を盛りながら、世話立廻りのをかしみあり、信乃、キツととまる。

ソリヤ。

ト盛つて渡す。信乃、食ひながら立廻り。糠介は脚絆草鞋を穿きながら、信乃にも穿かさうとする。信乃、飯を食ひしまひ、旅用意の心、立廻りよろ〳〵あつてこのとまりに大勢一時に

皆々　ソリヤア。

ト皆々入れ亂れになり、信乃、ホイと奥へ入る。捕り手皆々、ソリヤアと附いて入る。糠介、ウロ〳〵して居る。信乃、上手より出でゝ

信乃　小父さん。

糠介　オヽ、そこに居るか。ちやつと行かんかい。

信乃　ムウ。

ト行かうとして、下手の與四郎犬を見て、

いま落ち行くに、心殘りはあの與四郎。あれを得てより我れは産れ

糠介　又あの犬ゆゑに親を失ふ。

信乃　これ契りあり恨みもあり

糠介　オヽ、さうとも〳〵。此まゝ捨てゝ置かうより

信乃　とても助からぬこの手疵。

ト此うち犬、ひよろつきながら出て、信乃の前へ覺悟の思ひ入れ。

さうぢや。

トぽんと切る。犬ドロ〳〵にて、雲氣の合ひ方、雨車にて、犬の疵口より、白き玉、空へ引き上げる。信乃草井戸の側へ片足かけて、キツと見得になる。糠介、チヨンと畏まり、双方見上げて

信乃　アレ〳〵、いま與四郎の疵口より、顯はれ出でしあの玉は、兼ねて聞いたる父の話し。亡き母一子を祈らん爲、瀧の川の辨財天に祈誓をかけ

糠介　オヽ、その話しおらも聞いたが、この犬を道で拾ひ戻らうと思うた時、向うの方に結構な、女子の形の神樣を、夢のやうに拜むと思ふと

信乃　神女一つの白玉を授けられしに、母誤まつて受け外

し、玉は犬のほとりに轉ぶ。
糠介　それを取らうと捜せども、どうしたものやら解らぬじまひ。
信乃　今この與四郎が最期の折柄、身の内より、飛び散る白玉。
ト劍をちやんと納める。雨車やむ。白玉、信乃の前へ落ちるを、直ぐに取上げ
こりやコレあり〳〵、孝の字を書いたる白玉。
糠介　死なれた内儀が尋ねて居た、玉に違ひはないわいの。
信乃　斯く手に入るもこの身の守り。チエ、忝ない。
ト戴く。此うち、捕り手皆々出て、兩人へ、ソリヤ、とかゝる。信乃、ポン〳〵と投げる。糠介は程よく揩り抜けて
糠介　この上は、ちつとも早う。
ト何をとかゝる。糠介、摑み合ひながら、足持つて引きこかし、上へ乘る。信乃、烈しく皆々を投げて
信乃　オヽ、合點ぢや。
ト銘々蛇の子とろのやうにかゝるを、信乃、體をかはす。捕り手皆々、將棋ごかしにこける。糠介、顚へながら、端の者を踏まへて強い見得する。信乃、ムウと笑ふ。この見得よろしく、チョン〳〵。
ト幕の外へ、この場より大幕まで、又ぞろ七ヶ年相經ち幕候ふ狂言、左樣に御一覽下されませうと書付けの貼り物を出す。

四段目　拈華寺の段

役名　荘官、蟇六。同女房、龜篠。同娘、濱路同下女、お殿。同、お鶴。同下男、脊助。網干左母次郎。簸上宮六。卒川庵八。軍木五倍二。下男額藏。

造り物、見附け、綺麗なる寺の惣門、上下土塀、葷酒山門の建石、松の吊り枝、すべて、大塚村菩提寺門前の模樣よろしく、好き所に床几二脚並べ、下男二人掃除して居る。この見得、禪のツトメにて、幕明く。

下一　ヤレ〳〵、草臥れた〳〵。この門前の掃除には、ホ

ッとする。ちいつと休まうぢやないか。
下二　それ／＼、今日はこの村の庄屋、藤六どのゝ所の佛事ぢやと云うて、ろく／＼にお布施も上げぬ癖に、ポンポンと云はれるので、こちらまで辛どさが増すわい。
下一　イヤ又、似た者は女夫と、あの嬶アのえらさ、お住持に逢へば喋々と、酢でも酒鹽でもいける奴等ぢやないぞいの。
下二　オヽ、酒鹽で思ひ出した。今日はまた油づめの料理で、後には例の精進。酒などせしめうかい。
ト始終禪のツトメ。門の内より、同宿一人、出て來て
同宿　コレ／＼、掃除をしまうたら、味噌擂るのを手傳うて下され。
下一　ヤレ情ない。また味噌擂るの手傳ふのかいなう。
下二　味噌擂るのは坊主の役ぢや。味噌擂り男と云ふは昔から聞かぬぞや。
同宿　イヤ／＼、さう云はしやるな。庄屋どのゝ召仕ひ、額藏どのさへ最前から、手傳うて居られるのに。
下一　ムウ、あの額藏と云ひ、信乃さまは、さりとては神妙な氣の付く人。
下二　サイナウ、今日の佛事の志しで、こちらにもこの包み金。
同宿　サア、それぢやに依つて、庄屋どのに拘はらず、早う來て手傳はしやれ。
下一　オヽ、それもさうかい。さらば行て手傳はうか。
同宿　サア二人とも、ござれ／＼。
ト右の鳴り物にて、三人、門の内へ入る。と茶摘み唄に矢張り右の鳴り物にて、向うより、龜笹、三つ日よりは少し老けたる拵らへ、後より、濱路、振り袖娘にて、お殿、お鶴、下女の拵らへ。後より、脊助、花手桶に杜若を活けたを提げ出る、皆々花道にてとまり
つる　申し／＼御寮人樣、お辛どうはござりませぬか。
濱路　イヤ／＼、辛どい事はないわいなア。
との　なんの御寮人樣がお辛どからう。今日の佛事を大抵樂しみにして、お出でなされる事ぢやないわいの。
脊助　そんなら御寮人樣も、お精進の料理がお好きかいなう。
との　オヽ、脊助どのとした事が、なんのさもしい、其やうな事を御寮人樣が。
脊助　それでも食ふ爲の浮世ぢやもの。
との　イヤ／＼、御寮人樣の樂しみにしてござるのは、ア

ノナ。

ト云はうとするを、濱路、龜笹にこなしあつて、打消し

濱路　アヽコレ、其方衆は何を云やるぞいの。この間から氣合ひが惡かつたけれど、今日は久し振りの寺詣りで、氣が晴れて、大抵樂しんで來た事ぢやないわいなう。ナア母樣。

龜笹　オヽ、それ〱、蚤にも喰はさぬ大切の娘、煩らうてたもつたら、連合ひの大抵心遣ひ。それゆゑ今日の御法事を幸ひ、氣ほうじがてらに連れて參つたのに、草臥れて堪るものかいなう。

つろ　信乃さまと額藏どのとは、この間からお寺の逗留、さぞお待ち兼ねでござりませう。

春助　オヽ、おれも非事の出るのを、大抵待ち兼ねて居る事ではないて。

龜笹　エヽ、さりとては癇病みのやうに喧ましい。この頃は田の草取りで、家内の者に障りなけれど、弟の番作が七回忌の、佛事勤めたいと信乃が賴み。この佛事さへ勤めたら助かる事と、忙しい畑仕事を休まして連れて來てそれも番作が退けて置いた臍繰り金を、信乃が寺へ上げて勤めるゆゑ、内の金が減らぬを、一人行くも皆行くも同じ事と思ふゆゑ、家内殘らず連れて來たのぢや。爰で思ひ入れ喰うて、内で喰はぬやうにしたがよいわいの。

春助　こりや珍らしい。何時も杓子の惡いお家樣。今日は只ぢやと思うて、お許しが出たワ。

龜笹　エヽ、又せんまめがその口を。

ト睨む。春助、首縮める。濱路、こなしあつて

濱路　アヽ、母樣、もうよいわいなア。

龜笹　エヽ、嗜なみ居らう。

濱路　サア、お寺へ早う參りませうか。

龜笹　ほんに、兎かう云ふうちに、お寺へ參つた。サア娘、おぢや。

皆々　サア〱、お出でなされませ。

ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來る。所へ橋がゝりより、左母次郎、中月代、羽織、袴にて、浪人の拵らへにて、出て來て行き逢ひ

左母　オヽ、これは〱、大塚氏の御内室御息女、お早い御參詣でござりまするな。

龜笹　オヽ、これは網干左母次郎さま、ようこそ〱、御參詣下されました。マア、これへお越しなされませ。

左母　然らば御免下されい。

ト腰かける。濱路、ツンとしてこちらへ來て、龜篠の側へ腰かける。

龜篠　コレ、娘とした事が、ソワ／＼せずと、チツとして居やいなう。左母次郎さま、今日は早う參らうと存じましたれど、姫御前と云ふものは、風呂ぢやの髮ぢやのとツイちよつと埒明かず、やう／＼只今參りました。

左母　左樣でござらうとも。昨日お使ひを下されたゆゑ、今朝未明より、お手傳ひに罷り出まする筈のところ、この節は手蹟、鳴り物、香茶の湯なぞと、追ひ／＼に弟子どもが殖えまして、ちよつと出ようと存じても、イヤ朝稽古の通ひ習ひのと申して參りますから、心にかゝりながら隙取りました。

龜篠　イヤモ、あなたは元一かどのお身の果。今はこの村で手蹟の御指南。その上御器量なに依つて、琴三味線の香茶の湯のと、何一つ拔け目のない先生樣。日頃からお心安いあなた樣ゆゑ、何はなけれど今日の佛事、手傳うてもおもらひ申したし、娘もあなたのお出でを、大抵待ち兼ねて居りました事ぢやござりません。

濱路　ア、申し母樣、なんのわたしが。

龜篠　ア、これはしたり、何をマア斟酌する事がある、たつた今、お噂申して居ながら。ホ、マア、一服お上がりなされませ。脊助、お寺へ行て、莨盆借つて來やれ。

左母　イヤ／＼、お構ひなされますな。イヤモ、御息女は御器量の好い上に、今日は別してのお化粧。誠に天人も欺むくばかり。御內寶には好いお子持ち。此やうな美人を、何國の誰れが手折るやらと存ずると、氣にかゝるやら腹が立つやら、ハテ、お羨ましい儀でござるて。

龜篠　イヤモウ、蔭裏の豆も彈け時と、側の者らが口喧ましいので、娘がはしたならうかと、張り番するのに大抵むづかしい事ではござりませぬ。

左母　左樣でござらうとも。時に今日、當寺に於ての御佛事は、御先祖の御年回か、但しは又、親類の御年回でござるか。如何の儀でござるな。

龜篠　成る程、あなたには御存じないは御尤も。今日の佛事は、私し方に掛り人の信乃が父親、私しが爲には眞實の弟、大塚番作が七回忌の年回。元素が親は、安房の國里見家の家來、大塚匠作と云ふ武士、二十年以前、里見家の沒落前に父御は死なれ、跡目は弟の番作に立たせ、この大塚村は先祖からの領地もあり、それ幸ひに私しが

片付き料に、取つて退いたその後で、里見の家は沒落して一家中は散り〱ばら〱。弟の番作は討死もする事か、何所の國へか逃げて行く方知れず、女房を拵らへて產み落したあの居候ふの信乃。親子三人この村へ戻つて來たれど、私しは其うちに、蟇六どのと云ふ聟を入れ、夫婦が惡い心持たねば、段々とお上の請けがよさに、五ケ村の庄屋を許されて、威勢の強いを番作は遺恨に思ひこの村へ戻りながら、瘦せ我慢に姉が家へは出ても來ず、親子三人が村中を賴んで貧乏暮らし。其うち母親も死にはする、番作もしまひは不時な死やう。殘つた者は信乃一人。何か子供の時分から、手に合はぬ腕白者。大勢の人に疵つけ暴れ廻れど、叔父姪のよしみを思ひ、捨ても置かれず、十二の年から此方の內へ引取つたれど、親によう似た變屈者。世話する蟇六どのゝ用は足さいで、生不覺の讀み物劍術、どうで碌な者にはなるまいと、行きなりに育つたが、今年は親の七年と、この間からこの寺に逗留。私しが爲には弟なり、蟇六どのの爲にも小舅の事、生きて居るうちは敵同士のやうにしをつたゆゑ、憎い奴とは思へども、死んでしまつたが罪亡ぼしと佛心を起し、蟇六どのにも得心させ、今日の佛事を勤めまするのでござりますわいな。

左母　ハヽア、それで樣子がサラリと解りました。何から何までのお心遣ひ、お世話の段、感心いたしてござる。して御主人蟇六どのにも、御參詣でござるかな。

龜篠　サレバイナア、その中へこの近村を御巡見として、先日こなたもお招き申しました時のお客人、御陣代簸上さま、卒川さま、御代官の軍木さまもお越しゆゑ、連合ひは今朝から御案內がてら行かれました。追ッつけこれへ來られる筈。

左母　それは御主人には御繁用。拙者はせめて御佛事の、お手傳ひ申さうか。

龜篠　それは御苦勞さま。左樣ならばお寺へ參つて、左母次郎さま。

左母　然らば御息女には、拙者と一緒に。

ト手を取るを振り切り

濱路　イエ、わたしはちつと用事が。

龜篠　ハテマア、おぢやと云ふに。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト右の鳴り物になり、皆々門の內へ入る。この鳴り物にて、向うより、簸上宮六、卒川庵八、ぶッ裂き羽織

袴大小にて、次に軍木五倍二、袴、羽織、大小。後より、蟇六、三つ目よりは餘程老けた拵らへにて、袴、羽織、一本差しにて、庄屋の拵らへにて、付いて出る後より、家來三人、鎗挾み箱、持ち出て、花道にてとまり

蟇六　各々樣には、さぞお草臥れでござりませう。幸ひこれなるは私しめが賴み寺。先づ〳〵あれへござつて、暫時の御休息遊ばされませう。

宮六　オヽ、さう致さう〳〵。イザ、庵八どの。

庵八　宮六どのには、先づ〳〵。軍木氏にもお來やれ。

五倍　先づ〳〵。

ト皆々本舞臺へ來て、上手の床几に、宮六、庵八、下手の床几に、軍木、蟇六は下につくばひ、家來、橋がかりへ居並ぶ。鳴り物、始終かすめる。

宮六　イヤナニ五倍二、其方は當大塚村を始め、七ケ村の代官。また蟇六は庄屋の職を申しつくるも、一方ならぬ大事の役目。某斯く陣代の役目勤めるうちは、何事に依らず、何も心配いたすには及ばぬ儀だぞや。

五倍　有り難い仰せを請け、某は申すに及はず、皆簸上さま亭川さまの御厚恩を蒙むらぬ者ござらぬてや。ナウ蟇六。

蟇六　イヤモウ、分けてお心安う御贔屓下され、有り難い仕合せにござりまする。元來當地表は、女房龜篠が親、大塚匠作が後なれば、番作が取るべきところ、各々樣の御推擧に依つて、龜篠方へ聟となり、苗字相續、その上七ケ村の庄屋を仰せ付けられ、何から何まで御厚志の段寐た間も忘れは仕りませぬ。

庵八　イヤ、さうあらう。某も簸上どのも、これに居る五倍二始め、其方の事さへ申せば、村中の蛆虫めらが、なんのかのと申しても、諸事の指圖は簸上氏と某任せなれば、誰が點の打ち手もないから、大船に乘つたと思うて居やれサ。

宮六　それはさうと、先夜の蟇六が宅で饗應、面白さはええ忘れぬてサ。

庵八　イヤ又、膳部の善盡し美酒の美盡しよりは、息女の糸竹、イヤモウ、彼の竹取りの翁が育てた、赫夜姫も斯うはあるまいと存じたてや。

五倍　御兩君ともにその時のお噂ばかり。蟇六、厚うお禮を申し上げたがよい。

蟇六　これは〳〵、痛み入つたる御挨拶。各々樣方の御厚

恩、なか／＼あの位の御饗應で、萬分が一も盡されませねど、ほんの田舍料理の心ばかり。不調法なる娘が絲竹面目次第もござりませぬ。

庵八　イヤ／＼さうでない。その時の面白さは、今に忘れぬ。ナウ五倍二。

五倍　左樣でござりまする。イヤモウ、よく／＼お心に叶うたと見えて、大抵のお喜びではない。蓁六も面目でござりませう。

宮六　時に五倍二、身共これより隣村を檢分の役目。蓁六は今日この寺にて、佛事を致すとの事。最早參るに及ばぬから、身共と卒川氏と參れば相濟む事。其方は先刻ちよつと申し進じた儀を、蓁六へとくと相談いたしておくりやれ。

五倍　エ、、先刻の。エ、、承知仕りました。さりながら拙者も共に參りまして、話しは後程ゆる／＼と。

宮六　イヤ、村方の儀は、年寄りどもばかりでよし。卒川氏と兩人參る程に、件の儀をちつとも早く。

五倍　でも、御兩所ばかりでは、村方の者に粗忽があつた時は。

庵八　これサ五倍二、どうしたものぢや。少々の粗忽があつたればとて、今日は免して遣はす。只今の一件、鎹上氏にはえら焦れでござる程に、隨分首尾よう。

宮六　五倍二々々々。身共生れ付いての近がつゑ。早く彼の上田へ、間棹が入れて見たいてサ。

五倍　然らば御意に任せ、後にてとくと申し聞かせませう

宮六　そこをよろしう頼み存ずる。然らば蓁六、今日は大儀。

蓁六　イヤ／＼、私しめはお見送り。

宮六　イヤ／＼、參るに及ばぬ。寢木に申し置いたる一儀もあれば、これにてとくと承り、好きに吉左右相待ち居るぞよ。

五倍　委細は五倍二、呑み込みました。後よりそれへ。

宮六　然らば兩人。イザ卒川どの。

庵八　先づ其許より。

宮六　家來參れ。

ト唄になり、宮六、庵八、家來を連れて、橋がゝりへ入る。あと合ひ方。

五倍　サア蓁六、これへ來やれ。

蓁六　樣子あり氣な鎹上さまのお詞。御用の筋は、何事でござりまするな。

五倍　イヤ、案じ召されな。餘の儀でない、息女の事サ。
蟇六　ナニ、娘の事とはな。
五倍　いつぞや鏡上氏を饗應の折柄、息女濱路を見染められ、日夜思ひに胸を焦し、色に出でたる病の顔色。その病根を尋ねしに、何卒某に仲立ち致しくれよとの頼み、こりやコレ合うたり叶うたり。當時出頭の御陣代を聟に取れば、貴殿の家内は云ふに及ばず、仲人いたした身共まで浮み上がると申すもの。なんと承知は召されぬか。
蟇六　何事かと存じますれば、賤しい我れ／＼が娘づれを御聟君は陣代の鏡上氏、お仲人は軍木さま、誠に以て大慶の至り。
五倍　ムウ、すりや早速に承知召されて、鏡上氏へ差上げる心かな。
蟇六　老の喜び、早速お請け申したけれど、爰に一つの障りがござりまする。
五倍　ナニ、一つの障りとは。
蟇六　あなた様にも御存じの通り、大塚の血筋たる、番作が悴の信乃め、元より心の合はぬ親番作、死去の折柄、村中の者どもが一統に推して、大塚の跡目にも立てんと致せど、それを請けず、居候ふ同然に置きましたも、彼奴が身に付いた田地もあり、當分の口塞ぎ。娘濱路と娶合して、跡目を繼がすと村の奴等を一杯喰はせ、折を見合せ越度を拵らへ、追ひ捲らうと存ずれども、なか／＼我れ／＼の手に合はず。彼れこれするうち早七年。最早打捨てゝも置かれぬゆゑ、今日か明日かと謀事を廻らしとつ追ひつ思案最中、併し、思ひ付いたる工風もござれば、今日の佛事をしまうた上、彼れが身の仕舞ひを付け、その上では此方より、お願ひ申しても娘を差上げ、この身の榮華に有りつきたし。何卒今暫らくの御猶豫を、偏へに願ひ上げまする。この段あなたのお執成しにて。
五倍　アヽ、これサ蟇六、さりとては貴様に似合はぬ道立て。例へ一旦の契約ありとて、不縁いたすは親の高下。それを彼れこれ申す村の奴等は、片ッ端に水牢。なんの遠慮に及ぶ事。もし返答延引すれば、互ひの身の上。陣代と村のうづ蟲とは何れが重い、只今も聞く通り、鏡上氏には近がつゐ、早く思案を極めた上。信乃めを失ひ差上げねば、申し合せて置いた今までの私慾も皆くれはまだ。今お請けを致したがよい。
蟇六　イヤモウ、仰せの通り、高の知れた二才めと思へども、なか／＼我れ／＼にも及ばぬ力量才覺。イヤ、よろ

しうござりまする。早速娘を差上げると、お請け申し上げて下されませう。

五倍　オヽ、それで身共も安心いたしした。この通り申し上げたらば、定めてお喜び。して、貴公よりの返事はいつ頃。

蟇六　信乃めが體の落着も、いづれ夕方までに待つとお返事。

五倍　しかと相違はあるまいな。

蟇六　なんの相違がござりませう。併し、彼れが所持する彼の一品、此方へ首尾よく取つた上、追ひ捲るか打ち放すか。

五倍　もし間違ふと身の上ぢや。

蟇六　ハテ、ようござりまする。呑み込んで居ります。

五倍　然らば蟇六。

蟇六　五倍二さま。

五倍　ドリヤ、簸上氏を喜ばさうか。

ト唄になり、五倍二、橋がゝりへ入る。あと合ひ方。

蟇六　先づ巧いワ。願うてもない娘が出世。陣代を聟に取れば、いよ〳〵、威勢は朝日の如く、榮耀榮華は心の儘その上、信乃めが所持なす一腰、あれこそ違はぬ村雨の劍。番作から讓り受け、隱し持つたるに相違はない。あれを此方へしてやつて、岩木素藤さまへ差上げたら、此方も寶の摑み取り。こりや餘程運が向いて來た。併し、一筋縄ではゆかぬ奴。ハテ、なんぞ好い工風が、ありさうなものぢやが。

ト手を組んで思ひ入れ。この時、土太郎、道樂者の拵らへにて出て

土太　その相談に乘りやんせうか。

ト蟇六、恟りして

蟇六　ヤア、其方は土太郎。すりや最前からの樣子を聞いたか。

土太　何ぢややら、耳寄りらしい儲け口。以前はこちらが仲間の粹ぼう。今では大塚の庄屋どの。金儲けになる事なら、おいらもちつとさしてもらはうか。

蟇六　オヽ、好い所へ來合せた。隨分金になる事ぢやが、わりや見事やつて見る氣か。

土太　イヤモウ、金にさへなる事なら、どんな事でも付合ひぢや。

蟇六　オヽ、そんなら、其方に云うて聞かさうが、爰で云うては壁に耳。オヽ、あの渡し場へ行て云うて聞かさう

土太　そんなら親方。
藤六　土太郎、來やれ。
　ト唄になり、兩人橋がゝりへ入る。禪のツトメ、少しバタ／＼にて、門の内より、濱路、逃げて出る。左母次郎、後より追ひかけ出て
濱路　アレ、惡い事なされまするな。
　ト床几の廻りを逃げるを
左母　イヤ／＼、ちよつとぢや／＼。濱路どの、マア待たつしやれ。
濱路　ア、申し、爰お放しなされて下さりませ。
左母　イヤ／＼、滅多にや放さぬ。マア、これへかけさつしやれ。
　ト無理にかけさす。
コレ、濱路どの、こなたは聞えぬお人ぢやぞや。拙者も元は室町どのゝ身内にて、一廉の侍ひなりしが、武藝は元より諸藝まで、抜け目なき某なれば、朋友の讒言にて、お暇賜はり、いま斯樣に致し居れども、どうで浪々いたしては居らぬ體。今にもあれ某が武藝を慕ひ、諸大名が抱へに參れば、一廉の立身出世。さすれば御身を妻に貰ひ、藤六どの夫婦をば、安穩に見送る心底。母御龜筐どのにも、疾よりお話し致しあれば、云はゞ、マア云ひ號け同然。それに拙者が顏を見ると、ひん／＼とさつしやるは、さりとはつれないお人ぢやぞや。
濱路　成る程、お志しは有り難うござりまする。お前樣にも御存じの通り、少い時から云ひ號けの、信乃さまと云ふ殿御のある身。末は夫婦ぢや女夫にすると、親の許した緣結び。まだ婚禮は致さねど、主ある女を捉へて、あのゝ物のと仰しやるは、お侍ひにも似合ひませぬ。猥らな事は嫌でござんす。重ねて其やうな事、假にも云うて下さりまするな。
左母　ハ、、、、、それがこなたの馬鹿正直。こなたは信乃どのに操を立て、末は夫婦と云はしやつても、あの信乃どのは、親御達の氣に入らぬ仁、殊には出世の望みありとて、爰に長居はせぬ人。それをうか／＼待たうよりは、某が詞に從ひ、ツイ應と得心すれば、可愛がつたりがられたり、直ぐに夫婦の固めの杯。これ程に思ふ身共が心を、そもじもちつとは推量して、ツイ應と云うて下され。サア／＼どうでござる。斯う云ふうちにツイちよつと。
　ト抱きつかうとするを振り拂ひ

濱路　エヽ、アタ穢らはしい。爰お放しなされませいなア
左母　イヽヤ、ドッコイ、滅多にや放さぬ。今日は母御の情にて、結ぶの神の引合せ。是非ともちよつと手付けなりとも、渡さにやならぬ。
ト無理に抱きつく。濱路、振り放して、アレエ〳〵と逃げ廻る。左母次郎、捨ぜりふにて、追はへて行く。此うち、矢張り禪のツトメにて、門の內より、額藏、ぼつとせ下男の形にて出て來るはずみに、左母次郎、額藏に抱きつく。額藏、エヽと振り放す。このはずみ眩に當り、思はず當てられ、ウンとへたる。濱路、これを見て
濱路　オヽ、其方は額藏。
額藏　御寮人樣、最早御佛事の始まり、お家樣がえらう探してござりました。ちやつとお出でなされませ。
濱路　サア、最前から心の急くのに、左母次郎どのがアタ猥らな。
額藏　イヤ、何もかも好う見て居りました。
濱路　それでもあんまり腹が立つて。
ト此うち、お殿、お鶴、出て
兩人　御寮人さま〳〵、最前からお家樣が、お呼びなされまする、
額藏　サア〳〵、お出でなされませ。
濱路　エヽ、あんまりなお人ゆゑ。
兩人　マア、お出でなされませいなア。
ト濱路、ひんとする。唄になり、兩人付いて門へ入る額藏しか〳〵あつて、左母次郎に活を入れて
額藏　ア、申し〳〵、網干の先生さま、なんとなされました。起きさつしやれませう。
ト介抱して起す。左母次郎、心付き起きて、砂を拂ひ
左母　貴樣は額藏。ても酷い目に遭はしたな。
額藏　なんと仰しやりますやら、一體どうなされたのでござりまする。
左母　どうしたとはたつた今、貴樣と出合ひ頭に。
額藏　イエ〳〵、私しはお家樣が、旦那樣のお出が遲いゆゑ、見て來いと、例の苛立て。出て來たところが、お前が爰に轉けてござりましたゆゑ、御介抱いたしました。
左母　ムウ、何か貴樣が爰へ來ると、早某は爰に轉げて居つたか。
額藏　なんぢややら、根ッから譯が知れませぬて。
左母　ムウ、さては今のすつてんころりは、濱路どのが。

オヽ、それで解つた。何は然れ。今一應。

ト行かうとするを留め

額藏　これはしたり、先生樣、おらに介抱さして置いて、一禮も云はずに。さりとてはキヨト〳〵しい。

左母　ムウ、成る程、心急くゆゑ身共が誤まり。大儀であつた。禮は緩りと。マア、何は兎もあれ、云ひがゝつては。

ト門の內を見る。

額藏　手付けなりとも渡さにやなりませぬかな。

左母　ヤア、そんならそれを

額藏　結ぶの神の引合せ。

左母　ヤレ情ない。すりや、身共をウンと云はしたも

額藏　イエ、ちよつと手付けを渡したばつかり。

左母　エヽうぬ。云ひ分あれど、覺えて居れよ。

ト唄になり、門の內へ入る。あと合ひ方、額藏あと見送り

額藏　ハヽヽ、あの浪人の大馬鹿者。濱路どのを付けつ廻しつ、見苦しい色三昧。それを知りつゝあの龜篭どのが、出入りをさすは、信乃どのと濱路どのとの、仲を支へる心企み。日頃から心よからぬ、主人夫婦と知りながら奉公するも、我が父犬川衞士どのは、安房の國里見の家中お家の重寶嵐山の名笛、紛失の云ひ譯に切腹なされ、その後お家沒落して、一家中は散り〳〵、ばら〳〵。その頃我れは當才子。母の手一つで人となり、やう〳〵と九つになされた年、母諸ともに上方へ志し、この大塚へ來かゝる折しも、降り積む雪に母の癪氣、日は暮れる、勝手は知れず、彼所や其所とさまようて、蟇六どのゝ軒下に、暫らく雪を凌ぐうち、次第に重る母の病。情を知らぬ家內の者、行けよ立てよと叱られて、茶どころか湯さへ進ぜず、持病の上に身に積る、嘆きと雪に閉ぢられて、なんの命の堪るもの、遂にその夜に敢へない御最期。村のかゝりと蟇六どの、小言たら〳〵後の片付け、人がましい葬ひもする事か、荒繩絡げの釋迦擔ひ。その日の費えの代りにとて、この身を一生仕着せの奉公。小者となつて追ひ使はれ、辛抱するも何卒して、主君の御胤、義實さまの御成人を待ち、お家の再興せんものと、心を盡す長の年月。主人夫婦が惡企み、甥の信乃どのを跡目に立つるがむやくしさ。追ひ失はん心の企み。若年ながら信乃どのも、里見のお家再興の、心は我れに割符を合す忠義の誠。兄弟の因みは結べど、表向きは中惡う、

人目に見せる苦肉の手段、とは知らずして主人夫婦、我れを手なづけ惡事の荷擔人、呑み込み顏で蔭へ廻り、いろいろ信乃どのに知らすゆゑ、今日までなんの怪我もなく、かゝる非道の主なれども、長の年月養育の、恩義は重き浮世の義理。慾に飽かぬ心とは云ふものゝ、大塚の所領を掠めた上、まだ村雨の劍まで

ト ちやつと口塞ぎ

あの慾心の止むやうな、好い藥でも無いものかいやい。オヽ、おれとした事が、畢竟誰れも聞かにやこそ。要らざる述懷。ドリヤ、勝手を手傳うて來うか。

ト唄になり、額藏、門の内へ入る。橋がゝりより、蟇六、出て

蟇六 先づ土太郎めに云ひつけたれば、手も濡らさず劍は手に入る。マア、少しは落ちついた。

ト門の内より、龜笹出て

龜笹 こちの蟇六どの。

蟇六 オヽ、其方は龜笹。

龜笹 兼ねて云ふ通り、ちやきりちやつとやらねば、モウ油斷がならぬぞえ。

蟇六 氣遣ひせまい。今日中に片付ける思案が出來た。コレ、好い時は好い事だらけ、其方に話して喜ばす事がある。

龜笹 ナニ、喜ばす事とは、なんぞ好い金儲けの口かいなア。

蟇六 金儲けとも〳〵。大極上飛切りの出世。その譯と云ふは、今日軍木さまの仰しやるには、其方が娘の濱路に御陣代の簸上さまが、怪しからぬ御執心。早速に嫁らせとの事。もと信乃めと娶合はさうと云うたは、番作が田をしてやらうとの慾。村の奴等の口塞げ。今彼奴を片付けて、劍を取つて、こちらで金。娘を嫁らせ、こちらで出世。今が寶の掴み取り。なんと、巧うなつたではないかいなう。

龜笹 エヽ、そりやマアほんまの事かいなア。

蟇六 ハテ、さうなる時は御陣代の舅御樣。

龜笹 そんならわたしや姑ぢやなア。

蟇六 なんと、嬉しいか〳〵。

龜笹 嬉しいのなんのと、わたしや體が、ぞく〳〵とするわいなア。

蟇六 その上、簸上さまの仰せには、申し出したから今宵のうちに、賴みを入れろと性急なお望み。支度金として

二百兩や三百兩は、ぶら〳〵としてある。

龜笹　サア、この上は信乃めを片付ける、一段好い思案がござんすかえ。

蟇六　その手段と云ふは、コレ。

ト囁く。

なんと、好い分別であらうがな。

龜笹　流石は拔け目のない蟇六どの。わたしや又女子だけ心も小さい。あの左母次郎をこまづけ置くも、戀の遺恨と何所でゝか、信乃めを殺させその上で、また彼奴も人殺しと、深い所へ據める料簡。玉に使ふ積りで、行く行くは婿にもせうと、蕩して置いたが今では邪魔。

蟇六　イヤ〳〵、それも災ひも三年、もし土太郎がしくじつたら、その時はマリヤ。

ト囁く。

龜笹　そんなら、左母次郎を玉に劍を摺り替へ

蟇六　事なるまでは娘の婿と

龜笹　騙して置くは、我れ〳〵が胸に。

蟇六　信乃めに通さぬ戀の關守り。

龜笹　もし土太郎と左母次郎、後で强請らば。

蟇六　ハテ、その時こそは陣代の舅君。

龜笹　オヽ、成る程、なんとなりともくを付け

蟇六　二人の奴等は牢舍させ

龜笹　この世に置かねば後腹病めず。

蟇六　だん〳〵登る寶の山。

龜笹　金の生る木の作り取り。

兩人　エヽ、忝ない。

ト この時、門の內より、同宿出て

同宿　蟇六さま、これにござりまするか。院主甚だ御待ち申して居られまする。先づ〳〵御參詣なされませう。

蟇六　成る程〳〵、それへ參るでござらう。女房は件の事を左母次郎に。

龜笹　アイ〳〵、呑み込んで居るわいなア。

蟇六　然らば御伴僧。

同宿　サア、斯うお出でなされませう。

ト禪のツトメにて、兩人、門の內へ入る。あと合ひ方になり、門の內より、左母次郎、出て、龜笹を見て、腹立つこなしにて

左母　龜笹どの、これにござるか。

龜笹　これは左母次郎さま、お構ひもえゝ申しませぬ。御免なされて下さりませ。

左母　イヤモウ、お構ひ下されいでも、マタ忌々しさ。大杯で引ッかけました。いかいお造作でござる。

トつかうどに云ふ。

龜笹　オホヽ、これは又、酒の機嫌か、いかう腹立つてお出でなされるが、今日は日頃からの約束の通り、どうぞお前に逢はさうと、娘を妾へ伴うたは、こりやキット恩に着せにやならぬぞ。

左母　これサ〳〵、默らつしやれ龜笹どの。なんぢや、つべこべ〳〵。アヽ面白うもない、取措かつしやれ。

龜笹　エヽ。

左母　龜笹どの、一體こなた、濟むまいがな。

龜笹　そりや何がいな。

左母　イヤサ、一體こなた、なんと云はつしやれた。コレ身共もやがて主取りして、立身出世も致す身に、未だ定まる妻もなければ、濱路どのを懇望いたし、內々申し入れたれば、こなたの云はるゝには、心安い望み、併し云ひ號けの信乃が片付き次第、何時でも進上と云はつしやれて、それから此方、用事のある度に呼びつけて、書き物一式掛合ひ事、ヤレ客來ぢや花を入れよ、料理をせい、御陣代のお入りぢや、座敷を持てと、太鼓持ち同樣にこき使ひ、その氣休めに折り〳〵は、ヤレ娘はあなたに心がある、お噂ばかり申して居るの、イヤ焦れて居るのと僞はり表裏。それとは知らずうか〳〵と、なんでも今日の佛事には、日頃の思ひを晴らさんと、勇み進んで參詣いたし、最前捉へて口說いて見れば、承知どころか劍もほろろで取りつけず、云ひ號けの信乃に操を立て、身共が云ふ事は七里けつぱい。こりや何か、親子云ひ合せて、武士たる者を騙し透かし、嘲弄いたすか。イヤ、餘り人を馬鹿にさつしやるな。

龜笹　これはしたり、先生樣にも似合はぬ事を仰しやります。そりやモウ、世間見ずの懷子、例へどのやうに思うたとて、ぴんしやんするは生娘の慣ひ、色町の女子のやうに、さうべつたりと行かぬが性根。又例へ娘がなんと云ふとも、現在の親が許したからは、誰れに遠慮。押しつけても嫁入りさす。併し、それも兼ねてお話しの通り信乃と云ふ邪魔さへ拂へば、何時でも二言とはござんせぬわいなア。

左母　イヤ〳〵、さうは拔けさせぬ。實正身共に下さる心なら、何ゆゑ信乃を拋り出し召されぬ。

龜笹　サア、それに如才はなけれど、追ひ捲るには造作は

なけれど、これには樣子がござんす。

左母　樣子とは、なんの樣子が。

龜篠　あれが親の番作が居るうちから、この大塚の家に無ければならぬ、大事の〳〵刀があるゆゑ、戻せと云へど返せばこそ。あの信乃めが讓り受け、肌身離さず持つて居て、現在伯父伯母の二人にさへ、持つ顏もせぬ片意地者、迚瀾に渡さぬは定のもの。それを、首尾よう彼奴にも知らさず、此方へ取返した上でなければ、手放してでも追ひ出されず。サア、妾が相談。お前の爲にも戀の敵、どうぞ刀を手に入れて、彼奴を抛り出す、その荷擔人になんと乘る氣はござんせぬか。

左母　面白い。濱路どのさへ下さらば、その劍は奪ひ返さう。

龜篠　コレ、その心ならば、兼ねての計略。

ト　䏁く。

左母　ムウ、すりや神宮川の深みにて

龜篠　それまでに妾を追ひ出す算段。

左母　事首尾よう致したら、後で否應云はさぬぞや。

龜篠　ハテ知れた事。それまでに娘の方から、持ちかけるわいなア。

左母　何をこなたの追從ばつかり。

龜篠　イヤ、追從ではない、ほんまの事。男振りたり器量なり、わしももう十年若かつたら、ちよつと一切れかゝつて見たい心ぢやもの。

左母　ハテ、樣々の事を云はるゝ。

龜篠　斯う年寄つては仕樣もなし。

左母　然らば何かは寺内にて。

龜篠　聟どの、ござれ。

ト　唄になり、兩人、門の内へ入る。チヨン〳〵、　　幕

五　段　目

　　　　蟇六内の段

　　　　圓塚山の段

役名――莊官、蟇六。同女房、龜篠。同娘、濱路同下男、額助。同下女、お鶴。同、お品。同、お國。同、お殿。鎭上宮六。軍木五倍二。李川庵八。網干左母次郎。惡者、土太郎。同、加太郎。同、井太郎。若黨、東太。下男、額藏後ニ犬川莊助義任。犬山道節忠友。

口の幕閉まると後、靜かに本釣り鐘、ツナギに打ち道具あらましに、出來上がると、知らせの、拍子木に付いて、向うより、百姓、大勢、勸化の人の拵へにて、太鼓、鉦、竹法螺などめい〳〵に直し、出て來て、花道にとまり

百皆　圓塚山にて、火定臨終の、お志しはござりませぬかなア。

百一　なんと、マアこちらが此やうに、勸化に歩くのは大きな德ぢやないかいの。

百二　サレバイノ、今度山伏どのゝ臨終は、いつものと違うて、希有な定に入りやうぢやの。

百三　ソレイノ、定に入ると云へば、生きながら、土の中へ入つて死ぬるのぢやと、聞いたに、それとは違ひ

百四　圓塚山へ柴を積んで、火をかけ、その中へ飛び込んで死ぬるを火定と云ふげな。

百五　その火定に焚く柴の、寄進を勸化して、錢金を集めるのも、あの山伏どのが、未來の土產。

百一　イヤ又、人間と云ふものは、慾ばかりで生きて居るを、あの人のやうに慾を捨てゝ、死んで見せるが、ほんまの悟り。

百二　それぢやに依つて、あの人に金を上げると、こちらの行く先を守つてやらうとの誓願。そこで悟します金錢を上げるのも、皆こちらの身の爲ぢや。

百三　そこでおいらは、鍋釜まで賣つてなと、あの人に上げる氣ぢや。それも今日、暮れ六ツ限りに、火の中へ飛び込んで死ぬるのぢやげな。

百四　さて〳〵、有り難い事ぢや。なんでもそれまでに勸化して、隨分たんと金を上げて、持つて行てやらうぞや。

百五　さうしてマア、あの修驗者の名は、むづかしい覺えにくい名ぢや。ア、何たら。オヽ、それ〳〵、寂寞院の道人肩柳とやら。

百一　それ〳〵、寂寞院道人とは、如何に火に入つて死ぬるとて、珍らしい名ぢやないかいの。

百二　これまで出羽奧州の方を、一遍と廻つて來たが、この國で死ぬるとは、どうでも、こちらが佛緣があると見える。

百三　サア〳〵、此やうな事云ふ間に、次の村へ行て、もそつと集めよう。

百四　さうせう〳〵。サア、ござれ〳〵。

トまた、竹法螺吹いて

百皆　火定入滅のお志しはござりませぬかなア。
ト勸化しながら、ワヤ／＼と捨ぜりふにて、幕の引つけへ入る。
造り物、三間の間、二重、上手、折り廻り、障子屋體。向う赤壁、納戸口、いつもの所、紙子張りの門構へ。橋がゝり、土塀、切り戸口。上手植込みの庭木、手水鉢、右二重の上手に、お鶴、お殿、膳や家具を拭いて居る。下手にお品、お國、組板にて鱠を刻んで居る。平舞臺に春助、鉢卷き片肌脱ぎにて、米を臼にて搗いて居る。矢張り、浮の太鼓鉦にて幕開く。

つる　ヤレ／＼、忙がしや／＼。これから後で米も洗はにやならぬぞや。

との　昨日はお寺の法事で取込みの中へ、信乃さまのお立ちやら、旦那さんのお怪我やらで、とう／＼、夜明かしであつた。

つる　ソレイナア、内へ戻ると今日は又、お客があるとて忙がしい。喧ましいとて、手廻しの拭き掃除。

くに　コレ、春助どん、お前もしか／＼と、米を搗くがよいわいな。

春助　喧ましう云ふない。貴樣も、おれも同じ事だ。昨夜から夜通し、眠たうて／＼堪えられぬ。それに又、旦那めが川嵌り。いつそ、婆めと一緒に、嵌つてこねてしまへばよい事になア。

しな　アヽ、コレ／＼、そんな事聞えたら、大抵喧ましい事ではないぞえ。

春助　なんの構ふ事か。全體二人ながら惡い奴等。おれが好きな信乃さまを抛り出したゆゑ、本好き／＼の御寮人樣は、えらい騷ぎ。今朝から、癪が發つたと云うて、なんにも食はずぢや。おりや、どうしたものか、此方の、旦那と婆衆が、憎うてならぬわえ。

つる　そりや、誰れしも同じ事。信乃さまと御寮人樣とは、丁度揃うた好いお方同志。

との　器量と云ひ何から何まで、似合うたる女夫同志。同じ揃うたと云うても、旦那とお家の意地の惡さ。

春助　彼奴等二人がてこねたら、朝晩、どやく者が無うてよかろ。

つる　アヽ、コレ／＼、其やうに云ふと、奥へ聞えるわいの。

春助　なんのあの餓鬼が。
つる　ソレ、お家樣。
春助　ヤア。
ト恟りして、飛び退いて、あたりを見て
エヽ、恟りさしたわえ。
トまた勸化の鳴り物、聞える。
皆々　なんぢや。ぶう〳〵と山伏かいな。
春助　イヤ、ありや今日圓塚山で火の中へ飛び込んで、死ぬるたら云うて、今朝から法螺貝や鉦太鼓で、おだて居るので、氣が忙しうてなるものぢやないわい。
ト捨ぜりふにて、米を搗く。女形皆々、家具片付ける、刻み物を取り置くうち、向うより、東太、若黨の拵へにて、後より、家來大勢、釣り臺に鰹節、樽、するめ、帶地など結構に飾り、目録を付きさし、荷ひさして出て、門口にて
東太　頼みませう。蟇六どのは御在宿かな。
春助　なんぢや。旦那どのか。そりや今朝、川狩りから、直ぐに用事があると云うて、まだ戻らすぢやわいの。
東太　イヤ、身共はお代官、軍木五倍二どのゝ、家來、即ち御結納の品を持參いたしたと申しておくりやれ。

春助　なんぢや、結納ぢや。
ト頭掻きながら
コレ、貴樣達、結納とは、なんぢや、知つて居るか。
つる　結納とは、聟樣の所から、嫁御の所へ送る頼みの印
との　代官の軍木さまから、此方の家へ結納とは。
春助　なんでも稀有ぢや。代官から結納の來ると云ふは、誰れも知らぬが、そりや門違ひぢやないか。よう調べさんせ〳〵。
東太　イヤ〳〵、昨日、方々へお約束あつて御承知。其方達では解らぬ。御内室を呼ばつしやれ。
春助　オイ〳〵。お前達、おれを誰れぢやと思ふ。大塚蟇六が譜代の家の子、春助さまぢやぞ。此方に、いと樣は一人あれど、極つた聟樣がある。そんな物の來う筈はない。とつとゝ持つて去なつしやれ。
東太　イヤ、此奴が〳〵、慮外な奴。
ト反り打ちにかゝる。女形、皆々留めて
女皆　マア〳〵、お待ち下さりませ。
春助　イヤ、留めずと彼奴を、去なせ〳〵。
東太　何をおのれが。
女皆　マア、ようござりますわいなア。

ト せり合ふうち、亀笹、納戸より出て

亀笹　これはハテ、喧ましい。何をせり合ふのぢや。

つる　イデ、先刻にから御代官の軍木さまから、お使者が結納印持つて、見えられましたのでござります

との　それを春助どんが、大方門違ひであらうと、それで二人がせり合ふのでござりますわいなア。

亀笹　なんぢや。軍木さまから御結納。そりや、ほんかいの。

春助　アレ〳〵、あのやうに持つて來たけれど、てつきりこりや門違ひぢやと思ふに依つて。

亀笹　ヤイ〳〵、何をおのれが知り居つて。阿房の癖に默つて居らうぞ。

春助　オットショ。

ト 引込む。亀笹、會釋して

亀笹　ホヽヽヽ、これは〳〵、どなた様も御苦勞さまに存じまする。先程から、お待ち申しました。サア〳〵此方へお入り下さりませ。ヤレ〳〵、御苦勞さまでござつたホヽヽ。

東太　然らば、それへ通りまする。

ト 内へ入る。亀笹、追從する。

皆の者、その品これへ運ばしやれ。

家來　心得ました。

ト 結納の品を二重へ並べる。亀笹、これを見て、ニコニコとして

亀笹　オホヽヽヽ、これは〳〵、いかい御苦勞様。コリヤ、われらも、なぜ最前から云はなんだぞ。主が留守ぢやと、女子ぢやと思うて、侮つてからに。ソレ、お茶を上げぬか。お莨盆出し居らぬか。

女皆　ハイ〳〵。

ト めい〳〵ウロ〳〵する。

亀笹　御覽じて下さりませ。ならずどもばかりで、とんと困ります。必らずお心におかけ下さりますな。

東太　なんの〳〵、主人五倍二、申されまするには、委細は昨日お話し申せし通り。何分簸上氏より性急に申されますゆゑ、即ち結納の品を持たせ遣はしまする。幾久しく御受納下されとの、口上でござりまする。

亀笹　これは〳〵、でも御叮嚀な御口上。ホヽヽヽ、イヤモウ、ほんに見事なこの品々。夫藏六どのは、今朝よりまだ戻られませぬが、なんぞ道寄りでも致し居りまするに、程なう歸られまするでござりませう。これは此まゝ、

東太　幾久しく受納いたしまする。

東太　然らは慥かに御受納下されい。拙者は最早お暇申し上げまする。

龜鉾　マア〳〵、御ゆるりと下されませい。ソレ、お履物

東太　イヤ〳〵、其まゝ〳〵。然らば御亭主へよろしう。

ト外へ出る。

龜鉾　どなたも御苦勞さまでござりまする。

東太　お暇申す。

龜鉾　お靜かにお出で下されませ。

ト唄になり、皆々橋がゝりへ入る。龜鉾、結納を見て嬉しき思ひ入れ。

サア〳〵、忙がしうなつて來た、……ヤイ〳〵、わいら、何をウロ〳〵するぞいやい。コリヤ、これを見てたも。マア、立派な事ぢや。小袖にせいとのこの卷き物柳樽やら、よろこんぶ、重寶なは鰹節。これはさして値打もなけれど、氣を張られたはこの帶地、猩紅の錦が金襴か、それよりは何よりかより、嬉しいはこの小判。三百兩は大丈夫な嵩。なんとマア、見事ぢやないか。

ト皆々、ウロ〳〵合點のゆかぬこなし。

ヤイ〳〵〳〵、何をキョロ〳〵。早うこの臺の物を、ズッと其方へ飾つて置け。

女皆　ハイ〳〵。

トめい〳〵片脇へ直して

つる　申し、お家樣、この品はどなたへの印。

との　どうしてこれが網干さまから

女皆　參りましたえ。

龜鉾　知れた事。いま日の出の御陣代、簸上さまより、娘濱路へ賴みの印。なんとめでたい事であらうがの。

女皆　エ、、そんならこの結納は。

ト皆々恟りする。

龜鉾　何を其やうに恟り。此やうな嬉しい事があらうぞいの。

つる　アノ云ひ號けの信乃さまが、今朝お立ちになると

との　その後へ直ぐに、結納の樽入りとは。

春助　ても、えらい奴。

ト云はうとして

イヤ、えらいこつちや。呆れて目が舞ふわい。

龜鉾　ヤイ〳〵、わいらは何を恟りするのぢや。なんぞと云ふと、信乃めと娘を云ひ號けなどと、智惠の無い娘に惡智惠をかふは、皆わいらが業ぢや。コリヤヤイ、なん

の、信乃めはな、此方の家の世話に、長の年月なつて居つて、惡い事の有り條。それゆゑ昨日の佛事の濟んだを幸ひに、ぼい捲り、これでちつと助かつたのぢや。この後あれが事をキョロ〳〵吐かすと、聞く事ぢやないぞ。

皆々　ハイ。

トこなし。

龜笹　あの貧乏神の信乃めを抛り出し、コレ此やうな結構な物、持たしておこす御陣代を聟に取るとは、娘はきつい仕合せ者。男は立派で金はあり、知行は澤山、云ひ分のない聟どの。わいらも精出して働らけ〳〵。向うから祝儀が來たら、皆預かつて置いてやる程に、ちやつ〳〵と用をしをれ。

皆々　ハアイ。

龜笹　コリヤ〳〵、阿房め、今朝抛り出して、遅蒔ながらあの信乃めの土畜生が戻つてうせぬやうに、門口へ鹽を蒔けやい。

春助　そんなら、信乃さまの戻らんせぬやうに、鹽を。

龜笹　ちやつ〳〵と蒔けと云ふのに。

春助　オイ。

ト不承々々に手桶を取上げる。龜笹こなしあつて

龜笹　イヤ〳〵、待て〳〵。いま此やうに、めでたい物が澤山に來たのに、鹽を蒔いて、この後來ぬやうになつたら惡い。こりや、よしにせう〳〵。

春助　何を云ふやら。蒔けと云うたり、蒔くなと云うたり、ほんにあのやうな物持つてうせぬやうに、思ひ入り蒔いてこまさう。

ト水を蒔く。龜笹、立ちかゝり

笹龜　おのれは、どう云へば斯う云ふと。せんまめ

ト箒にて毆りにかゝる。

女皆　マア〳〵、よろしうござりますわいなア。

笹龜　イヤ、放せ〳〵。

ト在郷唄になり、龜笹、箒にて、追ひ廻すと、此うち向うより、蟇六、羽織、袴、一本差しにて、スタ〳〵出て來て、内へ入らうとする。龜笹、取違へて、蟇六を毆らうとする。蟇六、恟りして

蟇六　コリヤ、どうするのぢや。

龜笹　オヽ、こりやこちの人。

春助　旦那樣か。しまうた。

トついと奥へ逃げて入る。

龜笹　エヽ、殘り多い。あのせんまめにかゝつて。

蟇六　ハテ、好い加減に措いたがよい。コリヤ〳〵、わいらも奥へ行て、掃除でもして置き居らう。

女四　畏まりました。

ト合ひ方になり、女四人、奥へ入る。亀筵、煙草盆を持ち行き

亀筵　申し、最前お代官さまから、結納が來てなア。あの通り、立派な事いなア。

蟇六　オヽ、そりや今朝直に軍木さまへ行て、聞いて來た。なんでも昨日から、段々まんが直るので、ほつこりと草臥れたわい。

亀筵　日頃から、憎いと思ふ信乃めは、あつちから地を引くし、神宮川の謀り事も、土太郎とやらは、しくじつても、大方此方の思惑通り。

蟇六　どうでも彼奴を水中で殺してしまはうと、踏ん張つて見ても、情ない事が、彼奴が大力で押へ付けられ、これもすかたん。さりながら、左母次郎に云ひ付けて、日頃から願がけて居つた劔は、やう〳〵摺替へさせ、先づあれで落ちついたて。

亀筵　イヤ、信乃めが事は、氣遣ひさんすな。日頃から仲の悪い、額藏めに云ひ付け、恩義ごかしに彼奴をすかしお前の刀を渡してあれば、騙すに手なしと行き道で、殺してしまふは定のもの。もし返り討になる時は、信乃は忽ち人殺しの科は遁がれぬ。生き甲斐の無いお尋ね者。額藏が殺したなら、科は額藏に塗りつけて、意趣切りにして片付ける思案。

蟇六　イヤ、まだお主に云はねばならぬ事がある。今朝軍木さまへ立寄つて、夕方の始終、首尾よく信乃を追ひ捲くりましたと云うたれば、それは幸ひ、簸上さまには殊ない性急。一旦應とお返事申し上げたれば、もし相違がある時は、其方が命ばかりではない、仲人の五倍二も、腹切らねばならぬところ、先づそれならば早速に、右の由を御陣代へ、屆けて參ると出て行かれ、一時餘り待つうちに、戻つて見え、さて喜べ、簸上氏へ申し上げたれば、殊ない喜びに猶苛立ち、今日は幸ひ、吉日なれば結納も聟入りも致したい。どうでお上へ願はねばならねども、先づ當分は客分なれば、形も構はず、常の着替へばかりでよし。今夕聟入り致さんとの口上。それゆゑ料理もザッとでよし。併し、それ程乘り切つてござれば、もし間違うては、命づくぢやと、キッと駄目を押されたれば、その座になつて、娘が得心せぬ時は、幸ひ却つて

大しくじりと、これに心を痛め居るてや。

龜篠　そりや氣遣ひさしやんすな。今朝から頭痛がすると云うて、引かぶつて居れど、否と云はうが應と云はうが、得心さすが親の高下。また氣合ひの惡いと云ふのも、信乃めが事を思ふゆゑ。そりやわたしが胸にある。ハテ、今時の娘、否ぢや／＼と云つて居ても、男の味を覺えるとツイずる／＼と行くものでござんす。

蟇六　ムウ。然らば彼れを呼び出して、騙して得心さすがよい。

龜篠　此方は庄屋の娘でも、先は名におふ御陣代。體の拵らへ、頭の道具、入り目の多い事。恟りを突いたに、其まゝでとは、聟樣の性急なが金儲け。して、今朝摺替へた劍は。

蟇六　左母次郎より受取つたれど、人目あれば、まだ改めぬが、幸ひ爰で改めて見よう。

ト差したる一腰を拔き放す。鞘の中より仕掛けにて水流れ出る。兩人、恟りして、これを眺め

ハヽア。ても奇妙な劍の威德。拔けば忽ち水氣滴る。それゆゑ村雨の劍と名けたと、日頃聞いたが、見るは初めて。

龜篠　ほんに、不思議な劍の威德。心盡した甲斐あつて

蟇六　いま手に入るは天の與へ。素藤公か許我どのへ差上げたら、大名になるは易い事。

龜篠　よしさうなくとも、賣り拂うたら、二千兩か三千兩にはなる代物。刀は手に入り、信乃めは寂滅。

蟇六　左母次郎めは今日明日に、御陣代の威光で入牢させ中で一服、コロリ往生。

龜篠　額藏は家來の事、後でどうなと仕樣は樣々。

蟇六　減るは厄介、殖えるは金。

龜篠　これから二人が長生きして

蟇六　取つた金は誰れにも遣らず

龜篠　一生番をする樂しみ。

蟇六　金の威光で、體がぞく／＼。

龜篠　思ひなしか、お前の顔が

蟇六　山吹色で艶々する。

龜篠　二十年も若やいだ。

蟇六　イヤ、そないにもあるまい。

兩人　ハヽヽヽホヽヽヽ

ト笑ふ。チン／＼と時計鳴る。

蟇六　ありやもう八ツの時計。聟どのゝ入來は暮れ過ぎ。

亀笹　娘の得心するやうに。そりやわたしが得心さす。併し、まつこと否と云う
たらば、コレ。
ト囁く。藁六、頷いて
藁六　ムウ、すりや、嚇しをかけて
亀笹　さうして後は。
ト囁く。聞き取つて
藁六　そりや吞み込んだ。ちつとも早う。
ト両人、頷いて
亀笹　ドリヤ、勝手へ行て、晩の指圖でもせうか。
ト頭になり、両人納戸と上手へ別れて入る。これにて
向うより、左母次郎、着流し、一本差しにて、ぶらり
と出て來て
左母　ヤレ〱、昨夜は晝からの精進酒で、頭痛のする上
亀笹に頼まれて、夜明しのアタフタ。今までは寝たが、
その時、摺り替へた劍の事。勘付き居つたか様子も聞き
たし、どうぞもくの割れぬうち、賄賂めを手に入れたい
ものぢやが。
トあと合ひ方にて本舞臺へ來る。切り戸より春助、鎌
かたげて出で

春助　サア〱、よいわい〱。直ぐ行て來る。なんぢや
大根引け。エヽ、昨夜からソリヤ〱吐かして、足も腰
も堪るものぢやないわい。
ト云ひ〱、花道際にて摺れ違ひ、左母次郎を見て
お前は先生さん、お前の顔は、寝起きと云ふ顔付きぢや
なア。
左母　オヽ、誰れかと思や春助……今日は何か忙がし
いさうなの。
春助　イヤモウ、忙がしいのなんのと、内は亂騒ぎぢや。
左母　なんぢや、内はバタ〱と掃除のやうに、蟲干しに
は早し、何事ぢやぞい。
春助　ナニ、蟲干しどころか、こちらの内は、晩に聟入り
があると云うて、天井の蜘蛛の巣取るやら、疊拭くやら
障子のつくり、上を下へと引ツくり返す。お前も心安い
よしみに、ちと手傳うておくれんかいの。
左母　なんぢや、聟入りとは、居候ふの信乃どのゝ事か。
春助　イヤ、信乃さまは、お前も知つての通り、今朝疾に
抛り出されて、今日のは又、外からぢや。
左母　ヤヽヽヽ、信乃より外に聟と云ふ者は、ナヽ、何者
ぢや。さうして、下地から、約束でもあつての事か。ド

ぐどうぢや。

ト急き込む。

脊助　イヤ、惘りは尤もぢや。わしもやう／＼今聞いた。聟様と云ふは、御陣代の簸上さま。仲人はお代官。頼みの印も今の先、立派に飾つて持つて來たてや。

左母　ナニ、すりや陣代の簸上宮六から、頼みの印を。

脊助　急の事ゆゑ今夜直ぐに、聟入りやら、嫁入りやらで直ぐに連れて去ぬるとの事ぢや。

左母　そりや誠か。ほんまの事かい。

脊助　なんのおれが嘘をつかうぞ。お前も常住念がけて居たが、盆體ぢやぞや。あかんぞや。併し、現在の信乃さまでさへ、底意地の悪いあの樂達、長らく機嫌を取りながら、まさかの時は抛り出され、彼の初物は人に食はれて、七十五日生き延び兼ねた果報の拙なさ。手さへ握らぬおいらさへ、腹が立つてならぬもの。さぞ信乃さまが聞かんしたら、腹を立てるであらう。イヤ／＼、此やうな事云うて居たら、又お目玉。コレ、お前も諦らめさんせ。ドリヤ、大根抜いて來うか。

ト在郷唄になつて向うへ入る。左母次郎、ムッと思ひ入れ、合ひ方になり

左母　すりや、聟と云ふは簸上宮六よな。今まで云ひ號けの信乃ならば、まだ料簡もあるべきに、陣代の權に付き武士たる身共をうま／＼と、深い所へやり上げたな。これも蟇六夫婦めが、信乃が所持なす劍をば、奪ひ取らんその爲に、事成就せば聟にせんと、玉に使ひし、憎くき仕方。先の相手は陣代ゆゑ、威光を振ふ奇怪さ。よしよし、今夜婚禮の場所へ踏ん込んで、蟇六の悪事の段々云ひ捲り、面恥をかゝした上、この婚禮の邪魔してくれう。

トきつとなり、また刀を見て

イヤ／＼、この事を表立てゝ顯はせば、身共も同類。その上、刀の詮議の時、彼方の刀は似せ物ゆゑ、詮議は此方の身にかゝる。よしそれまでに及ばずと、一旦約束ありとても、その證據とあらがへば、身共一人が暴れ者と獄屋へ押込め、殺くは聟の陣代宮六。是非も論ぜす責め殺され……イヤ、こりや滅多に踏ん込まれぬ。とは云へ我れも武士の果。一旦約束した濱路をば、人に取られて刀の手前、今夜の席へ踏ん込んで、宮六始め家内の奴等片ッ端から皆殺し。イヤ／＼、先は大勢、身共は一人、仕損じたらば笑ひ者。それよりは今夜のどさくさ紛れ、濱路めを盗み出して、連れて退いて日頃の思ひ。もし得

心せぬ時は、京鎌倉へも賣り渡して、金にして腹を癒る。思へば昨夜の出來心、誠の劒を摺り替へて、渡さなんだは天の助け。賣り拂うたら一廉の大金。併し爰を立退くからは、五分切り一尺箸片し、殘すも殘念。アヽ忌々しい面を見るより、今から家財を賣り立てゝ、晩にこつそり濱路めを。オヽ、さうぢや。

ト家をキッと見込む。キッとなつて向うへ走り入る。

内にて

龜篠　コレ〳〵娘、ちと爰へ出て氣を晴らしやいなう。

ト合ひ方になり上手の障子を開く。内に濱路、病氣の體にて、補夜着にもたれて、側に藥罐などを置き龜篠、介抱して居て

ほんに昨日は氣合ひもよかつたに、今日はなぜ其やうに取亂つて居やるぞい。この生ぬくいに、此やうにして居やつたら、體も着物も堪るものではない。側の者が氣の付かぬ。コレ、飯を食べやつたか。なんぞ食べたい物はないか。なんなと、食べたい物があるなら、遠慮なしに云やいなう。

濱路　イヱ〳〵、何も欲しうはござんせぬ。捨て置いて下さりませ。

龜篠　わしは又、昨日からの勞れで寢て居やるとばかり思うたが、見れば大分惡いさうな。わしは醫者どの勝りに病氣を見るは得手ものぢやが、あの人でなしの信乃めが事を苦に病んで、それで痛へが發つたのか。

ト濱路、チッと俯向く。

コレ、そりや惡い合點ぢやぞや。なんぼうわが身が、其やうに思やつても、鮑の貝の片思ひ。そりやモウ、小さいから云ひ號けはしたれども、信乃めが親の番作は、淺ましい死にやう。それを思うて彼奴まで、わしら夫婦を敵と恨み、恩を仇な根性ゆゑ、村中でも憎み立て、爰の住居も出來ぬゆゑ、ありつきに出ると云うて、ほんまは駈落ち。今朝も行きがけの駄賃にと、神宮川で、主を助けると云ふ振りで、押沈めうとしたれども、神佛の控へ綱で助からしやつたを、殘り多さうに、眺めて居つた。煎豆に花も咲かうが、彼奴が爰へ戻つて來うか。云ひ號けは名ばかりで、一つ添ひ寢もせぬ男。しかも嫌うて居る者に操を立て、病み煩らひなどして、親に苦勞をかけまいぞや。親の心に叶はぬ男は、ふつ〳〵と思ひ切り、親の許す男に添ふは、ほんまの女子。コレ、その代りに信乃より百倍見上げた、好い殿御を持たすわいなう。ま

だ其方には云はねども、其方に娶合す婿どのと云ふは、誰れあらう、御陣代の鎌上宮六さまおぢや。なんと好い殿御であらうがの。

ト此うち濱路、始終泣いて居て、この時恟りして、顔を見る。

サ、其方をお見染め下されてナ、人もあらうに仲人はお代官、賤しい男とお嫌ひなされず達ての御所望。相談も調へば、この親まで浮び上がる。其方も孝行になる事に、否と云やらう事はなけれど、信乃の出奔、氣兼ねはなし、今朝から替立ちの僕從で、あれ見や、あれは婿どのからの賴みの印。わしらが胸の納まるやう、得心してたも。ヤア、コレ、早う返事をしてたもいなう。コレ娘。

ト泣き入つて居る濱路の振り袖を引ツ張る。濱路、こなしあつて

濱路　ほんにマア、思ひがけないと云はうか、無理無體と云はうか。私しはどうあつても、この婚禮は嫌でござんす。とサア申せば、親を思はぬやうなれど、妾をよう聞き分けて下さんせ。あなたが信乃さまの事を、其やうに思し召すも、親御の恨みあるゆゑと、推量なさるはそりや廻り氣。なんの〳〵あのお方に限つて、悪い心がござりませう。そりや一つに育つたわたしが證據。殊に又、村のお衆が、なんの〳〵憎みませう。其やうな事を云ふ者は、そりやなんぞ仇ある者のさかしら事。例へあなた方の縁は切れても、一旦結んだ縁は切れず、私しが一生の殿御と云ふは、信乃さまより外にはない。それとも家出をなされたを、見ぬうちに外へ嫁入りする時は、不義いたづらの名は除かれず。例へ不孝になればとて、夫を重ねて誰が爲に、不義の富貴を願ひませう。それも達てと仰しやるなら、信乃さまの御自筆の、離別狀でもあるならば、親の仰せも背くまい。さうないうちは、どのやうに仰しやつても、この祝言は致しませぬ。わたしや嫌でござりますわいなア。

龜篠　ぢやと云うて、爰に居ぬ信乃めに去り狀は。

濱路　その事が出來ませねば、いつまでも、わたしは不承知。お斷わり仰しやつて下さりませ。

龜篠　エヽ、どう云へば斯う云ふと、アヽ、よう廻る舌ぢやなう。

ト投げ首して困つた思ひ入れ。納戸より蟇六、出かけ居て

蓑六　コリヤ女房、何も云やんな。聞き屆けた。

ト眞中へ直る。龜笹、下手へ廻り、三人思ひ入れあつて

龜笹　ヤア、お前は。

濱路　父樣、何時の間に。

蓑六　ア、娘、其方は天晴れ貞女ぢやなア。

ト合ひ方きつぱり。

今ではこの面が恥かしい。なまじいな事を云ひ出して、母は元より身共まで、今と云ふ今、後悔したわい

龜笹　エヽ、そんなら最前からの一部始終を。

濱路　聞き分けて下されましたか。

蓑六　斯う云へば慾に耽り、愛も義理も辨まへず、其方が爲には道ならぬ、緣組を請合うたと、譯を知らねば恨みもせうが、世の譬へにも云ふ通り、親の心子知らずと、小さいから養育した、あの信乃。子を見る事親に如かずと彼奴が日頃の容態、隔てる心の他人向き。惡いも好いも見えるのは、云ひ號けの夫と思ふ、贔屓目と云ふもの。コリヤ、親に如才があらうかいやい。

龜笹　ソレ見やいなう、最前から、わたしが云ふ事を、惡い事かなんぞのやうに。

蓑六　ハテ、云やんな。あれが事云うて益なし。度々斷り云うたれど、信乃も今朝立つたれば、異變もならぬ手詰めの緣談。押しつけ業とは思へども、そこが世に云ふ陣代の權威。娘が心は知らねども、親の難儀は見捨てもせまいと、一寸遁がれに請け合うたは、今朝四ツ時。直ぐに、後より追ひかけてあの結納、今宵直に引取ると、退引きさせぬ手詰めの難題。今さら變替へする時は、思ひ詰めたる武士の一徹、娘を始め家内の者、所詮生けては置かれまい。その嘆きを見んよりは我れ一人の粗忽にして、申し開きせんものと、覺悟せうより仕樣はないわい

龜笹　エヽヽヽ

ト龜笹、わざと悔りのこなし

蓑六　娘にも得心させず、粗忽に結納受取つた段申し譯、死後にそちらがよきやうに、五十年來定業ならぬ、非業の最期も娘の爲。さうぢや。

ト刀を取つて

南無阿彌陀佛。

ト云ひながら、仰山に腹を攄げ、腹へ刀を當てようとする。濱路、あわてゝ留める。龜笹も止めて

龜笹　コレ〳〵、マア〳〵待たしやんせ旦那どの。

濱路　父樣、待つて下さんせいなア。
葉六　イ、ヤ死ぬる。放せ〱。
ト仰山に云うて、振り放すをまた留めて
濱路　サア、そのお腹立ちは御尤もなれど、マア〱待つて下さりませ。
葉六　イ、ヤ、放して殺してくれ。
龜筵　マア〱、お待ち下されませ。娘も留めて居りますわいなア。
葉六　イヤ、とても遁がれぬ我が命、これも娘が心一つ。
龜筵　サア、それぢやに依つて留めて居る。コレ〱娘、留めるばかりが、孝行ではあるまいぞや。
濱路　サア、それぢやに依つて。
葉六　但し、聞き分けて得心するか。
濱路　サア、それは。
葉六　矢ッ張り死ぬる。突離せ。
濱路　マア〱待つて下さりませ。
龜筵　そんなら、應と得心しやるか。
濱路　サアそれは。
葉六　否なら腹切らうか。
濱路　サア、

龜筵　但し、父樣を見殺すか。
濱路　サア。
三人　サア〱〱。
葉六　娘、返事は何とぢや。
濱路　ハア、
ト泣き落す。兩人、もうよからうと云ふ顏にて
龜筵　サ、娘、早う得心して、應と云うてたもいなう。
ト濱路、思ひ入れあつて
濱路　アイ、成る程、得心いたしました。
龜筵　サ、、すりやマア誠か、本聞かいなう。
濱路　アイ、貞女を立てれば親に不孝。いづれの道にも外れた因果。わたしや覺悟……イヤ、わたしや得心しましたわいなア。
ト大泣き。兩人うれしいと云ふ思ひ入れにて、につたり笑ひ
葉六　すりや、合點して今宵の祝言。
濱路　アイ。
ト泣く。
葉六　その場になつて、否と申さば、家の滅亡。それより今死なせ。

濱路 ア、勿體ない。なんの僞はり申しませう。
龜篠 アレ、お聞き下され。娘は本得心ぢやといな。ても孝行な者ぢやなう。サアノ＼。早う刀を納めて下さんせ
ヤレノ＼、出かしやたつたのう。
蟇六 オヽ、得心すれば、死ぬるに及ばぬ。
ト刀を鞘に納め
得心の上からは、聟どのゝ入來は暮れ方。早々。女房、早く拵らへさせ。サア。
龜篠 アイノ＼。サヽ、賣り物には花を飾れと、氣合ひが惡くば、藥でも服んで、しやんと髮も梳かしやいなう。
濱路 アイノ＼。
ト泣きながら云ふ。蟇六、思ひ入れあつて、立ち上がり
蟇六 身は今一度、娘も本得心の樣子、今宵の云ひ合せかたがた、軍木さままで行て來う程に、女房、何かの事を
龜篠 アイノ＼、氣遣ひ下さるな。娘は泣き止んで、笑うて居ります。
ト懷より紙を出して濱路の顏を拭いてやる
蟇六 然らば萬事、支度を早う。
龜篠 合點でござんす。サア娘。

ト濱路の手を取る。
濱路 アイ……思へば因果な。
蟇六 ヤア。
龜篠 ハテ、マア、おぢやいなう。
ト唄になり、濱路、惜れながら、龜篠に連れられて、奥へ入る。
蟇六 先づこれでよし。これから直ぐに、軍木さまへ、左母次郎めがしまひ事も。さうぢや。
ト袴を穿いて居ると、橋がゝりより、土太郎出て來て
土太 どうぞ内に居ればよいが。
ト内へ入る。蟇六、出ようとして行き合ひ
こなんは親方、どこへ行かんす、
蟇六 オヽ、わりや土太郎。何しに來たぞ。
土太 何しに來たとは餘所々々しい。昨日から夜明かしの働らき。褒美の金が來るかと、待つてもノ＼沙汰がないゆゑ、乘り出して來たのぢやわいの。ありや一體どうしてくれるのぢや。
蟇六 ハテ、よいわい。云ひ付けた事もえゝ果さず。併し云ひ付けた事ぢや。よいわい。次手に固めて遣らう程に
マアノ＼、歸れノ＼。

土太　へゝゝゝ久しいせりふぢや。入り聟の信乃とやらを殺してくれ、オット合點と驅け出して、神宮川の水の中、沈めよう〳〵としても、青二才の癖にえらい力。かかると投げられ、起きては投げられ、體を元手の大仕事次手に遣らうで濟むかいの。

蟇六　ハテ、喧ましい奴。身共は今出かけて居る。戻つたらば持たしてやるわい。マア、去ね〳〵。

土太　イヤ、去なれぬ〳〵。聞けば今夜陣代が、聟に來るとの事。なんでも祝儀と一緒に、しつかりと貰はにや去なぬワ。

蟇六　エヽ、さりとては喧ましい。いま出かけで事が多いマア、臺所へでも廻つて、酒でも飲んで待つて居やれ。其うち歸つて、一緒にやるわい。

土太　ア、また後か。近年はこんな事まで、掛け商ひになつて引合はぬが、よいわい、それまで臺所で、きすなとせしめて、待つて居やうか。

蟇六　サヽ、さう致せ〳〵。

　ト行きかける袖を引いて

土太　コレ、えらう金が儲かるな。

蟇六　エヽ、何を吐かすやら。

土太　ドリヤ、奧で一杯引ツかけようかい。

　ト切り戸口へ入る。

蟇六　ヤレ〳〵、いろ〳〵の奴がうせて、なんのかのと、もう七ツ時半であらうか。暮れぬうち、ドレ、一走り、さうぢや。

　ト早い唄になり、向うへ走り入る。奧より龜篠、女四人連れ出でゝ。

龜篠　ヤレ〳〵、忙がしい事ぢや。コリヤ、お鶴、お殿、早う娘が着る物を出して着換へさしや。人が來るに見苦しい。髮も手傳うて、キリ〳〵しやんと、早うせうぞ。

鶴殿　ハイ〳〵と

　ト上手の一間へ入る。

龜篠　コレお品、お國、ウロ〳〵せずと、金盥に湯も取つて、洗ひ粉も好い糠も、取つて持つて行きや。

品國　ハイ〳〵。

　ト納戸へ行かうとする。

龜篠　オッと、まだ〳〵、今日に限つて日の短かさ。ちつと早いが、行燈も灯し、座敷へ灯す燭臺も、出して置きや。

品國　ハイ〳〵、畏まりました。

總角　これはしたり、ちやつと行きやいの。

ト兩人、ウロ〳〵して入る。

先づこれでよし。ほんに雨降つて地固まると、あれ程堅うなつて居た娘が、最前の嚇しから、俄に心を入れ換へたか、勇み進んで髪を結うて居るのは、どうでも晩の祝言を、心待ちに待つて居るか。可愛い者ぢやな。サアサア、これから膳部の拵らへ、吸ひ物の肴は、あれとこれ硯蓋が斯う〳〵。供の者へも木樽で斯うして。夜具は、アレほんに、今夜は延べ紙も買うて置かにやならぬ。なんぢややら、氣が浮き〳〵と、こちらまでが初々しい心持ちぢや。ドレ、この勢ひに寢間の拵らへして置かうかヤレ、忙がしやなう。

ト無性に喜んで、納戸へ入る。後、しつとりとした獨吟、短かうあつて、上手の障子開く。濱路、下くゝりの形にて、鏡臺へ向ひ、顏を直して居る。お鶴お殿、立ちかゝり、振り袖など重ねたりして居る。

つる　御寮人様、今日は別して美しう、お身仕舞ひが出來ました。ほんにめでたいやら、悲しいやら

との　信乃さまには引換へて、あのマア、陣代面の憎い顏付き。そしてマア、意地くねの惡さうな。

つる　わたしらまでが力がない。ほんにマア

兩人　お氣の毒でござりますなア。

濱路　よう云うてたもつたなう。今宵の祝言、一世の名殘わしや覺悟して居るわいの。

兩人　エヽ、なんと仰しやりますえ。

濱路　イヽヤイノ、一世の晴れと、わしや覺悟して勇んで居るわいの。

つる　そんなら、あなたは

との　眞實得心で

濱路　サア、それも父様母様のお氣休め。サア、もうよい程に、其方衆は勝手へ行て手傳うてたも。

つる　ハイ〳〵、左様ならばお小袖も

との　おもじも爰にござりまする、

濱路　オヽ、そこに置いてたも。用があれば呼びませう：サア〳〵、早う行てたも。

兩人　ハイ。

トまた獨吟にて、兩人、心殘して入る。時鳥、頻りに啼く。

濱路　鶯の飼ひ子の中の郭公、子で子にあらぬ、我が身の上、誠の親や、腹からの、兄さんも有りとは聞けど、

お行も知らず、縁あればこそ小さいから、云ひ號けせし信乃さまは、同じ里見の御浪人、末は夫婦となるならば、兩親のお行く末を、尋ね求むる便もと、樂しむ甲斐も無き別れ、まだその上に今宵の婚禮、恨めしいは今の親達、末で添はさぬお心なら、仇な縁に、云ひ號け、生仲結ばぬ方がまし。飽れぬ仲を引分けて、押付け業なこの縁組み。こりやあんまり、胴慾でござんすわいなア。斯う云ふ事とは、露知らず、もう我が夫は何國の空、如何なる所にござんすか。一目逢ひ度く、お顔が見たい。あの時鳥も羨やましい。飛んでなりとも行きたい思ひ。泣く音血を吐く思ひぢやわいなア。

ト泣き落す。また獨吟になり、濱路、向うを見やり、いろ／＼あつて、鏡臺の剃刀を出し、死なうとして、思ひ入れあつて、投げ捨て、あたりを見て、緋の扱帶を取上げ、また泣き落す。此うち向うより左母次郎、大小、尻からげ、頬かむりにて、忍び出て、舞臺より招くと、向うより、井太郎、加太郎、頬かむり、雲助の形にて、駕籠をかたげ、出て、左母次郎、囁やく。兩人頷づきて、駕籠を置き、橋がゝりへ入る。左母次郎、門の内へソツと忍び込み、濱路の樣子を見て、頷づき、二重の片脇へ、小隱れする。獨吟切れる。

さうぢや。爰らへ居る程、如何なる憂き目を見やうやら死んでしまふが女の操。例へ、不孝になるとも、女の操を破られうか。まだ／＼云うて、人の目にかゝらぬうち、さうぢや。

ト欄間へ扱帶を掛け、こなしあつて

南無阿彌陀佛。

ト首へまとはうとする。左母次郎、後より抱き留め

左母　ドツコイ、滅多に、殺さぬ／＼。

濱路　イヽヤ、見放して、殺して／＼。

左母　イヤ、おれが來たからは、安堵ぢや。コレ、おれぢや。

ト濱路、見て恟りして

濱路　ヤア、お前は。

ト云はうとするを、シイと、口を押へて

左母　委細の樣子は、あれで聞いた。今宵の婚禮、嘆きは尤も。おれも思ひは同じ事。忍んで來た庭先で、出合つたは危ないところ。我れらに心中立て通し、姫上と祝言嫌ふとは忝ない。誠に、盡きせぬ二人が縁。云ひ合さねど天の助け。喜び給へ、コレ女房。

ト抱きつかうとするを、振り放し

濱路　エヽ、穢らはしい。放しや〱。外の男に、添ふ氣なら、なんの命を捨てるものか。放して、死なして下さんせ。

左母　イヽヤ、放さぬ。すりや、身共へ心中かと思や、死んだか生きたか知れぬ、あの信乃への心中立てか。それでは身の爲にならまい。

濱路　エヽ、妾、放しや〱。

ト跪くを、引退け

左母　エヽ、面倒な。

ト手拭で猿轡を嵌め、腰帶にて、手を括り、門口へ連れて出て、無理に駕籠へ抛り込む。井太郎、加太郎、出て

井加　親方、首尾は。

左母　大極上々。この駕籠を。

井加　オッと來た。

ト繩にて、がんじ搦みに、駕籠を卷く。

左母　ちつとも、早う、本郷通りを圓塚へ。

井加　合點ぢや。

ト向うへ入らうとして、人音するゆゑ、騒き合ひ、橋がゝりへ皆々入る。向うより蟇六、脊助に、提灯を持たせ出て

蟇六　ヤレ〱、思ひの外に隙がいつた。大方六ツ半でもあらうか。コリヤ、戻つたぞ〱。

ト内へ入る。龜篠、奧より出て

龜篠　オヽ、遲かつた。して、聟どのわえ。

蟇六　もう追ッつけ見える筈。先走りの來るまでに、何かの拵らへして。娘や、勝手の都合は。

龜篠　大極上々の首尾ぢやわいな。

蟇六　して〱、娘の機嫌も直つたか。

龜篠　直つた段か、着物も着換へる、顏も直す。髮も結ひ直す。勇み進んで居るわいなア。

蟇六　それは重疊。コリヤ〱、脊助、われは勝手で、茶の用意をして置け。

脊助　オッと合點ぢや。

ト切り戸へ入る。納戸よりお國、お品、出て

しな　申し〱、最前から、お婿人様が、お見えになりませぬ。

龜篠　なんぢや、娘が見えぬ。たつた今までそこらに居たが。

蓑六　エ、、そこらどころで濟むかいやい。探せ〱。ハテ、どこへ行くもので。

くに　イエ〱、最前から皆が尋ねても

品國　一向に知れませぬ。

　ト此うち、龜笹、下括りを見て

龜笹　なんぢや、この欄間に下括り。オ、、剃刀も爰にあるは、ヤ、、、、

　ト大恟り。蓑六も剃刀を見付け、恟りして

蓑六　誠に、こりや剃刀と云ひ、取散らした樣子。

龜笹　ヤア、そんなら死損なうて、逃げ居つたか。

龜蓑　ヤア〱〱。

　ト大恟りにて、反り返る。

蓑六　彼奴一人、拔けやう筈はない。さては、信乃めが、盗んだか。

龜笹　イヤ〱、信乃には額藏が付いて居れは、舞ひ戻る氣遣ひなし。

蓑六　今一段になつて、この災難。エ、、、、。

　ト兩人、ウロ〱して居る。春助、切り戸より、走り出て

春助　サア〱、大變ぢや。コレ、いま表で男どもの云ふには、この裏道を左母次郎が、繩搦げにした駕籠を舁かせて、畔道を圓塚の方へ、急いで行つたと云ふが、もし御寮人樣ぢやあるまいか。

蓑六　ナニ、左母次郎が駕籠に付いて。

龜笹　オ、、慥かに、それに違ひない。

蓑六　イヤ、惡い浪人。ドレ、追ひかけて。

　ト走り出て、花道へ行きかけると、向うより宮六の紋付きの提灯を灯させ、東太、スタ〱、走り出て行き合ひ

東太　これは蓑六どのでござるか。

　ト蓑六、向うを見詰めて居る

蓑六　イヤ、そりや向うで、お尋ね下されい。

　ト夢中になつて、摺り拔け、行かうとする。東太とめて

東太　これは、慌てた體。コレ。五倍二よりの使ひでござる。

　トこれにて、心付き

蓑六　ヤア、ナニ、軍木さまから。

　ト猶々氣の揉めるこなし。龜笹もウロ〱しながら女二人を叱り散らし、門口へ出たり入つたりして、焦

ろ。春助は鉢巻を締め、尻からげして慌てる。

東太　主人、申さるゝには、只今御陣代と御同道にて、裏手の御玄關口より、お入り下さるゝ間、その積りで、御用意下されいとの儀でござる。

蟇六　ヘイ〳〵、イヤ、その娘が駈落ち。イヤサ、玄關口も開けてござれば、只今お迎ひに參るところ。

東太　イヤ、それならば、お迎ひには及びませぬ。もう直ぐにお入りでござる。

蟇六　ハツ〳〵、何事もよろしうござりまする。

東太　然らば直ぐに、お通り下さるゝ程に、左樣お心得下され。ドリヤ、御案内を申して參らう。

ト橋がゝりへ入る。蟇六始め皆々、矢張り、ウロ〳〵して

蟇六　サア、聟君が玄關から、お入りとありや、この間に一走り。

ト尻からげて行かうとする。龜笹とめて

龜笹　ア、コレ、旦那どの、お前は行かれぬわいな。

蟇六　行かれぬとは、どうして〳〵。

龜笹　ハテ、娘が居ぬと云ふ事、深う隱して內證で、追手をかけて、知らぬ顏で聟どのを。

ト蟇六、ツカ〳〵と戻り

蟇六　成る程、こりや負うた子に淺瀨ぢや。

龜笹　お前までが、ござんせぬと、繫いで居る間がない。

蟇六　成る程、もし知れたれば身の大事。コリヤ、春助も女子共も、聟どのゝ手前は、娘は見じまひぢやと、云うて置け。

龜笹　必らず喋つたら、聞く事ぢやないぞ。

三人　ハイ〳〵、畏まりました。

ト矢張り、皆々、ウロ〳〵して居る。

蟇六　コリヤ〳〵、女子共は奥の間へ行て、聟どのが、ござつたら、挨拶をして、出迎へ〳〵。

品國　畏まりました。

ト慌てゝ納戸へ連れ立つて入る。

蟇六　コリヤ〳〵春助、何をうつかり。勝手へ來て居る手傳ひの村の者や、男どもと一緒に、左母次郎めを追ひかけて、娘を此方へ取戻せ。

春助　オツと、合點ぢや〳〵。

ト駈け出す。

蟇六　コリヤ〳〵、村中に觸れ廻して、人を集めい。コリヤ、それも內證ぢやぞ。

春助　オッと、呑み込んだ/\。オイ、村の衆/\。

　ト切り戸より、百姓五六人出る。

百姓　なんぢや/\。

春助　なんでも今見た左母次郎めを追ひかけて、駕籠の中の御嫁入を、ぶちのめしても、左母次郎を取返すのぢや合點か。

葉六　コリヤ/\、慌てゝ娘に怪我さすな。

百姓　なんぢや知らぬが、合點ぢや/\。

春助　サア/\、皆來い/\。

　トわや/\云うて橋がゝりへ入る。矢張り兩人、ウロウロして居る。

龜篠　エヽ、斯うなる事とは夢にも知らず、先には信乃めを防がうとて、左母次郎めを引入れたが、盜人を守らぬは、此方の不念。

葉六　エヽ、飼ひ犬に手を噛まるゝとは、エヽ、コレ、悔んで甲斐ない今宵の切端。聟どのは大のいらくら。それに娘が戻らいでは、命の年明き。こりやマア、どうしたらよからうぞいなう。

　ト納戸より、お品、お國、出て、ウロ/\するを捉へて

くに　申し/\、お家様、聟様もお入りなされて、お待ち兼ね。

しな　この兩親はなぜ挨拶に出ぬと、軍木さまのお尋ね。

兩人　サア/\、ちやつとお出で下されませいなア。

葉六　なんぢや、もう聟どのは、ござつて、尋ねてござるか。

龜篠　どちらぞ一人は、挨拶に出ねばなるまい。

葉六　エヽ、女ども、わいらは、奥で、酒など早く出し居れ。

しな　イエモウ、お内から上がつてお出でと見えて、きつい醉ひやう。

くに　酒も何にも及ばぬ、早う嫁御をと、えらい急ぎ。

龜篠　エヽ、例へ下地に酒があらうと、祝儀のものぢや、ちやつと出し居れ。吸ひ物もぬくめて、出し居れやい。

兩人　ハイ/\、畏まりました。

　ト叱られ、ウロ/\して、納戸へ入る。

龜篠　コレ、そこへ御挨拶に行く程に、酒など飲まして、引ツ張つて居るのぢやぞ。

　ト慌てながら、袴と、前垂れを取つて着て

サア、旦那どの、袴も穿いて置かつしやれ。わしも前垂

れをして、お肴の拵らへせにやならぬわいの。
ト取り違へて前垂れを渡す。

葵六　サヽ、よい〳〵。エヽ、心ならぬ。首尾よう取返し居ればよいが。

龜笹　エヽ、心元ない。誰れぞまそつと、加勢がやりたいなア。

葵六　エヽ、氣の揉める事ではあるわい。
ト兩人ウロ〳〵して、葵六は前垂れを袴に穿くやうにして、何遍も、すかたんする。龜笹は袴を前垂れのやうに、前へ穿く。此うち切り戸より、土太郎、欠伸しい〳〵出て、

土太　アヽ、なんぢや、喧ましい事ぢや。トロ〳〵とやつたと思うたが、もう親仁は、お歸りか。
ト葵六、土太郎を見て

葵六　オヽ、災ひも三年ぢや、コレ土太郎、われに又、頼みたい事が出來た。

土太　なんぢや、先の駄賃もおこさずに、また用を云ひつけるか。

葵六　エヽ、何かと云うて居る間がない。此方の娘を、昨日の浪人、左母次郎めが、盗んで逃げたわいの。

土太　ヤア〳〵、そりやえらい事ひろいだなア。

葵六　家の奴等をやつたれど、覺束ない。取戻したら、葉美と引替へ。

龜笹　ちやつと早う行て下されいの。

土太　ムウ、そんなら昨夜の浪人めが。イヤ、こいつは一番して見ものぢや。
ト凛と尻からげる。兩人、いらちて

龜笹　オヽ、さうぢや〳〵。ちつとも早う。

土太　葉美はおれが、望みの通り。

葵六　サア〳〵、承知ぢや。ちつとも早う。

土太　昨日の葉美と、一緒に、取るぞや。
ト葵六棚より、刀を出して

葵六　コリヤこの刀を差いて行き、邪魔をする浪人めを、殺しても大事ない。娘を早う、連れて來てくれ。
ト土太郎、刀を取つて

土太　オツと合點。これでは、いよ〳〵心強い。逃げる道なら小石川の本郷坂。

葵六　圓塚山に相違はあるまい。

土太　今の間に連れて戻らう。酒温めて待つて居やんせ。

龜笹　オヽ、勇ましい。早う〳〵。

土太　オツと合點。してこいな。
　　ト凛々しく、向うへ走り入る。直ぐに、バタ／＼にて
　　お鶴出て。
つる　事ではあるわい。
　　トうろつくところへ、お関、納戸より走り出て
との　申し／＼、旦那樣、えらい騷動が起りました。早う
　　お出で下されませいなア。
蟇六　ナニ、騷動が起つたとは、そりやナ、何事。
との　御客人樣を連れて出いと仰しやるゆゑ、御病氣ぢや
　　と、申しましたら
蟇六　嘘ぢやと云うと得心せぬか、なんと／＼。
との　病氣の事なら、日限も延ばさうが、是非御客人樣を
　　爰へ出せと仰しやつて、御立腹でござりますわいなア。
蟇六　サア、娘がそこへ出せる程なら、此やうに、心配は
　　せぬわいやい。
との　マア、何がなしに、あなたがお出で下さらぬと、納
　　まりませぬ。
蟇六　サア／＼、よいわえ。そこへ行く。酒など茶など飲
　　まして置け。
くに　段々詞が荒うなります。ちやつと、お出で下さりま
　　せや。
　　トこれも慌てゝ、納戸へ入る。蟇六、ウロ／＼
つる　申し／＼、お家樣、聟樣始め軍木さまが、それはそ
　　れはひどい立腹。ちやつとお出で下さりませいなア。
蟇六　ヤア／＼、この騷動で構はぬゆゑ。お二人ともに御
　　立腹か。
龜篠　こりや、斯うしては居られぬ。わしがお詫びに行か
　　にやなるまい。
蟇六　オヽ、知れた事を。早う行て、くるめて置きやれ。
龜篠　サア、病氣とか云うて延ばすは延ばすが、娘は戻つ
　　て來ませうかの。
つる　そんな事云う手間で、早うお出で下されませいなア
龜篠　おやてゝ、それ聞かぬうちは落ちつかぬ。
蟇六　エヽ、そんな事を案じるうちに、早う行き居れと云
　　ふに。
つる　サア、早う、お出で下さりませ。
　　ト無理に納戸へ龜篠を引ッ張つて入る。蟇六、脊伸び
　　して向う見たり、いろ／＼焦りながら、
蟇六　土太郎めをやつたれば、大丈夫ぢやが、もし取逃が
　　した時は大騷動。どうで連れ戻るまでは、ちつとでも延

すやう、エヽ、心ならぬ。

トうろ〳〵して。

陣代のいらちどのが、さう云ひ出したら、娘を見ねば料簡すまい。と云うて、娘を今にも、連れ戻らぬ時は、何もかも大しくじり。

ト門口へ出て、伸び上がり、向うを見て

こりやマア、どうしたらよからうぞいやい。

ト敷居に躓き、ヒヨロ〳〵として、内へこけ込み、其まゝへたつて、ムッと手を組む。

チヨン〳〵、返し。

造り物、三間の間、二重。下手玄關先、この次、土塀にて、見切り、上手も落ち間、土塀、向うは時代の屏風一双にて、赤壁を引き廻し、これに島臺、銚子杯、すべて本式の道具を飾り、右上手に宮六、聟上下、大小にて、聟の拵らへ、酒に醉ひ、キツとなり、反り打つて居る。次に五倍二、これも上下、仲人の拵らへにて、これを宥め居る。平舞臺に龜笹、裲襠にて矢張り袴をはき、あやまつて居る。この下手に、お鶴、お品、お國、うろついて居る。側に吸物碗、膳、家具の類、散らけある。この見得よろしく、合ひ方、バタ〳〵にて、道具納まる。

龜笹　眞平御免下さりませ。

宮六　ヤア、料簡はならぬ〳〵。

ト刀に手をかける。五倍二、留めて

五倍　マア〳〵、お待ちなされませ。

宮六　イヽヤ待たぬ。こな大馬鹿め。早く娘をこの所へ出せ。

龜笹　サア〳〵、その娘がこの座敷へ、出せますやうならよけれども。

宮六　病氣と云うて濟のあるもの。是非とも娘をこれへ出せ。

龜笹　サヽ、御尤もでござります。どうぞ堪へ、御料簡遊ばされて下さりませ。

宮六　うぬ、身共を何と思ふ。陣代の出頭、簸上宮六さまだぞ。

トまた立ち上がる。龜笹、縮み上がる。五倍二、留めて

五倍　サヽ、よくござる。お待ちなされい。コリヤ、今朝より數度の使ひを以て、堅く約束いたし置きながら、今

になつて娘は病氣だ、日限を延ばしてくれよで濟まうと思ふか。そりや何のたわ言だ。

宮六　これだから身共は、晝の八ツ時から五倍二方まで參つて、今晩この家へ來るのは、娘を連れて歸る一條。酒は彼れこれ隙取るからと、心を利かし五倍二方で、夕方までに飲み越してあるわい。それに何ぞや身共が來たのに、うぬら一人も挨拶に出る事か、女郎どもばかり酌に出し、先程よりの銚子の中に、酒は入れずに饐え酢を飲ませて、人を嘲弄。言語道斷、憎い奴の。

五倍　鍍上氏ばかりでない、身共が吸ひ物の中に、酢味噌を入れ、まだその上に味噌汁には、蠟燭を炊いて食はせ一口吸うても胸が惡いワ。コリヤ、こんな目に遭ふまい爲、晝の内から早う〳〵と急いでござるを、某宅まで隨分と引延ばして、間違ひ麁相のないやうにと、幾ら心配いたし居つたか。

宮六　コリヤヤイ、おのれは身共を何だと思ふ。陣代の役目たるもの、よく〳〵に思へばこそ、うぬらづれの土百姓を男と敬ひ、今宵の聟入り。先刻より今まで待たせ、娘が病氣で事が濟むか。

五倍　先刻より無禮の段々、一々咎むる所なれど、鍍上氏さへ今宵の事、麁相も少しは有らうと、料簡召さるゝゆゑ、それで濟ませと、麁忽の上に、娘まで今更病氣で出る事ならずと、出放題なるうぬらが振舞ひ。

宮六　まだその上に五倍二が、料簡つけて病氣ならば、病體を見屆けた上、日限を延ばさうと云はるゝさへ、娘を見せぬのみならず、蟇六めは何れに居る

五倍　斯くまで嘲弄されては、鍍上氏へ對して身共が、何と云ひ譯がならう。ムウ、こりや何か初めより、うぬら云ひ合して、結納の贈り物をしてやらん計略で、巧ぐるめに僞はつたな。

宮六　五倍二云やるな。先刻よりこれ程に申すに、一言の返答もせぬ憎い奴。この上は蟇六めを眞ッ二つに打ち放す。

五倍　如何にも貴殿ばかりでない、拙者も武士の面が立たぬ。サア、蟇六めを爰へ呼べ。うぬら一々首を並べる。

ト兩人立ち寄りてキッとなる。龜笹、うろ〳〵して耳へ入らぬこなし。後の屛風の間より蟇六、矢張り前垂れを附けた儘、肩衣を手に持ち、慌て出て、二人を留めて

蟇六　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。これに

は段々申し譯がござりまする。コリヤ女房ども、其方も共々お詫び申さぬかい。

總綖　サア、段々のお腹立ちは御尤も、マア／＼、お鎮まりなされて下さりませ。

　ト兩人して、いろ／＼宥める。元の所に出て

葉六　誠に申し譯もござりませぬ仕儀。今朝より旁々のお約束。殊に結納まで納めまする位なれば、なんのこれに仔細あつて、全く嘲弄いたすではござりませぬ。

總綖　殊に最前からの無禮は、何か取込みの中ゆゑ、わたしが申し附けて置きましたを、とんと役立たずの下人どもに、任し置きましたゆゑ、粗末の有り條。

葉六　その上、勝手にちつと取込みの事、何やかやからこの間違ひ。また娘の病氣には段々と、入組みました事がござりまして、それゆゑ女房が日限を延べまするやう、お斷わり申し上げたを、御立腹の段は重々の御尤も。

總綖　只何事もわたしらに御免じ下されまして、お靜まりなされて下さりませ。どうぞお願ひでござります。コリヤ、おのいら、そこに何をウヂ／＼して居るのぢや。この獻立の麁相はおのれら。

つる　イエ／＼、それでもみんなあなたのお指圖。

總綖　エヽ、何吐かす。あのお腹立ちが目に見えぬか。其方等も共々お詫び申せ。

葉六　どうぞお二方とも、お慈悲を以て御料簡を

皆々　遊ばして下さりませ。

　ト此うち五倍二、宮六、互ひにならぬ／＼と云うて居て、この時

宮六　エヽ、やかましいわえ。

五倍　默り居らうぞ。

皆々　ハアイ。

　ト顫うて身を縮め、下に居る。

宮六　聞きたくもない世迷ひ言、何遍聞いても同じ事。嘲弄さらした麁相の罪も、娘を出せば料簡する。

五倍　サア、娘を早く出せばよし、さもなくばうぬら、如何ほどにあやまつても料簡ならぬ。

宮六　サア、早く娘を出すか。

五倍　但し、うぬら打ち放さうか。

總綖　サア、その娘は。

宮六　出さずば首を打ち放さうか。

總綖　サア、それは。

五倍　サア。

四人　サア〳〵〳〵。
宮六　返答はどうだ。
亀笹　ハヽア。
　ト吐息つく。下女これにて四人とも勝手へ逃げて入る
宮六　これ程に申しても、返答のない上は
五倍　眞二つだ。そこ動くな。
　トまた立ち上がるを、亀笹、慌て留めて
亀笹　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。この上は有やうに、事の様子を申し上げませう。
宮六　アヽ、コレ〳〵、女房、その事を。
亀笹　エヽ、斯うなつたから仕方がない。有やうにちやつと申し上げて、云ひ譯して下さんせいなア。
　ト蟇六に取りついて云ふ。蟇六、思ひ入れあつて
蟇六　成る程、もうこの上は仕様はない。お二人ともに元の座へお附き下さりませ。お疑ひを晴らしませう。
宮六　サア、返答あらば早く吐かせ。
五倍　返答聞から、ドゞどうぢや。
　ト兩人、やう〳〵元へ居直る。蟇六、顫へながら、汗を拭いて
蟇六　各々様に何僞はりませう。今晩のこの間違ひの譯と申すは、娘の濱路め、宵に逐電仕りましたゆゑ。
宮六　ナニ、娘は宵に逐電いたしたとな。
蟇六　サヽ、それゆゑに家内の騒動。
亀笹　勝手の騒ぎにいんまの麁相。
宮六　ヤア、吐かすな。逐電せしとて事が濟まうか。ムウさては彼の犬塚信乃とやらに、娶合さんと落したな。
五倍　但しは彼奴が連れて退いたか。今この所へ早く引き戻せ。サア、歸せ。早く戻せ。
宮六　サア、何とぢや。
　トまた刀に手をかけ、キッとなる。
亀笹　サヽ、事の起りを御存じないゆゑ、お腹立ちは御尤も。お道理様ではござりますれど、夫の申す通りお聞きなされて下さりませ。
　ト合ひ方になる。
蟇六　信乃めが事は、前以て申し上げる通り、彼奴を出さんと我れ〳〵夫婦、いろ〳〵と勘辨して、ぼひ出しましたれば、どうして娘を盗んで逃げう筈はござりませぬ。憎い奴はこの村の浪人左藏次郎め、此奴が娘を盗み出したに相違あるまいと、直ぐに男や村の者を、跡追ひ駈けさせましたが、今だに歸らず。

龜篠　さう云ふ事にぬかりのない、土太郎と云ふ者に云ひつけて、小道を捜しに行たれば、夜明け過ぎには知れませう。

蟇六　斯やうに申すが僞はりならば、例へこの白髮首をお取りなされうとも、お恨みとは存じませぬ。

龜篠　どうぞ今暫らくの事、お聞き分け下されませ。

兩人　お待ちなされて下さりませう。

宮六　イヤ、その云ひ譯、食はぬ〳〵。左母次郎めとやらが、濱路を盜んで逃げたと云ふ證據があるか。密夫せしは誰れにもせよ、頼みを受けたる娘をば、駈落ちさしたら親も同罪。

五倍　オヽ、その云ひ譯はぢゞむさい。日頃うぬに、うまい事させ、まだその上に頼みの印、取込んで置きながらよくも我れ〳〵を誑かつたな。

宮六　熱湯をかけると下世話に云へど、熱酢を飮ませその上に、蠟燭までを噛らせて、それで我れ〳〵をもてなすのか。

五倍　うぬ、村の束ねも致しながら、先には娘も喜びしと吐かし、今になつては病氣と云ひ、後先しどろの僞はり事。

宮六　濱路を出さずば料簡ならぬ。

五倍　覺悟ひろいでそれへ直らう。

ト兩人また立ち上がるを、蟇六、龜篠、顫へながらこれを留めて

蟇六　待つた〳〵、まだ申し譯がござりまする。

宮五　イヤ、もう云ひ譯は聞かぬ〳〵。

蟇六　マア〳〵〳〵、お待ちなされて下さりませ。この度の申し譯には、キッと致した證據がござりまする。

宮五　ナニ、云ひ譯の證據があるとは。

蟇六　サア、その證據と申すはこの劍。お心を靜められ、御覽なされて下さりませ。

ト差して居る以前の刀を、大事さうに持つて出て、前に出す。龜篠は二人を鎭めながら

龜篠　オヽ、さうぢや。モシ、お二人樣、その刀を御覽じやつて、お疑ひを晴らして下さりませ。

宮六　この刀が、なんで證據ぢや。

蟇六　それは元、安房の國守里見季基公の家の寶、村雨丸の御劍とて、信乃が親犬塚番作、以前本國にて盜み取り、悴信乃に讓りましたを、私し手段を以つて、やう〳〵昨日摺替へて取りましたは、兼ねて岩木素藤どのへ差上げ

る筈。それをあなたへ差上ぐるは、當座の質物。濱路が今に歸りましたら、引替へに仕りまする。これ、蟇六が身の潔白。

宮六　ムウ、すりやこれが噂に聞く村雨丸とな。して、村雨と云ふ證據があるか。

蟇六　その村雨の奇特と云ふは、引拔く時は水氣滴る。また打振れば水は四方に散亂して、村雨の降るが如しと、私し今朝程試みました。なんの僞はり申しませう。

宮六　成る程、村雨丸にはその奇瑞ありと聞く。即ちこれにて改めう。

五倍　音に聞いたる村雨丸。よき折にて一見する。イザイザ。

ト龜篠、蟇六、燭臺手燭を差出す。宮六、刀を引き拔き、灯影にて見る。五倍二、側よりキッと見る。宮六刀を見て、何も出ぬゆゑ、振つて見ても出ぬゆゑ、キッとなつて

宮六　こりやアなんだ。何にも出ぬぞよ。イヤサ、水は出ぬぞよ。馬鹿々々しい。

ト蟇六、龜篠、これはどうぢやとうろつく。宮六、柱へ切りつけると、刀まがる。兩人、恟りしてへたる。

五倍二もキッとなりて

五倍　ム、、ハ、、、天晴れ名劍。水氣は立たぬ。こりや銘作ではない、きよろ作だわえ。

ト宮六、蟇六をグッと引きつけて

宮六　こなうづ蟲めが。うぬ、此やうな生くらを、誰れが村雨の刀と思ふ。一度ならず二度三度、よくも身共を誑かつたな。

ト散々に毆り、蹴倒す。倒れた儘に

蟇六　イヤ、全く以て僞はりを。

五倍　まだ／＼あらがふ憎くい奴。

ト双方よりかゝらうとする。龜篠、縋つて留め

龜篠　イエ、どのやうに仰しやつても、今朝方水の流れ出たを、わたしも側で見たものを。

ト此うち宮六、右の刀を疊に突き立て、足にて踏ん張り、鉛のやうに曲げる。直ぐに引き拔いて投げ出し

宮六　吐かすならぬら、これでも劍か。

五倍　村雨か。アノ慈た大騙りめ。

ト兩人、刀を拔きかけ、双方より詰め寄ると、兩人身を縮め、べつたりへたりて

蟇六　さては企みの裏を掻いて、この似せ物を摑ましたは

龜笹　信乃めか、但し左母次郎か。
蟇六　なんでも詮議は二人のうち。
兩人　ホヽホイ。
ト當惑しながら逃げうとする。五倍二、宮六、刀を引き拔き
宮五　盜人待て。
ト後袈裟に切りつける。ハア、と兩人へたる。また切らうとする。龜笹、支へる。五倍二、龜笹が髻を摑んで、一かせ切る。龜笹、ハッと倒れる。蟇六、起きて、曲つた刀にて支へる。龜笹、そこらにある道具を拋りつける。兩人、刀を振り廻し、立廻りいろ／＼あるうち、春助、橋がゝりより走り出て
春助　コレ、一遍と捜したに、とんと知れぬぞや。
ト云ひながら、この中へ入つて、愕りして、下座へ逃げる。宮六、一かせ切りかける。ハア、と倒れた儘、玄關の下へ逃げ込む。此うち四人立廻りながら、宮六五倍二、ト、兩人を嬲り殺しにして、止めを乘つかゝり刺し。
宮六　老ぼれめら、うぬ。
五倍　思ひ知つたか。

ト息をつぐ。この時大バタ／＼にて、額藏、花道より口幕の形にて、走り出て
額藏　エヽコレ、思ひの外遲なつた上、怪しからぬ胸騷ぎ
ト本舞臺へ來て、玄關のふたりを見て
なんだ、この夜の更けたに戸口もさゝず、誰れも居らぬか。さて／＼不用心な事だわえ。
ト云ひながら、血にて辷り、愕りして、蟇六、龜笹の死骸を見て
ヤア、コリヤコレ、旦那、お家樣。何者が手にかけて、こりやどうだ。
ト大きに愕り。此うち宮六、五倍二、互ひに仕方して刀を拭ひ、忍び足にて逃げうとする。額藏、フト兩人を見て、キッとなり、ツカ／＼と前へ行て立ち塞がり
御兩所、こりや何方へお出でなさるゝぞ。下郎なれども主人の仇
トおこづく二人を突き廻して
滅多には歸しますまい。
トきつと見る。兩人こなしあつて
宮六　命を知らぬ下司下郎め、陣代に無禮したる蟇六夫婦
五倍　討つて捨てたが何とした。うぬが身分で敵呼はり、

奇ッ怪な。

宮六　うぬにも主の

五倍　相伴さそう。

ト兩方より一時に切つてかゝる。立廻りにて兩人が刀の手を、しつかと押へて

額藏　ハヽヽ、庄屋たる者に越度があらば、問注所でこそ罪は糺せ、檢見の時分も來ぬうちに、夜中の御入來は、酒飲まう爲でござらう。下郎にも又、詰めのあるもの。主を討たれておめ／＼と見て居やうか。尋常に覺悟極めて勝負さつしやい。

ト突き放す。兩人、手の痺れたるこなしあつて、悔りしながら

宮六　ムウ、よいワ。それ程に願ふ事なら

五倍　身共がお慈悲を以て

兩人　カウ。

ト油斷を見て切りつける。額藏、留めて刀拔き、三人烈しく立廻りあつて、トゞ宮六を切り、五倍二が眉間を切る。下手より家來四人出て、額藏を支へる。五倍二、逃げうとして、下手にて辷りこけるを、家來二人して、額藏にかゝる。二人は五倍二を肩にかけて、橋がゝりへ逃げて入る。額藏、二人の家來をポン／＼と切つて

額藏　うぬ五倍二め、何方までも。

ト駈け出さうとする。春助、額に手を負ひながら、ウツと苦しみ出る。額藏、春助に行き當りて、よく／＼見て

ヤア、そちや春助ぢやないか。

春助　オゝ、額藏か。遲かつたわい／＼。

ト手に縋り泣く。

額藏　さては其方も手を負うたな。して／＼この騷動は、何からぢや。早う聞かせ。

春助　ア、悲しや、お前はまだ何にも知らずぢやな。

額藏　オヽ、今朝其方も知る通り、信乃さまを見送りて、下總の栗橋から戻りがけ、主人夫婦を手にかけて、逃げんとしたる鎌上宮六は殺して、敵は直くに取つたれど、口惜しや五倍二めを取逃がしたが、この場の樣子は。

春助　サア、こなたが今朝立つた後、俄に今夜陣代めが聟入りぢやてと、猫股親仁と狸婆が、嬉しがつて居る只中御寮人樣を浪人の、左母次郎めが駕籠に乘せて駈落ちぢや。其うち聟と代官めは來居るし、ソリヤ搜せ、連れて

戻れと喚くゆゑ、村の者等と連れ立つて、追ひかけたが道が違うたか、よう逢はず、内へ入つた出合ひ頭、切ツつはツつの瘢あやかり。五倍二めに小鬢を切られ、緣の下へ逃げ込んだのぢやわいの。

額藏　ヤア、、すりや左母次郎めが濱路さまを、盜んで逃げたか。チエ、、殘念な。五倍二めよりは、マア差當たる濱路さまの行くへ。して、その連れて逃げた道は知らぬか

春助　慥かに瀧川の、本郷坂であらうとの事。

額藏　ムウ。圓塚山に相違はあるまい。ぼッついて取返さう。

春助　さうぢや。後搆はずと行て下んせ。

額藏　オ、合點ぢや。ソレ。

ト向うへ行かうとする。ドン／＼になり、最前の百姓銘々棒を持ち、知れぬ／＼と捨ぜりふにて出て、額藏に行き當つて、顏見合せ

百姓　ヨ、、、額藏が血刀を持つて居おるぞや。ヨウヨウ、皆防げ／＼。

ト銘々棒にて支へる。額藏、向うを見詰め居て

額藏　邪魔せずと、退いた／＼。

ト行かうとする。皆々ワヤ／＼云うて、棒にて圍ひ、是非なく額藏、本舞臺へ戻る。橋がゝりより、庵八、捕り物の形にて、十手を持ち、捕り手大勢連れ出て

庵八　主殺しの額藏めを召捕れ。

捕手　ハツ。捕つた／＼。

ト銘々十手振り上げ、構へる。

百皆　ソリヤお役人ぢや。

ト皆々慌てる。此うち額藏は百姓皆々の中を潛り拔ける。舞臺には春助、瘢の上へ鉢卷して、棒を持ち、構へて居る。捕り手百姓皆々ごつちやになり、トゞ折重なりて、百姓皆々と春助を押へる。額藏は此うち花道まで拔け、向うをキッと見て

額藏　マア差當るは左母次郎め。さうぢや。

ト凜々しく向うへ走り入る。本舞臺は間違うて、皆々を押へて、捕つたと縛る。庵八はあたりを見る。春助は棒を持つたまゝ、側にて顫ふ。この見得よろしく、

チヨン／＼　　返し

造り物、向う山幕、前、高二重の草土手、兩方に袖山、松の立ち木・吊り枝、見事に下ろし、二重の上

手に柴の燃えさし大分、これに少しづゝ火の燃えてあり、この所上げ下ろしある。平舞臺、よき所に腰かけ岩、すべて關塚山、物淒き好みあるべし。爰に暮明きの勸化、百姓大勢、柴の燃え後を消して居る
ト銘々火を消して
本釣り鐘にて道具納まる。

百一　さて、マアこの間から鳴らした寂寞道人の火定も、これで片附いた。

百二　さても／＼、有り難い事であつたワ。あのマア火の中へ飛び込んでは堪るまい。

百三　サア、そこが生佛樣ぢや。熱うも何ともなしに、死ぬるのぢやあらう。

百四　イヤ、こちらはちよつと火傷してさへ、油藥の鐵漿のと騒ぐに

百一　生きながら燒け死ぬるとは、えらいもの。もう今頃は灰になられたであらう。

百二　オヽ、灰どころかもう跡方もない。併し勸化で上がつた錢金も大きな事。それを死んでから餓鬼に施すげな。

百三　思へば大枚の錢金を火にくべて、餓鬼に施すとは珍らしい善根。

百四　そこが地獄の沙汰も金ぢや。その代り世話人のわしらは功徳で、先の世は大名に生れて來るわい。

百一　おりや大金持ちに生れて、花魁狂ひがして見たいわい。

百二　ハヽヽ、イヤ、それはさうと、もう去んで、娘の火定に入つて溫たまらう。

百三　オヽ、火も大概消した。山中だけに火の用心は氣遣ひはない。

百四　ヤレ／＼、草臥れた。サア、去にませう。

皆々　サア／＼、ござれ／＼。

ト銘々捨ぜりふにて、鉦を叩き、太鼓なかたけなどして、捨ぜりふにて、橋がゝりへ入る。三重、本釣り鐘、蟲の音になる。

〽急き行く、關塚山のぬかり道、はや初夜過ぎて四ツ近く、告ぐる遠寺の鐘の音、後には燃ゆる柴の火の、螢多照るのみ夏蟲の、鳴くより外に物もなし、かゝる夜道を小提灯、旅駕籠の窓に吊り、惡に根強き左母次郎、惡の闇路を事ともせず、道さへ曲る弓村より、關塚山に差しかゝる。

ト右の淨瑠璃にて、向うより左母次郎、返し前の形に

て、加太郎、井太郎、件の駕籠を舁き、捨せりふ云ひ
云ひ出て、本舞臺へ下ろし
井太　コレ親方、定めの所はこの圓塚。
加太　サア、駕籠賃を貰はうかい。
左母　コリヤ〳〵、わいらは何と聞いた。極めた所は板橋まで。ムウ、こりや爰へ下ろして駕籠賃をば。よいワ。もう頼まぬ。その駕籠明けて、とつとゝ歸れ。
ト懐より錢二百出して抛る。
井太　ハヽヽヽ、なんぢや、これが駄賃か。相棒、これを見い。これが駄賃ぢやとい。
加太　なんぢや、これが爰までの駕籠賃か。コリヤヤイ、二百や三百の端下錢を取らうとて、夜道をはる〳〵爰へは來ぬぞよ。馬鹿盡すな。
井太　欲しかおのれにこまさうわい。
ト件の錢を抛りつける。
左母　ムウ。こりや何か。初めの定めを間違はし、急ぐ夜道を合點で、うぬら、こりや強請るのぢやな。
井太　ヘヽヽ、強請るも強請らぬもあるものか。此やうなやばな仕事を頼みながら
加太　侍ひめかして赤鰯、ひねくつても、おのれ一人よい事さすかい。
井太　息杖一本酒一杯、立場で顔のきく板の井太郎。
加太　その相肩の加太郎と、人に知られた雲助冥利、乘せた折が胸算用。
井太　折角かゝつたこの的、うぬに渡してつまるものか。
加太　衒妻は元より、うぬが縕袍路錢まで、殘らず置いて
兩人　去にあがれ。
左母　ハヽヽヽ、ほざいたり藪蚊めら、耳やかましい物ねだり、誠欲しくばこの世の暇、うぬらに取らしてやらわい。
ト刀抜いてキッとなる。直ぐに雨車になり
井太　なんぢや。どす抜いて、何とする。
加太　四も五もない。疊んでしまへ。
井太　合點ぢや。
ト床のめりやす、雨車にて、左母次郎、兩人相手に立廻りのうち、上手の柴火、雨にて消ゆる心にて、切り穴へセリ下げる。左母次郎、兩人を切り殺し、止めを刺す。直ぐにバタ〳〵にて、向うより土太郎、返し前の形にて走り出て、直ぐに立廻り、キッと留めて
左母　此奴等二人と思ひしに、さてはおのれも同類よな。

士太　なに猪口才な世迷ひ言。昨日神宮で見知つた浪人。戸田川筋で名の賣れた、土田の土太郎見忘れたか。同類呼はり、しやら臭い。さう云ふうぬが大盜人。庄屋どのから頼まれて、取返しに來た大事の代物。ちよぼいち仲間の非太郎、加太郎、二人の奴等が敵と云ひ、拐誘しの科人め。念佛でもこづき出し、キリ／＼てこねてしまひ居らう。

左母　ヤア、面倒な追手呼はり。此奴等二人がよい手本。うぬも一緒に冥途の道連れ、生けては置かぬ、覺悟せい。

士太　なに猪口才な。

トまた床の合ひ方、雨車にて、兩人烈しく立廻りて、

トヾ土太郎を切り倒し、キッと止め刺して

左母　いらざるうぬが力身立て。なんと手の內、思ひ知つたか。

ト刀引き拔き拭はうとして、思ひ入れあつて刀を振ると、雨車頻りに鳴る。始終床の合ひ方、また蟲の音。

ムウ、最前から心附かねど、空も曇らぬ星明り。俄かに降り出す今の雨。刃を拭へど血もつかず、着物のずつくり濕つたも、燃えたる野火の消えたのも、皆村雨の劍の奇特。これさへあれば出世の種。エ、忝ない。

へ押戴きて鞘に納め、消え殘りたる野火の中、あたりの柴を投げ入れれば、また燃え出す火の影に、駕籠の網目を解く間もなく、轉び出でたる濱路が縛しめ、解けど正體泣き入る有樣、左母次郎はしたり顔、傍への木の根に腰打ちかけ。

ト此うち雨車、しやんとやむ。左母次郎、柴を抛り込む。ト穴より柴の火の燃えたるをセリ上げる。左母次郎、駕籠より濱路を出して、手拭を取り、これにて腕の手疵を括る。腰かけ岩へ腰かけろ、此うち濱路は悄りしながら、泣き入つて居る。この淨瑠璃の間、始終床のめりやす。蟲の音。

サア濱路、なんぼ泣いてももう叶はぬ。邪魔する奴等はこの通り、三人まで殺して退けた。こりや皆誰れがさす業ぢや。みんな其方から起つた事。薄手は少々負うたれど、大きい怪我がなければこそ、これ程焦れる男をば、なぜ其やうにつれなうしやるぞ。斯うなるからは往生づくめ。否でも應でも女房にする。とても の事なら溫なしう、應と云うて抱かれて寢や、コリヤ、どうぢやぞいやい。

ト寄り添ふを、振り放して

濱路　エ、、穢らはしい。いつまでも否ぢや〳〵、否ぢやわいなう。
左母　コリヤ〳〵、否と云うても應と云うても、人里稀れなこの山越し。なんぼう泣いてもどやいても、仕方はないて。よい〳〵、其方の心の納まるやうに、何もかも云うて聞かさう。昨夜寺からの歸るさに、神宮川の災難も信乃めを川へ引摺り込み、殺してしまふ蟇六が企み事。この土太郎も頼まれて、かゝつたなれど信乃めに叶はず、たうとうそれもしくじつたが、さて又おれには鑿篏が、折入つての頼み。甥の信乃めが持つて居る刀が欲しさ、今宵神宮川の川渡りに、斯う〳〵して蟇六が刀と、信乃めが刀摺替へて下さらば、例へ信乃めは死なずとも、いづく如何なる大名へ上げても、刀が似せなら遁がれぬ科人、縛り首は定のもの。邪魔を拂うたその上で、娘の聟にせうとの頼み。惡い事とは知りながら、件の刀を摺替へたも、貴樣を女房にせうばつかり。
　ト此うち濱路、一々悄りして、向うを見て
濱路　エ、、すりや昨夜の騷動も、皆父樣の企み事。殊に信乃さまの劍まで、アノ母樣が。エ、、、。
左母　サ、、悄りは尤もながら、これからが大事の性根場。その刀を摺替へんと、信乃が刀を拔き放せば、俄かに降り來る雨の足、夏さへ寒き刀の奇瑞。先年亡びし里見の重寶、村雨の劍に相違はあるまい。かゝる得難き名劍を蟇六づれの手に渡すは、俗に云ふ猫に小判。先づそれよりは着服して、お主と二人榮耀の種と、摺替へた顏で、身共の刀を蟇六に渡し、正眞正銘の劍と云ふは、即ちこれに座しますて。
　トひねくつて見せる。濱路、一々悄りして
濱路　ヤア〳〵、すりや信乃さまの刀をば、其方が取つてヤア〳〵〳〵。
左母　サ、、それ程堅い約束を違へて、今夜陣代を、聟にするとの忌々しさ。殺して腹を癒ようより、其方を連れて退くのが腹癒せ。其方は信乃に操を立てゝも、彼奴が命もあつちもの。そんな者を慕ふより、すつぱりと思ひ切り、二人一緒に京に上り、室町どのへ劍を上ぐれば、一簾の立身出世。さすれば其方は奧樣と、人も敬ひ傅かす。それ樂しみにちつとも早く、この山を越すがよい。これ程思ふ心中男、廣い世界に又とあるまい。コリヤ、〳〵どうぢやぞいなう〳〵。
　〽どうぢや〳〵と手を取つて、しなだるゝ程悪しさ辛さ、



明治十七年二月市村座上演　岩井松之助の濱路



市川高八藏の杏目矢郎　　片岡我童の額藏

夫の身の上思ひやり、胸もいぶせき憂き涙。

濱路 エヽ、聞けば聞く程恐ろしい、兩親の企み事。それ程までに信乃さまが、憎いかいなう。情ない恨めしいお心ぢやなア。

左母 オヽ、その恨みは道理々々。さて／＼憎い二人の奴等。腹立ちやるも尤もぢやが、今更云うても返らぬ事。もうすつぱりと、諦らめや／＼。

〽濱路は吐息つく／＼と、夫の難儀助けん爲、騙して劍を取返し、夫に手渡しせんものと、よう／＼涙押拭ひ。

濱路 成る程、最前無理に縛しめられ、今まで無體に連れられしゆゑ、腹の立つたはわたしが誤まり。思ふ人にはえ添はず、思はぬ人に添臥しも、皆逃がれぬ宿世の契り。お前の詞に隨ひませう。

左母 ムウ、すりやアノ得心して、身共と一緒に。

濱路 例へ何方の山奥でも。

左母 そりや眞實ほんまの事か。

濱路 なんの僞はり云はうぞいなア。

ト少し寄り添ふ。左母次郎、ぞく／＼して

左母 エヽ、忝ない、女房ども。

ト拜む。

濱路 さりながら、疑ふではなけれども、その村雨とやらが誠なら、信乃さまにも命はあるまい。とてもの事に今爰で、わたしが心の念晴らし、一目見せては下さんせぬか。

左母 オヽ、その疑ひも道理々々。信乃も油斷はせぬけれど、舅の難儀助けんと、柳の梢に吊り置いたを、摺替へたれば夢にも知るまい。この村雨は其方と我れら、緣を結ぶ神の賜物。僞はり云はぬ印には、拔けば忽ち降り來る雨。これ見て疑ひ晴らし給へ。

〽すらりと拔いて手に渡せば、又も一村降り來る雨、取るより早く身を構へ、

トまた雨車、野火セリ下げる。

濱路 夫の敵、覺悟しや。

ト切つてかゝるを、左母次郎、差添にて受け留める。

左母 ムウ、すりや、どうあつても身共が心に

濱路 云はうやうない大惡人。なんのおのれに隨はうぞ。

左母 オヽ、さう吐かしやア、可愛さ餘りて憎さが百倍。

濱路 オヽ、殺さば殺せその刀、取返さいで置かうか。

左母 エヽ、面倒な、ふんばりめ。生けては置かぬ觀念ひろげ。

〽難なく刀打ち落し、乳の下ぐつと刺し通せば、アッと魂ぎる手負ひの聲、膝に引きつけ怒りの聲。

コリヤ、なんと思ひ知つたか。うぬ、戀なればこそ、網干左母次郎ともあらう侍ひが、これまで樣々詞を盡すに執心深い刃物三昧。それ程信乃めに逢ひたくば、暇を取らす、あの世で添へ。もし身が心に隨はねば、汁の滴るだけ金にせうと、思ふに甲斐なく、代物に疵つけたら、戀も慾も覺め果てた。一思ひに殺すもよけれど、これまで釣られた心ゆかせ、腹存分嬲り殺しぢや。云ひたい事があるなら云へ、泣きたか泣け、苦しむ聲を慰みに、月の出るまで聽聞せうわえ。

〽手負ひをはつたと蹈みにじり、劍を鞘に納めた顏、頬鬚撫でゝ懷より、取出す毛拔も食ひ違ふ、木の根に腰を上げ胡座、濱路は弱る急所の深手、起き直れども亂れ髮、顏にかゝるを振り拂ひ。

トまた蟲の音、雨車やんで、野火セリ上ぐる。後床のめりやす。

濱路　チエ、、恨めしい左母次郎、主ある女と知りながら無體に爰まで盜み出し、親の惡事に荷擔人して、劍を取られたばつかりにて、夫の命にかゝはる事、一太刀なりとも恨まいで、此まゝ死ぬるが、エ、口惜しい。

左母　オ、、道理ぢや〳〵。可愛い事を。まそつと泣け泣け。

濱路　非業の刃に身を果す、命はさら〳〵惜しまねども、心にかゝるは夫の身の上。操を守り殺されしと、誰れが告げ知らす者もなく、此まゝ死ぬるが口惜しい。誠の親も兄弟も、里見のお家で犬山と、苗字は知れてもどこを當。親にも夫にもえゝ逢はず、冥途も同じ一人旅。これも誰れゆゑ左母次郎、夫の敵、この身の仇。九つの世は變るとも、恨みを晴らさで置くべきか。エ、口惜しい、死にともない。恨めしいは今の親達。戀しいは犬塚さま。ま一度逢うて眞實の、親兄弟の生死の程、詳しう聞くまで死にともない。エ、、我が身を守る神樣や、佛樣もない事か。エ、、口惜しい、無念なわいなう。

〽恨みつ泣きつ掻口說く、涙は血汐と爭へり、左母次郎は大欠伸、毛拔に附きし鬚押拭ひ。

左母　ア、、さても〳〵長たらしい世迷ひ言。謂れを聞けば有り難い。親の爲には孝行でも、信乃が爲には貞女でも、おれが爲には何ともないワ。いらぬ無益の殺生も、みんなわれが心柄。急所の深手を苦にもせず、長せりふ

は感心々々、さらば其方への褒美には、この世の暇取らしてくれう。

〽持ちたる毛抜取納め、刀抜き取り思案顔。

イヤ、待て暫し我が心。われが飽くまで執心かけた、信乃が刀で心よう、お十念を授けてくれう。なんとそれで本望か。喜べ〳〵。

〽嘲笑半分えせ笑ひ、差添納めて村雨の、刀片手に降る雨も、皺に沁み込む手負ひの苦しみ。

トまた雨車。

濱路　オヽ、例へ敵の手に死すとも、夫の刃にかゝるは本望。サア、早う殺しや、殺しやいなう。

左母　オヽ、よい覺悟ぢや。お念佛でもこづき出せ。南無妙法蓮陀佛。

〽息の根とめんと煌めかす、刃の光に先達て、誰れとは知らず打ちかけし、手練の手裏劍、誤またず、網干が急所に打ち込めば、ウンとばかりに息絶えたり。

トこの淨瑠璃のうち、よき所にて雨車と共に、柴火セリ上げる。とその穴より薄ドロ〳〵にて、道節、エイと聲かけス。ト左母次郎の咽喉へ手裏劍當りて、ヲツと苦しむ。劍を捨て、ポンと返る。好みの鳴り物になりて、その穴より道節、大百日、鎖帷衣、腹卷、廣袖紫帶、丸括けにて、太刀を一本差し、笹小手の脛當武士草鞋、書面の通りの形にてセリ上げる。此うち濱路は苦しみ悶絶する。道節は、そろ〳〵と平舞臺へ下りて、左母次郎の死骸を蹴散らし、落ちたる件の劍を拾ひ上げて、キツと見る。雨車嚴しく、雲氣さま〴〵合ひ方になる。

道節　ハア、、音に聞く村雨の寶劍、拔けば玉散る露か雫か。ハテ、奇妙々々。燒刃の匂ひ、容にごうけいを引く如く、地に清泉の流るゝに似たり。ほうぜう三尺の氷、呉宮一かんの霜。世にも稀れなるこの銘作。神龍これが爲に雲に吟じ。魔魅このゆゑに夜鳴けん。今計らずしてこの名刀、我が手に入りしは復讐の、素懐を遂ぐべき時到れるか。ハヽハツ、アラ喜ばしや、嬉しやなア。

ト大ドロ〳〵にて、道節、劍を戴き、鞘へ納めると、雨車やんで柴火以前の通り燃え立つ。後床のめりやすにて、道節、思ひ入れあつて、懷中より藥を出し、濱路にくゝめ、腰の水のみにて、谷水を掬ひ飲ませ、キツと抱かへて

コリヤ女、心を慥かに持て。深手なれども急所にあらず

心を附けよ、コリヤ女。

〽心をつけよと呼び生ける、血筋の縁の通じてや、ウンとばかりに吹き返す、息も絶え〴〵苦しむ有樣、落ちる細帶取上げて、腹帶代りにしつかと締めあげ。

ヤア女、事の元を告げず、我が俗性も明かさねば、驚ろくは尤も。深手ながらも急所にあらず、心を靜めてよつく聞け。我れは卽ち御身が兄、犬山道節忠友と云ふ者ぢやわい。

〽聞くに濱路も苦しさも。忘れて顏を打眺め

濱路　エヽ、さてはお前がこの年月、焦れ慕うた兄樣か。どうしてそれを、いつの間に。

道節　ホヽ、不思議な尤も。詳しう譯を云ひ聞かさん、事長くとも苦痛を堪え、聞いて今際の望みを遂げよ。

ト大小入りの合ひ方になり、濱路、手を放して、岩崖に腰かけ

名乘れば憚りなきにあらねど、夜の繁山外には人なし。爰に計らず同胞に、巡り逢ひしも盡きせぬ緣。抑も我が主君たる里見の家は、先年神餘光義が殘黨たる、岩木素藤が爲に滅亡して、東條原館の一族諸とも、數を盡して討死なし、生き殘りたる者絶えてなし。我が父犬山道策、どのは、その以前寶藏へ、曲者入つてお家の重寶、村雨の名劍を奪ひ取り、父道策どのを討つて立退く。預かりの寶を失ひ、剩さへ命を落せば、犬山の家は閉門。その時我れは母の胎内に身ごもる當座。情なや其うちに、主君の家は滅亡して、母はやう〳〵その場を落ちのび、武州練馬に身を隱し、産み落したは卽ち某。その後我れを養育せん爲、連れ子となして二度の片附き。その家にて産れしは、卽ちおこと、なりや、胤は變れど腹は一つの兄弟ながら、産後の惱みに母は死し、父の手一つで二人の子、養ひ難しと御身をば、大塚村の蟇六とやらんへ養女に遣はし、我れ十三の秋の頃、義理ある父は病み臥し、重き枕に我れを呼びつけ、今日まで養育せしは、御父犬山道策ぬしには、深き恩義を受けしゆゑと、主家の斷絶身の系圖云ひ聞かせ、今日より心を勵まして、君父の敵素藤を亡ぼし、誠の父母が宿意を晴らせと、遺言してその日を去らず、遂に臨終。悲しき中に心を定め、父の遺命を達せん爲、家に傳はる忍びの秘術、隱術五遁の第二の法、火遁の術を行うて、修驗者と樣を變へ、名も寂寞院肩柳と變名して、行く所にて火定をなし、愚民の錢を集むる事、皆軍用の爲にして、この頃爰に法を解き

詐かり果せて黄金を集め、燒失せしと見せ死を遁がれ、再び越ゆる圓塚山。何事やらんと窺ふところ、この場の有樣。これなる男子が無慘の殺害、女は蟇六が養女にて濱路と云ふは今の名ならん。我が妹に相違なしと、手裏劍の以て妹が、當の敵は討取つたり。聞けば其方は幼少より、云ひ號けの男あつて、彼れに操を立て通し、命を捨てゝも身を穢さず、名さへ知らぬ誠の親や、兄弟を慕ふ心の切なるは、貞女にしてまた孝なり。なれども本意をえ遂げず、我れ又爰へ來合しながら、救ふ事の遲かりしゆゑ、敢へなき最期を遂げさせしは、これも輪廻のなすところ。ア、、不便の最期をさす事ぢやなア。

〽不便の者の有樣やと、ほろりとこぼす一雫、涙は親身これぞこの、末期の水となるやらん、手負ひは苦しき息をつき。

濱路　ア、嬉しや忝なや。今際に聞きしこの身の系圖。今まで誠の親達に、逢ひたう思うた願ひが屆き、一つの迷ひは晴れたれど、それにつけても悲しさの、勝るは我が身の因果ぞや。

〽世にあるうちは假親の、強慾邪慳に身を苦しめ、たまたま結ひし夫にさへ、縁果敢なく中絶えて。

現在夫の仇敵に盜み出され、此まゝ爰で死んだなら、人の口には心中とも、浮名の立つが口惜しい。まだまだその上に、心にかゝるは夫の身の上。これも親御は里見の家中、犬塚番作さまの一人子に、犬塚信乃戌高さまとて、わたしの養母の甥ながら、忠孝の道正しく、お主の家を起さんと、昨日やう〳〵旅立ち出立。その時今の親達が、この左母次郎を語らうて、情なや村雨の劍をうま〳〵奪ひ取られ、それとは夢にも御存じなければ、如何なる憂き目か見給はん。息あるうちに劍を手渡し、夫の難儀を救ひたい。これぱつかりが冥途の障り。

〽迷ふわいなと身を悶へ、物云ふ度に迸る、血汐も草に染めなせり、道節涙打拂ひ。

道節　ホウ、その嘆きは尤もながら、何事も過去の業。また御身が亡骸は、幸ひ我が入りし火定の中、塚となさば人知れず、又は佛果の種にもならん。殊に村雨の劍の儀は、この左母次郎めとやらんが口走つたを、詳しく聞いたり。今際に逢うたる妹が望みなれば、この村雨を以て行くへを尋ね、妹脊の信乃とやらんに、渡しくれんと思へども、我が父犬山道策が、奪ひ取られしこの劍。いま手に入りしは天の祐け。これを以て片時も早く、敵素



明治十七年二月市村座上演　中村芝翫の道節

藤に近寄りて、仇を報はんには屈強の賜物。首尾よう本望遂げし上、其方が夫に巡り逢ひ、望みの劍手渡しせん。勇士の本意は先ッこの通り。必らず恨むな、コリヤ妹。

濱路　エヽ、そんならお前の大望達するまでは、夫に劍は渡されませぬか。

道節　サア、その信乃とやらんが心を碎くも、元を糺せば一つの主君。我れこの村雨の劍を以て、怨敵菜藤を亡ぼす時は、自然と信乃が忠義も立つ。爰の道理をよく聞き分け、心殘さず成佛せよ。

濱路　すりや、どうあつてもこの願ひは。

道節　主家の大事にや替へられぬわい。

濱路　ハアハヽヽ。

〽はつとばかりに胸迫り、この世の頼み玉の緒も、絶えて果敢なくなりにけり、はや山の端に照り渡る、二十三夜の月魄は、晝よりも猶明るけし、道節、瞼しばたゝき。

トこの淨瑠璃のうち濱路、苦しみ落入る。道節、コリヤと抱へても綷切れた思ひ入れ。本釣り鐘ゴン〳〵と鳴りて、空より絹張りの月を出す。道節、愁ひの心にて立ち上がりて

道節　ホヽウ、類稀れなる妹が貞節。今際の頼みを聞入れぬも、武士の習ひ、無得心と恨みもせんが、せめて亡骸取隱し、菩提を弔らうて得さすべし。さうぢや〳〵。

〽空しき骸を抱きかゝへ、火定の設けも方便の、約束事と差入るゝ、柴に折節焔々と、風が誘うて燃え上がる、荼毘の煙の有爲無常、流石に猛き道節も、血筋の別れ茫然と、暫し淚にくれけるが、心勵まし合掌し。

ト此うち道節、濱路の死骸を二重へ抱き上げ、柴の中へセリ下ろし、柴火を蒸くべ、よろしく合掌して

〽南無阿彌陀佛彌陀佛と、回向に曇る淚聲。

一念稱名頓生菩提。南無阿彌陀佛々々々々々々。

凡そ法師の終りを遂ぐるに、薪を積んで自ら燒くを、火定と云ふ。我が朝には信濃なる、戸隱山の長明法師が鳥邊野に火定なし、また紀伊の國那智山の應照も、終りを火定に遂ぐと聞く。我れは大義をなさん爲、そゞろに愚民を欺むきし、火定の因果覿のあたり。妹が身を燒き灰となせしが、我れ又何れの里に死し、何れの野にか骨を埋めん。定めなき世の佇まひ。遲るゝも先立つも、皆一片の煙となる。

〽思へば果敢なき浮世やと、暫し淚にくれけるが、容打眺め心附き。

ホウ、不覺の嘆きに夜も更けたり。イデ、この山を打越えん。ソレ。

ヘ劍を横たへ悠々と、立ち上がらんとする所へ、息もすたすた額藏が、取つて返せし夜の道、野火の明りを道知るべ。

ト矢張り本釣り鐘、蟲の音にて、道節、向うへ行かうとする。向うバタ／＼にて、額藏、大肌脱ぎにて走り來る。これにて道節、ちよつと扣へる。額藏、息をつきながら、花道にて立ちとまつて舞臺の野火を見ながら

額藏　もうこれ程に駈つて來たれば、是非左母次郎めに逢はねばならぬが、向うに見えるは火定の灯。ドリヤ／＼向うまで行て、マア、息を休めに水なと一口、飲みたいものぢやが。

ト矢張り本釣り鐘、床のめりやすにて、額藏、本舞臺へツカ／＼と來て、水の流れを捜す心にて、血に辷り少し悧りして、そこらを眺める。此うち道節、構はずツカ／＼と行かうとする。額藏、さてはと云ふ心にて直ぐに劍の小尻を取る。道節、直ぐに振り放す。これより面白き仕組みの立廻りあつて、トヾ双方刀を一時に抜き合せ、キッととまる。誂らへの鳴り物入りに雨車になり、野火セリ下げると、月を空へ隠す。と一時の途端よろしく、斷末の立廻りよろしくあつて、よき程に道節、烈しく額藏を切り拂ひ、劍を袖にて隠す。月と野火と一時にセリ上げる。これにて額藏、飛び退き、キッと道節を見る。道節、上手の切り穴へ消える。掛け煙硝パッと立つ、額藏、道節を見失うたる心にて、あたりを見廻す。花道よき所へ、道節、野火の篝を持ち。劍を腰に差し、セリ上ぐる。額藏、これを見て

曲者待て。

ト聲かける。道節、篝を捨てゝ劍を引き抜く。月と野火とを一時に消し、雨車、チョンと頭、額藏、また見失うたるこなしにて、チエ、殘念なと云ふ。この見得よろしく

幕

道節　ム、ハヽヽヽ。

ト高笑ひする。出端の拍子になり、鳴り物へ山颪しをかむせ、道節、悠々と劍を納め、向うへ入る。

六段目

濟我館の場
芳流閣の場

役名　横堀史在村。蟇崎十郎照文。馬加大記常武。杉山市郎。丁田町之進。古河十郎。甘利掻太。長頸飛作太。石龜屋次團太。鮫守の磯。科人芥三。同、源太。同、須本太。同、蟹庵。同、太九郎。菖の君。杉倉與方、蟹目の前。犬塚信乃成孝犬飼現八信通。

造り物、向う金襖、通りの二重、正面瓦燈口、橋がゝり切り幕の處、小門。向う戸屋の切り幕も同じ小門。右二重の上に、市郎、常武、社杯大小にて、臺帳を扣へ調べ居る。平舞臺に町之進、十郎、掻太、飛作太、何れも上下大小にて科人を調べ居る。下手に次團太、鮫守の磯、芥三、源太、須本太、蟹庵、太九郎、各々科人の拵らへ、月代伸ばし、繩帶繩付きにて、後に法被、袴股立ちの足輕大勢、棒を持ち扣へ居る。すべて濟我の濱館の模樣。時の太鼓にて幕開く。

町之　先達てより入牢の申し付けたる重罪人の者ども。
十郎　今日落着をいたさん爲、召し出したる分、一々これへ
飛作　罷り出でましてござりまする。
　ト科人、皆々踞まる。序の舞になる。
市郎　主君成氏公、室町どのゝお覺えめでたく、即ち濟我の御跡目に附かせ給ひしお喜びとして、先君より未だ決斷せざる科人どもまで召し出され、それ／＼に科の落着あらんとの思し召し。
常武　さるに依つて、執權横堀在村どのゝ御執成しを以て、科の輕き者はお叱りの上差免し、重罪の者はその罪を輕め、百棒打つて殘らず當國を拂ひ、助け遣はす。
町之　慈悲は上から流るゝとあれば、今朝悉く輕重を糺し赦されたる數百人、これ皆上の御仁心。
十郎　其うち主殺し親殺し謀判、似せ金密夫などの、遁がれ難き重罪の者どもも、首を繼がれし仕合せ者。
飛作　これも全く執權、横堀在村どのの御執成しゆゑ。有り難いこの御恩、忘れぬやうに致すがよい。この旨キツと

四人　申し渡したぞ。
磯　これは／＼、有り難い思し召しでござりまする。イヤモウ、斯う並びました科人の中で、私しとこの男が中での座頭。
次團　それ／＼、親方の内の矢尻切つて、入つたを見付けられ、逆磔刑は定めの者。
芥三　私しは又方々へ、放火を仕掛けたその上に、現在産みの親殺しの科。
源太　おれは似せ金葺いて遣うた上、謀判の目割れ。
須本　おいらは曲り男やら、くらさいやら、どう廻つても首代物。
蟹庵　慾から匙の取違へ、毒藥を盛つたこの藪醫者。
太九　拔け物買ひの座渡り、命はどうであつちものと思ひの外
磯　お殿樣のおめでたと、御家老樣のお情で
次團　金の鎖で繋いでも、助かり難い私しども、お助けなされて下さるゝとは
皆々　エヽ、有り難う存じまする。
市郎　云ひ渡し相濟む上は、白洲へ引出し、百棒打つて追ッ拂へ。

常武　早く立ちませい。
皆々　ハイ／＼、立ちますでござりまする。ヤレ／＼、有り難や／＼。
ト捨ぜりふにて科人皆々、足輕付き添ひ橋がゝりの小門へ入る。この時奥より
呼び　姫君のお成り。
市常　ソレ、姫君のお成りとござる。
四人　ハツ。
ト序の舞に成り、市郎、常武、平舞臺へ下りて兩方へ三人づゝ居る。正面瓦燈口より、吾の君、さゝげ付きの姫にて、後より蟹目、補襠奥方の拵らへ、次に佃、庵崎腰元にて附き添ひ、次に在村、長絹、上下、撫付けにて、近習二人を連れ、照文、上下大小にて付き出て、吾の君は上手の褥に座す。次に奥方、腰元、眞中には在村、二重の下手に照文坐る。序の舞打上げる。あと合ひ方。
吾君　横堀在村を始め、家中の者ども、役目大儀。
在村　これは／＼御挨拶。姉姫の吾の君さまには、成氏公の御名代。
六人　今日のお役目、御苦勞千萬に存じまする。

蟹目　姫君吾の君さまには、兼ねてより、山内顯定どのゝ御預かりたる、里見の公達義實どのに、云ひ號けあつてこの度のお喜びを幸ひ、里見家再興あらんとの事なれど、結納に取交すべき、村雨の太刀は、貳十餘年が間行き方知れず。殊に姫君の附添ひたる、夫杉倉氏元は、長々の所勞に依つて登城も致さず、夫に代る自らまでが辛勞。何れも樣、御推量下されませ。

照文　管領顯定公のお指圖に依つて、村雨の劍の在所知れるまでに、當滸我の姫君には、桐一文字の錯通しを、結納の印として、村雨の劍に替へなば、里見家再興お許しとあれど、この一振りも又もや紛失。さある時には里見家は、再興は元より、姫君の御縁邊も、徒らに延引。それゆゑ劍詮議の爲、顯定公の仰せを受け、義實公の付添ひたる蜑崎照文、この處に數日の滯留。

沓掛　自らとしても武將より、御許るしを請けながら、桐一文字の劍紛失ゆゑ、何日御縁組みの出來る事と、下々に心を、碎いて居りますわいなう。

在村　イカサマ、姫君は元より、預かり人たる杉倉の御内室、また義實公の近臣たる、照文どのの御心配の程、察し入る。某とても劍詮議に心を盡せど、行くへ知れねば詮方なく、幸ひこの度我が君、御跡目の御喜びに付き、多くの科人どもの大赦行はるゝやう、お勸め申すも、君の御仁心を知らしめ、紛失の劍の行くへも知れるやうと存ずるゆゑ。して、某が指圖の通り、何れも、科人の落着、片付け召されたか。

當武　如何にも、仰せの趣き申し渡し、輕き科人は其まゝ重罪の者には百杖打つて、追放あるやう、一々申し聞かせましてござる。

市郎　この帳面に引合せ見れば、いま一人殘りしは、御家來犬飼現兵衛が悴、現八。先君の時、重寶の鷹を射殺したる科人。

四人　この者は如何仕りませうな。

在村　成る程、犬飼現八は、聊かな科にて永々の禁牢。元より當家の家來なれば、幸ひこの度の大赦に付き、赦し遣はすが理の當然。杉倉の内室も共にお立會ひなれば、これへ呼び出し、事の落着、相調べうではござらぬか。

蟹目　イヤサマ、この度の大赦は、在村さまの思し召し、夫氏元にも、共々御相談申す筈、病氣なれば詮方なし。女の差出がましけれど、取敢へず夫の名代、お互ひに御遠慮なく申し合さん。何れも、現八どのをこの處へ。

下役　ソレ、現八をこれへ引かつしやい。

ト内にて

足輕　イザ、お立ちなされい。

ト合ひ方になり、橋がゝりの門を明け、中より現八、大百日、牢入りの姿にて、後より以前の足輕、皆々附き出る。現八、皆々を見て、ハッと下手に平伏する。

蟹目見て

蟹目　ホヽウ、珍らしや犬飼現八どの、長々の禁牢、さぞ難儀。この度お上のお喜びに付いて、それ／＼科を輕めて、大方は落着。何卒こなたにも御助命と思へども、心に任せず。格別のお慈悲を以て、切腹仰せ付けらるゝ間有り難うお請けなされてよからう。

ト思ひ入れあつて云ふ。現八も思ひ入れあつて

現八　杉倉氏の御内室、お志しの程、千萬祝着に存じまする。萬事のお指圖、在村どのゝお心遣ひ、冥加なう存じまする。

常武　アイヤ／＼、蟹目の前さま、すりや今日のお喜びに付けても

市郎　さして重罪と申すまでもない現八には、格別の思し召しを以て

下役　アノ、切腹でござるかな。

蟹目　如何にも。これなる在村さまのお執成しゆゑ、禁牢のうち缺所も仰せ付けられず、一家一門にもお構ひなきは、主君のお情。その御恩を思ひ切腹あらば、いよ／＼首尾よく跡目相續も、別條あるまじ。そこを存じて自らが勸め。急ぎ切腹なされてよからう。ナウ在村どの。

在村　イヤ／＼、こりや蟹目の前が詞とも覺えず。云はゞ現八は輕き科。我が君鷹野の折から、鷹を射殺し、その御怒り強きゆゑ、當分の牢舍。只今になつて切腹とは心得ず。こりや、ちと料簡が違ふと存ずる。

現八　イヤモ、切腹とは兼ねての覺悟。今更命を遁がれんと、申すではござらねども、先刻よりの囚人は、皆極惡人、罪を比ぶれば、ほんにこれが九毛の一毛にもなき某が科。大を除き、小を戒める御政道。これには意趣ばしあつての儀かな。

照文　ハヽヽ、小賢しき訊ね事。他門の照文が入らざる差出とは思はれうが、蟹目の前は女性の事、私しの意趣を以て事を糺し、君の威光を殺ぐべきか。例へ此方より命助けて得さすとも、武士の恥辱を思はゞ、望みても切腹する筈。命助かつて、首枷手枷の恥辱はなんと。未練千

萬な繰言。

現八　ヤア、過言なり照文。某主君へ弓は引かず、ましてや盗人の名は取らず、酒興の上の外れ矢にて、お鷹を射殺したは時のはずみ。その恥を呼はつて勘定に立つ事あらば、云うてお見やれ。

蟹目　ホヽウ、見下げ果てたる臆病風。尤も鷹を殺したるその科は輕けれど、先君のお怒り強く、キッと仰せ付けられた牢舍。今は御世變つて成氏どのゝお捌き。命助けては先殿様のお心もどき、剩さへ御政道の非を訂す同然。この理を以て自らが、切腹と申したが、誤まりでござんすか。但しは無理か。サ、なんと。

現八　イヤ、その詞、暗い／＼。先君の御意を用ひば、某より先に禁牢せし科人數多、何ゆゑ命を助けられた。

照文　ヤア、愚かなる現八が問ひ事。井の水と大海と一口には云はれぬ。天下の科人は大海の賊。一人の心を以て堰きとむるも及ばず。貴殿の科は井の内の水。先君御一人の心に背き、罪輕うして赦すべき處なし。繰言を云はず、早々切腹々々。

蟹目　但し、縛り首がお望みか。河原に恥を晒さうより、覺悟あれ犬飼現八どの。

トきつと云ふ。現八、ムウとこなし。在村、此うち敵役、皆々と顔見合せ、思ひ入れあつて

在村　双方の論議尤も。別して蟹目の前の詞、蟇崎が判斷も一理あり。さりながら、近きに當つて遠きを慮からず。先君この世にましまして、萬一現八を助けよと御赦免あらば、切腹させて後で後悔。よしこれは兎もあれ、一旦この在村が指圖の詞、反古にはならず。コリヤ／＼現八、命は某が助くる程に、切腹には及ばぬぞよ。

現八　すりや、切腹には及ばず、御助命なされ下さるゝとな。

蟹目　イヤ、そりや在村さま贔屓の御沙汰。御政道が片寄りまする。

在村　そりや又何ゆゑに。

蟹目　現八をお助けあつて、もし又お上よりお咎めあればその時は何となさるゝぞ。

在村　イヤ、入らざる批判。誤まりあらばお手まへ達の命は頼まぬ。某が切腹して、御前へ云ひ譯いたす。

照文　すりや、御自分が一命に替へても

蟹目　矢ッ張りお助けなさるゝおやな。

在村　オヽ、サ、武士の詞に二言はない。

ト　これにて蟹目の前、思ひ入れあつて

蟹目　さう仰しやれば是非に及ばぬ。自らはこれより姫君の御供して、我が君樣のお耳に達せん。後日の雜儀は在村どのへ、お渡し申すが、合點かな。

在村　オヽ、云ふに及ばず。身共が受取る。コリヤ〳〵、現八、何をうつかり。斯くの通り某が身に引替へて助くる上は、申し付ける用事もあり、次へ立つて休息せよ。早く早く。

現八　ハア、お禮申すも恐れあり、彼の漢土の沛公が、鴻門の會を免かれし項伯が恩、陳平が情に越えし御惠み有り難う存じまする。

ト　思ひ入れあつて立ち上がる。

蟹目　イデこの上は姫君諸とも、お上屋敷へ參つて、今日の披露、具さに申し上げん。蟹崎さまには、先程とくと申せし事、後に殘つて何かのお指圖、御苦勞ながら。

照文　ハツ、例へ御緣邊は延引するとも、御家門たる當家の用向き、次に扣へて承はりませう。お心安う思し召されい。

蟹目　イザ、姫君樣には、おこしあられませう。

ト　これにて吾の君、立ち上がる。腰元四人從つて、平舞臺へ下りる。

吾君　横堀在村。

在村　吾の君さま。

蟹目　蟹崎照文さま。

現八　杉倉の御內室。

常市　犬飼現八どの。

蟹目　何れも、後刻。

皆々　姫君のお立ち。

ト　下がり葉になる。照文は奧へ、吾の君、蟹目の前、腰元四人は花道へ、現八、蟹目の前の方を睨みながら、足輕皆々附き添ひ、橋がゝりへ入る。あと在村、敵役六人は本舞臺へ殘り、各々顏見合せ、目禮して靜かに別れて入る。後に在村、皆々、顏見合せ。

皆々　横堀在村公。

ト　在村、顏にて押へる。序の舞。

市郎　我れ〳〵斯く心を合し、貴殿へ一味いたせしも、兼ねて諜し合せし通り、許我と里見の緣組みに、入用の桐一文字は、先達て鑓の三寶平に申し付け、遠國さすれば氣遣ひなし。

常武　殊には里見家が差出すべき、村雨の劍も、廿餘年行

くへ知れねば、里見家再興は思ひも依らず。吾の君が附き人たる、杉倉氏元は、先年より病み呆けて死人も同然。

十郎　それゆゑ今朝よりの科人どもにも、主君の仰せを悖るとも、在村との〃執成しにて、命を助け遣はすは、情を掛けて追ッ拂ひ

町之　すわと云はゞこなた樣にお味方させん爲。犬飼現八にも情をかけ、命助くるその上に、御家來分にもなされると

飛作　相役杉倉氏元が批判を打ち、汝等が命を取らんと、今までの勤勞。もし恨みあらば、助命の上は勝手次第。

掻太　成氏はじめ、氏元に恨み含ませ、斯く計略の調ふ上は、岩木素藤と諜し合はせ、成氏に詰め腹切らせ

皆々　暫時も早く謀叛の旗上げ。

　　トきつとなるを。

在村　ヤレ聲高し、靜かに／＼。我れその事に心付かぬにはあらねども、未だ到來の時節にあらず。その樣子といつば、我が親たる山下定包は、以前里見季基義成の貳人を滅亡し、いま岩木素藤と改名して、安房上總の兩國を押領する。然るにその頃、管領たる山内顯定は、里見の家に緣あれば、義成が落胤義實を預かり、近頃成氏が妹、吾の君と、婚禮の結び、再び里見の家を興さんとの約諾。この儀首尾よく調ふ時は、國の仇たる素藤が身の上、殊に里見の舊臣たる、金鞠大輔と云ふ奴、宙大法師と名を替へて、恩顧の武士を集むるとの事。心憎きは杉倉氏元、彼奴も元は里見の家來、先君の時より當家に乞ひ請け、家老となせしが多病となり、引籠もり居るも、一物あるに極まれば、今我れ謀叛の色を顯はさば、里見の奴輩その虚に乘じ、我れ一に責め寄せなば、味方は小勢甚だ危ふし。それゆゑ犬飼現八まで手なづけ置くは、味方にせん爲。彼れは二階松山城が武藝の高弟、秘術の印可も受けたる奴。一人あれば百人に向ふ。かゝる味方を心密かに集め、防禦の用意に當て、その上素藤と諜し合せ、成氏に詰め腹切らすに、なんの手間隙。なんと何れも、合點がいたか。

常武　成る程、御尤もの思し召し。それに付き、今朝來が屋敷まで、願ひに參りし里見の舊臣、犬塚番作が悴犬塚信乃と申す若者。彼の村雨の劍を所持して、里見再興の願書の趣き、云ひ入れるその間。身共の屋敷に扣へさせしが、油斷を見濟まし、奪ひ取りませうや、如何計らひませうな。

在村　ホヽウ、その手段も致し置いた。その信乃とやらんが、村雨丸を持參せしこそ屈竟。後程これへ召し出し、情を見せて留め置くも、矢張り味方に付ける計略。

常武　成る程、彼奴今朝よりの贈答に、辯舌爽かにして、なかなか容易の奴にあらず。味方に付けば丈夫なれども萬一味方に付かぬ時は

在村　その時こそ、村雨の刀奪ひ取り、敵方よりの廻し者と云ひ立て、搦め捕らば心のまゝ。常武、御身は信乃を召し連れ、後程これへ同道召されい。

常武　ハッ、畏まりましてござりまする。

在村　また市郎は次の間にて、現八を呼び寄せ、身共が情にて助けしかど、成氏達て其方の命を取れよと、再度の催促、誠某が恩を思はゞ、人知れず成氏を討つて、命全うせよと、情に掛けて云ひ含めよ。

市郎　ハッ、心得ましてござりまする。

在村　まだ申し合す密事もあれば、何かは奥の一間にて。

常市　左様ならば、我れ我れは。

在村　皆時も早く。

常市　ハッ

ト市郎は橋がゝりへ、常武は向うへ走り入る。

四人　イデこの上は在村公。

在村　何れも、來やれ。

四人　先づ、お入りあられませう。

トちやんちやんと唄になる。在村を先に敵役四人、近習も從いて入る、と後合ひ方。次第を打つと、奥より照文、以前の形にて出でゝ、あたりを見廻し、こなしあつて

照文　先刻杉倉の内室と、犬飼現八が爭論も、執權たる在村どのゝ扱ひにて、その場は濟めど、一物ある在村が心底。慈悲を以て命助くる人にもあらず、女なれども蟹目の前は、杉倉どのに連れ添へば、僞はり飾らぬ正路の云ひ分。現八も武士のはしくれ、助からぬ命を助かりしは贔屓の沙汰。武士たる者に生れながら、横しまの政道を以て遁がれ、生き長らへて何の面目。よもや心付かぬではあるまいが、鹿を追ふ獵師山を見ず、盜賊金を見て主あるを知らずとは、丁度犬飼現八が身の上。命助かるに眼くれ、後日の難を知らぬとは、ハテ氣の毒千萬。

トこの時現八、橋がゝりより以前の拵らへ、衣裳上下に改め、手を組み乍ら思案のこなしにて出て來る。フト照文を見て、チッと思ひ入れ。照文もソット現八を見

て、こなしあつて

照文　オヽ、それへ見えしは何者ぞと思ひしに、助命の上に本知に歸りし犬飼現八どの。先づ以ておめでたう存じまする。

現八　これは／＼、御家門たる里見の御家中、蟇崎十一郎照文どの。お名は疾より承はりながら、お目にかゝるはやう／＼先刻。杉倉どの御内室と、兎や角詞爭ひせしゆゑ、後先の辨まへなく、惡口の申し上げしが、必らずお氣にさへられな。

照文　これは／＼御挨拶。管領家の預かりたる、主人義實。當家の姬君と御緣邊極まりしゆゑ、催促の爲數日の滯留。云はゞ傍輩も同然なれば、拙者も供々お喜び申す筈。先刻の過言はお免し下され。

ト云ひながら、立ち上がつて奧へ行かうとする。現八思ひ入れあつて

現八　ア、イヤ／＼、照文どの、ちよつとお待ち下されい。

照文　現八どの、用事がござるか。

現八　如何にも、お隙は取らせますまい。ちよつとこれへ

ト合ひ方になり、照文、キッと思ひ入れあつて、下りて來て、詰めかけて

照文　先刻の助言を根に持ち、欝憤を晴らさん所存か。場所は嫌はぬ。イザ、承はらう。

ト刀に手をかける。現八よろしく留めて

現八　イヤ、貴殿に刄向ふ所存、當てなし。勿論遺恨は、さら／＼ござらぬ。

照文　それに又、何用あつて。

現八　サヽ、貴殿の心底を見込み、申し上げたき事あつてママ、一通りお聞き下され。

ト照文を突き放し、ドッカと座し

鷹は死しても穗は摘まずと、世俗に云ふを知りながら、先刻杉倉の内室と云ひ、角目立ちしは貴殿のお詞。いま思ひ廻せば孟子の金言、山を越ゆれば山なきと心得、海を越ゆれば海なきと心得、登りかゝり渡りかゝり後悔千萬。それにつき、賴み入りたき事あり、なんと、お聞き屆け下されうか。

照文　ヘヽ、ハヽヽ、はや横堀が企みに組みして、某までを内證へ引入れんとの計略か。泥水は喫つても、非義非道には組みせぬ。羊が虎の皮をかむり、豹を見て戰くと在村と云ふ虎の威をかつて助かるとも、豹と云ふ氏元が

政道に會はゞ、よもや罪科は遁がれまいぞや。

現八　その一言を聞くにつけ、この現八が身は冷汗。これを思へば情こそ、我が身を亡ぼす劍ぞや。多くの科人赦免のうち、某一人切腹せよと、杉倉の内室が指圖。無念と思ひ、何卒命を助からば、この鬱憤を云はんと思ひ、在村の情にて助けられしとばかり心得、底心に一物ある事を知らず、今での心外。命助かりし恩は恩、この返禮をせずんば、いよ／＼武士の道知らず。いま杉田市郎より、在村が兼ねての企て、聞くと等しく心の轉倒。この事貴殿にさつぱりと、打明かさんと思へども、他言あつては恩を仇、金打の上申し上げん。お頼み申すはこの一儀。

照文　成る程、さう聞けば刀の役、聞いた上にて事に依り頼まれまいものでもない。

現八　すりや、お聞き届け下さらうとな。チエヽ、忝ない。

照文　が何を申すも爰は人目、次の一間で。

現八　何かの密談。

照文　然らば犬飼現八どの。

現八　照文どの、御同道仕らう。

ト兩人よろしくこなしあつて、唄になり、橋がゝりへ入る。又てん／＼の序の舞。奥より在村、以前の四人その他近習連れ出づる。橋がゝりより常武、市郎も出て

在村　兩人、申し付けた一儀は如何に。

常武　ハツ。仰せの通り犬塚信乃、門内まで召し寄せ置きましてござりまする。

市郎　拙者は又、現八に委細の事を申し含め置きたる處へ素藤より密書到來。イザ、御覽なされませう。

ト狀を渡す。

在村　ムウ、こりやコレ素藤が家來、占部季六と云へる、忍術を得たる者に、吾の君が所持する八千丁の朱印、奪はせ置きしとのこの文體。

常武　ハ、ア、天晴れの計略。それさへ姫の手になくば、例へ村雨の劍が出ても、また緣組みは破るゝ道理。

市郎　彼れこれ時日を移すうち、現八の手をかつて、成氏を討取るは瞬くうち。

常武　オ、サ、この上は村雨の劍、取寄せて檢め見よう。これへ早く呼び出してよからう。

トこれにて四人前へ出て

町之　里見家の浪人、大塚信乃。

十郎　執權横堀氏のお召しなるぞ。
飛作　彼の村雨の御太刀を携へ、
播太　早く白洲へ通らつしやい。
四人　早く〳〵。
ト向う戸屋の内より
信乃　ハア、。
ト信乃、上下大小にて出て、花道にて平伏して
お召しに依つて里見の舊臣、犬塚信乃戍孝、何候仕つてござりまする。
在村　ホ、ウ。某は許我どのゝ執權、横堀在村なり。汝は先年滅亡せし、里見の舊臣なりとて、彼の村雨の劍を以て、主家再興を願ふとな、若輩ながら主家を思ふ志し、神妙々々。
信乃　ハ、ア、有り難き執權のお詞。この身に取つて如何ばかり、大慶に存じまする。今朝馬加氏まで出訴申し上げし通り、數ふれば早廿ケ年以前、里見家滅亡の頃、父にて候ふ大塚番作、村雨の太刀詮議の爲、國遠なし、やうやう盗賊と巡り合ひ、奪ひ返して國元へ歸りしところ不意の騒動、お家は斷絶。直さま城中へ切り入りしところ、戰ひのうちに矢疵を請け、嘆けど返らぬ主家の成行き。それより暫らく世を避けて、病氣本腹いたせしに、七年以前お家再興を願はんと、明暮れこれを申せしに、今際の際に我れへの遺言。その日を去らず父の臨終。それより以來大塚なる伯母聟の方に同居して、略様子を承はれば、管領山内家にて御養育ある、里見の公達、義實公、まつた當家の姫君たる、吾の君と御緣組み定まり、お家再興あらんとの事。それゆゑこの村雨の太刀を以て、主家の寶を返さんが爲、斯くの仕合せ。古主を忘れぬ父の志し、お聞き届け下されうならば、有り難う存じまする。
在村　明白なる汝が願ひ。主君成氏公に代りて、某内見いたせし上、ときに推擧なし、里見再興あるべきやう、取計らひ致し得させん。
市郎　先づ差當つて村雨の劍。
常武　急ぎこの處にて執權職に
皆々　内見に供へられよ。
信乃　ハ、ア、殘る方なき執權の御厚志。即ち村雨の御劍は、肌身離さず所持仕る。イザ、御一覽下されませう。
在村　オ、、許す。近う〳〵。
皆々　イザ、通らつしやれ。

信乃　ハッ。然らば御免下されませう。

トずつと橋がゝりまで遁り、右の刀を常武に渡す。常武取つて、在村の前に置く。在村、こなしあつて取上げ

在村　すりや、これが村雨丸とな。イザ、某が一見せん。

ト抜く。皆々片唾を呑んで見て居る。信乃も目も放さず見張つて居る。在村、いろ／＼こなし、改め見て、しやんと差し

ソレ、其奴に繩をぶて。

四人　ハッ。腕廻せ。

トかゝる。信乃、悯りしながら立廻つて、キツと留め

信乃　こりや理不盡な。何と召さるゝ。

在村　ヤア、推參なるうづ蟲め。コレこの赤鰯を村雨とはなんのたわ言。

信乃　ヤヽ、何がなんと。

在村　村雨丸の奇特と云つぱ、抜けば玉散る水氣あつて、その切尖を振る時は、水はあたりに散亂して恰も村雨の降るが如し。これに依つて名けるに、こりやコレ、似ても似つかぬ鈍刀物。

ト市郎、常武、刀と鞘を受取つて

市常　なんとこれでも村雨か。こゝな大馬鹿め。

ト双方より信乃に詰め寄る。信乃、四人をポン／＼と投げ退け、右の刀を取らうとする。兩人キツと羽掻締めにかゝるを、ヂツと受けながら

信乃　長の年月辛勞なし、肌身離さず守護する劍、鈍刀とは心得ず。

トちよつと立廻りながら刀をキツと見て

ヤ、、、誠にこりやコレ似ても似つかぬ錆び刀。ヤヽ、、こりやどうぢや。

ト大悯りに、どつかと下に坐る。

在村　劍の奇特を知らぬと思ひ、人を僞はる不敵者。ソレ、何れも。

四人　ハッ。捕つた。

トかゝるを、ちよつと立廻つて双方を留め

信乃　一昨夜出立の砌り、改め見しに誠の劍でありたるを今この刀と變つたるは。

ト四人、何をとかゝるを支へながら

ムウ。さては昨朝神宮川にて、蟇六を助けんものと、水中に飛び込みし折、浪人網干左母次郎、正しくこれを摺替へしか。我れを害せんず計り事と思ひしに、さては蟇

六に騙かられ、左母次郎が摺替へたに相違はない。チエ
エ、只前門の虎を防ぎ、後門より入る狼を、油斷せし
か。ホ、ホイ。

ト云ひ／＼、よろしく立廻つて、ポン／＼と投げ、當惑の思ひ入れ。

在村　ヤア、上を騙かる胡亂な奴な。
常武　うぬ、元來似せ物と知りながら入込みしは
市郎　在村公を討らん爲の、敵國の廻し者に極まつた。
兩人　サア、眞直に白狀せよ。
信乃　イヤ、全く以て僞はりは申さぬ。何卒この上のお願ひには、御太刀詮議のその間、御宥免下さらば。
在村　イヽヤならぬ。似せ物を以て某を欺むき、近寄つて仇をなさんずおのれが計略。
市郎　よし又廻し者でないにもせよ、大切なる御劍を、うまうまと摺替へられ
常武　心も附かず、うか／＼と、爰までうせる大馬鹿者め、搦め捕つて禁牢さす。
皆々　尋常に腕、廻せ。

ト皆々一時にかゝるを、よろしく立廻りてキッとなり

信乃　ムウ。詮議の日延べを願ひても叶へず、我まゝなる支へ立て。この上は劍を再び取り得るまでは、大切なるこの體。おめ／＼汝等が虜とならうか。惡く支へ立て召さるが最後、一々切り捨て、死人の山だぞ。
在村　ヤア、小癪な廣言かな。彼れを召捕れ。
常市　者ども、參れ。
皆々　ハア。

トどんちやんになり、揃ひの捕り手大勢出て

捕手　動くな。

ト見事に取卷く。

信乃　ヤア。
皆々　ヤア／＼。

ト取卷きながら橋がゝりへ、ドンチヤン打込みにて入る。

在村　推量の的を外さず、我れ／＼に仇なす曲者め、一通りでは手廻るまじ、人數を加へて搦め捕れ。
常市　心得ました。

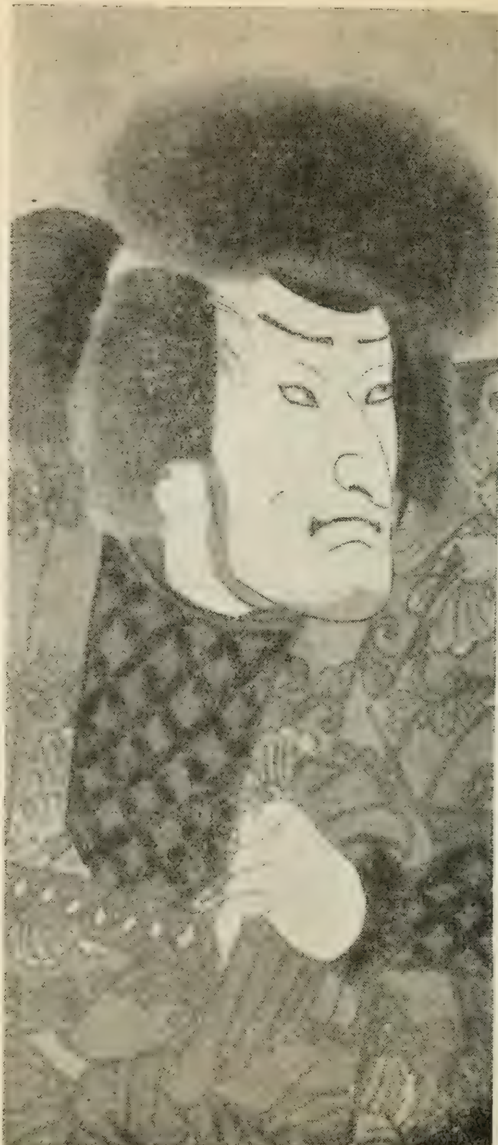
ト橋がゝりへ走り入る。引違へて捕り手一人出て

捕手　只今の曲者、手痛く働らき、なか／＼手に廻りませぬやうにござりまする。
在村　なに數百人の以て取圍むに、捕り得ぬ事のあるべき

か。一家中とも加勢に出し、梯子を以て伏せて捕れ。
捕手　ハッ。畏まつてござりまする。
ト走り入る。引違へて常武走り出て
常武　二番手三番手も一つになし、梯子を以て伏せますれど、手痛く働らき、なか／＼手に廻らぬとござりまする。
皆々　ヤア／＼／＼。
ト皆々惘り。又バタ／＼にて市郎走り出て
市郎　今の曲者手痛く働らき、物見の高殿芳流閣へ駈け登り、近寄る者は疵を蒙むり、一向多勢の手に合ひませぬ
在村　ナニ、芳流閣へ駈け登りしとや。イデ某が駈けつけて。何れも來やれ。
皆々　ハッ。
ト血相して行かうとする。奥より照文出て留め
照文　在村どの、お待ちなされい。
在村　オヽ、其方は蟇崎照文。
皆々　何ゆゑ止め召さるゝぞ。
照文　始終の様子具さに聞く。死物狂ひと働らく曲者。執權のお出で危ふし／＼。この役目申し付けるに、屈竟の者がござる。
在村　ナニ、曲者を召捕らす者があるとは。
皆々　そりや又、何者。
照文　今日大赦に免されし、犬飼現八。彼れ百人力にも勝りしとあれば、この役目申しつけるに最屈竟。
在村　成る程、捕り物柔術に名を得たる犬飼現八。
皆々　でも現八に凶事あつては。
照文　ハテ、かゝる役目に立てん爲、遁がれぬ死罪を助けたる、在村どのへ恩報じ。主君へ忠義も今この時。なんと左やうではござるまいか。
在村　尤もなる蟇崎の詞。イデこの上は彼れを呼び出し、云ひ聞かせん。
照文　イヤ、その儀は某申し聞かした。ヤア／＼犬飼現八、用意よくば早く來やれ。
現八　ハアヽ。
トどんちやん、打込みにて、橋がゝりより現八、書面合せの凛々しき拵らへにて、十手捕り繩を持ち出て
現八　在村どのゝお情にて、遁がれし命の恩報じ。如何なる天魔鬼神なりとも、彼の曲者を召捕つて差上げ申さん
在村　ホヽ、勇ましゝ／＼。犬飼現八、相手は不敵の曲者なれば



坂東しうかの犬塚信乃



二世關三十郎の犬飼現八

皆々　油斷なく働らき召されい。
現八　氣遣ひあるな。その曲者は。
皆々　廣庭の物見の高殿。
現八　ナニ、すりや芳流閣に。
ト十手捕り繩を口に啣へ、凛々しく身構へして
ソレ。
トどんちやん打込みにて、凛々しく向うへ走り入る。
照文　イデこの上は廣庭にて、見物いたさん。
在村　成る程、照文、何れも續きやれ。
皆々　心得ました。
トまた打込みにて、在村先にこの人數皆々、橋がゝりへ入る。チョン／＼にて。　返し
造り物、一面の淺黄幕。矢張りドンチャンにて、東西より捕り手隨分大勢出でゝ
捕一　さて／＼手ひどい曲者でござる。ありやマァ鬼神でござらうか。
捕二　左やうでござる。我れ／＼は斯く小具足。彼奴は先刻の衣服のまゝ。
捕三　それに一ヶ所の疵さへ受けず、味方の怪我人は山の如くでござる。
捕四　さて／＼ひどい奴もある者でござる。して、いま嚮つた捕り方は。
捕五　今日出牢いたされた、犬飼現八どのが向はれまして。
捕六　あれは捕り物柔術にかゝつては、評判の名人でござる。
捕一　現八どのが行かれたら、そりやモウ氣遣ひはござらぬぞ。
捕二　こりや、誠によい出會ひで、近年の見物でござらう
捕三　左やう／＼。どちらが勝つやら負けるやら。曠れの勝負でござる。
捕四　我れ／＼は隨分怪我せぬやうに、廣庭から見物いたさう。
捕五　左やう致さう。何れも、ござれ。
皆々　サヽ、お越しなされい／＼。
ト双方へ別れ入る。チョン／＼、木を入れる。矢張りドンチャン、アリャ／＼の掛け聲にて、舞臺前雨落らへ二尺ばかりの塀の屋根セリ上がる。處々にて篝りを

焚き、道具飾り付け次第、一聲、ドンチャン打込みにて、淺黃幕、切つて落す。

造り物、眞中三間の間、極彩色の樓閣、二階目は瓦屋根の反りある飾りつけ、屋根の下に芳流閣と文字書きたる結構なる額を掛け、二階の下には朱塗りの高欄、舞臺際の取合せ、霞の幕を張り、高樓の前に切り穴を明け、爰に梯子をかけ、奈落より人の上がるやうに仕掛け、すべてこの樓閣は屋根ぐるりともに四角造りにあるべし。右高樓の屋根の反りの上に信乃、上を刎れ、下を股立ち取り、下げ緒の襷、大荒れの形、書面合せにて刀を構へ、キッとなつて居る。右二階目と屋根の上に揃への捕り手大勢、取卷き居る。舞臺の下より隨分大勢の聲にて、アリヤアリヤの掛け聲する。向う奥深に浪幕。この見得、一聲、ドンチャンにて道具納まる。

トこれより烈しき合ひ方に、ドンチャン打交ぜ、信乃皆々を相手に面白き立廻りあつて、皆々を屋根より蹴落す事あつて、トゞきつと見得になり、矢張りアリヤアリヤの掛け聲にて、右の切り穴より梯子を登り、現八、以前の形にて、ツカ／＼と上がり、屋根へ飛び乘り、兩人キッと見得になる。

現八　ヤア、身の程知らぬ曲者め。滸我どのゝ家來、犬飼現八信道が、手並を見せん。覺悟いたせ。

ト十手を構へる。

信乃　ホ、ウ、しをらしい。汝も爰へ死にゝ來たか。斯く云ふ我れは里見の忠臣、犬塚信乃戍孝なるわい。ならば見事に捕つて見よ。

現八　小積な廣言。イデ某が捕つて見せう。

信乃　見事汝が。

現八　おんでもない事。

信乃　何を小積な。

トこれより誂らへの鳴り物になり、中へドンチャン、一聲嚴しく、アリヤ／＼の掛け聲にて、兩人面白き立廻りあつて、どつこいと止まる。チョン／＼、この道具は此まゝ下手へ廻る。下手も同じく道具にて、二階目、矢張り朱の高欄、屋根も同じやうに四角に飾り、上には道具に構はず面白き仕組みの立廻りある。此うち好き時分、舞臺前の塀、打返へしにて波板に替へる。花道、棧敷、前の處、惣一面に波に返へす。舞臺の道

具、丁度裏手の樓閣になる。よき時分に正面の浪幕切つて落す。向う打抜き許我の館、奥庭の書割り、見事にあつて、すべて今の樓閣の裏になる心なり。舞臺前は海にて、樂屋は陸地の心にあるべし。此うち始終鳴り物、ドンチヤン、アリヤ〳〵の掛け聲一聲打交ぜ、道具納まる。兩人これに構はず立廻り、いろ〳〵あるうち、信乃は現八の十手を叩き落す。現八は刀を抜き信乃の刀を打ち落し。兩人とも互ひに薄傷を負ひ、刀を捨てゝ互ひに髻を取り合ひ、屋根の端より組み落ちさうになる、屋根より組み合ひながら踏み出し、危ふき體にて、イヤどつこいと止まる。この見得、ドンチヤン打やみて、よろしく、　　拍子幕

七段目

行德浦の段
古那屋の段
入江橋の段

役名――犬田小文吾悌順。犬飼現八信道。蜑崎照文。古那屋文吾兵衛。庄屋、櫨内。惡者、辛四郎。同、金太、辻君、おくぼ。同、おきん。同、おさん。山林房八。小文吾女房、お繼。里見伏姫の神靈。新織帆太夫。犬塚信乃戍孝。

造り物、通りの二重、浪の打寄せの蹴込み。向う黒幕。上手、樋の口、蘆原のあしらひ。平舞臺、上手浪手摺り、洞の心。この取合せに程好く岩。二重に殺生禁斷の立て札、川柳の吊り枝。すべて、行德浦濱邊の體。幕の内より、題八、籾七、俵六、鍬八、百姓の形にて、そこらを竹箒にて掃いて居る。この見得、隣り柿の木の唄にて、幕明く。

ト橋がゝりより、櫨内、庄屋の拵らへにて、出て來て

櫨内　オヽ、百姓衆、大儀でござるの。

題八　ハイ、今朝お前から觸れておこさつしやりましたゆゑ、畑の仕事も打ッちやり

籾七　コレ、此やうに皆寄つて、掃除にかゝつて居りますわいの。

俵六　御巡見でもあるのか。一體マア何事でござりまするな。

櫨内　サレバイノ、皆聞かつしやれ。この行德浦は諸方から

山川の落合ひ、それに近頃又、この栞崎の濱手には、毎夜毎夜光り物がするといの。

鍬八　されば、さうは聞いては居れども、その光り物のする事は、ついぞ見た事がないてなア。

檀内　サア、そこが燈臺元暗しと云ふやつぢや。ところでその噂が滸我の御所へ聞え、都の室町さまへ注進があつたところが、彼方でも寄合ひがあつて、昔からこの行德の浦のうちでも、栞崎の濱手ばかりは殺生禁斷で、網を入れる事は戒めてある所ゆゑ、もしやさう云ふ光り物の出るは、金の精でもあらうか、隨分この上ともに張り番を付けて、人を寄せ付けるな。網などを入れさすなとの事ぢや。それにこの頃は毎晩々々、夜更けてから網を入れる奴があるといの。

籾七　ハテ、それは憎い奴もあるものぢやなア。こちとらは百姓ゆゑ、網などはよう打たぬが

題八　てつきりそれは、漁師か船頭の業でござりませうぞい。

檀内　サヽ、そこで今日明日のうちには、室町さまからお役人がござつて、お改めがあるとの事ぢや。それゆゑ隨分粗相の無いやうに、そこらを綺麗に掃いて置いて下されや。

俵六　成る程、それで樣子は知れました。そのお役人がござつてから、お目玉を貰はぬよう

鍬八　さうとも〳〵。精出して掃除せうぞや

三人　合點ぢや〳〵。

ト また捨ぜりふにて、檀内も其々指圖して居るうち、右の唄きつぱりとなり、向うより、古那屋文吾兵衞、木綿やつし、輕衫、中親仁の拵らへにて、釣り竿の袋に入れたを擔げ、出て來て、本舞臺へ來て

文吾　オヽ、こりや皆、大儀でござる。見りや庄屋どのも一緒に、なんの爲に、マア、其やうに濱手を掃除さつしやりますぞ。

檀内　オヽ、こなたは古那屋の親仁、文吾兵衞どの、また竿を擔げて、釣にでも出られるのか。コレ、貴樣には氣遣ひもないが、貴公の息子の小文吾は、又しても網好き、コレ、この行德の栞崎は、知つての通り下地から殺生禁斷の場所ぢや。ところがこの頃夜更けてから、ちよこちよこと網を打つ者があるわいの。見付けられたら、芝居にてもする阿漕の格で、簀卷にでもしられて、ずぶ〳〵は遁がれぬ代物。息子どのにも、よう云ひつけて置かつ

じやれや。
文吾 ハテ、それはマア、大膽な事をしますなら。シタガ此方の息子に限りて、そんな氣遣ひはとんとござらぬ。殊に夜に入つて、網をなど打ちに出て堪るものかいの。
檀内 そりやマア、なんぞ外に用でもあつてかいの。
文吾 ハテ、近頃貰うて宛がうた嫁が、孫まで產んで片時も放さず、夜さには嫁の洲へ網を入れるのにばかりかゝつて、大抵忙しい事ではないいて。
檀内 ハ、、、何を云はるゝやら。氣作な親仁どのではあるわいの。時に、その息子で思ひ出した。皆の衆。爰の息子の小文吾を、古那屋と云ふ家名ぢやに、人が犬田小文吾と云ふ、謂れを知つてかいの。
四人 イヤ、その因緣が解らぬわいの。
文吾 ハ、、、そりや斯うでござる。四五年以前の事であつた。この邊に犬太々々と云ふ惡者があつて、每日々々酒を呑んでは、人の家へ強請り込み、錢の押借り、喧嘩を仕掛けては酒をいじり、誠に所の衆の困り者であつたが、此方の悴めが十五六の時、入江橋の上で、皆の衆の難儀を見兼ねて叩き殺し、所の難儀を拂うたぢや。それから、ありや犬を叩き殺した小文吾ぢや／＼と云ふを、異名に呼んで、犬田小文吾と云ふものぢやわいの。
檀内 云はゞ因緣は、あの通りぢや。なんと氣丈なものぢやないかいの。
鍬八 イヤモウ、文吾兵衛どのは仕合せ者ぢや。さう云ふ氣な癖に、親仁に孝心。
題八 それ／＼。二三年跡から、市川の房八が、妹を嫁に貰うて、孫まで出來て好い仲とやら。
俵六 結構なものでやないかい。ナウ、お庄屋樣。
文吾 ア、なんぼ褒められても、途中で酒はなし、振舞はれはせず、ドリヤ、市川へ行て、小鮒でも釣つて來う。コレ、皆の衆、こなさん達も早う掃除をしまうたら、晩には嫁樂の洲へなど、網入れて休まつしやれ。
四人 又てんがうを云はつしやるわいの。
文吾 ハ、、、。ドリヤ行て來ませうわい。
トまた唄になり、文吾兵衛、釣竿擔げ、臆病口へ入る
皆々此うち、片付けながら
檀内 なんと見やしやれ。年は寄つても、氣輕な親仁ではないか。
題八 それに引替へ、あの嫁の兄の房八は、持て餘した惡者。

籾七　それ〳〵、とてもなら小文吾に云ひつけて、どやし殺してしまへばよいに。

檀内　ア丶、コレ〳〵、餘り大きな聲で云ふまい。最前爰へ來る道で、房八めをちよつと見たぞや。

鍬八　イヤ、その房八の喧ましいより、お役人樣が向うから見えたぞや。

檀内　オ丶、ほんにお役人ぢや。皆片付けたら、扣へさつしやれ〳〵。

ト皆々下に居る。時の太鼓になり、新織帆太夫、代官の形、野袴にて、板扱金太、鹽濱辛四郎、百姓の形にて、後より、家來大勢付き出て

帆太　當所の庄屋たる檀内を始め、殘りの者は百姓どもよな。

百姓　ヘイ〳〵〳〵、御意の通りでござりまする。

帆太　某事は滸我の家中、新織帆太夫と云ふ者、其方どもは兼ね〴〵より存じの事ながら、この栞崎方八丁が間は、昔より殺生禁斷の場所、然るに夜な〳〵網を入れる者あるとの噂。それゆゑ今明日のうち、室町さまより改め役人相見えられる筈なれば、これなる鹽濱辛四郎、板扱金太の兩人に、番の申しつけ置く間、この者らと申し合せ、胡亂の者と見るならば、拍子木を打ち鳴らし、鳴るを合圖に皆寄合ひ、搦め捕り、早速當所の代官方まで注進いたせ。合點か。

檀内　畏まりましてござりまする。

帆太　まだ申し聞かさねばならぬは、コレ、この繪姿。

ト懷中より、信乃の繪姿を出して見せ

こりやコレ、先年滅亡なしたる、里見家の浪人、犬塚信乃と云へる奴。この程滸我の御所に於て、家再興の願ひを云ひ立て、似せ物の劍を以て上を騙かり、捕り手數多に手疵を負はせし烏滸の曲者。物見の亭の芳流閣と云ふ高殿の屋根に上がり、手痛く働らき、手に餘れば、犬飼現八と云ふ者を以て召捕らせしに、兩人とも切りつ挑ひつ、屋根より下へ組み落ち、纜切れて用船ともに行くへ知れず。この兩人の生きたか死んだか、その吟味いたさんが爲、繪姿を描かし斯くの通り。この行德は滸我より川續きなれば、見付け次第に首討つて相渡すか、直さま注進いたすに於ては、御褒美を下さるゝ。この儀、キッと心得てよからう。

檀内　ハイ〳〵、畏まつてござりまする。

辛四　なんと、その信乃とやら云ふ奴は、手酷い奴ぢやな

いか。高殿から川の中へ組み落ちたところが、命冥加な船の内。

金太　此奴を捕へたら、褒美の金になる代物。早速御注進申しませう。湊の衆も、よう覺えて置かつしやれや。

帆太　もし人知れず匿まひなどせば科は同罪、この繪姿に引合はし、胡亂な奴は縛し上げて白狀させよ。

皆々　心得ましてござりまする。

帆太　某はこれより市川の方へ觸れ知らさん。百姓ども案内いたせ。

百姓　畏まりましてござりますぞ。

帆太　兩人の者は庄屋諸とも、この所に居て、兩用とも油斷なく吟味いたせ。

檀内　畏まりましてござりまする。

帆太　キッと申し渡したぞ。者ども參れ。

家來　ハア。

百姓　斯うお出でなされませい。

ト また時の太鼓になり、百姓四人を連れて、帆太夫、家來を連れ上手へ入る。向うに見ゆるは肥後屋の唄になり向うより、おくば、おきん、おさん、びんしよの形にて、下駄がけにて、出て來て

くぼ　慥かにこの濱に來て居やしやんすに違ひはない。

きん　さうとも〳〵、アタ憎てらしい男づら。せりふせにやならぬわいな。

さん　さうぢや〳〵。其方達も一緒に探して見や。おぢやおぢや。

ト矢張り右の唄にて、本舞臺へ來て、三人を見付けて

くぼ　サア〳〵、見付けた〳〵。爰に居やしやるわいなア

きん　オヽ、たうとう探し當つたぞ。

さん　エヽ、こなさん達は〳〵。

ト おきんは檀内、おさんは金太、おくぼは辛四郎の胸倉を取つて引立てる。三人、悔りして

檀内　ヤア、わりやおくぼ。

金太　二人の姬も何時の間に。

きん　コレ、檀内さん。エヽ。お前はの〳〵。

ト 振り廻して

コレ、男づら、わしらは知つての通り、この浦の船饅頭上方で云ふびんしよと云うて、賤しい勤めはして居れど、いま傾城の太夫のと云ふ女中より、ズッと昔より許してある浮れ女。

くぼ　また流の身とまで謳によまれて、系圖正しい姬御

前の身。こちら三人は、この行德の浦が勤め場ゆゑ、朝から晩まで、伽やらう／＼とて、船から船への憂き勤め。

さん　コレ金太さん、こちとら三人も、ようも／＼騙さんしたなう。今日は船へ連れて去んで、せりふする積りで云ひ合して尋ねて來たのぢや。

　ト互ひに胸ぐくしを取つて、嫌らしき事云ふ。

槙金　マア、爰を放せ／＼。

きん　イヤ、滅多にや放さぬ。さう云ふ心とは露知らず、わしやお前に心中立して、外のお客は取りやせぬわいなア。

さん　それ／＼、こちらもみんな同じ事。お前、二三日のうちに行く程に、待つて居いとて、よう騙さんしたなア。騙さんしたなア。

くぼ　如何なこちらがぴんしよぢやとて、ぴんしよの心も知らぬかなんぞのやうに。船へ連れて去んで、せりふするのぢや。

三人　サア／＼、ちよつとござんせ／＼。

　ト捨ぜりふにて、三人を引立てにかゝる。この時、橋がゝりより、山林房八、田舍角力の拵らへにて、丹前引拔帯、下駄がけにて出て、この時、ズッと前へ出て

房八　コリヤ、ザワ／＼と庄屋どの始め、辛四郎金太、なんの態ぢやぞいの。

槙内　ヤア、貴樣は市川の兄貴。

金辛　おいらの親分房八どの。

房八　盜み綱の詮議する番人かと思やア、アタ見苦しい、ぴんしよ狂ひのほたえ。この通り代官所へ訴へようか。

槙内　ア、コレ房八、あの二人もおれも、表向きはしやきばつては居るものゝ、色目にかけては蛭に鹽辛、嫌見ても可愛が因果。コレ、どうぞ見遁がしてたも。これぢやこれぢや。

房八　ハテ、さう云はれると、否とも云はれぬて。

金辛　コレ關取、賴むぞ／＼。

房八　おれが挨拶してやらうと云ひたいが、仲直りの酒もなし。なんと、いつそ三人連れで、あいらが船へ行てやらんせ。

槙内　ハテ滅相な。大事の番、爰を動いて堪るものか。

辛四　オヽ、さうとも／＼。首と釣替へのこの役目。

金太　これを拋つて置いたら、どんなごりが來うも知れぬ

三人　滅多に爰は、動かぬ／＼。

きん　こちらにばかり氣を揉まし、なぜござんせぬ。

くぼ　さては外に好い樂しみが出來たゆゑ
さん　こちらには、もう秋風ぢやと云ふのかいの。
三人　ほんに、お前方は〳〵。
　ト三人また支へる。房八、留めて
房八　アヽ、これは又、三人とも惡い合點。例へ網を打つにもせよ、宵のうちから來る者はごんせぬ。夜更けて來るまでは命の洗濯。宵の間にツイこそ〳〵と。チョンの間を云はしてごんせいの。
檀内　イカサマ、云やればそんなものかい。なんと二人ともに、どう思ふぞ。
金太　ハテ、關取の云ふ通り
幸四　宵の間は大事もあるまい。
房八　もしひよつと宵の間にうせ居つたら、お前方に代つて、この房八が引ッ捉まへて置きやんしよ。
檀内　ムウ、そんならこの拍子木を渡して置く程に、これを打てば方々から、大勢集まつて來る合圖の拍子木。其方にしつかり預けて置くぞや。
　ト房八に拍子木渡す。
房八　オツと合點。コレ色達、大事のお客ぢや。早う連れて行かんせ。
きん　ほんに房さん、いかいお世話でござんしたなア。
くぼ　キツと嬉しい。恩に着るぞえ。
房八　ハテ、禮には及ばぬ。早う〳〵。
檀内　そんなら房八。
房八　早う行かんせ。
男三　エヽ、忝ない。
女三　サア、ござんせいなア。
　ト唄になり、皆々橋がゝりへ入る。女皆々艶めいて入る。あと合ひ方。房八、こなしあつて
房八　サアしてやつた。昔から殺生禁斷のこの濱に、夜な夜なの光り物は、なんでも大金になるものが、どめてあるに違ひはない。一網入れて酒の代。邪魔になる彼奴らをまいてしまや、今夜は高なし。巧い〳〵。併しながら、妹聟の小文吾めが、慥かにこれを目掛けて居る樣子。彼奴にしてやられりやア、大骨折つて高なし相談。今宵こそ網を入れて、此方へしてやらにやならぬわえ。
　ト最前の繪姿、足にかゝるを見て
こりや何ぢや。訝しな繪姿。ナニ〳〵一年の頃廿才ばかりの、色白くして中脊なり、里見の浪人犬塚信乃、數多の捕り手を手にかけし曲者、搦め捕つて渡しなば、褒

美の金は望み次第、もし匿まひ立するに於ては、家内親類に到るまで、信乃同罪たるべしつムウ、こりや好い物が手に入つたわえ。

ト懐へ入れる。ゴンと本釣り鐘。初夜の鐘を打つ。

房八、こなしあつて

ありやもう初夜。闇を幸ひ。オヽ、さうぢや。

トきつとなり、一聲にて、拍子木を首にかけ、こなしあつて、橋がゝりへ走り入る。浪の音にて、舞臺しんとなる。と東西より、金太、幸四郎、簑笠にて、拍子木鳴らしながら出て來て、捨ぜりふにて行き合ひ

幸四　ヨウ、金太か。衒妻はどうした。

金太　なんぢや、いちや〳〵吐かすけれど、船に置いて一遍廻つて來た。

幸四　貴樣もさうか。庄屋めが代りに、一遍廻つて來てくれと吐かすゆゑ、廻る所ぢや。

金太　また雨か知らぬ。眞暗でそこらが解らぬ。

幸四　サアヤイ。早く廻つて來て船へ行かうわい。

金太　さうせい〳〵。後で船で逢はう。

トこんな事云ひながら東西へ別れて入る。また本釣鐘、床のめりやすにて、橋がゝりの蘆原より、房八、浴衣がけにて尻絡げ、手に網を持つて、ツカ〳〵と出て、上手のかせの間へ網を打込まうとして、網捌きすると、向うバタ〳〵と足音するゆゑ、房八、南無三と云ふ思ひ入れにて、キツと見込んで、橋がゝりの蘆原へ、ちよつと小隠れする。雨車、浪の音にて、向うより、お縫、着附け世話の形、簑を着て、手拭をかむり、網を提げ出て、花道好き所まで、ツカ〳〵と出て、あたりを見廻し

ぬひ　アヽ嬉しや、誰れも見付けはせなんださうな。これまで、ちよこ〳〵夫小文吾どのが、女房のわたしにまで包み隠して、夜網を打ちに行かしやんすは、てつきりこの栗崎の禁斷の場所。この頃噂の光り物は、お主のお家を取立てる、大事の劍とやらが沈んであるに相違ないとの事。この頃はまた折惡い鳥眼とやらで、夜に入ると皆目見えぬあの難病。それもいとはず恐ろしい、この禁斷の場所へ網を入れ、我が身に替への寶の詮議。あんまり夫の、いとしさに、今夜は市川の行者さんへ參ると云うて、小さを突きつけ拔けて來たは、小文吾どのに成り替つて、わたしが網を打つ心。ハテ、見付けられたらお仕置は夫の代り、わしや嬉しいとは云ふものゝ、子ま

で生したる女夫仲。ひよつとわしがお仕置になと遭うたらば、お年寄らしやんした舅御様のお嘆き。又いたいけな親平が、さぞわしを尋ね泣くであらうと思へば、ほんにこの身を裂かるゝより、悲しいわいの／＼。イヤ／＼、泣いて居る所ぢやない。光り物の出るは丑満時とやら。嘆きに隙取り、仕損じては悔んでも返らぬ事。オヽ、さうぢや／＼。

ト矢張り雨車、浪の音、一層厳しく、お縫、袂にて降る雨を凌ぎながら、本舞臺へ來て、手拭を取り、網を持ち、キッと中を見込む。ドロ／＼にて、舞臺の浪手摺りの中より、水氣上がる。お縫、恟りしながら、網を引上げると、中に黄金作りの鎧通し入つて上がる。お縫、劍を取上げて、アヽ、嬉しやと戴く。此うち、始終床のめりやすにて、房八、後より窺ひ出て、劍へ手をかける。お縫、恟りして、この手を拂ふ。辛四郎、金太、双方より窺ひ出て、拍子木を叩く。方々にて、拍子木を打ち合す。ドン／＼の太鼓になり、房八に金太、辛四郎、かゝる。房八、兩人を投げる。此うち、お縫、劍を持つて後の岩蔭へ隠れる。房八、お縫は花道へ逃げたと云ふ心得にて、追ひかけうとする。金太、辛四郎は間違ひにて房八に組みつく。房八、振り放す兩人後へ倒れる。房八、向うへ行かうとして、小戻りして、チッと窺ふ。と辛四郎、金太、起き上がりて向うへ追ひかけて入る。お縫、岩の蔭より出て、ツッと向うを見る。ドン／＼太鼓掠め、拍子木もしやんと止む。靜かなる床のめりやすにて、房八、さてこそと窺ひながら探り寄る。お縫、ホッと吐息つき、空にて右の劍透かし見る。房八、抱き留める。立廻りにて、お縫は身、房八は鞘と兩方へ分けて取る。大ドロ／＼にて、水氣見事に上がる。この時、樋の口の後より、文吾兵衞、以前の形にて、釣り竿の袋をかたげ出て、ツカ／＼とこの中へ入る。お縫の劍を引取る。お縫、それと寄るを一かせ切り、房八、取るを文吾兵衞、お縫を引廻して、房八の方へやり、鞘を拾ひ、ちよんと納める。水氣一時に止む。お縫は房八に武者振りつき文吾兵衞、劍を袖にて覆ひ、こけつ轉びつ、向うへ走り入る。お縫は手を負ひ、苦しみながら、房八と探り合ひ、文吾兵衞が落して入つた釣り竿の袋を劍と心得て取り合つて、浪手摺りの中へ取落し、トゞお縫は上手、房八は下手にキッと見得になり、この見得よろし



大谷友右衛門の古那屋文吾兵衛

く、チョン／＼にて、返し。

造り物、平舞臺、向う赤壁、納戸口、上手折り廻り障子屋體、いつもの所に門口、洲崎明神のお札貼りある。後に散る仕掛けあり、橋がかり。苫船付きの塗たれ塀。すべて、行徳邊船屋の體。入り口に、古部屋と書いた角行燈置きあり、右好き所に、苫六、櫓八、帆七、楫六、船頭の形にて、空き葛籠、荷物三梱ばかり、船より持ち込みし體。直し居る側に、法螺貝と尺八と出しある。この見得、合ひ方にて、道具納まる。

苫八　マア、斯うやつて置けばよいワ。一服と出かけうかい。

櫓八　オヽ、さうせう／＼。時に、兄貴は何所へ行かれたの。

帆七　イヤ、おいらが荷を運んで居るうち、何所へか行かれた。

楫六　見りや誰れも見えぬが、何所へ行かれた知らぬ。

ト口々に捨せりふ云うて居る。出の唄になり、向うより、犬田小文吾、世話形、ぼつとせ、五分月代にて、船屋の拵らへ、櫂をかたげ、下駄がけにて、出て來て

小文　ア、昨夜のばら／＼雨で、苫をびつしよと濡らしてのけた。併しマア、乾して置いたればよいワ。時にもらお縫は歸つたであらう。

ト本舞臺へ來て、内へ入る。

四人　小文吾どの、いま戻らんしたか。

小文　オ、皆の衆、今日は大儀でごんした。時にお縫は、まだ戻つては來ぬかな。

四人　オイナウ、まだでごんす。

小文　ア、何をして居るやら。早う戻り居ればよいに。

櫓八　時に、見た所がお内儀も居ずなり、親仁どのは何所へ行かれたの。

小文　さればいの、親仁樣は昨夜、日が暮れから釣りに行かるゝ。女房は小さめを置いて、市川まで行くと云うて未だに戻らず、さりとてはマア、困つたわいの。

楫六　乳呑兒を置いて他所へ行くとは、よう出來たものぢや。

小文　さればいの。其所で小さめは腹を減らして泣き居るし、仕方はなし、そこへ次郎の所の嬶衆が見えたゆゑ、近所へ乳を貰ひに行てもらうたわいの。

苦六　そりや好い思案でごんした。時にマア、今日はこの
行德の天王樣は、年に一度の大祭。
帆七　今夜はいつもの御輿擔いで、踊り歩かにやならぬて
小文　成る程、今夜は所の祭始め。御輿洗ひなり何やら彼
やら、忙しい只中、この又二人は、えゝ加減に戻ればよ
いに。
苦六　イヤ、もう戻らるゝであらうぞい。それはさうと、
昨夜また栗崎の禁斷の場所へ、網を入れた奴があつたげ
な。
ト小文吾、これにて莨のみながら、ギックリ思ひ入れ
楫六　サイヤイ、この頃光り物がすると云ふを見込みに、
慾張つて入つたものか。今朝から濱手は引くり返して居
るわいの。
帆七　捕へたら柴漬の成敗はお定まり。それ知りながら、
他愛もない奴もあるものぢやないかい。
櫓八　其所へ又、お觸れのあるお尋ね者とやらで、なんぢ
や騷々しい事ぢやわいの。
小文　ムウ、すりや昨夜禁斷の場所へ、また網を打つた奴
があつたか。
四人　オイナウ。
小文　その中へ又、あのお尋ね者で。
苦六　サア、其所で濱手は引つくり返して居るわいの。
小文　ムウ。ハテナウ。
ト何氣なう思案のこなし。橋がゝりより、船屋お袖、
子を抱き、世話の形にて出て、ズッと内へ入る。
そで　モシ、小文吾さん、たつぷりと貰うて來ましたぞえ
小文　オヽ、それは大きにお世話でござんした。
ト云ひながら、子を懷へ抱き取つて
よばれて來たか。ても巧い事をしたなア。
そで　よく〳〵お腹が空いてあつたか、お富さんの乳をか
へ乾してしまはんしたわいなア。
小文　イヤモウ、昨夜から泣き詰め。腹が丈夫になつたら
寢るでごんせう。いかい世話になりました。
そで　ナンノイナ、其うちお縫さんも戻らしやんせう。
小文　エヽ、彼奴は何をして居るやら。
楫六　それはさうと、晩には御輿舁きで、思ひ入れ洒落る
積り。
櫓八　おいらも去んだら、揃への襦袢が縫へたか、問うて
見よう。
帆七　家内の衆が戻らんしたら、小文吾、貴樣も出にやな

るまい。
苫六　オヽ、今日船の内に置いてあつた、この法螺と尺八
乘合ひの衆が取りに見へたら、返してやつて下んせや。
小文　オヽ、そりや旅人が置き忘れた物であらう。取りに
見えたら渡さうわい。
そこで　ほんに、わしも去んで、おなまなと拵らへよう。小
文吾さん、去にますぞえ。
小文　オヽ、皆御苦勞でごんした。また後に逢ひやんせう
苫六　そんなら後に。サア、皆來い／＼。
ト捨ぜりふにて、橋がゝりへ皆々入る。小文吾、子を
抱いた儘、門口より見送りて
小文　オヽ、ようごんした。緩りと休んで下され。
ト門口を締めて、こなしあつて
小文　時にマア、このお縫は何をして居るのであらう。いま皆
の者の話しを聞けば、昨夜柴崎へ網を入れた奴があると
云ふが、もしやおれが兼ねて光り物のするは、彼の滸我
家の姫君の守り刀と知つて、それを取上げ、以前のお主
里見の公達、義實さまへ差上げうと云ふも、親仁樣が常
常のお話しには、里見の家中那古七郎どのと云ふは、親
仁樣の兄弟。いま此やうに船商賣はするものゝ、古主の
御恩は常々忘れずと、せめてお家再興を願ふにつき、無
くて叶はぬ桐一文字の鎧通しは、滸我家の姫君が、結納
の印に取交す大事の劍、それを何卒手に入れんと、夜な
夜な毎に網を入るゝに、一昨日の暮れ方、不思議に入江
橋の磯端へ、流れ寄つたる用船の中に、怪しき二人の侍
ひ。互ひに組み合ひ悶絶して居るを、よく／＼見れば、
滸我家の家來犬飼現八どの、今一人は犬塚番作どのゝ子
息信乃どの、不思議に蘇生し、名乘れば同じ里見の家來、
用船は押し流し、家の小船に苫をかぶせ、二人を匿まひ、
親仁樣には釣と云ひ立て、二人の介抱にやつて置いたが、
昨夜から歸られず便りも聞かず、また夜網に行く事を、
女房にはけぶらいも知らさねど、あゝ云ふ女子、もしそ
れを聞き知つて、おれがこの鳥眼で、夜は出られぬと
云ふ事を思ひ、代りにもし網打ちなどに行たのではある
まいか。よもやそんな事でもあるまい。オヽ、小さめが
腹が脹れたと見えて、すや／＼と鼾かいて寢て居るわい。
ドリヤ、ちつとの間なと、下に寢さしてやりませうわい。
トちやんと舞扇の獨吟になり、小文吾、子を寢さしに
かゝる。向うより、お縫、返し前の形にて、ツカ／＼
と走り出て、花道にてとまる。獨吟の中へ少し寢鳥笛

お縫、胸撫で下ろし、思ひ入れあつて

ぬひ　アヽ、どうやら斯うやら戻つては來たが、定めてわしが戻りの遲いので、坊も乳を吞みたからう。小文吾どのも、さぞかし案じても居やしやんせう。其所へ此やうな形をして去んだらば、猶更の驚ろき。何氣なう夫の機嫌を見た上で、オヽさうぢや。

ト又獨吟になり、お縫、髮を撫で上げ、入り口へ行かうとする。門口にお札があるゆゑ、少し恐れる思ひ入れにて花道へ行く。これ幽靈の二人連れと云ふ文句の間にあるべし。少し薄ドロ／＼にて、お札散る仕掛けお縫、これを見て、ヤレ嬉しやと云ふ思ひ入れあつて獨吟一杯によろしくあつて、ツカ／＼と本舞臺へ來て入り口をズツと明けて入る。門口直ぐにぴつしやり締まる。

こちの人、いま戻りましたぞえ。

ト此うち、小文吾、抱き子を寢させ居て、この時、愕りして起き上がり

小文　オヽ、お縫か。エヽ、けたゝましい、愕りするわい。さうしてマア、遲い戻りやうなア。昨夜から小さあが、乳を吞みたがつて泣き居るゆゑ、大抵困つた事ではたかつた。

ぬひ　アイ／＼、さうでござんせうとも。オヽ坊、よう寢て居やるか。ドレ／＼、わたしが取りませう。

ト　お縫、子を抱いて行く。

コレ、母が戻つたぞや。さぞ飢じかつたであらうなう。

ト　懷へ入れて乳を吞ますこなし。小文吾、莨盆提げて坐る。合ひ方。

小文　女房ども、昨日暮れ前から、親仁樣は釣にござるし、其方は又、何を思うてやら、市川まで行て來ると、夜通しに今頃まで戻りはせず、そしてマア、今まで何所に行つて居やつたぞ。

ぬひ　イエ、何所も脇外へ行きはしませぬ。お前がこの頃の眼病、どうぞちつとも早う癒るやうにと、市川の明神樣は、ありや洲崎の行者樣のお移しと聞いたゆゑ、お百度詣りをしたが手、兄さんの世話になる、お豐さんの所へ、ちよつと禮に行きましたところが、聞かしやんせ、向うで癪が發つて、モウ／＼一足も歩かれる事かいな。これは又情ない、坊が待ち兼ねて居やらうと思ふ程、一倍癪は募つて來る。ちつと痛みがとまつたら去なうと、ツイ一時經ち二時經ち、此やうに隙が要つたのでござん

すわいなア。
ト胸のあたりの痛むを癪に紛らすこなし。
小文　イカサマ、癪でも發つたやら、顏の色も惡し、合ひ藥でもあらう、服みやいなう。
ぬひ　アイ〳〵。イヤモウ、大分納まりましたわいなア。シタガ、こちの人、わしが留主の內に、何も變つた事はなかつたかえ。
小文　イヤ、變つた事もないが、最前近所の衆が、氣にかかる話しをして居たわいの。
ぬひ　そりやマア、どんな話しをえ。
小文　昨夜梁崎の禁斷の場所へ、綱を入れた者があつて、上を下へと濱手には、詮議最中ぢやといなう。
ぬひ　エヽ、そんならその事を。
ト胸に當るこなしにて、氣を替へ
そりやマア、怖い事でござんすなア。
ト紛らはすこなし。小文吾、始終思ひ入れあつて
小文　イヤ、お縫、わが身は昨夜、光り物の出る梁崎の、濱手へは行きやせぬか。
ぬひ　アイ。イヽエ。
小文　夜通して戻らぬは、もし網やなど打ちに行きはせぬか。奧にあるおれが網一丁見えず、そんな事ではなかつたかと云ふ事。
ぬひ　エヽ、こちの人、ようマア物を思うても見やしやんせ。アノなん〳〵とした海、殊に光り物が出ると聞く。女のわたしが何として、行かれさうなものかいなア。
小文　イカサマ、さう云やればそんな事かい。
ぬひ　わたしよりこちの人、お前、先度からちよこ〳〵、夜明かして戻らしやんすが、翌日見ると、いつでも網が濕つてあるが、お前又、行きはさしやんせぬかえ。
小文　そりやどこえいの。
ぬひ　禁斷の場所へ。
小文　ヤア。
ぬひ　もし行きはさしやんせぬかと云ふ事。
小文　ハヽヽヽ、女房とした事が、あの梁崎は、昔から殺生禁斷の場所と知つて網を入れ、もし見付けられたら、忽ち簀の子卷の法に遭ふとの事を知つて居ながら、何しに行くものか。いろ〳〵の事を云ふものぢや。
ぬひ　成る程、さうでござんせう。こちの人、わたしやお前に問ひたい事がござんすわいなア。
小文　問ひたいとは、そりや何をいの。

ぬひ　綱にも行かしやんせぬお前が、また毎晩々々夜明かしして戻らしやんすが、ありや何所へ行かしやんすのぢやえ。
小文　ハテ、藪から棒と、いろ〳〵の事を根問ひする。悋氣なら聞きたうないわえ。
ぬひ　イエ、それぱかりぢやござんせぬ。全體お前は、わたしやこの小さが、眞實可愛うござんすか。但し又なともないか、聞きたいわいなア。
小文　樣々の事を云ひ出すワ。可愛い女房と思やこそ、其やうに子も産ませる。なりや、可愛うなうて、どうするものか。
ぬひ　イエ〳〵、口でこそ、さう云うて居やしやんすが、もしもわたしが、どんな事ぞあつて死にでもしたら、直ぐに新らしい女房どのを持たしやんすぢやあらうと思うて、案じられるわいなア。
小文　エヽ、女子と云ふものは、いろ〳〵の事、愚痴な事を云ふものぢや。おれも昨夜から、なんぢや氣にかゝる事ばつかり。それに付けても夜に入れば、皆目見えぬ鳥眼の悩み。女房ども、もう何時であらうの。
ぬひ　いんまわたしが戻る道で、道場の七ツが鳴つたわいなア。
小文　もう七ツを打つたか。今一時がほんの極樂。暮れゝば其まゝ呵責の責。
ぬひ　サア、斯う云ふわたしも呵責の苦しみ。
小文　ヤア。
ぬひ　サア、アノ、癪の苦しみも、大分納まつたやうなわいなア。
小文　オヽ、そりやよい。乳の細らぬやうに、藥でも服みや。アヽ、氣がゝりは病人と尋ねる劍。
ぬひ　エヽ。
小文　イヤサ、吊してある綱を取り、後でドリヤ、つゞくりかけうかい。

トちやんと唄になり、兩人、思ひ〳〵に探る思ひ入れにて、小文吾、納戸へ入る。お縫、後にこなしあつて

ぬひ　あの樣子では、まだ父さんは戻らしやんせぬと見える。もし、今にでも戻らしやんしたら。

トちよつと愁ひのこなしあつて、氣を替へ

コレ、親平や、祖父樣の戻らしやんすまで、ドリヤ、添乳をしてやりませうぞや。

ト合ひ方になり、子を抱き、お縫、納戸へ入る。この

合ひ方にて、向うより、文吾兵衛、返し前の形にて、劒を苫に巻き、抱へ出て、花道にて立ちとまり、後先を眺め

文吾　昨夜琴崎での體裁、直ぐに戻つては見咎められうとまた入江橋の船へ引返して、今まで彼の人の介抱はして居たが、現八どのは藥を買ひに、芝浦まで行かれたれば、またマアついは戻られず、家の事も氣にかゝるで戻つては來たが、信乃どのゝ、破傷風、ありや餘ッぽどむづかしいわえ。

ト思案しながら、本舞臺へ來て、入り口をズッと明けて入る。門口を締めて、苫の中より、劒を出して

紛ふ方なき黄金造りの劒。これぞ噂の桐一文字、倅の望みを叶へる一品、エ、忝ない。

ト戴く。橋がゝりより、檀内、幕明きの形にて、出て來て

檀内　文吾兵衛どの、内に居やつしやるか。

トこの聲に惘りして、相手しながら、劒の上へ上張りを脱ぎ捨て隱すうち、檀内は素知らぬ顔して

文吾　エ、、誰れぢやと思やお庄屋様、なんの用でござりますぞいの。

檀内　イヤモウ、庄屋檀内も、だんないどころぢやない、昨夜から村中は、上を下へと亂さき騒ぎぢやわいの。

文吾　ヘエ、、そりやマアなんでいの。

檀内　昨日も話した禁斷の場所へ、昨夜また、ざんぶりと入れた奴があつたわいの。

文吾　ヘエ、、さりとては憎い奴もある者ぢやなア。

檀内　その騒動の上に、また怪しからぬ事が出來ての。

文吾　そりやマア、どんな事が出來ましたの。

檀内　外でもない。昨日許我のお役人が、直にござつて、お觸れのあつた犬塚と云ふ侍ひが、捕り手の衆を無殘に殺して、むづかしい高殿の屋根へ上がつたところが、又なんとやら云ふ侍ひが、それを捕りに屋根の上へ上がつて、組んず轉んず組み合つて、川の中へ落ちたといの。

文吾　ハテ、えらい事ぢやあつたなう。

檀内　ところが、因果のつくぼいと、その下に殿様の御用船が繋いであつて、その中へ二人ともに落ち込んだぢや。落ちたに依つて、ソレ、纜が切れたワ、切れたに依つて、早川ではあり、逆落しに流れてしまうたワ。それがこの行徳の浦へ流れて來たが、生きて居るか死んだか解らぬ。そこでお役人が大勢の捕り手を連れて、濱々を御吟味ぢ

や。ところが今朝方、その用船が、この沖にだぶ〳〵と流れてあつたとの訴へぢや。それから船があつて人が居いでは詰らぬ。なんでもこの邊の家に匿まうてなけりやならぬと、家別に呼び出してのお尋ねぢやわいの。

文吾　ムウ。して、その侍ひ達を、こちらの家にでも匿まうてはないかとお尋ねかな。

檀内　マア、そんなものぢや。もし覺えがありや、我れらに斯う〳〵ぢやと打明けてさへ云や、この檀内も男ぢや決して他言はせぬ。直に役人衆へ申し上げて、褒美は我れらがせしめるだけぢや。また覺えがなけりや、代官所まで云ひ渡しがある程に、呼び寄せいとの事ぢや。大儀ながら今おれと連れ立つて行く程に、サア、來て下され

文吾　ハテナウ、此方にそんな覺えがなけりや、行くにも及ぶまいに、行かにやならぬかの。

檀内　行かんならんどころぢやない、急な事ぢや。今わしが尋ねて見たは、常々懇ろだけぢや。覺えがなけりや猶の事、早う行て云ひ譯をしてしまや助かる事ぢや。

文吾　ムウ、そんならぢつきに行きませうか、マア、この品を。

ト上張りのまゝ、劍を持つて、一間へ抛り込み、羽織を取つて來て、上に着ながら

せめて羽織なと引ッ張らねば。

檀内　サア、用は後にして、早うごんせいの。

文吾　ハテ忙しない。ドリヤ一走り行てしまひませう。

ト早き唄になり、文吾兵衞、檀内、連れ立つて橋がゝりへ入る。花やかなる鳴り物になり、向うより、房八好みの形、柾の下駄にて、後より、辛四郎、金太、丹前三尺帶に同じく下駄がけにて出て、花道に立ちとまり

辛四　コレ〳〵親分、昨夜の代物してやらうにも、相手は名打ての小文吾ゆゑ

金太　彼奴一筋ではゆかぬ奴。おいらが名まで穢さぬやうしつかりと

兩人　頼んだぞや。

房八　へ、、、ハ、、、何を吐かすやら。近國近在までに人の怖るゝ山林の房八さまぢや。よすもんぢやないわえ、落ちついて居い〳〵。

兩人　そんなら、親分。

房八　サア、來い〳〵。

ト矢張り右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、房八、門口

にて、兩人にちよつと囁き、手にて行けとする。兩人心得、下手へ入る。

房八　小文吾、内に居るか。小文吾々々。

ト云ひながら、内へのふずに入る。納戸よりお縫、出て

ぬひ　アイ〳〵、誰れさんぢやえ。

房八　オ、妹め、内に居るか。房八ぢや。お兄様のお越しぢや。

ぬひ　オ、、誰れぢやと思や兄さんかいなア。この間は根つからござんせぬが、きよと〳〵しう、小文吾々々とて、こちの人に、なんぞ用がござんすかいなア。

房八　きよと〳〵しう云うたらなんぢやい。嫁のわれが爲には、お兄様のおれなりや、爰の小文吾の爲にや小舅様ぢや。妹聟に用があつて出てござつたが、なんぢや。早う爰へ呼びくされ。

ぬひ　アレ、まだいの。その汚な口嗜なまんせ。用があればあるで濟むに、てもマア大きな聲で。

房八　ぺり〳〵と口答へ。キリ〳〵早う爰へ呼べ。

ぬひ　イヤモウ、とんと狂氣の沙汰ぢや程にの。よい〳〵。こちの人、其所に居やんすか。こちの人〳〵。

ト合ひ方になり、納戸より、小文吾、網を持ち出て

小文　なんぢや、けたゝましい。親仁様はまだ戻らずか。

ぬひ　サア、わたしも父様が戻らしやんしたかと思うたら口喧ましう、兄さんが來て云はんすゆゑ。

小文　オ、、小舅の房八どの、この間は好い事があるかして、とんと逢ひませぬが、なんと思うてごんしたぞ。

房八　オ、小文吾、外の事でもない。今日おれが來たは、ちと入用な物があつて、貰ひに來たが、なんと、おれにくれる氣はないか。

小文　ムウ、貰ひに來たとは、常々貴様の道樂者に似合はぬ、改まつた云ひやう。妹聟なら小舅の仲。そりやマア何を貰ひに見えたのぢや。

房八　外ぢやない。昨夜われが禁斷の場所へ、ばつさりと云はして、網にかゝつた代物を、ナ、覺えがあらう。應と云うてくれ。應と云やよし、また否と云や、直に代官所へ行て、網を打つたは犬田小文吾でござると注進するワ。小舅御の情だけ。それが否なら彼の物せうか。ハテおれが金にしたら、われにも分け口やるワ。四の五の云はずと、キリ〳〵と出しておこせ。

ぬひ　ア、コレ兄さん、こちの人にマア、何を云はしやん

すと思や、いろ／＼の事を。

房八　エヽ、引退れ。われにや云はぬ。默つて居れ。

ぬひ　ぢやてゝ、あんまりな當推量。

小文　女房默りや。

ぬひ　でも。

小文　ハアテ、捨て置きや。なんぼ出せ／＼と云うても、此方にとんと覺えがないぢや。大方人違ひであらう。ハテ、粗相な男なア。

房八　コリヤ／＼、恍けな／＼。さう狂言を下に置く程、猶物臭いわえ。

小文　なぜこの小文吾が物臭い。慥かな證據も見ずに、出せ／＼と云ふお主の心底。

房八　ヤア。

小文　誠に、禁斷の場所から上がつた代物を渡せとは、どんな物が上がつた。さう云やると、どうやら其方が物臭いわい。

房八　エヽ、樣々の理窟を捏るな。マアヽ、よいワ、さう云やマアそれは知らぬにして、コレ小文吾、今度は貴樣に賣る物がある。買ふ氣はないか。

小文　ムウ、この小文吾に買はぬかとは、そりや何を。

房八　外でもない。この書付け讀んで見い。

ト此うち、小文吾は網をつゞくりながら、相手になつて居る。房八、幕明きの繪姿を出し、前に置く。小文吾、見て恟りして

小文　ヤア、この繪姿は。

房八　なんと、買ふ氣があらうがな。

小文　こりやコレ、大塚信乃が人相書。

ぬひ　そんなら、それがお尋ね者の。

ト寄るを、ちやつと留めて

小文　ムウ。この繪姿を、この小文吾に買はぬかとは。

房八　イヤ、恍けまい。覺えがあらう。滸我の御所から嚴しい詮議。その犬塚信乃とやらを匿まうたとあれば、一家親類まで同罪のお觸れ。おれが今云うた代物さへ、ムウと云うて渡しさへすりや、丁度好い頃中の物。それともに不承知とありや、此方には留め所も感付いてあれば、その代物と引合して、餘所へ賣らう。

ト繪姿を引取る。

小文　ムウ、ぢやと云うて此方には。

房八　覺えぬとありや、又外々。

小文　それをやつて猶以て。

房八　そんなら、今の代物せうか。

小文　でも、その品は。

兩人　サア〳〵〳〵。

房八　オヽ、出さす所で出さして見せう。

ト又立ち上がるを、小文吾留める。お縫、始終思ひ入れあつて、分け入り、よろしく房八を留めて

ぬひ　兄さん、マア待つて下さんせいなア。

房八　面倒な。退け〳〵退け。

ト引退け、また行かうとするを、お縫、留めて

ぬひ　コレ兄さん、お前の望みは叶へるわいなア。

房八　ヤヽ、なんと云ふぞ。

小文　アヽ、コリヤ〳〵女房、そりや何を。

ぬひ　サア、マア、何事もわたし次第に、默つて居やしやんせ。コレ兄さん、こなさんの欲しがらんす物は、わしがどうなとする程に、どうぞ後まで待つて下さんせぬか。

房八　そんなら妹、われが小文吾に成り代つて。

ぬひ　アイ、この綺婆もそれまでは、どうぞわたしに預けて下さんせ。

房八　ムウ、よいワ。其やうに妹が頼むなら、無得心に行くでもないかい。

小文　そんなら聞分け、女房に預けて。

ぬひ　後まで待つて下さんすか。

房八　その返事を聞くまでは、奥で一寐入りやつてのけう。

小文　とは云ふものゝ、この綺婆。

房八　ヤア。

ト思ひ入れ。小文吾、氣を替へて

小文　アヽイヤ、そんなら小舅。

ぬひ　兄さん。

房八　小文吾、妹、返事をキッと待つて居るぞよ。

トちやんと唄になり、房八、思ひ入れあつて、奥へ入る。小文吾、思案の思ひ入れ。お縫、ツカ〳〵と小文吾の側へ行く。

ぬひ　コレ、こちの人。

小文　エヽ、睨りするわい。思案の中へ、なんぢやぞい。

ぬひ　お前の睨りより、わたしの睨り猶百倍。なぜ物を隱して下さんす。

小文　おりや何時、其方に物を隱した。

ぬひ　イヤ、穢さぬとは云はれますまい。しかも今、兄さんが渡さんしたこの綺婆。

小文　ヤア。

ぬひ　この犬塚の信乃とやら云ふお人、慥かにお前が匿まうて居やしやんせうがの。

小文　ア、、コレ。

トあたりを見廻す。お縫、口へ袖を當てる。合ひ方。

なんと云やる。

ぬひ　サア、この事は昨日の朝、父さんとの密々話し。古主里見に忠義の人達、兄弟の約束までさしやんした事、聞いて居ながら女房の、わたしに話しのないは、現在の兄弟は、あの通りの惡者ゆゑと、子まで生したる女夫仲を、それ程までに疑はしやんすは、そりやお前、胴慾ぢやわいなア〳〵。

小文　オ、、その恨みは尤もながら、さら〳〵其方に隱すではない。詳しい事を話さうにも、匿まうた人は破傷風にて、今夜の間も危ふい命。どうぞ詮議の中に、本腹がさせたいと、とつ追ひつの思案の中。話す暇さへないに、昨夜の體裁と云ひ

ぬひ　サア、わたしもさうぢやと思うたゆゑ、今あの惡者にどの〻詮議にも行き兼ねぬ血相、どうやら心ならぬゆゑ兄弟甲斐にわたしが引取り、暫しのうちも延して置くもの〻、お前、どうさしやんす心ぢやえ。

小文　どうと云うたら、さう早急にも思案は出ぬ。親仁樣が戻らしやつたら、又どうなりともならうぞい。

ぬひ　成る程、それにつけても、まだ外に、お前に話したい事がござんすが、必らず聞いて恟りさしやんすなえ。

小文　おれに話す事がある。聞いて恟りすなとは、そりやマア何事ぢや。

ぬひ　サア、わたしが話しと云ふは。

トあたりを見廻し、最前の法螺貝を取つて

この法螺貝。

小文　そりや、最前若い者らが、船の內に殘つてあつたと云うて、持つて來たその法螺貝。

ぬひ　その心をとつくりと、父さんの戻らしやんすまでに、判じて見て下さんせいなア。

小文　ハテ、心あり氣な法螺貝の謎々。

ト思ひ入れあつて

おれも又、其方に云はねばならぬ事がある。必らず聞いて恟りしやんなや。

ぬひ　エ、、恟りすなとは、マア、どんな事でござんすぞいなア。ちやつと聞かして下さんせいなア。

小文　サア、その話しと云ふは

ト　また最前の尺八を取つて來て
コレこの尺八。
ト　お縫に渡す。
ぬひ　ムウ、この尺八を、お前が話しとはえ。
小文　サア、その謎々を、とつくりと判じて見やれ。
ぬひ　そんなら、お前のこの謎も
小文　其方が方のこの謎も
ぬひ　父さんが戻らしやんしたその上で
小文　互ひに思案の占方も
ぬひ　解つて云はれぬこの尺八。
小文　逆の峯入り分け迷ふ
ぬひ　心戸開けのこの法螺貝。
小文　なるかならぬは後方までに
ぬひ　調べて見たい胸の中。
小文　取交したる謎々は
ぬひ　品こそ替れ法螺と尺八。
ト　兩人思ひ／＼にこなしあつて、双方、顏見合せ
兩人　ハテナア。
ト　此うち、納戸にて、赤子啼く。
ぬひ　オヽ、可哀さうに、抛つて置いたに依つて、堪忍してたも／＼。
ト　納戸へ子を抱きに行く。
小文　オヽ、嬉しいか／＼。
ト　思ひ入れあつて愛する。赤子啼止む。お縫、愁ひのこなし。
ぬひ　アヽ、なんにも知らずに。
小文　ヤア。
ぬひ　ドレ、奥でゆぶつてやりませうか。
ト　合ひ方になり、お縫、納戸へ入る。小文吾、始終お縫の素振りに氣を付け居て
小文　房八が詞の端々、どうやら信乃どのと現八どのが隱れ所を、氣附いた樣子と云ひ、彼の劍もおれが手へ、入つたものゝやうに云ふは、なんぞ慥かな證據を見屆けて云ふものか。それと明かして云はれぬゆゑ、いま女房に餘所ながら、云ひかけては置いたれど、昨夜劍を取り得たりや、よもや隱さうやうもなし。こりや樣子のありさうな事ぢやわえ。
ト　今の法螺貝と繪姿とを見て、思案のこなし。出の唄になり、向うより、照文、着附け羽織、旅野袴、大小にて、家來一人連れ出て、花道にて、顏にて案内せい

とする。家來はハッと門口へ來て

家來　誰そ頼まう。古那屋文吾兵衞宅はこれか。

小文　ハイ、古那屋と申しますは、手前でござりまする。

家來　ハッ、この家が文吾兵衞宅でござりまする。

照文　ムウ、其方は地頭方で相待ち居よ。

家來　ハッ、畏まつてござりまする。

照文　行け〳〵。

家來　ハッ。

ト始終合ひ方。家來、橋がゝりへ入る。小文吾、思ひ入れあつて

小文　どなた樣でござりまする。マア、これへお通りなされませう。

照文　然らば、許し召され。

トずつと入り、上手へ通る。

小文　ヤア、あなたは蜑崎照文さま。

照文　犬田小文吾どの、貴殿にも御堅固で、先づは重疊に存ずる。

小文　あなた樣にも御健勝の體、喜ばしう存じまする。

照文　我が君義實公には、山内顯定公の御扶助に依つて生ひ立ち給ひ、また我が父蜑崎照武は、伏姫君富山の奥へ入らせられし折から、お見送りのお供いたし、麓の川を馬上にて打渡せしところ、山神の咎めにて、水に溺れて敢へなき最期。然れども、その忰たる某ゆゑ、顯定公のお召しに依つて、義實公に付き添ふ役目。然るに先達て、當古那屋の主文吾兵衞どのには、那古の七郎どのの舍弟と聞きしゆゑ、某に仰せつけられ、義實公と御自分主從に誓約取結び、餘所ながらお家再興の時節を見合せ

小文　サヽ、その主從のお約束、申し上げてより、承はりし滸我の重寶、桐一文字の鎗通しとやら、黄金作りの御劍紛失。この劍を詮議せば、御緣談も相調ひ、一日なりとも早く義實公を、御代に出さんと心を碎く我れ〳〵親子。

照文　然るに當地蜑崎の海底に、夜な〳〵の光り物。金色の顯はるゝと聞きしより、我が君の御賢慮には、殺生禁斷の場所なるに依つて、漁師すら網を入れず、これ幸ひ里見と滸我に仇する輩、鎧通しを奪ひ取り、この海底に沈めあるに相違ないと、網漁りに馴れしとあつて、小文吾どの御身にお頼みありし事、よもや忘れは致すまい。

小文　如何にも。それゆゑ例へ後にてこの事顯はれ、掟の

簀卷に遭ふとても、主君に捧げるこの命。さら〳〵惜しむ所存もなく、夜な〳〵毎に忍びの網。

照文　夜前卅滿時、網を入れし者の手へ、黄金作りの劒取り得しと、山の手の遠見より注進。さるに依つて某、この役目を乞ひ請け來りしも、餘所ながら其方の力になり危難を救はん爲。定めて劒は取り得られたであらう。劒だに手に入らば、お家の再興近きにあり。ホ、、出かされたり小文吾どの。イザ、劒を受取り申さう。

小文　アイヤ〳〵照文さま、御意ではござりますれども、夜前網を入れしは、拙者ではござりませぬぞ。

照文　ヤ、、なんと。

小文　如何にも、この程まで闇の夜を見濟まし、時々網を入れしは私しなれど、夜前に限り、親どもと云ひ、女房までが他行いたし、一寸も外へは出ませぬ。昨夜に限りて劒は餘人の網にかゝり、この小文吾が手に入らぬとは、よく〳〵弓矢神に見放された身の上かと、心外に存じまする。

照文　イヤ、その云ひ譯、暗い〳〵。

小文　とは又なぜに。

照文　この程まで網を入れしは其方にて、夜前に限り覺えないとは胡亂の詞。

小文　して又、夜前網を入れしは、この小文吾と、なんぞ慥かな

照文　證據と云ふは網の龍頭に、漆を以て犬の一字を記しあるが、遁がれぬ證據。

小文　エ、、すりやその網に犬と云ふ字が。

ト恟りの思ひ入れ。

照文　夜前禁斷の場所へ參らぬ、其方が持ち網、岩の狹間にどうしてあつた。

小文　イヤサ、その儀は。

照文　さては所詮里見のお家、再興の儀は覺束なしと、古主を見限り、夜前取り得し桐一文字は、金子に替へて賣り渡せしよな。

小文　イヤ、全く以て。

照文　世に連れてさほどまで、汚なき心になるものか。

小文　神以て左樣では。

照文　さなくば劒を身に渡すか。

小文　サア、それは。

照文　劒は、早賣り渡したか。

小文　サア。

照文　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
照文　見下げ果てたる不所存者ぢやなア。
トきつと云ふ。小文吾、當惑のこなし。この時、橋がかりより、捕り手、バラ〳〵と大勢入つて、小文吾を取卷く。
捕手　小文吾動くな。
ト小文吾、キッとなつて
小文　こりや狼藉な。なんとなされます。
トこの時、橋がゝりより、文吾兵衛に繩をかけ、帆太夫、家來を連れ、出かけ居て
帆太　何ゆゑとは憎い奴。某とくと申し聞かさん。ソレ、者ども。
捕手　親仁め、下に居らう。
ト皆々文吾兵衛を突き据ゑる。小文吾、見て恟りして
小文　ヤア、お前は親仁樣。
ト寄らうとするを皆々取卷く。
捕手　動くな。
ト小文吾、これにて、ヂツとなる。
照文　滸我家の近臣、新織帆太夫どの。
帆太　管領の御家來、蜑崎照文どの。
照文　殺生禁斷の場所へ網を入れしは、小文吾なりと疑ひかゝり、某これにて詮議のところ、又もや文吾兵衛に繩打つての詮議はな。
帆太　ハッ、貴殿にも御存じの通り、繪姿を以て吟味いたす、犬塚信乃が在所、即ち今日怪しき浪人、入江橋のほとりにて、文吾兵衛と何か密談の致せしを、目附けの者より知らせに依つて、庄屋檀内に申しつけ、これなる文吾兵衛を呼び寄せ、樣々吟味いたせども、覺えない由陳ずるゆゑ、悴小文吾が前にて拷問の致し、科の黑白相糺べうと存じ、斯くの仕合せ。
小文　すりや、そのお尋ね者と思しき者と、親仁樣が途中での密談。それを御吟味なされん爲。
文吾　イヤ、存じませぬ。この親仁が知らぬと申すからはなんの悴が存じませう。
帆太　まだ〳〵死太い親仁め。者ども、ソレ、拷問いたせ
捕　ハッ。
ト繩目へ力を入れてこじる。文吾兵衛、苦しむ。小文吾、恟りして
小文　ア、滅相な。

ト寄らうとする。捕り手皆々極めつける。

帆太　サア、これでも知らぬか、覺えはないか。

照文　この上は身共とても、禁斷の場所へ網を入れし疑ひこれにて糺さん。

ト照文、立ち上がると

房八　その詮議は、この女郎めでござりまする。

ト奥より、お縫、子を抱いた儘なるを引立て、房八出る。皆々これを見て

小文　ヤア、其方は房八、アノ女房を。

ぬひ　兄さん、こりやどうさしやんすのぢや。

房八　どうするものか。お役人の前で締め上げても、白狀さすのぢや。

小文　すりやアノ其方が。

房八　オヽ、お尋ね者の留め所、盗み網の責め、兩方とも云うてしまへ。

帆太　照文どのにも盗み網を打つたる詮議、よも御容赦は召さるまい。

照文　如何にも。白狀せねば容赦はならぬ役目の表。

帆太　サア親仁、白狀せずば骨を拉いでも云はさにやならぬ。

捕手　キリ〳〵と白狀せい。

文吾　例へこの身はずた〳〵にしられても、さう云ふ人を匿まうた覺えはござらぬ。

房八　サア、女郎、われも痛い目せぬうちに白狀せい。盗み網を打つたは、小文吾であらうがな。

ぬひ　イエ〳〵、なんのこちの人が、そんな恐ろしい事をさんせうぞ。覺えのない事、わたしが證人でござんす。

房八　ヘヽ、われが證人、役に立たぬ。サア、云はぬか、白狀せぬか。エヽ、死太い衒妻め。

トお縫にかゝる。小文吾、房八をば突き廻して

小文　コリヤ、女房を、わりやなんとするのぢや。

房八　なんとせうぞい。責め苛なんでも白狀さすのぢや。

トまた行かうとするを程よく留めて

小文　イヤ、さうはならぬ。

房八　なぜならぬ。

小文　白狀させてよくば、お役人が來てござれば、それぞれにお役目のあるものを差措き、いらざる世話。

房八　いらぬ世話でも、その爲の小舅様ぢや。緣者のおれもかゝり合ひ、それぢやに依つて妹めを責めるは、おれが潔白。但しそれでも、いらぬお世話か。エヽ、ちよ

ちよこなつて居らうてや。サア、衒妻め、腕廻せ。

ぬひ　コレ兄さん、お前、こちの人が禁斷の場所へ、網を打つたと云はしやんすが、なんぞそれには證據がござんすか。

房八　へ、、、、、そんな事には地獄耳、さすもんぢやない。ちよつと聞いた網の事。禁斷の場所に殘つてあつた網の龍頭に、犬と云ふ字の印が證據。なんと遁がれはあるまいがな。

小文　イ、ヤ、例へ犬の字が書いてあらうが、なんと云ふ字が印であつても、この小文吾は覺えはない。

房八　そんなら、ありや誰れがのぢや。

小文　ハテ、世間狹い。世界に同じ名の者は幾らもある。マア犬と云ふ字が記してありや、房八、貴樣のであらうかい。

房八　ハテ、けぶけれつな事を云ふ。どうして犬が、おれが名ぢや。

小文　知れた事、其方が家名は、下地から呼ぶ犬江屋房八

房八　ヤア。

小文　近頃は山林房八とやら、角力の方では呼ぶさうなが犬と書いたは家名の頭字。

房八　ムウ。サ、それは。

小文　サア、錨屑も云へば云はるゝと、なんとそれでも證據にするか。

房八　サア、それはな、

兩人　サア〳〵〳〵。

房八　ア、、なんの彼のと云ひやうもあるものぢやなア。

ト この時、照文、懐中より捕り繩を出して捌き

照文　サア女、其方が存じて居らう。有體に申さずば、不便ながらも繩かけて拷問する。腕廻せ。

ぬひ　イ、エ、私しは何にも存じませぬ。

帆太　サア、親仁め、白狀せぬか。

文吾　そんな事は知りませぬ。ナウ嫁女。

ぬひ　アイ、どうで呵責の責め次手。

文縫　サア、どうなりと。

照文　この上は是非もない。

ト お縫に繩かける。

帆太　サア、死太い親仁め。

照文　サア、女も共に

皆々　云はずばカウ。

ト 双方繩目へ刀を突ッ込み、こじろ。兩人苦しむ。小文

吾、ヂッと喰ひしばる。
照文　サア小文吾、親と云ひ妻子まで
帆太　斯く目前に責め苛なんでも
皆々　白状せぬか。
小文　ムヽ、サそれは、
房八　白状せずば、おれが代つて。
ト小文吾にかゝるを、煙管にてちよつと立廻つて
小文　コリヤ、小文吾をなんとするのぢや。
房八　なんともせぬ。締め上げて云はすのぢや。
小文　なにを。
ト双方キッとなる。
帆太　ソリヤ者ども。
捕手　ハッ。動くな。
ト小文吾の兩方より、腕を取つて、引立てる。小文吾思ひ入れあつて
小文　コリヤ、なんとなさるゝのぢやな。
帆太　親子は一體。白状せずば、其方を面縛する。
捕手　腕廻せ。
トちよつと立廻つて
小文　サア、それは。

照文　サア、白状するか小文吾。
小文　サア、その儀は。
帆太　匿まひあるに相違はないか。
小文　サア、それは。
房八　但しはおれが締め上げうか。
小文　サア。
皆々　サア〳〵〳〵〳〵。なんと。
トきつと云ふ。小文吾、こなしあつて
小文　ウム。
帆太　ソリヤ。
捕手　捕つた。
トまた兩方よりかゝるを、キッと立廻つて、見得になる。この時、本釣り鐘ゴンと暮れ六ッ打つ。小文吾、ハッとこなし、一人を投げ、一人の手を持つた儘にて
小文　ヤア、ありやモウ暮れ六ッ。
ぬひ　エヽ、折悪い。
文吾　其方の鳥眼。
ト縄付きながら寄らうとする。照文、房八と顔見合せ據ろなうお縫を引付ける。帆太夫、文吾兵衛を引付ける。小文吾、鳥眼にて、もう見えぬ思ひ入れにて

小文　イヤサ、捕り繩のこの縺れ。
ト紛らず思ひ入れにて、捕り手の手をソッと放す。捕り手擬勢。小文吾、留める。房八、始終これを試して居る。文吾兵衛、お縫、心遣ひのこなし。
折も折、時も時とて人相の鐘。我が身一つに絡んだよなア。
トむつとなる。房八、二三度試し見て
房八　小文吾、わりや鳥眼ぢやな。
トこれにて、小文吾、ギツとなる。
小文　イヤ、ずんと明らかな。
房八　アノ、鳥眼でもないか。ハテ、明らかなぢやなア。
捕手　サア、白狀。
ト又かゝるを、探りながら、ポンと投げる。
帆照　コリヤ、手向ひか。
小文　イヤ、お手向ひは仕りませぬ。斯くなる上は是非に及ばぬ。如何にも犬塚信乃とやら、匿まひました。
帆太　さてこそなア。
小文　また照文さまへの白狀には、禁斷の場所へ網を入れたも、私しでござりまする。
照文　ヤヽ、たんと。

トお縫、文吾兵衛、ハッと思ふこなし。
ぬひ　ア、コレ滅相な。
文吾　その身に覺えのない事を。
小文　イヤ、斯く白狀に及びますからは、親女房には拷問にも及びますまい。
房八　そりやこそ。ようこそ白狀ひろいだ。でも死太い奴の。
帆太　例へ白狀いたしても、科人の信乃の首打つて相渡すか、但し繩付きにして受取るまでは、文吾兵衛は手放す事罷りならぬ。
房八　また禁斷の場所へ網を入れたら、ふし漬の科はお定まり。それもいよ／＼仕上げの濟むまでは、この女郎の繩目、お赦しはござりますまい。
照文　如何にも、房八とやらんが詞の通り
小文　サヽ、左樣ではござりませうが、一旦斯樣に申し上ぐれば、變改ではござらぬ。暫時の間
照文　猶豫いたしてくれいと申すか。
小文　何卒各々のお情を持ちまして。
照文　尤もの願ひ。聞き届けた。帆太夫どのにも、暫時の猶豫いたして遣はされ。

帆太　でも、此まゝ打捨て置いては。
照文　ハアテ、猶豫のうちは濱手に退き、出口々々を遠巻きせば、蟻の這ひ出る所もござらぬ。
帆太　成る程。して又貴殿は。
照文　當家に止まり、科の落着相調べるでござらう。
帆太　成る程、貴殿に免じ、文吾兵衛が縄目、赦して遣はしませう。ソレ。
捕手　ハッ。
ト文吾兵衛の縄を解く。
照文　ソレ、房八とやら、お縫が縄目を解いて遣はせ。
房八　ヘイ、この縄も。エヽ、命冥加な女郎めなア。
ト　お縫が縄を解く。
帆太　して首討つて渡す時刻は。
小文　卽ち今宵亥の上刻、所の祭禮、御輿洗ひの始まるを合圖に、キッと打つてお渡し申しませう。
照文　すりや、禁斷の場所へ網を入れしも、當所の神事の始まるまでの。
房八　最前われに云うた事も、小文吾、見事捌いて見るか
小文　何事もこの小文吾が身に引請け、捌いてお目にかけませう。

房八　アノ貴様が見事。ハテナウ。
文吾　すりや、何事も祭の刻限。
ぬひ　その亥の刻がこの世の別れ。
小文　千々に思案は縺るゝ苧環。
ぬひ　その結ぼれを
文吾　解くか。
房八　ほどくか。
小文　マアそれまでは
照文　間をば隔てゝ
帆太　この家を遠巻き。
小文　御兩所様。
照文　小文吾、キッと詞を
房八　番へたぞ。
小文　ハッ。
ト唄になり、帆太夫は橋がゝりへ捕り手を連れて、照文は文吾兵衛、案内して、惜れながら上手の一間へ、小文吾は立ち上がつて、莨盆に躓く。お縫、子を抱いた儘、これな抱へる小文吾。子に手が觸るゆゑ、これをと云ふ心にて、抱き取つて、ちよつと愁ひのこなし。房八は小文吾へ寄らうとするを、お縫は房八を留めて

房八、お絹を引立て奥へ入る。小文吾、子を抱きながら一人残り、探り足にて、奥へ行きかける。この見得よろしく、本釣り鐘、送り三重にて、チョン／＼、返し。

造り物、三間の間、二重舞臺、向う唐紙襖、上手、折り廻りの障子屋體、本縁付き。この間少し明けて橋をかけ、上手の蹴込みは崖造り、この前浪のうね、橋の下へかけて、入江の心にて、前に蘆を所々に置き、この屋體の前に撥釣瓶、縁より水汲む心。下手は物置部屋の心、宜き所に角行燈に灯を灯し置きあり、すべて、行徳河岸邊、船宿の奥座敷の心。好みあるべし。淨瑠璃、本釣り鐘にて、静かに道具納まる。

〽更くる夜に、連れては高き水の音、網引の聲も絶え絶えに、蜑の苫家に藻汐焚く、灯影も細々哀れ氣に、無常を告ぐる遠寺の鐘、無殘なるかな小文吾は、寐入る我が子を抱きかゝへ、塒尋ぬる鶯ならで、足元見えぬ眼なし鳥、覺束なくも奥の間へ、探り出でつゝ行燈の、灯をかかげても影暗き、子ゆゑの闇にとつおいつ。

ト此うち、小文吾、奥より子を抱き探り出て、行燈に行き當りかけ、氣が付いて灯をかゝげる。あと床のめりやす、千鳥笛。楫の音。

小文　今鳴る鐘は半時か初夜か。いま滸我の役人の見る前なれば、照文どのにも役目の表。目前親と女房が、呵責の責めに遭ふを見て、なんと堪えて居られうぞ。主家の爲に義を結びし、犬塚どのは遁がれぬ科人。この首討つて出さずば、親仁樣には卷添への科。それさへあるに彼の人は、破傷風にて明日さへ知れぬ命の瀬戸際。また照文どのには網を證據に、この身を疑ふ、これ迄も無理ならず。房八が五音と云ひ、今日晝からの女房の素振り、正しく我れに成り替り、彼の場所へ行きしとは思へど、もし又劍の手に入らば、渡さにやならぬ手詰めの場所。沙汰の無いのは知らぬが定か。三ッ四ッ重なる難儀の中。折も折とてこの眼病。チエヽ、この小文吾が身を守る、神も佛もないかいやい。

〽見えぬ瞼にはら／＼と、溢るゝ涙川風に、落ちては露となるやらん。

イヤ／＼、不覺の涙に時を移し、事遲れては悔んで返らぬ。照文どのへの云ひ譯には、我が魂ひの遁がれぬ證據

腹かッさばいて相果つれば事は濟む。また思ひ出したはこの悴。幸ひ戌の年の生れ、この小文君は辰の年、この二人の生血を以て、破傷風の瘡口を洗ふ時は、立ち所に癒るとある。こりやコレ、亡き伯父那古の七郎どのよりの傳方。この身は元より悴を手にかけ、信乃どのさへ本腹さすれば、親人ため女房まで、祟りを遁がれて身は安穩。幸ひあたりに人も居ず、支へ立てせぬ其うちに、恩愛の悴なれども、不便ながらも手にかけて、返す刀でこの身も切腹。オヽヽ、さうぢや。

ヘ一人頷き立ち上がり、隱し持つたる一腰を、探りながらも恩愛の、別れの涙果しなき。夫の素振り心得すと、襖押明け女房が、聞くとも知らず醉臥らせ。

　トこの時、お縫、襖を明け、出かけ、ヂッと見て居る

小文　コリヤ〳〵悴、たま〳〵人界に生れ來て、親の手にかゝり死ぬるのは、さぞ無得心なと恨みもせうが、朋友の爲とは云へども、主家を起す忠義の武士、助くる其方は主君へ忠義。梁の上で死んだと思ひ、料簡せよ。その代りに一人はやらぬ。其方を手にかけこの父も、共に相果て冥途の道連れ、堪えてくれよ南無阿彌陀佛。

ヘ口に稱名唱へつゝ、刀すらりと拔き放す、なうコレ待つてと女房は、慌て蹟き走り出で。

ぬひ　ア、コレ待つたこちの人。マア〳〵待つて下さんせいなア。

ヘ夫の刀突き退け〳〵、我が子をしつかと抱き取れば、ハッと思へど聲荒らげ。

小文　ヤアお縫か。最前話す仔細あり、悔りすなと云うたは爰の事。謎にかけたる尺八は、鶴の巣籠り、親子の愛情、盡きぬ嘆きを思ひ切り、犬塚どのゝ病苦を助け、惜まぬ心底割つて見せべき我が胸中。合點がいたかッサ、悴を早く此方へ渡せ。

ぬひ　サヽ、わたしも話しがある程に、必らず悔りさしやんすな。と、云うて置いたは爰の事。尺八の心は解けても、わたしが法螺の謎々も、解く間がなければ云ひませう。マア差當つて照文さまへの云ひ譯なら、今は何を隱しませう。昨夜栗崎の禁斷の場所へ行て、網を入れたはこのお縫でござんすわいなア。

小文　ヤア、さてこそ我が推量の通り、最前の問ひ狀にも、白狀せぬは心得たれど、其方が網を入れたとあれば、定めて劍は取り得たであらう。その劍さへ手に入れば、主家へ對して云ひ譯立つ。して〳〵、その劍は、どう致

したぞ。
ぬひ　サヽ、その事については、モウ〳〵、恐ろしい悲しい目を忍んで、やう〳〵と内へ戻り、ツイ斯う〳〵と一口に、云ふに云はれぬ切ない話し。其やうに急かしやんしては、氣が後れて云ひ兼ねる。心を靜めて一通り、とつくりと聞いて下さんせいなア。
ト小文吾苛立つを、お縫、下へ置く。小文吾、ひよろひよろとして、二重より、落ちようとする。お縫、しつかり留める。これより、篠入りの合ひ方になる。
これまで毎夜禁斷の場所へ、忍んで行かしやんす事を知つたゆゑ、お前を科人にしたらもなさ。殊には後で顯はれたら、これまで網を打つたのも、みんなわたしでござりますと、お前に代つて行く心。その誠をば神佛も、不便と思うてやら、まんまと網にかゝつた劍。
小文　オヽ、さうであらうとも。出かしやつた〳〵。我れに代つてその働らき。さぞ女の身で、恐ろしう思やつたであらう。
ぬひ　サア、その怖い恐ろしい事も忘れ果て、早うお前に手渡しして、笑ひ顏が見たいばつかり。
小文　オヽ、さうであらう〳〵。して、その劍が、どうして網にかゝつたぞ。どうぢや〳〵。劍も見たし、話しも聞きたし。早う聞かして。
〽喜び勇む夫の顏、見るに猶更口籠り、その身は其所へ消えたき思ひ、一間の内には文吾兵衞、始終を立ち聞く心の內、お縫は悲しさやる方なく。
ト此うち、上手の一間の障子を引拔く。內の正面に佛壇あり、この前に、文吾兵衞、最前の劍を持ち、フトこの話しを立ち聞く思ひ入れ。お縫、いろ〳〵こなしあつて
ぬひ　サヽ、問はれて語るも面目ない、丑滿時の濱傳ひ。水さへ寢入る眞の闇。
〽俄かにさつと一村雨、はては我が身にかゝるとも、夫ゆゑにはいとはじと、念なう濱手に忍び寄り。
岩の狹間に駈け登り、時刻を今やと待つうちに、噂に違はぬ光り物。
〽慄ふ足先爪立てゝ、日當にさつと打込む一網。
怖々ながら引上げて、見れば眩ゆき劍の拵らへ、黃金作りのその光り。
〽これぞ夫が日頃から、お主の爲に身に替へて、尋ね求むる桐一ト字。

ヤレ嬉しやと戴く所へ、思ひも依らず足元より、待つたやらぬと取りつく曲者。

〽合圖に進ひ〳〵集まる人音、こは仕損せしと驚ろくうち。

悲しや大切なその劒は。

小文　ヤア。

ぬひ　サヽ、その劒は奪ひ取られましたわいなア。

小文　ヤヽヽ、。

〽劒の行くへその場の始終、一々聞き取る親と子が、恟り敗亡心の轉倒、只茫然たるばかりなり。

ト小文吾、大恟り。文吾兵衛は一間にて恟りして、兩人一時にホッと當惑のこなし。お縫は小文吾に縋りて

ぬひ　サア、さぞ恟りでござんせう。折角綱にかゝつた劒奪ひ返さるゝのみならず、すご〳〵戻つて云ひ譯は、面目ないやら悲しいやら、味氣ない身の上を、思ひやつて下さんせいなア。

〽後は得云はず泣き出す、心の内の切なさ辛さ、聞く事毎に小文吾は、胸も潮の汐煙り、涙湧き出る無念泣き。

小文　ヤイ、うろたへ者め、これまで毎度小文吾が、夜網を入れた事あれど、證據を落した事もないに、昨夜に限り其方が打ち、網を忘れたばつかりに、簀卷の法に遭ふのみか、劒を餘人に取られては、盡せし忠義も水の泡。鼻の先なる女智惠。チエヽ、これとても悔んで返らず。照文どのへの申し譯。簀卷の科も身に引請け、切腹するより外はないわい。

ぬひ　サヽ、その腹立ちは尤もでござんすが、コレマア、心を沈めて下さんせ。その劒は取られたれど、在所はわしが知つて居ります。

小文　ヤヽヽ、なんと云ふ。在所を知つて居るとな。してして、その在所は何所に。

ぬひ　その劒を取返して、お前のお手へ渡したら、お前は元よりこの子まで、死ぬるには及びますまい。

小文　劒さへ取り得なば、照文どのへの云ひ譯立てど、簀卷の法はとても遁がれず、殊に一旦義を結びし、犬塚どのを落さうにも、命危ふき手疵の惱み、忰と身共の生れ年合ふを幸ひ血汐を取り、信乃どのを本腹させずば、今まで磨く小文吾が、忠義の道が缺けるわいやい。

ぬひ　サア、その劒の事も妙藥にも、わたしに深い思案もあれど、それと云はれぬこの身の苦しみ。まだ〳〵悲しい術ない目を忍んで留めるのもこの子を始め、大事の夫

に、さう云ふ事をさすまい爲。

小文　ヤア、思ひ立つた我が思案、妨げ立てして怪我まくるな。悴と刀を此方へ渡せ。

ぬひ　イヽエ渡さぬ、お前の思ひの屆くのも、劍の在所の知れるのも、法蝶の謎々解けるが一時、心沈めてこちの人、マア〳〵待つて下さんせいなア。

〽これ手を合はして拜みます、拜むわいなと聲を上げ、我が子を後に抱きかゝへ、ワッとばかりに伏し沈む、一間の內には文吾兵衞、劍携へ立ちつ居つ、さては我が手にかけたるは、嫁女であつたか免してたべ、とは知らずしてこなたには、悴を渡せと見えぬ目に、睨む夫を止める女房、親は心の裏表、この事云うて、劍を渡さうか、イヤ〳〵、生中劍を渡したりや、忽ち姿を消すであらうと、案じ佗びたる劍のやり所、もうこの上はと小文吾は、探りながらも駈け行く一間、マア〳〵待つてと引き止め、劍が出れば消え行くこの身、暫しのうちもこの夜の名殘と、纏はる裾を刎ね釣瓶、劍を紐に結びつけ、嫁女堪えて下されと、心一間の內と外、撞木持つ手もしどろにて、鉦も哀れや添へぬらん、血筋の嘆きも構はぬ房八。

ト この淨瑠璃のうち、上には文吾兵衞、劍を持ち、いろいろ思ひ入れあつて、刎れ釣瓶の柄の所へ劍を結び付けて下ろし、愁ひにて一間の障子を締める。下には小文吾苛つを、お縫心の愁ひにて留める心。この淨瑠璃の間一杯にあるべし。トヾ兩人愁ひにて泣き落す。奥の襖を明けて、房八、ツカ〳〵と出て

房八　オヽ、小文吾、姝、爰に居るか。役人めらの返事より、おれへの返事はドヾどうぢや。

小文　ヤア、さう云ふ聲は房八か。

ぬひ　兄さん、エヽ、お前はなア。

房八　なんぼ兄弟のよしみでも、上がつた劍が、科人か、大金になる二つの代物。一つは此方へせしめにやならぬ。サア、どちらか、返事さらせ。

小文　ムウ、上がつた物は劍と知り、犬塚信乃を匿まうたと、房八其方は何ゆゑ知つた。

房八　へ、へ、へ、證據が無うて云はうかい。劍と云ふは桐一文字、滸我の横堀在村が、鎌戸の三寶平と云ふ奴に云ひつけ、禁斷の場所を幸ひに、栞崎の深みへ沈めて置いたと、子分の奴等がおれへの知らせ。其所でおれが念がけて居るのぢや。



嵐吉三郎の犬田小文吾



助高屋高助の山林房八

小文　すりや、桐一文字の鑓通しと知つて、房八うぬも、これまでに。

房八　オヽ、毎晩々々網を入れ、科はおのれに塗らう爲ぢや。なんぼわれがぎしや張つても、皆目見えぬ鳥眼であらうが。

小文　ナニ、この小文吾を鳥眼とは。

房八　イヽヤ、隱すな、措け〳〵。なんぼ見える顏してもかがれてけつかる。サア、斯うなるからは劍は元より、信乃を搦めて、おれに渡せ。

小文　ヤア、小ざかしい詮議立て。見事われが詮議するか

房八　オヽ、なんでもない事。

小文　何を小癪な。

〽双方ひるまぬでゞ蟲の、角め立てたる爭ひに、お縫は悲しさやる方なく、慌て惑うて兄夫、二人が中に押隔て

ぬひ　これは又情ない兄さん、妹聟の雜儀の所、助けうと思ふ所存はないか。エヽ、情ない、お前はなア。

房八　ヤア、見苦しい支へ立て。寶の山に入りながら、手をつかねて見て居やうかい。マア、この子悴から人質に

〽抱きたる幼な子引ッたくれば、いゝやさゝぬと支へるお縫、小文吾透かさず房八を、筋斗打たして幼な子抱き取り、その身も早く身構へたり、ヤア猪口才なと房八が落ち散る刀拾ひ上げ、切つてかゝれば小文吾は、立合はんにも鳥眼の悲しさ、お縫はひるまず身をさしつけ、拔身を支へ我が身を押詰め、日頃に似合はぬ甲斐々々しさ、えゝ面倒なと振り拂ひ、小文吾目がけて追ひ詰める、詮方盡きて小文吾は、支へる小楯の刎ね釣瓶、切り込む刀に落ちたる劍、得たりと取上げ拔き放せば、忽ち顯はす劍の奇瑞、閃めき渡る光り物。

ト立廻りのうち、小文吾、抱子を懷に入れ、上手へ行く。房八、お縫を蹴退けて、切つてかゝる。小文吾、刎ね釣瓶に行き當り、それにて受けとめる。房八、切りつける。文吾兵衛の括り付けし劍落ちる。小文吾、直ぐに取つて、房八に返す刀を受けとめる。お縫、房八の足に手をかけ、三人、キッと見得になり、大ドロドロにて、上手浪のうねより光り物、水氣見事に一時に立つ。小文吾、鳥眼の明きしこなしにて、キッととまる。烈しき合ひ方。

小文　ハテ、心得ぬ、今この刀を拔き放せば、忽ち輝く光り物。その上水氣の立ち昇る。

ぬひ　それぞ誠の桐一文字、黃金作りの劍の威德、お前の

鳥眼も忽ち平癒。

房八　ヤア〳〵、すりやこの劍の奇特にて、小文吾おのりや目が見えるか。

小文　オヽ、見えるとも〳〵、闇に閃く電明り、見ゆる向うは安房上總、仲にあり〳〵漁火の、漂ふ筋は佃島、明りに集まる芝鰕の、跳ね上がるまで見え渡るわえ。

ぬひ　チエヽ、嬉しや忝なや。日頃信ずる安房の國、洲崎の行者さまの御利益か。

房八　アヽ悲しや。其方はよからうが、此方がおへぬ。好い加減に劍を渡せ。

小文　イヽヤならぬ。滅多に渡さぬ。

房八　うぬ、生けては置かぬぞ。

小文　何を小癪な。

〽又切りつける白刃の稲妻、この場の手詰め六字結ひ、奥には鉦の責め念佛、呵責の責めかお縫が魂魄、劍の德にや恐れけん、身も慄はれてわな〳〵、こは〳〵婦何にと驚ろく小文吾、得たりと進む房八が、脾腹をぐつと眞の當、ウヽも云はずのたばり伏す、虫が知らすか泣き出す幼子、ゆぶりながらもお縫に取りつき。

トよろしく立廻るうち、薄ドロ〳〵にて、燒酎火燃えろ。お縫、慄へながら上手へ廻る。赤子笛吹く。

コレ〳〵女房、房八はこの通り、のめらしたれば氣遣ひなし。心を慥かに持ちやいなう。

〽縋り留むれば振り拂ひ。

ぬひ　コレ〳〵こちの人、名劍の威德に恐れ、もはや冥途へ旅立つこの身。

ト小文吾、劍を袖に隱す。この時、光り物、水氣止む

小文　ヤヽヽ、すりやその身は疾よりも、この世を去りし魂魄よな。して又、姿を顯はせしは。

ぬひ　今こそ現すわたしの素性、元は安房の里見の家中、金鞠どのゝ召仕、柚木朴平どのと云ふは、わたしの祖父樣、お前の伯父樣七郎どのとは、敵同士でござんすわいなア。

小文　ムウ、そんなら其方は噂に聞いた、伯父七郎どのを討ち果たせし、柚木朴平が血筋であつたか。ヤヽヽ。

ぬひ　母樣戸山の妙眞さまの遺言には、假にも先祖の敵同士、改め云うては不緣の元、その身を捨てゝも親子御の力となれよとくれ〴〵との御遺言。劍をお前に手渡しすれば、この身の本望。また破傷風の藥には、最前の法螺の中に、絞り込みあるはわたしの血汐、いま一藥の辰の

年の生血、その惡者の生れ年、今まで作つた罪障を、消さん爲に討つて取り、お役に立てゝ下さんして、その子の養育頼みまする。

小文　劍を無雜に取り得ん爲、我れに代つて無慘の最期。まだその上に血汐まで、心を付けて忝ない。氣遣ひしやんな。血汐を用立て、悴は無事に養育するぞ。

ぬひ　エヽ、忝ない。亡き祖父樣の汚名を雪ぎ、心にかゝる事もなし。今ぞ消え行く我が姿。

小文　すりや、もう姿を消しやるか。南無阿彌陀佛。

ぬひ　おさらばでござんすぞえ。

〽云ふをこの世の形見の詞、今まで在りしその姿、入江の側へ行くよと見えしが、搔消す如く失せにけり、諦らめながら小文吾も、恍々夢か現かと、嘆きに沈む折も折、文吾兵衞は一間より、こけつ轉びつ走り出で、撞木投げ捨て、聲上げ。

ト此うち、掛け煙硝にてお縫、上手の浪手摺りの中へ消える。文吾兵衞、撞木を持ち、一間より慌て出て

文吾　悴、可哀やお縫が攫られ出て、迷うて戻つたも、おれが業でござつたわいなう。

小文　ヤヽヽ、そりやマアどうして、どう云ふ仔細で。

文吾　この劍を無雜に取らうと、暗紛れとは云ふものゝ、現在嫁とも知らず、可哀い事をしましたわいなう。

小文　すりや、その事を明ら樣に云へば、姿を消すが悲しさに、云ひたい事も云はず、チツと堪えて居たのかいなう。

文吾　最前からの話しを聞き、惱りしよまいか、幽靈ぢやと云うたら、其まゝ消えやうかと、出したい劍をえゝ出さず、ちつとの間なと逝きたさに、鉦打ち鳴らし念佛に、紛れて居たのぢやわいなう。

小文　ホヽウ、感じても猶餘りあるお縫が貞節。それに引替へこの房八、劍と信乃を取らん爲、慾にその身を滅ぼす惡卒。此奴の血汐を用に立て、犬塚が病苦を助くるは最屈竟。

文吾　それと云ふも皆お縫が情、して又、最前の役人に請合うた、信乃どのゝ身の上は。

ト この時、上手の一間より

照文　イヽヤ、それこそ某が命に替へ、信乃が助命は願ひくれん。

ト照文、最前の法螺貝に血汐の入りしを持ち出る。

小文　ヤア、あなたは蜑崎照文さま。

文吾　すりや、最前からの一部始終を。
照文　疾より一間で承はつた。犬塚犬飼は里見の忠臣、小文吾どのがその身に替へても、犬塚どのを助けんとは天晴れの誠忠。蟹崎照文感心の餘り、在村に面談して、助命は拙者が請合ひ申した。
小文　すりや、信乃どのゝ助命をば。チエ、忝ない。この上は桐一文字の御劍、イザお受取り下されませう。
照文　ホヽウ、出かされたり。この劍さへ手に入るからは村雨の名劍の在所知れ次第、お家再興近きにあり。兩人とも安心召され。
文吾　この上は、禁斷の場所へ網を入れた、科人はこの文吾兵衛。簀卷の法に、お立てなされて下されませ。
小文　ア、イヤ、親仁様よりはこの小文吾、犬と云ふ字を記せし網、掟を立つるはあなたのお役目。サア、私しを
文吾　イヤ、この親仁を。
ト兩人後へ手を廻す。
照文　イヤ、禁斷の場所へ網を入れし、科人は兩人の外にある。
兩人　そりや又、誰れでござりまする。
照文　外でもない、當家の女房お縫の仕業。今朝網は血汐に染みて、死骸は海底に沈みありたれば、即ちそれを簀卷にして、この掟は立つと云ふもの。
小文　我れ〳〵親子をお庇ひあつて、女房お縫が死骸にて
照文　即ち網の龍頭に犬の文字。これを返せば、ぬいと讀む。犬田小文吾が女房なれば、兩方全く利かせん爲、犬と書きしに相違はない。
文吾　そんなら、お縫が最期にて、簀卷の科も相濟むとな
照文　如何にも。
兩人　チエ、、忝ない。
照文　この上は濱手に行き、簀卷の方の掟を立てん。文吾兵衛どのにはその血汐を以て、少しとも早く信乃どのに用ゐるが肝要。
小文　成る程、その血汐を大事にかけ、親仁様には、あなたのお供を。
文吾　そんなら、これより入江橋へ。
照文　某も同道して、早々事を計らはん。
ト此うち、房八、よろ〳〵と、起き上がつて、立ち塞がり
房八　ドッコイショ。うぬらをやつて堪るものか。最前から様子を聞きやア、妹を殺したは文吾兵衛。また科人の

信乃めを、助けるわいらが目論見。この通り注進する。待つてうせう。

ト行きかけるを、照文、支へて

小文　何もかも知つた上は、生けては置かぬ。足手纏ひのこの坊主、親仁様にお預け申し

ト文吾兵衛に子を渡す。

文吾　オ、合點ぢや〳〵。して又其方は。

小文　後より直さま。

照文　然らば小文吾。

小文　何かの吉左右。

照文　相待ち申す。

ト早き唄になり、照文、劍を持ち、文吾兵衛、子を抱き、法螺貝を持つて付き添ひ、橋がゝりへ入る。小文吾、身拵らへして

小文　サア、この上は、所詮根性の直らぬ房八、幸ひ信乃どのゝ破傷風を癒す爲、うぬが生血を絞り取る。覺悟してそれへ直れ。

房八　途方もない事ほざくな、おれが血汐を取つて、信乃が金瘡を癒す。コリヤ、その間この手がチッとして居やうかい。

小文　さう吐かしや、張合ひがあつて面白い。女房の兄でも容赦はせぬ。覺悟いたせ。

房八　力自慢の山林、人も恐るゝこの房八。うぬら如きのほでにや合はぬワ。おれが引導、觀念さらせ。と逃げたいものぢや。

ト身拵らへして、向うへ逃げて入る。小文吾、南無三と行きかける。捕り手大勢、帆太夫に付き出て、ヤアとかゝる。これより、捕り物太鼓になり、皆々を相手に切り合つて、好き程に鳴り物替つて、烈しく立廻りにて、ポン〳〵と切り捨て

小文　この上は、房八めにぼッついて。

ト行きかけるを、帆太夫、出て

帆太　小文吾やらぬ。

トかゝるを立廻つて、ポンと切り

小文　信乃どのゝ病苦を助けん。ドレ、ソレ。

〽後を慕うて。

ト三重にて、小文吾、刀の血を拭ひながら、向うへ走り入る。よろしく早幕。

ト直ぐに御輿太鼓の鳴り物にてツナギ、道具出來次第に引返して、幕開く。

一面に淺黄幕、直ぐにバタ／＼にて、上手より、文吾兵衛、楾内、最前の法螺を取り合ひながら、出て來て

文吾　こりや、庄屋どの、文吾兵衛を、なんとするのぢや

楾内　なんでも怪しいこの法螺貝。此方へ渡せ。

文吾　滅多な事すると料簡せぬぞ。

楾内　料簡せいでも取らにや置かぬのぢや。

文吾　こなたが要らぬ物ぢや。爰放さつしやれ。

楾内　ナニ、猪口才な。

ト兩人取り合ひ、無理に楾内を引きこかして、文吾兵衛、子を抱いたまゝ法螺貝を持つて、橋がゝりへ走り入る。楾内、起き上がつて

うぬ文吾兵衛。さうぢや。

ト後追うて橋がゝりへ走り入る。

ト祭り太鼓打上げ、チョン／＼にて、淺黄幕切り落す

造り物、奧深に見事なる橋。上手に見事なる柳の大木。下手に据ゑし浪手摺り。この前に苫船一隻、これより上に石段にて駈け登る道、橋の下手は掛け稲

中遠見に行徳河岸の書割り、綺麗に、この中へ神事の提灯、鉾の頭など見事に見え、右の橋の上に、小文吾、荒れの形にて、房八、上手に荒れの形にて、橋臺に提灯を振り上げて居る。小文吾、留めて居る。下手に船頭隨分大勢、中通り惣出にて、縮緬の浴衣、黑繻子の江戸腹掛け、緋縮緬の褌の揃へにて面々櫂を持ち、並よく取卷き居る。この見得よろしく、舞臺前に篝火を焚き、屋臺囃子にて、道具納まる。

ト直ぐに聖天の鳴り物になり

皆々　ドッコイショ。

小文　コリヤ、小文吾をなんとするのぢや。

房八　富士と筑波に立ち並ぶ、この山林房八に、人そばえする大田野郎め、惡く尻尾を振り居らずと、キリ／＼棒を受けて見ろ。

皆々　おいらも加勢ぢや。覺悟ひろげ。

小文　ハヽヽヽ、集まつたり蛆ども。形も姿も小文吾と云へど力は大鯨。一吹き汐を吹いたらば、忽ち家名の古那微塵、惡く寄つたら一呑みぢやぞ。

皆々　何を小癪な。

トこれより皆々を相手に面白き立廻りあつて、橋の上より下へ下り、鳴り物替つて、皆々を追ひ込む、房八床几を持ち出て、これより兩人烈しく立廻りあつて、トゞ小文吾、房八を橋の上へ追うて行き、房八を切る。房八、ワッと苦しむ。この時、血汐、仕掛けにて、下手の苫船へ流れ込む。小文吾は房八に止めを刺す。下手より文吾兵衛、檀内、立廻りながら出る。

小文　ヤア、親仁樣か。

文吾　オヽ、悴、心を盡した血汐の法螺を

小文　南無三、取落さつしやつたか。

文吾　この檀内が支へ立て。

檀内　なんでも怪しいあの苫船。

ト行かうとする。小文吾、留める。この時、船頭一人出て船へ飛び込む。檀内は上手へ逃げ込む。この時苫を跳ね退け、船の中より、犬塚信乃、着流し、大小にて、腕に木綿を卷き、血汐に染み、船頭の手を捻ぢ上げながら出る。上下顏見合せ

小文　ヤア、犬塚どの、心は付きしか。

トこれにて、信乃も恟りして、船頭を捻ぢ敷きながら

信乃　ハテ心得ぬ。今まで苦しき金瘡も、立ち所に痛みを忘れ、心も常より清々しきは。

小文　それこそ、我が伯父七郎が、家に傳はる祕術の良藥

文吾　嫁のお縫と房八が、血汐の爰へ溢れた幸ひ。

小文　嬉しや心を碎いた甲斐あつて、兩人が血汐も用立ち

文吾　御身の全快あつたのも、命を捨てゝの嫁女が情。

信乃　すりや、某が金瘡を、癒さん爲に命を捨て。エヽ、忝ない。

ト船頭又かゝるを立廻りながら、ポンと切り込み、一つの玉を出して

それにつけても怪しきは、溢れし血汐の其うちに、血に染みたる一つの玉。

ト下より拋る。小文吾、受取つて改め、恟りして

小文　ヤ、、、こりやコレ我れ〳〵が玉に等しき仁の一字。血汐の中にあつたるは。

文吾　嫁女が腹にあつたのが、廻り〳〵てこの法螺の、血汐の中に交つてあつたか。

三人　何にもせよ、訝かしい。

トこの時、東西の黑簾を下ろし、柳の木の前、大ドロドロにて、お縫、五篇目にある伏姫の神靈の姿、裾は雲にて隱し、撥ね木にて、よき所へ振り出す。仕掛け

にて、文吾兵衞の抱いて居る子と玉、引き糸にて、神靈の手に渡る。三人恟りして

三人　ヤ、、、この有樣は。

ト矢張りドロ〳〵の中へ唐樂。

伏姫　如何に方々。我れぞ誠は里見の娘、伏姫の靈、今假に杣木朴平が娘と生れ、仁義八行の珠數の玉、忠孝全き八人に讓り、この幼な子もその一人。母方の家名を其まま、犬江親平正仁と名乘らせて、乳なき小兒は自らが、預かりて成長させん。必らず氣遣ふ事なかれ。

信乃　ムウ、すりや、伏姫君、假に犬田が妻となり

小文　母方の名を名乘らせ、犬江親平正仁とや。

文吾　幸ひ母なきその幼な子、守り育てゝ下さりますか。

伏姫　我れ八房の氣を孕み、產み落せしは八犬士。各々犬の名を名乘り、里見の家を助くる知らせ。

信乃　ハア、、今こそ覺りし我れ〳〵が玉の因緣。

小文　いでこの上は、殘れる玉の人を尋ねん。

文吾　實に爭はれぬ神のお告げ。

伏姫　家再興の時節まで、この親平を預かれば、これも世に云ふ神隱し。何れも、さらば。

三人　早おさらば。

ト大ドロ〳〵にて伏姫の神靈、撥れ木にて、元の所へ姿を消す。この時、橋の下、上手より、現八、深編笠大小にて、金太、辛四郎の手を捻ぢ上げながら出て、キッと留める。三人これを見て

ヤア、こなたは現八どの。

現八　お騷ぎあるな先刻より、樣子は具さに承はつた。

ト兩人をポン〳〵と投げて、笠を脫ぐ。

信乃　某が病苦を助けん爲、芝浦まで行かれし貴殿。

文吾　折好くこの場へ來合せて、思ひも依らぬこの樣子。

小文　して又、兩人の曲者は。

現八　委細の事を立聞く此奴等。即ち目前この通り。

金太　なにを。

ト振り解き、かゝるを、殺す。咄へ面にて、ハアと返る。

信乃　ホ、ウ、勇ましゝ現八どの。いでこの上は額藏と、後の三人の行くへを尋ね

現八　幸ひお繼が亡骸は、この所へ水葬すれば、簀卷の掟も立つと云ふもの。

文吾　桐一文字は手に入つて、照文どのへ渡しあれば、義實公の御武運開き。

文吾　村雨丸の行くへ知れなば、卽ち揃ふ里見の寶。お家再興近きにあり。

トこの時、鷄笛にて、正面の遠見へ絹張りの朝日登る。皆々これを見て

四人　最早鷄鳴。

トこの時、船頭四人出て、小文吾、信乃に切つてかゝる。兩人、ポンノ\と切る。現八、文吾兵衞は上を見上げる。小文吾、信乃は刀の血を拭ひ、この見得よろしく

幕

八段目

紅梅屋の場
對牛樓の場

役名　里見義實。坂田金六。渡邊綱八。臼井貞八。ト部季六。傾城、花橘。新造、雛路實ハ吾の君。禿、左枝。同、君江。座頭、城住實ハ弱木杢作。仲居、お竹。同、お辻。馬加大記常武。仲居お末。同、お品。同、お繁。同、お玉。年寄、又四郎。忍び、おば內。岩木素藤實ハ山下柵左衞門定包。太鼓、里八實ハ犬村角太郞禮儀。犬田小文吾悌順。犬川莊助義任。舞子、朝毛野實ハ犬坂毛野胤智

造り物、平舞臺、見付け長暖簾。上手に塗り骨の腰障子、下手に茶屋格子、いつもの所に門口、紅梅屋と書いた掛け行燈。右上手に金六、衣裳羽織大盡にて怒つて居る。お品、お繁、お末、仲居にて留めて居る。左枝、君江、禿子にて、これを宥め居る。座頭城住、法師にて、里八、太鼓持ちの形、皆々金六を宥めて居る。側に酒肴、銚子など並べある。皆々マアノ\ようござりますると、留めて居る。この見得、騷ぎ唄にて幕明く。

金六　イヤ、料簡ならぬ。留めなノ\。

城住　さりとては、マアノ\お待ちなされませ。

金六　エヽ、どう盲目、放し居らう。

ト突き退ける。

城住　ドッコイ、留めかゝつたら留めにや措かぬ。

ト探り廻つて、里八を摑まへる。

君江　オヽ、笑止。そりや里八さまぢやわいなア。

城住　ヤア、太鼓の里八か、ホイ。

金六　済まぬぞ〳〵。グッと済まぬぞ。
里八　これはしたり、旦那、どうでござりますぞいな。雛路さまが遅いと云うて、此やうに怒るとは、不粋々々。太夫様は、もう疾に来てござつて、あなたを待ち兼ね山の時鳥。
城住　ホヽウ、けつきやう。
左枝　コレイナア、そりや鶯ぢやぞえ。
城住　サア、その鶯の雛路さまを
金六　鳴かして見ようと、今朝からはずみ切つて待つて居るのに、やう〳〵今来て、寝所へ行かうと云へば、兎角すつたの、もじつたのと、傾城に似合はぬ床惜しみひろぐ憎い奴、ぢやに依つて身共が。
里八　こりや御立腹は御尤もぢや。併し、さう木折りに行かぬが戀の道。例へぞつこん惚れ抜いて居る男でも、眞實誠を見ぬうちは、滅多に打解けぬが廓の意地。ハテ、思ふ人否と女の罪深く。
若江　アレ、里八さまは、ちよつと云うてぢや事でも、口上ぢやわいなア。
左枝　とんと、外の太鼓さまとは違ふものぢや。
城住　この優法師とは、どうぢや〳〵。

女皆　そりや鼈と、お月様。
里八　三つ骨の吸ひ物とは、どうぢや〳〵。
しな　粋な揚屋に、粋な太鼓さん。
里八　御機嫌直しに、爰でちよつと飲み直し。
女皆　こりや好からう。お銚子〳〵。
禿二　アイ、、、、。
ト銚子、杯持ち出る。
金六　太鼓の里八に押取り廻されて、物が云はれぬ。
しな　サア、一つ上がれいなア。
金六　エヽ、忌々しい。酒なと飲んでこまさう。
里八　サヽ、一つ注げ〳〵。
女皆　里八さまのお庇で、嬉しや、御機嫌が直つたわいなア。なんでも、えら勧めの、えら飲みぢや。
ト此うち、奥より常武、衣裳羽織、大盡の形にて、大杯を持ち、出かけ居て
常武　身共もちよつと相をせうか。
金六　これは常武さま、失禮の段、御容赦下されい。
常武　ハテ、廓の遊びに慇懃な。
里八　此奴は又、餘つぽど砕けて居る粋大盡様。
常武　馬加常武と云ふ鎌倉武士、この下河原へ新廓の島原

を引いたとあるゆゑ、一見せうと存じて。

里八　今の流行り物、この紅梅屋を信仰して、お出でなされましたか。

常武　如何にも。今朝からの大酒、奥の間で嫌はれる太夫が側にも居られず、又この杯の遣り所がないから、思はずこれへ。ナニ、里八とやら、幸ひ持ち合した杯。其方にさゝうか。

ト杯をさす。

里八　さらば頂戴、鏡立てとは、古い奴の。

常武　ハヽヽ、金六どの、見さつしやれ、太鼓持ちの里八、藝者に似合ぬ好い骨柄。

金六　その筈でござる。この紅梅屋は里見義實が遊び茶屋。それへ入込む里八なれば、由緒ある者に見えます。

常武　ムウ、この下河原へ朱雀野より、廓を引いて新島原と名付けし開發は、この家の一客、里見義實が思ひ附きと聞いたが、さうか〳〵。

里八　左樣でござりまする。朱雀野は町端れ、便利が惡うござりますゆゑ、この所に引いたは、里見の義さまの御趣向でござりますさうな。

常武　管領山内へ預けとなりし里見義實、安房の國主、岩木素藤を始め、成れ〳〵を饗應の爲、この間より居續け。多くの者を集むるは、里見家に身寄りの者を集めん計略。

里八　エヽ。

常武　イヤサ、陽氣を集むるは廓の習ひ。元この島を取立てし、傾城町の故事來歷が、聞きたい〳〵。

金六　成る程、こりやようござりませう。

女皆　サヽ、所望ぢや〳〵。

里八　サア〳〵、お望みならば、なんぢや知らぬが、出經目に申し上げませう。ちよつとなんぞの拍子を。

女皆　合點ぢやわいなア。

トこれより、鼓入りのぎつてうになる。里八、咳拂ひして

里八　抑々廓を開きしは、萬里の小路や冷泉の、元は武將の東山、御酒宴の地であつたれど、今は廓となり振りも粹で丸めた戀の道。

常武　出口に柳を植ゑたるは。

里八　お客を招く合ひ詞、諸事は柳に遣り羽子の、正月買ふは客の派手。

金六　六條三筋の揚屋をば、爰に移した來歷は。

里八　通ひ廓の勝手より、朱雀の野邊を眞直ぐに、建て續けたる揚屋町。
左枝　出口にかけたる板橋を、衣紋橋と名けしは。
里八　お江戸で云はば衣紋坂、入り來るお客の粧ひや、衣紋繕らふ所にて、衣紋橋とは呼び習ふ。
君江　さらば鐘と云ふ事は。
里八　曉告ぐる後朝に、送つてもらふ客達の、名殘を惜しむ隔て垣。
金六　まだ問はう〳〵、まだ問はう。揚屋の嬶を花車と云ふ、これにも謂れのある事か。
城住　そこで我れらも左平次に、ちよつと申して見やうなら、花車の文字は、花車、諸事華やかに杯の、廻り來る〳〵車坂、廻りのよいのが花車の役。
すゑ　貸し編笠は何の爲。
しな　夜毎に忍ぶ通ひ路に、人目を關の編笠や、色に心を持つ文字。
左枝　松の位と云ふ事は。
里八　秦の始皇の狩の時、雨を凌ぎし松の蔭、太夫と位を賜はりし、餘風を今に色里の、太夫を松の位とて、江口神崎室の津や、淺妻船の淺からぬ、契り千歳の色變へぬ。
君江　啼くは妻戀ふ夜の鹿、鹿の戀路と夕暮れに
左枝　引舟樣は太夫主を、引くや堤の繩手綱。
しな　藝子の音締めは糸に依る。
すゑ　戀を取持つ仲居役。
城住　太鼓は滅多に鳴り渡る、黃金の威光山吹の、花を散らすは大々盡、紙花ならば私しに。
金六　さつても面の厚皮な、局格子に端女郎。
しな　禿が文の取り造りも、また新造の舟下ろし、紋日、日柄もそれ〳〵に。
君江　數へて造り手のつゝど聲。
皆々　まだも座敷の掛引きに。
常武　思ふお敵を取込んで、酒のひら強ひ皆殺し。
金六　その紙花は身共が買ふ。
ト刀に手をかける。里八ちよつと留めて
里八　旦那、くわつ〳〵と有り難い。露を打つとはこの事か。
常武　オヽ、飲めや唄へや色酒に。
ト大杯に酒注ぐ。
皆々　これはけうとい大酒ぢや。
里八　そこで、ぐつと一息に。

ト酒を飲み干し
飲んだ所は喜見城。

常武　その色里の里八は、正しく里見の。

金六　慥かにそれと。

トかゝるを、こなしあつて

里八　一目千軒島原へ、通ひ來て見よかし。

皆々　しのえやつとさア、そつこでせい。

ト踊り地になる。皆々踊るゆゑ、金六、常武も據なく踊る。この拍子に煽て上げ、里八城住、女形皆々踊り舞うて奥へ入る。後に、常武金六殘る。合ひ方。

金六　常武さま。

常武　馬鹿者となつて様子を試せば、身共が推量に違はず、彼奴等は正しく里見家の浪人者。この程爰へ廓を開きしを幸ひ、岩木素藤どのをもてなすとあつて、義實は當家に居續け。

金六　某は又、主人素藤公の下知を請け、里見の家再興を妨げんと存ずるところ、犬塚信乃めは、滸我の館にて犬飼現八と組み合ひ、坂東河原へ落ち込んで、彼奴等も水を喰うてくたばつたは定。

常武　また彼れらが友たる犬川額藏と云ふ奴は、此方の味方に引入れんと、科をゆるめ、某が恩を見せ、取込みあれば氣遣ひなし。

金六　殊に義實は、花橘と云ふ傾城に自惚れ、この廓通ひ。即ち奥の間にて熟睡の體なれば、放埓を云ひ立て、滸我の姫君との縁邊も相止めば、義實は一生部屋住み。

常武　それにつき、結納の印に取交すべき、滸我の寶刀一文字は、先達て竈の三貫平と申す者に奪ひ取らせ、今に行くへは知れぬ筈。

金六　五千丁の朱印は、占部の季六が手より盗み取り、こなた様に預けあるが、この頃詮議のあるは定。御油斷下さるなとある、季六よりの密書、御覧下され。

ト懐より狀を出して、常武に渡す。讀んで

常武　ナニサマ、季六より心を配りしこの書面、慥かに落手いたしたと申して置きやれ。義實が心をかける花橘めは、身共が請け出し、鼻明かせば心亂るゝは定のもの。

金常　その上今宵、素藤公を饗應につき、舞子朝毛野とやらんを呼び寄せ、男舞ひの一曲を催すとやら。その酒宴に紛れて、義實をしまひつくる、素藤の計略。

常武　コレ、萬事は奥の一間で。

金六　左様ならば、常武さま。

常武　金六、お來やれ。

ト唄になり、奥へ連れ立ち入る。直ぐに和らかな合ひ方になつて、奥より雛路、振袖新造の形にて出て來て

雛路　アイ〳〵、ちつとの間、爰で氣欝を晴らしませうわいなア。

義實　お竹〳〵、お竹はどこに居るぞ。

ト奥より義實、衣裳、羽織、殿の拵らへにて

ト少し酒に醉うたるこなしにて出で、雛路を見て

ヤア、そこに居やるは、雛路ぢやないか。

雛路　アイ、義さま、きつう酒に醉はしやんしたなア。

義實　醉うた〳〵。奥座敷で客人のひら強ひに、盛て〳〵盛り殺される程に、醉はされたわいなう。

雛路　ちとお脊中なと、擦つて上げませうかえ。

義家　こりやア忝ない。今宵は朝毛野がおぢやつたら、男舞ひを見せるが、その間、しつぽりと、おれを擦つてくれる氣はないか。コレ、どうぢやいの〳〵。

ト手を取る。

雛路　なにを。そんな事云うて、花橘さまと、また口舌の種にせうと思うて。

義實　でも氣の惡い。女子と云ふものは、どうして其やうに根性が廻るものか。花橘は常武が身請けをするとやら、その面當てに、おりやわが身に乘替へた程に、おれが云ふ事を、よう聞き居れやい。

ト手を取り引留める。

雛路　そりやあなた、ほんまかえ。

義實　侍ひ冥加、刀にかけても。

雛路　そんなら、眞實わたしをば。

義實　エヽ、可愛い奴の。

ト引寄せて、ひつたり抱きつく。この時、奥より、千秋萬歳の謠になり、お竹、伊達なる仲居、三方に杯を載せ、花橘、傾城にて、お玉、遣り手の拵らへにて、長柄の銚子を持ち出る。義實、雛路、恟りして退かうとする。

たけ　アヽコレ申し、苦しうござりませぬ、マア、お下にお出で下されませう。

義實　ヤア、其方は太夫、仲居のお竹。こりやどうぢや。

花橘　このお竹どのは、あなたの御家來、犬山道節さまの御家來にて、十條力二郎どのゝお內儀。

たけ　又この雛路さまと申すは、未だお顏を御存じなけれども、兼ねて云ひ號けある許我家の姬君、吾の君さまで

ござりまする。
義實　ヤア、すりや、某と云ひ號けある、吾の君であつたか。
たけ　既に御婚姻もあるべきところ、結納の印に取交すべき、桐一文字の鎧通し、又は五千丁の御朱印紛失につき只今まで延引、斯樣にお逢はせ申しまするも、姫君には戀病ひ。御病氣の重りますゆゑ、御臺所の九十九の前さまより密かのお賴み、花橘どのにも申し込み、斯くの仕合せ。
義實　でも肝心の、結納に用ゆる二品のうち、桐一文字は犬田小文吾が忠義に依つて、蟹崎照文より手に入れたれど、今一品の五千丁の御朱印がなければ。
たけ　サア、その御朱印は、犬川莊助さまが、手段を以て追ツつけ、奪ひ返して差上げられませう。村雨の劍は、主人道節さまが預かりあれば、お氣遣ひあられますな。
雛路　ほんに思ひ掛けなう自らが、義實さまのお目にかゝるも、花橘どのや、こなた衆の世話。忝なうござるぞや。
たけ　ナニお禮に及びます事。お姫樣には御本望。花橘さま始め、我れ〳〵の喜び。イザこの上は、お內祝言の學びを。

ト恥かしがる雛路に、杯取上げさす。お玉、銚子取上げ
たま　お姫樣、さぞお嬉しうござりませう。
ト杯濟んで、義實にさす。
義實　ハテ、それでも太夫。
ト花橘に斟酌のこなし。
花橘　ハテ、大事ござりませぬ。姫君樣、今宵はしつぽり殿樣と。
たま　その侍女郎はこのお玉。
花橘　サア〳〵、ちよつと、お學びを。
ト兩人、杯濟む。
義實　イヤ又、太夫は粹なものぢやぞ。
たけ　そりや、花橘さま、なんのぬかりがござんせうぞいなア。
花橘　サア、あの座敷に床も取つてござんす。サア、お二人とも、ござんせいなア。
義實　ぢやと云うて、どうやら改まつたやうで。
雛路　自らも恥かしいわいの。
たけ　ハテ、斟酌せずと、マア、お越し遊ばしませ。

花橘　サア、お出でなされませいなア。

ト鎌になる。この四人、上手の一間へ入る。あと合ひ方。お竹、こなしあつて

たけ　姫君様が日頃のお望み叶うたれば、一つの安堵。それにつけても、今奥で、常武どのゝ懐より、落ちたるこの密書。

ト状を出し、開き見て

ナニ／＼、「急ぎ申し入れ候ふ、兼ねて盗み取りお渡し申し置きし五千丁の朱印、この節詮議嚴しく、心元なく候ふ間、隨分御油斷あるまじく候ふ以上、馬加常武さまへ占部季六より」さてこそ朱印の在所は、常武が懐。こりや好い物が手に入つたわえ。斯う云ふ證據の手に入るからは、荘助さまに手渡しして。

ト奥へ行かうとする。

イヤ／＼、荘助さまは、あの常武に恩義を受けたお身なれば、あらはになつては詮ない事。それよりは、わしが直に問ひ落したがよからうか。ハテ、どうしたらよからうなア。

ト思案のこなし。この時奥にて

常武　イヤモウ、身共は歸らうわえ。

皆々　マア／＼、よろしうござりまする。

ト　お竹キッとなつて

たけ　あの聲は、慥かに常武。ムゥ。ソレ。

ト門口へ出て、ちよつと小隠れする。踊り地になつて奥より、常武、酒に醉うたるこなしにて、家來一人提灯持ち、城住、お品、お末、お粂、送り出て

女皆　そんならどうでも、お歸りでござりまするか。

城住　旦那、いから醉うてござる様子。いつそお屋敷まで送りませうかな。

常武　イヤ／＼、氣遣ひはない。急用事が出來たから心が急く。送るに及ばぬ。

城住　左様なら參りませぬ。コレ奴さん、氣をお附けなされや。こんな時は奴も目明ぢやぞえ。

しな　なにを。自分が目が見えるかなんぞのやうに。

しげ　申し、こりやどうか、降りさうな空になりましたぞえ。

常武　イヤ、座敷では女郎に振られ、歸りには雨に降られるも覺悟の前ぢや。ハ、、、。サ、、歸らう／＼。

城住　左様なら、明晩お待ち申して居ります。

皆々　ようお越しなされました。

トしかじ〳〵あつて、奴、提灯に灯ともし、渡して奥へ皆々入る。ゴンと本釣り鐘。

常武　ありや、もう入相か。サ、家來、提灯やれ。

家來　ネイ〳〵。

ト花道へ行きかける。お竹、ツカ〳〵と出て

たけ　ア、コレ、常武さま、ちよつとお待ちなされて下さりませ。

常武　身を呼びかけたは誰れぢや。何者ぢや。

たけ　イヤ、仲居の竹でござりますわいな。

常武　オ、竹か。身を呼びかけたは、なんの用ぢや。

たけ　ハイ、ちとあなたに折入つて、お話し申したい事がござりますで。

常武　アノ、身共に用とは何ぢや。夜が更ける。早く云へ。

たけ　モシ、もの〳〵しう呼びかけまして、別の事でもござりませぬ。近頃藪から棒な事ながら、許我のお姫様に無うて叶はぬ五千丁の御朱印とやら、あなたが御所持なされますかえ。

常武　コリヤ〳〵、それは何を申す。左樣な物は、身共は知らぬ。殊に又、仲居のその身が、五千丁とやら一萬丁とやら朱印の詮議。そりやなんぢや。左樣な事は身は覺えぬ。

たけ　サ、左樣でもござりませうが、ちつとその方に頼まれましたで、その朱印がなければならぬ事がござりまする。依つて、どうぞ、あなたが御所持ならば。

常武　エ、、べり〳〵と、云はして置けば方途のない。この常武は許我の老臣、樣々の云ひかけひろぐと、女とて容赦はない。眞二つぢやぞ。

たけ　イヤ、覺えないとは云へますまい。筋ない事は云ひ出しませぬ。然も證據があつても御存じはござりませぬか。

常武　オ、、面白い、證據見よう、サア爰へ出せ、キリキリ出せ。

たけ　即ち證據はこの密書。

ト懐より状を出して

馬加常武さま、占部季六より。

常武　ヤア。

トぎつくりする。お竹キツとなつて

たけ　なんと覺えがござんせうが。

常武　ナニサマ、聞いたやうな名で、萬更覺えのない事もあるまいが、何を云つても老人の事なれば、物忘れして

ならぬ。その狀見しやれ。家來、提灯見せい。アヽ年が寄れば眼が霞んでならぬ。

ト お竹、提灯と狀を差出し

たけ　サア、とつくりと見やしやんせ。

常武　オヽ、合點々々。

ト 提灯を畳み、讀む顔して燒き捨てる。お竹、惘りして

たけ　ヤヽヽヽ、こりや大切な證據の狀を、お前は燒き捨てさしやんしたなア。

常武　コリヤお竹、證據を見せぬか。ないか。なんのあらう。狀は燒けてしまうたぞよ。コーヤ、いらざる女の詮議立て、取措き居らう。ドリヤ歸らうか。

ト 立ち上がるを、お竹、鐺を取つて引留め

たけ　イヤ、待たしやんせ。例へ證據の狀は燒き捨てゝも盗み隱すはこなたの懷。改めぬ其うちは、一寸も動かさぬ。

常武　成る程、尤もだ。サア、立寄つて改めい。併し、常武が懷に、その朱印のない時は、其まゝでは濟まぬぞよ。

たけ　そりやどうなりと、存分になりませう。

常武　オヽ、出かす〳〵。サア、近う寄つて、改めい〳〵

たけ　何にもせよ、こなたの懷に無うて叶はぬ。

ト いろ〳〵懷を探す。常武、自由になつて居る。

ヤア〳〵、こりや、御朱印は。

常武　どうぢや、あつたか。ある筈ではないか。

たけ　ハテ、面妖な。正しく所持と思ひの外、こりやどうぢや。

常武　こりやどうぢやとは、どうぢや、あつたか、ないぞよ。

ト お竹當惑するを、グツと引きつけ

うぬ、一度ならず、二度ならず、身共に向つて慮外の段段。懷中にない時は、存分にならうと云つたぞよ。うぬ等がやうな奴は、ぶち放すは安けれど、刀の穢れだ。その代りには、カウ〳〵〳〵。

ト いろ〳〵胸打ちにして、突き放し

コリヤ、詮議せぬか。吟味して見ぬか。コリヤ、うぬが欲しがる朱印はな、素藤どのへ手渡しして、合ひ紋代りのこの鑑札は、爰にあるワ。

ト 襟の合せより、鑑札を出して見せ

里見は元より、滸我の家も亡ぼして、我れ〳〵が分取り

するのぢや。どうで義貲は、首でも釣つてくたばるは定。
それに忠義を盡す大馬鹿め。
ト蹴飛ばして、につたり笑ひ
サ、。歸らう。家來、提灯やれ。
ト常武、思ひ入れあつて、家來を連れ、向うへ入る。
奥より莊助、着流し大小にて、ツカ／＼と出て、お竹
を見て、引起し、活を入れて
莊助　コレお竹どの、コレ、氣を慥に持たつしやれ／＼。
たけ　ヤア、莊助さまか。遲かつたわいなア／＼。
莊助　遲かつたとは、そりや何が。
たけ　サア、いま常武の歸りを待ち請け、彼の一品の詮議をすれば、證據の狀を燒き捨て、その上、この通りに打ち打擲。
莊助　ヤア／＼、すりや、常武が證據の密書を燒き捨てしとな。兼ねて某も、正しく彼奴と思ひながら、今までに手ざしをせぬは、假にも恩義を請けしゆゑと、見合せ居たが殘念。
たけ　その上、御朱印は素藤どのに手に渡し、合ひ紋代りの鑑札は、常武が手に持つて居ますわいの。
莊助　ムウ、この上は、常武が詮議は身共が行く。こなたは爰に構はずと。
ト囁く。お竹、恟りして
たけ　ムウ。そんなら、わたしは朝毛野さまを。
莊助　ちつとも早く。
たけ　合點でござんす、さうぢや。
ト ついと奥へ入る。莊助、刀の寢刃を合し
莊助　すりや、御朱印は疾よりも、素藤の手に渡せしとな。その合ひ紋は所持の鑑札。彼奴を手に掛け、鑑札さへ手に入れば、素藤を詮議の種。彼奴の歸りは下河原。オ、さうぢや。
ト尻凛と搦げ、向うへ凛々しく走り入る。奥にて手の鳴る音、アイ……と長返事する。奥より、金六、酒に醉うたるこなしにて
金六　ア、、怪しからず醉うた／＼。イヤ、もういけぬいけぬ。
ト云ひながら、ヒョロ／＼して出て
仲居は居らぬか。仲居ども／＼。水一杯くれいよ。コリヤ、誰れも居らぬかい。
ト云ひながら、コロリと寢る。橋がゝりよりおば内、飛脚の形、絆天股引胸當にて、首に狀箱掛け出て、門

おば　口の掛け行燈を見て
紅梅屋、爰だ〳〵。
ト云ひながら、内へ入つて。
イヤ、許しやれ。ちと物が尋ねたい。頼まうぞよ〳〵。
何奴も返事をせない。ハテ、野方途な揚屋だな。
ト金六に蹴躓き、よく〳〵見て
ヤア、これは阪田の金六どの。幸ひ、
ト側に寄り、起さうとして鯉口をチャンと鳴らす。金六、愕りして寢返りする。
こりや、怪しからぬお人だ。
ト足を持つて引摺る。やう〳〵金六起きて、立ち上がる。
阪田金六どの。
ト大音にて云ふ、金六、顏にて表へ出よとする。おば内、表へ出る。父よ母よの唄になる。金六ゲップしながら、花道へ出て
金六　在村の家來おば内、慌しい。何事ぢや。
おば　岩木素藤さまへ火急の密書。
金六　コリヤ。
おば　アヽ、それもちと、古めかしいぢやござりませぬか

金六　ナニサマ、素藤さまへの密書、慥かに通達いたすであらう。
おば　併し、好い所でお目にかゝりました。
金六　オヽ、幸ひ、其方に申しつけるは、身が預かつたこの五千丁の朱印、持つて居るは、如何にしても危ないもの、おば内、其方は、コレ。
ト囁く。おば内受取つて
おば　すりや、對牛樓の額の中へ。
金六　コリヤ、案内せう。奥へ來い。
ト唄になる。兩人奥へ入る。　チョン〳〵　返し。
右の道具上手へ引く。門口ともに上手へ引き取り、橋がゝり、茶屋格子の續きを引き出す。下手、段々に下河原邊の茶屋の書割り、軒端に掛け行燈灯ともしある。ドン〳〵、人寄せ太鼓になる。道具納まると直ぐにバタ〳〵にて、橋がゝりより、常武の死骸を戸板に乗せ、町人大勢、えらい事した〳〵と拵ぜりふにて出て來る。又四郎、下に羽織、町年寄りの拵らへにて、蹲り居る。後より箱提灯一對持たせ、綱

八、貞八、野袴大小にて檢使の拵らへ、後より五人
組町人、大勢附き出て

又四　コレ〳〵皆の衆、お役人樣がお出でなされた。靜かにさつしやれ。

皆々　ソリヤ、お役人ぢや〳〵。

ト口々に云うて扣へる。綱八、貞八、床几にかゝつて
戸板の死骸改め

綱八　ヤイ〳〵、町人ども、只今見るところ、大疵の五ケ所までも刺したるは、なか〳〵一通りの者の仕業でない。殊にこれは滸我家の組頭、馬加常武と云ふ者。斯樣に殺害に遭ひしは、なんとも以て合點がゆかぬ。

貞八　畢竟これは、廓通ひの爭論より、意趣切りに遭ひしと見ゆる。意趣ある者の覺えはないか。この頃口論など致した者はないか。有やうに申せ。

綱八　當座遁がれに隱し立てして、後日に知れると、キツと曲事を申しつくるぞ。

貞八　サア、眞直ぐに申せ。どうぢや〳〵。

又四　ハイ〳〵、申し上げまするでござります。このお客は當廓の、紅梅屋のお客でござりますで、花橘太夫を千五百兩にて、請出さうとあるところ、外に約束の人がござりまするで、談合がなり憎う、どうでもその事について、意趣でも含んだ事か。それより外に、何も思ひ當りはござりませぬ。

綱八　ムウ、その花橘は里見義實が、馴染を重ねし女郎と聞く。常武とは近しい仲。方々以て合點が參らぬ。ナウ、貞八どの。

貞八　ナニサマ、綱八どのゝお心附き、御尤もにござる。先づその花橘の遣り手か、親方を呼べ。直ぐに尋ねる仔細もある。

兩人　その者を、早く呼べ〳〵。

又四　ハイ〳〵、畏まりました。

ト橋がゝりの方へ行く。

コレ〳〵、花橘の遣り手を、早う呼びにやりや〳〵。

五人　イヤ〳〵、幸ひ今爰へ見に來て居たを、待たして置いた。サア〳〵〳〵、出や〳〵。

ト橋がゝりよりお玉を引立て出る。

又四　オヽ、幸ひぢや。コレ〳〵お玉、今お役人樣がお尋ねなされる事、お答へ申さんならんぞや。承知か〳〵。

たま　ア、滅相な事云うておくれ。この頃、先の遣り手お玉どんは病氣で引いてなり、わたしはほんのこの頃の代

り役。そんな事聞いたとて、ちんぷん漢。堪忍しておくれいなア。

又四　ぢやてゝ、貴様を呼べてゝ、喧ましう云うてござるもの。

たま　イエ〳〵、なんぼう云うてぢやあつても、こちやちよつと聞いたばかりでも癪が發つた。よい藥があるなら下さんせ。どうやら目が舞ひさうな。

　ト腹を抱へて後へ引ッ込む。此うち貞八、綱八は死骸を改め、口書書いて居て

綱八　コリヤ〳〵、町人ども。花橘が遣り手はなぜ來ぬ。早く呼べ〳〵。どうぢや〳〵。

五人　ハイ〳〵、畏まりました。コレ〳〵、お年寄、どうぞ好い思案はないかいの。

皆々　どうぢやぞいの〳〵。

又四　えらい事を思ひ出した。流石は一町の束ねをする年寄りぢや。えらい者ぢやわい。

五人　コレ〳〵、其やうに我が身ばかり譽めずとも、好い思案があるかいなう。

又四　あるとも〳〵。この下河原の山猫、近頃の利き者の朝毛野の、智惠滿々として弁舌爽か。閻魔の廳でも云ひ抜ける代物、殊に紅梅屋では贔屓になつて、毎日嵌り込んで居ると云ふ事。この朝毛野を、代りに頼むはどうぢや。

五人　こりやえらい思ひつきぢや。お年寄り、出かした〳〵。

綱八　どうぢや。花橘が遣り手は未だ參らぬか。早く呼ばぬか。

貞八　どうぢや〳〵。

　ト喧しう云ふ。

又四　ハイ〳〵、只今連れて參りまするでござります。

たま　コレ〳〵、申し、朝毛野さまなら、今爰へ見える筈ぢやわいなア。

又四　ヤア、爰へ來るか。オヽ、幸ひ〳〵、向うから來るは朝毛野ぢやないか。

五人　ほんに、朝毛野ぢや。オヽ、イヽ〳〵。

　ト賑やかなる唄になる。向うより朝毛野、舞子の形、文庫結びにて、後より男一人、衣裳行李を擔げて、紅摺りの提灯を下げ出る。花道にて

皆々　待つて居た〳〵。

朝毛　オヽ、皆様、山からの戻りに聞きましたら、けうとい事が出來ました。定めて御苦勞様でござりませう。

又四　コレ〳〵、朝毛野、挨拶どころぢやない。其方を待つて居たのぢや。お役人の御検使が、花橘の遣り手をお召しなされたが、お玉は愚鈍で臆病者なり、何をお問ひなさらうやら、云ひ違へては濟まぬ事。廓中の頼みぢや程に、一番花橘の遣り手に代つて、受け答へしてたも。キツと恩に着る。これぢや〳〵。

朝毛　おやと云うたとて、斯う云ふ形で、遣り手さまの代りも、あんまりぢやござんせぬか。

又四　サア、遣り手なりと、親方なりと、紅梅屋での事をお尋ねなされるのぢやゆゑ、幸ひわが身が贔屓になる内の事、何事も出鱈目にやつてたも。コレ、年寄りが手を下げて頼むわいの。

朝毛　さうして、あの死骸の側へ行くのかえ。オヽ、嫌やの。

皆々　サア〳〵、そこが頼みぢや〳〵。

綱八　ヤイ〳〵、町人ども、未だ參らぬか。どうぢやい。

又四　ハイ〳〵、只今これへ半分出かけて居ります。……コレ〳〵、頼む〳〵。

朝毛　成る程、其やうに頼ましやんす事。嫌と云ふも、どうやら仔細らしい。云ひ損なうて云うても大事あるまいてんぽの皮、やつて見ようかいなア。

又皆　オヽ、やつてたも〳〵。

綱八　どうぢや、參つたか。早く爰へ連れて參れ。

又四　ハイ〳〵、只今連れて參りますでござります。

ト朝毛野を皆々して無理に頼み、綱八、貞八の前へ突き出し

ハイ〳〵、花橘が遣り手の代り、罷り出でましてござりまする。

ト皆々兩人に向つて辭儀する。朝毛野、舐めた風にてこなしあつて坐る。

綱八　ヤイ、うぬが花橘の遣り手の代りか。用事あつて呼び出すに、何ゆゑ延引いたした。あの茲な横着者め。氣隨者めが。

トきつと云ふ。朝毛野、綱八をヂロリと見て

朝毛　オヽ、あのお方は、頭から目を剝き出して叱らしやんすがな。つい出つけぬお役人の側。あのゝものゝと云ふうちに、急に呼ばれて出た者が、なんで氣隨でござんせう。ナニ、人の太夫さんを一人で廻せば、辨慶遣り手が忙がしいて、口舌のうちを敎へ立て、打物業では叶ふまじと、日に幾度の詫び事やら、夜の身持ちは揚屋茶屋

の吸ひ物同然。ちよつ〳〵と座敷へ出る度に、助けの押への愛想のと、一杯でも飲む酒に、ふら〳〵限りの行き倒れ。朝から晩まで緋の袴、花かや繻子の巾着も、中は秋野の、ちん〳〵ちろりと鳴く松蟲に、鍵の穴から天井窺けば、ほの〴〵明けの寐ぼれ顔、よね様達の身仕舞ひから、風呂の湯の沸くまでに、手洗水の髮洗ひの、鍋よ杓子よ臼よ杵よと、正月しまへで如月の、桃の花見に曲水の、巡るは紋日の日柄の約束。釋迦のうぶ釋、菖蒲に節句、祭の渡る折を見て、括り付けた文月七日。煩惱盆のと月見しまへば、また後の月見も、豆をぱつちり食はすは此方の上手下手。猪の子の餅搗きするやうな、隱居様でもしめからみ、上を突いての霜月のと、顔見世しまへば乙子の朔日。今日二日の拂ひ日なりや、腹の立つ脊中に腹、商賣には替へられず、皮切り堪へて出たものを、さらは云うてくれぬがよい、廓は諸國の人込みゆゑ、常住、切つたはつたのと、これ程の喧嘩はお茶の子お茶の子お茶の子で、ござんすで〳〵。ござんすわいなア。オ、仰山。

綱八　ヤイ〳〵、默れ〳〵。うぬ、つべこべと好く燥いだ顚だなア。うぬが身の上話しは聞かぬ。この常武が千五百兩で、花橘を請け出す斷行。傾城は賣り物、値段極まる上からは、里見義實が妨げ云うても叶はぬ筈だ。然るに、更や角申せしは、うぬらがもがりと、相聞える。殺して人も知らぬと云ふ事はあるまい。眞直ぐに白狀いたせ。

貞八　但し又、義實が方より。文の來たもの金子など受け庇ひ立ていたして後日に相知れると、廓中の難儀に相なる。また有やうに申せば、却つて御褒美下さるゝ。義實が切つたに相違ないか、其方達に科はかゝらぬ、有體に申し上げい。どうぢや〳〵。

朝毛　成る程、お前さん方の仰しやる通り、傾城は賣り物とは云ふものゝ、神佛の奉加と同じ事で、金出しながら拜まずば、恐らく世界に傾城ばつかり。買うてくれるが嬉しいとて、親がゝりやお主持ちの、戀路の闇の一寸先も、見えぬを端から見て取つて、買ひ手のお身も廢らぬやう、女郎ものぼさず下ろさぬやう、楫を取るのが遣り手の役。大事にかける證據には、世間に心中が十あれば、廓に、一つはあるかなし。常武さまはお大盡、お金に不足はあるまいが、御主人様のお心持お達しにより、傾城に誠はない。人を惑はし騙すのも、落つるところは、

廓の難儀。爰に意氣地を立てるのが、色里の嗜なみ事。身請けの談合破れたも、常武さまの、御身の上を、大事大事と思ふゆゑでござんせう。道で切られさんす事ぢやら、そこまでは存じませぬ。定めしあのお方も死にたうもあるまいし、隨分逃げても、見さんしたであらうし、そこに如才もあるまいが、身の取廻しが惡うて殺されさしやんしたか、どの道、常武さまの不調法、死ぬるはその身の損と云ふもの。いとほしいとは云ひながら、みんな前生からの定まり事。因果な事ぢやと思し召し、大概な事なら、今度の所は、料簡して上げまして下さんせ。その代りには、この後はわたしがキッと云ひつけて此やうな事はさしませぬ程に、もう／＼、どうぞ堪忍して、濟まして上げておくれなされ。エヽ、コレイナア。皆さんちやつと爰へ來て謝まらしやんせんかいナア。

綱八　もうよい／＼、てもよくしやべる女。どうで一時に詮議もなるまい。死骸を片づけ後日の詮議。ソレ町人ども、戸板のまゝ代官所まで片附けさせい。

皆々　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。

ト町人皆々戸板を持つて、橋がゝりへ引き込む。

貞八　年寄り又四郎とやら、近う參れ。

又四　ハイ／＼。

貞八　我れらが渡世なれば、傾城どもに構ひはない。併し事濟むまでは客の名所、一々に書き留め置けい。キッと申し渡したぞ。

綱八　ヤイ、女め、重ねての詮議には、水をくれる程に、用心して待つて居らうぞ。

朝毛　オヽなめ。金くれる舞子に水くれるとは、冬編笠夏頭巾、あんまりなかづき違ひ、さうは云うてはくれぬがよい。

綱八　何を馬鹿な。時に貞八どの、紅梅屋へ參り、御主人素藤公を見廻り申さうか。

貞八　ナニサマ、これより直ぐに御同道申さう。

綱八　家來、案内いたせ。

家來　ハア、、、。

ト唄になる。綱八、貞八は家來を連れて上手へ入る。後に又四郎、町人皆々お玉も朝毛野をあふぎ立て

皆々　ヨウ／＼、朝毛野大明神さま／＼。

又四　其方がおぢやつたばかりで、先づこの難儀は遁がれたと云ふもの。

たま　朝毛野さまは紅梅屋で、今夜男舞ひの狂言事。いら

たての呼び遣ひ。氣の急く中に今ので、わたしも助かつたわいなア。

又四　オヽ、さうであらう〳〵。御苦勞々々々。こちらも落ちついた。

皆々　そんなら爰から別れませうや。

又四　サヽ、皆ござれ〳〵。

ト捨ぜりふにて、下手へ行かうとする。

朝毛　ア、コレ、まだ大事の用があるわいなア。

又四　なんぢや、大事の用とは。

皆々　なんぢやの〳〵。

朝毛　久しいものぢやが、そんならさう。

又四　エヽ、何を云ふぞいなう。ハヽヽヽヽ。

皆々　サヽ、ござれ〳〵。

ト下手へ皆々連れ立ち入る。

朝毛　サア、わたしも紅梅屋へ行かうわいなア。

たま　サア、お出でなされいなア。

ト唄になる。土手へ行きかける。　チョン〳〵、返し。

道具、元の紅梅屋に戻る。

ト朝毛野、男に葛籠を持たせて、お玉を連れ立ち、内へ入る。

朝毛　コレ、お玉どん、ちつとの間、爰に待つて居る程に來ましたと云ふ事、ちよつと知らして置いて下さんせい。

たま　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。コレ、忠八どん、その衣裳行李も、奥へ持つて來て下さんせ。

男　ハイ〳〵、畏まりました。

ト　お玉、男を連れて奥へ入る。朝毛野、莨盆を扣へて莨のみ居る。と華やかなる誂らへの唄になる。向うより、小文吾、五分月代、着付け羽織、大小にて、御家人の形。お辻、仲居の拵らへにて、ふじやと書いたるぶら提灯を持ち、彌八、歌三、太鼓持ちにて送つて出て、花道にて立ちどまつて

つぢ　モシ〳〵、お足元がお危なうござりますぞえ。

小文　なにサ〳〵、また上方は賑やかな中にも、風流があつて妙だよ。

彌八　イヤ、旦那のお心には又嵌る筈、京の女郎に江戸の張りと、昔から云ふ奴を、この京ばつかりで旨い物の選り食ひ。

歌三　この下河原へ島原を引寄せて、姫買ひと太夫を相手

に、酒の座敷は山猫遊び。川東の藝子衆まで一つに寄せ

つぢ　遊び所は東山、橋の寮から祇園清水、蒲團着て寢たる山の景色。

小文　イカサマ、この樂しみは、餘所外には出けぬ事サ。

つぢ　左やうでござります。モシ、彼れこれ云ふ間に歸りました。

小文　オヽ、もう歸つたか。今夜はなんでも朝毛野の男舞ひを、見物したいものぢやて。

彌八　旦那、朝毛野四郎高綱とは、古うござりまするかな

小文　イヤモウ、てまへ達の地口を聞くも、朝毛野罪科ぢや。ハヽヽヽ。

ト此やうな事云ひながら、本舞臺へ來る。

つぢ　サア〱、役目が濟んだら、ちやつ〱と去なしやんせ。

彌歌　左やうなら旦那、お有り難う。

ト捨ぜりふにて兩人、橋がゝりへ入る。小文吾、お辻内へ入つて

小文　サア〱、只今歸つたぞや〱。

つぢ　オヽ、朝毛野どの、爰に居やしやんすかいなア。

朝毛　オヽ、お辻どん、文さまのお供して、いま戻らしやんしたかいなア。

小文　オヽ、朝毛野か。てまへ、もう戻つて居るか。エヽむごいぞよ〱。

ト云ひながら上手へ坐り、莨盆扣へる。

朝毛　コレ申し、お前は氣の惡い。何處へ行て居やしやんしたぞいなア。

小文　コリヤ、氣の惡いとはてまへの事よ。フトこの間橋の寮で、近附きになつてから、贔屓に思つて、この紅梅屋へ來たも、女郎買ひや花魁を買つて見るも、ほんの附合ひ。てまへさへ來てくれりや、それが一番面白いと乘り地が來て、今日は表へ連れ立つたところが、身共を外して、よく先へ歸つたな。そこで仕方がないから、祇園のあたりを流して、揚弓をやつたり、詰まらない洒落ばかりで、やう〱と今戻つた。これと云ふも、てまへの顏が見たさの事だ。

つぢ　それから藤屋で、今まで遊んでござつたのぢやわいなア。

朝毛　さうでござんしたかえ。わしや又、今夜爰の内に、この間からの約束の、狂言事もせねばならずと、心が急いたに依つてぢやわいなア。

つぢ　成る程、それで先へ去なしまんしたのであらうとは文さまも推量はしてゞござんした。定めて拵らへで忙がしからう。ちよつとわたしや奥へ行て見て來ませう。

朝毛　ア丶コレ丶お辻さん。もし奥へ行くなら。

トちよつと囁く。

つぢ　アイ〱、里八どのを後で呼ぶのかえ。

朝毛　頼みぢや程に、わしぢやと云うて。

つぢ　アイ〱、合點でござんす。

ト奥へ入る。あと和らかな合ひ方。

小文　なんと朝毛野。先刻にも云ふ通り、おれが思ひを叶へてくれる氣はないか。

朝毛　そりや誠に、御深切は嬉しいけれど。

小文　間夫があると云ふも、昔から在來りのやつだな。

朝毛　イ丶エ、さうぢやござんせぬ。全體わたしらは、傾城や伯人と違うて。

小文　オッと皆まで云ふまい。山猫とか云ふ者は、客を取らぬ者ぢやとは、話しには聞いて居れど、そこは一番打解けて。

ト朝毛野に寄り添ふを、振り拂うて

朝毛　エ丶モウ、いろ〱の事を云はしやんすわいなア。

小文　いろ〱の事ではない、色とばかり云はしてくれりやよいのサ。どうぞ靡いてもらひたい。

ト抱きつくを朝毛野、顔を背けて

朝毛　エ丶、つんとわたしや、そんな事は否でござんす。

小文　てまへは否でも、此方が好きぢや。例へてまへが猫でも犬でも。

朝毛　エ丶、なんとえ。

小文　サア丶ウンとさへ云うてくれりやよい。マアちつと

トしなだれかゝる。その手をキッと押へて

朝毛　エ丶コレ丶アタしつこい。

トその手をグッと捻ぢ上げる。小文吾、悄りして

小文　アイタ丶丶丶丶。ハテ、女に似合はぬ大力。

トこれにて朝毛野も悄りして、ちやつと手を退け

朝毛　エ丶、あばおれしなさんないなア。

ト和らかに云ふ。小文吾、思ひ入れあつて

小文　梅柳さぞ男かな女かな。

朝毛　ニ丶。

小文　イヤサ、大切な所へ手をやつたものだから、ありきりの力を出したと見ゆる。ハ丶丶丶丶。

トこなしあり、朝毛野、氣を替へて、小文吾の手を取

り

朝毛　サアござんせ。お前の心に任すわいなア。

小文　ヤア。

朝毛　でも、むづかしい顔をして、今云はしやんしたは、コレ、嘘かいなく。

小文　嘘ではなけねど、とてもの心中。

ト懐中へ手を入れるを、ちよつと振り拂うて

朝毛　こりや何をさしやんすえ。

小文　守の中には定めて玉。

朝毛　エ、。

小文　サア、玉の肌へ手を入れて。

トまた改めにかゝるを、キッと引廻して

朝毛　否でござんす。疑ひ深い惡性男、一夜流れの女でも、初めのうちは振るのが慣ひ。

小文　媒子は情はないと云ふ、書物はよもやあるまいがなト朝毛野、思ひ入れ、この時。金六、窺うて居る。朝毛野、笄を拔いて小文吾へ差出し

朝毛　コレ、お前への返事は、この笄。

ト小文吾見て

小文　こりやコレ桃の花を打つたる笄。しかも毛彫りに一首の和歌。

朝毛　「分け入りし栞絶えたる麓路を流れも出でよ谷川の桃」。そんならこれを、身共へ返事。

小文　サア、色よい返事も後までに。

朝毛　奥の離れで、待つて居るぞや。

ト金六拔刀にて

小文　小文吾、覺悟。

金六　トかゝるを、立廻りにてキッと引きつけ

小文　この客人は。

朝毛　岩木の家來衆。

金六　阪田の金六。

ト云ひながら又かゝるを押へて

小文　ア、醉うたなく。女郎に振られて

朝毛　癇癪酒の門違へ。

小文　すつ刄拔きとは、ても、惡い酒なア。

トぽんと投げて立ち上がる。騷ぎ唄になり、小文吾、矢張り酒に醉うたるこなしにて、奥へ入る。金六、はうばうながら起きて、うぬと追ひかけ、奥へ入る。朝毛野、後を見て

朝毛　合點のゆかぬ文さまの口說き方。それにつけても里八さんが、この間から度々屆けて下けて下さんす文の返事は、どうしたものであらうなア。

ト思案のこなし「行く末は誰が肌ふれん」と隱れんぼの唄になり、奧より里八、羽織を少し脫ぎかけ、千鳥足にて、ひよろつきながら出て

里八　そこに居るは誰れぢや。何者ぢや。

朝毛　ヤア、里八さま、お前に逢ひたかつたわいなア。

里八　さては我れらが戀人、朝毛野さまか。

朝毛　お前は又、酒を過して居やしやんすな。

里八　仰せの通り奧座敷で、田舍りやんこを相手で、めれめれん。

朝毛　コレ、それはさうと、この間からお前のお世話で、送らしやんした義さまの文の事、いよ／＼ありや、ほんまかいなア。

里八　ほんまかいなアとは、どうしたものぢや。あれ程に度々文の來る事、何となりと返事を聞かにや、我れらの身の上にかゝはる事ぢや。

朝毛　サア、わたしもさう思ふゆゑに、今夜はその返事をお前からしてもらはうと思うて。

里八　それで我れらをお呼び出しか。それは格別、いま奧で遣り手の玉の話しには、常武さんが殺されたを、下河原でお前の云ひ譯。役人衆を相手に云ひ開き。けうとい者であつたとの事。義さまもひどいお喜びであつたぞえ。

朝毛　サア、あんまり早急な事で、どう云うてよからうと案じながら、花橘さまとは深い仲の、義さまの事なり、常武さまの殺されさやんしたも、どう疑ひがかゝらうやらと思うたゆゑ、何か口から出るまゝ、云ひ紛らして置いたわいなア。

里八　イヤモ、近年のえら手柄。して、義さまの文の返事はえ。

朝毛　サア、その返事は。

里八　その返事は。

朝毛　わたしのやうな者を、それ程までに思うて下さんすお志し。

里八　思うて下さんす志し。

朝毛　わたしも又有やうは、疾から惚れて居る事なり。

里八　疾から惚れて居る事なり。

朝毛　丁度逢うたり叶うたり。

里八　丁度逢うたり叶うたり。

朝毛　此方から願うても。
里八　お前の方から願うても。
朝毛　ウンおやわいなと云ひたいが、否でござんす。
里八　エヽ。
朝毛　ありや、義さまおやござんすまいがな。
里八　ア、滅相な。
朝毛　イヤ、云はんすな。文の名宛は、朝毛野へ里よりと書いたのは、里見の里でなうて、里八さん、お前の文字であらうがな。
里見　そんなら、それを。
朝毛　お前はコレ、藝者さんに似合はぬ、そのてん違へで頷かし、この朝毛野を落さうとは、ハテ、味をやらしやんすなア。
里八　アヽ、しもた。
　ト頭まり羽織をかぶる。
朝毛　コレ、人はそれでも乗らうか知らねど、金平女と名に打つた、朝毛野ばかりは、そんなで行くのおやござんせぬわいなア。
　ト莨盆引寄せてのむ。里八、肩を入れて、しゃつべらして畏まつて
里八　ハ、ア、誤まつたり〳〵。我れに一時の煩悩起り、ても美しいと思ふにつけ、あゝ云ふ女を手に入れたらと思ふ矢先に義さまのお話し。あの朝毛野は男嫌ひ、わしが口說くは易けれど、あゝ云ふ張りの強い女子、大名客の衿に付き、轉んだと云はれてはなどと、ピンと刎ねるは定の者、安い身共の太鼓持ち、先づ試みに口說いて見て、その口振りを詳しう云はゞ、褒美は望みに任すべしとの仰せを聞き、ヤッチヤしてこい、爰でこそと、義さまに手本を貰ひ、どうやら斯うやら口說き落し、土俵際で今の體裁、樣子と云ふは、斯うでござります。
朝毛　ムウ、そんならアノ義さまが、お前に云ひつけ、わたしの心を。
里八　ハイ、花橘さまといふお的はあれど、內心はたら焦がれてござりますわいの。
朝毛　そんなら、ほんまに。
　ト思ひ入れあつて、前へ摺り寄る。里八、後へ寄つて
里八　なんの僞はり云ひませう。藝者冥利、太鼓の撥替へても。
朝毛　コレ、里八どの、さう云ふ義さまのお心なら、お前を、男と見かけて頼む程に、どうぞ殿様にこの戀、取持

つて下さんせいなア。
ト段々摺り寄つて云ふ。
里八　コヽ、そりやマアお前、ほんまにかいなア。
朝毛　僞はりならぬ證據と云ふは、コレこの割り笄。これを義さまに手渡しして、わしが切ないこの思ひ、どうぞ晴らして下さんせいなア。
ト懐より割り笄を出して見せる。此うち上手の障子を明ける。内に莊助、衣裳羽織、大小にて立聞きして居る。
里八　こりやコレ、丸に中黒の紋を、半分けたる割り笄。
朝毛　サア、わたしが心はその笄。殿様に渡してさへ下さんすれば解る事。どうぞお前を頼むわいなア。
里八　そんなら、この割り笄を。
ト莊助の方を見る。莊助、ズツと出て
莊助　その品これへ。
里八　ハツ。
ト莊助に渡す。朝毛野、莊助を見て
朝毛　ヤア、お前は莊さま。
莊助　里八、其方は次へ參つて、申しつけた彼の一儀を。
里八　そんなら私しは。

莊助　早く行きやれ。
里八　ハツ。
ト奥へツイと入る。莊助、笄を見て
莊助　こりやコレ主人義實公より、この莊助へ拜領のこの品。どうしてこれが其方の手に。
朝毛　サア、その笄が今の先、常武さまの死骸の側に、落ちてござんしたゆゑ。
莊助　すりや、この笄が、アノ常武の死骸の側に。
朝毛　見覺えある義さまの御定紋付き。役人衆の目に付かぬを幸ひ、取つて置いたは義さまの、御難儀にならぬやう、人を思ふも身を思ふと、この朝毛野が兼ねてより、深い願ひを聞き届けて欲しさ。未練なあなたに思はれたいばつかり、どうぞあなたが取持ちで、義さまにお願ひ申して下さんせいなア。
ト思ひ入れあつて、恥かしさうに云ふ。莊助も思ひ入れあつて
莊助　ムヽ、すりや男嫌ひを名に賣つた、舞子の朝毛野アノ義實公に。
ト顏を眺め
ハテナア。

朝毛　サア、さぞ憫りでござんせう。定めて氣でも狂うたやうに思し召さうが、なんの僞はり女子の口から、此やうな恥かしい事が云はれませうぞ。いつぞやこの里へござんして、初めてお目にかゝつた折から、あんな殿御に一生連れ添うてこそ、姫御前に生れた甲斐もあると、思ひの丈を打明けて、とは思うたれど、イヤ〳〵、あなたには花橘さまと云ふ相方のある事。所詮こちらがどのやうに思うたとて、叶はぬ戀ぢやと諦らめても、思ひ切られぬ輪廻の迷ひ。どうぞ心を推量して、義さまへ取持つて下さんせいなア。

莊助　ハテ、一筋な思ひ込みやう。餘り心根が不便さに、この莊助が取持つて、義實公へ申し入てくれうか。

朝毛　さうなる時は、わたしの本望この上はござんせぬわいなア。

莊助　この戀取持つてくれたいが、マア成らぬ。

朝毛　エ、又そりやなぜにえ。

莊助　義實公には、岩木素藤どのを饗應の爲、當所に居續け放埒の體に見ゆれど、思し召しあつての儀。また傾城花橘は操正しく、新造難路と云ふは、兼ねて云ひ號けある許我家の姫君。寶紛失ゆゑ表を憚り、わざと君傾城の姿に出立たせ、先刻御內祝言も相濟めば、花橘の手前と云ひ、この取持ちはマアならぬ。

朝毛　イエ〳〵、云ひ出すからは、お姬樣であらうが、花橘さまに叱られても大事ござんせぬ。どうぞ、あなたを頼むわいなア。

ト甘へるやうに云ふ。莊助、思ひ入れあつて

莊助　朝毛野、この戀路叶はぬ時は、其方は何とする。

朝毛　サア、一旦思うた、女の一念、どうなりとして義さまに。

莊助　この割り笄を以て恩に掛け、もし承引なき時は、常武を手に掛けしは、義實なりと廓中を云ひ觸らし、戀の敵を取る所存か。

朝毛　エ、

莊助　後穢なき其方が心底。さほど穢れた其方が、義實公に戀ひ焦がれ、例へ如何程に願うたりとて、お聞入れはいつかなあるまい。エ、見下げ果てた根性ぢやなア。

朝毛　ア、申し、其やうな事を。

莊助　善惡分らぬ朝毛野が所存。色に事寄せ我が君に近寄らんとは不敵の曲者。

朝毛　エ、エイ。

莊助　見透かした身共が眼力。よもや相違はあるまいがな

朝毛　すりや、この戀路は叶ひませぬか。ホイ。

莊助　彼れこれ申すうち、奥座敷には饗應の舞の始まり。身共も奥にて何かの指圖。

ト行かうとする。朝毛野、莊助に縋つて

朝毛　ア、コレ、そのお下げすみは御尤もなれど、思ひ切られぬこの戀路。

莊助　申しても叶はぬ事ぢや。

ト行かうとするを留めて

朝毛　おやと云うて、どうぞあなたが。

莊助　爰放しやれ。ハテ、放しやれと云ふに。

ト隨う突き放す。チヤンと唄になり、莊助、奥へ思ひ入れあつて入る。朝毛野、突き放された形にて、ヂツと泣き落す。合ひ方。

朝毛　成る程、莊助どのゝ恥かしめさしやんすも、さらさら無理ではなけれども、一旦斯うと思ひ詰めたこの願ひ、なま中打ち明けて云うたが、今では恥かしい。こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

トこなしある。此うち奥より綱八、貞八、出て

綱八　舞子の朝毛野、その緣を結んでくれうか。

貞八　我れ〳〵が義實に、この戀取持つて遣はさうか。

朝毛　ヤア、あ前は最前の。

綱八　檢視の役目に出會うたる、渡邊綱八と云ふ者。

貞八　この臼井貞八も、とも〳〵その智惠貸してやらうかと云ふ事。

朝毛　ムウ。そのお二人がわたしの緣を、結んでやらうとわえ。

綱八　義實に抱かれて寢い。

朝毛　エヽ。それが自由になるならば、この恥かしめは受けぬわいなア。

貞八　いま島原で名うての傾城花橘、相手は舞子の朝毛野とがこの戀爭ひ。

綱八　この戀を仕負けては、朝毛野、其方は立つまいがな

朝毛　サア、それぢやと云うて、アノ二人が。

貞八　千も萬もない。花橘を追ひのけ、義實に添ふ心にないか。

綱八　もし義實が得心せずば、二人とも安穩で置かうよりなぜ一思ひに殺らしてのけぬ。

貞八　憎いと思ふ一筋に。

朝毛　成る程、この身を捨つるも戀の意地。

綱八　毒喰はゞ皿の諺。
朝毛　濡れぬ先こそ露をもいとへ。
貞八　聞き傳へし宇治の橋姫。
朝毛　葵の上の後妻打ち。
綱八　二人をいつそ一思ひ。
朝毛　返す刀でこの身も死に、未來で添ふが戀の意地。
貞八　心覺えのこの業物。

ト脇差を拔いて遣る。朝毛野、拔き放ち見て

朝毛　この刀は。
貞八　それこそ落葉小笹と名けし名作。
綱八　鮎原胤則と云ふ、里見の浪人所持せし刀。
朝毛　そんならこの一腰で
貞八　今宵の舞の騒ぎに紛れ
綱八　人知れず二人の奴原を
朝毛　心得ました。透を見合せ
貞八　アノ、キッと討つかよ。
朝毛　仕負ふせて見せませう。
貞八　そんなら朝毛野。
朝毛　お二人さん。
貞八　キッと詞を番うたぞ。

ト唄になり、貞八綱八、顏見合せ、うまいと云ふ思ひ入れあつて奧へ入る。朝毛野、後見送り、刀を取上げ

朝毛　今のお二人が勸めの通り、これ程に思ふ義實さま、所詮願ひの叶はぬのみか、莊助さまの詞と云ひ、戀の敵をおめ〳〵と、眺めて居てはこの身の恥。今宵の舞の騒ぎに紛れ。

トきつとなつて又氣を替へ

イヤ〳〵、迂濶に近寄り、見咎められては詮ない事。ハテどうしたらよからうなア。

トぢつと又思案のこなし。この時、めでたや〳〵の春駒の唄になり、橋がゝりよりお竹、里八、春駒の拵へにて、兩人とも手拭にて顏を隱し、お竹は春駒、里八は太鼓を叩き、門口にて唄一くさりあつてとまる。朝毛野、フト外を見て

朝毛　ア、コレ、兎つ追ひつの思案の中へ、心ない春駒どの。手の隙がない。通りや〳〵。
里八　サア、通れとあるぞお竹女郎。
たけ　大方お内で所望であらう。
兩人　サア〳〵、それへ入りませう。

トずつと入つて、朝毛野の兩方へ立つ。朝毛野、恟り

して
朝毛　ア、コレ、此方に思案の只中に、通らんせと云うたは、所望ぢやござんせぬ。ちやつ／＼と去んで下さんせ
たけ　その御思案の最中も、通れとあれば白壁に、乗りかかつたこの春駒。
里八　この廓で名の高い、朝毛野さまの話し相手。馬乗りかけう我れらの趣向。
たけ　是非とも所望してもらはねば
兩人　ならぬわいなア。
朝毛　ハテ、物好きな春駒どの。わたしはちやつと奥の間へ。
ト行かうとする。兩人ちよつと留めて
里八　イヤ、意馬心猿の人心。
たけ　手綱ゆるさぬ心の駒を。
兩人　ちよつと妾らで一奏で。
トまた春駒の鳴り物になり、小野の小町のその粧ひの唄になり、朝毛野、刀を隱し、奥へ行かうとする。兩人ちよつと振り事にて支へる氣味あつて、このとまりお竹、里八、手拭を取り顔見合せ
朝毛　ヤア、お前は。

たけ　仲居のお竹。
里八　太鼓の里八。
朝毛　そのお二人が、變つた形で、何とさしやんす。
たけ　サア、これは。オ、さうぢや、今夜義さまの御趣向で、奥座敷での男舞。
里八　そのシテ方は朝毛野さま、そのお相手にはわたしらも、所詮及ばぬ事ながら
たけ　使うてもらひませうと思うて
里八　幸ひ春駒のこの形で
朝毛　アノ、そんなら今夜の催ほしに。
兩人　どうぞお頼み申しまする。
朝毛　ホウ、こりや丁度逢うたり叶うたり。わたしの方から頼むわいなア。
兩人　そんなら遣うて下さりまするか。
朝毛　アイ、お前方の相手には、氣も春駒の今宵の一座。
里八　上邊は戀に見せかけても
たけ　穗に現はるゝ男舞
朝毛　エヽ、なんとえ。
里八　イヤ、よろしうお頼み申します。
ト内より

つぢ　申し〳〵、朝毛野さま〳〵。奥からお客がお呼びなされる。朝毛野どの〳〵。

　ト忙しう呼ぶ。朝毛野こなしあつて

朝毛　アイ〳〵。大方稽古にかゝれであらう。幸ひお二人とも、始まつたら知らせませう。

たけ　そんなら後で、朝毛野どの。

里八　お知らせを待つて居ります。

朝毛　ドリヤ、稽古にかゝりませうか、

　ト唄になり、朝毛野、心殘して奥へ入る。お竹、里八あたりを見る。奥より城住、お辻、左枝、君江、お繁お品、お末、ばら〳〵と出て

皆々　お二人様。

たけ　ア、コレ、

　ト押へてあたりを眺め

たけ　莊助さまの云ひつけ通り、いろ〳〵と試して見ても合點のゆかぬ朝毛野さまの心底。

里八　この犬村角太郎も、人に顏見知られぬを幸ひ、太鼓持ちとなつてこの通り。

つぢ　仲居となつて入込みしも、許我の姫君吾の君さまと義實どのゝお宮仕へ。

しな　お家の敵素藤が、如何なる事をなさんも知れずと、餘所ながら附き添ふ我れ〳〵。

城住　座頭城住とは僞はり、誠は氏元さまの家來、蕩木杢作。

皆々　兼ねて殿御を守護の役。

たけ　この程よりの手當には、一々記したお客の俳名。太鼓末社の調子を合せ、下知の手配り。

里八　入り來るお客の心を引き、彼の八つの玉の連れ、尋ね求むるこの一座。

たけ　この上は手管を定め

つぢ　今宵の騷ぎを幸ひに

城住　お家の怨敵素藤を

皆々　討取つてお家の再興。

里八　ア、コレ、千丈の堤も蟻の手業に崩るゝ習ひ。五千丁の御朱印の、手に入るまでは、隨分ともに、覺られぬやう。

たけ　殊に合點のゆかぬは、あの朝毛野どの。善か惡か底意を見ねば、迂濶に油斷はならぬぞえ。

里八　只何事も、今宵の舞の終りを待つて。

皆々　そんなら舞の終りまで。

たけ　わたしはちよつと用事もあれば。
里八　然らば委細は荘助どのと
たけ　謀し合したその上で
皆々　そんなら、お竹さん。
なけ　マア、行かしやんせいなア。

と唄になり、この一件、皆々奥へ入る。お竹は下座へ入る。

チヨン／＼返し。

造り物、二間の數寄屋屋體。双方とも落ち間、網代塀。石燈籠。庭木のあしらひ。正面の屋體に障子締りあり、下手に枝折り門。この取りつけよろしく、好みの合ひ方にて道具納まる。

ト上手より荘助、手燭を持ち、駒下駄にて出て來て、あたりを見て

荘助　先刻朝毛野が渡せしこの割り符。その身の戀を叶へんと云ふ下心。いよ／＼以て合點のゆかぬ。正しく我が推量に、八犬士の群れと思ふに似ず、戀路に迫る女の情。お竹どのと角太郎どのに云ひつけ、心の底を探らせしが、今宵につゞまる朱印の詮議。ハテ、何とがな。

ト思案する。お竹、下手より袋入りの刀を持ち、路次下駄にて出て、枝折り戸を明け入る。

たけ　犬川荘助どの。
荘助　お竹どの、して朝毛野が心底は。
たけ　どう探つても解らぬ心。この上は舞に事寄せ、角太郎さまもとも／＼に。
荘助　某は又、素藤を討つて取り、素藤が手に渡りある朱印の合ひ紋はこの鑑札。
たけ　こりやコレ許我の城内へ、通路を許しのこの一品。
荘助　朱印の在所も素藤と、知れたる上は、兼ねて道節どのより預かる劍は。
たけ　村雨丸は人目にかゝらぬやう、隱し持つて即ちこれに。

ト差出す。荘助取つて、袋より抜き出し

荘助　成る程、刀の拵らへ、左母次郎めが神宮川にて摺替へたる鞘の儘。奇瑞を試すは幸ひの人絕え。

ト刀を改めにかゝる。お竹、手燭を差出す。荘助、劍を抜く、薄ドロ／＼にて、雨車、雲氣の合ひ方になると上手の障子屋體より小文吾、着流しにて立ち身ながら見て居る。荘助、空を眺めて

ハテ、爭はれぬ劍の奇瑞。いま鯉口を拔くや否、水氣含んでこの如く、空に知れぬ雨の滴り。

たけ　まして人を切る時は、忽ち車軸を流すと聞く。

小文　今まで冴えたる月影も、雲隱れして降り來る春雨。拔けば玉散る寶劍の、奇瑞を現はす劍の雫か。

莊助　犬塚どのゝ心を凝らし、所持せられたを奪ひ取られ

たけ　巡り〳〵て御主人の、道節どのゝお手に入り

小文　今、この不思議を見ると云ひ、主家の運の開く時節か。

莊助　何にもせよ。

たけ　目覺ましき劍の

三人　奇瑞ぢやよなア。

ト双方顏見合せ、莊助、ちやんと劍を鞘に納め、お竹も手燭を吹き消す。小文吾、思ひ入れあつて、何氣なく

小文　お竹か。これに居やつたか。最前から尋ねて居つた。同じ所も氣が變らぬ。座敷を替へて一獻酌まうか。

たけ　ハイ〳〵、畏まりました。

トよん所なく銚子杯持つて行く。顏にて莊助に仕方する。莊助も小文吾の素振りに氣を附け、思ひ入れある。小文吾、銚子を取上げて

小文　これは餘程冷酒と見ゆる。その火鉢を持つて來やれ。これサお竹。

たけ　ハイ〳〵、お酌いたしませう。

小文　イヤ〳〵、殊の外冷酒と見える。熱燗にしやれ。

たけ　ほんに冷たい。幸ひ火鉢も爰にある。

ト火鉢取つて來て前に置く。

ドレ、燗を致しませうか。

ト合ひ方になり、お竹、火鉢に燗鍋を掛け、酒を温める。小文吾、莊助を見て

小文　ホ、ウ、最前から心が付かなんだが、それに居召さるゝは、この内では見馴れぬ仁ぢやが。

たけ　イエ、あなたはお客でござりまする。ハイ、たつた今お出でなされた、お客様でござりまする。

小文　ナニ、お客人か。

たけ　ハイ、左やうでござりまする。

小文　ハテナア。

ト合ひ方。莊助、思ひ入れあつて

莊助　御名は聞かねどお客人は、關東の方と見請けましたが、左やうでござるかな。

小文　如何にも左やうでござる。して又お客人はな。

莊助　拙者も東國の者でござるが、フトこの廓へ參り、色ゆゑに思はぬ足を留めましてござるて。

小文　イヤモウ、彼の女の履ける足駄にて作れる笛には、秋の鹿も必らず寄ると、誰れしも色に篏り易いものでござる。

莊助　すりや、こなた樣にも。

たけ　この文さまの思惑は、この廓の太夫では。

小文　存じの外な山猫とか申す、舞子が心に叶ひました。

莊助　それは變つた物好きでござりますなう。

たけ　さうして、返事がござんしたかえ。

小文　その取持ちは仲居の役。あのお客人も同座して、濡れて見せたい身共が心。

たけ　そんならアノ朝毛野さんを。

小文　イヤ、朝毛野よりは、慥かな村雨。

莊助　ヤ、、なんと仰せらるる。

小文　噓も誠も打越して、しつぽり濡るゝ劍の雫。

たけ　エ、、。

小文　抜けば玉散る村雨に、濡れて見たいと申す事ぢや。

莊助　それは何よりお易い事。濡れの利くこなたなれば、

たけ　定めて移り氣。外の女中の氣性も定めて。

ト小文吾の守に手を掛ける。振り拂つて

小文　お竹、こりや、なんと致す。

たけ　朝毛野さまに成り代つて、お前の守を改めうと思うて。

小文　ハ、、天晴れ黒星。粹の骨頂。拙者が望みはその村雨。

ト立ち上がつて莊助が刀に手を掛ける。キッと留めて

莊助　コリヤ、なんと召さるる。

小文　イヤ、濡れ話しに乘りが來て。

莊助　イヤ、それよりも貴殿の守を。

ト手をかける。お竹よろしく眞中へ分けて入つて

たけ　お二人ともに待たしやんせ。

小文　イヤ、互ひに色への心中立て。

莊助　見ようと云はるゝ貴殿のお名。

小文　こなたの假名も慥かに犬の字。

莊助　さう云ふこなたも正しく同性。

小文　云はねど聞かねど

たけ　一つの心。

荘助　心を砕くは朱印の在所。
小文　合點のゆかぬは舞子の朝毛野。
たけ　それも追ッつけ試した上。
荘助　心を明かすは今宵のうち。
小文　その取捌きは仲居の役。
たけ　左やうなら、文さまこれに。
小文　隨分ともに馳走をしやれ。
荘助　お客人、後刻御意得ませう。
ト唄になり、思ひ入れあつて奥へ入る。お竹、附いて入る。おば内、忍びの形にて窺ひ居る。小文吾、後に殘り、思ひ入れあつて
小文　我が推量の的は違はず、仲居と云ふは道節が腹心の者。今のは慥かに犬川額藏。藝者となつて入込めるは、犬村角太郎とやら。犬飼犬塚は祇園林に埋伏なせば、これもよし。我が同性の者、悴親平ともに丁度七人。いま一人は慥かに朝毛野。
トあたりを眺め、氣を替へ
ハテナア。
ト思案のうち、奥にて
皆々　サア、朝毛野さま。用意がよくば、男舞の一曲、所望ぢや〳〵。
ト所作のかゝりの鳴り物になり、小文吾、奥を見込んで
小文　はや奥座敷には舞の始まり。其うちに彼の一品の詮議が肝腎。ハテ、何とがな。
ト手を組み、ヂッとある。この時、おば内、抜刀にて
おば　小文吾覺悟。
ト切つてかゝる。テン〳〵と太鼓の頭となると、小文吾ちよいと立廻つて、キッと留まり
小文　油斷を窺ふ不敵の曲者。
おば　なにを。
ト又かゝる。これより早めたる鳴り物になり、烈しき立廻りにてキッととまる。この時、エイと一間の内より笄を手裏劍に打つ。おば内、刀を捨てゝウッと苦しむ。小文吾、恟りして右の笄を抜き取つて
小文　さてこそ手裏劍代りに、笄を以てこの曲者を射とめしは。
ト行燈にてとつくりと詠めて
「分け入りし栞絶えたる麓路に、流れも出でよ谷川の桃」
ト思ひ出したるこなしにて

こりやコレ最前朝毛野の所持の笄。

トおば内の手を放して

これを以て射とめし手練は。

ト感心のこなしあつて膝を立てる。曲者、ポンと返る

小文吾、思ひ入れあつて

ハテ、女ぢやよなア。

ト思ひ入れ、奥を見込む。鳴り物、矢張り所作のかゝりにて、チョン／＼。

返し

造り物、正面、通りの竹田襖。此うち御簾を下ろし雛段の出囃子、上手下手とも少し上手心に飾り御簾屋體。上手には對牛樓と書いたる額かけあり、後に落ちる仕掛け。上より紅摺りの長提灯を澤山に吊り下ろし、この見得よろしく、唐樂にて道具納まる。

と上より雛路、花橘、お辻、左枝、君江、お末、お樂、お品、各々半素袍にて納豆烏帽子を着て、大小の鼓太鼓、各々鳴り物の道具を一品づゝ持ち出て並よく並び

雛路　里見の殿樣義實公、素藤公を御饗應の爲。

花橘　この紅梅屋の奥座敷での、男舞の一曲。

つぢ　舞子の朝毛野さん始め、ワキの役は仲居のお竹どの

左枝　藝者の里八さまと三人の所作事。

君江　わたしら始め皆さんは、打囃子の鳴り物方。

しげ　樂屋に扣へてめい／＼に。

しな　打囃子の調べ役。

すゑ　こちらは樂屋に扣へようわいなア。

皆々　さらせうわいなア。

ト矢張り唐樂になり、皆々下手へ入る。鳴り物打上げる。口上出て

後見　この所に相勤めまする所作事の外題、男舞の一曲、「楫枕綠友綱」白拍子淺妻に舞子の朝毛野。女船頭お楫に紅梅屋お竹。萬歳才若に藝者里八。千秋萬歳樂大々叶。

ト口上終つて入る。正面の襖引上げると、中に囃子方並よく並び居て、前彈きにかゝる。金六、網八、貞八季六、着付け上下にて後見の心にて扣へる。

〽漣や八十の湊に吹く風に。

トこれにて上手より絹張りの淺妻船に朝毛野の白拍子の姿、烏帽子水干にて、里八、萬歳の形。紋ちらしの

裁付け、萬歳烏帽子、鼓を持ち出る。お竹、女船頭の拵らへ、瓢箪模樣の上張りにて、櫂を持ち、この見得よろしく、上手より曳き出す。

〽身に沁み渡る比叡颪、千船百船櫓を立てゝ、淺妻船の淺からぬ、入るや岸根の柳蔭。

トこれにて程よく船を上手へ引いて取る。

〽あの山見さいこの山見さい、頂きやつれた小原木の、一夜ぎりかも一夜もござれ、あたらし船の船頭どの、大膽な人ぢやえ。

ト三人よろしくあつて、朝毛野、烏兜の姿になる。

〽見渡す四方に鶯の、軒端の梅に初音をも、見かきが原の姫小松、引かでも千代の色見えて、雪解の澤に摘む若菜、野邊の早蕨折り添へて、都ぞわきて左保姫の、情を隱す頃なれや、櫻をかざす宮人の、花の姿も花に又、重ねて匂ふ花頂山、花よ姿よ春なれや、なびきぞ渡る青柳の、いともと長き君が代の、豐かに祝ふ舞姫の。

朝毛　そも白拍子の始まりは。

〽をふの久輔作をなし、磯の前女に傳へける、前女は娘の靜に敎へ、女に烏帽子をかぶらせ、白き水干打着なし。

朝毛　腰に惣卷き差したれば。

〽男舞とは名けたり。

里八　然らば尋ね申すべし。持てる鞁の謂れは如何に。

〽おゝ、そも〳〵鞁の濫觴は、高麗唐土に名も高き、天より降れば天鼓とつけ。

朝毛　淺妻妙に打つ鞨鞁、打ち納まれる御代なれば。

〽鳥驚ろかぬめでたさよ。

たけ　そんならわたしも尋ねませう。鼓に大小ある事は。

〽これ日月に譬へたり、小の鞁は陰なれば、露に親しくそぼち打ち。

朝毛　大なる鞁は陽にして、陽より四表ほうじ打ち。

里八　陰陽和合むべなれや。

たけ　戀に上下の隔てなく。

竹里　なるか。

朝毛　ならぬか。

〽綾鼓、調べあやとり打つ鞨鞁。

トよろしく納まると、これよりお竹、里八。手踊り一件あつて納まる。トこの切れに四人の敵役、ツカ〳〵とお竹里八にかゝるを、キッと留める。

季六　ヤア、最前より見るところ



初演の繪番附

綱八　どうか怪しき二人の奴。

貞八　畢竟里見に身寄りの者。

金六　何にもせよ、者ども、ソリヤ。

皆々　ハ、ア、

ト揃ひの捕り手八人、お竹、里八を取巻き

皆々　動くな。

ト兩人キッとなつて

たけ　ヤア、我れ〳〵を咎めうより、この場の樣子。

里八　義賃どのゝ御身危ふし。御油斷なされな。

皆々　何を小癪な。

ト所作のツナギの鳴り物にて、双方へ四人づゝ追ひかけ、東西へ入る。早笛にて朝毛野の拵らへ出來次第前へ出る

季六　今の二人の者と云ひ、朝毛野までが油斷ならず。

綱八　申しつけたる二人の者。合點か。

ト兩人ハッと朝毛野にかゝる。この時、鳥兜仕掛けにて獅子頭になる。朝毛野、兩人を相手に所作ダテになる。

〽面白の春なれや、梅に去年とふ花の木の間に、木の間に花の色と香も。

〽面白の春なれや、櫻見よとて燕が花に、雲かと花の八重一重、面白や。

ト兩人をポン〳〵と當て、キッと見得になり、四人の敵役キッとなつて、朝毛野を取巻き

四人　さては汝も敵方よな。

朝毛　ホ、ウ、舞子の朝毛野となつて入込みしは、我れこそ先年汝等が手に亡ぼされたる、鮎原胤則が忘れ形見、犬阪毛野胤智なるわい。

皆々　ヤア〳〵。さてこそなア。

朝毛　家の仇たる素藤奴め、父の敵の汝等を討たんが爲、女姿とやつせばこそ、父胤則が形見たる、落葉小笹の劍も手に入る。サア、この上は倶に天の戴かぬ父の敵、この毛野が鏖殺しにする。觀念せい。

敵役　さう云や、うぬを。

トこれよりどんちやんになり、四人烈しく立廻りポンポンと切る。

朝毛　イデこの上は素藤を。ソレ。

トつか〳〵と上手へ行かうとする。正面の御簾の內より

氏元　ヤア〳〵、鮎原胤則が忘れ形見、犬阪毛野、忠義の

心底、杉倉氏元見屆けたり。

朝毛　ヤ、、なんと。

ト突つかけ、遠攻め打込みにて、正面の御簾巻き上げる。向うより打抜きにて築山の書割り、素藤、燕手、長上下。小文吾、上下にて、袋入りの劍を取り合ひながら、ツカ〳〵と出て、この時上手下手の屋體御簾より義實、氏元、長上下、吾の君、姫の形にて、朝毛野始め女形皆々襷鉢巻長刀を持ち、下手より莊助、上下股立ち。お竹、里八、以前の形。城住。上下高股立ちにて、軍兵大勢高提灯に中黑の紋付きにて出て、皆々並よく取巻き

皆々　反逆人素藤、動くな。

トきつとなる。素藤、よろしくキツとなつて

素藤　里見家の討ち洩らされ。この素藤に刃向はんなんぞとは、小癪な奴め。

ト刀をかざし、ヤツとなる。氏元よろしく引廻して

氏元　如何に素藤。先年富山の洞に於いて、伏姫最期の砌り、挑み合つたる杉倉氏元。よも見忘れは致すまい。

朝毛　いま素藤と變名すれど、誠は主君の仇敵、山下定包であらうがや。

素藤　すりや、その時の狩倉姿は、氏元であつたか。ハテ小賢しい。

氏元　その時伏姫の瘢口より、顯はれ出でし八つの玉。忠義の者の胎内に、宿りて茲に八犬士。

朝毛　七人は早集まり、殘る一人はこの毛野。今こそ揃ふ里見の忠臣。

素藤　巡り巡つて今爰に

氏元　ハテ珍らしい

朝毛　對面ぢやなア。

ト三人ちよつと立廻つて、シヤンととまる。この時莊助、エイと手裏劍打つ。額の内より朱印出る。

皆々　これは。

ト莊助ツカ〳〵と朱印を取り上げ。

莊助　これぞ尋ねる五千丁の御朱印。

義實　里見の重寶、嵐山の名笛は斯くの通り。

たけ　村雨丸の御劍は、道節どのより手に入れてこの通り。

小文　桐一文字の鎧通しはこの犬田小文吾が取り得たれば。

氏元　里見と許我の寶も揃へば、最早遁がれぬ山下定包。

皆々　尋常に覺悟々々。

素藤　何を小癪な。
ト双方キッと取圍む。
氏元　先づ今日はこれぎり。
トめでたく打出し。

幕

花魁莟八總（終）

園原や伏屋に生ふる箒木の古歌に准へし祕密の良藥種を拾うた傾城の意氣張りに
戀は曲者待ち受けた山中の返り討爰にその頃武者修行の若者あり
速見政次郎正輝が事蹟

栅自來也談

全巻十冊

柳ケ淵に緣の糸筋
鏡ケ浦に願の仇討

黒姫の山の奥にも人ぞ住む隱語に教へし水子の行く末誓ひを立てた生娘の神詣で
濡れたつるもの傳ひかけたゆいのれりしなはうち時に其節劍術無双の盜賊あり
尾形周馬寛行が聞書



初演繪番附表紙

柵自來也談

口幕

新潟濱邊の場
麻績明神の場
園原山中の場

役名　足利左門之助義胤。白山團之丞。岩瀬喜文太。増田伴作。坂田銀平。織殿屋新三郎。漁師浮藏。同、綱六。同、綱右衛門。同、浪六。同、早九郎。同、笘八。傾城、三千歳。仲居、お淺。同、おさの。同、お雪。同、お浪。庄屋、茂作。破魔之助妹、渚。若黨、鐵右衛門。五十嵐軍八。肝煎り、徳兵衛。小歩き、靑太。角屋お傳。醫者、喜樂齋。速水源五郎 後ニ 勇源吾政村。同女房、お衣重。足輕、慶右衛門。高宮矢柄。多川丈助。坪坂丹下。榛津市之正國久。

造り物、向う奥深に一面の浪幕。上手出しかけの御座船、黒塗り高欄附き。釘抜きの紋附きたる幕を張り、障子の所は一面の御簾を掛け、すべて大名衆の御座船の飾りつけ。その續き二重浪の打寄りの蹴込み、砂土手の書割り、右大船の側に傳馬船一艘繋ぎあり、よき所に薄原。漁船一艘あるべし。但し右二重上手一間程落ち間になる事、すべて磯邊の取合せよろしく、幕の内より右二重の上に浮藏、綱六、綱右衛門、浪六、早九郎、笘八、皆々漁師の拵らへにて、湯かけ、腰簑、網の綱を曳いて居る。その側に肴籠、手籠など取散らしあるべし。この見得よろしく、木遣りの鳴り物、エイヤ〳〵の掛け聲にて幕明く。

ト後直ぐに濱手なる唄になり、向うより團之丞、馬乘り袴、着付け羽織、大名の若殿の形。後より伴作、銀平、家中侍ひの形、袴、羽織、大小。次に喜文太、着付け小倉袴、半股立ち大小、若黨の形。後より新三郎着付け羽織、袴、御用達の拵らへにて付き添ひ出て來りて、皆々花道よき所に止りて

團之　なんと皆の者、今日はこの濱邊にて、左門之介さま

御饗應の爲、網曳きのお慰み。身共が思ひ附きは、なんと格別氣が晴れてよからうではあるまいか。

伴作　イヤ、誠に今日のおもてなしは、近頃存じも依らぬ好きお慰み。さぞ若殿左門之助さまにも、一入の御機嫌でがなござりませうて。

銀平　イカサマ、左樣でござりませう。シタガ、なんぼう下賤腹とは申しながら、武將義尚公の御公達なりや、コレ、打捨て置かれぬ大切の御遊容。

喜文　それに又、當國の領主たる、椎津市正國久公には、左門之介さまにお構ひもなく、近國巡見などゝ他國に出て、徒らにその日を送る我まゝ氣儘。近頃以て笑止千萬

新三　イカサマ、仰しやれば左樣なもの。御分家たる白山の若殿樣、諸事おいとひもなく、お殿樣に成り代り御饗應をなされますればこそ、世間の聞え、鎌倉の思し召し何かの事がよろしいかと、憚りながら町人の私しどもは存じまする。

團之　イヤ〳〵、これと申すも新三郎、てまへが今日、遊びの諸入用、皆引請けてくれるゆゑ、この團之丞が手筈もよいと申すもの。なりや、コレ全く、其方が働らき。近頃以て祝着に思ふての。

新三　ヘイ〳〵、これは又、結構なるそのお詞。新三郎め却つて迷惑仕りまするて。

喜文　イヤナニ、若殿、最早網も寄りました樣子。あれへござつて得物御覽。その上にては左門之介さまへ、御上覽の儀、然るべうやう存じ奉りまする。

團之　イカサマ、さう致さう。サア、皆參れ。

伴作　ハツ、先づ

皆々　お越しあられませう。

ト此うち舞臺始終網曳いて居る。木遣りだん〳〵忙しくなるうち、花道の人數皆々本舞臺へ來りて、團之丞上手にて床几にかゝる。皆々並よく並ぶ。この間に漁師皆々、網を曳き上げて

浮藏　ソリヤ、大鯛ぢや〳〵。

網六　イヤ、こりや大蟹ぢや〳〵。

網右　ソリヤ、手を咬むぞ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて銘々魚を見物へ見せて、皆々魚籠へ入れて

浮藏　ヘイ〳〵、仰せつけられました魚網

網六　漁師仲間が打寄つて、思ひの儘にこの通り

網右　十分漁がきゝまして

皆々　ござります。
ト前へ差出す。
園之　オヽ、出かす／＼。その魚どもを左門之介さまのお船へ持參いたし、働らき次第逐一に、この園之丞が取次ぎ致すであらう。喜べ／＼。
喜文　ヤイ／＼、われ達、御前へお禮を申したがよいぞや、御遊客たる左門之介さまには、追ッつけ鎌倉表へお入り遊ばしたら、都梅園家より姫君様の御入輿。程なく武將と仰がれ遊ばすは知れた事。さすればこの度御饗應ありし園之丞さまには、云はずと知れた立身御出世。
伴作　理詰めなればわれ達とても、お下に暮し居る幸ひに、この度の働らきは、その時キッと御褒美の下されう程に銘々内へ歸つて、神棚へ燈明あげて待つて居らうぞ。
銀平　さうなる時には、なんぼう少なうても大判一枚づゝは、滅多に外さぬぞよ。皆喜べ／＼。
皆々　ヘイ／＼、それは有り難うござりまする。
ト皆々喜ぶ。
新三　イヤモウ、憚りながら、兎から申しまするうち、その魚どもが上りましては詮ない事。見事なお魚、生きて居るうち、一に御前へ御覽に入れようとは、どうでござりませうな。
園之　イカサマ、こりやよくも心を附けしよな。ソレ、漁師ども、その魚殘らず左門之介さまの御前まで、持參の致してよからう。
漁皆　ヘイ／＼、畏まりました。
侍皆　然らば園之丞さま。
園之　皆參れ。
ト立ち上がる。
皆々　先づお越しあられませう。
トこの時、戸家の内にて大勢
女皆　オヽイ／＼。
ト呼ぶ。これにて皆々向うを見て
喜文　アイヤ／＼、お待ちなされませう。今朝より誰れも廓へ參りませぬゆゑ、皆が迎ひに參つたと相見えますての。
新三　イカサマ、あの一群は廓の者ども。こりや爰で待ち合して、おやりなさらずばなりますまいぞえ。
伴作　こりや新三郎が申す通り、お待ちなさつておやりなされませう。
園之　オヽ、さう致さう。コリヤ、漁師ども、われ達も暫

らく待つて遣はせ〳〵。

浮瀨　ヘイ〳〵、待ちますとも〳〵。これが待たずに居られませうか。ナウ皆の衆。

絹六　オヽ、さうとも〳〵。兎角髮長でないと、堅詰まつて、とんと、面白うないわい。ハヽヽヽ。

新三　でもマア、遲い足ではあるわい。

團之　皆早う呼べ〳〵。

皆々　ハツ。オヽイ〳〵。

　ト向うを招くと、また戸家の内にて

女皆　オヽイ〳〵。

　ト花やかなる唄になり、向うより三千歳、傾城の形、禿二人附き添ひ、お磯、お浪、おさの、お雪、皆々仲居の形にて、箱提灯を疊み、これを持ち出て來りて

三千　團さま始め新さま皆樣、今日はどう御機嫌が損じたやら、今朝から廓へお出でがないゆゑ、代々衣さまにも辛氣な顏色。見るも氣の毒、わたしも又、逢ひたいお方もあるゆゑに、皆樣と相談して、いつものお屋敷まで尋ねに行たら、ナア皆さん。

いそ　それ〳〵、なんぢややらむつかしい、克明なお方樣方が張り番して居やしやんしたが、その中でもどうか氣の好ささうなお方があつてな。

なみ　サア、そのお方樣に、わたしらが尋ねたら、この濱邊で、今日は網を曳いて遊んで居やしやんすとの事。

さの　聞くと其まゝ、やう〳〵爰へ來たわたしら。是非とも今宵は直ぐに廓へ。

三千　日が暮れうとも待つて居て、お供して去ぬ氣で、わたしらが

いそ　用意して來たこの提灯。團さま始め何れもさん。

なみ　新さまは元より、御連中樣は知れた事。

さの　いつもの通り、左門さまを先に立て

ゆき　この提灯は灯さずとも

いそ　足元の明るいうちに

禿二　サア、連れまして

女皆　去ならうわいなア。

　ト居直りになり、皆々本舞臺へ來る。

伴作　サア〳〵、面白うなつて來た。若殿、サア〳〵、これから直ぐに

銀平　皆打混じて、此まゝ廓へ

皆々　サア〳〵、參らう〳〵。

團之　イヤ、待て〳〵。今日のこの遊漁、此まゝ無下

に差置くも餘り本意ない。折角の趣向、その魚を御前へ差上げ、御覽の上にて廓の者ども、一つになつて今一網それを今日のはねにして、暮れ方頃より參らうではあるまいか。

新三　イヤ、これは又けうとい思ひ附きでござりまする。

喜文　イヤ又、これまで女子の網を曳くと云ふ事は、とんと聞いた事もない。こりや一番當りますぞえ。

浮藏　それで網曳きが派手になつて、また／＼漁がきゝませうての。

三千　そんならアノわたしらが、網曳きを手傳ふのかえ。

浮藏　手傳ふどころぢやない。グッと働らいてもらはねばならんて。

綱右　なんでも今日は思ふ儘、御酒に呼ばれて得物々々を取りたいものぢやて。

浮藏　こりや網曳きに勇みが附いて來たわい。

女皆　ほんに、こりや氣が變つて面白からうわいなア。

團之　そんなら其方達は、この漁師どもと同道して、左門之介さまのお船へ參り、その通り申し上げい。

三千　さうして、團さま始め皆樣方はえ。

團之　身共は後から參る程に、委構はずと、早う行け／＼

女皆　そんならわたしらはお先へ。

三千　新さまも共々。

團之　オヽ、サ、一緒にお船へ。

新三　左樣ならば若殿樣。

團之　オヽ、行け／＼。

新三　お早うお出でなされませえ。

女形　サア、行かしやんせいなア。

ト賑やかな唄になり、三千歲、新三郎の手を取る。新三郎、こなし。皆々女形漁師附き添ひ、二重へ上がる。と傳馬船より船頭出て、皆々を乘せる。これにて船を出して、皆々上手へ入ると、後合ひ方になり、殘りの敵役皆々、あたりへこなしあつて

伴作　團之丞さま、兼ね／＼あなたの思し召し通り、お付き人たる破魔之助めを、やう／＼出しぬき、左門之介どのを取込んで、武將宣下のその上にて、樹準の御家督。當國の大守。

銀平　まつた當主たる國久どのは、いんまのうちに押し籠め隱居。

喜文　さある時には幼稚の國丸、立てらうと決せうと心の儘。なりやコレ、あつてもなきも同然。



「柵自來也談」へ



出る役々

作作　大願成就、出世の雲が見えて參つて、さぞ御滿足に

三人　ござりませうな。

團之　オ、サ、如何にも某、當主國久とは從弟同士なれども、斯く分知を領し、身の上の過不足は甚だの相違。それゆゑにこそ、我が父存生のうちよりも、本家を簒はん兆しあれども、兎に角折を得ざりしゆゑ、止む事を得ず、今日まで、無念に過ごすこの年月。然るにこの度左門之介どの、計らず御父義尚公より御奉書下り、當家に食客たる御身を、直さま鎌倉表へ御下向あらば、武將の宣下と密かの御內意。これこそ武運開くる時節。性得短慮短才の氣性に取入り、附き人たる破魔之助めを遠ざけしは、この團之丞が辯舌にて、邪魔を拂うた智略の一つ。やがては椎津白山の、兩家合して家督相續。その時こそは其方達、キッと知行も宛て行はん。喜べ〳〵。

皆々　ハッ、有り難う存じ奉りまする。

團之　して、一昨日喜文太に申しつけ置きし課役の儀、村村近在並びに漁濱の者に至るまで、大庄屋を以て身分相應の課役、キッと申し渡し置いたか、その儀は如何相成つたぞ。

喜文　ハッ、その儀は早速、村松糸魚は申すに及ばず、石瀨土泊の邊までも、五ケ所三ケ所の庄屋年寄りへ、キッと、申しつけましたるところ、寄合ひの上にて、年功の者を以て、御返答仕るべき旨を申し居りますれば、今日若殿お留守のうちへ、お館へ參らば、事相違仕らうかと、甚だ心を痛め居りまするて。

團之　イカサマ、大仰なる課役、館に於て返答の相違あつては、事の破れと相成る上は、其方大儀ながら一走り立越えて、とくと相調べ、急に調へて參つてよからう。

喜文　ハッ、委細畏まつてござります。

ト立ち上がつて下手を見て

イヤ、參るまでにも及びませぬ。あれへ魚治郡の庄屋茂作が、一兩人の下百姓を召し連れ參りまする。

作作　イカサマ、彼れらに安否を承つた上の儀に致されよ。

喜文　左樣仕りませう。

ト在鄕唄になる。と橋がゝりより茂作、袴、羽織、庄屋の形、後より百姓二三人、同じ形にて附き添ひ出て來りて

茂作　ハテマア、なんであらうと若殿樣へ、直き〳〵お目

見得願うた上でないと譯が解らぬ。マア、おれに附いて
ござれ〱。
ト捨ぜりふ云ひながら、上手へ行かうとするを
作作　ヤイ〱、百姓めら、椎津家の御分知たる、白山の
若殿の小休みの御前をも憚らず、のう〱と尾籠千萬。
銀平　眼を開いて三拜なし、無禮を詫びて
皆々　通り居らうぞ。
トきつと云ふ。これにて皆々恟りして
皆々　ハイ〱〱。
ト後へ下がりて下に扣へて
茂作　これは〱、存じませぬ事とて、眞平御免なされて
下さりませ。して、あなた樣が、椎津家の若殿樣でござ
りまするか。私しどもは魚治郡の庄屋茂作と申します者
でござりますが、昨日仰しやりました
ト此うち百姓、喜文太を見て、こなしあつて
百一　オヽ、コレ〱、庄屋どの、昨日大庄屋へお出でな
されて、課役を云ひつけさつしやつた、岩瀨喜文太さま
も、これにござるぞや。
百二　マア、ちやつと課役金の出來ぬ事を
皆々　喜文太さままで、先に申し上げさつしやれ〱。

茂作　オッと承知々々。いま喜文太さまに申し上げうとし
て居る所ぢや。マア、おれが惡うはせぬ。控へさつしや
れ〱。ヘイ〱〱。
ト作作に向ひ
イヤ、昨日は御苦勞樣でござりました。
百一　これはしたり庄屋どの、違うてあるわいの。
ト作作を見て
茂作　ヤア、ほんに、こりや麁相な男ぢやわいの。
トまた銀平の前へ行き
ヘイ〱〱、とつとモウ、あなた樣をお見外れ申しま
して、眞平御免。
百二　エヽ、あなたでもござらぬわいの。
ト袖を引くを振り拂ひ
茂作　エヽ、なんであなたでない事か
ト云ひながら銀平を見て
ヤア、ほんにまた違うたわい。あんまり貴樣達が、どや
どや〱とやかましう云ふゆゑぢや。ちと嗜なんだがよ
いわい。無調法千萬な。控へて居やつしやれ〱。
ト叱りつける。
百皆　エヽ、なんの事ぢや。

ト皆々後へ扣へる。茂作、喜文太に向ひ

茂作　ハヽヽ、エヽ、モウ、なんと庬相な奴等ではござりませぬか。モウ、あのやうな者ぢやに依つて、常住この庄屋の心配、とんと苦の絶える間がござりませぬ。憚りながら御推量なされて下さりませ。ヘイ〳〵〳〵。

喜文　ヤア、役にも立たぬ事申さずとも、即ち昨日申しつけ置いた課役の御用金、若殿にもこれにお渡りあれば、今日中に村々より、上納いたすか御返答を申し上げい。大方承知であらうの。どうぢや。

茂作　サア、その事でござります。それゆゑのお願ひ。口にも頰ばる二千兩の御用金。モウ〳〵、なか〳〵ついした事では出來る事ぢやござりませねど、何かお殿樣の仰せなれば、否とも云はれず、ほんのせうなしに、段々と觸れを廻しましてござりますが、村松領は大概の金も寄りまするが、岩瀨隣續村などには、當り前の御年貢にさへ、詰まる程の難澁者が多うござりますゆゑ、やう〳〵の事で村方濱方、一括めに致しまして、どうぞ五百兩で

ト喜文太の顏を見る。喜文太、こなし、睨みつけるゆゑ

イヤサ、アノ千兩で。

トまた喜文太の顏を見て、怖々

御容赦なし下さりませうならば、ナウ皆の衆。

百皆　ヘイ〳〵、有り難う存じまする。

喜文　ムウ、すりや千兩にて容赦を願ふとな。

皆々　ヘイ〳〵、どうぞよろしくお願ひ申しまする。

喜文　若殿、如何計らひませうな。

ト團之丞こなしあつて

團之　課役の儀なれば、願ひの通り、赦免いたして遣はせ。併し、今明日中に調達いたすやう、キッと申しつけてよからう。

喜文　ハッ、畏まりてござります……イヤナニ、茂作を始め百姓ども、いま其方達が聞く通り、課役の儀なれば、御赦免遊ばさるゝ間、お上のお慈悲、有り難いと思ひ、今明日中に、キッと千兩相違なう、御上納いたしてよからう。

皆々　ヘイ〳〵、畏まりました。

團之　金子調達次第、身共直々受取るぞよ。

茂作　ヘイ〳〵、畏まりました。

作作　もし其方持參の節、若殿お留守中なれば、とくと聞き取りしその上にて、若殿お出でなさるゝ所まで、早々

　持參いたしてよからう。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
銀平　お客人御饗應につき、もし新潟の廓へお入りとあれば、新潟にて角屋と尋ね、彼の方へ直に參つてよからうぞ。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
喜文　キツとその旨、相心得、ちつとも早く立歸れ。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
伴作　願ひの旨、お聞き屆けの上は、一時も早く立歸つて御上納金の用意いたせ。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
伴作　サア、早く立て〳〵。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
　ト云ひながら、矢張りヂツとして居るゆゑ
喜文　もう外に用事はない。サヽ、立て〳〵。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
　ト矢張り手を突いて居るを見て
敵役　ハテサテ、立てと申すに。
　トきつと云ふ。
茂作　へイ〳〵、畏まりました。
　ト立たうとして、又ヂツとして居る。
敵役　まだ立ち居らぬか。
　ト又キツと云ふゆゑ、恟りして
茂作　アヽ、モシ〳〵、立ちます〳〵。今立ちかゝつて居りまする所でござります。
　ト立たうとして、痺れの切れしこなしにて
　アイタヽヽ。コレ〳〵百姓衆、最前からあんまり畏まり過ぎて、足まで畏まつて、立つ事が出來ぬやうになつた。どうぞお前方寄つて立たして下され。
百姓　オツと合點ぢや。
　ト兩方より、グツと引立てるを
茂作　アイタヽヽ。
　ト痺れを切らし、ぐんにやりとなる。
百姓　これは困つたものぢや。
　トまた引立てる。茂作、歩けぬこなし。
伴作　ヤア、馬鹿者め、キリ〳〵と歸らうぞ。
敵役　サア、早く立去り居らうぞ。
　トきつと云ふ。
茂作　へイ〳〵、やう〳〵立ちましてござりますが、とんと歩く事が出來ぬわい。と云うて斯うしても居られず。

百皆　いつそ木遣りでやらうか。
　ト木遣りになり
茂作　そこへ頼むは百姓衆。
百皆　ヨウイ〳〵ヨイヤサ。
茂作　靜かに頼むは合點か。
百皆　ヨウイ〳〵ヨイヤサ。
茂作　草履が脱げるワ氣を附けた。
百皆　ヨウイ〳〵ヨイヤサ。
　ト茂作を網の綱にて括り、兩方より手を引ッ張つて、後は右の繩を引き、橋がゝりへ皆々入る。敵役後を見送りてこなしあつて
喜文　ハテ、取り所もない馬鹿者でござるて。ハヽヽ。
伴作　何は格別、先づ千兩の金子調うたと申すも、これ偏へに喜文太どのゝお働らきでござるて。
銀平　近頃以て、お手柄〳〵。
喜文　イヤ、それよりは若殿、この頃仰せられました、彼の國次の一刀、淺緑の御劍は。
團之　コリヤ。
　トあたりへこなしあつて
石が物云ふ世の譬へ。すべて謀り事は密なるを以てよしとす。それにつき、まだ申しつけたき仔細もあれば、爰は往還。人目に立たば、何かの事は、コリヤ。
　トちよつと囁く。
喜文　ムウ。然らば何かの祝ひ事に。
伴作　磯にもやひし屋形に於て
銀平　地場を固めの杯を
喜文　さしつ押へつ思ひの儘。
團之　一獻汲まん。皆參れ。
皆々　イヤ、先づお入りあられませう。
　ト唄になり、皆々上手へ入る。と後合ひ方になり、上手二重の所へ最前の小船に新三郎、三千歳、乘り出て來りて
新三　マア、待ちや〳〵。おれが綱をもやつてやらう。チッとして居や〳〵。
　ト云ひながら、右二重へ上がり、もやひ綱を捨て、石へ括りつけて
サア〳〵、三千歳、爰へ上がりや〳〵。
　ト手を持ち上げる。
三千　アイ〳〵、合點でござんす……わたしやマア、ちよつと手を洗うてから。

ト磯端にて手を洗ひ、紙を出して手を拭く。

新三　マア〳〵、ちよつと此方へおぢや〳〵。一體マアわが身は、どうしたものぢやぞいなう。ちとマア嗜なんだがよいわいの。あの若殿左門之介さまが、キッとしてござる前とも憚からず、じやら〳〵とした事ばかり。ほんにほんにおりやモウ、氣あつかひでならんだわいの。其方もマア素人らしい。ちと嗜なみや〳〵。

三千　何をよい口な。お前こそ女子と云ふと、誰れ彼れなしに、じやら〳〵と云うて置いてからに、ほんにモウ、わたしやお前一人手放して、他所へ上がると、なんぢや知らんが、その間と云ふものは、とッとモウ、この胸がもや〳〵として、思や思ふ程、氣が氣ぢやござんせぬけれど、サア、それとてもわたしばかり、さうは思うて居ても、なんのお前が、何とも思うて下さんせぬゆゑ、二日も三日も顏を見せず、此方ばかり案じさして居さんすお前の心。それには引替へ、あの喜文太面めが、何にも知らずと付けつ廻しつ、しみしつかうしくさるゆゑ、モウモウ腹が立つて〳〵、どうも斯うもならんけれど、人樣の手前何やかや、面耻かゝすも氣の毒さに、やう〳〵逃げて乘つた船には、思はずお前とたつた二人。思はぬ逢ふ瀬でこの中の、とんと痞へが下りたわいなア。

新三　これはしたり、わが身もそれしやで居ながら、町方の生娘がなんぞのやうに、そんな不粹な事云はぬものぢやわいの。

三千　イエ〳〵、わたしや不粹でござんすわいな。町方の生娘御樣のやうに、しつかうお前の側に、斯う引ッ附いて居たいわいなア。

ト寄り添ふ。新三郎、こなしあつて

新三　マア、たつた今船で……アノ、それでモウ

三千　アイナア……お前、否かえ。

新三　なんの否ぢやなけれど。

三千　否でなくば、こちや斯うして居やうわいなア。

ト抱きつくを

新三　これは又、興がるソ。

ト同じく抱きつく。と唄になり、向うより、渚、屋敷娘、古今帽子にて、後より鐵右衛門、親仁の若黨の形にて附き添ひ出で來りて、花道よき所にて

渚　慥かにこの邊と聞きましたが、もう大方爰らであらうわいなう。

鐵右　左樣でござりませう。

渚　ト渚、向うを見て
　オヽ、幸ひ〳〵、向うに見える衆に尋ねたら、知れるであらう。鐵右衞門、大儀ながら其方行て、尋ねて來てたも。
鐵右　ハッ、畏りました。
　ト本舞臺へ何心なく來て、兩人の抱きつき居るを見て恟りこなしあつて、引返し戻らうとして、イヤ〳〵それでは解らぬと云ふ思ひ入れにて、また側へ行つて
エヘン〳〵。イヤ、ちと物が尋ねたいが。
　ト此うち兩人、氣の附かぬこなし。
イヤサ、ちよつとお尋ね申したい儀が……コンサ〳〵、……コレサ……ハテ、よう引きつけた事だわい……コレサ、物が尋ねたい。コレサ。
　ト耳の側へ行き、大きな聲して云ふ。これにて兩人飛び退く。鐵右衞門もこちらへ飛び退いて
イヤ〳〵、苦しうない〳〵。これは近頃お邪魔を仕つてござるて。ハヽヽ、イヤ、時にお身達を驚ろかしたは、餘の儀ではござらぬ。ちとお主達に承りたき儀があつての事と云ふ譯は、彼の當國の領主、稚津家の御遊客、左門之介さまと申すお客様を、おもてなしの御座船は何れでござる。御存じはないか。どうでござるな。
新三　エヽ、その事でござりますか。そりやアノ向うに幕の張つてある、御座船が即ちさうでござりまするが、して又、左門之介さまをお尋ねなさるゝあなた様は、どれからマアお越しなされまして、何の御用でござりますな
鐵右　イヤ、身共は即ち、その左門之介さまのお附き人たる、蔦里破魔之助さまのお妹御、渚さまの御用につきわざ〳〵お供申して、これまで參つたのでござるて。
新三　ナニ、渚さまが。これはしたり。
　ト向うを見て、恟りして下に居て
誠に渚さま、これは〳〵、存じがけない所でお目にかゝりました。マア〳〵、これへお出でなされませう。
渚　オヽ、織殿屋新三郎どの、久しく逢ひませぬの。許じやれ。
新三　サア〳〵、これへお越し遊ばしませ。
　ト渚は本舞臺へ來り、入れ代つて上手の床几へ腰かける。新三郎、こなしあつて
イヤ、誠に御無沙汰ばかり仕りまする段、よろしうお執成しを願はしう存じまする。それは格別、渚さま、左門之介さまに御用とは、なんぞ急な御用でもござりまして

お越しなされましたのでござりませうか、何も氣遣ひな
事ではござりませぬか。

渚　サレバイナウ、其方も内々聞いて居やらうが、若殿左門之介さま事、この度鎌倉表へ御下向遊ばすやうに、御父武將義尚公より、度々の御奉書到來。さりながら、今以て御歸國なきゆゑ、御祖母靈光院さまには、殊なうお心痛め給ひ、即ち若殿のお附き人たる私しが兄上、破魔之助どのへ密かにお詞。何卒して左門之介さま、鎌倉へ片時も早う御歸館の遊ばすやうに取計らひ、くれ〴〵も頼むと、細々の御内意。聞くと等しく権津家へ参りしところに、今日はこの所にて御遊漁、酒席の場所へ参るも如何、幸ひ其方は女子の儀なれば、これより直ぐに濱邊に立越え、靈光院さまの御上意を、詳しく兄に成り代り、密かに申し上げた上、何卒して若殿のお供申して立歸れと、兄上様の仰せゆゑ、わざ〴〵これまで参りましたのでござるわいなう。

新三　それはマア、女中のお足で、御苦勞に存じまする：……イヤモシ、御家來のあなた様、御老體のお供、さぞお辛うござりませう。何を申すも途中ゆゑ、お茶さへ碌によう上げませぬ。

鐵右　イヤ〳〵、構はつしやるな〳〵。

渚　して、若殿様は、どれにお越しなされますぞいなう

新三　ハイ、即ちそこに見えます御座船でござります。ドレ、私しがお供いたしませう。サア、お越しなされませ。

渚　イヤ〳〵、なんぼうわたしを御存じのお殿様でも、御案内もせずに、ズッと参るは無遠慮……オヽ、幸ひ幸ひ、それに居やる女中を頼んで、ちよつと先へ案内さしてたもるまいか。

三千　エヽ、アノ、わたしにかえ。

渚　アイ、どうぞ大儀ながら其方がちよつと。

ト三千歳、ムッとして

三千　ハイ、否でござります。

渚　ヤア。

三千　ついにかお目にかゝつた事もない女中様が、それに居やる女中もすさまじい。アタなめくさつた。アタ好かん。つッとモウ、わしや、否でござんすわいなア。

トつんとする。新三郎、こなしあつて

新三　アヽ、これはしたり、何を云やるぞいの。あなたは誰れあらう、萬里破魔之助さまのお妹御、渚さまと云ふお方、必らず麁相を云ふまいぞよ。

三千　イエ、何もさうは云やしませぬけれど。

新三　サア、けれどなら、ちやつとアノ左門之介さままでお取次ぎ申して上げましたがよいわいの。

三千　でも、あの美しい娘御樣と、お前と爰に置いては。

新三　ハテサテ、これはしたり、アレ、あのやうに御年輩な御家來も附いてござる程に、氣を廻さずと心措きなうお取次ぎをして上げましや／＼。

三千　そんなら、そんな事はないのぢやぞえ。

新三　ハテ、阿房らしい。そんな事があつてよいものかいの。

三千　それでもわたしや、ツツとモウ、氣にかゝつて。

ト新三郎と顏見合して

でも、どうやら。

トこなし。新三郎もこなしあつて

新三　エヽ、モウ、早うさう申しやいの。

三千　ハイ／＼、今云うて行くのぢやわいなア。

ト行かうとして、渚を見て

ほんにマア、いろ／＼の人が來てからに。

新三　まだ行きやらぬかいの。

三千　サア、行くわいなア。

ト、つんとして、バタ／＼と足音して、上手へ入る。鐵右衛門、後を見送りて

鐵右　でも騒がしい女ではあるわい。

新三　ハヽヽヽ、イヤモウ氣隨な女子でござりますでの。

渚　イヤナウ鐵右衛門、其方は暫時用事はない程に、大方お臺所船もあらうに依つて、それへ行て暫らくのうち休息して待つて居や。

鐵右　ハツ、畏まつてござります……イヤ、お若いの、お臺所船は何れでござるの。

新三　ヘイ／＼、そのお勝手船は、アレ／＼、今あの女子が入りました、隣りの船が、卽ちお臺所船でござりまする。

鐵右　成る程。然らばそれへ參つて、お待ち申さう。

新三　御ゆるりとお休みなされませ。

鐵右　左樣ならばお歸りの節は、お呼び出し下さりませう。若い者、渚さまを頼んだぞよ。

新三　ヘイ／＼、畏まりました。しつかりとお預かり申しました。

鐵右　然らばよいな。よければ、ドリヤ參らうか。

ト捨ぜりふにて上手へ入る。兩人後見送りながら渚、

諸　新三郎へ心意氣あつて、思はず新三郎の側へ寄り添ふ。新三郎も氣味合ひあつて、鐵右衞門の後を見送りながら、フト振返りて、兩人顏見合し、これにて諸は上氣してハッと袖にて顏を隱し、後へ寄る。新三郎もこなし、これにて合ひ方になり、新三郎、こなしあつて、あたりに落ちてある貝を拾ひ上げる。諸、これを見て思ひ入れあつて、新三郎の側へ行き、こなしあつて

　そりや何ぢや。

新三　これでござりますか。

諸　サア、その貝の名は、何と云ふのぢやえ。

新三　ハイ、あなた、これを御存じござりませぬかえ。

諸　どうぞ敎へてたもいなう。

新三　御存じなくば申しませう。こりや俗に申します子安貝と云うて、お女中樣方は、御安產のお守でござります

諸　そんならその貝は、嬰兒產む時のお守になるのかや

新三　なります段ぢやござりませぬ。しかもあなた樣のやうな、美しいお娘御樣は、御器量はよし、お姿と云ひ、引く手數多のお身なれば、追ッつけお產の紐遊ばし、玉のやうなる和子樣を、安々とお喜びなされますやう、ちやつとお拾ひなされまして、お持ちなさるゝがようござりませうかと、私しどもは存じましての。

　ト貝を差出す。諸、こなしあつて

諸　成る程、心を籠めしそもじの詞。如何にも產は女子の大役、一期の大事と聞いては居れど、埒定めぬやもめ鳥、いつかは產の紐解き樂めん。ほんに辛氣な身の上ぢやわいなう。

新三　イエ〱、何をよい口な。人は知らぬと思へども、蔭裏の何やらと、さぞ睦まじう二世かけて、よいお樂しみがござりませうなア。アヽ、ほんに思へば思ふ程、アタお羨ましい、アタおめでたい。エヽ、いつそモウ、アタ憎らしい事でござりますわい。

　トこなし。

諸　何を云やるやら。不束な身にしあれば、誰れかは誘ふ水もなし。

新三　梢の花は見たばかり、わたしら風情が身分では、手は屆いても手折られず。

諸　イヤ、手折らるゝぞや。

新三　エヽ。

諸　サア、此方は手折らるゝ枝なれど、今のやうな美しい、室の早咲き梅花の薫り、外の花には目は附くまい。

新三　イエ、附きますぞえ。ハイ、ずんど附きます。植ゑて見よ花の育たぬ里もなし。

渚　そんなら眞實、ほんぼんに

新三　手折らしなさるゝお心かえ。

渚　神の木なら匂野末の梅。

新三　外に咎むる人さへなくば

渚　まだ咲き染めぬ主なき花。

新三　そんなら、いよ〳〵わたしにでも

渚　どうぞ手折つて

ト新三郎と額見合して

たもいなう。

ト顔を隱す。新三郎、差寄つて

新三　ムウ。そんなら町人風情の私しに。

トこなしあつて

エヽ、有り難う存じ奉りまする。

ト慇懃に兩手を突くを

渚　コレ。

ト兩手を取つて

そのお禮は、わたしの方から。

新三　イエ〳〵、私しの方から。

渚　イヤ、わたしから。

新三　イエ、私しから。

ト兩人せり合ひ、フト額見合して

渚　オヽ、嬉し。

ト抱きつくと、上手内にて

鐵右　渚さま〳〵。

ト呼ぶ。これにて兩人、恟りして、東西へ別れると

渚さま〳〵、渚さまはどれへござつた知らん。

トよびながら出で來りて、渚を見附けて

オヽ、これはしたり渚さま、まだこれにお出でなされましたか。若殿樣の仰せには、御祖母樣よりのお使ひとあれば、早速御對面遊ばさんと、お臺所船に罷り居つた拙者めに、渚さまをお迎ひ申して參れよとの儀でござります。サア、ちやつとお越しなされませう。

渚　そんなら直ぐに御座船へ。

ト新三郎へこなしあつて

サア、案内して下され。

新三　ハイ、畏まりました。サア、斯うお出でなされませ

ト唄になり、新三郎、渚、鐵右衞門、二重へ上がり小船に乗り、上手へ入る。と後木遣りになり、上手より

三千逃げて出る。後より喜文太、追ひかけ出で來りて、トゞ三千歲を提へて

喜文　イヤ、ドツコイ〳〵、滅多に逃がさぬ〳〵。コリヤ三千歲、さりとは其方、酷い者ぢやなア。若殿のお供して、新潟の廓へ行く度々に、口說いても〳〵、何がな優しい詞はなし、只つん〳〵と七里けつぱい。情を商ふ身を以て、あんまり酷い其方の意氣張り。情が剛いも程がある。新三郞ばかり男ぢやない。ちつとは外の加減も御覽じ。おれがまた味と云ふものは、どうやうにあらうぞ。一つ食べたら忘れられぬ。肝心かんもんのその風味。一口上がつてその上で、お氣に入つたら御しなみ、袋入りが十錢から。サア、ちやつと來い〳〵。

ト抱きつきにかゝるを突き退けて

三千　エヽ、アタ阿房らしい。又しても〳〵、アタ嫌らしい、否ぢやわいなア。

ト逃げうとするを、抱き留めて

喜文　これはしたり、其方はつれないといふものぢや。

三千　サア、どう云ふ事やら、わたしや嫌ひぢやわいなア

トまた振り切り逃げうとするを

喜文　イヤ、ドツコイ〳〵、その手は食はぬ。なんぼうわが身が嫌ひでも、此方は好きぢや。金輪際飯より好きの證據には、てもマア氣の早い。もう堪らぬやうになつて來た。幸ひあたりに人目はなし、漁場の事なら砂どりに

ト無理に引きこがさうとするを

三千　アレエ〳〵。

ト突き退けうとする。

喜文　なんぼなりと聲立てたり。此方は構はぬ〳〵。

ト又追ひかける。と上手内にて漁師女形

女皆　取つてくれう〳〵。

ト釣り狐の鳴り物になり、お浪、お磯、おさの、お雪皆々逃げて出る。後より漁師皆々追ひかけ出て

漁　どれにせう。これにせう、選り取りに取つてくれう。水あげを取つてくれう。

ト女形逃げ廻る。漁師追ひかけ、この拍子に喜文太を突きこかす。

喜文　コリヤ〳〵、うぬら、身共をどうしをるぞ。

ト云ひながら、三千歲を提へに行かうとする。此うち三千歲、上手へ逃げて入る。喜文太、皆々に行き當り隔てられながら追ひかけ入る。入れ違ひに上手より伴作、銀平、喜文太を尋ねるこなしにて

作銀 喜文太は何れへ參つた。喜文太々々々。
ト云ひながら出て來るを、漁師皆々女形と取違へ、兩人を突きこかし、押へつけると
ア、コリヤ、身共らをコリヤ、なんと致す。
トこれにて恟りして
漁師 ヤア、こりや違うた。
ト顏を見て後へ寄る。
作作 見れば漁師どもが打寄つて、仲居ども一つになり、コリヤ自體。
作銀 なんの態だぞ。
浮藏 イヤサ、これはアノナニ、オ、斯うでござります。今日の網曳きに漁がきゝましたゆゑ、お殿樣にもきつい御機嫌。
網六 それゆゑに、お褒めのお詞にあづかりまして、私しどもへ御酒を下さりましたところが、生肴は皆お上へ差上げましたゆゑ、とんと此方に肴がござりませんゆゑ、ナウ皆の衆。
網右 それ／＼、せめては爰に居ります精進の生き物を、追ひ廻して居る所でござりまする。
女皆 アノマア、憎てらしい口わいなア。
いそ ちつと叱つて下さんせいなア。
作作 エヽ、うぬら、上を恐れざる憎い奴。キッとお叱りをと云ふ所なれども、今日の働らきに免じて、料簡の致してくれるぞ。
銀平 以來はキッと心得居らうぞ。
漁師 ヘイ／＼、それは有り難うござります。
トばた／＼にて喜文太、上手より出て來りて
喜文 御兩所樣には、これに居合されたよな。
作作 あわたゞしい喜文太。して、我れ／＼に、なんぞ用事でもあつての儀か。
喜文 如何にもと申す仔細は、只今お屋敷より早打ちが參つてござるて。
兩人 ナニ、早打ちとは
喜文 さればサ、兼ね／＼お尋ねの盜賊、その首領たる自來也と申す者、當國へ入込みし風聞。早速見屆けに參りしところ、數多の手下附き從ひ、屯ろを致し居るとの有樣、誠に諸大名の軍立て同然との訴へでござるて。
作作 ナニ、彼の自來也と申す盜賊か、入込みしとな。
銀平 一方ならぬお國の大事。
喜文 サ、それゆゑにこそ御兩所に、見屆け參れと國之丞

さまの御仰せ。まつた若殿左門之介さまには、これより直ぐに新潟の廓へお越しとの儀。後は萬端お任せあつて御兩所樣には、これより直ぐに。

作作　云ふにや及ぶ。見屆け參らん。然らば喜文太。

喜文　御兩所、御苦勞。

作作　銀平、來やれ。

銀平　合點ぢや。

ト兩人こなしあつて、橋がゝりへ走り入る。

なみ　皆樣、聞かしやんしたか。左門さまや團さまも、御一緒にこれから直ぐにお越しとの事。

いそ　サア、それなればわたしらも共々に、お供申して去ならではあるまいかいなア。

皆々　それがよからうわいなア。

喜文　オヽ、サ、左樣いたせ。身共もお供いたさうから、身共に附いて斯う參れ、

皆々　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。

ト唄になり、皆々上手へ入る。漁師あと見送りて

浮藏　なんと皆の奴等、今のを聞いたか。お頭にもこの頃この國へわせられたとの事。

綱六　それについて、兼ね〲お話しのあの左門之介め、どうぞ近寄つて打ち殺してしまはうと思うても、お側去らずのあの破魔之助、彼奴が居つては手出しもならず、どうぞと思ふ折に幸ひ。

綱右　今日に限つて破魔之助、附いて居ぬこそ天の與へ。その上今のざぶが話し。

綱六　團之丞めと只二人、これから廓へ行くとの噂。

綱右　暮れるに間もなし屈竟。

浮藏　姿を變へて道に待伏せ……コリヤ

トちよつと囁く

漁皆　そんなら先へ。

浮藏　皆まで云ふな。來い〲。

皆々　オヽイ。

ト皆々下手へ入る。この前より渚、鐵右衞門、上手より出かけ、聞いて居て、この時、ツカ〲と出かけて後見送りて、兩人こなしあつて

鐵右　渚さま。

渚　鐵右衞門。

鐵右　思はず聞きし只今の、ひそ〲話しは

渚　誠の漁師と思ひの外、矢ッ張り盗賊自來也が、入込ませたる手下の者ども。

鐵右　その上聞けば若殿を、討ち奉るとの今の目論見。

渚　もしもの事があつた時には、兄上破魔之助さまの越度となり、矢ッ張り椎津のお家にも

鐵右　かゝりや繋がるお國の大事。

渚　これより直ぐにお屋敷へ。

ト身拵らへする。

鐵右　お知らせ申すが互ひのお爲。

渚　そんなら鐵右衛門。

鐵右　渚さま。

渚　サア、おぢや。

ト唄になり、兩人こなしあつて、向うへ走り入る。と

チョンと淺黄切つて落す。　返し

造り物、向う淺黄幕になり、上手へ石の鳥居出しかけ、石燈籠、玉垣を突き出す。下手へ葭簀圍ひの茶店。床几二三脚出す、庭神樂にて道具納まる。

ト向うより軍八、中月代、すいぼうの形、長脇差に雉子一羽括りつけ、これを擔げ、後より靑太、一升樽と曲物、竹の皮包みを網に入れ、これを振りかたげ、次に徳兵衛、肝煎の形にて附き添ひ出て來りて

徳兵　サア、よいとばかりでは、事が濟むものかいの〳〵。

軍八　ハテ、おれがよいと云うたら、よいにして待つたがよいわい。

徳兵　イエ〳〵、待つたがよいも聞き飽いた。サア、なんでも埒あけてもらはねばならんのぢや〳〵。

軍八　ハテサテ、高で借りた金。利を附けて返したらよいぢやないかい。

徳兵　イヤ、利付けも利詰めもいらん。元金の六兩さへ戻りやよいのぢや。自體あの金は、こな樣も知つての通り、奉公人の手付け金。わしも慰み場で貸したと云ふのぢやなし、ほんの顏づくで取替へた六兩。それぢやに依つて

軍八　サア、それぢやに依つて返すのぢや。盆の上なら、なんの返さうぞ。貴樣もそんな野暮を云はずと、マア、向うへ行て、一杯入れたがよいわい……コリヤ〳〵靑太よ、亭主めに燗させ〳〵。

靑太　オイ〳〵、合點ぢや〳〵。

ト先へ立つて本舞臺へ行き

オイ〳〵、亭主々々、燗一つつけてもらひたい……エ、何奴も居さらぬさうな。

ト此うち軍八、徳兵衞、本舞臺へ來る。
ドレ、いつそおれがつけて來やんせうわい。
軍八　オヽ、さうせい〳〵。
ト云ひながら腰かける。徳兵衞も側へ腰かける。
青太　オットショ。
ト葭簀の内へ入る。
徳兵　時に酒は後にして、マア、金の方から片附けてもらはうかい。
軍八　ハテマア、やかましう云はんすな。こんで居るわい
徳兵　サア、やかましう云ふ氣はないが、默つて居られぬと云ふは商賣づく。おれが奉公人の手付け、上げて戻つた六兩を、こな樣が見附けて、今夜六兩ないと、命づくぢやと云はんすが氣の毒さ、何にも貸すべき恩は受けねど、こな樣も元は代官の息子どので、巾の利いたこな樣の事ゆゑ、滿更聞き捨てにもならずと、曉の朝烏がカウと云ふまでの約束で、貸してこました六兩の金、それから今日で、もう半月餘りにもなれども、なんの便りもないに依つて、内へ行て見りや、何時でも留守。尋ねて廻れば先から先へ、捉まへ所もないこな樣の體。思はず知らず今日迄で、出ッくはしたのは此方の仕合せ。氏神樣のお引合せ。逢うた時に笠とやら、なんであらうと今戻さつしやれ。サア、受取らう。どうでごんすぞいの。
ト此うち軍八、網の中より曲物、竹の皮包みを出して居て
軍八　ハテ、息精強い男ぢやわい。今でこそすいぼうなれ、元は五十嵐郡右衞門が忰ぢや。高で知れた六兩の目腐れ金、滿更砂にしてよいものかい。博奕打ちと相場師は、一夜のうちに早變り、貧乏にもなり、また金持ちにも、ありさへすれば直ぐに返す。マア、さうせか〳〵と云やんな。につたり笑はす事もあらうわいの。併し、この青太めが、何して居るやら。早う持つて來んかい。
青太　オイ〳〵、今持つて行く所ぢや。
トたんぼを持ち出て
ソレ出來た。上燗ぢや〳〵。
軍八　出來たか。出來たりや茶碗おこせ。
青太　オットショウ。
ト茶碗を渡す。
軍八　サア、一つつげ〳〵。
ト青太、酒をつぐ。軍八、一つ飲んで
マア、仲直りぢや。徳兵衞、一杯飲みや。

徳兵　イヤ、わしや酒よりは金が戻して欲しいわい。
軍八　エヽ、合點の悪い。戻すと云うたら戻すわいの。コレ、鬼神に横道なしとやらで、なんぼうおれがやうな者でも、わが身なぞに借つた金、返さいでならうかい。マア一杯飲みや：　飲まぬか。飲まにやおれが飲むわい。
ト茶碗にて酒を飲む。この時、下手よりお傳、花車の形、抱へ帶にて出て來りて、ズッと上手へ行かうとするを、軍八、見附けて
オヽお傳、見ぬ顔して行かうとは、どうしたものぢや。さうしてマア、どこへ行くのぢや。
徳兵　オヽ、ほんに新潟の角屋のお傳さま。マア／＼、爰へおかけなされませ。
でん　オヽ、これはどなたかと思へば軍八さま、肝煎の徳兵衛さま。變つたお連れでござりますな。ハヽン、さては秋の野駈けの紅葉狩でござりますな、きついお樂しみでござりますな。
軍八　紅葉狩とは有り難い。樂しみどころか、今この鬼に惟茂が、責められて居る所ぢやて。ハヽヽ。
でん　そりや又、どう云ふ譯でござりますえ。
徳兵　サア、譯と云ふはお傳さま、聞いて下さりませ。先度あなたへも見せました新造、いよ／＼こちらの方に相談が出來て、手付けを上げて戻る道で、無理に借られた六兩の金、明日の朝までと云うて半月餘り、埒があかぬゆゑこの催促。
でん　さうでござんすかえ。わたしや又　二人連れで、きついお樂しみぢやと思うて、けなりかつたわいなア。
軍八　けなりいと云ふは其方の事。なんぢや、脇目も振らず。マア、どこへ出かけるのぢやぞいの。
でん　サア、お前も知つての通り、こちの人が鎌倉へ行かしやんして、奉公人の事がごてついて、小一年もかゝつて居やしやんすゆゑ、どうぞその事も早う濟んで戻らしやんすやうにと、氏神樣へお願ひ申さうと思うて、出かけたのでござんすわいなア。
軍八　でもマア男思ひぢやなア。
でん　ハテ、わたしぢやとて女子の端。大事の男を手放して、氣にかゝるのは女房の常。戻りの遲いを待ち兼ねるも、滿更無理ではござんせぬわいなア。
軍八　さう聞けばその筈かい。シタガ、どうぢや。おれで間に合す氣はないか。
でん　ホヽヽ、何を云はしやんすやら。何時も御機嫌でご

ざんすわいなア。さうしてお前、お宮へ參るなら、一緒に行きませうかえ。

德兵　イヤサア、參るは參るのぢやけれど。

ト軍八へこなし。

でん　ハテ、お前も粹ほどにもない。門中でそんな事云うたとて、どうなるものでいなア。ちと後先を見て云うたがよいぢやないかいなア。

德兵　それでも、逢ふ時に笠とやら、なんでも今日はどの道。

でん　ハテ、あのお方も五十嵐軍八さまぢやもの。金が出來たら戻さいでなんとせう。半月も待つた事なら、今日明日にぬかりもあるまい。待ち次手に待つて上げたがよいわいなア。

德兵　ぢやとて、あんまり。

でん　サア、聞いたが不請、わたしもかゝり合ひぢや程にコレ、待つて上げさしやんせいなア。

德兵　それはさうぢやが、今日取り外したら、又いつ逢ふ事やら……と云うて、お傳さまの挨拶も潰されず、そこがをかしい物のやうな、物のやうで、とツとモウ。

ト愚圖々々云うて居る。

軍八　どうぢや。待たれぬか。エヽ、愚圖々々と、女子のお傳でさへ譯の分る事を、エヽ、埒の明かぬ男ではあるわい。

でん　エヽ、ほんにモウお前も男らしくない。どうぢやぞいなア。

德兵　ようござります、待ちませう。お前樣の挨拶ぢや、隨分待ちませうが、軍八さま、金が出來たら、ようござりますな。

軍八　ハテ知れた事。利に利を附けて返してやるわい。

德兵　イヤ、その太平樂も久しいものぢや。

でん　サア、これでわたしの顏も立つたと云ふもの。そんなら軍八さま。

軍八　オヽ、お傳、世話であつたの。

でん　ナンノイナア、そんなら德兵衞さま。

德兵　お供しませう。

でん　軍八さま、これに御ゆるりと。

軍八　參つてごんせ。

でん　ドリヤ、參詣せうか。

ト庭神樂になり、こなしあつて兩人、鳥居の内へ入る軍八、後見送りて

軍八　エヽ、忌々しい。今日は雉子一羽占めたゆゑ、大分滿が直つて來たと思うて居た所へ、嗇い奴がうせて、アタ怪體の悪い。コリヤ青太よ、わりやどうで先へ內へ去ぬるであらう程に、この雉子を持つて去んで、洗うて置け。晩の肴ぢや。合點かよ。

青太　そんなら、おりやモウ先へ去にやんせうわい。

軍八　オヽ、さうしてくれ。何もかも一緒に持つて去んでくれよ。

青太　オヽ、合點ぢや〳〵。

ト青太、捨ぜりふにて右の雉子酒樽など持ち、橋がゝりへ入る。後見近りて

軍八　滿直しに、ドリヤ、一服してこまさうか。

ト床几にかゝり、煙草のみかけると、唄になり、向うより喜樂齋、田舍醫者、親仁の形、懐へ抱き子を入れ後よりお衣重、嫁の形。着付け抱へ帶、笠と杖を持つて出で來り、花道よき所にて

喜樂　オヽ、嫁女や、此方の在所から近いと云うても、大分の道。さぞ其方は辛どからうの。

衣重　何を舅御樣の仰しやりますやら。坊はお前樣が抱いて下さんすし、わたしが體一つだけ、なんの辛どうござりませう。シタガ、わたしよりは、お前樣、お年寄りの上、坊を抱いて居やしやんすゆゑ、定めてお辛どうござりませう。幸ひ向うに茶店がござります。マア、あれへ行て一服なされて、お休みなされませいなア。

喜樂　オヽ、さうしませう。サア〳〵、おぢや〳〵。

衣重　アイ〳〵。

ト本舞臺へ來る。軍八、見て

軍八　オヽ、これは誰れかと思や、隣村の醫者どの、見りや嫁御を連れて、どこへ行くのぢやの。

喜樂　オヽ、こな樣はこの頃、此方の方へ戻つて見えた軍八どのとやら。さてはこのお宮へ參詣でござるの。

軍八　アイ。

トお衣重を見て居る。

喜樂　イヤ、御免なされませ。サア〳〵、嫁女もかけさつしやれ〳〵。

衣重　アイ〳〵……お前樣、ようお參りなされましたなア。

軍八　アイ。

トぢつとお衣重を見て居て、兩人顔見合すこなし。

衣重　ドレ〳〵、お祖父樣はお辛どからう程に、母樣が代

つて、抱こ〱してやりませうぞや。

ト側へ寄る。

喜樂　そんならちつと替つてたも。シタガ、コレ、見や。よう寢て居るぞや。さうして又、この寢顏と云ふものは、ほんに可愛らしいと云はうか、とんと佛樣ぢやハヽヽ。

ト餘念なきこなし。

軍八　イヤ、嬶衆や、昨日ちよつと聞いたが、亭主の留守に、俄の未進の嚴しいお取立てと村中の噂。見りやこな樣達は親子連れで、それにも構はず宮參りとは、ゆつくりとした事ぢやの。

喜樂　イエ〱、さうではござらぬ。マア、聞いて下され何か兄めが留守のうちに、思ひがけない俄の未進。それも日取りのある事か、やうやく爰三日の間に、償うて差出せと、お庄屋樣の云ひつけ。もし又それが出來ぬ時には、水牢へ入れるとの嚴しいお觸れ。何を云うても大枚の二貫五百匁、今云うて今出來る位ならば、これまでの無沙汰はせず、一言なしに出しもせうが、何分ともに先約に、出來憎いのが金づくと、サア、理窟云うても屆かぬはお上の御沙汰。せう事なう否でも拵らへて出さねばならぬ金の出所。そこで此方わきに一家があるゆゑ、せめてはそれへ無心なと云はうと思うて、わざ〱嫁女を連れて、出かけたのでござりますての。

軍八　ハテナウ、それは氣の毒な事ぢやの。

喜樂　イヤモウ、推量して下さりませ。

軍八　さうして、その無心は出來たかの。

喜樂　イヤサア、折角行きましたれど

軍八　出來まいがの。

喜樂　とんとその通りでござります。

軍八　なんの出來やうぞ。出來ぬ事は知れてある。

ト　お衣重が側へ行き

な〱と嬶衆、どうしたものぢや。日頃からおれが深切に云ふは爰ぢやての。こんな事云うたら、また氣に障らうか知らんが、われが亭主の源五郎とやら云ふ和郎は、滅多に戻つては來ぬぞよ。ハテ、合點の惡い女子ぢや。おれが云ふ事を腹立てずと、よう聞いたがよい。その源五郎が戻つて來ぬと云ふ證據は、ソレ、そこに居る親仁ぢや。あのやうな年寄りを抱へて、まだその上に子悴はあるし、未進には詰まるし、戻つた所が面白ない。そこを思うて出た亭主、なんの戻らう戻りやせんぞや、可哀さうに子悴や年寄りを突きつけて、置き去りにした源五郎。

いつまで待つても詰まらん詮索。そこには又、捨てる神あれば拾ふ神と、爰が思案の極め所。物は相談、この軍八は男を立てるおれが氣性。先の男へ面當てに、おれが女房になりさへすりや、未進も濟ますし、榮耀の有り條あの親仁にも、あんな薄い形はさゝず、そ樣は氣苦勞助かり、一生安樂。なんとマア、うまい事揃へのそ樣が身の上。應と云うて思案しや。コレ、貴樣もちと、氣に張りでも持つて、おれが云ふやうになつて見たがよいわい。コリヤ、應と云や〳〵。どうぢやぞいやい。

ト後から抱きつくな

衣重　ア、コレ、坊が目を覺ますわいなア。

ト振り放し、喜樂齋が側へ行き

エ、モウ、父樣、聞いて下さんせ。アダ好かん。やうやく後月頃から、此方の在所へ戻つてござんした、このすいぼうとやら云ふお人が、わたしを見ると付けつ廻しつ嫌らしい事の有り條。まだその上に、こちの人源五郎どのは、わたしを置き去りにして、もう戻りはせぬのなんの彼のと、ほんに〳〵腹の立つ事ばつかり。さうして昨日から、一倍氣を揉んで居るものを、アタ阿房らしい、女房になれの云ふ事を聞けのと、あらう事かあるまい事か、お祖父樣の側で今の體裁。今までは舅御樣の手前も氣の毒さに、ヂッと隱して辛抱して居ましたが、あんまりの事で、わたしやモウ〳〵腹が立つて〳〵、なる事ぢやござりませんわいなア。

喜樂　もうよい〳〵。其やうに腹立ちやんな。若いうちは得てなんの彼のと人の云ふものぢや程に、もう料簡しや料簡しや。あんな人に相手になる事はない。此方へ來て居やれ。

軍八　イヤ、親仁どん、和御寮達は、なんと聞いたか知らんが、おれが云ふ事を惡う聞かぬがよいぞや。ハテ、此方は正直、ほんの深切と云ふものぢやぞや。と云ふは知れた事、肝心の内の亭主が、置き去りにして家出したら、後は年寄り女子の事、食はれぬは知れた事。そこを思うてこの軍八さまが、ア、コレ、可哀さうに詰まるまい、二つには又好い女房、あんな女子を捨て置くは、勿體ないもの惜しいものと、フッと思うたが緣の端。不便から出てツイ惚れた。ハテ、おれも軍八ぢや。隨分人中へ出りや、小口の一つもきく男ぢや。後先詰まらぬ事云ひ出してよいものかいの。マア、なんであらうと、おれが云ひ條に附いて見たがよい。第一番に源五郎への面當て。

第二番手が末進を濟まし、親仁どのにはお襠を重ね着、乘り物吊らして大事にするワ。又そ樣には女子男を置いてやるワ。その餓鬼めはお乳母を置いて、それこそほんに坊樣育ち。さうなりやコレ、世間へ外聞、皆が出世。滿更惡い相談でもあるまいがの。なんと親仁どん、嬉衆、談合して見る氣はないか。今の世に慾を知らぬ者はあるまい。應と云うて女房になつてに見ぬか。コレ、どうぢやな〳〵。

喜樂　否でござる。

軍八　ヤ。

喜樂　不承知でござるぞ。今でこそ身貧に暮らせ、元は足利の旗下、渦見權藤次常景と云ひし身分。悴源五郎が安否知れざるゆゑ、互ひに立てる舅嫁、道を守り義を立てる、二人の心は知らずして、道ならぬ事の便々と、聞くもなか〳〵この身の穢れ。重ねて云やるな。聞く耳持たぬぞ。

軍八　これはまた惡い料簡。貴樣が云ふのは昔氣質。それはズッと前の分別。今時流行らぬ馬鹿偏屈。今の世界は慾の世の中。名を取らうより德を取れと、サア、こんな事云うたとて、所詮親仁では埒が明くまい。マア、舅御は退けて置いて、コレ嫁御、どうぢやな〳〵。こな樣も二月餘り、淋しう暮らして居やんすりや、滿更否でもあるまいがの。コレ、親仁は抛つて置いて、應と云や〳〵

ト お衣重、あちら向いて居るゆゑ

親仁どの、ちよつと退いて貸しなされえ。

ト喜樂齋を引退けて

どうぢや。あんまり憎うはあるまいがの。

ト お衣重にしなだれる。

衣重　エヽ、又かいなア。

ト無理に抱きつくを喜樂齋、引退けて

喜樂　年こそ寄つたれ、理不盡な事しやつたら、以前の手の內、免しはせぬぞ。

ト合口に手をかけキッとなるを

軍八　何を猪口才な。片手にも足らぬひんこ親仁め、わいらが幾人しやきばつても、何とも思はぬ軍八さまぢやが、それ程嫌がるわいらを、無理に養ひたがる事もないわい。幸よいワ。なんとせうぞ。緣ない衆生は度し難しぢや。幸ひ亭主めも居らず、なんぞ好い鳥のかゝるまで、藪籔の內で一寢入り。果報の來るのを待つてこまさう。

ト唄になり、茶店へ入る。後に兩人、顏見合してこな

し。
喜樂　如何に時世時節と云ひながら、あのやうな者にまで見侮られたる今の身の上。思へば〳〵。
衣重　舅御樣。
喜樂　嫁女。
衣重　口惜しうござりますわいなア。
ト泣き、合ひ方になる。
喜樂　口惜しいは道理〳〵。其方とても由緒正しき武士の胤、武運の末か死に絶えて、孤子同然の其方の身の上。緣でがな兄源五郎が嫁に貰ひ、夫婦仲よう睦まじう、暮らすを見るも老の喜び。孫の源吉は其方衆夫婦連れ立つて、野良よりの戻りかけ、櫻木塚の側に捨ててあつたを拾ひ取り、連れて戻りやつたが親子の緣。
衣重　サア、いづくの誰れが胤ぢややら、育て居やつたる着物の鹽梅、由緒あるお人の胤かして、ほんに氣高い產れつき。去年は軍があつたゆゑ、もしやどこぞの大將樣の落し子ではあるまいかと、夫婦が云ひ〳〵、今日が日まで、育て上げたは何ぞの緣。自腹痛めず此やうな、好い子を儲けるわたしが嬉しさ。まだしもこれが悲しみのほんの樂しみとやら云ふ事でがな、ござりませうわいなア。
喜樂　サイオウ、それにつけても、憎い奴は弟の雅次郎め、所詮田舍でおれが手で、醫者の修行は出來まいと、思うたゆゑに緣を求め、わざ〳〵京へ書生にやりし甲斐もなう、醫者に無益の劍術を好み、四年前に家出して、行く方知れぬ不孝者と、サア、云ひは云ふものゝ、今にでももし戻り居つたら、また相談の相手にもなり居らうものと、思ふも矢ツ張り親の因果。
衣重　そりやその筈でござりませうとも。どうぞ早う戻らしやんしたら、お前樣のお心休め。二つには又今度の未進、課役とやらの上納金。急になりしもあなたの氣苦勞。出さねば直ぐに水牢へ、お前を入るゝと嚴しい云ひつけどうぞしてなと今暫し、源五郎どのが戻りまでと、云うても聞かぬ急の取立て。
喜樂　ナア、それとても、末の短かい年寄りのおれ一人、水牢へ入れて算用の濟む事ならよけれども、今にも忰源五郎が戻つて來たら矢ツ張り身の上、かゝる難儀は知れた事。如何に貧苦に迫るとて、二貫五百匁と云ふ金ゆゑに、親が水牢に入れられしと、後にて聞かばなんぼうか口惜しいとも無念とも、思ふであらうと思ふゆゑ、一日

なりと延さんと、その日送りの未進の斷わり。

衣重　それにマア源五郎どの、如何に親御の云ひつけで、取つて來ねばならぬ藥にもせよ、あらう事があるまい事が、月越しかけて他國歩き。内の難儀も露知らず、どこにどうして居さんすやら、早う戻つてくれたがよい。ほんに辛氣な事ぢやわいなア。

喜樂　イヤ／＼さうでない。あの源五郎が戻つて來ぬは、わしのへ孝行。元はと云へばわしが麁相。その譯と云ふは、その昔唐土より、日本へ渡つて來たる西天草、金瘡を癒し、また蘇生の効ある名草藥品。その砌りには北國にて、種を下ろすとありしは、即ち今信濃なる園原山。この山中には萩多く、その萩にまとへる藥草、箒木と云ふ名草こそ、西天草の種にして、陰虚火動の疵を靜める即効あるゆゑ、それを取り得ば價は萬金。何卒それを尋ね出し、持ち歸れよと云ひつけし、親の望みを叶へんと一月と過ぎ二月と、月越しかけておのれやれ、取り得んものとあれが正直。それとても留守のうち、この取立てがあらうとも、知らねばこそ戻らぬも尤も。

衣重　ほんにさうでござんすなア。これを思へば世の中に

喜樂　貧すりや鈍する譬への通り

衣重　思うた事の一つとして

喜樂　儘にならぬが浮世の慣ひ。

衣重　どうぞ仕様は

兩人　ない事かいの。

ト顏見合し、しいなりとなる。と在郷唄になり橋がゝりより茂作、幕明きの形。その外百姓皆々附き添ひ、捨ぜりふにて出て來りて

茂作　なんでも見附け次第引ッ捕へて、お代官へ連れて行かねば、村中の迷惑になる程に、皆の衆、合點ぢやの。

百姓　そりや合點して居ますわいの。

ト茂作、フト喜樂齋を見て

茂作　ヤア、そりやこそ知れたぞ。百姓衆、捕へて下され。

百姓　オッと合點ぢや／＼。

ト喜樂齋、お衣重を捕へにかゝるを

喜樂　ア、これはしたり、こなた衆、この親仁や嫁を、何ゆゑに手籠めにさつしやるのぢやぞ。

茂作　イヤ、なんでとは、どうぢやいの。昨日お殿樣から云ひつけられた課役の年貢、それにこなたの所の當前は愚か、三四年と云ふもの、だん／＼と足らぬ勝ち。今度

の課役と〆め上げて、丁度二貫五百匁と云ふ未進。今の相場に直したら、大方凡そ四十兩。それ位の金高なればこそ、一應足しになる金高。是非とも出さして貰つて來い、もしいざこざと云ひ返し、出さぬ時には連れて來い、出さぬ代りに水牢へ、打込んでなと出させにや置かぬと、それは〳〵代官樣より、この庄屋茂作へ嚴しい云ひつけ。そこで昨日ちよつとその事を、お主達に云うたりや、是非後までには拵らへると云やつたゆゑ、もう持つて來るか〳〵と、晝前まで待つて居たれど、なんの便りもないゆゑに、おれもとんと氣ならぬゆゑ、ソツと覗きに行つて見れば、親子ともに内には居ず、暫らく待つても戻らぬゆゑ、さては源五郎が後追うて、てつきり駈落ち南無三方、胸は早鐘時の鐘、途方に暮れし只中へ、折よう出逢ひし百姓衆。

百一　譯を聞いては氣の毒な、庄屋樣のみかおいらまで、矢ツ張り難儀になるとの事。

百二　それゆゑ隣りで尋ねたら、氏神樣へ參つたと、聞くと其まゝ後追うて、やう〳〵出逢うた二人の衆。

茂作　それおぢやに依つて引立てゝ、お代官へ連れて行く。ソレ皆の衆。

百皆　オヽ、合點ぢや〳〵。

ト引立てようとするを

喜樂　アヽ、モシ〳〵、マア〳〵待つて下さりませ。成る程、お庄屋樣へ斷わつて來なんだは、此方の麁相。なかなか以て源五郎が、後を追うて駈落ちなどとは、さらさら思ひも依らぬ事。

茂作　さうでなくば、なんで内を出やつたぞ。

喜樂　サアそれは。あの氏神樣へ參らうと思ひまして。

茂作　なんぢや、氏神樣ぢや。氏神樣もすさまじい。未進の事も打ツちやつて、この茂作ばかりに氣を揉ませ、面白をかしう親子連れ、宮參りもおかしいわい。大方物參りもする程なら、二貫五百匁も出來たのであらう。氏神へ參るなと、芝居へ行くなりと、そりや其方の勝手次第おりや金さへ取りや事が濟む。サア、その金受取りませうか。

喜樂　サア、その金は。

茂作　サアとはどうぢやいの。參り下向する程の、懷ろ豐かなら、何も故障はあるまい。サア、ちつとも早う金受取らうか。

喜樂　サア、それは。

茂作　金を渡すか。
喜樂　サア。
兩人　サア／＼／＼。
茂作　どうぢやぞいの。あるまいがの。なんのあらう。ありさうな事がない。それによくも宮詣りぢやの、氏神樣ぢやのと、この庄屋を一杯やつてかけうとは、そりや喰はぬ。人は知らぬがこの茂作ばかりは、その手は行かぬ。ハテ、なんぼう嘘を云やつても、孔明ぢやわいの／＼。其方の謀り事は、ちやんと知つて居るこの茂作。ハテ、村の東ねをする者が、甘い事ではいかんぞや。そんな智慧なら、措かんせ／＼。百姓衆、なんと、どんなものぢや。
衣重　ア、イエ／＼、今日爰へ參りましたは。
茂作　オ、、來たのは。
衣重　サア、來ましたのは、アノソレ、爰に一家がござりますゆゑ。
茂作　一家があるゆゑ、どうしたのぢや。
衣重　サイナア、その一家へ無心など云うて、貸してもらひませうと思うて。
茂作　ムウ。そんなら、その一家へ無心に來たのか。

衣重　ハイ、左樣でござりまする。
茂作　して、そりや、何所の何と云ふ人ぢやの。
衣重　ハイ、そりやアノ、なになア、モシ、舅御樣。
喜樂　オ、、それは、そりや、アノ、ツイ爰の。
茂作　なんぢや、ツイ爰の人か。さうして、名は何と云ふぞ／＼。
喜樂　サア、アノ、爰の、オ、、それ／＼、獄門の庄兵衞と云ふ神主でござりますわい。
茂作　ナニ、アノ爰の神主で、名が獄門の庄兵衞ぢや。
衣重　ハイ、左樣ぢやさうにござりまずる。
茂作　ア、コレ／＼、嘘を云やんな／＼。大方そんな事であらうと思うた。新町橋が聞いて呆れるわい。どこの世界にか、獄門の庄兵衞と云ふ神主の名があつてよいものかい。サア／＼、その手は喰はぬ。皆の衆、二人の衆を、引立てた／＼。
百姓　オツと合點ぢや／＼。サア／＼、ござれ／＼。
喜樂　ア、モシ／＼、成る程、行けなら行きませうが、爰は一番庄屋樣の呑み込みで、どうぞ一兩日の所を。
茂作　措きやいの。
ト此うち、軍八、出かけ聞いて居る。

喜樂　お待ちなされて下さりましたら。
茂作　措きやいの。
喜樂　その間には、是非々々急に拵らへまして。
茂作　ハテ、措きやいの。
喜樂　間違ひなう持つて參りませう程に。
茂作　措きやいの。
喜樂　どうぞマア今日の所は。
茂作　措きやいの。
喜樂　お歸りなされて下さりませうならば。
茂作　エヽ、措きや〳〵〳〵。ならんわいの。
喜樂　そんなら、此やうにお頼み申しましても。
茂作　ハテ、ならんと云ふに。
衣重　そこをどうぞお情に、モシ。
茂作　エヽ、アタしつこい。そんな事云ふうち日が立つ。ソレ、皆の衆、構はずと、引立てた〳〵。
百姓　オッと合點ぢや。サア〳〵、ござれ〳〵。
ト無理に引立てにかゝるを、軍八、百姓を引退けて
軍八　イヤ、待て〳〵。おれが物云ふ程に、マア〳〵、待つたがよいわい〳〵。
茂作　なんぢや、待てとは。
ト云ひながら軍八を見て
オヽ、誰れかと思へば軍八さま。
百姓　待てと云はつしやるには、なんぞこなたが未進の事を。
軍八　オヽ、挨拶するのぢや。
皆々　エヽ。
ト皆々困つたこなし。軍八見て
軍八　エヽとは何ぢやい。おれが挨拶するからは、なんでもかでも、おれが口きくのぢや。それに又、兎から吐かすが最期、庄屋でも構はぬ物云ひぢや。皆さう思うたがよいわい。
ト床几へ腰かける。
茂作　サア、そりやこな様の挨拶ゆゑ、別に聞かんと云ふのぢやないが、ちつとこの事に就いては、そこがおかしなもので、こりや矢ッ張り直應對でないと、得ては間違ひがあつては。
軍八　ヤイ〳〵、やかましいわい。なんぢや、直應對でないと間違ひが出來ると吐かすが、おりやいつ間違ひ拵らへた。あるなら吐かして見い。ありやせまいがの。コリヤヤイ、最前から後で聞いて居りや、この親仁どんが、

爰は一番庄屋樣の呑み込みで、一兩日のところ待つてくれ、其うちには金の工面して持つて行くと云うたぢやないか。わりやマア、なんと聞いたのぢや。
茂作　イヤモウとんとその通り。
軍八　ソレ見され。なりや、金が出來次第、われが方へ持つて行くは知れた事。但し又、金が出來ても水牢へ入れいと、代官めが云ひつけたか。
茂作　ヤア。
軍八　よもやそんな無理な事、代官が云はう筈がない。なりや矢ッ張り貴樣が呑み込んで、上納する限りまでも待つてやつて、金の工面拵らへさしてやつたがよいぢやないかい。さうなる時には科人も出來ず、兩方よしと云ふものぢや。なんと、さうしてやらんせ。コレ庄屋どの、マア、そんなものぢやないかいの。
ト煙草のむ。
茂作　サア、さう云やそんなものなれど、それではどうも
軍八　惡いと云ふのか。
茂作　イヤサ、別に惡いと云ふのでなけねど、是非明日中に上げねばならぬ上納金ゆゑ。
軍八　サア、明日までは大分間もあり、其うちにはどうか話しもならうでないか。
茂作　イヤサア、その話しには懲り〳〵ぢや。シタガ、こな樣の挨拶、明日まで待つてやれなら、品に依つたら待ちもせうが、折角待つてやつたところが、その戸際へ來たら、また同じ事を云はうよりは。
軍八　ハテ、その位の事は庄屋の高下ぢや。われの方から取替へてやつたがよいわい。
茂作　エ、。
軍八　エ、とはどうぢやい。何も只遣ると云ふ譯ぢやなし、われが取替へて置いて、上納を濟ました上、この親仁の方に金が出來たら、われが方へ取つたがよいではないかい。
茂作　サア、さう云うてしまへば何も。
軍八　何もとは、ならぬと云ふのか。
茂作　イヤサア、ならんと云ふのではなけねど。
軍八　なけねどなら、さうしてやつたがよいわい。
茂作　それぢやてゝ、大枚四十兩餘りの金を。
軍八　なんぢや、大枚四十兩餘りぢや。わりや四十兩の金が怖いか。イヤサア、工面が出來ぬか。その位の端下金遣繰りが出來ぬ位なら、庄屋で候ふの、村の束ねのと、

大きな面は出來ぬぞよ。又われが取替へるが否なら、おれが取替へてやるわい。オヽ、この軍八が取替へてやると云ふ譯は、明日と云はず、この親仁どんの方に金が出來る。オヽ、出來る事おれは知つて居るわいの。

トお衣重へこなし。

衣喜　エヽ。

ト兩人こなし。軍八もこなしあつて

軍八　ハテ、出來るわいの。それぢやに依つて庄屋どの始め、百姓めら、今日の所は軍八が請合ふ程に、待つてやらんせ。さう思うてもらはうわい。

トお衣重を賣つて金にすると云ふこなし。茂作、呑み込んで

茂作　アヽ、シタリ、天晴れ軍八さま、出かされたり。頼もしいこなたの挨拶。よいワ、そんなら待つてやりませう。また明日の上納の所は、もし間に合はずば、どうともして濟まして置かう程に、金が出來たら、この庄屋へ間違はぬやう頼みます。併し、隨分早い方が此方の勝手。早過ぎると云うて叱りはせぬぞや、よいかの〳〵。ヤレヤレ嬉しや、これでマア、ザッと譯が解つたと云ふもの。とんと肩の荷が下りたやうな。これと云ふも、こなたのお世話。すいぼう御苦勞。身共も御苦勞。皆の衆御苦勞アヽ、苦の世界ぢやなア。

ト唄になり、茂作、先に百姓附き添ひ、橋がゝりへヲヤワヤ云うて入る。あと合ひ方になり、お衣重、喜樂齋、こなしあつて、軍八が側へ行き

喜樂　斯やうな御深切なお人樣と存じませず、最前は理不盡なお方と存じましたゆゑ、思はず知らず雜言過言、申した此方は面目ない。眞平御免下されい。

軍八　何も其やうに、氣の毒がる事はごんせぬぞや。

衣重　イエ〳〵、さうでござんせぬ。マア、何はしかれ、差當つたる今の難儀、お前樣が庄屋樣へ、云ひ延ばして下さりましたゆゑ、親子の爲には命の親。なんとお禮を申さうやら、はんにモウ〳〵、飽足らぬ。

喜樂　だん〳〵御深切。

衣重　なんと申してよからうやら。

衣重　エヽ、有り難う存じまする。

軍八　なんの、其やうに禮云はんす事はごんせぬ。ほんの口から出鱈目ぜりふ。シタガ、今日は云ひ延ばしても、隙が入つてはまた水牢。なんとその金、拵らへる手段はあるかの。

喜樂　サア、その金拵らへる

　ト お衣重、喜樂齋、顏見合して

衣重　心當りと申しまするは。

　トこなし。軍八、こなしあつて

軍八　あらうがの。

兩人　あるとはえ。

　ト兩人こなし。

軍八　賣つたがよい。

兩人　賣れとは何を。

軍八　身を。

兩人　ヤア。

軍八　サア、斯う云へば、大方親仁どんが、以前は武士ぢや侍ひのと、馬鹿偏屈を云はるゝか知らねども、物は相談、嫁を賣つては世間の思惑。渴しても盜泉の水を喰はずなどゝ云はるゝは、そりやほんの痩せ我慢。今時流行らぬ昔の事。賣は時の着合せ、身を捨てゝこそ浮ぶ瀨とやらで、常磐御前が事もあり、貞女を破つて貞女を立てる世界の女子。夫の爲、舅の爲、身を賣る者は幾らもあるぞや。ハテ、そこが最前のやうに、男のある身をおれが女房、是非得心して一つ寢と云うては女子の道が立つまい。ハテ、それとても事と品。夫の爲なら矢ッ張り貞女。人が聞いたら譽めこそすれ、笑ふ者は一人もあるまいと、サア、別におれは勸めはせぬ。そこは人の氣々に依つて、どうとも相談出來さうなもの。マア、嬶衆の器量でなら、五十兩や百兩は、今云うて今手に入る事。マア、其方が近道と、おいらは思へど、そこは又、無理に勸める事でもなし、どうぞ仕樣がありさうなものぢやがの。

　ト煙草のみ、餘所の方を向いてこなし。此うち兩人こなしあつて、ホッと吐息つく。合ひ方キッパリとなる。

　お衣重、思ひ入れあつて、喜樂齋が側へ行き

衣重　イヤモシ、舅御樣、わたしやちと、あなた樣に、お願ひがございまする。

喜樂　これは改まつた、わしに願ひとは、どのやうな事ぢやの。

衣重　サア、外でもございませぬ。わたしが身の上。いま軍八さまのお詞と云ひ、昔から親夫、主人のお爲に身を賣るは、武士の家にも間々ある習ひ。あなたがもしも水牢へ、入らねばならぬ仕儀となり、その後へ源五郎どのが戻つてござんしたその時は、なんと云ひ譯いたしませ

う。不束なれどわたしが體、どのやうな輕い勤め、憂き節繁き川竹の、辛い勤めも夫に貞女。今の難儀を餘所に見て、なんと夫にこの顔が合されませうか。舅御樣、例へ賤しい奉公でも、世間の人や源五郎どの、よもや愛想は盡かしますまい。爰の所を聞分けて、暫しのうちのお暇を、どうぞ許して下さんせいなア。

トこなしあつて泣く。喜樂齋、いろ／＼こなしあつて、源を押へ

喜樂 オヽ、出かしやつた／＼。よう云うてたもつたの。其方の志しは嬉しく、仇には思はぬ、過分なが、爰をよう思うて見や。年寄つた身で水牢の、その苦しみを遁がれん爲、義理ある嫁に勤め奉公、ほんに命は惜しいものと、世間の人の口の端に、かゝる嘆きは我れのみか、悴源五郎まで人さんに、後指をさゝれんは定の事。それも其方や兄が爲、年寄つたこの親仁、人が笑ふが誹らうが、ちつともいとはぬ事ながら、以前は武士の果ぢやげな。シタガ、今では女房を、人の慰み憂き勤め、あれでも武士か侍ひかと、戸が立てられぬ人の口。それを聞いたらさぞやさぞ、兄が無念さ口惜しさ、なんと思ふであらうと思へば、おりや先の先まで思ひやり、どうもこの胸が一杯になつて、なんと返事の仕樣とてもござらぬわいの。

トいろ／＼思ひ入れあつて泣く。

衣重 エヽモウ、あなたとした事が、如何にお年が寄つたとて、以前は侍ひの果ぢやござりませぬか。夫源五郎どのぢやとて、あなたの水牢のお身替りに、この身を苦界に沈めたと聞かしやんしたら、さぞやわたしを譽めこそすれ、なんの殘念に思はれませうぞ。却つてそれこそ喜ばれませうと、わたしや思ひますわいなア。それにつけてもあなたへお願ひ。まだいとけないこの源吉、所詮主の手一つでは、育てる事はなりますまい。どうぞわたしの身の代で、可愛がつて下さんす所へ預けて、源五郎どのが戻られましたら、そこへよいやう相談して、この子の行く末頼みます。ほんに思へば味氣ない。老い年寄つた舅御樣。お側に附いて朝夕の、及ばずながら御介抱、御孝行の學びなと、する事ならぬわたしが身の上、殊には却つて足手纏ひ、まだ頑是なき子を振捨て、養育願ふ不孝の罪、お免しなされて下さりませ。

喜樂 そんならどうでも、アノ奉公に。

衣重 サア、行かねばならぬ金の出來方。源五郎どのにも

逢うた上、後の事やら何やかや、たんと話しもござんすけれど、思ふに任せぬ今の手詰め。わたしが廓へ行た後へ、戻らしやんしたらよいやうに。

喜樂　オヽ、そりや氣遣ひしやんな。其方の貞心、委細の事はとつくりと、話して聞かしてやつたなら、ほんにそれこそ兄めが心……イヤサア、心措きなう奉公しや。其うちにまた、逢ひにも行きませう、また孫めが事は案じぬがよいぞや。老の樂しみ、守りなとして、育て上げるがこの身の氣散じ。

衣重　それ聞いて嬉しうござんす。得心さへして下さんすりや、一時も早う、わたしが身の上。

トこの前より德兵衞、お傳、出かけ、後に聞いて居る

喜樂　相談せうにも差當つて。

軍八　その行く先は、おれが世話せう。

兩人　エヽ、そんならあなたが。

軍八　オヽ、引合してやりませう。シタガ、親仁どの、嬶衆、よく得心さんしたの。それでこそ侍ひの娘。オヽ、出かしやんした〳〵。

喜樂　何分よろしうお頼み申しまする。

軍八　イヤ、何にも手間隙いらぬ事。幸ひ肝煎りの德兵衞が。

德兵　イヤ、最前から戻りかゝつて、委細は聞きましたて

でん　そのお子は、わたしが方へ抱へませうわいなア。

ト前へ出る。

軍八　オヽ、これはお傳と云ひ德兵衞、好い所へ來やつた。委細は聞いて居たとあれば、云ふには及ばぬ。シタガ、德兵衞、そこへよいやうに相談してやらんせ。

德兵　イヤ、そりや込んで居ますわい……お傳さま、どう云ふものであらうな。

でん　さればなア。

ト少し前へ出て

イヤモシ、お二人樣、未進に詰まつて御難儀の樣子、殘らずあれから聞きましたが、わたしは新潟の廓で、角屋の傳と申しまして、女子ながらも隨分と、人樣に知られて居る者。義理づくめの手詰めの切端、金のお話し、その上に、手放しならぬお子の事、見ればいとしいこの場の仕儀。お前方の望みだけ、金を用立て、嫁御も取らず、どうぞ其まゝ置きたいが、そこには又、大枚の金づくと云ひ、ついてはわたしも亭主のある身、殊にはこの頃留守のうち、わたしは一人の料簡にも、ならぬも矢ツ張り浮

世の義理。その代りには座敷だけ、寢間の勤めはこの傳が、請合ふからは舅御樣、嫁御樣にも落ちついて、心措きなう奉公をして居やしやんしたら、其うちに主が戻つてござんしたら、また相談も致しませう。よんどころなう外へやりましても、後先知らぬと、心得の違うた事は間々ある習ひ。そこを思うてこの傳が、差出がましい事ながら、わたしが所へ奉公に、取らうと云ふのもお二人の、話しを聞いたが此方の幸ひ。勤めする身は親の爲、又は夫や主人の爲。始めの嘆きに引替へて、つい二年たち三年と、いつの間にやら年が明け、やがてめでたく元の夫婦。睦まじ語りも今のうち、案じるよりは氣が安う、惡うせぬがお二人樣、マア、相談して見やんせなア。

喜樂　ハイ〳〵、有り難うござります。何分不束な嫁女が事。

衣重　よろしうお賴み申しまする。

でん　ハテ、そりやようござんすわいなア。ソレ、德兵衞どの、樣子は聞いて居る上、軍八さまの口入れぢや。殊には父御樣の直應對、別に根ざらへにも及ばぬわいなア

德兵　ハイ〳〵、左樣でござりますとも。そんなら父御樣に、わたしが直應對して參りませうか。

ト行きかゝるを、軍八、ちよつと袖を扣へて、上手へ連れて來て

軍八　時に德兵衞、斯うぢや。貴樣、いま應對するなら、われに借つただけは、あの代物で頭から、引去りしてしまはしやんせ。よいか。

德兵　エ、。

軍八　惡いかい。よいと云はんせ。よいな〳〵。

ト德兵衞、愚圖々々して

德兵　ムウ。そんならマア、よいかい。

軍八　所で、まだあるわい。高二割は、おれが取る程に、これも合點か。

德兵　エ、。

軍八　エ、とはどうぢや。マア、よいと云はんせ。よいかよいか。

德兵　ムウ、サア、マア、よいかい。

軍八　時に、また外に話しがあると云ふは、外ぢやない、あの御新造ぢや、おれが初手から惚れて居るぢや。所で貴樣に云うて置くは爰ぢや。入込み濟んだら直ぐに、おれが口說き落して手に入れにやならぬが、これも係り合ひぢや。よいの。

徳兵　エヽ。
軍八　エヽとは否が。よいと云はんせ。よいの〳〵。エヽよいと云はんかいの。
徳兵　ムウ。そりやマア、よいとせい。
軍八　そんならマア、この度のところはそれでよい。〆めて三口ぢやが、よいの。
徳兵　サア、よいはよいが、それでは肝心の肝煎りの、おれは上がつたりで詰まらんものぢや。
　ト頭掻き、こなし。
軍八　エヽ、われも埒のあかん男ぢやわい。貴様の方は別に、二割でも三割でも、取りたいだけ、取つたがよいわい。
徳兵　イヤ、そんなものぢやが、さうしては又先も詰まらず、取らねば此方が詰まらず。どうもそこがおかしいもので。
　ト愚圖々々云ふ。
軍八　エヽ、愚圖々々と、まだそんな事云うて居るかい。よいぢやないか。
徳兵　サアマア、よいかい。
軍八　承知か。

徳兵　どうせう知らんて。
軍八　そんなら否と云ふのか。
徳兵　イヤ、さうも云はんけれど。
軍八　エヽ、ばつきり性のない。なまんだらした男ぢやわい。サア、どうぢやぞい。
徳兵　なんぼうさうぢやとて、さう辛うせりふも出來ず、と云うてせずにも置かれず、ハテ、困つたものぢやて。
軍八　サア、早う片附けてしまはぬかい。
徳兵　アヽどうせう。仕方がない、マア、やつて見ようかい。
　ト頭を掻きながら、喜樂齋が側へ行き
時に、親子得心づくの上　奉公に行くのぢやが、併しながら、金に望みでもござりますかえ。
喜樂　イヤモウ、この方の望みと云へば、二貫五百匁の未進の外は、この小さい者の養ひ料だけあつたら、ようござりまする。どうぞそこへよろしう。ナウ嫁女
衣重　左様でござります。過分な望みはござりませぬ程に、そこへよろしうお頼み申しまする。
徳兵　それを聞いたら、此方も心積りがあるわい。時にお傳さま、アノこちらのな。

トお傳の側へ行き、軍八を教へて
事もあれば三年かゝりで、こんなものでござりませうか
い。
トお傳が袖の内にて値打ちする。お傳もこなしあつて
でん　サア、そこへよいやら、相談して上げしやんせ。
德兵　ようござりまする…………イヤナニ父御樣、今日は
モウ暮れにもなれば、明日の朝早々、こなたの所へ行き
ませう。その時また、話し合ひも致しませうぞや。
喜樂　何分お世話になりませうての。
德兵　さうして、こなたの内はの。
喜樂　ハイ、即ち麻績村で喜樂齋とお尋ね下さりましたら、
つい知れますての。
德兵　そんなら、喜樂齋と聞いたら知れますの。
喜樂　ハイ、左樣でござります。
德兵　オツと、よし〳〵。
ト懐紙を出し、矢立にて留める。
喜樂　ナニ、嫁女や、いま聞きやる通り、あのお方樣が明
日の朝、此方の内へ來て下さるゝといの。さうすれば今
夜はマア、内へ去んで、何やかや後の片附け、心積りも
あらう程に、ちやつと去にませうかいの。

衣重　それがようござります。わたしも又、支度もあり、
まだ話したい事は、たんとござりますわいなア。
喜樂　オヽ。さうあらうとも〳〵。そんなら嫁女。
衣重　ハイ〳〵……イヤモシ、お家樣、あなたそこへ、よ
ろしうお頼み申しまする。
でん　ハテ、これからは此方の代物、隨分大事にかけます
るぞや。シタガ、來て見やしやんせ、思うた程にもない
もの。また笑はす事もあらうわいなア。
喜樂　イヤモウ、兎角よろしうお頼み申しまする。
でん　父御樣、案じたものぢやないわいなア。
喜樂　ハイ〳〵……それはさうと、軍八さまとやら、だん
だんのお世話、お禮は重ねて申しまする。
軍八　なんのいの、こんな事は、すいぼうの常でごんすわ
い。
德兵　時にお傳さま、いづれ明日の相談なら、もう此方も
歸りませうぢやござりませんか。
でん　さうしませう。そんなら軍八さま、お二人の衆。
衣重　左樣ならば、もうお歸りなされますか。
軍八　德兵衞、今のはよいか。
德兵　ムウ、マアよいかい。

軍八　エヽ、綾の切れぬ男ぢやわい。
でん　サア、德兵衞どん。
德兵　お傳さま……皆の衆。
皆々　お別れ申しまする。
　ト唄になり、喜樂齋、お衣重は向うへ、德兵衞、お傳は橋がゝりへ。皆々こなしあつて、捨ぜりふにて入る
　とヂヤン／＼／ゝと暮れ六つ打つ。軍八、一人殘りて
　こなしあつて、後見送り
軍八　へヽ、うまい手番ひ思うた壺。嬶衆を賣つたその金で、あの德兵衞が借りは濟ますワ。ところで高で二割の口錢、否でも應でも引ッたくり、その上親仁が嫁を連れ新潟の角屋で、身の代金取つて戾る道筋は、云はずと知れた彌彥山。程よい所に待伏せて、金せしめるは明日の暮れ前。首尾よう仕負ふせ。
　ト我が形を見て、着物を着替へてと云ふこなしにて
　直ぐに出かけて、お衣重を手に入れ、日頃の思ひ何やかや……こりや、大分滿が直つて來たわい。
　トこなし。此うち上手より慶右衞門、木綿やつし單衣の法被、大小、狀箱を持ちながら、出て來りて
慶右　どうぞコレ、逢ひたいものぢやが。
　ト云ひながら、軍八を見て
ヤア、それに居さつしやるは、五十嵐軍八さまではござらぬか。
軍八　ムウ、ついぞこれまでお見受け申さぬお人ぢやが、身共を軍八と云はつしやる、こなた樣は。
慶右　イヤ、手前事は白山園之丞が足輕、慶右衞門と申す者でござるが、卽ち御主人よりのお使ひに參つてござる。
軍八　ナニ、白山氏の御家來とな。それは御苦勞。して、御用の次第は。
慶右　イヤ、その儀はこれなる書狀に認めござれば、御披見下され。身共今日のお見出しにあづかりしは、其許樣を好く存じ居るゆゑのお役目。密事の儀とござつて、密かに相渡せよとの儀でござるて。
　ト狀箱を出す。軍八、狀を取つて
軍八　それは御大儀。さぞ身共を一遍とお尋ねなされたでござらう。併し、好い所でお目にかゝりました。只今拙者も歸宅いたさうと存じ居つた所でござるて。
　ト狀を披き見て
ナニ／＼「先達て其方へ申し聞け置き候ふ椎津家の重寶

摩利支天の黃金佛、今日彼の織殿屋新三郎方へ、袋修覆に差し遣はし候ふ間、其方今宵彼れ方へ忍び込み、留守を窺ひ盜み取り、早々手渡し致さるべく候ふ、首尾よく致し候へば、兼ねて其方望みの通り、身共キッと推擧を以て、有つきの儀承知いたし候ふ。對談は人目を憚り候ふゆゑ、密書を以て申し遣はし候ふ、猶披見の上この書面破失いたさるべく候ふ、早々以上。五十嵐軍八どのへ、白山團之丞」……ムウ、すりやアノ今宵に。

トこなしあつて

イヤ、お使ひ、御狀の趣き、委細畏まつてござる。是非今宵のうちに盜み取り、やがて吉左右お知らせ申さんと憚りながら仰せ下され。

慶右　ムウ、すりや御本家の重寶、アノ黃金佛をや。

トこなしあつて、軍八の顏を見て、さてはと驚ろくこなし。軍八、これに氣が附かぬこなしにて

軍八　如何にも。キッと盜み取り、お手に入れると仰せ下され。

慶右　ハッ、承知仕つた。立歸つてその趣き、申し上げるでござらう。

ト心意氣ある。

軍八　お使ひ御苦勞。

慶右　お別れ申す。

ト思ひ入れあつて行かうとして、立戻り、軍八の顏を見て、心意氣あつて、また行かうとする。軍八、これにてフト心附いて

軍八　アイヤ〳〵、お使ひ、暫らく〳〵。

慶右　まだ御用でござるかな。

軍八　如何にも、お隙は取りませぬ。ちよつとこれへ。

慶右　ハッ、何でござるな。

軍八　イヤ、別儀でもござらぬが、卒爾ながら其許樣にはこの密書の趣き、內々團之丞さまよりお聞きなされたでござらうな。

慶右　イヤ、別に何にも承はらぬて。

軍八　然らば只今、拙者が讀みましたを、始めてお聞きなされたのでござらうの。

慶右　左樣でござる。

軍八　ムウ……すりや、手前の面體知つてござるゆゑの、このお使ひでござるな。

慶右　如何にも。

軍八　すりやアノ。フム。

ト思ひ入れ。慶右衞門もこなしあつて

慶右　それがどう致した。

軍八　その致したは、カウ。

ト拔打ちにポンと切り、庭神樂になる。軍八、あたりへこなしあつて、慶右衞門の止めを刺し、死骸を片附けて

ヤレ、恐ろしや〳〵。大事の狀をうつかりと、知行どころか、すんでの事にこの首が……ヤレ〳〵、ひやいな。

ト狀をずた〳〵に引破り

斯うして置けば夜が寢よい。シタガ、こんな事に氣が附くも、おれが運の向いて來た端かい。併し、彌彦山は明日の晩。先づ差當る今宵の仕事。黃金佛をせしめる魂膽。こりや大分面白うなつて來たわい。なんでも今夜は最前の、雉子を肴に一杯入れて、口祝ひして出かけざなるまい。

ト唄になり、軍八、向うへ入る。トばた〳〵にて、下手より返し前の漁師皆々、頰冠りにて出て來り、あたりへこなしあつて、ちよつと囁き小隱れする。ト因幡橋までの唄になる。上手より幕明きの仲居、角屋と書いたる紅摺りの箱提灯を灯し、後より左門之介、五分月代、紫房附き紐にて髷を括り、羽織着流し、次に團之丞、後より三千歲、禿二人附き添ひ、喜文太は三千歲にしなだれかゝりながら出る。三千歲、腹立てながら出て來りて

喜文　コレサ三千歲、何も其やうに素氣なう云ふものぢやない。コレサ、この通りに武士を捨て、拜む〳〵。

三千　オヽ、好かん。わたしや何にも其やうに、拜まるゝ筋はござんせんぞえ。

喜文　ハテサテ、其やうに大きな聲を致さいでもよい。コレサ、拜む〳〵。

ト口說きながら、好き所にて皆々立ちどまり、團之丞これを聞いて、喜文太を見て

團之　ヤイ〳〵喜文太、先刻からザワ〳〵と姦ましい。若殿のお供先とも憚からず、尾籠千萬。嗜なみ居らうぞ。

喜文　ハツ、先刻よりザワ〳〵申しましたは、斯やうでございます。これに居るこの三千歲太夫、相方の新三郎がこの所へ參らぬと申して、拙者めを呼んで參れとせがみますゆゑ、道々宥めて居りましたのでござりまするて。

三千　アノまた憎てらしい。あんなよい口な事。最前からわたしを捉へて、嫌らしい事の有り條。

禿　道々太夫様を、拜む〳〵と拜んでばつかり。

喜文　アヽ、コリヤ〳〵、そりや何を申すぞ。小差出た禿ども。人の尋ねぬ事は云はぬものぢやぞ。

ト目顔にて押へる。

禿　それでも、拜ましやんしたぢやないかいなア。

喜文　アレ、まだ申し居るか。

ト叱りつける

左門　アイヤ〳〵喜文太、其やうに申すな。シタガ、其方何ゆゑ三千歳を左様に拜むのぢや。

喜文　エヽ、これはアノ。

ト術なきこなし。

團之　殿のお尋ね、早く申し上げい。どうだ〳〵。

喜文　イエサア、その拜みましたは、アノ、それは、オ、斯うでござります。この三千歳が頭に差して居りまする笄や簪に、提灯の火影が映りまして、何がモウ、きらきらと眩ゆう見えましたゆゑ、拙者後光と存じまして思はず知らず、ツイ拜んだのでござります。

團之　何を申す。馬鹿々々しい。

皆々　ハヽヽヽ。

左門　イヤ〳〵、路次の慰みであつた。愛い奴〳〵。

喜文　イヤ、面目次第もござりませぬ。

左門　然らば行かうか。

皆々　イザ、お供仕りませう。

ト行かうとする。と以前の漁師、向うへ立ち塞がり

浮藏　結構な旦那様方から、廓入りのお祝儀を

綱六　私しどもの仲間中へ

綱右　ずつしりお花を

皆々　戴かして下さりませ。

トこれにて女形、後へ扣へる。

喜文　ヤイ〳〵、見苦しいどう乞食め、あなた方を何と思ふ。忝なくも鎌倉の御公達、お側にござるが當國の御領主、椎津の御分知白山さま。常の廓通ひと當が違ふぞ。

浮藏　イヤ、その旦那方知つてのお願ひ。

綱六　おいらが家督にありつく程づゝ

綱右　どうぞ戴かして下さりませ。

喜文　ヤア、云はして置けば附け上がり、往還を妨げるのみならず、言語道斷不屆き至極。今打ち放す奴なれども、大切ないお供先、今日は差免す。道おッ開いて通さばよし、違て四の五と申しなば、一々この世の暇をくれん。覺悟いたせ。

浮藏　コレ〳〵ざぶ。そんなに急がんすな。こなん方のやうな太刀の魚喰ふやうな乞食ぢやないわい。
綱六　オヽ、さうぢや〳〵。マア、旦那衆方の太刀の魚から、紙入れ腰提げ、身ぐるみ殘らず
綱右　おいらが仲間へ
皆々　貰はうかい。
　ト これにて左門之介、キッとなつて
左門　不屆きな非人ども。喜文太、打つて捨てい。
喜文　ハッ。
　ト こなしあつて下に居る。
左門　猶豫いたすか。予が手を下さうか。
　ト 刀に手をかけるを
團之　アイヤ、御前のお手下さるゝまでもござらぬ。喜文太で參らずば、拙者めが打ち放さん。先づ〳〵。
　ト よろしく床几へ腰かけさして
　ソレ、女どもは、お側へ〳〵。
　ト 女形これにて皆々左門之介の側へ行く。
浮藏　皆見い。あちらのざぶどもは、太刀の魚に身がありさうなぞよ。
綱六　オヽ、さうぢや〳〵。ヤア、あれから貰へ〳〵。

皆々　合點ぢや〳〵。
　ト 左門之介の方へ行かうとするを、引き戻して
喜文　うぬら、コリヤ、一通りの物貰ひぢやあるまいがな。
團之　喜文太、一々引ッ捕へて縛し上げい。
喜文　ハッ。詮議したら樣子のあらう。サア、一々覺悟ひろげ。
浮藏　エヽ、面倒な。疊んでしまへ。
皆々　合點ぢや。
　ト 座神樂になり、喜文太を引き退け、行かうとするを立廻つて、よき所にて團之丞、左門之介に二人づゝかゝるを、拔打ちにポン〳〵と切る。此うち喜文太、綱六を上手へ投げる。左門之介、ポンと切る。浮藏、またかゝるを、喜文太、團之丞の前へ投げるを、團之丞直ぐに又ポンと切る。女形皆々恟りして後へ寄る。
　喜文太、見て
喜文　天晴れお手の内。
　ト 此うち兩人、血刀を差出すを、喜文太、眞中にて兩手に紙を持ち、手早くこれを拭く。双方刀をシャンと鞘に納めて
團之　御前。

ト左門之介の顔を見る。
左門　圓之丞。
圓之　ハツ。
左門　無益の殺生いたして退けた。
圓之　イヤ、これも御一興。
左門　イカサマ。サア、行かうか。
喜文　ソレ、仲居ども、お提灯を。
ト女形、氣味の惡いこなしにて
仲居　大事ないかえ。
ト顔見合してこなし。
喜文　オヽ、苦しうない〳〵。
女皆　そんなら皆さん。
ト怖々提灯を持ち、死骸を除けて通る。三人これを見てこなし。左門之介、ムツとニツタリと笑ふ。
圓之　サア、お越しあられませう。
ト因幡橋になり、皆々向うへ連れ立ち入る。チヨンチヨン。　返し
造り物、淺黄幕切つて落す。向う山幕。東西より板松突き出す。遠責め、アリヤ〳〵の聲にて道具納まる。
ト上手より矢柄、絆天股引、吹きそらし陣笠、松明を持ち出て來る。橋がゝりより丈助、同じ拵らへにて出て來りて
丈助　それへござるは、高宮矢柄どのではござらぬか。
矢柄　ヤア、貴殿は多門丈助どのよな。して、彼の異形の怪物に出逢ひなされましたか。
丈助　イヤ、未だ出逢ひませぬが、大勢の勢子どもが、上を下へと騒動いたし居るての。
矢柄　さればサ、手負ひ怪我人等も餘程ござる様子。追ひ追ひ言上仕るゆゑ、殿にも甚だ急かせられ、飛び道具にて打ち留めよと仰せに依つて、砲術手練の面々、筒先揃へ打てども、いつかな五體は鐵石、黒鐵を延べたる如くにて、なか〳〵思ひも依らぬ怪物。この上とては組み留めて、手取りにせうより外なしと、再度の注進聞くと等しく、その本體を見屆け參れと、御意に從ひ谷々峰々驅け廻れども今以て、彼の怪物見當りませぬが、其許にも。
丈助　如何にも、只今御前にて承つたる注進は、慥かに

これなる山手山、園原の方へ廻りし噂。まつた殿には、今暁寅の刻より御登山あつて、何れも樣の安否をお待ち兼ね。

矢柄　拙者儀は昨日の注進より、殿に引き別れ所々方々。然るに夜前承れば、殿には田中の宿まで御下山と承つたが、すりや最早御登山とな。して只今は、何れにお入りなさるゝな。

丈助　イヤ、即ちあれなる上田の山手に御座あつて、四方の谷々駈け立てよと、お馬を留めて御釆配。

矢柄　然らば拙者は一旦御前へ。

丈助　左樣いたされい。

　ト本釣り鐘打つ。矢柄、空を見て

矢柄　最早起鐘。

丈助　如何にも。

　ト互ひに松明を消して

兩人　お別れ申す。

　トまた遠責め烈しく、兩人東西へ別れ入る。チヨンチヨンにて向う山幕切つて落す。遠責め捺めて一聲。

造り物、奥深に山手の書割り。水の流れ高うして、だん／＼に萩の花見事にして、隨分險岨なる山の見得。舞臺先、松の吊り枝。平舞臺所々萩のうれ、隨分澤山に置く事。所々に自然石、二尺或は二尺五六寸、又は三尺ばかりの捨て石五つ六つあるべし。すべて園原山の體、よき所に源五郎、木綿やつし脚絆、甲掛け、手甲にて岩臺に腰かけ、火繩にて煙草のみ居る。この見得よろしく、キツとした合ひ方。本鐘、イヤイにて道具納まる。

　ト源五郎こなしあつて

源五　いつぞや親仁樣の仰せには、その昔唐土より、この日の本へ渡りし藥草、西天草と名くるは、この園原に種を殘し、いま帚木と云ふ名草。その藥効は數へ難く、これを取り得るものならば、高金になる藥品と聞いたるゆゑに、何でもそれを取り行く爲に、この前凡そ一ケ月程、尋ね求めども知れず、空しく歸つて親仁樣に、とくと藥品聞いたる上、再びこの地へ志し、夜を晝との分ちなく、凡そ今度も二ケ月餘り、それと思しき物もなくこれを思へば昔より、云ひ習はせし帚木とやら、遠く放れて見る時は、その形はあり／＼と、目には見ゆれど、

近寄つて尋ねて見れば、皆暮れに見えぬ心を歌にさへ、新古今集に誰れやらが、詠んで置かれた戀の歌。その詠み人は何とやら。オヽ、それ〳〵、坂上是則とやらが詠み歌に、園原や伏家に生る箒木の、あるとは見えて見えぬ君かな……それにつけても親仁樣、さぞや女房も待ち侘びつらん。とは云ひながら此まゝに、空しく去なんも本意ならず。どうぞ取り得る工風が、ありさうなものぢやがなア。

ト思案のこなし。この時、内にてアリヤ〳〵の聲、ドンチヤンを打つ。これに驚ろき、こなしあつて

あれは慥かに鹿狩りの音。昨夜は柳の宿へ泊つて、今朝は寅の刻より出かけて來た園原山。昨日から微かに聞ゆるあの貝鉦。なんでもこの山續きと思うたが、だん〳〵近附く鬨の波。こりや、ウロ〳〵して居るならば、手負ひ猪にかけられて、怪我でもしたらこの身の損。身體髮膚は父母の賜物。損なひ破るは不孝の第一、と云うて今日一日、仇に暮らすも何とやら。お大名の猪狩りなら、餘所ながら見物して去ぬるも、矢ッ張り土産の一つ。どうぞ好い所で見しらかしてこましたいものぢやて。

トこなし。此うちドンチヤン烈しく、アリヤ〳〵の聲する。これにて源五郎、後へ寄り窺ひ居る。と上手より勢子大勢、割り竹、鐵砲など持ちながら、大勢後を見ながら逃げて出る。源五郎、側へ行き

ア、モシ〳〵、あなた樣方は猪狩りと見受けましたが、何れのお大名衆の猪狩りでござりますな。

勢子　この和郎とした事が、どこのお大名どころか、越路の城主、椎津市正國久公の御上意にて、近國御巡檢のお歸り道、異形の化け物に出ッくはし、それゆゑのこの騷動。

源五　なんと仰しやります。ア、化け物でござりますか。こりや一番見物でござりますわい。

勢子　何を云ふぞい。見物どころか、その化け物は弓も鐵砲も立たぬ、途方もない代物。

同　なんでも石か金の、化け物と見えるての。

源五　そいつは面白さうな物でござりますな。

勢子　イヤ、面白いどころか氣も魂ひも疾に宿替へして、とんと夢中になつて居るわい。

トこの時また内にて、アリヤ〳〵の聲する。勢子上手を見て

アレ〳〵、大力の岡山どのも叶はぬと見えるわい。

勢皆　ソリヤ交へ來るワ〳〵。

ト勢子、皆々得物を構へる。トまたドンチヤン烈しくなる。これにて上手より千平、脱ぎかけ半天、股引、襷がけ、凛々しき形にて、大童になり、怪物と組み合ひながら出で來りて立廻り。勢子皆々支へるうち、トド千平、怪物に組み敷かるゝ。勢子加勢する。怪物、千平を捨てゝ勢子にかゝる。勢子逃げ廻る。右捨て石を小楯にする。怪物、捨て石を跳ね飛ばして追ひ廻る事あつて怪物、右の捨て石に寄りかゝつて息を休め居る。この間に千平、起き上がりて、力足を踏んで

千平　ヤア、正體解らぬ異形の怪物。おのれ、日本廣しと雖も、何れか王土にあらざらんや。當主椎津國久公の御内に於て、大力と人も畏るゝ岡山千平。うぬが鬼なら千平は、叶はぬ事もありやせん。化け物ならば手取りにする。覺悟ひろげ。

ト捨て石を拾ひ、打つてかゝる。怪物怒つて組みつきにかゝる。勢子皆々支へる。立廻つて皆々下手へ入る。此うち源五郎、逃げ廻つて、後に一人殘り、下手を見て

源五　異形の化け物と云うたは、あの事ぢやな。でもマア危ない事〳〵。なんでも近寄らぬが勝ちと云ふもの。シタガ、今日はいろ〳〵の事にかゝつて、肝心の物も取り得ず、すご〳〵去ぬるも餘りに殘念。併し、怪しからぬ、可哀さうに、折角咲いてある萩も臺なしにして、えらう荒し居つたわい。コレマア、木の根岩角、皆引き起し居つたわい。

ト云ひながら、あたりを見廻し、何心なく萩を起す。これに附いて藥木出るゆゑ

ヤア、慥かにこれこそ

ト取つて見て悧しりく

誠に、これぞ尋ぬる彼の靈草。

トよく〳〵見て、いそ〳〵して

チエ、、忝ない〳〵。さては今の怪物が、土石を蹴立てしゆゑにこそ、自然と出でしこの藥草。何にもせよ、ソレ。

トあたりを達れ廻り、一つに括りて

これさへあれば親仁樣のお望み通り、この價にて未進も納め、ちつとも早う御安氣を。チエ、、忝ない。これと云ふも天道樣のおあてがひ。名藥手に入る上からは、片時も早う歸りませうか。

ト身拵らへする。と又ドンチヤン、アリヤ〳〵の聲する。これにて下手を眺め、ソッと後へ扣へる。と勢子大勢下手より逃げて出る。後より怪物追ひ駈け出る。續いて千平、出て來り、怪物、勢子の拋り人形を引ッ掴み、投げて廻る。よき程に千平、怪物の腰へ組みつく。怪物、拋り人形を勢子の中へ拋りつける。これにて大勢、わッと云うて皆々逃げて入る。怪物、千平を振り解き、捻ぢつけ、トヾ千平の首を引拔く。源五郎後よりこれを見て、愕りする。怪物、フト源五郎を見附け、直ぐに飛びかゝる。源五郎、逃げ廻る。源五郎萩を小楯にしてキッと留まる。早笛になり、源五郎、餘儀なく持ち合したる箒木にて打ち据ゑる。怪物これにて後ずざりする。直ぐに手取りにせうとする。また怪物、勢ひ込んで飛びかゝるを、右の箒木にて打つ。又これにて怪物弱ることなし。この事二三遍あつて、フト源五郎。箒木の德にて弱ると云ふ事ちやと心附きて、散々に箒木にて打ち据ゑ、弱る所を手早く一腰拔き放し、怪物の眼玉を刺し通す。大ドロ〳〵になり、黑蓋下ろす。怪物、跳ね返さんとするうち、源五郎、所々急所を刺し通す。トヾ怪物死ぬ。黑蓋明く。ドロ〳〵納まる。源五郎、これにてガックリとなる。ト大小、ツツカケになり、バタ〳〵にて向うより矢柄、丈助、ツカ〳〵と走り出で、直ぐに本舞臺へ來て、下座切ると續いて國久、着付け裝束、羽織、野袴、吹きそらし陣笠、腰に鞭を差し、馬上にて、後より丈八、丹下、皆々袢天、股引、陣笠、凛々しき形にて、ツカ〳〵と附き添ひ出て、花道よき所にとまる。後より勢子大勢附き添ひ出て、侍ひ分は立ち身、勢子は下座切る。國久、本舞臺を見て

國久　ソレ兩人、その者を介抱して取らせ。

矢丈　ハッ。

ト兩人、双方より源五郎を抱へ抱き起す。此うち國久は馬上ながら上手へ直る。侍ひ四人は側に附き添ふ。勢子は下手へ並ぶ、丈助は源五郎の腰を抱へる。矢柄は手早く印籠より藥を出して

矢柄　ソレ、お白湯を持たつしやれ。

勢子　ハッ。

ト茶辨當の湯を汲んで持つて行く。矢柄、藥を服まし

矢柄　國主のお入りなるぞ。

丈助　心を慥かに持て。

兩人　こな若者。
　ト これにてフト源五郎、心附きし體。矢柄、また湯を服まし、丈助は三尺帶にて後より腹を締める。
矢柄　椎津國久公の
皆々　御前なるぞよ。
　ト これにてフト國久を見て惘り
源五　ハ、、、、ハア。
　ト 飛びしさり、下座切る。國久、こなしあつて
國久　近習の者、怪物をこれへ。身も見ようわい。
皆々　ハツ。
　ト 皆々寄つて、よき所へ直す。國久、見て
國久　矢柄、改め見よ。
矢柄　ハツ。
　ト 改め見て
誠にすさまじき異形の猛獸。凡そ身の丈一丈有餘、頭は銀毛、面は猿、惣身の毛長く、鐵針に彷彿たり。
丈助　黑鐵の爪、齒は劍、開きも及ばぬ稀代の怪物。
矢柄　實に珍らしき怪獸でござるて。
丈助　何と申す猛獸でござらう。
丹下　さればサ、荒々しき物を山の神と申せば、左樣な類でもござらうか。
丈助　イヤ／＼、左樣でござらぬ。先刻千平どのを引裂きし樣子では、矢張りこりや鬼でござらうてや。
皆々　イカサマ、左樣な事でござらう。
　ト 國久、これを聞いて笑ひを含み
國久　イヤ、愚か／＼。その怪物こそ世に云ふ、狒々と申す物サ。
皆々　ハツ。
　ト 手を突き聞くこなし。
國久　山猿數百年にして劫を積み、これを名付て狒々と呼び、深山の諸木の脂を以て身を鍛ふ。それゆゑにこそ弓鐵砲その外、すべて刃物を除くる。只眼中兩脚のみ急所となす。この說、正中嘉曆の舊記に載す。そこを存じて彼の若者、眼中目がけ刺し通し、返す刀に兩脚の間を刺したるゆゑにこそ、難なく仕留めし天晴れ手の內。壯士をこれへ。
矢柄　ハツ……御前のお召し。
皆々　近う／＼。
源五　ハツ。
　ト にじり出て、平伏する。國久、見て

國久　其方は何國の產、如何なる者の悴にて只今の働らき、その上に狒々と見極め、眼中を仕留めし卽智。國久感心いたしたぞよ。して汝が姓名は。

源五　ハッ、恐れ入つたるその上意。存じがけなく怪物に餘儀なく出合ひ思はずも、仕留め申せしはこれぞ全く國守の御威光、まつた狒々とは存ぜねども、眼を刺せしは短才の紛れ當り。また身分の儀お尋ねにあづかり、申し上ぐるも烏滸がましく、恐れ入つては候へども、申し上げぬも却つて無禮。私し祖父は足利家の旗下、逸見權藤次と申して、小知をも穢せし者。私し漸く五六歳の砌り聊かの過ちござつて、今民間に蟄居仕り、當時御領內麻績の里にて、在醫を業とし、父の名前は喜樂齋、私しめは山賤源五郎と申し、見る影もなき匹夫めでござりまする。

國久　ホヽ、委細逐一聞き屆けた。辯舌と云ひ智勇の程、さぞかしと思はるゝ。今眼前予が家中、名ある者だに持て餘し、あぐみ果てたる猛獸を、故なく仕留めし其方が英勇。我が領分に汝が如き、勇者のあるは家の譽れ。餘國へ外聞、椎津家の記錄に止めん。それにつけてもこの國久、身不肖ながら一城の主、不足には思はんが、今より我れに仕へなば、某が喜び、この上のあるべきや。源五郎とやら、其方が所存は。

源五　ハッ、こは有り難き御仰せ。數ならぬ働らきを御賞美下され、殊に見る影もなき匹夫めを、御召し抱へ下されんとは、この身に取つて冥加至極。これぞ先祖の家名を立てる、武士の面目、父への孝と、早速お請けも申し上ぐべき筈なれども、愚父喜樂齋と申す者の命に依つて、この一藥を取り得ん爲、わざ〳〵參りし源五郎。一旦歸宅のその上にて、首尾よく藥品父に手渡し、御前の始終申し聞かせ、愚父得心の仕らば、その時にては君に仕へて、粉骨碎身。只今お請け申さぬは、父の命にて參りし身分。一旦歸宅いたさずば、孝道に背くも同然、この儀何とも嘆かはしく、父だに承知仕らば、何か違變のござりませうぞ。忠義に依つては親をも討つ、その本分も存じ居りますれど、未だ仕へぬ其うちは、父の存念立てたき心底。何卒この儀御賢慮あつて、御誕暫らく延引の儀、偏へに願ひ上げ奉りまする。

國久　ホヽウ、尤もの申し分。さりながら、我が子の立身出世を望むは親の習ひ。其方が父喜樂齋とやら、急に呼び寄せ以前の如く、武士に取立て親子の對面。なんと違

背はよもあるまじ。どうぢや。
源五　ハッ、審らかなる御前の御上意。仰せに從ひ只今より、椎津家の臣。この上は君へ忠節、及ばぬとも怠りなう。
國久　ムウ。承知か。
源五　ハッ。
國久　それ聞いて、身も過分に思ふぞよ。
源五　ハッ。
國久　それにつきても其方が家名、逸見を名乘らば武將へ恐れ。ハテ、何をがな。
トちよつと思案のこなしあつて
オヽ、幸ひ／＼、其方が勇猛、すさまじき儀を表し、勇にいさむの訓あれば、今より改め、勇源吾政村と名乘つてよからう。
源五　ハツ、何から何まで、殘る方なき君の御厚志、千萬有り難う存じ奉りまする。
國久　オヽ。
ト頷き、こなしあつて、我が差し料を取つて
當座の褒美くれう。
ト差出すな

源五　ハッ。
ト取つて
有り難く頂戴仕つてござりまする。
ト下座へ下がり、平伏する。
國久　坪坂丹下、其方はこれより直さま、彼れが舊家へ立ち越えて、父喜樂齋に逐一申し開かせ、家内の者ども同道いたせ。
丹下　ハッ、畏まつてござります。
國久　急げ／＼。
丹下　ハッ。
ト向うへ一散に走り入る。これを見て
國久　源吾、これにて其方も安堵であらうの。
源五　ハッ、恐れ入つてござりまする。
國久　この上は彼の怪物、實に珍らしき猛獸なれば、其まま直ぐに武將へ獻上。
矢柄　ハッ……ソレ家來衆、持參召され。
勢皆　ハア、。
ト勢子皆々立ちかゝつて、四足を括り擔ふやうにする。
國久　予も歸館の致さうわい。
皆々　ハア、。

トこの間に國久、花道際まで行き

國久　イヤ源吾、其方を館へ伴ひ、主從の杯くれう。今日の後詰め致せ。

源五　ハッ、畏まつてござります。

ト立派に下座切る。

矢柄　殿のお立ち。

源五　ソレ、お先。

勢皆　ハア、。

トこれにて勢子皆々、彼の狒々を上げうとしても上がらぬこなし。源五郎、これを見てツッと側へ行き、手にて先へ廻れと云ふこなし、勢子皆々先手へ廻る。よき所にて勢子大勢、肩を入れる。後棒の方は源五郎、片手にてグッと上げる。國久は花道際にてこれを見て、ムウと感心のこなし。チョンと木の頭、この見得よろしく

幕

二段目

新潟角屋の場
彌彦山中の場

役名——足利左門之介義胤。白山國之丞。岩瀬喜文太。熊井五太夫。增田伴作。坂田銀平。唐橋傳助。鳥形角藏。手代、勘九郎。太鼓持ち、定八。仲居、おすが。同、お磯。同、お德、若蔦、岩井鐵右衞門。破魔之助妹、渚。肝煎り、德兵衞。在醫、喜樂齋。ぞめき、勘八。同、彌八。傾城、代々衣。同、三千歲。同、砧。織殿屋新三郎。角屋のお傳。女乞食、おたく。萬里破魔之助。小歩き靑太。五十嵐軍八。盜賊、自來也。

造り物、平舞臺、見附け一面の長暖簾。上の方、中二階、この前に釣り手桶、これに咲分けの菊活けあり、但し後に落す仕組みあるべし。下の方、板塀。客路次の心にて切り戸口あり、これにすゞやと云ふ暖簾かけ、いつもの處に門口。掛け行燈、すべて新潟、廓の體。幕の內より右平舞臺眞中に毛氈を敷き

枕の上に錢を紙に包み、見事の水引を掛け、よき所に飾り、上の方に五太夫、銀平、傳助、角藏、四人各々着附け羽織にて、白地に梅模樣の扇を持ち、前へ並び居る。眞中にいしぶみ、傾城の形にて、莨盆扣へ居る。定八、太鼓の形にて唐團扇を持ち、眞中に扣へ居る。下の方には、おすが、お礒、お德、おさの、皆々仲居の形にて、銀地に櫻の模樣の舞ひ扇を持ち、並び居る。何れも扇は房付きにする事。この見得よろしく、摺り鉦入り、派手なる唄にて幕開く。

ト定八、少し前へ出て

定八　東西々々。

トこれにて鳴り物とまる。

お目通りに飾り置きましたる、投扇の曲と云つば、唐土にては、けんけら大王の時より始まり、我が日の本に於ては、三十ケ年以前までは、三ケ津は申すに及ばず、御當所にても專ら弄びましたる、一曲にござりますれど、中古廢れましたるを、この度さるお旦那樣方のお望みに依つて、起しましたる今日の趣向。この投扇の勝負にて、女中方がお勝ちなされますならば、前垂れの紐をはずまうと云ふ極め。又お客樣方がお勝ちなさるゝその時は、取つて捕へて寢る約束。この段わざ／＼口上を以て申し上げます。左樣に御一覽の程、願ひ上げ奉ります。

ト辭儀する。

碑　流石は藝者屋程あつて、口上はけうといものでござんすわいなア。

定八　イヤモウ、お譽めにあづかり、お恥かしう存じますわい。

すが　とんと立板に鳥餅を流すやうなわいなア。

皆々　ほんに、さうぢやわいなア。ハヽヽヽ。

定八　オツと東西。惡口を云ふまい。サア／＼、これからが、いよ／＼投扇の始まり。

トこれにて白囃子になる。枕をとつくと見てこなし。角藏、おさの、東西へ分れ、前へ出て扇を構へる。

定八　西は嶋屋、東はおさのどん／＼。

トこれより兩人辭儀して、投扇の件になり、定八は眞中にて行司の心。始終捨ぜりふありて

オツと、嶋屋さまの扇は散つて龍田川。おさのどのゝ扇は枕に暫し止まつて、三保の松原天の羽衣、云はずと知れし、おさのどのが丸勝ち／＼。

皆々　よう〳〵。
　ト咎める。角藏腹を立て
角藏　エヽ忌々しい。
　トぼやき〳〵、双方後へ扣へる。
傳助　次は身共が番だ。サア〳〵、お來やれ〳〵。
　ト云ひながら前へ出る。お徳も捨ぜりふにて前へ出る
定八　サア〳〵、用意がよくば始めませう。西は唐橋屋、東はお繼どん〳〵。
　ト以前の通りあつて
唐橋屋の扇は、宙にて舞うて風車。お繼どのゝ扇は、逆さにかゝつて夏の富士。これも同じく東が、丸勝ち〳〵
傳助　エヽ、なんの事だや。馬鹿々々しい。
　ト引込む。始終鳴り物生け殺し。
銀平　これは何れも、弱い〳〵。申さば相手は女の事。いで身共が敵討いたしてくれう。サア〳〵、對手は嫌はぬ。早く出い〳〵。
いそ　そんならわたしが、お對手になりませうわいなア。
　ト双方、捨ぜりふにて前へ出る。
定八　西は坂田屋〳〵。東は、お磯どん〳〵。
　ト右の件にて

坂田屋の扇は、一向盆體で、何とも名の付けられん。これが謂ゆる無茶苦茶扇、お磯どのゝ扇が。
銀平　すりや、身共が勝ちだの。
定八　エヽ、阿房らしい。何を仰しやる。負けも負け、臺なしの負けでござりまするわい。ハヽヽヽ。
銀平　エヽ、なんの事だ。面白くもない。
　ト引込む。
定八　サア〳〵、今度は東西の關と關。これが今日の見物でござりますぞえ。
　ト此うち五太夫、おすが前へ出る。
西の方は熊井屋々々々。東の方は、おすがどの〳〵。
　トまた以前の通りする。但しこの勝負、隙入りのこなし。
定八　オツと、見えたぞ〳〵。熊井屋の扇は、陰に閉ぢて枕を越え、これを名けて獅子飛びの妙曲。通例の對手なれば、あなたの方が勝ちなれども、對手は名に負ふおすがどの、霞に月のあしらひは、この投扇の番頭ゆゑ、これも東が丸勝ち〳〵。
皆々　よう〳〵〳〵。
五太　待て〳〵〳〵。わいら、滅多無性に喜ぶが、其方達

が勝つたら、抱いて寢る約束ぢや。サア〱、奧へ來い

來い。

ト　おすがの手を取るを振り切つて

すが　エヽ、何云はしやんす。そりや負けたらと云ふ約束でござんすわいなア。

傳助　イヤサ、斯うなつたら勝も負もない。勝負は無茶苦茶にして手柄次第、取つて締めうとはどうでござらうかな。

銀平　こりや好からう。一イ二ウで取りつかう。

男皆　然らば一イ二ウ三イ。

ト　踊り地になり、敵役皆々女形を追ひ廻す。此うち奧より喜文太。勘九郎、着付け羽織、手代の形にて出て來りて

勘九　どうぞ早う歸つて來ればようござります。

喜文　若殿が甚だの御立腹ぢやわい。

ト　云ひながらこの中へ出るを、敵役取り違へて、五太夫、銀平は喜文太が手を取り、角藏に傳助は、勘九郎を提へて、兩方より引ッ張る。

四人　サア〱、此方へ來をろう〱。

喜文　これは、なんとなさるゝな。

ト　此うち女形逃げて入る。

四人　イヤ、何とも致さぬ。よい事をなさつてくれるのだ

喜勘　これは又情ない。とんと譯がわからぬ。

四人　イヤ、譯はずんと解つてあるのサ。マア、手短かにちよつと手附けを。

ト　口を吸はうとして、顏を見て悄り。

五銀　ヤア、わりや喜文太か。

傳角　手代の勘九郎。こりやどうぢや。

四人　エヽ、忌々しい。

ト　奧へ行かうとするを

喜文　アイヤ〱、各々方、暫らく〱。

ト　これにて皆々止る。

イヤ、お止め申したは餘の儀にあらず。主人團之丞どのには、傾城代々衣を格別の御執心。それについて、これなる手代勘九郎へ申し込み、何卒してお手に入れたく、何れも樣の思し召し。

勘九　サア、それゆゑに私しめも、いろ〱と骨を折りましたが、何がハヤ、あの左門之介に、首ッ丈惚れて居るあの傾城、どうぞ手に入る魂膽が。

五太　その儀は兼ねて一味の我れ〱。これなる喜文太と

申し合せ、船手、村々近在まで、評役を云ひ附け、上納次第で身請けの相談。

勘九　先達てより團之丞さまへ、荷擔召さるゝ何れも樣。首尾よう參らば私しまで、キッとお庇を蒙むる筈。ちつとも早うその金が。

喜文　それにつけても課役の一條、御本家、椎津國久公へ、洩れ聞えなばその時は、主人の大事、何れものお身の上。

銀平　その儀はちつとも氣遣ひ無用。我れ／＼どもがお側にあつて、辯舌を以て申し說き、左門之介に科を塗りつけ

傳助　まつた鎌倉表へは、左門之介が放埓は、國久どのゝ越度となし、椎津の家督押領して

角藏　團之丞どのゝ心の儘。兩家の相續、なんの手間隙。その時こそは立身出世。それにつけても何かの密談。

喜文　幸ひ若殿團之丞どの、只今奧の圍ひにござれは、それへござつて萬事の手番ひ。

銀平　それは重疊。然らば何れも。

皆々　喜文太、來やれ。

喜文　先づ、ござりませう。

ト唄になり、皆々奧へ入る。後に勘九郎一人殘り、こなしあつて

勘九　この上は左門之介、代々衣が揚げ代の算用前を楯にして、思ひの儘に面恥かゝし、代々衣めが手を切らし、あの白山の若殿へ差上げゝなら、褒美はずつしり。さうなる時は何かの手番ひ。ムウ、こりや大分面白うなつて來たわい。

トこなし。沖の暗いのにの唄になる。向うより渚、着付け羽織、女大盡の形。後より鐵右衞門、ぶッ裂き、大小にて附き添ひ出て、花道中程にて

渚　イヤ鐵右衞門、あれに角屋と云ふ行燈が見える。大方あれであらう。案內しや。

鐵右　ハッ、畏まつてござります。

ト兩人、本舞臺へ來りて、門口より

賴もう／＼。

勘九　ハイ／＼、どなた樣でござりまするな。

渚　イヤ、角屋市右衞門とはこれかな。

勘九　ハイ、左樣でござります。

ト鐵右衞門、渚に向ひて

鐵右　ハッ、即ちこれでござりまする。

渚　大儀々々。

ト勘九郎に向ひて

そもじは、この家の御亭主でござるかな。

勘九　イヤ、私しは勘九郎と申しまして、この家の番頭めでござりまするが、して、あなた樣は。

鐵右　イヤ、仔細あつてお名は申さぬが、御客人樣には、この處の傾城達の風俗など、御覽ありたきとの儀ゆゑ、わざ〳〵お供したのでござるて。

勘九　これは〳〵、左やうなら大切のお客人樣。見苦しうはござりますれど、マア〳〵、これへお入りなされませ

渚　苦しうあるまいかの。

勘九　サア〳〵、お通りなされませ。

渚　そんなら、許して下されや

トずつと上手へ通る。勘九郎、いろ〳〵こなしあつて

勘九　これはしたり、どうしたものぢや。仲居衆は居ぬかいの。大事のお客樣がお入りぢやがな。サア〳〵、皆衆んかい〳〵。

大勢　アイ〳〵、合點でござんす。

ト云ひながら、定八、女形皆々出て

定八　ヤア、これは珍らかな、女中のお大盡樣、ようこそ今日はお入りなされました。イヤ、私しめは、定八と申しまして、この廓での太鼓持ち、幾久しう御贔屓の程、ヘイ〳〵〳〵、どうぞよろしくお願ひ申しまする。

ト辭儀する。鐵右衞門見て、腹を立て

鐵右　ヤイ〳〵此奴、變つた奴、馴れ〳〵しう、よくしやべる男だ。控へて居らうぞ。

定八　ヘイ〳〵〳〵、控へましてござりまする。

ト後へ扣へる。渚こなしあつて

渚　イヤナウ女中達、姫御前の身であられもない、廓通ひはよしない事ぢやと思やろが、これには深い

ト云はうとして

イヤ、それは追つての事。この廓へは初めてなれば、そこへよいやう、其方衆、何事も賴みましたぞや。

すが　これはモウ結構な仰せ。どうぞ不調法な私しらゆゑ

いそ　お氣に染まぬ事もござりませうなれど、そこはよろしく御料簡を

皆々　どうぞお願ひ申しまする。

ト此うち鐵右衞門、こなしあつて

鐵右　ア、コリヤ、辨當々々……これサ辨當。

トきつと云ふ。

勘九　そりや、何の事でござりまするな。

　トこなし。

鐵右　エ、、合點の悪い男だ。わりや只今、當家の辨當と申したではないか。

勘九　へ、ン、私しの事でござりますか、私しは辨當ぢやござりませぬ。番頭でござりまする。

鐵右　オ、サ、番頭々々。その番頭とやら、近う來い〳〵

勘九　へイ〳〵。御用でござりまするか。

鐵右　イヤ、餘の儀でない。只今其方を召し寄せたは、身がお供申した御客人樣、この度この處に於て、御遊興の遊ばさるゝ間、その雜費入用の金銀米錢、如何程相かゝる事だ。それ聞きたい。

勘九　エ、、何でござりまするか。今日のお入用の雜用でござりますか。それなれば先づ、この所の太夫樣方の揚げ代が、即ちマア小判で壹兩でござりますわい。

鐵右　ナニ、太夫とやらの揚げ代が一兩とな。待て〳〵。

　ト首に掛けたる財布より一兩出して

ソレ、小判で壹兩。キッと手渡し致したぞよ。

勘九　ヘイ〳〵、慥かに受取りました。先金とは有り難い有り難い。

鐵右　金子の相濟んだら、早く御遊興をお目にかけぬか。

勘九　ア、滅相な。こりや太夫方一人だけの揚げ代ばかりで、まだ外に雜用が入りますわい。

鐵右　ナニ、まだいるとな。

勘九　左やうでござりまする。マア、斯うつと、少なうても藝子樣方が五人、貳分づゝとして貳兩貳分でござりますわい。

鐵右　そりや怪しからぬ高直だな。ズッと減少はなるまいか。

諸　ア、イヤ〳〵、鐵右衞門、苦しうない。金子遣はしてたも。

鐵右　ハッ……ソリヤ、貳兩貳分。よいな。相渡したぞよ

勘九　ヘイ〳〵、有り難うござります。

定八　ところで、太鼓持ちが私しどもに十人ばかり。これも貳分宛として、五兩でござりますわい。

鐵右　ヤア、アノ五兩か。

諸　エ、モウ、早う渡してたもいなう。

鐵右　ハッ。エ、マア、惜しいものだわい、

勘九　さてその後が、御酒肴、御膳料、これが凡そ三兩。

鐵右　ナニ、まだ三兩取るか。過分の入用に相成るぞよ。

　トまた金を出す。

勘九　ところでマア、ザッとこんなものでござりまする。それから私しども始め、爰に居りまする仲居共へ、殘らずお花を頂きたうござりまする。
鐵右　まだ取るのか。して、そりや如何程ぢやぞ。
勘九　ヘイ、そりや何程とも申しませぬが、あなた樣のお心持ち次第でようござりまする。
鐵右　ナニ、心もち次第でよいとか。よし〳〵。それならば宮寺の瓦の奉加と同じ事。待て〳〵。
　ト腰の巾着より錢を出して
先づ一人前が六文として、斯う見渡したところが六人。六六三十六文遣はさうかい。
　トこれを見て、皆々こなしあつて
勘九　これは怪しからぬ。なんぼうお心持ちと申しても、そりやあんまりでござりますわい。
　ト頭を搔く。
鐵右　何があんまりだ、心持ちと云ふゆゑ六文宛、只くれるが其方達、不承知と申すのか。
勘九　イヤナア、さうではござりませんが、それでは一人前にも。
鐵右　ヤア此奴、初めて廓へ參つて不案内と見込み、金銀を貪り取る憎くい町人。今一言云うて見よ。その座は立たさぬ。返答いたせ。
　トきつとなる。渚見て
渚　ア、これはマア、鐵右衞門、其やうな事云やらずと、早う渡してたもいなう。
鐵右　エ、滅相な。此奴にウカ〳〵相渡しては、方途がござりませぬて。
渚　ハテ苦しうない。その金子、遣つたがよいわいなう
鐵右　すりやアノ此奴等に……一兩宛は罰が當らう。ハテ、苦々しい。
　ト一兩づゝ渡して、こなしあつて
エ、マア、結構なお捌きだなア。
　ト後へ扣へる。
すが　申し、あなた樣、段々
皆々　お有り難うござりまする。
渚　ハテ、なんの禮に及びませう。イヤナウ鐵右衞門、其方は一先づ旅宿へ歸り、後方迎ひに來てたもや。
鐵右　ハツ、畏まつてござりまする。ヤイ〳〵皆の者、其方達が望み通り、金子遣はしたれば、大切の御寮人樣、麁相ないやう、しかと賴んだぞよ。よいか。キッと申し

付けたぞ。

勘九　そりや畏まつて居ります。お氣遣ひなされまするな。又とあるまいお大盡樣、大事にかけいで、なんと致しませうぞ。

鐵右　そりやさうありさうな事。金銀の冥加だ……然らば身共は、直さま旅宿へ。

諸　早う歸りや。

鐵右　ハツ……、皆の者、よきに賴むぞや。

皆々　ハテ、わたしらが惡うは致しませぬ。ようござりますわいなア。

鐵右　よいな〳〵。其方がよくば、此方もよいわサ。麁相はないの

ト云ひながら、門口にてつたり行き當り

アイタ、、、、。其方より、此方が麁相だ。エ、忌々しい。

皆々　ホ、、、、。ようお出でなされました。

ト唄になり、頭さすりながら橋がゝりへ入る。後見送つて

すが　ほんにマア、堅苦しい御家來衆ぢやないかいなア。

勘九　イヤ、とんとモウ、こつ〳〵としたお人樣ぢやて。

すが　それはさうと、あなた、太夫樣に、お名指しでもござりますかえ。

諸　イヤ、お傾城に望みはなけれど、外にちよつと。

すが　イヤサマ、御樣子もござりませうが、何も申すも爰は端近

いそ　マア、奧座敷へお越しなされて

勘九　お杯でも早う上げませうや。

皆々　そりや合點でござんすわいなア。

諸　何事もそこへ、よいやうに、其方衆を賴みますぞや

すが　そんなら皆樣、御案內。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト踊り地になり、皆々附き添ひ奧へ入る。向うより、喜樂齋、醫者の形、駕籠に附き添ひ、德兵衞、連れ立ち出て、花道にて

喜樂　イヤ、在邊とは違うて、賑はしい事でござるの。

德兵　イヤモウ、年中跳ねたり踊つたり、なんと陽氣な商賣でござりますての。

ト云ひながら門口へ來て

オツと、爰へ下ろしてもらひませう。時、に喜樂齋どのちつとの間、爰に待つて居やつしやれ。

喜樂　ハイ／＼、早うお頼み申します。
德兵　合點ぢや／＼……イヤ、御免なされ。
　　ト ずつと内へ入る。
用心の悪い。誰れも居ぬか。仲居衆は座敷と見えるわい。
併し、喚いて見よう。お磯どん、お德どの、仲居衆々々。
三人　アイ／＼、いま行くわいなあ。
　　ト云ひながら、お磯、おさの、お德、出て來る。
オヽ、お客様ぢやと思うたら、肝煎りの德兵衛さまかい
なア。
德兵　德兵衛さまかとは、どうしたものぢや。時に昨日約
束した、奉公人の事について、お家様に逢ひに來ました。
その奉公人も連れて來たと、云うて下され。
いそ　さうかいなア。シタガ、お傳さまは太夫様と一緒に
今日は八幡様へ參らしやんしたぞえ。
德兵　そんなら大方、隙が入らうの。
さの　イエ／＼、程なうお歸りであらうわいなア。
德兵　そんなら臺所で、待ち合さうわいの。
仲居　それがよいわいなア。
德兵　そんなら、カウツ。
　　ト表へ出て

駕籠はその中戸から、入れてもらひませう。
駕籠　ハイ／＼、畏まりました。
　　ト中戸口より駕籠入る。
德兵　喜樂齋どのは、此方へ入らんせ。
喜樂　ハイ／＼。左やうなら、お許しなされませ。
　　ト内へ入る。
德兵　時に、お家様は、今は留守ぢやげな。どうでもちつ
と隙が入らう程に、わしと一緒に勝手へ行て、暫らくの
うち待たざアなるまいぞや。
喜樂　そこへよろしう、お頼み申します。
とく　そんなら德兵衛さま、あなたも一緒に。
喜樂　これはお世話になりまする。
とく　ナンノイナア。サア皆様。
皆々　サア、斯うござんせいなア。
　　ト道成寺の謠になる、
〽花の外には松ばかり／＼、暮れ初めて鐘や響くらん。
　　トこれにて皆々、奥へ入る。あと亂拍子になり、向う
より左門之介、着流し大小にて出て來ると、後より勘
八、彌八、ぞめきの形にて、戸屋の内にて
兩人　オヽ、イ／＼。

　ト呼びながら出て來りて

彌八　コレざぶ。最前から呼んで居るに、貴様が耳へは入らんのかい。

勘八　但しはわりや、土聾かい。物を吐かせ。

彌八　待てと云や、用があるのぢや。

兩人　キリ〳〵と待ちやれややい。

　トこれにてちよつと見て、構はず行かうとするを

勘八　ヤイざぶめ。うぬは、なんで物を吐かさぬぞい。納まつた頬さらすな。但しは、おいらが怖いのかい

　ト彌八、前へ廻つて立ち塞がる。左門之介ムッとした思ひ入れにて、キッと睨み付けるを

彌八　なんぢやい〳〵。その面なんぢやい。わりや、おれを睨めて、どうさらすのぢや。そないに睨めさらしや、いつぞ。

　ト下駄にて打つてかゝるを、抜打ちに、ポンと切る。勘八、これを見て逃げうとするを、及び腰に切り倒し其まゝ見向きもせず

左門　初めて伽藍橋の、道成興行の寺なればとて、道成寺とは。

　ト謠うたひながら悠々と血刀提げ、本舞臺へ來る。後

　コイヤイ。此うち奥より

三千　アイ〳〵、合點でござんす。

　ト傾城の形にてズッと出て來る。左門之介は其まゝ内へ入る。出會ひ頭に顔見合はせ、三千歳、恟りして

アレエ。

　ト云ひながらベッタリ下に居て慄ふ。合ひ方になり、左門之介、大事ない程に水をかけいと云ふ仕方。三千歳、是非なく釣り手桶の水を掛ける。左門之介、よしよしと云ふこなしにて又、拭けと云ふ仕方する。三千歳、怖がり、側へ行きかねるこなし。これにて左門之介、裾にて刀を拭き、鞘に納める。三千歳、矢張り袖にて顔を隠し、慄うて居るゆゑ、これを見てニッタリと笑ひ、思ひ入れ。チヤンと唄になり、左門之介、ツイと奥へ入る。三千歳、怖々後見送りて、胸撫で下ろしこなしあつて。

三千　ほんにマア、若殿様ゆゑ、折り〳〵恟りするわいなア。

　ト道成寺、山盡しの合ひ方にて、喜文太、奥より出て

喜文　その恟り蟲、身共が鎮めてやらうわい。

　ト抱きつきにかゝるを

三千　アレエ。また惡い事しやしやんすわいなア。
　ト振り放すを
喜文　これは情ない。大きな聲ぢやな。人が來たら邪魔になる。生娘見たやうに、野暮な事云ふものぢやない。なんぼうわれが辛苦しても、惚れたが因果、惚れられたが因果。親は代々殺生で、親の報いが子に報い、むく／＼むくと持ち上がる、その苦しみには替へ難し。なんでもかでも早いが賞翫。遠慮に及ばぬ。サア來い／＼。
　ト追ひ廻す。三千歳、逃げ廻る。此うち奥より仲居皆皆出て、この中へ割つて入り
すが　久しいの、また文さんの惡洒落かいなア。
喜文　イヤ、惡洒落ぢやない。實眞實アノ三千歳に
いそ　サア、其やうに無理な事しやんすりや、團さまに告げるぞえ。
喜文　エヽ滅相な。それ云はれてよいものか。
さの　そんならこの後、惡てんがうな事しやんすなえ。
喜文　サア、そりやその時の事。今日は今日の事にして、長うとは云はぬ。せめて一遍。
　トまた三千歳の方へ行かうとするを
とく　イエ／＼、そんな事は、わたしらがさせぬわいなア。

喜文　忌々しい。さゝせぬと云うて、せずに置かうか。
皆々　イエ／＼、ならんわいなア。
　ト女形皆々支へるを
喜文　エ、面倒な。
　ト突き退け、行かうとするを、皆々寄つて喜文太を振り廻す。山盡しの合ひ方、忙しうなつて、トヾ、皆々して喜文太を突き倒して奥へ逃げて入る。
喜文　ヤイ待て／＼。
　ト起き上がつても、ふら／＼するこなしにて
コリヤどうぢや。家が廻るやうな。ア、世直し／＼……てもマア、えらい目に遭はし居つた。寄つてかゝつて馬鹿にひろいだぞよ。この仕返し、どうするか待つて居れ。
　トまた立ち上がつて、ひよろ／＼として
どつこせう／＼。こりや、もそつと氣を鎭めてから。
　トちつと下に居て、氣を鎭めながら、フト思ひ出したこなしにて
南無三、彼奴等に懸つて、肝心の事を忘れて退けた。軍八どのから申し越された彼の一儀。團之丞どのへ、オ、さうぢや。



初演の



組番附

ト合ひ方になり、奥へ入ろ。と内にて新三郎。

新三　イヤ、只今參ります。暫らくのうちでござります。

ト云ひながら、三味線を持ち出て來りて

ヤレ／＼、團之丞どのゝこぢつけ酒には、殆んど弱り果てたと云ふもの。先づ暫時の間、爰で御休息と出かけざなるまい。

ト右の三味線を持ち、てんがう彈して居ろ。此うち三千歳、あたりを見ながら、ソッと出て、右の三味線を引ッたくり、下手へ行き、てんがう彈する。新三郎見て

なんの事ぢや。折角人が面白をかしう樂しんで居るものを、アタ阿房らしい。それを取られたとて、ヂッとして居やらかい。

トあたりを見廻し、尺八を取つて來て

三味線取られても、まだ爰に尺八と云ふ樂しみがあるわい。

ト云ひながら、吹かうとする。また三千歳、取らうとするを。

どつこいしよ／＼。それから御覽じろ。今度はさう巧うはゆかぬぢやての。

トこれにて三千歳、トンと下に居ろ。媚めいたる合ひ方になり

三千　新さま、お前は好い機嫌ぢやなア。

トぴんとする。新三郎見て

新三　何がお氣に障つたやら、譯も云はすと、きついお腹立ち。

三千　ハイ、何ぢや知らんが、わたしや腹が立つて／＼なる事ぢやござんせん。ほんにモウお前は、とんと三味線のやうなお方ぢやわいなア。

新三　なんぢや、おれが三味線のやうな……ハヽン、さては四角四面なと云ふのぢやな。

三千　アイ、さうでござんす。胴厚かましいと云はうか、ほんに厚皮なと云はうか、逢ひたい事、イヤ懷かしいの可愛いのと、うた／＼嘘を繼ぎ棹へ、優しい音締めにツイ惚れて、書いて渡した起證の數々。思うた事は坪違ひ。ほんに誓文罰當り、騙された事思ふ程、胸は二上り三下り。わたしやいつそ、掻きつきたいやうなわいなア。

新三　何を云ふのぢや。とんと合點がゆかぬ。其方そりや本調子で云やるのぢやあるまい。ハヽン、解つた。大方おれが嫌になつたゆゑ、それでそんな事云やるのであら

うが、その合の手は喰はぬわいの。おれが又その三味線なら、おのれが心はこの尺八。なぜと云や、何處彼處のお客でも、床へ入つたら一夜切り。筒音優しう二世三世變らぬなぞと聞かすであらうがな。

三千　指いて下さんせ。筒音は愚か怪我な事、指もさゝした事はないぞえ。外のお客は無慙流し、逢はぬその夜は獨り寐の、閨の巣籠り浮き節の、心の竹を今爰で、いつそ割つても見せたいわいなア。

新三　イヤ、見いで仕合せ。一も二もない心の糸道。音締めは疾から海老尾、それを知らんと思ふかいやい。

三千　エヽ、其方の心に引比べ、小股を取らうと照れ隱し。アタ憎てらしい男の心。いつそこの尺八で、叩きたいわいなア。

新三　なんぢや叩きたい。こりや面白い。叩かれるなら叩いて見い。われが叩かうとしても、おれはこの三味線でチヤンと受けるわいやい。

三千　エヽ、アレ、まだいの。いつそその口を。

ト叩かうとするを三味線にて留め

新三　チヤン。

ト此うち喜文太、奥より

喜文　新三郎はどれに居るぞ。新三郎々々々。

ト兩人これを知らず

三千　エヽモウお前は。

ト叩きにかゝるを三味線にて留めて

新三　チヤン。

喜文　新三郎、これに居つたか。

ト云ひ〳〵出る。兩人矢ッ張りこれを知らず

三千　エヽ、憎てらしい。

新三　チヤン。

喜文　これサ新三郎。

三千　アレ、まだいなア。アタ腹の立つ。

新三　チヤン。

喜文　これはしたり新三郎、どう致したものぢや……これサ新三郎。

ト大きな聲して居る。これにてやうやう氣が附き、喜文太を見て、兩人悧り。

新三　これは喜文太さまでござりまするか。何事でござります。悧り致しました。

喜文　悧りどころぢやない。最前から團之丞どのが、お呼びなさるゝわサ。

新三　イヤ、私しは只今ちよつと、これへ參りましたので
ございますわい。
喜文　只今參つたのか存ぜぬが、新三郎めは、何かソワソワと致し居つて、予が座敷にはとんと居らぬ、大方身が鬱陶しいのであらう、憎い奴め、早く呼んで參れと、怪しからぬお腹立ぢやて。
新三　エ、。
喜文　サア、それぢやに依つて、早く參るがよい〳〵。
新三　そりや怪しからぬ事ぢや。
ト あわてながら奥へ入ると、あと花笠の鳴り物になる
三千　ドレ、わたしも奥へ。
ト 行かうとするを
喜文　ア、待て〳〵。其方には用がある。
三千　アレ、又かいな。オ、好かん。
ト 行かうとするを、よろしく留め
喜文　コリヤ三千歳、わりやなんぼう新三郎を戀ひ慕うても、新三郎は嫌がつて居るぞよ。その證據と云ふは、外に深い色が出來て、われの方は秋風ぢやが、わりやア知つて居るか。
三千　エ、。
ト 恟り、こなし。
喜文　オ、知るまい〳〵、今度鎌倉よりのお使ひに參つた、渚と云ふ破魔之助が妹めに打ッ惚れ、ちん〳〵鴨の入れ首と來て居るぞよ。
三千　エ、、なんと云はしやんすえ。
ト むつとして下に居る。喜文太も下に居る。
三千　さうして、そりやマア、ほんまかいなア〳〵。
喜文　イヤモウ、ほんまもほんま、この事知らん者は一人もない。ところでその渚と云ふ女子と、新三郎が話しを聞いて居たら、渚めが吐かすには、コレイナア新三郎さまえ、お前はあの角屋の三千歳づらと、深う逢うて居さんすげな、あの傾城めは顏に似合はぬ、えらう臭いげな、第一は臭い匂ひに依つて、どこもかも古臭い。まだませ臭い阿房臭いと、サア何がモウ臭い盡しを云うたれば、あの新三郎めが吐かすには、おりやとんと今まで氣が附かなんだが、それ聞いたので、どうやらそんな覺えもあるわい、モウ〳〵話し聞くのも臭いやうになつて來たゆゑ、おりや顏見るのもうるさうなつて來たと、惡口を云うて居つたぞよ。
三千　エ、、胴慾な。渚さまとやら、何恨みあつて、わた

しが事を其やうに、マア惡ざまに、ようマア云はれた事
ぢやわいなア。
　ト いろ／＼腹立てる。
喜文　オヽ、道理々々。
　ト こなし。三千歳もキッとなつて
三千　さう聞いては片時も、新さまの側は離れられぬ。オ
オさうぢや。行つてこの恨みを。
　ト 行かうとするを留めて
喜文　アヽ、待て／＼。まだある／＼。これからが此方の
相談。新三郎への面當てに、なんと身共に。
　ト 側へ寄らうとするを
三千　エヽ、そこどころぢやないわいなア。
　ト 突き飛ばし、ツイと奥へ入る。
喜文　エヽ、なんの事ぢや。折角巧うやりかけたもの、拍
子にかゝつて又しくじつて退けた。エヽ、忌々しい。
　ト 呟やく。この時奥より
渚　新三郎はどれへ行きやつたぞ、新三郎々々々。
　ト 呼びながら出て來る。喜文太見て
喜文　ヤア、こなたは破魔之助さまのお妹御、渚さま。
渚　さう云やるは、團之丞どのの家來、喜文太どのでは
ござらぬかいなう。
喜文　變つた處で御意得ましたて。
渚　ほんに、何處へ行きやつた事ぞいなア。
　ト 尋ぬるこなし。
喜文　イヤ、あなたのお尋ねなさるゝは、織殿屋新三郎で
ござりませうがな。
渚　ヤア、なんと云やる。
　ト 愕りする。
喜文　オッと愕りなされますな。拙者よく存じ罷り居りま
す。それにつけても、渚どの、あなた様は、お氣の毒な
事でござりますなア。
渚　いろ／＼の事を云やる。わたしやそんな事は知らぬ
わいなう。
喜文　イヤ／＼、其やうにお隱しなさるゝ事はござりませ
ぬ。ハテ、拙者めに御遠慮はござりませぬ。シタガ今申
しました、あなた様のお心根、それ程までに思うてござ
る新三郎が致し方、ほんに思へば渚さま、如何におぼこ
い娘御ぢやとて、あんまりの事で、側で見る目もお氣の
毒に存じますわい。
渚　そりやマア、なんの事ぢやぞいなう。

喜文　なんの事ぢやござりませぬ。あの新三郎め、あなたの事を袖にして、この家の傾城三千歳と云ふ女子に、現をぬかして居りますぞえ。
渚　ヤア。
喜文　サア、その證據と云ふは、たつた今閨ひの内でのひそひそ話し。この家の抱への傾城めと、どち狂うて居る事實正明白。身共具さに承はりましたぞい。
　トこれにて渚、我れを忘れて
渚　なんと云やる。そんなら其方、その話しを。
　トこなし。
喜文　イヤモウ、聞いたの段ぢやござりません。詳しう承はりましたが、あの新三郎が申しますには、おりや據なう、あの渚さまをいがめたが、今での因果。尤も先から嫌ぢやけれど、あれはほんの時の興にしたのぢや、其方を退けて外に可愛いと云ふ女子が、日本は愚か唐天竺を探がしても、無いわいやいと申しましたら、傾城めが云ひますには。
渚　なんと云うたぞや。
喜文　サア、お聞きなされ。そりや嬉しうござんす、シタガ、全體厚かましいあの渚づらめ、いつそ憎さも憎し、見せしめの爲に血を絞つて、毛氈にしてやらうと云ひ居りましたと思はつしやれ。さうすると新三郎が、ほんにこりや好い思ひ付きぢや、わしもうるさうて／＼ならん、あの渚、毛氈にして賣つてしまひ、金にして其方を身請け、二人仲よう暮らしたいと申して居りますぞえ。
渚　エヽ、聞えませぬ新三郎どの、二世も三世も變らぬと、仰しやつたのは僞はりか。さうとも知らずウカ／＼と、騙されたのが腹の立つ。エヽ、お胴慾でござりますわいなア。
　トこなしあつて泣く。
喜文　お道理でござります。腹が立たいで何と致しませう。さりながら、あなたも武士のお娘御、騙されたはよいで濟まされますまい。いつそこの上は、あの傾城めに鼻明かさすが上分別、新三郎を引ッ捉へ、云うて／＼云ひ捲り、なんでもかでも三千歳と、手を切らすのが此方の腹癒せ。また新三郎が傾城と手を切る事を、なんのかのと申した時には、武士の娘、料簡ならんとキツと仰しやれさうない時には、あなたは毛氈にしられますぞえ。
渚　それぢやと云うて端下なう、どうマアそんな事が。
喜文　ハテ、氣の弱い。そんな事では行けませぬ。食ひや

いのない身共でさへ、腹が立つて〳〵なる事ぢやござりません。この上は拙者の腰押し、叶はぬ時には、共々申しませう程に、サ、、お出でなされませ〳〵。

ト突きやる。渚、こなしあつて

渚　それでもどうやら。

喜文　ハテサテ、後にはこの喜文太が扣へて居りますわい

トこの時、内にて

新三　喜文太どのは、どれへござつた。喜文太どの〳〵。

ト呼ぶこなしあつて

喜文　ありや新三郎が聲。爰へ來るこそ丁度幸ひ。モシ、今の手を切らす事、ようござりますな。

トこなしあると、奥より

新三　喜文太どのは、どつちへ行かしやれた。如何に調伏ぢやとて、あんまりの事で恟りさしたわい。

ト云ひながら出て、喜文太を見て

オヽ、喜文太どの、これにござりましたか。あなたもマア何を仰しやる事やら、園之丞さまが腹を立てゝお出でなさるは、私しぢやござりません、あなたの事でござりますぞえ。

トこれにて恟りして

喜文　ヤア、ナニ、殿がお腹を立つてござるとな。

新三　サア、お聞きなされい、あの喜文太めは憎くい奴ぢや、おれが供に付いて來ながら、主人を抛つて置いて、女子さへ見るとびろ〳〵と、いつその事手討にしてしまはうかしらんと、えらいお腹立ちでござりますわい。

喜文　ヤア滅相な。そりや益體ぢや。

ト慌てゝ奥へ走り入る。新三郎、渚を見て

新三　オヽ、どな樣かと存じましたら、渚さまでござりますか。何御用あつてこの所へ。

トこなし。渚もこなしあつて

渚　新三郎さま、何用あつてとは、エヽ、胴慾でござりますわいなア。

ト取りつき泣く。合ひ方になり

新三　これは如何な事。何をマア其やうに、お恨みでござりますな。

渚　サア、今さら改め云ふではなけれど、靈光院さまの仰せを受け、若殿樣の御見舞ひに、參りましたが緣の始まり。あなたの方からなんのかのと、優しいお詞。嬉しいやら恥かしいやら、フトした事で二世の約束。大事の殿御と思ふものを、傾城に見替へられ、姫御前の身でな

んとマア、わたしや悲しい口惜しい。どうマアこれが居られませうぞいなア。

ト膝に取りつき泣く。

新三 エヽ、その事でござりますか。ハテ、わつけもない事仰しやります。あなたもマア、よう物を思うて御覽じませ。高が賣り物買ひ物の、傾城遊女は一夜流れ、申さばほんの附合ひぜりふ。眞實心から可愛いの、又惚れたのと云ふは、あなたお一人。それを振り捨て外にマア、心が變つてよいものでござりませうぞいなア。

渚 そりやアノ眞實に。

ト此うち三千歳、側へ出かけ居る。

新三 なんの嘘を申しませうぞ。

ト後にて三千歳、腹の立つこなし。

渚 それ聞いて、わたしも落ちつきましたわいなア。必らず變つて下さんすなえ。

ト三千歳、いろ／＼腹の立つこなしあつて、奥へ入る

新三 ハテ、ようござりますわいの。

渚 エヽ、お嬉しうござりまする。

ト寄り添ふ、奥よりおさの出て來り。

さの 申し／＼し、渚どのとやらは、あなた樣でござりますか。左門之介さまがお呼びなされてござりまする。ちやつとお出でなされませ。

新三 ソレ、若殿樣がお召しなされるとの事。

渚 ハイ／＼、只今參りまする。

新三 早うお出でなされませ。

ト引立てにかゝるを

渚 新三郎さま、必らずともに今のお詞を、

新三 ハテ、ようござりまする程に、マア／＼奥へ。

さの サア、ござんせいなア。

トせり立て、無理に連れて入る。後見送り

新三 どうしても生娘と云ふものは、丸いものぢやなア。

トこなし。此うち奥より三千歳出て

三千 コレ、新さま。

ト新三郎が胸倉を取るを

新三 これは又、腹立てやるかいの。マア、譯を聞いたがよいわいの。

三千 イエ／＼、譯もなんにも、その云ひ譯は聞かぬわいなア。

新三 ハテ、これは如何な事。其やうに云はずと、マア一通り聞きやいの。

三千　サア、云ひ譯があるなら、ちやつとその譯を云はんせいなア。

新三　サア、譯と云ふは、高が斯うぢや。あの渚と云ふは、ありや足利家のお直參、破魔之助さまと云ふお人のお妹御、それをおれが惡ざまに、つれなうしてはこの身に祟り、難儀な事が出來やうも知れぬ。そこでなんでも我が身が可愛さ、じやらくら云うて摺りぬけて、隨分腹を立てさせぬやう、ほんの當座の間に合ひぜりふ。何にも氣遣ひな事はないわいの。

三千　イエ／＼、その云ひ譯は暗い／＼。常から性惡のお前の惡性、さうばかりでは濟まぬわいなア。

ト渚出かけ、聞いて居る。

新三　これは又疑ひ深い。ようマア物を思うて見や。色町と違うて、惣體屋敷と云ふものは、堅いばかりが取り得にて、なか／＼一口もいけるものぢやないわいの。

三千　さう云はしやんすりや、そんなもの。シタガ、アタ厚かましい舐めくさり。わたしと云ふ深い相方のあるお前を、斷わりもなしに惚れくさるとは、ほんに野太いと云はうか、アタ不調法な姫御前づらぢやわいなア。

新三　さうぢや／＼。シタガ、おれも付合つて口を合して居るも、曰く因縁のある事。と云ふ譯は、彼奴、根が屋敷者ゆゑ、劍術は元より柔術まで、それは／＼手が利いてある。そこでもしも、氣に從らん事云ふが最後、何の苦もなくヒヨイと取つて投げるのであらうも知れん。さうしられては腰が拔け、忽ち躄にならねばならんと、後先思うて、おれが思案ぢや。

三千　聞けば聞く程面憎い。エヽ、コレマア、どうしたらよからうぞいなア。

新三　どうと云うたら、オヽ、さうぢや、あの目玉をこの煙管で、こちらの方から、あちらの方へ

ト仕方しながらフト渚と顏見合せ

ヤア。

ト悄りして、ちやつと煙草を隱して

あなたは渚さま、何時の間に。

トこなし。

渚　ハイ、わたしや最前から。

兩人　エヽ。

ト兩人こなし。

渚　申し、お傾城樣、あなたマア、ようも／＼私しが血を絞つて、毛氈に染めると仰つしやたなア。

三千　イエ〳〵、それよりはお前様、わたしをよくマア臭いと云はしやんしたなア。

渚　何は儘よ、新三郎さま、爰にあなたを置かれませぬ。マア、奥へお出で遊ばしませ。

ト手を取るを、引分けて

三千　オヽ、さうはなりませぬ。ハイ、新さまはわたしが大事のお方。お前の儘にはならんわいなア。

渚　イヤ、新三郎さまには、お話し申さねばならぬ事もあれば、是非わたしが。

トまた手を取るを

三千　イエ〳〵、滅多に遣る事はなりません。わたしが部屋へ行て、抱いて寐るのぢやわいなア。サアござんせ。

ト引ッ張るを

渚　イヤ、さうはなるまいわいの。

ト引ッ張る。

三千　ならうがなるまいが、わたしや連れて行くわいなア

渚　イヤ、此方へお越し遊ばせ。

三千　イヤ、此方へござんせ。

ト両方より新三郎を引ッ張る。新三郎、ソッと両人の手を取り合させ、こなしあつてツイと奥へ入る。両人これを知らず

両人　サア、ちやつと。

ト両人、顔見合せ

エヽ、なんの事ぢやぞいなア。

ト振り放し、唄になり、トン〳〵として腹を立てながら、奥へ入る。後直ぐに、云はず語らずの唄になり、向うより代々衣、傾城の形。筆野、禿の形。お傳、花車の形にて連れ立ち出る。後よりおたく、乞食婆にて破れ手拭にて顔隠し、附き添ひ出て

たく　ハイ〳〵、御結構な御繁昌様から、どうぞお情取らして下さりませ。

でん　これはしたり、たつた今遣つたではないかいの。

たく　ハイ〳〵、あなた様からは戴きましたが、あの太夫様から、まだ貰ひませぬ。どうぞ取らして下さりませ。

ト云ひながら、本舞臺へ來る。

でん　女子ども、今戻りましたぞや。

ト内へ入る。仲居皆々出て

皆々　オヽ、只今お歸りでござりますか。

すが　けうとうお隙がいりましたなア。

でん　サイナウ、秋の花の萩芒、二人の子供が道草で、思

はず知らず、遲うなりましたわいなう。
皆々 それは好いお樂しみでござりましたなア。
ト此うち、おたく表より覗く。
たく 申し、太夫樣、どうぞ取らして下さりまし。
筆野 コレ、まだそこに居やるかいなう。
でん ほんにしつこい、乞食婆樣ぢやわいなア。
たく 其やうに乞食々々と、澤山さうに云うて下さりますな。わたしやおたくでござんすわい。
ト手拭を取り、ズッと内へ入る。
でん ヤアお前は。
ト恟り。皆々も見て恟りして
皆々 代々衣さまの母御樣。
代々 エヽ、ほんに母さん。
トはつと思ふこなしにて俯向く。合ひ方になり
でん ても、怪しからぬ形にならしやんしたなア。
トこなし。
たく 娘々。
ト代々衣が側へズッと行き、トンと下に居る。皆々嫌がる。
たく これはしたり娘。何もそないに見ん顏する事はない。高で知れた無心に來たのぢや。われが爲には義理のある親ぢやぞよ。オヽ、親ぢや。その親が、こんな形になつて居るを、よもや知らん顏も出來まい。大方無心聞いてたもるであらうの。オヽ、わが身に限つて否とは云ふまい。オヽ、よい子ぢやなう。
トこなし。お傳こなしあつて
でん イヤ、おたくどの、ちよつと爰へござれ。
たく ハイ〳〵。
トお傳の側へ行く。
お家樣、なんでごんすな。
でん コレ、惡いぞえ。ハテ、これが一度や二度の事でもあらうか。又しても〳〵、來る度〳〵に大枚の貢ぎ代。ソレ十兩の廿兩のと、可哀さうにあの子ぢやとて、金の生る木は持つまいし、ちつとは義理といふ事を、思うてやつたがよいわいなア。
たく 成る程、お家樣、尤もでござります。さう仰しやれば皆わたしが惡うござります。シタガ、何遍無心云うても、あの子にこそ云へ、お前樣には云ひませぬぞえ。今仰しやる通り、成る程義理知つて居ますぞえ。ハイ、義理知つて居りやこそ、此やうな事云うて來ますのぢやわ

い。あの子の爲には養ひ親、しかも生さぬ仲でござりますわい。なりやコレ、産みの親より猶大事。義理の媽樣。ハイ、義理ある娘でごんすぞや。今さら云ふではなけれども、元あの子の身の上は

ト此うち橋がゝりより破魔之助、着流し大小、編笠にて、門口に聞いて居る。

代々　アノ、必らずそんな事云うて下さんすなと、くれぐれ頼んで置いたぢやないかいなア。

たく　サア、云ふなら云ふまいが、その代りにはわしが頼みを。

でん　ハテ、少々の事なら、あの子に代つて、わしが聞いて上げませうわいなア。

たく　それはお家樣、有り難うござります。どちらからでも貰ひさへすりや、わたしぢやとて年寄つて、こんな事云ひたうはござりませんわい。

でん　さうしてマア、なんぼ程いるのぢやえ。

たく　イヤモウ、この年になつて、なんぼのかぼのと、大きな事は申しませぬ。ツイ小判でたつた七十兩。

傳代　エ、。

ト兩人顏見合せ、こなしある。始終表にて破魔之助、聞いて居る。

たく　七十兩程ありや、マア當分の所はよいのでござります。お邪魔ながら、早う出して下さりませ……どうぢやな。御返事はないかえ。返事のないは、不承知と見えるわい……よいワ。せう事がない。それなれば一通り譯を聞いてもらはにやならん。一體あの代々衣と云ふは

ト又云はうとするを

代々　ア、申し、それ云うて下さんしては。

たく　サア、云はるゝが否なら、金をたもるか。

代々　サア、それも、どうなとするわいなア。

たく　得心ならば七十兩、いま受取らうか。

代々　サア、今と云うては。

たく　ならざ云はうか。

代々　サアそれは。

たく　但しは金をたもるか。

代々　サア。

たく　サア。

兩人　サア／＼。

たく　娘、返事は、どうぢやぞいなう。

トこの時、表より

破魔　イヤ、その金は身共が用立て申さう。
ト編笠を脱ぎ、ズッと内へ入る。代々衣、破魔之助を見て
代々　ヤアあなた樣は。
トお傳も見て
でん　ほんに、これまでお見受け申さぬお侍ひ樣。代々衣さまの手詰めの場所、救うてやろと仰しやるは。
トこなし。
破魔　されば、金銀は世上の寶。諸人の尊む物なれど、又これを以て押す時は、却つて賤しむべきもの。松の位の代々衣太夫、廓で一二を爭ふ名妓、その身全盛にありながら、僅かの金子に手詰まりしては、流石名高き太夫職、巨萬の寶も貯ふべき筈。さはなくして只今の仕儀、清貧を樂しむ志し、誠に武士も斯くありたきもの。些少なれども心に愛で、用立て申すこの金子……コリヤ婆よ。
ト袱紗包みを解き、金を抛つてやり
ソレ、その金を受取つて、早くこの場を、歸れ／＼。
トおたく婆、取つて
たく　すりや、この金を私しに……オホヽ、ほんにマア、思ひがけない處へ、結構なるお客樣がお出で遊ばして。左やうなら申し、お辭儀なしに戴いて置きませう。これと云ふも娘、其方のお庇。オヽ、孝行な娘ぢやなア。ホホヽヽ。又もや御意の變らぬうち、ドレ、お暇申しませうか。
ト橋がゝりへ走り入る。代々衣こなしあつて
代々　ついにお目もじ申しませぬ、あなた樣が。
破魔　イヤ、折入つておてまへに、話したき仔細あるゆゑ。
代々　アノ、數ならぬ私しに。
でん　折入つてのお話しとは。
トお傳こなし。
破魔　サア、密事なれば、暫時この場を。
でん　イカサマ、深い御樣子のありさうな事。
破魔　氣の毒ながらお身達は。
でん　皆も一緒にマア奥へ。シタガ、御用があるならば。
破魔　そりや、此方より呼ぶであらうサ。
でん　左やうならばお客樣。仲居衆。
皆々　わたしらも一緒に奥へ。
破魔　後程世話になるであらう。
皆々　左やうならば、御ゆるりとなされませい。
ト唄になり、皆々奥へ入る。兩人、後見送る。合ひ方、

代々　サア、斯うした所はあなたとわたし。御遠慮なしに
お話しを。
破魔　如何にも。
トこなしあつて、扇子を懐中より出して
太夫どの、この扇子、覺えがござるかな。
ト代々衣、取つて見て
代々　ムウ「夜もすがら同じ思ひを小夜千鳥、啼き明かす
とは君や知らじな。」
破魔　なんと覺えがあらうがな。
代々　そんなら、あなたは、この程よりの
破魔　如何にも。この程より全盛たる代々衣太夫、おてま
へには御存じあるまいが、毘沙門島の夕まぐれ、フト見
初めたがこの身の煩惱、思ひの發端、惑ひの一つ。心は
通ふ陸奥の、千束につもる錦木も、仇にや朽ちてその甲
斐も、手爾葉揃はぬその一首。心の丈を云ひ送る、此方
の君へ名の千鳥、扇の主は身共でござる。
ト合ひ方、ヂッと掠める。
代々　數ならぬ身をさほどまで、思うて下んすお心ざし、
憎からねどもわたしが心、裏を返したお返事は。
ト扇を裏向けて、破魔之助へ出す。破魔之助、其まゝ
見て
破魔　其方の返歌は「夜もすがら啼きつくすとて小夜千鳥、
瀬は變らじな浪は越ゆとも。」
代々　必らず恨みとばし、思うて下さんすなえ。
ト右の扇を破魔之助の前へ抛る。破魔之助ヂッと代々
衣を見る。代々衣、煙草盆抑へる。合ひ方になり
破魔　太夫どの、イヤサ代々衣太夫、色を商ふ傾城の身で、
情を知らぬは木石同然。玉の盃底なしと、吉田の法師
が筆ずさみ、ましてや御身は流れの身。憂き節繁き川竹
の、江口の君が流れを汲み、間夫もあらう、深間もあら
うが、せめては一夜假の宿、心とむなと教へに任せ、一
つ衾に語り明かさば、身共が存念眞實に、思ひ詰つて今
宵の仕儀。わざわざ參りし身が心底。色よい返事を致し
てたもれ。サヽ、どうか／＼。
ト此うち代々衣、身を背けて莨のみ居て、この時振向
いて
代々　千鳥さま、それ程までに戀ひ慕うて下さんすのは嬉
しいが、廓の慣ひは張りと意氣地。お侍ひ様では忠義と
やら。アレあの菊桶に咲き分けの、色は替れど菊は菊、
花の操は破られぬわいなア。

破魔　ムウ。
ト こなし。破魔之助見て
ト こなしあつて、煙管を花手桶へ手裏劍に打つ。仕掛けにてパッタリ落ちろ。本水流れろ。破魔之助こなしあつて
破魔　身が所存は、まツこの通り。
代々　流れた水は元へ返らず。
破魔　覆水盆に返らぬ譬へ。武士が一旦發せし詞、色よい返事聞くまでは、いつかなこの場は
ト 此うち代々衣、こなしあつて、立たうとするを、よろしく止め
立たしはせぬぞ。
ト きつと云ふ。代々衣こなしあつて簪を拔き。
代々　髮の飾りの簪は、云はずと知れた傾城の表道具。
破魔　身共に取つては二腰同然。
代々　サア、振りかけたお客には、命に替へてどこまでも振り通すのが廓の慣ひ。わたしが心底、心の誓ひは。
ト 簪を二つに折つて
これ見て下さんせ。
破魔　すりや、どうあつても。

代々　サア、それで御得心が行きませうかな。
ト 破魔之助が前へ抛る。
破魔　ムウ。
ト ぢつとこなしあつて
天晴れ代々衣、傾城の金打、慥かに見屆けた。
代々　御合點が參りましたかえ。
破魔　如何にも。
代々　サア、御得心なら又外の。
破魔　イヤ、その貞心を見る上は、また改めて拙者が頼み。
代々　ナニ、改めてお頼みとはえ。
破魔　オヽ、もらひたい。
代々　ナニ、もらひたいとは。
破魔　緣が切つてもらひたい。
代々　なんと。
破魔　サア、若殿左門之介さまと、緣が切つてもらひたい
代々　エヽエ、、、。
ト 悧りする。合ひ方きつばり
破魔　オ、サ、その驚ろきは尤もながら、最前よりの戲れは、お身が心底引き見ん爲。何をか包まん身共ことは。
ト あたりへこなしあつて

足利の昵近たる。萬里破魔之助と云ふ者。

代々　そんなら、あなたが……ハテナア。

　トこなし。

破魔　若殿のお情は蒙むるとても、詳しい譯は存ずまじ。あの若殿は忝なくも、足利十代の武將たる、右大臣義直公の御公達。御下腹ゆゑ大内の仕へを避け、日本六十餘州の諸大名、お心任せのお客分。武將の位は御舍弟たる、瀟壽君と定まり給ひ、さるに仍て當國に、暫らく御滯留遊ばさるゝうちは、國久どのゝお庇ひ。然るところ先つ頃、御舍弟君には果敢なく御早世。足利の御家督を、御相續ある左門之介さま、早速御歸國あるべきところ、一旦大内へも願ひを立て、御遊國のお身の上。輕々しう御家督も叶ひ難きゆゑにより、關白殿下の御計らひにて、梅津宰相道房卿の御息女たる、玉琴姫さま、これを以て鎌倉の御養子、その婿君として左門之介さま、又改めて舉がねとし、足利家の御家督相續、十一代の武將と仰ぎ奉るべき旨、殿下の御下知。取りも直さず勅命同然。違背ならざる御婚禮、即ち領主、國久どの、さまざまお勸め申せども、御承引なく、日に〳〵募る御放埒國久どのは云ふに及ばず、斯く云ふ破魔之助まで、千辛萬苦。もし御歸國のなき時は、左門之介さまの御身の上、二つには又足利のお家の浮沈、四海の騷ぎ。茲の道理を聞分けて、何卒其方が若殿に、思ひ切らるゝやうに計らひ。其方が心一つで、君の御爲、國家のお爲、三方四方の治まる事。頼みと云ふは茲の事。代々衣太夫、聞分けて承知の返答、いたしてくりやれ。仔細と云ふは斯くの通り。是非とも承知の返答聞かうか。

　ト此うち代々衣、俯向き居る。

いよ〳〵承引いたしてくれうか。

　ト矢張り物も云はず、チッとして居る。

金打までして若殿に、操を立てる傾城代々衣、若殿のお身の大事、餘所事にせう筈もあるまい。よもや違背はあるまいな。

　ト摺り寄つて

サ、なんとぢや。

　トきつと云ふ。これにて代々衣、やう〳〵顏を上げて

代々　最前からいろ〳〵と、事を分けたるあなたのお頼みよう聞分けて居るものゝ、そも一見のその夜から、由緒ある重いお方とは、思うて居たれど誰れあらう、足利どのの御公達とは露知らず、初めて聞いて今の悔り。素性

賤しき流れの身で、お肌穢すは勿體ない。そも突出しの始めから、夜毎に替るお客の數、濱の眞砂路盡せねども、ついに一度も下紐を、解いて添寐は殿樣より、ほんに一人もござんせぬ。さういふお方と夢知らず、この世は愚か二世三世、わたしがほんの殿御ぢやと、今の今まで思ふもの、なんと此まゝ退かれませうぞ。殿樣のお爲お國の爲、さう云ふ事ならハイ合點、あなたのお頼み退きませうと、つい一口に云はれぬは、女子心の狹い氣で、思ひ込んだる一筋を、あなたの忠義に引比べ、推量なされて下さんせ。張りも意氣地も取措いて、惚れると云ふ字の眞實が、なんと今更どうならう。わたしやどうせう、どうせうぞいなア。

トこなしあつて泣く。破魔之助も、いろ〳〵こなしあつて

破魔　アヽ、誠や名を知つて行ふ者は誤まつ。心を知つて行ふ者は全しとは、今思ひ當つたり。むくつけなる破魔之助、遊里へ參りしは今日が始めて。昔より聞く名將勇士も、只これが爲に身を亡ぼし、家を失ふ傾國は、色情にのみ迷ふぞと、思ひ込みしはこれまでの不覺。今日只今この通り、發明したる角なる玉子。とは知らずして無體の頼み、情を知らざる武骨者と、さぞ蔑すみも面目ない。必らず蔑すんで下さるなや。

トこなし。代々衣もこなしあつて

代々　そんなら、よう聞分けて殿樣の事は。
破魔　オヽサヽ、ふつ〳〵と申し出すまい。
代々　エヽ、アノ、ほんまに。
破魔　なんの僞はりを申さうぞ。
代々　エヽ、嬉しうござんす……とは云ふものゝ、いま仰しやつたお國の大事。殿樣のお身の納まり。
破魔　その云ひ譯には腹一つサ。
代々　エヽ。
破魔　代々衣、さらば。

トついと行かうとするを、代々衣よろしく留めて

代々　アヽ、マア〳〵待つて下さんせ。
破魔　事ならざれば猶豫叶はぬ。面倒な。妄放せ。

ト振り切り、行かうとするを又、留めて

代々　コレ申し。

ト破魔之助が顏をキッと見て

退きませうわいなア。

トこなし。これにて破魔之助もこなし。

破魔　ヤア。
代々　サア、殿樣の事フッツリと、思ひ切りましたわいなア。
ト泣く。
破魔　なんと。
ト破魔之助も吐息つき、こなし、ヂッと下に居て
すりや、いよ〳〵得心して。
代々　サア、例へこの身はズタ〳〵に切り刻まれ、一分試しになるとても、殿樣ゆゑならいとはねども、命に替へて殿樣を、御大切に思はしやんす、あなたの忠義をなんとマア、無下に此まゝ去なされませう。又二つにはわたしゆゑ、大事の〳〵殿樣の、お身の爲にもならぬとの事。義理に操を思ひ替へ、飽きも飽かれもせぬ仲を、浮世の義理につながれて、別るゝわたしが心の切なさ。推量して見て下さんせいなア。
ト大泣きに泣く。破魔之助、感心のこなしあつて
破魔　ホ、ウ、天晴れ代々衣、流石名を得し程あつて、其方が申せし今の一言。足利の御代治むべき、實にや國家の大良藥、忝ないとも喜ばしいとも、禮は詞に盡されぬ。さはさりながら、其方が承知なすとも、若殿にはおことが貞節、眞實にほだし打たれし左門之介さま、よも思し召し切られまい。さある時には斯くまでに、盡せし心も水の泡。それにつけても頼みの一つ。幸ひ白山團之丞、兼ねて心をかけしと聞く。例へ操は破らずとも、彼れの隨ふ體にもてなし、若殿の御覽に入れなば、その時しては何程に、お迷ひあるとも忽ちに、御執心も薄らく道理。嫌であらうが得心して。
代々　エ、、そんならアノ團之丞づらめに。
破魔　サア、この計略は、そもじの手管。
代々　如何にお爲と云ひながら、どうマアこれが、ならうぞいなア。
破魔　承引なくば、腹いたさうか。
ト腹切らうとするを留めて
代々　コレ、早まつて下さんすなえ。
破魔　死を止むるは得心か。
代々　それぢやと云うて、これがマア。
破魔　不承知ならば、この所で。
ト又死なうとするを
代々　ア、申し。
破魔　然らば承知か。

代々　サアそれは。
破魔　但しは突込まうか。
代々　サア。
破魔　サア。
兩人　サア／＼／＼。
破魔　有無の返事がこの身の生死。代々衣、返事は
ト引廻して
ナ、、なんと。
トこなし。代々衣いろ／＼こなしあつて
代々　是非に及ばぬ。何もかも、得心でござんすわいなア
ト泣く。
破魔　エ、、忝ない。今ぞ身共が存念通り。
代々　とは云ふものゝ殿樣の
破魔　一旦お怒り崇むるとも、この儀首尾よく調ひなば、
その時こそは改めて、身請け致して殿の御愛妾。
代々　エ、、そんなら賤しいわたしでも。
破魔　操が直ぐにその身の系圖。
代々　必らずともに、そのお詞に。
破魔　相違があらうか。刀に掛けて。
代々　エ、、嬉しうござんす。

ト手を合すを、その手を取つて
破魔　ア、、砂の中の
ト拜む手を引分けて、ヂッと顔を見て
黄金ぢやよなア。
ト唄になり、破魔之助、こなしあつて中二階へ入る。
後に代々衣、殘り居て、ヂッと思ひ入れあつて
代々　市彌おぢや。
ト手を叩く。と奥より
禿　アイ／＼。
ト返事しながら出て、側へ行く。
太夫さん、なんでござんすえ。
代々　その料紙、持つておぢや。
禿　アイ／＼。
ト料紙を持つて來て、よき處へ置く。代々衣見て
代々　もう用はない程に、其方はちやつと奥へ行きや。
禿　アイ／＼、合點でござんす。
ト奥へ入る。道成寺の唄になる。
〽戀の手習ひつい見習ひて、誰れに見しよとて紅鐵漿つ
きよぞ、みんな主への心中立て、おゝ嬉し／＼、末は斯
うぢやにな、さうなるまでは、とんと云はずに濟まそぞ

えと、誓紙さへ僞はりか、噓か誠か、どうもならぬ程逢ひに來た。

ト右の唄のうち、いろ／＼こなしあつて、墨を摺り、卷紙を出して狀を書く事あつて、右唄の切れになり、思ひ入れあつて

代々　苦界する身も素人も、變らぬものは心の操。眞實心からいとしいと、思ひ思うた大事の殿御。如何にお僞と云ひながら、みす／＼梅園さまとやらの、お姫樣に寐取らるゝと云ふは……チエヽ。

ト思はず立つて奥を見て、こなしあると、　また唄になる。

〽ふつつり悋氣せまいぞと、嗜なんで見ても情なや、女子には何がなる。

ト此うちいろ／＼こなしあつて、また氣を替へ、文を書く。

〽殿御々々の氣が知れぬ／＼、惡性な／＼氣が知れぬ、恨み恨みて喞ち泣き、露を含みし櫻花、さはらば落ちん風情なり。

ト右唄のうち、奥より女形、大勢

皆々　サア／＼、お出でなされませいなア。

ト園之丞先に敵役皆々、勘九郎、仲居大勢、定八も附き添ひ、酒肴を持ち出て來りて

すが　處替れば品替るとやら。爰でお一つお上がり

皆々　なされませいなア。

ト此うち園之丞、フト上手の代々、衣を見て

園之　コリヤ。

ト額にて押へ、ソツと側へ行き、後より狀を見ようとする。この時、代々衣、フト顏見合せて

代々　ヤア、お前は園さん。

ト右の狀を隱して、こなし。園之丞もこなしあつて

園之　太夫、お樂しみぢやなア。

ト下に居る。これにて靜かに踊り三味線になる。

代々　何がいなア。

ト思ひ入れ。園之丞もこなしあつて

園之　戀なればこそ白山園之丞、この廓の石の數、讀み盡す程通へども、左門之介さまに操を立て、この園之丞を振り通す、情知らずの傾城代々衣。廓の意氣地を立て通す、其方の張りが強ければ、此方にも又武士の意地。若殿に仕負けては、この園之丞が面皮が立たぬ。否でも應でも抱いて寐ると、サア、斯う申しては詞の綾。暫らく

は靡けよ風の青柳、氣強いばかりが意氣地とやら、張りとやらでもありそむないもの。なんとさうでありさうなものぢやぞよ。

ト　こなしあつて煙草のむ。

代々　エヽモウ、又しても〳〵、名立てがましう殿様々々と、其やうに云うて下さんすなア。

團之　でも、嘘でなし。

代々　アレ、まだいなア。昨日は筑紫、今日は陸奥、定めないのが流れの浮き節。

すが　太夫主の云はんす通り、色の湊のこの新潟、戀の重荷を積み込んで

いそ　日毎夜毎の入り船出船、數も限らぬその中に

さの　好いた好かぬは緣次第。間夫ぢやと見せて客もあり

とく　お客と見せて色もあり、千差萬別その中で

すが　解らぬ所が

皆々　花ぢやわいなア。

團之　ハテ、才發をよう云ひ廻し居つたよな。それにつけても代々衣太夫、心憎きは只今の濡れ文。人目忍んで認めしは、何處の何奴か宛名が聞きたい。あやかる爲に、團之丞、ちよつと拜見はなるまいかの。

代々　エヽ、惡てんがうな。よしにさしやんせいなア。

團之　イヤ、さうでない。隱さるゝ程猶見たい。ソレ。

ト　目で知らす。

勘九　イヤモシ太夫主、團さまのお望みぢや程に、今のお文を、ちよつとわたしに

代々　イエ〳〵、なんぼう團さまでも、どなたでも、こればつかりは、堪忍して下さんせいなア。

勘九　所をわたしが、ちやりに紛らし、宙で取つてくれう

ト　代々衣が懷中へ手を入れ、狀を無理に引出すを

代々　ア、コレ。

ト　取らうとするを、片手にて留め、手早く狀を抛り

勘九　ソレ、御覧じませ。

ト　よき處へ狀を抛るを、五太夫取つて見て

五太　イヤ、誠に弘法の曼陀羅よりは、有り難いこの濡れ文。

團之　五太夫、聲高に讀み上げい。

代々　エヽ、つツとモウ。

ト　取りに行かうとするを、よろしく留めて

勘九　ハテマア、ヂッとしてござりませい。

ト　引据ゑるうち、五太夫、狀を開き

五太　なんぢや……思ふ人否と女子の罪深しとは、誰れ人の口ずさみにや、さなきだに姫御前の身は、疑ひ深き者なるに、ましてや憂き川竹の身にしあれば、只一夜さの仇し契りに、捨てられ參らせん事、なんぼうか悲しさに、わざとつれなくもてなしより。

銀平　イヤ、お待ちなされい。拙者にもちと讀まして下されい。

ト狀を取つて

なんぢやつれなくもてなしより、この程彌彦山明神さまへ、神詣での道すがら。

トこの時闌之丞、氣に當るこなしあつて

闌之　ア、コリヤ〳〵、銀平々々、只今の處を、今一度返して讀み上げい。

銀平　ハツ……「この程彌彦山明神さまへ、神詣での道すがら、御しんもじの數々は、身に沁み〴〵と忘られず、寐ても覺めても御許樣の事のみ思ひ暮らし、焦れ明かしより。

ト闌之丞、思ひ入れあつて、代々衣を見る。

角藏　ドレ〳〵、その後は拙者がお替り申さう……エヽ、なんぢや「御方樣に御文差上げ候ふ事、これまでのお人へ知れ申し候ふては、この身の浮名はさら〳〵いとひ申さず候へども、御大切な御許樣事、如何なる憂き目やあらんかと、只それのみが悲しさに、心を痛めより。

傳助　エヽ、愚闇々々と埒が明かぬ事だ。身共におこさつしやれ。

ト引取る。

エヽ「心を痛めより、それゆゑ密かに玉章を以て、心の丈を云ひ送り候ふまゝ、いづれ近きよすがの忍び寐に、年月の憂き事を、語り明かさんものと心に樂しみ、十六夜の月待つ程に、待ちこがれ人目忍びて書き終りより、古歌に、嬉しさを昔は袖につゝみけり、今宵は身にもあまりぬるかな。」

闌之　して〳〵名宛は、どうだ〳〵。

傳助　イカサマ、名宛は……「越路に名高き山さま參る、代々衣より。」

闌之　ナニ、越路に名高き山とは何者。

勘九　さればでござりますな。名高き山と申しては、先づ富士山かい。

五太　エヽ、何を馬鹿な。越路に富士がござらうか。控へさつしやれ。

傳助　イカサマ、然らば妙香山でもござらうか。
角藏　妙香山とは、どうやら尼のやうに聞えるて。イヤイヤ、左やうでもござるまい。
銀平　イヤ〳〵、拙者が一つ智惠を振ひ出します。先づ北國にて名山と申すは、マア第一が白山でござるての。
傳助　イヤ、誠に越中の白山でござらうわサ。
五勘　ナニ白山。
ト皆々顏見合して
角銀　白山。
ト團之丞を見て、こなしあつて
五太　オヽ、さうだ〳〵。矢ツ張りこの宛名は、白山。若殿、あなた樣でござります。
團之　エヽ、ざわ〳〵と何を馬鹿者。
五太　でも、白山の團之丞さま。
銀平　あなたに相違は
皆々　ござりませぬ。
團之　イヤ、さうでない。これまで手を替へ品を替へ、さまざまと口說いても、承引いたさぬ代々衣太夫。
五太　サア、そこが卽ちこの文に、思ふ人否と女子の罪深しと。ナウ太夫。

ト代々衣、ヂツと俯向く。女形皆々見て
すが　そんなら太夫樣は、アノ團さまに
ト顏見合せ、こなしあつて
皆々　我折れ。
ト思ひ入れ。代々衣は團之丞を見て、ホツと溜息を吐く。常の合ひ方になり、この時、中二階の正面の障子明けると、內に破魔之助、煙草盆を扣へ、煙管を持ちながら窺うて居る。團之丞こなしあつて、代々衣が側へ行き、ヂツと下に居て
團之　太夫、ハヽア、誤まつた〳〵。さほどに深い心とは知らず、情の道を辨まへぬ、胴慾者と恨んだは、この團之丞が一生の誤まり。かばかりに心を盡し、身共を庇うてくれる心ざし。コリヤ。
ト手を取るを
代々　エヽ、モウ。
ト振り放さうとする。破魔之助と顏見合し、ヂツとなる。
團之　過分なとも又、嬉しいとも、エヽ、忝ない〳〵。その心底を聞く上は、今日中に身請けする。
代々　エヽ。

ト氣味合ひある。

團之　オヽサ、さつぱりと根曳きして、この團之丞が閨の花。さすれば例へ何者が・何と申さうやうはない。手ざしのならぬ庭木の眺め。

代々　イヽエ、それでは。

ト顏見合す。破魔之助、煙管にて腹切る眞似するゆゑ

サア、わたしが苦界も遁がれて

ト思ひ入れある。

團之　如何にも。思ふ身共と、其方と添ひ寐は。

代々　エヽ、わたしや、ツッとモウ。

ト中二階へこなし。

團之　日頃の本望、嬉しいか。

代々　あなた次第で……とサア、云はるゝ程

團之　膝を並べて

ト寄り添ふを

代々　エヽモウ。

ト始終破魔之助、代々衣、顏見合せ、心意氣あつて

團之　可愛い奴の。

ト抱きつく、破魔之助これを見てこなしあり、障子を閉す。

勘九　サア〳〵、こりや大事ぢや〳〵。側あたりは一向益體。併し、今日中に身請けするとは、めでたい〳〵。そんならいよ〳〵あなた樣が。

團之　オヽサ、追ッつけ金子持參するであらう。

勘九　ヤア、そんならほんまに。エヽ、有り難い〳〵、福德の三年目、かゝるめでたい折からなれば、祝うて一つ打ちませうかい。

五太　オヽ、それがよい〳〵。然らば一つ打たうか。

皆々　ヤア、ヨイ〳〵〳〵。

ト皆々手を打つと、奥より左門之介、出て來て

左門　オヽ、代々衣、これに居つたか。

トこれにて團之丞、左門之介を見て、ツイと顏を背ける。左門之介、心得ぬこなしにて

予がこれへ參るや否、物をも云はず……ウム。

ト奥へ行かうとするを

勘九　ア、申し〳〵、左門之介さま、暫らく〳〵。

左門　用ばしあるか。

勘九　ハイ、ずんとござります。即ち用と申すは外ぢやござりません。太夫が體、あの代々衣は、親方市兵衛が抱へました、奉公人でござりますぞえ。

左門　存じて居るわい。
勘九　知つてござるなら、なぜ自由になされますぞ。
左門　予が揚げ詰めゆゑ自由に致すが、何とした。
勘九　イヤマア、揚げ代の御算用から、なされて下さりませ。サア、揚げ代を戴きませうかい。
左門　なんと。
勘九　凡そ三百兩餘りの滯り、どうぞ只今その金子、お貰ひ申したうござりまする。ちやつと御算用なされて下さりませ。
トつけ〳〵と云ふ。左門之介、ムッとして側にある杯を取つて
左門　つげ〳〵。
トこの時、奥より打裂き野袴にて、矢柄、ツカ〳〵と出て
矢柄　アイヤ、憚りながら、そのお杯は。
トとめる。左門之介、矢柄を見て
左門　そちや國久が家來、高宮矢柄、何ゆゑ留めるぞ。
矢柄　ハッ、逆上の癪症の御病症、御身の障りと存じますれば。
左門　苦しうない。つげ〳〵。
ト仲居皆々、顏見合せ、こなし。
エヽ、つげと云ふに。
トきつと云ふ。これにてお磯、酒をつぐ。
園之　高宮矢柄、何ゆゑあつて、この所へは。
矢柄　遊所は勿論、人の入込む所へ、日毎に參る隱し目附け、家中の邪正糺さん爲、主人國久公の仰せに依つて、諸所方々を見廻る役目。園之丞さまには影ながら、度々お見請け申しましての。
園之　ハテナア。
トこなし。この時、橋がゝりより茂作、歩きに金財布を擔げさせ、出て來り、ズッと内へ入る。
茂作　ハイ〳〵、イヤ、お許しなされて下さりませ。これに若殿樣がお出でござりますかな。
銀平　オヽサ、若殿はこれにお入りなさるが、わりや何者だ。
茂作　ハイ〳〵、イヤ私しめは、當浦の名主、茂作と申す者でござりますが、この中、若殿樣から仰せつけなされました課役の金子、やう〳〵只今調ひましたゆゑ、わざわざ持參いたしましてござりまする。
トこの時、奥より

喜文 イヤ、その金は、喜文太が受取らうわい。

ト奥より出る。

勘九 へ、ン、そんならこのお金が、彼のお約束の

ト云ふを

團之 ア、コリヤ〳〵、詞多きは品少なし。控へて居らうぞ。

トこなし。

勘九 へイ〳〵。

ト後へ寄る。矢柄、こなしあつて

矢柄 イヤ若殿、お金役を兼帶する高宮矢柄。拙者が存ぜぬ課役の金子、團之丞さまには、何になされまするな。

團之 イヤ、身共は存ぜぬ。この團之丞、課役を申し付けた覺えはないぞ。

喜文 イヤサ、それでは。

勘九 代々衣太夫が身の代金。

ト云ふを

團之 まだ〳〵。そりや何を申すぞ。よく物を思うて見よ。收納の外に過分の課役申しつければ、領主の手前、國久公の聞え。方々、忽ち身共がナ

ト矢柄へこなしあつて

ぢやに依つて、左やうな儀、辨まへもない、團之丞ではおりないぞ。ハテ、馬鹿々々しい。

茂作 それでも若殿樣の御意とあつて、それは〳〵嚴しい云ひつけ。

團之 エ、聞えた。さてはコリヤ左門之介さまの思し召しと相見える、さうか〳〵。オヽ、さうでありさうなものだ。ナウ喜文太。

喜文 エヽ、成る程〳〵。如何にも御推量の通り、若殿と若殿との間違ひでござりませう。此方の若殿團之丞さまの御存じない事。全體うぬらが惡い。斯樣な處へ持つて參るとは、不調法な奴等だわい。

ト叱りつける。

茂作 なんの事ぢや。とんと譯が解らぬ。

トこなし。此うち左門之介、始終聞いて居て、この時ツイと立つて右の金子に手をかける。團之丞、恟りして喜文太に目配せする。喜文太、よろしく留めて

喜文 ア、イヤ〳〵、若殿樣、この金子、如何遊ばしまするな。

左門 揚げ代にくれるのサ。

喜文 エ、滅相な。それではちつと。

左門　ト團之丞と顔見合し、こなし。
團之丞、この課役は、予が下知なりと申したな。

團之　サアそれは。

左門　但しは其方が申しつけたか。

團之　イヤ、全く以て。

左門　予が入用の金子。ヤイ、名主とやら、この金子は、足利左門之介が借り請けた。追つて倍々にして返濟いたしくれう。

茂作　エヽ、アノ、倍々にしてお返し下さりますとな。エヽ、有り難うござります。
ト喜ぶ。左門之介、勘九郎を見て

左門　それへ參つて、金子受取れ。

勘九　ヘイ〳〵。
ト行かうとするを、喜文太、ちり〳〵舞ひして

喜文　ア、、これはしたり、その金子取つては惡い〳〵。エヽ、うぬも目先の見えぬ名主めら。とつとと早く持つて歸ればよいに。いろ〳〵の人が湧いて來て、それこそ益體。亂騷ぎぢや。早く持つて歸れ〳〵。
ト勘九郎も、ウロ〳〵して居る。喜文太、トヾ金を取らうとするを

左門　うぬ、下郎の分で慮外者めが。
ト扇にて頭を喰はす。これにて喜文太、恟りして、ちやつと引込む。左門之介、また勘九郎に向ひ

左門　早く受取れ。

勘九　ヘイ。
ト團之丞が顔を見る。團之丞、外らさぬ顔して居る。

左門　何ゆゑ受取らぬ。
ト勘九郎、術なきこなしにて頭を搔く。

勘九　ヘイ。
ト喜文太の顔を見る。喜文太、惡いと云ふこなし。

左門　ハヽヽ、さては課役の金子ゆゑ、後日の咎めを思ひ計り、それゆゑの遲滯なるか。その儀は國久へ予が申しつけ、われ達に難儀は掛けぬ。苦しうない。受取れ受取れ。
ト此うち敵役、思ひ入れ。

勘九　ヘイ〳〵、左やうならば。
ト金を檢め、三百兩取つて
三百兩、お戴き申しまする。剩り二百兩は、あなた樣へ。
ト差出すを

左門　それでよいか。
勘九　ヘイ／＼、よろしうござります。慥かに受取りまし
　てござります。
左門　オヽ。して、この金子は、剩りだの。
勘九　ヘイ／＼。左やうでござりまする。
左門　オヽ。
　ト貳百兩取上げて
左門　この一包みは、われにくれるワ。
　ト百兩包みを勘九郎が前へ抛つて遣る。
勘九　エヽ、アノ、此お金を私しめに。
　ト恟りする。
左門　オヽ、サ、取つて置け／＼。
勘九　エヽ、有り難うござりまする。
　ト此うち左門之助また殘り、百兩の封を切つて
左門　ソレ、仲居ども、われ達にもくれるぞ。
　ト摑んで無性に撒き散らす、敵役皆々恟りすることなし
左門　コリヤ、矢柄とやら。其方は國久が金役とな。
矢柄　ハツ。
左門　あの者に只今の金子、倍々にして返して遣れサ。
矢柄　委細畏まつてござりまする。

茂作　ヤレ／＼、取上げらるゝと思ひの外、金が倍になつ
　て戻つて來るとは、これで七浦も浮み上がると云ふもの。
　去んでちやつと皆に、喜ばさうぢやあるまいか。
七兵　それがよろしうござりますわい。
茂作　そんならお殿樣、何れも樣、もうお暇申しまする。
　サア七兵衛、ござれ／＼。
　ト唄になり、茂作、七兵衛を連れ、橋がゝりへ入る。
　後にて喜文太、横手を打つて
喜文　イヤ、流石は足利家の若殿樣程あつて、格別違うた
　ものぢやなア。
　ト左門之介、こなしあつて
左門　これで予が心もさつぱり。改め奥にて一獻酌まん。
勘九　それがよろしうござります。サア／＼、えらい
　目になつて來た。踊子舞子を摑み込み、天井なしの大騒
　ぎ。ソレ仲居衆、御案内申さぬか。どうしたものぢや。
　ト獨りイソ／＼するを
喜文　ヤイ／＼／＼勘九郎め、うぬ、それでは兼ねての約
　束か。
勘九　イヤモウ、斯うなつては、約束變替へ常の慣ひ。百
　兩のお花には替へられませぬわい。

喜文　エヽ、忌々しい。
　トこなしある。敵役皆々悄げて居る。
左門　ナニ矢柄、其方も奥へ參れ。
矢柄　ハツ。
勘九　ソレ、勢ひ口ぢや。仲居衆、わつさりと騷いでもら
　はう。
皆々　アイ〱。そんなら殿樣。
左門　オヽ、唄へ〱。
皆々　サア、ござんせないア。
　ト江戸騷ぎになり、左門之介先に、矢柄、勘九郎、仲居皆々附き添ひ、奥へ入る。後に敵役、皆々殘りて
傳助　喜文太、こりやマア自體なんの事だ。
喜文　イヤ、なんの事はござらぬ。犬骨折つて鷹の餌食。餘りの事で物も云はれぬて。
銀平　それにつけても、憎くい奴は勘九郎め。たつた今まで此方の味方で居りながら、手の裏返す今の有樣。
角藏　イヤハヤ、とんと、からくり的を見るやうな奴だわい。
喜文　イヤ又、裏返つたも尤もかい。ほつかりひよんと百兩包み、あれを見たれば下郎でも、こりや裏返らにやなりませぬて。
五太　シタガ、折角心を盡し、やう〱手に入る課役の金子。目に見たばかりで餘所へ取られ、空しく金子間違うては
銀平　お望み通りの代々衣太夫。
傳助　身請けの金子才覺は
皆々　どうせうと思はつしやります。
團之　大事ない、苦しうない。
皆々　すりや、外に御思案が。
團之　さればサ、例へ足利家の親族たりとも、課役の科は四海の式目。つゞまる所は左門之介、彼れが越度、一つには、本家の重寶黄金の尊像、一寸八分の摩利支天、御厨子修覆の儀について、出入りの町人織殿屋新三郎に申しつけ、預け置かるゝ彼の一品。系圖に等しき尊像なれば、我れに一味の五十嵐軍八、此奴見所あるを幸ひ、密書を以て奪ひ取れよと、昨日わざ〱申しやつたが、今にも吉左右あるべき筈、返事のないは、ハテ心元ない。
喜文　イヤ、その儀はちつともお氣遣ひな、御無用々々々。先程奥にて承はれば、新三郎がひそ〱話し。お預かりの黄金佛、紛失の由申して居れば、疑ひもなく彼の軍

八、首尾よう致し今頃は、若殿の御在所を尋ねて、罷り居るでござりませう。

圖之　その儀なれば一つの安堵。それさへあれば大望の足代。

五太　して又、兼ねての思し召し立ちはな。

圖之　コリヤ、壁に耳。萬事は密々。

皆々　然らば若殿。

圖之　コリヤ……ソレ。

ト喜文太へ目配せする。

喜文　それ〳〵。そつこでせい。

ト踊り三味線になる。

皆々　ヤアトヤ。よい〳〵。

ト皆々踊りに紛らし、こなしあつて奥へ入ると、後合ひ方になり、喜樂齋、抱子を懐へ入れ、後より德兵衞、百兩包みを持ち出て

德兵　サア、證文も濟んだれば、この金改めて受取らつしやれ。

ト金を出す。

喜樂　ハイ〳〵、段々お世話でござりました。左様ならば

ト右の金を改め、財布へ入れ、首に掛けて

不束な嫁女が事、何分お前様が便り。萬事よろしうお頼み申しまする。

德兵　そりや案じさつしやるな。慈悲深いお家様の事なり、また金儲けさゝにやならん奉公人の事なり、麁相があつてよいものか。そんな事は氣遣はずと、隨分孫に氣を付けて、育て上げるが、それが肝心。

喜樂　ハイ〳〵、左様でござりまする。そんなら、もうお暇申しまする。

德兵　併しながら、年寄りの夜道なり、一人去なす事は危ないもの。どうぞマア、送つて進ぜたいが。

トこなし。

喜樂　イエ〳〵、滅相な〳〵。それには及びませぬ。結句一人の方がようござりますての。

德兵　イカサマ、それもさうかいの。昔が昔ぢやに依つてエイヤットウも利くこなた。氣遣ひな事もあるまい。わしも又、ちつと手の放されぬ用事あれば。

喜樂　忝なうござります。左様ならお家様へ、よろしう仰しやつて下さりませ。

ト云ひながら門口へ出る。德兵衞も傍まで行き、喜樂齋を見て

徳兵　随分ともに怪我せぬやうに。

喜樂　ハイ〳〵、おさらばでござります。

徳兵　ようござつた

ト門口を締める。合ひ方になり徳兵衛は奥へ入る。喜樂齋、ソロ〳〵花道へ行きかけ、よき所にて抱子の顔を見てこなしあり

喜樂　ア、可哀やなア。如何に貧苦に迫ればとて、先祖は名ある武士の末。嫁を苦界に沈めると云ひ、晩より祖父が皺だらけの、この懐で乳を探し、さぞや嫁を探すであらう。何にも知らずに泣き居らうかと、思や思ふ程それぱつかりが。

ト泣かうとして氣を替へ、フト空を見て

南無三、暮るゝに間もあるまい。暮れぬ先に一時も早うやつてくれやうか。

ト片手に尻からげ、氣を忙きながら向うへ早足に入る。合ひ方になり、奥より渚、新三郎、出て來りて、あたりへこなしあつて

渚　そんなら今のお詞に

新三　ハテ、違はぬと云ふ證據は

ト中二階を見て

新三　オヽ、幸ひの、あの二階へ。

渚　それでもどうやら。

ト恥かしきこなし。

新三　ハテ、初心らしい。この間にちよつと。

ト手を取り、無理に中二階へ入らうとして障子明けると、内に破魔之助、刀を持ち立つて居る。兩人、これを見て悧り。

渚　ヤア、あなたは兄上。

新三　破魔之助さま。

ト氣味惡きこなしにて後へ戻る。

破魔　不義の兩人、そこ動くな。

トきつと云ふ。

兩人　ハア。

ト兩人、下に居る。破魔之助、そろ〳〵平舞臺へ下りて來て、兩人の眞中へ立つ。新三郎こなしあつて

新三　斯く顯はれまする上からは、元より覺悟。サア、すつぱりと、お手にかけられませう。

ト手を合して覺悟のこなし。渚、新三郎を引退け

渚　イエ〳〵、新三郎さまには御存じない事。元の起りはわたしがみだら。お手にかゝるはこの渚。

ト手を合すを又引退け

新三　イヤ、お手討は、この新三郎を。

諸　イエ／＼わたしを。

新三　イヤ、私しめを。

諸　サアすつぱりと

兩人　遊ばしませ。

ト兩人、手を合して覺悟のこなし。

破魔　不義の成敗は武家の沙汰。町人の新三郎、手討に致さう掟はないわい。

兩人　エ、、なんと御意なされますな。

破魔　コリヤ、椎津家より預かり置きし、摩利支天の尊像は、紛失いたしたであらうぞがな。

新三　すりや、その事も御存じあつて。

破魔　如何にも。寶詮議仕出し、再び歸參の功を立てよ。

新三　して、諸さまのお身の上は。

破魔　武家の式目、此まゝ勘當。

兩人　エ、。

破魔　ソレ。

ト懷中より袱紗を出して兩人の前へ抛つて遣るを

新三　これは。

ト取上げ見る。

破魔　天下に名高き雪の下と名けし袱紗。即ち判金百枚の折紙。

諸　そんならこれを。

破魔　母者の御形見なれど、まさかの時は。

新三　何から何まで。

破魔　隨分、堅固で。

新三　あなたも御無事で。

ト破魔之助、顏にて行けと云ふ。兩人こなしあつて、門口へ出て

諸　兎は云ふものゝ。

ト寄らうとするを

破魔　未練な奴の。

ト門口ぴつしやり締める。新三郎、こなしあつて

新三　ござりませ。

ト思ひ切り手を取り、向うへ走り入る。破魔之助、門口明け後見送りて

破魔　もう參つたか。

ト向うへこなしあつて

ハテ、不便千萬。

ト こなし、この時、奧より仲居皆々、出て來りて

すが　これにお出でなされますか。最前より殿樣が、また怒らしやんしてそれは〳〵奧は騷動。

いそ　皆が寄つて支へましても、なか〳〵、お聞入れはござんせぬ程に、どうぞあなたがお出でなされて

さの　早う御機嫌の直りませうやうに

皆々　どうぞお頼み申しまするわいなア。

破魔　ナニ、すりや又、御持病が發りしとな。

皆々　ちやつとお出でなされませいなア。

破魔　來やれ。ソレ。

ト 踊り三味線になり、破魔之助、心遣ひのこなし、奧へ入る。仲居も付き添ひ、皆々奧へ入ると、チョンチョンにて　　返し

造り物、見附け長暖簾、切つて落す。奧深に小屋根の書割り。中庭の心にて庭木の梢ばかり見せ、上の方、中二階引込み、下より踊り場。梯子に高欄手摺セリ上げる。但し奈落より出入りになる。下手の板塀、返して唐紙になり、舞臺前より花道兩側、一面に小屋根付き高欄の手摺りをセリ出す。切り幕並に戸家は鏡戸になり、すべて揚屋茶屋二階の模樣、此見得よろしく、チャン〳〵と暮れ六ッの半鐘にて道具納まる。

ト 上手切り穴右二階上がり口より、禿二人、燭臺に火を灯して持ち上がり、よき所へ直し直ぐに又元の切り穴へ入ると、鼓弓入り五十三次の唄に成る。

〽筆の鞘、焚いて待つ夜の蚊遣より、香のすがりは簪の、算木も捨てゝ車座に、廻りはじめる双六の、投出の賽の目くばせる。

ト この唄のうち向うより、代々衣、着流し扱帶にて、上草履をはき、氣の添はぬこなしにて懷手の儘、花道よき所まで來る。唄の切れ後合ひ方。

代々　浮世の義理と云ふ二字は、誰が何時の世に書き初めて、身にも命にも替へぬ程、大事に思ふ殿樣を、例へ嘘にも假初めにも、退かねばならぬ仕儀となり、日頃短氣のあなたの氣性、云ひ合せの手管と知らず、ても憎い奴、道知らずと、ほんまに愛想が盡きたなら、わたしやどうせう、何とせう。エヽ、思へば思ひ廻す程、エヽ、氣の濟まぬ事ではある程になう。

ト投げ首してこなし。また唄になる。

〽壁にまじ〳〵大津繪の、振り出す遣り手先ばらひ、座敷踊りの中入りに、仲居が運ぶ重箱は、乳母が餅かと口口に。

トこの唄うち切り穴よりお德、銚子鍋を持ち、おさのは吸ひ物、膳に吸ひ物載せ、兩人上がつて來て、向うへ行きかけ、よき所にて代々衣に行き違ふ。其まゝ兩人物も云はずと行き過らうとするを

代々　ア、お德さん、おさのどん、殿樣は奧の圍ひに居やしやんすかや。

さの　ハイ、どこにお出でなされるやら

兩人　わたしらは知りませんわいなア。

トつんと云ふ。代々衣こなしあつて

代々　ほんにマア、愛想の無い物の云ひやう。其方衆は、どうしやつたのぢやぞいなア。

とく　ハイ、どう云ふ事やら、お前の心に問はしやんせいなア。

さの　あのやうな道知らずに、物を云ふも阿房らしいわいなア。

とく　それ〳〵、相手にならずと、ちやつと、奧へおぢやいの。

ト云ひ捨て、ツイと向うへ入る。代々衣、後を見て

代々　何をマアあのやうに、腹立てるのぢやぞいなう。てもマア、けうとい衆ではあるわいなア。

〽坂は照る〳〵鈴鹿の茶屋で、花を一と本忘れて來たが、後で咲くやら開くやら。

トこの唄のうち、お磯、高つきの菓子を盛り、おすが臺の物を持ち、同じく切り穴より上がつて來りて、よき所にて兩人、代々衣を眞中へ挾みて

いそ　代々衣さま。

トこなし。代々衣、兩人を見て

代々　オヽ、お磯どんおすがどん。

兩人　エヽ、お前はなア。

ト恨めしさうに顏を見る。

代々　其方衆は、何が氣の障つたやら。今も今とて二人の衆が。

すが　ハイ、二人ばかりぢやござんせん。わたしらまでもフッツリと、お前に愛想が

兩人　盡きたわいなア。

トきつと云ふ。代々衣聞いて

代々　ヤア、なんと云やるぞ。
すが　サア、深い馴染みの殿樣を袖にして、人にこそ依れあんまりな、あらう事かあるまい事か、同じ一座の園さまに、靡くと云ふは人でなし。
いそ　わたしらがやうな、一季半季の奉公でも、廓に育てば意氣張りは、心の中にござんすわいなア。
代々　フム。そんなら其方衆は、その事で。
すが　ハイ、飛ぶ鳥も落ちる程な、全盛の太夫樣とも云はるゝ身で、衿に付いて乘り替へるとは、ナウお磯どん。
いそ　ほんに廓の顏よごし。顏を見るのも腹が立つわいなア。
代々　成る程、さう思やるは尤もぢやが、これには深い……イヤサ、深い仲の殿さんでも、今日吹く風に靡くが當世ぢやわいなア。
　トこなし。
すが　エヽモウ、人は常にはよらぬ者。野末の小家の辻君にも、皆それ〴〵の義理はあるもの。それにも劣りしお前の心。必らずともにこの後は、物ばし云うて下さんすな。これ限りでござんすぞえ。
いそ　サア、其やうに云うたとて、恥を恥とも思はぬお人、あつたら口に風ひかさぬうち、ちやつと奥へおぢやいの。
すが　オヽ、さうしようわいなア。サア〳〵ござんせ。
　ト向うへ入る。代々衣、後見送つてこなしあつて。
代々　ほんにマア、常々わしが目を懸けて、懇ろにする衆にさへ、アレあのやうに思ふもの。さぞやさぞ〳〵殿樣は。
　ト思ひ入れ。ぎつくり。癪の發りしこなし、腹を押へる。
〽人目の關に門立つは、赤前垂れの夕照りや、おぢやれおぢやれの手を引いて、オツと泊りの床取りと、眠る禿の波まくら。
　ト後合を彈く。此うち代々衣、癪を押へながら、高欄の手摺を傳ひ、そろ〳〵本舞臺へ來て、釣り手桶の水を掬うて、一口吞み、癪を押へるこなし。よき所へ禿二人、碑、切り穴より上がつて來て
二人　申し、太夫樣。
碑　代々衣さま。
代々　オヽ、碑さまか。
碑　わしや口惜しう
三人　ござんすわいなア。

ト三人泣く。代々衣見て

代々　オヽ、これはしたり、この子達は、どうしやつた事ぞいなう。譯も云はずにマア、何を其やうに泣くのぢやぞいなう。

碑　申し姉様、代々衣さま、エヽ、お前はなア。

トこなし。合ひ方になり

どうした事で何時の間に、そんなさもしい氣にはなつて下さんしたぞいなア。今も今とて奥の座敷でひそ／＼話し、ありや義理知らず、人でなしと、お前の事を指さして、人のやうには云ひませぬぞえ。

禿一　眞實生みの母様より、可愛がつて下さんす、大事の大事の太夫さん。

禿二　人が譏るを聞く度に、腹が立つて／＼、わたしやいつそ

兩人　悲しうござんすわいなア。

ト此うち代々衣、いろ／＼思ひ入れある。

碑　どうぞ心を取り直し、殿様を大事にして、いつ／＼までも替らぬやう、逢ひ戻つて下さんせ。エヽ、コレ申し

三人　拜みますわいなア。

ト代々衣に取りつき泣く。代々衣こなしあつて、三人の顔を見て

代々　ほんにマア、年端もゆかぬ其方衆が、足らはぬわしでも眞實の、姉同然に思へばこそ、眞實見えて其やうにまで、よう云うてたもつた。嬉しいわいなう。忝ないわいなう。

ト思はずハッと泣き落す。フト心付いて氣を替へ、三人を突き放し

エヽ、わが身達とした事が、何にも知らいで悧巧だて。諸譯手管は廓の慣ひ。惚れて見せるもひぞるのも、移れば變る淵瀬の勤め。それで苦界と云ふではないか。身の納まりを思はねば、末の詰まらぬ黎の杖。廓で死ぬるが見目ではない。ハテ、譏る人には勝手次第、譏らして置いたがよいわいなう。

トこなしあつて云ふ。此うち後へお傳、出かけ聞いて居る。

碑　そんなら矢ッ張り圓さまに。

代々　オイナウ。

ト氣味合ひあつて

抱かれて寝る心ぢやわいなう。

三人　エヽヽ。

　　トこなし。この時、お傳前へ出て

でん　オヽ、天晴れ貞女、傾城の鏡と云ふは代々衣太夫。

代々　ヤア、お前はお傳さま。

でん　オヽ、出かしやつた〳〵。それでこそ天晴れ貞操。思ひ切るのも靡くのも、つゞまる所は殿樣のお爲。

代々　エヽ。

　　ト思ひ入れ。お傳もこなしあつて

でん　なんとさうであらうがな。

　　ト代々衣、氣味合ひあつて又氣を替へ

代々　エヽ、ツッとモウ、お傳さまとした事が、お前までが同じやうに、さつぱりと退いたからは、お爲にならうがなるまいが、わたしやとんと頓着はござんせぬわいなア。

　　ト脇へ外らして云ふ。お傳こなしあつて、代々衣が側へ詰め寄つて

でん　代々衣、そりや其方聞えぬぞや。なぜわしに物を隱してたもるぞや。今更云ふでは無けれども、十二の暮れから手しほにかけ、しよぼ〳〵髮を取上げて、勤めに出やる宵までも、只の一夜も懷を、放して寐さした事はないぞや。夫婦が仲のほんそ子と、育て上げた其方ぢやもの、心の内を知らいでならうか。昔の常磐御前とやらは、現在夫の敵たる、平家の大將淸盛に、帶紐解いて寐た例し。それは我が子の可愛さゆゑ。眞實可愛い殿樣を思ひ切つたと云やるのは、よく〳〵心に深い譯、あるであらうと思ふにつけ、其方の心思ひ遣り、ひよつと短氣は出すまいか、もしや女子の狹い氣で、無分別でもあるまいかと、案じるわしが胸の内、落ちつくやうにとつくりと、譯を聞かしてたもいなう。

　　トいろ〳〵こなしあつて居る。此うち代々衣も、いろいろ心意氣あつて

代々　産みの親より同胞より、及ばぬ程のお世話になり、可愛がつて下さんしたお主なり、なんのお前に隱しませう。退いたと云ふよりその外は、譯も樣子もござんせぬわいなア。

でん　ムウ、そんなら眞實、アノ……ハテナア。

　　トあたりにある鏡臺の鏡、二面取つて來て、代々衣に突きつけ

代々衣、これを見や。この鏡は神の御姿、女子の魂ひ。殿達の刀脇差。姿を映すばかりでない、心の穢れを照さ

つしやる、天道様の丸鏡。サア、曇らぬ鏡もコレ、まツこのやうに。

ト片しの鏡にて鏡を打ち割る。仕掛けにて二つに割れる、

サア、この片々で姿が映るか。又片々で心が映るか。マア、とつくりと思案をして見や。

ト代々衣が側へ抛り

サア、わが身達も奥へおぢやし

碑　でも姉様の

ト代々衣へこなしあるを

でん　ハテマア、おぢやいの。

ト唄になり、お傳思ひ入れあつて、三人を連れ、上手へ入る。後合ひ方になり、代々衣、右の鏡を兩手に取り上げこなしあつて

代々　あれ程までにわたしが事、不便に思うて下さんす、お傳さまのお心ざし。明けて云はれぬその譯は、命に掛けて誰れあらう、破魔之助さまとも云はるゝお身が、傾城風情に頼ましやんした事もあり、我が身一つを兩方へ四鳥に掛けた今宵の切端。かゝる時にや人や死すらん。エヽ、是非もない身になつたわいなア。

トまた癪の差込むこなし。とテン〳〵と太鼓地になり、合ひ方にて左門之介、手燭を持ち、下手の唐紙を荒氣なう明けて、代々衣を尋ねる心にて出て來りて、代々衣を一目見て、ツカ〳〵と側へ行く。

左門　代々衣。

トこれにてフト代々衣、左門之介を見て

代々　ヤア、お前は殿さん。

ト云ふを直ぐに手燭を打ちつけ、拔打ちに切つてかゝるを、鏡臺にてよろしく留め

代々　尤もでござんす。如何にもお手にかゝつて死にませうが、たつた一言。

左門　なにを。

ト又切つてかゝる。鳴り物忙しくなる、兩人立廻つて、代々衣は花道へ行く。左門之介、追ひかけながら花道へ行く。バタ〳〵にて向うより破魔之助、ツカ〳〵と出て、代々衣を引廻して後に庇ひ、キツと左門之介を留めて

破魔　若殿、待つた。

左門　邪魔ひろぐな。

破魔　如何にも妨げ仕る。

左門　ヤ、、なんと。
破魔　エ、、こなた樣はなう。
ト左門之介をキッと見る。鳴り物靜める。
西施一度笑みて國を傾け、玄宗貴妃を愛して祿山背く。殿には正しく足利の武將、義尙公の御公達、御下賤腹ゆゑ大內の聞えを憚かり、位階昇進の御沙汰もなく、斯く諸國をば御遊歷。心の儘の御振舞ひ。當所へ御動座あつての後は、如何なる儀にや癇火に犯され、稍ともすれば短慮のお手討。御父君のお聞きに達せば、忽ち酬ふ御身の上。お情ないとも淺ましいとも。云はうやうなき御有樣。
ト右のせりふ云ひながら、代々衣を庇ひ、本舞臺へヂリ／＼と押し戾す。
御祖母靈光院さまには、片輪な子程猶不便と、下世話の譬へは高位とて、替る事なき恩愛に、燒野の雉子夜の鶴、蔭になり日向になり、庇はせ給ふ慈悲心を、思し召さぬか、左門之介さま。
ト此うち始終、破魔之助を引退け、代々衣を切らうとする。代々衣は手を合して覺悟のこなし。破魔之助は切らすまいとするこなし。立廻りよろしくあつて、代々衣を切らうとするを立廻つて、グッと引寄せ
一朝の怒りにその身を忘れ、君傾城に御佩刀を穢させ給ふのみならず、末代非道の惡名を、末世の記錄にとゞむるが、こなた樣には御本望か。チエ、、淺ましき御所存でござりますなア。
左門　ヤア、無益の諫言。爰放せ／＼。
代々　切つてお氣の濟む事なら、サア／＼、切つて下さりませ。
左門　オ、、望みの通り。
ト振り放して切らうとするを、又よろしく隔てゝ
破魔　イヤ、いつかな討たさぬ。
代々　サア／＼、切つて下さんせいなア。
ト手を合すを
左門　いつそ。
ト破魔之助へ切つてかゝるを、三人立廻つて破魔之助眞中、左門之介は上手にて、キッととまりて
破魔　エ、、こなたはなう。
ト三人よろしくキッと見得。チョン／＼にて、淺黃幕切つて落す。

返し

造り物、一面の淺黃幕。處々に松の大幹。稻村のあしらひ。この見得よろしく、在鄕唄にて道具納まる。

ト東西より百姓の仕出し出て來りて

四郎　誰れかと思うたら、權右どんぢやないかの。

權右　オヽ、四郎作か。早うしまうて戻らんしたの。

四郎　オイナウ、聞いて下んせ。この頃は自來也とやら云ふ大盜人が、海道筋は云ふに及ばず、何處彼處なしに徘徊して、何がハヤ物騷なと聞いたゆゑにの、早う去んで身の用心が肝心ゆゑ、それで早う戻りましたて。

權右　何を云はんすぞい。その自來也と云ふ盜人は、おいらがやうな小前な者には目もかけず、大金持ちでなけねば入らず、また貧乏人には錢金を施してくれる。慈悲深い和郎ぢやといの。

四郎　サア、それぢやに依つて用心に、門口明けて待つて居る積りぢや。

權右　これは好い思ひつきぢや。ハヽヽヽヽ。

皆々　そんなら又、明日に逢ひませう。

ト東西へ別れ入る。と後所知入りになり、下手より裏梅の紋付き箱提灯。一對、乘り物、これに喜文太、五太夫、傳助、銀平、角藏、その他、槍、挾み箱、合羽駕籠、持ち附き添ひ出て來る、上手より軍八、口明けの形にて出て來り、乘り物を見付けて

軍八　アイヤ暫らく。お乘り物は白山の若殿、團之丞さまとお見請け申しました。暫らくお止まり下さりませう。

喜文　ヤア〳〵、願ひならば館へ參れ。途中の願ひ罷りならんぞ。

軍八　アイヤ、左やう仰せらるゝは、喜文太どのではござりませぬか。

喜文　ナニ、身共を喜文太とは。

ト軍八を見て

イヤ、誠におてまへは、五十嵐軍八ではないか。

軍八　先づ何は差措き、委細の事は御拜顏の上。憚りながら、お取次ぎを。

ト乘り物の内にて

團之　イヤ、取次ぎに及ばぬ。乘り物立てい。

供廻　ハア、。

ト乘り物立てる。

團之　それへ行て對面の致さう。

ト合ひ方になり、喜文太、乘り物の戸を明ける。團之

丞、靜々と出て挾み箱にかゝり
珍らしや軍八、無事の對面、先づは滿足。して、賴み置きたる彼の一品は。
軍八　ハッ、お賴みに依つて椎津の重寶、摩利支天の尊像難なく奪ひ取り、即ちこれに。
ト懷中より守の厨子を取出して
イザ、御入手下さりませう。
ト差出す。團之丞、改め見て
團之　誠に、疑ひもなき黃金佛。ナニ喜文太、この一品は汝に預ける。手ぬかりなきやう、大切に守護仕れ。
ト差出す。
喜文　ハッ、畏まつてござります。
ト取つて懷中へ入れて
斯く拙者が守護仕る上は、石の櫃に納めし同然。ちつともお氣遣ひ遊ばしますな。
軍八　ハッ、恐れながら、この上は、兼ねてのお願ひ、これを功に。
團之　氣遣ひ致すな、本家へ推擧は團之丞が、刀にかけて
軍八　ハッ、有り難う存じ奉ります。
ト團之丞、敵役に目配せする。

儕角　軍八、お立ちやれ。
ト兩人、ツカ／＼とかゝるを振りほどき
軍八　こりや御兩所には、なんと召さるゝな。
兩人　殿の御上意。
ト十手を振り上げるを、居ながらよろしくキッと留めて
軍八　さては拙者に手練の程、覺束なく思し召されて。
四人　甲乙を試さん爲。
ト四人一時にかゝるを、よろしく立廻つて
軍八　滅多に油斷は
四人　なにを、
ト振りほどき、かゝるをポン／＼と投げて
軍八　仕りませぬ。
トきつと見得。此うち團之丞、手槍引取り、りう／＼としごき
團之　自身の試み。
ト突きかゝるを、手早く十手を取り、よろしく留めて
軍八　御鎗術とあるからは、恐れをも顧ず、御遠慮御無用。某とても。
トこれより双方立廻つて、穗先を卷き込み、ツカ／＼

と側へ行き、手先を留め
無敵流の卷き落し。心月とこれを名く。豫め斯樣なもの
でござります。
トきつと見得。團之丞
團之　ホヽオ、天晴れの鍛練。その手の內を見る上は
五太　いよ／＼本家へ推擧の軍八どの。
銀平　さある時には我れ／＼も
傳助　とも／＼以後は御入魂に
皆々　申し談ずるでござりませう。
軍八　これは／＼、痛み入つたる御挨拶。有りつき首尾よく調ひます上からは、何卒萬事お引立の儀、偏へによろしく願ひ上げます。
喜文　何は格別、先刻仰せられし、左門之介が落着は、如何計らひ遊ばしませうな。
團之　一旦、彼奴を取込んで、椎津家押領の根組みの元と思ひしかども、代々衣が一儀に付いて、生け置く時は後日の邪魔。廓歸りの道に待ち伏せ、有無を云はさず、たつた一討ち。コリヤ。
ト囁く。
喜文　委細畏まつてござります。

團之　行け／＼。
喜文　ハツ。
ト橋がゝりへ走り入る。
團之　ナニ軍八、萬事は明朝館に於て、とくと申し聞かすであらう。
軍八　然らば一先づ。この場は此まゝ。
ト此うち團之丞、乘り物に乘る。
團之　オ、サ、軍八さらば。
トぴつしやり乘り物の戶を立てる。
乘り物やれ。
供廻　ハア、、、、。
ト所知入りになり、乘り物向うへ入る。後コイヤイ。
軍八見送つて
軍八　イカサマサア、人の運と云ふものは、いつ何時が知れぬもの。先達て鎌倉に於て、無敵流の武術指南、その折からに始めて逢つた、あの白山の若殿。それより彼奴に取入つて、椎津の家へ仕官の事、願ふ折節思はずも、昨日賴んでおこされし黄金佛の事よりして、急に有りつく立身出世。殊に依つたら、團之丞、國久諸とも片附けて、白山椎津を我が兩手。大望の發端には、立身さへす

りや惚れて居る、お衣重を請け出し手活けの花。茲に一つの難儀と云ふは、まだ顏知らぬ衣重めが男、今でも旅から戻つてうせて、何の彼のと申さば面倒。いつそ親仁を此方の味方。さうして置けば屈竟の人質。シタガ、親仁も元が侍ひ、小理窟吐かさば手短かに

ト殺してしまふといふこなしあつて

どちらの道にも、お衣重めを、手に入れるやうな魂膽が……ハテナア。

ト手を組み、思案のこなし。橋がゝりより青太、口明の形にて出て來りて

青太　オヽ親方、爰に居やんしたか。迎ひに來やんした。

軍八　オヽ、青太か。

トこの時フト思案の出たこなしあつて

よい處へ來た。幸ひわれに云ひ付ける用があるわい。

青太　おれに用とは、どんな事でごんすの。

軍八　その用と云ふは、コリヤ。

トちよつと囁く。青太、呑み込んで

青太　そんならこれから。

軍八　委細は道々來い。

ト氣を急き、向うへ入る。始終コイヤイ。バタ／＼にて橋がゝりより三千歳、手拭にて顏を隱し、着流し拔帶にて走り出て、あたりへこなしあつて、胸撫で下ろし

三千　アヽ、嬉しや／＼、誰れも見附けなんださうなわいなア。シタガ、仲居衆の噂を聞けば、新さまには御追放とやらで、あの渚さまと一緒に、何處へか駈落ちしやしやんしたの事。聞くと其まゝ後を慕うて、やう／＼爰まで拔けて來たものゝ、何處を當途も尋ねやうやら、こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

ト此うち喜文太、橋がゝりより出て、後に居て

喜文　イヤ、その事なら何も案じる事はない、おれが爰で出會ふからは、滅多に其方は手放して、どつこへもやりはせんぞよ。

トずつと出る。三千歳見て、恟りして

三千　ヤア、お前は喜文太さま。

ト逃げうとするを引捉へ

喜文　ドツコイ／＼、われを逃がしてよいものか。コリヤよう聞けよ。なんぼうわれが焦れても、あの新三郎は渚と駈落ち。

三千　サア、それぢやに依つて。

喜文　大方新三郎を探すのであらうが、その行く先を、わりや知つて居るか。

三千　エ、。

喜文　サア、その目當は知れまいがの。

三千　サアそれは。

喜文　さればいやい。例へ目當があるにもせよ、そんな水臭い男に心中立てして居やうよりは、ぞつこん惚れ拔いて居るこの喜文太ぢや。爰で逢うたは天の與へ。幸ひあたりに人目はなし、丁度幸ひ。應と云や〳〵。

三千　エ、モウ、そんな事は知らんわいなア。

喜文　知つても知らいでも、敎へてやる。又否でも應でも此方は構はぬ。捻ぢつけても抱いて寐るのぢや。こりやモウ堪えられぬ。

ト無理に抱きつきにかゝる。三千歳、逃げ廻るうち、三千歳を捕まへる、三千歳、喜文太の下腹をグッと締める。これにて喜文太、フムと云うてしやき張る。三千歳これを見て、恟りしてアレエ、と、袖にて顏を隱し逃げる。手を放すはずみに喜文太、ぐつたりと轉ける。三千歳やうやく胸撫で下ろし、ソッと差足にて覗きに行き、顏を見て、死んだのかと云ふこなしにて、ゾッとするこなし。ビリ〳〵と足の慄ふこなしにて、やうやうこちらへ來て、又フト氣を替へて、慄ふ足を踏みしめて、向うを見込みて

三千　水の底まで女子の一念。オ、さうぢや。

ト躓づきながら向うへ走り入る。後にて喜文太、やうやう心付きて

喜文　ヤレ〳〵、えらい目に會はし居つた。この世あの世の境目を見せあがつたぞよ。この上はモウ

ト三千歳を探し

南無三、また取逃がしたか。遠くは行くまい。おのれ、衒妻め。

ト向うへ走り入る。チョン〳〵にて、淺黃幕切つて落す。

返し

造り物、一面の二重。山の書割り。向う中遠見、霞幕。東西、袖山、右二重眞中に猪小屋。すべて彌彦山半腹の體。よき處に喜樂齋、靑太を引きつけて居る。この見得よろしく、風の音、コイヤイ、バタバタにて道具納まる。

喜樂　この海道の物騷と云ひ、殊に夜道の爪上がり、嬰子抱へて老人の、一人歩きは此方も一物。うぬらが手に合ふ親仁ぢやないわい。

ト突き放す。

靑太　細言云はずと、くたばつてしまへ。

ト打つてかゝるを

喜樂　何を猪口才な。

ト兩人立廻り。猪小屋より軍八、ズツと出て靑太を突き廻してポンと切る。喜樂齋、悧りし、軍八を見て

ヤア、こなたは昨日の浪人樣。

軍八　思ひがけない今の難儀。

喜樂　よい處へ居合して下さりましたゆゑ、危ない處を遁がれましたは、あなたのお庇。エ、、忝ならござりまする。また何やかやお禮もあれど、心も急けば、私しはお先へ參りまする。

ト行かうとするを

軍八　ア、コレ〳〵、親仁どん〳〵。

喜樂　ハイ〳〵、なんぞ用でござりますかな。

ト立戻る。

軍八　オイナウ、おりや少と折入つて、こなたに相談したい事があるが、聞いて下んすか。

ト喜樂齋こなしあつて

喜樂　ムウ、この親仁に、相談のしたい事とは。

軍八　イヤ、相談と云うて外ぢやない。こなんの嫁のお衣重が事、なんとおれが女房に、下さらんかと云ふ事いの。

喜樂　エ、。

軍八　ハテ、こなたの息子の源五郎とやら、聞きや旅へ出て戾らぬではないか。そんならてつきり置去りと云ふもの。親や女房を捨て置いて、何日戾るとも行くへ知れぬ息子の事、さぞこなさんにも年寄つて、便りがあるまい。いとしい事と思ふにつけて、お衣重が事、おれが女房に貰ひなば、こなさんは舅も同然。今でこそ斯く云ふ浪人の身なれども、明日中にはキツとした、立身出世は此方の手應へ、さうなる時は、こなたも引請け、左團扇で安樂に。養うてくれう程に、應と云うて得心さつしやれ。

なんとマア、巧い相談であらうがの。

トこれにて喜樂齋、ムツとして、又氣を替へて

喜樂　段々の御深切、忝なうはござりますれど、悴めが旅行も、第一はわしへの孝行。なりや、例へ半月は愚か、一月や二月戾りが遲いとて、親女房にこんな子までも振

り捨て、戻つて來ぬと云ふやうな、そんな不埒な奴ではござらぬ。シタガ、マア、折角の思し召し、禮は云ひますが、この相談はマア出來ませぬ。さう思うて下さりませ。

軍八　親仁どの、そりやこなた惡い料簡。と云ふは外ぢやない、待ちに待つた源五郎とやらが戻つたところが、水呑み百姓、殊に女房は廓へ賣つたりや、賣り物買ひ物。請け出して女房に持たうが、どうせうが、金さへ出したら親でも男でも、誰れが點の打ち手もなけれど、サア、そこが初手から顏近附き。實の親のやうに不便に思ふ和御寮の事。ならう事なら納得させてと、貰ひかけたお衣重が事、又この軍八が出世の筋は、仇疎そかな事ではないてや。マア、捨て物としたところが、千石が物はぶらついてある。なりや喰ひたい物は喰べ次第。着たい物は着次第で、千石取りの御隱居樣と、大勢の人に敬まはれ、朝から晩まで榮耀の有り條。なんと好い相談ぢやが、喜樂齋どの、それでもこなた、不得心かの。

喜樂　イヤ、貧福は皆運づく。非常の榮華は望みにござらぬ。

軍八　そんならどうでも不得心ぢやの。

喜樂　さういふ無法な相談に、乘つて居る隙はござらぬわいの。

ト云ひ捨て行かうとするを、突き廻して抱子を引ッたくる。赤子笛。

喜樂　こりや、孫めをどうするのぢや。

ト取りにかゝるを蹴飛ばし、キッとなつて

軍八　アノ茲なひんこ親仁め。最前から慈悲垂れて、口を叩いてこましたりや、よいかと思うて付け上がり、小みづを吐かすが胸が惡い。サア、ウンと云うて女房にくれるか、さもない時はこの餓鬼め、捻り殺すが、それでも否か。

喜樂　ア、コレ、必らず聊爾せまいぞ。

軍八　そんなら得心して、女房にくれるか。

喜樂　サアそれは。

軍八　但し、ならぬか。

喜樂　サア。

軍八　サア。

兩人　サア／＼／＼。

ト突き廻す。此うち赤子笛頻りに吹く。喜樂齋、思ひ入れあつて

喜樂　是非に及ばぬ。
ト合ひ口を拔いて切つてかゝるを、立廻つてちよつと
とまり
軍八　コリヤ、うぬ。手向ひひろぐな。忌々しい死損ひめ
か。坊主が憎けりや袈裟の譬へ。この上はカウ。
ト抱子を袖山の影へ打込む。これを見て
喜樂　ヤア、可哀や孫めを。
ト行かうとするを、やり過して後より一かせ切る。こ
れより兩人立廻つて、喜樂齋が財布に手の當るこなし
あつて、キツととまり
軍八　ヤア、慥かにこれは衣重ねが身の代。この金にて身
の廻りを調へ、椎津家へ有りつく足代。エ、忝ない。
ト引取らうとするを、よろしくとめて
喜樂　孫が肉をば剝いだるこの金。おのれに渡してよいも
のか。
軍八　渡さぬと云うて、取らずに置かうか。どうでこの世
にない命。苦痛せぬうち、くたばつてしまへ。
ト刀を振り上げる。喜樂齋、右の金を引ッたくり、逃
げうとするを追ひ廻して、又後より一太刀切る。喜樂
齋、だん／＼逃げ廻るを、追ひかけ切り倒す。喜樂齋
苦しみながら
喜樂　チエ、口惜しい。非道の刃にむざ／＼と、此まゝ死
ぬるか。殘念な。
軍八　オ、、無念にあらう、口惜しからう。イデ息の根を
留めてくれう。
ト又切り倒し、乘つかゝつて止めを刺す。本釣り鐘。
これをキツカケにチヨン／＼と木の頭。この道具一面
のセリになる。軍八、喜樂齋を抉る。鳴り物になり、
キツと見得。

返し

造り物、右二重セリ上ぐる。これに山幕付いて上げ
よき程に切つて落す。この間、始終烈しき一セイ。
右山幕切つて落す。
造り物、向う遠見、谷底の模様、水の流れ、松の大
木、これに照葉の蔦などのあしらひ。處々面白き岩
組み、上手よき處に松の大幹、同じく照り蔦絡み、
これに返し前の抱子引ッかゝり居り、すべて谷間の
道具。眞中に自來也、大百日、ぶッ裂き、馬乘り袴、
重ね草鞋にて、岩臺にかゝり、右の赤子に目を附け

片手に煙管持ち居る。手下大勢、松明をともし、扣へ居る。この見得よろしく、一セイ、コイヤイ、本釣り鐘、赤子笛にて道具納まる。

自來　人跡絶えたるこの谷間、枝にかゝりし嬰子の泣き聲。さては絶頂より誤まつて、この谷間へ取落せしか。何にもせよ、不便の有樣……　……蟒蛇は居らぬか蟒蛇々々。

手下　アイ、爰に居やんす。

自來　コリヤ、あの小兒を、誤まちせぬやう、早くこれへ取下ろせ。

手下　オイ、合點でごんす。

ト若組みより松へ上がり、赤子を取下ろし、自來也が側へ連れて行て

連れて來やんした。

ト差出す。自來也、抱き取り見て

自來　オヽ、こりや玉の如き男子……昔、東大寺の良辨僧正と云ふは、悪鳥の爲に捕はれて、杉の古木にかゝりありしを、寺僧憐れみ、はごくみ育て、勤學のその功積りて、大徳の聖となる、その事は元亨釋書に明かなり。この小兒もまツその如く。ハテ、命冥加な子悴めだな。

トふと腰に付けたる迷子の札を見て

越後の國麻績の里、源五郎悴源吉。

ト讀む。この時、赤子笛吹く。

オヽ、吠えな／＼。

ト下手より手下狸の金、火繩を振り出て來て

狸金　お頭、爰に居やんすか。

ト始終本釣り鐘、合ひ方。

自來　オヽ、狸めか。して、今宵の手管は。

狸金　こなさんの云ひ付けで、柏崎の酒屋が所へ、宵から構へてとつくりと頑張つたが、頭、えらまぶでごんすわい。

自來　オヽ、出かした／＼。

ト云ひながら、袱紗を出し、抱子を包み、懷へ入れ

最早丑滿、時刻もよし。そろ／＼仕掛けやらかい。

皆々　面倒なその餓鬼めは。

自來　ハテ、身が手に入つたも何ぞの因緣。

皆々　そんならお頭。

自來　灯を消して。

皆々　オヽ、合點ぢや。

ト皆々一時に松明を消す。この時、空へ月出る。自來也、抱子の顔を見て

自來　月更けて、夜半に捨て子の泣き止むは、母に添へ乳の夢や見つらん。ハテ、不便の者の。

皆々　お頭。

ト本釣り鐘、撞き切ろ。自來也こなしあつて

自來　ハテ。

トちよんと木の頭。

いゝ子めだなア。

ト愛するこなし。この見得よろしく。

幕

三段目

稚津家館の場
平幡松原の場

役名――足利左門之介義胤。稚津市正國久。白山團之丞。勇源吾政村。逸見雅次郎正輝。岩瀨喜文太。増田伴作。坂田銀平。熊井五太夫。唐橋傳助。鳥形角藏。桐島丹下。多川丈助。高宮矢柄。斧山權平。鷲津爪作。局、小幡。腰元、吳葉。同、綾葉。同、照葉。同、若葉。傾城、代々衣。同、早枝實ハお衣重。鹿野苑軍八實ハ五十嵐軍八。萬里破魔之助。盜賊、自來也實ハ尾形周馬寬行。

造り物、三間の二重。上手、塗り骨障子屋體。この前に松の立ち木。下手屋敷塀、幕の内より奴二人掃除して居る。この見得よろしく、白囃子にて幕明く

奴一　サア／＼、掃除はしまつたが、なんと草臥れたではないか。

奴二　そりやその筈の事だ。朝のうちからお庭の打ち水、日がな一日この竹箒と同じ事で、しやきばり返つてしがない商賣。

奴一　二合半の切り米では、元の切れるおいらが仲間。なんでも御家老へお願ひ申して、もそつと給銀を上げてもらはねばならんぞよ。

奴二　シタガ、さうなつたら夜晝なしに、責め使はるゝであらうわい。

奴一　云へば、そんなものにならうわい。ハヽヽヽ。

トこの時、橋がゝりより

呼び　團之丞さまのお入り。

奴一　そりやこそ、毛蟲どのゝお入りだわい。

奴二　お目玉喰はぬうちに、早う片附けろ／＼。

呼び出仕

ト太鼓謠になり、向うより團之丞、着付け上下、五太夫、銀平、傳助、角藏、皆々着付け上下にて上手より出て來り

五太　掃除が濟んだら、扣へ居らうぞ。

奴二　ネイ〳〵……ドリヤ、部屋へ行からうか。

ト奴、橋がゝりへ入る。

團之　市正どのには、どれに居召さる。

銀平　ハツ、主人市正には、只今御勤學の折から。

傳助　さるに依つて我れ〳〵がお出迎ひ。

角藏　そこは端近。先づ〳〵あれへ。

團之　オヽ、罷り通る。

ト又太鼓謠にて團之丞、平舞臺眞中へ坐る。敵役皆皆よろしく下座へ座につく。團之丞、こなしあつて

何は格別。して鹿野苑軍八儀は。

五太　イヤ、その儀は兼ねて思し召しの通り、今日未明より相詰めらるゝやう、申しつけござれば、追ッつけ出仕の

皆々　召さるゝでござりませう。

團之　オヽ、大儀々々。それにつけても身が大望に、一味のわれ達。その期に至らば、必らず手筈を違へぬやう、キッと承知であらうがの。

敵皆　ハツ、その儀はお氣遣ひなされまするな。

トばた〳〵にて奥より小姓一人走り出て

小姓　ハツ、義胤公には茶道一齋どのをお手討とあつて、以ての外のお怒りでござりまする。

團之　また例の短氣病ひが發せしと見ゆる。ソレ、其方達も參つて、差留めて遣はせ。

皆々　ハツ、心得ました。

ト立ち上がり。バタ〳〵にて奥より、左門之介義胤、着付け袴にて、茶道の首筋を引ッ摑み出て來る。後より呉葉、綾葉、照葉、若葉、腰元の形にて付き添ひ出る。序の舞になり

女皆　マア〳〵、お待ち遊ばしませ。

ト留める。

茶道　どうぞお免しなされて下さりませ。

左門　ヤア、憎くい坊主め。予が望む濃茶を立てずして、うぬが勝手に薄茶の手前。詞を背く烏滸の振舞ひ。

茶道　イヤ、お詞は背きませねど、醉覺ましには濃茶より薄茶の方が御意に叶ひませうと存じまして。

左門　まだ〳〵此奴。その舌の根を。

ト反り打つ。腰元皆々留める。序の舞キッぱりとなり、茶道、花道へ逃げて行く。この時軍八、着付け上下にて出仕の心にて、向うより出て來る。茶道、軍八の後へ隠れる。軍八よろしく平伏して

軍八　待つた我が君樣。暫らく〳〵。

トこなし。

左門　其方は何者。

園之　イヤ、その者は當館へ新參の陪臣。鹿野苑軍八と申す者。

軍八　御免。

ト本舞臺へ來て平伏する。茶道は附き添ひ來て後に踞む。

君には正しく足利の御公達、茶道風情に御佩刀を汚さるゝは、恐れながら無時の仕業。

左門　諫言いたすか。

軍八　イヤ、全く以て。

左門　尾籠千萬。扣へい。

軍八　ハツ。

ト左門之介、皆々を引退け行かうとするを、軍八、隔てゝ茶道を抜打ちにポンと切る。皆々悄りして

皆々　これは。

ト合ひ方になる。

軍八　面を犯して御諫言の申し上ぐれど、猥りに君の非を上げずとは古人の本分。拙者が所存斯くの通り。

左門　出かした。死骸片附けい。

軍八　ハツ。

ト死骸を後へ隠す。左門之介、刀を納め、二重へ上がりて

左門　九獻持て。

女皆　畏まりました。

ト銚子杯を左門之介が前へ直す。

園之　イヤナニ軍八、若殿へお目見得の手始め、鍛錬の程が今一應。

軍八　ハツ、こは恐れ多きそのお詞。さりながらこの軍八、僅かの武藝を申し立てに、當館へ新參の拙者。御推擧下されし園之丞さまのお望み。若殿の御前と云ひ、試合とござる上は、何度でも、お指圖次第。

トこの時園之丞、ソレと顏にて教へる。

五太　然らば先づ竹刀の試み。まッから。

ト竹刀にて打つてかゝる。軍八、居ながら扇にて竹刀をあしらひ、キッと押へて

軍八　これが即ち神妙の構へ。

トちよつと立廻つて、竹刀を叩き落す。

銀平　誠に鍛練、早速の手練も油斷大敵。まッかう。

ト竹刀にて打つてかゝるを、又よろしく留め

軍八　表へ拂ふが陽の構へ。

トまた扇にて竹刀を叩き、とんと扇にて平舞臺を叩く

トこれにて銀平、どつたりと尻ぎばする。傳助、見て

傳助　所を身共が。

ト後よりかゝるを、後ざまに受け留めて

軍八　裏にて防ぐは陰の形。

ト竹刀を拂ふ。此うち

角藏　ほぐれを取つてカウ。

ト裾を掻かうとするを、飛び越える。

五太　車がゝりに向ふ時は、ソレ。

ト皆々一同に竹刀にてかゝる。側に落ちてある竹刀を手早く拾ひ、立廻つて皆々の竹刀を叩き落し、キッと見得。皆々踞まる。團之丞、こなしあつて

軍八　恐れながら。

團之　オヽ、天晴れ手練、手の內見えた。軍八扣やれ。

軍八　ハッ。

ト竹刀を捨て、平伏する。

團之　鍛練の程、天晴れとや云はん。出かす／＼。斯程の武士が民間に、埋もれしは殘念々々。いま時來つて某に面會の上、當椎津家へ推擧なし、取立てになりしこそ、名を發すべき其方が仕合せ。こつは、執成しなせし某が大慶。

五太　市正國久公は當越後の國主、まつた白山團之丞さまは分地にござつて、代々御家門の御格式。

銀平　萬卒は得安く、一將は求め難きとの諺。

傳助　武藝に秀でし鹿野苑軍八どの、我れ／＼どもが師範と賴み

角藏　今より文武兩道、萬事のお指圖御遠慮なう

五太　御折檻の加へられ、御指南の程偏へに

皆々　賴み存じまする。

軍八　イヤ、これは／＼、御挨拶にあづかり、却つて冥加に存じまするて。シタガ、元來拙者めは、信州宮の越の郷士。五十嵐郡右衞門が伜。幼年の砌りより、惡黨に依つて父も見限り、遂に勘當の身と相成り、鎌倉に赴き、

無的流の武藝を習ひ、漸くにして、その道に達したりと雖も、酒色に耽りて鎌倉をも立退き、故郷信州に立歸れば、父も相果て、家名も絶え、されども血筋を云ひ立て後式押領。近國近在我が物とし、氣儘放埒。間もなう信州にも足止まらず、近頃當國魔續の里に徘徊なし、不思議に手に入る金子を以て、斯く身の廻りを拵らへ、鹿野苑軍八と名を改め、當椎津家へ仕官の身の上。これと申すも偏へに若殿、團之丞さまの御推擧に依るところ、御厚恩の段、如何ばかり有り難う存じまする。

團之　それにつけても其方に、申しつけたき一儀もあり、以後とてもこの團之丞が腹心となり、萬事の相談、諸事の媒介、頼み入るぞよ。

軍八　ハッ、仰せまでも候はず、御用の品は善惡とも、粉骨碎身仕り、殿のお下知に相從ふでござりまする。

團之　それ聞いて先づは滿足。何は兎もあれ先頃より、當家へ參りし勇源吾。士民と云へど武術に達し、園原山にて年經る猛獸、狒々を仕留めしその場より、椎津へ有りつき。市正が寵愛に誇り、心憎き彼奴が振舞ひ。折に幸ひ其方が、今に始めぬ手練の以て、源吾めに鼻明かせ、威勢を拉ぐは其方が手の内。必らずともに心得たか。

軍八　ハ、、、片腹痛き源吾とやら。例へ猛獸にもせよ高が畜生、狒々などを仕留めしとて、手柄顏こそ笑止千萬未だ對面な仕らねども、出會の砌りには、出頭の權威を挫ぎ、一泡吹かせて耻辱の與へ、以後の見せしめ、なんの手間暇。

敵皆　勇源吾が出仕も追ッつけ。

團之　何かはその節、其方が手並を

軍八　御一覽に供へ奉らん。

左門　ハ、、、皆あれを見い〳〵。どれも〳〵澁い顏ではないかい。コリヤ〳〵團之丞、堅氣を止めて一獻酌まぬかいやい。

團之　イヤハヤ、足利武將の血縁とは申しながら、士民に等しき身持ち放埓。六十餘州を我まゝに、色と酒とに晝夜を分たず、諫言なせし萬里破魔之助には、目通り遠ざけ、廓のほたへにしたい事、心の儘に樂しめども、任せぬものは戀の道。代々衣太夫が心變り

吳葉　この程新潟の廓へお通ひ遊ばし、お馴染み重ねし代々衣どの。

綾葉　お殿樣のお聞きに達し、直さま當お館へお召し寄せありしに、いつしか變る秋の日和。

照葉　人の心と云ふものは、淵は瀨となる川竹の、寄るべ定めぬ傾城とやら。

若葉　何仰しやつても素氣ない返事。私しどもは、とんと合點が

女皆　參りませぬわいなア。

敵皆　そんなら、いよ〱代々衣太夫は。

團之　身共へ對して勤めの誠。氣の毒ながら廓の意氣地、武士の作法と傾城の、所謂と云ふはまた格別。さぞ心外にござらうの。兎角申すうち、先刻より餘程の間。さぞ代々衣にも待ち侘びつらん。奧へ參つて酒宴の一興。われ達始め軍八も、供に參れ。

軍八　イヤ、拙者めは主人よりの內意もござれば、その儀首尾よく埒片附け、後より推參仕らん。

團之　イヤナニ若殿、代々衣が儀について、御批判はござるまいの。

左門　酌いたせ。

ト左門之介、こなしあつて、杯取上げる。腰元酒をつぐ。

團之　さもござらう……サア、皆の者。

敵皆　軍八どのには、後より奧へ。

軍八　出席の仕るでござらう。

團之　然らば左門之介どの、軍八。

軍八　イザ、團之丞さま。

團之　ドリヤ、座敷へ參らうか。

ト序の舞になり、團之丞、こなしあつて、敵役四人附き添ひ奧へ入る。後に軍八、腰元皆々、左門之介も殘り、酒を飲み干し、奧の方を見やり、こなしあつて

左門　さなきだに、僞はり多きは傾城の習ひと聞く。鴛鴦の衾比翼の翅を並べ、水漏らさじと契りしも、皆徒言にてありしよな。

ト思ひ入れ。腰元皆々氣の毒なこなし。下手より小幡局にて出て

小幡　ハツ、申し上げまする。只今新潟の廓から、肝煎りとやら申す者、傾城を伴ひ、軍八さまにお目にかゝりたいと申して、即ちお玄關に扣へて居ります。如何いたしませうな。

軍八　オヽ、それ待ち兼ねし角屋の傾城。即ちこれなる左門之介さまが、お身請けなさるゝ。お金方、間瀨坦久之進どの、早く來召され。

久之　ハア、。

ト着付け上下、白臺に金包みを載せ持ち出て
先刻お指圖の通り、お納戸金三百兩、持參仕つてござ
ります。
軍八　御大儀々々々……ナニ、小幡どの、その金子、肝煎
りに相渡し、年季手形、傾城早枝もろとも、引換へに致
し、早々傾城を、これへ伴ひ召されよ。
小幡　ハッ、心得ました。
ト橋がゝりへ走り入る。
久之　三百金若殿の御入用と、お帳面に記し置きませうか
な。
軍八　如何にも。左樣仕り召され。
久之　ハッ。
ト橋がゝりへ入る。腰元こなしあつて
吳葉　代々衣どのゝその外に、早枝とやらをお身請けとは
綾葉　これには何ぞ、御樣子のあらう事かと
皆々　存じますわいなア。
軍八　散り行く櫻は昨日の眺め。代々衣太夫が心變り、そ
の面當に找折りして、花物云はねど拙者が計らひ。
ト此うちも矢ツ張り左門之助、思案して居る。軍八、
こなしあつて
仲人は宵の程。女中方にも暫らくこの場を。
女皆　左樣なら軍八さま。
軍八　ドリヤ、休息いたさうか。
ト唄になり、軍八、腰元皆々奥へ入る。後合ひ方にな
る。と橋がゝりより
小幡　サア、わたしに附いて、斯うござんせ〳〵。
ト小幡、先に早枝、傾城の形にて出て來り、下へ入れ
代つて
サア〳〵、ちやつと御前へ出やいなう。
ト早枝、こなしあつて
早枝　これはマア、初めて參りまして、いかいお世話にな
りますわいなア。
小幡　ナンノイナウ。シタガ、聞けば其方は新潟で、一二
と呼ばるゝ傾城さうなが、急に身請けは一生の片附き。
さぞ本望であらうなう。
早枝　ハイ、何ぢや存じませぬが、この國のお殿樣が、お
身請けをなさるゝ程に、早う來い疾く來いと、肝煎り衆
に追ひ立てられ、何がなしに來たものゝ、何かとんと御
勝手は存じませず、殊に傾城とは名ばかり、廓の事は不
案内。お物師の縫針、むづかしいものは、えゝ致しませ

ねど、お臺所のお手傳ひ、濯ぎ洗濯糊かいもの、御遠慮もなう澤山に、なんなと彼なと云ひつけて、どうぞよろしうお頼み申しますぞえ。

　トこなし。小幡もこなしあつて

小幡　ホヽヽ、何をお云やるやら。お大名の奥樣が、飯を炊いてよいものかいなう。サア〳〵、ちやつとお目見得しやしやんせ……イヤモシ、若殿樣、お傾城を連れて參りました。身請けも濟んで、即ち年季證文。あなたのお側へ置きますぞえ。

　ト證文を左門之介の前へ置く。左門之介、構はず思案して居る。小幡、こなしあつて

サア、お取次ぎの橋渡し、役目は濟んだ。爰でしつぽりおしげりなされや。

　ト早枝に側へ行けと云ふこなしあつて

ドリヤ、お次へ行かうか。

　トついと橋がゝりへ入る。

早枝　ア、これはしたり、わたし一人爰に置いてからにエヽ、つッとモウ、内方が廣いので、坐る所が知れんわいなア。

　トうろ〳〵してよき所へ坐る。此うち上手の障子引拔く。内に代々衣、傾城の形にて、團之丞の膝に凭れ居る。左門之介、矢張り濟まぬこなしにて、フト早枝と顔見合し、兩人こなし。合ひ方になる。

左門　其方は新潟の傾城、早枝とやらぢやな。

早枝　ハイ。

　トこなし。左門之介もこなしあつて

左門　ハテ、艶かな好い器量……苦しうない。近う來い近う來い。

早枝　ハイ、イエ、わたしは爰が勝手でござりまする。

左門　ハテサテ、其方が全盛を、見ぬ戀に憧れて、廓を根曳きの黄金に替へし、この一札も

　ト年季證文を引裂き捨て

斯うすれば、憂き川竹の名も消えて、向後は予が閨の花、否であるまい。早枝、なんと。

　ト手を取る。代々衣、これを見て腹を立て、出ようとするを團之丞、留める。早枝は左門之介の手を振り切つて

早枝　ついにこれまで、お目にかゝらぬわたしをば、お身請けなされた殿樣のお心はえ。

左門　サア、それはアノ軍八が……アイヤ、某が心に叶う

た花の早枝。閨の手生けに眺めようと思うて。

ト寄り添ふ。また代々衣、出ようとする。團之丞、留める。早枝、こなし。

早枝　姿形は傾城の、似せ紫の色さへも、うつろひ果てし身のようすが。もし頼もしいお方があれば、様子明かして深いお願ひ、力となつてもらひたさに。

左門　フム。心ありげな詞の端々。して、其方が願ひと云ふは。

早枝　ハイ、枕並べてお添臥しに。

トこなし。左門之介もこなしあつて

左門　すりや、打解けて寢た上にて

早枝　わたしが願ひを

左門　問ふも

早枝　語るも

左門　縁の糸筋。

早枝　必らず解けて下さりますかえ。

左門　こりや面白うなつて來たわえ。

ト抱きつく。代々衣、團之丞を引退け、ツカ〳〵と兩人の側へ行き、引分けて眞中へ立つて

代々　殿様。

ト左門之助、代々衣を見て

左門　代々衣。

ト早枝、代々衣を見て

早枝　ほんにお前は。

トこなし。代々衣、腹の立つこなしあつて

代々　新造の早枝さま、廓の所譯知らずなら、教へて上げうかえ。

早枝　サア、それはな。

トこなし。左門之介もこなしあつて

左門　コリヤ〳〵。云ふな其方。アノ團之丞に。

代々　イヽエ、惚れたと云ふは表面ばかり、これも手管のうちぢやわいなア。

トこれを聞いて團之丞、いろ〳〵こなしあつて、ツカツカと向うへ出て

團之　コリヤ代々衣、昨日までも今朝までも、いとし可愛いお方は、あなたならで外にはないと、云うたは嘘か、僞はりかいやい。

代々　サヽ、お前に云うたは、誠から出た嘘ぢやわいなア

左門　成る程、さうありさうな事ぢや。

ト側へ寄らうとするを、團之丞、引分けて

團之　ヤア、ドッコイ〳〵、あちらへ靡き、此方へ靡くぬめら傾城。其方は柳でも、手前の心は堅い樫。堅い約束、變替へさせぬ〳〵。

早枝　わたしへ誓ひのお詞も、滅多に捨てさす事はなりませぬぞ。

左門　ハテ、渡りに船ぢや。乘らいでならうか。

ト早枝が側へ行かうとするを、代々衣、隔て

代々　イヤ、仇な嵐が吹き越えて、浪に漂ふ浮れ舟、港入りはさすまいわいなア。

團之　濡れた雨夜はかゝり船、錨下ろしてしつぽりと

早枝　心の下紐打解けて

代々　何れの道にも抱いて寢る。

早枝　どうあらうとも私しが

左門　願ひは叶へる

ト早枝へこなし、代々衣、遮りて

代々　イヤ、さうはさゝぬわいなア。

ト行かうとするを、團之丞、留めて

團之　イヤ、身共に靡くか。

ト寄り添ふ。

左門　其方が心は。

代々　サア、問ふも憂し、問はぬも辛し武藏鐙、かゝる時にや人は死すらん。

トこなし。

團之　すりや僞はりの手管を以て。

代々　底の底意を打明けて

團之　この團之丞を騙つたのぢやな。

代々　イヤサア、云ふに云はれぬわたしが操。

トこなし。

左門　イヤ、なんと。

代々　エヽモウ、妾には置かれぬ。殿樣ござんせ。

ト手を取るを

左門　それでは早枝が。

ト早枝の方へ行かうとするを

代々　エヽ、ついとモウ、ござんせいなア。

ト左門之介を無理に引立て、ツイと上手屋體へ入る。後に團之丞、こなしあつて、屋體へ行かうとするを軍八、奥よりツカ〳〵と出て、よろしく留めて

軍八　イヤ、待つた若殿、代々衣太夫を殺す御所存か。

團之　如何にも。生け置いて餘人の花にせうよりは、たつた一討ち。ソレ。

軍八　イヤ、鷄を裂くに牛の刀。危ない〳〵。
トこの時早枝、フト軍八を見て
早枝　ヤア、お前は。
ト恟りするな、軍八、こなしあつて
軍八　アイヤ、昔は昔、今は當家の仕官を求めし、鹿野苑軍八と申す者。麁忽申さば爲にならぬぞ。
早枝　ハテナア。
トこなし。
團之　イヤ、此まゝでは胸が晴れぬ。某が鬱憤を散すべき手段があるか。なんと〳〵。
軍八　如何にもござる。ずんとござるての。
團之　ナニ、あるとは、ド、どうぢや。
軍八　その手段と申すは、若殿の短慮病ひ。名醫の秘藥を用ゆる時は、手も濡らさずに遂に滅亡。
團之　その時こそは身共が戀も
軍八　手間隙いらずと自由自在。
團之　萬事は軍八。
軍八　承知いたした。
團之　ハレ、面白い。
トこなし。内にて三輪の謠になり

〽實に有り難き御相好、聞くにつけても法の道、直しても頼む心かな。
ト團之丞、こなしあつて奥へ入る。早枝、思案して居る。
〽とても神代の物語り、詳しくいざや顯はし、彼の上人を慰めん。
ト後コイヤイ。軍八、あたりへこなしあつて早枝の側へ行き
軍八　麻績の里では浪人の軍八。縁は異なもの。ハテ、變つた所で逢うたなア。
ト早枝、物をも云はず、屋體へ行かうとするを
待て。どれへ行くぞ。
トよろしく留める。
早枝　ハテ、身請けとなつた殿樣に、ま一度逢うてこの身の願ひ。叶へてもらふわたしが心。
軍八　イヤ、廓の苦患を助けたは、若殿樣のお名を借り、誠の身請けは、この軍八が計らひ。
早枝　エヽ。
軍八　マア、下に居いやい。
ト無理に坐らす。合ひ方になる。

世帶じみて居つた時さへ、惚れ拔いて居るこの軍八。梅花の薫りに綾錦、斯う着飾つた風俗で、いとゞ思ひが增す穗の芒。コリヤ、風に靡いてくれ居れやい。

ト抱きつくを

早枝　軍八さま、わたしには源五郎どのと云ふ、夫がござんすぞえ。

軍八　ハテ、喜樂齋が嫁の衣重なら、夫と名差す品もあらうが、傾城遊女はやもめ同然。否な風にも靡かずばなるまいぞよ。

早枝　サア、なんぼう廓の勤めは初心でも、聞き覺えたる廓の作法。嫌なお客は、アノ何とやら、オヽ、それ〳〵、振るとやら云ふげな。それぢやに依つて、わたしや又、アノこな樣を振るのぢやぞえ。しかも、餘ツぽど振るのぢやわいなア。

トこなし。軍八、こなしあつて

軍八　イヤ、こりや一文奴が呆れるワ。ハヽヽヽ。イヤ、例へ振らうが振るまいが、否でも應でも此方の望み。口說き落して抱いて寢る。拗ねずと靡いてくれ居れやい。

トまた抱きつくを、振り放して

早枝　エヽ、嫌らしい。否ぢやわいなア。

軍八　さりとては又、生娘か何ぞのやうに。いとしなら云はずとマアちよつと

ト抱きつきに行くを、早枝、逃げ廻る。トヾよろしく捉へる。と謠。

〽先づは岩戸のその始め、隱れし神を出さんとて。

早枝　アレ〳〵、奥は今樣三輪の謠。天の岩戸の小座敷へ

軍八　サア〳〵、ちやつと來給へ〳〵。

ト手を取り行かうとするを、振り切り

〽八百萬の神遊び、これぞ神樂の始めなる。

ト右謠ひのうち、軍八、早枝を追ひ廻す。謠の切れ、太皷入れ、三輪の神樂になる。ト向うより源吾、着付け上下、大小にて、何心なく出て來りて、フト早枝を見て、恟りしながら、本舞臺へ來る。軍八、これを知らず、早枝を捉へる。源吾、眞中へ割つて入る。軍八取違へて源吾に抱きつかうとする。源吾、突き飛ばす。

これにてフト顏を見て恟りして

ヤア、南無三、違うた。

トこなし。これにて鳴り物止む。

源吾　奥は亂舞にこの場の體裁。ハテ、お屋敷は自墮落千萬な。

　ト合ひ方、こなし。早枝、源吾を見て恟りして
早枝　ヤア、お前はこちの人、源五郎どの。思ひがけない
　どうして爰へは。
源吾　ア、コリヤ／＼、見れば賤しい流れの女。新參な
　がら當家へ仕官の求めし勇源吾。虛言申さば爲にならぬ
　ぞ。
　ト こなし。
軍八　フム、すりや其許が、狒々を仕留めし功を云ひ立て、
　有りつき召された勇源吾どのとな。
源吾　如何にも。元は賤しき麻績の里の山賤、源五郎と申
　す者。聊かの手筋を以て、計らざる立身出世。して、其
　許には。
軍八　當家の御家門、白山團之丞さまの御推擧を以て、こ
　の度仕官の求めし、鹿野苑軍八と申す者。
源吾　すりや、團之丞さまの御推擧を以て。
軍八　如何にも。國の守のお見出しにあづかり
源吾　新參たる鹿野苑軍八どのとな。
軍八　今參つたる勇源吾どの。
源吾　以後は朋友。
軍八　御別懇に
源吾　申し談ずるで
兩人　ござらうて。
　ト合ひ方になり、兩人、こなしあつて下に居る。早枝
　こなしあつて
早枝　源五郎どの、エヽ、胴慾な、こな樣はの。如何にそ
　の身が出世して、榮耀榮華が望みたいとて、現在の男御
　樣、また二つには妻や子を、振り捨て置いて音信なく、
　稀に逢うたる女房を、見れば賤しい傾城のと、アタ餘所
　餘所しい今の勿體。その心なら在所の事、何にも大方知
　らしやんすまいがの。コレ、源五郎どの、お前の親御喜
　樂齋どのはな、人手にかゝつて、敢へなうお果てなされ
　ましたぞえ。
　ト 軍八、ヤツクリとこなしある。
　貧しい煙を立てんとて、お前は山の柴稼ぎ。國を隔てゝ
　一月二月、外を家とし戻りのないは、どうか斯うかと二
　人が案じ。今日は便りが知れるであらう、明日は戻つて
　ござんせうと、指折り數へ待つうちに、積る未進のその
　上に、急の課役の上納金。今日か明日かの手詰めの切端、
　老い年寄らしやんした男御樣、金の代りに水牢へ、入ら
　ねばならぬ仕儀となり、何を云うても女子の身、殊には

大枚の金の出來方、相談せうにもお前は留守中。詮方盡きてわたしが體、新潟の廓へ苦界三年身を沈め、まだ稚けない水子の源吾、肌に抱へて舅御樣、わたしが身の代受取つて、お歸りなさるゝ道ばかも、殊に夜道のたどたどしう、彌彦山に差かゝり、月さへ暗き山影に、待ち設けたる山賊が、舅御樣を手にかけて、水子は谷へ蹴落して、金を奪うて立退きしと、谷を隔てゝ見屆けた、木樵の衆の物語り。聞いて身も世もあられうか。夫の他國の留守の間に、大事の〳〵舅御樣、まだその上に義理のある、水子の生死覺束なく、せめては敵の名を知る、手かがりなりと尋ねんものと、心は逸れど籠の鳥、飛び立つやうには思へども、行くへの知れぬお前の他國。どうぞこの事知らしたい、逢ひたい事と泣き明かし、待ち焦れたる日數さへ、昨日と過ぎて今日と暮れ、今日が丁度三七日。そのお逮夜と云ふ事は、よもや夢にも知らしやんすまい。これ程大事の騷動を、女房のわたしに振任せ、立身出世を出かし顏。敵の在所、水子の安否、尋ねうと云ふ心はござんせぬか。賤山賤となり下れば、由緒正しいお身柄でも、お心までが其やうに、さもしうなればなるものか。草葉の蔭から舅御が、口惜しいとも無念とも、思し召されう、思はしやんせう。思し召さいでなんとせう。わたしやそれが悲しうござんす。ござんすわいなア。

ト大泣き。軍八、いろ〳〵こなし、源吾もこなしあつて

源吾　得難き藥種を求めん爲、越路の野山に日數を積り、折も折とて關原にて、年經る狒々に出會、不思議に手に入る件の藥草。ハヽア嬉しや、この上は片時も早く立歸り、價に替へて未進の金、調達せんと思ふ矢先、思ひがけなく當家の國守、國久公の御遊歷の、お馬先にて召し抱へ、家來になさんと有り難き、上意は重き事ながら、父が身の上先づ斯く〳〵と、言上なして否めども、祿を與へて召し抱へなば、親妻子をも安樂に、あらせん事は汝が至孝、天に通ずるものならん、猛獸を仕留めたる、勇を其まゝ苗字とし、勇源吾と呼ぶべしと、嚴命厚き殿の御上意。辭するに難くお請け申し、その場よりして麻績の里、人を走らし親人始め、妻子諸とも安否を問へば、親人には彌彦山にて敢へなき御最期。まつた妻子は行くへ知れずと、參りし者の詳しき物語り。南無三方と思へども、悔んで返らぬその日の體裁。殘念至極と存じながら、敵を討つて孝道の、道を立てるは易けれども、さあ

る時には大恩ある、主君へ忠義も欠くる習ひ。とても忠孝全からずと、思ひ廻して所存は一決。

早枝　そんなら敵を討たうと云ふ、お心は。

源吾　如何にも。忠義の爲には、親をも討つの習ひ。

早枝　すりや、どうあつても敵討は。

源吾　亡父の追善、後弔らふが、子たる者の道と云ふもの

早枝　そんなら實に、アノ……ハア、。

　ト源吾の顏を見て大泣き。

軍八　イカサマ、水の流れと人の行く末、知れぬが浮世の有樣とやら。斯く申すこの軍八も、浪人の砌りには、こなたの在所に假の住居。他國召されて貴殿には、これまで面會いたさねども、御親父喜樂齋どのとは懇意に致しそれなる衣重どのにも、折々出會ひ申したが、衣重どのの連合ひたる、源五郎どのと申したは、アノ貴殿の事でありしよな。それは格別、只今承れば、御親父喜樂齋どのゝ横死と云ひ、御子息のお行くへとても、相知れぬとござるが近頃以て御笑止千萬。それについて察するところ、今北國に自來也と云ふ盜賊、彼奴多くの手下を從へて、金子を貪り、切取り強盜いたすとの風聞、なりやコレ喜樂齋どのを闇討ちになし、所持の金子を奪ひしもてつきり知れた彼奴等の仕業。さすればなか／＼敵は討てまい、と申す譯は、彼れらは多勢、殊には命知らずのあぶれ者。並々の敵ではござらぬと、そこを思うて敵討お止めなされし天晴れ頓智。御發明の程驚ろき申した。イヤ、それは兎もあれ、ナニ源吾どの、ちと其許に折入つて、お頼み申したき儀がござるが、なんと御承知下されうかな。

源吾　ナニ、拙者へのお頼みとは。

軍八　イヤ、別儀でもござらぬが、それに罷り居る新潟の傾城、早枝と申す者、即ち身請けの埒も明きましたなれども、夫のある身などゝ故障を申し、なか／＼側あたりへも寄りつきませぬ。サア、頼みと申すは爰の事、餘人で參らぬ閨の取持ち、何卒其許が口說き落して、身が妻女になりますやう、媒介の儀がお頼み申したい。

源吾　すりや、この女を口說き落して。

軍八　何卒手に入る工風はござるまいかの。

源吾　何がさて、身不肖ながら勇源吾。如何にもお媒介の仕らう。

軍八　ヤア、アノ、御承知下さるゝとな。

源吾　如何にもお世話仕りませう。

軍八　早速の御承知とは、先づ以て忝ない。
ト早枝、これを聞いて
早枝　コレ、こちの人、そりやお前、何を云はしやんす。わたしや身の樂しみやいたづらに、苦界の勤めはしませぬわいなア。舅御樣への孝行と、お前に代つて金の才覺。それさへ今は水の泡。こんな恥かしい形かたち。向ふ鏡の表さへ、我が身で我が身が恨めしい。見る度々に味氣ない、ほんに時世と云ひながら、泣かぬ日とてはござんせぬ。辛い勤めの辛抱も、夫への貞女ぢやと、思うて暮らすわたしが心。それに引替へ現在の、連れ添ふ女房を取持つの、イヤ媒介せうのと、他人がましい源五郎どの、常に變つたお前の心底、氣ばし狂ひはせぬかいなア。
源吾　勇源吾狂氣はせぬぞ。
早枝　それに又、媒介せうとは。
源吾　一双の玉臂、千人の枕とは、傾城、遊女を賦したる詩。
軍八　廓を根曳きの金が敵。よもや否とは云はれまいがの
早枝　さうぢや。
トこなしあつて、源吾が刀にて死なうとするを、よろしく留めて
源吾　待て。何ゆゑ死ぬるぞ。
早枝　夫に捨てられ、何樂しみ。死んで操を立てうと思うて。
源吾　イヤ、操を捨てゝ操を立てい。
早枝　エヽ、なんと。
源吾　木折りで行かぬが戀の道。其許への返事は、後方までに。
軍八　口說き落して渡さつしやるか。
源吾　ハテ、御念には及ばぬ。キッと身共が。
軍八　それ承つて拙者も安堵。
ト早枝を見る。早枝、顏背ける。とバタ〱にて、捕り手の侍ひ一人走り出て
侍ひ　ハッ、申し上げます。お尋ねの盜賊の張本、自來也と申す者、團之丞どのゝ組子を以て、只今召捕り、連れ歸りましてござります。
軍八　ナニ、自來也を召捕りしとな。
源吾　猶豫に及ばぬ。早くこれへ。
侍ひ　ハッ。
ト引返し、向うへ入る。直ぐに上手屋體より小幡、出て來りて

小幡　早枝どの、若殿樣のお待ち兼ね。御酒宴の御相手にお呼びなさるゝ程に、サア、お座敷へ伴ひませう。
早枝　ハイ〳〵、只今參りますわいなア。
小幡　サア、ちやつとござんせいなア。
ト引立てるを、早枝、こなしあつて
早枝　胸の鏡は曇らねど、姿は賤しい君傾城。源吾どの、エヽ、こなた樣はなア。
ト源吾、こなし。小幡合點のゆかぬこなしにて
小幡　エヽ、なんの事ぢやい。
早枝　頼むまじきは人心。思ひ廻せば
トこなしあつて、また氣を替へて
ドレ、お座敷へ行かうか。
ト唄になり、こなしあつて、小幡と連れ立ち、上手屋體へ入る。と向うより網乘り物六人がゝり、喜文太、素網、鉢卷、十手、自來也の刀を持ち、捕り手大勢連れ、皆々乘り物に附き添ひ出て來る。此うちに軍八、源吾、東西へ別れ、二重へ上がり、座敷に附く。軍八喜文太を見て
軍八　團之丞さまの御家來、岩瀨喜文太、盗賊の張本自來也を召捕りしとな。

喜文　ハツ、御意の通り、彼れが同類百餘人、御城下の町人へ押入りしと、下部の噂聞くと等しく、主人團之丞さまの御內意請け、夜廻り致す我れ〳〵が、出ツくはしたるその場の騷動。しや御參なれ屈意と、其まゝ直ぐに御上意と、聲の下より飛びかゝれば、聞きしには似ぬ手下の者ども、右往左往に逃げ出す。得たりと附け込み組子の面々、我れも〳〵と十手振上げ、手下の者には目もかけず、目差すは張本自來也を、搦め捕らんと長柄刺叉、或ひは熊手と得物引提げ、手練の盡して難なくも、押へて繩をかくるうち、手下は殘らず逃げ失せますれど、彼の張本は直ぐに其まゝ、網乘り物へ打込んで、直さま館へ召連れました。イザ、御覽に下されませう。
ト自來也の一腰を緣側に置き、扣へる。と內にて
奧方　お成り。
皆々　ハアヽ。
ト皆々平伏する。奧より小姓、褥を持ち出て、よき所へ敷き、扣へる。正面の襖、左右へ開いて、市正國久、着付け羽織、袴、一本差し。後より小姓、太刀を持ち、その外近習大勢附き添ひ出て、後へ別れ、皆々並ぶ。
國久、座に附き、こなしあつて

國久　風聞の盜賊、その張本たる自來也とやらん、卽刻召捕りしとあるが、しかと左樣か。

軍八　ハッ、御意でござりまする……ソレ、罪人をこれへ。

喜文　ハッ。

ト乘り物明ける。自來也、繩かゝり居る。

喜文　盜賊自來也、御前たるぞ。キリ／＼

捕手　出ませい。

トきつと云ふ。自來也、伸びをして、あたりを見廻し

自來　オヽ、とろ／＼と眠つたさうな……爰は何所ぢや。

軍八　當國の大守、椎津國久公の御本城。

源吾　とくと聽聞いたすであらう。

喜文　早く御前へ出ませい。

捕手　御意ぢや。出居らう。

ト自來也、こなしあつて

自來　お尋ねの盜賊、それへ參つて、近付きになり申さうか。

ト合ひ方になり、自來也、乘り物より、のこ／＼と出て、皆々を見てこなしあつて

ホヽウ、こりやお歷々のお揃ひだな。

捕手　下に居らう。

ト十手振上げる。自來也、ヂロリと目を附ける。これにて皆々チッと氣を呑まれ、扣へる。

自來　先づ御腰を下ろさうか。

トよき所へ座につく。源吾、こなし。

源吾　この頃巷に跨り、町家を騷がす盜賊の張本、自來也とは其方よな。武術に秀で、一人當千と聞き及ぶ。それに何ぞや云ひ甲斐なく、步卒の者に召捕られ、斯く囚人となり、天命とは申しながら、さぞ本意なからうの。

喜文　イヤ、斯程の者を易々と生捕りし事、主人白山公の御下知と申し、二つには又我れ／＼が、拔群勝れし骨折りの働らき柄。軍八どの、御前體御推擧の程、偏へに願はしう存じ奉りまする。

軍八　イヤ喜文太、この囚人は誠の自來也ではあるまいの

喜文　なんと仰せらるゝな。イヤサ、軍八どの、斯く召捕りしその上にて、それと名乘りは慥かな證據。なんとこれでも似せ者でござるかな。

軍八　さればサ、左樣でござらぬと申す譯は、凡そ生ある者として、何れか一命惜しまざらんや。なりやコレ、おのが名の包まるゝだけ包むべきに、却つておのれが口よ

りして名乘るは曲者、合點がゆかぬて。

喜文　イヤ〳〵、この期に望みて我が名を名乘るは、動ぜぬ魂ひ。自身の白狀聞きながら、自來也でないと申さるるには、外に何ぞ見所でもござつての儀でござるかな。

軍八　如何にも。尤も、期に望みて動ぜぬなどとは武士の腹。盜賊を致す程の者か、左樣な事がござらうや。イヤ盜賊、わりや誠の自來也ではあるまいがの。察するところ、手下のうち、面體似たるを幸ひに、兼ねて計りし似せ者ならん。サア、誠の自來也はいづくへ逃がした。眞直に白狀いたせ。仕儀に依つては汝が命、助け遣はす品もあらうが、もしあらがはば火責め水責め。品を替へても拷問なし、苦痛をさせるが白狀せぬか。サア、有體に申し上げよ。どうだや。

自來　ハヽヽ、二腰帶せば侍ひと心得、智惠あり顏の詮議立て、片腹痛きその云ひ條。今お主が申すには、誠の自來也なればそれと、明かして名乘るまじとは、井の内の蛙が大海を計る小さき料簡。臆病未練の下司根性、うぬが心に引比べ、勇もなく智もなく、元より義もなきその一言。我れ盜賊をなすとは云へど、仁を旨とし、義を專らにし、慾に富みたる豪家へ押入り、金銀財寶掠める時は自ら來る也と黛黑に、書き殘したるゆゑに依り、人皆呼んで自來也と云ふ。然るところに今曉卯の刻、城下に於て不意に出會ひし捕り手の役人、拙者一人の事ならば、驅け放しても遁れども、足手纏ひは手下の者ども、殊には多勢、彼れらが一命助け得させんその爲に、推して縛めを請けし事、こは全く恥辱に似て恥辱にあらず、宿星正に亡ぶべき時節到來、天運のなすところ。まつたお身達如きの侍ひは、今にも主君の一大事、すは事こそと云ふ時は、牛蒡ほどに尾を振つて、逃げ迷ふべき犬侍ひ、かゝる輩に知行を賜はる大守の思し召しも、ちと淺墓しう存じまする。この自來也は恥を辨まへ、天命を存するがゆゑ、生を欲せず死に惑はず、と云うたところが眼つぶれ、論は無益な馬鹿侍ひ。差出ですとも、抑へて居さつしやれ。

軍八　ヤア、不敵なるその雜言。ア、聞えた。こりや血迷うたと相見える。引かれ者の小唄同然、聞けば聞く程憎くき廣言。自來也ならば猶以て、猶豫はならん、責め苛なみ、同類までも白狀さす。ソレ喜文太、ぬかるな。

喜文　ハツ、並々では申すまい。何れも、木馬熱湯の用意。

捕手　ハッ畏まつてござります。
　ト捕り手皆々、橋がゝりへ入る。
軍八　ハツ、この上は我が君、御賢慮の程、如何でござり
　ませうな。
國久　イヤナニ、自來也とやらん。その身賤しき强盜とは
　申しながら、多くの手下を誘ふ事、仁を以てこれを惠み、
　德を以て馴けずんば、一日たりとも下知を受けんや。器
　量の程は感ずるに絕えたり。それにつけても鹿野苑軍八、
　其方事は團之丞が、推擧に依つて當家へ新參、一言の以
　て善惡を相分つの道理。この後とても我が意に募らば、
　自然とその身を失ふ理り。以來はキッと愼しんでよから
　う。
軍八　ハツ、恐れ入つてござりまする。
國久　まつた勇源吾儀は、蘭原山にて計らずも、猛獸を仕
　留めながら、功に誇らずその身を辭退。諺に云ふ能あ
　る鷹は爪を隱すの本分。この後とても、相心得てよから
　う。
源吾　ハツ、有り難き御敎命、畏まり奉つてござります
　る。
　ト平伏する。自來也、源吾へこなしあつて
自來　フム。すりや當館へ新參たる、勇源吾どのとは御邊
　の事かな。
源吾　なか／＼。
自來　して、その以前は麻績の里、醫業を勤むる喜樂齋ど
　のゝ子息、源五郎どのと云ふ事は、間者を以て聞き合せ、
　慥かにそれと存じ罷りありしが、いよ／＼左樣か。
源吾　ハテ、詳しくもよく存じ居るよな。さすれば獅彥山
　の一件、まつた悴が、行くへ知れざる事までも。
自來　云ふにや及ぶ。凡そ天地にあらゆる事、この胸に疊
　み込んで罷り居るわサ。その子と云ふも元は捨て子、は
　ぐゝみ育てし恩義も思ひ、由緣の者が預かつて、心で禮
　は申すでござらう。
源吾　フム、心ありげな今の一言。未だ二才の年足らず、
　我が肉身の悴ならば、打捨て置くべき品もあらうが、血
　を分けざれば義理も深し。もしや行くへの知るゝべき、
　手筋もあらば、とてもの事に源吾を。
　ト自來也、こなしあつて
自來　黑姬の山にも人の住むやらん、佛法鳥の鳴くにつけ
　ても。
源吾　一首の古歌もこの場の返言。ハテ、何とかな。

トこなし。

軍八　アイヤ〳〵源吾どの、先刻より默つて差扣へて居れば、君の御前とも憚からず、殊には決斷所にて盜賊と、馴れ〳〵しき御子息の行くへの根ざらへ、問ひ合し召さるゝは、相役たる身共が手前、且は盜賊詮議は脇へ打ッちやり、手前勝手の捌きはなるまい。よい〳〵、この上は拙者一人預かり、キッと拷問いたすでござらう。ヤアヤア喜文太、彼奴廣庭へ引かつしやれ。ソレ、早く〳〵。

喜文　ハッ、御意ぢや。立たう。

ト引立てうとするを

國久　ア、コリヤ〳〵、尤も惡き業を致すとは云へど、武道を嗜なみ、義を守る自來也なれば、此方も亦仁を施し、理法權の掟を以て相諭しなば、これ卽ち弱よく强を制するの道理。もし荒立てゝ取逃がさば、下知を傳へし軍八、先づ其方が第一の誤まり。引立つるには及ばぬ事。矢張り其まゝ。彼れが儘に〳〵。

軍八　ハッ御上意を悖くには似たれども、斯く御覽の如く腕を拉いで三寸繩目、例へ如何ほど羽ばたき翅あるとも、いつかな〳〵。びゝら動きもさす事は、ござりますまいかと存じられます。

國久　愚か〳〵。却つて獄屋に陷る者は、五體痺れて自然と面に死相を顯す。今彼れが體を見るに、その樣寛勇にして血色變ぜす。察するところコレ空繩。予が見極めたる眼力の、よもや相違はあるまいが。自來也なんと。

自來　天晴れの明察、流石の大守。斯く繩目となつて引かれしは、其許樣へ直談を、願はん爲のこの空繩。子供たらしのへろ〳〵繩。いでと思はば、まッこの通り。

ト繩を引き切り、せゝら笑ふこなし。

喜文　ヤア。

ト悄りして

軍八　すりや、召捕つたと思うたは。

ト喜文太と顏見合して

ハテ、空繩であつたよなア。

國久　ホ、ウ、さもあらん〳〵。して、予に直談の願ひとは、何等の願ひ、仔細に依つては聞き屆けて遣はさうが、早く申せ。サ、、どうぢや〳〵。

自來　イヤ、別儀でもござりませぬ。當館へ客分となつて、滯留召さるゝ足利左門之介どの、これに添へある淺綠と云ふ守り刀、其許樣が預かつてござらうが、ちと此方に所望いたしたい事もあれば、その劍をば申し請け、立歸

りたき拙者が所存。そこでわざ〳〵直談を、願うて見たのでござりまするて。

國久　フム。すりやアノ淺緑の劍をば。

自來　盜み出して歸らうとは、存じますれど當國の、お下を働らく盜賊ゆゑ、さう見知り越しにもなるまい。こなたなり、わしなりと、相對相談得心づくで、申し請けたく存じますゆゑ、どうぞ所望が致したく存じまする。

ト國久こなしあつて

國久　ハヽヽ、ハテ異な事を願ふよな。汝盜賊の所行なれば、金銀のみを望むべきに、武器の類に目をかくると云ひ、まして況んや四海の重寶、淺緑の劍を乞ひ請けんとは。

ト自來也を見やり、思ひ入れあつて

フム、並々ならぬ人相骨柄。此方よりも尋ね問ふべき仔細もあり、また其方が望みの品も、事に依つては申し上げ、其方へ與ふる折もあらんが、先づそれまでは當館へ滯留のして首尾を相待て。稀れの珍客、ゆる〳〵馳走の致すであらう。

自來　イカサマ、望みかけた所望の一品、手に入るまでは面倒ながら、どうで厄介になりませうての。

軍八　ヤア、忌はしき盜賊自來也。珍客なぞとは用ひ過ぎたる君のお詞。囚人の科人、身分相應の揚り屋へ押籠め馳走酒より先づ泥水、それから先へ喰はせませうて。

喜文　軍八どのゝ仰せの通り、先づ刃物は持たいでも、もしや又剃刀一本、釘一本隱して居るまいものでもござらぬ。衣類を引剝ぎ、懷中までも、とくと改めその上で、兎も角も又馳走は樣々。マア、この喜文太が。

トつか〳〵と側へ行つて

科人、立たう。

ト引立てにかゝるな、ヂロリと見て

自來　ハヽヽ、蚊蜻蛉めら、味をやるな。

トせゝら笑ふこなし。

喜文　何をらぬ。

トいろ〳〵引立てうとしても、動かぬこなしにて

こりやどうぢや。

ト呆れたるこなし。自來也、こなしあつて

自來　いでさらば行かうと思へば、直ぐにお馬をお乘り出さるゝ。ヂタバタひろぐな。

ト振り解き、見事に投げて

犬侍ひめが。

源吾　トこなし。軍八、自來也を目がけるこなしにて、わざと源吾へ小柄を打つ。源吾、よろしく留めて
　軍八どの、何となさるゝな。
軍八　イヤサそれは。
源吾　殿の面前、尾籠の振舞ひ。
軍八　フム……イヤ、盗賊めが息の根を、留めてくれうと存じまして、目當が外れて、ハテ、麁相千萬、御免下され。
源吾　身體髮膚は父母の賜物。滅多に損なふ事ぢやござらん。
　ト兩人氣味合ひあつて
　イザ、小柄は返納仕らう。
　ト扇に乘せて出すを
軍八　危ない事な。
近習　お取次ぎ仕りませう。
　ト軍八が前へ持ち行く。國久、こなしあつて
國久　猛虎深山にある時は、諸所の禽獸これを恐る。又うろたへて市中へ出れば、尾を打振つて食を求む。予が眼力の及ぶところ、何事をか仕出さんや。ソレ、近習の者ども、心を用ひて馳走の致せよ。
近習　ハッ、畏まつてござります。
　ト自來也、こなしあつて
自來　客は盗賊、亭主は大名。
國久　身は穢れても
自來　心は淸き羅綾の袂。
國久　尤も。さこそあらん。
軍八　ソレ、自來也を馳走の者ども。早く參れ。
　ト橋がゝりより
侍六　ハア、ゝ
　ト股立ちに侍ひ、弓矢持ち出て、三人づゝ左右より圍みて
軍八　ソレ、對客の間へ。
侍皆　案內いたさう。
　ト取卷く。喜文太はそこにある繩を取上げる。
自來　大名のこつてう料理、どうで碌な事はえゝ致すまい。
　トこなし。喜文太、繩を見て、こなしあつて
喜文　この捕り繩も、今で思へば腐り繩。エゝ、忌々しい。
　ト打ちつける。
自來　市正さま、劍は是非とも所望いたして、罷り歸るぞ。
國久　イヤ、先づそれよりは汝が俗性。

自來　イヤ、滅多には分るまい。

源吾　黑姬の山にも人の住むやらん、佛法鳥の鳴くにつけても。

軍八　蛙は口から、おのが住家をおのれと白狀。

國久　イヤ、愚かな事。佛法鳥と名けたる鳥、聲はあれども姿を見せず、當國黑姬の山のみに限らず、高野黑髮松の尾なんど、人跡絕えたる深山幽谷を棲家となす由。爰に顯はれ彼所に潜む。

自來　日本國中飛行して、我が一身は自由自在。

源吾　所を論して詮議の落着。

軍八　骨を拉いで有無の返言。

國久　問ふも

自來　語るも

國久　今宵の手段。

自來　黑白ともに

國久　分るであらう。

源吾　然らば御前。

國久　皆の者には、休息いたせ。

皆々　ハア、、

國久　自來也後刻。

自來　ト唄になり、國久、こなしあつて奧へ入る。
ドリヤ、そろ〳〵と練りかけうか。

トこなし。軍八、こなしあつて

軍八　ソレ喜文太、馳走の品を取替へ引替へて、ナ……心得たか。

喜文　ハツ、畏まつてござります。

源吾　イザ、拙者も休息。

軍八　某とても、暫時奧にて寛ろぎ申さう。

侍六　サア、步め。

自來　猿松めら、案內せい。

ト序の舞になり、自來也、こなしあつて、靜々と侍ひ六人に取卷かれ、後より喜文太、最前の自來也が一腰を持つて、橋がゝりへ附き添ひ入る。軍八、源吾は目禮して奧へ入る。ト暮れ六ツ、チヤン〳〵と打つ。と前なる井戸の內より破魔之助、ぶツ裂き野袴、着込み、兜頭巾、忍びの形にて龕燈を持ち、ヌツと出て、あたりへこなしあつて、奧の方へ灯を見せる。と奧より矢柄、近習の形にて出て來りて

矢柄　破魔之助さま。

破魔　高宮矢柄、今朝國久どのよりの密書到來。

矢柄　御內意の儀ござつて、城外の水拔きよりして、この空井戸へ密かに通路のこの道筋。
破魔　元來虛弱の主人義胤公、當春の御不例以來、癇火高ぶり性急短慮、稍ともすれば近習をお手討。それのみならず剩へ、團之丞が勸めに依つて、廓通ひに身持ち放埒。御諫言は耳に逆らひ、目通り遠慮の身となりたれど、如何なる不意の儀もあらんと、忍び〳〵に餘所ながら、御門外をば徘徊なし、お側隔てゝ守護の役目も、拙者が微忠。
　ト此うち忍び、上手の松の木へ種ケ島を持ち、窺うて居る。
矢柄　延び〳〵ならぬ足利の御跡目、靈光院さまよりお歸國を、お勸め申せと頻りのお使ひ。それにつけても、あの御病氣。
破魔　治すべき工風は國久どのより、密書を以て拙者へ通達。それゆゑにこそこの頃の、不快を屈せず、推しての出仕。
　トこの時忍び、破魔之助を狙ひ居るを、ツト破魔之助見て
　あれ見よ。松の茂りに、星か螢か。

矢柄　誠に。イデ。
　ト行かうとするを
破魔　イヤ、苦しうない。其方は、コリヤ
　トちよつと囁く。
矢柄　すりや、我が君へ。
破魔　ちつとも早う。
矢柄　ハツ。
　ト奧へ走り入る。此うち忍び、火蓋を切らうとするを破魔之助、手早く小柄を打つ。これにて種ケ島を取落し、續いて飛んで下り、直ぐに
忍び　うぬ、覺悟せい。
　ト切つてかゝるを、立廻つて頭巾を取り、顏を見て
破魔　さてこそ內山が家來、桐島丹下。
忍び　なにを。
　トまた切つてかゝるを、立廻つてポンと切り放す。これにて序の舞止む。龕燈にてあたりを窺ふと、いざや酒を酌まうよと猩々の三味線になり、破魔之助、よろしくあつて、チヨン〳〵にてこの道具廻る。
　返し

造り物、見付け三間の二重、緣側つき。眞中向うへ出して飾りあるべし。上手、塗り骨障子屋體、見付け金襖、橋がゝりの方、網代塀、この前、植込み石燈籠、手水鉢、この取合せよろしく、右二重眞中に自來也、返し前の形にて、銚子を枕にして寝て居る。側に小幡、吳葉、綾葉、照葉、若葉、腰元にて並よく並び居る。所々に燭臺、これに火を灯しあるべし。この見得よろしく、酒宴事にて道具納まる。

ト鳴り物かすめる。

吳葉　皆見やしやんせ。盗人どのには酒に醉つて、他愛もなう寝やしやんしたわいなア。

綾葉　ほんにマア、あの鼾を聞かしやんせいなア。

小幡　悉皆なんの事はない、長持を引くやうな、仰山な鼾ぢやわいなア。シタガ、聞えた事があるわいなア。これが世に云ふ、例への節でがなあらうぞえ。

皆々　ナニ、例への節とはえ。

小幡　ハテ知れた事、盗人の晝寝と云ふのぢやわいなア。

吳葉　何を阿房らしい。シタガ、その晝寝から追ひ通しに、ようマア寝られる事ぢやわいなア。

照葉　てもマア、罪のない事ぢやわいなう。

小幡　イヤノ／＼、あのやうに寝て居るのも、今云うた晝寝の格で、矢ッ張り當のある事ぢやぞえ。

若葉　アノ、當があるとはえ。

小幡　サア、今頃まで寝過して、大方果報を待つのであらうぞえ。それなれば、なんと皆寄つて、こそぐつて起さうではあるまいかいの。

綾葉　イエ／＼、そりや惡うござんせう。そんな事して起したら、大方腹立てるでがあらうぞえ。

照葉　さうでござんす。矢ッ張り寝さして置いた方がよいわいの。

小幡　シタガ、マア、こんな盗人を取込んで、馳走なさるる御前様の思し召し。どう云ふ事でござんせうなア。

吳葉　サア、わたし等も、とんと合點が

皆々　ゆかぬわいなう。

ト自來也、伸びをして

自來　エヽ、やかましい。耳の端でボチヤ／＼と話し聲。寝られるものぢやないわい。忌々しい。

ト起き上がりて

ヤイ、はつさいめら、臺所へうせ居らう。

小幡　オヽ、怖やの。シタガ、なんぼう其やうに睨ましや

んしても、惚れた女中に逢うた時は、大分の鹽の目で睨ましやんせうの。得てこんな人程、舌たるいものぢやわいなう。
綾葉　小幡さまとした事が、ひよかすか〳〵とした事ばつかり。シタガ、盗人様、こな様にも大方、内には
皆々　お内儀様があらうなア。
自來　エヽ、やかましい。莨盆持つて來い。
小幡　アイ〳〵。
ト莨盆を持つて行き、こなしあつて
エヽ、つッとモウ、何を問うても、受けが悪いわいなア。
照葉　それ〳〵、屑の出ぬうち、逃げるが奥の手でござんすぞえ。
若葉　サア、わたしらも共々お次へ。
呉葉　サア、皆様、ござんせいなア。
ト此うち自來也は煙草のんで居る。腰元三人は奥へ入る。小幡、後に殘り、こなしあつて
小幡　盗人様え、アノお前、淋しくはないかえ。
ト嫌らしいこなしにて云ふ。
自來　淋しけりや、どうする。
小幡　アイ、伽でもして上げうと思うて。

自來　ト凭れかゝるを突き飛ばして
エヽ、寄りあがるな。鼻けちめが。
小幡　オヽ、素氣ない。なんぼう其やうに云はしやんしても、云ふに云はれぬ味ひは、人こそ知らね乾く間もなしと、云うたところが無知らず。ア、縁なき衆生は度し難し。
ト自來也をちよつと見て
ドレ、お次へ行て、獨り寢でもせうか。
トぴんとして奥へ入る。自來也、こなしあつて
自來　先つ頃、彌彦山の麓にて、計らず手に入る古主の公達、拾ひ上げて養育なしたは、最前の侍ひ、勇源吾と云ふ者。また相役たる軍八とやら、彼もどうやら一器量ありさうに見ゆるゆゑ、二人ともに幕下に取込み、まさかの時には。フム、これもよし〳〵。先づそれよりは彼の一品のどめ所。ハテ、どうであらうな。
ト思案のこなし。和らかな合ひ方になり、奥より代々衣、禿に莨盆を持たせ出て來りて、よき所へ座につく。自來也、ちよつと見て、脇目して居る。代々衣、こなしあつて
代々　其方衆は、次へ行きや。
禿二　アイ〳〵。

ト奥へ入る。代々衣、自來也へこなしあつて、莨のみながら

代々　腰元さん達の噂で聞いた、自來也さまと云ふ盗人様は、アノ、お前様の事かえ。

自來　左樣。

代々　一樹の影、一河の流れも他生の縁。

自來　袖振り會ふも縁は異なもの、話しの伽でもせうと思うて。

代々　アイナア。

自來　傾城に盗人、品は變れど夜の商賣。ハテ、思ひ合うた。

兩人　出會ひぢやなア。

ト兩人こなし。合ひ方きつぱり

代々　風吹かば沖津白浪龍田山、夜半にや君が一人行くらん。

自來　盗人の異名を白浪とは、ハテ、優しき名をつけ居つたな。

代々　河内通ひの仇し戀路を、かこち詠みたる井筒姫、その言の葉も今は又、この代々衣が身の上と、左門之介さまに馴れ馴染んでより、女子冥加に叶ひしと、思うた甲斐も情ない、破魔之助さまのお頼みと云ひ、引くに引かれぬ義理の切端。縁は切れどもなんのマア、心の迷ひは晴れませうぞ。わたしや輪廻に迷うたわいなア。

トこなしあつて泣き入り、また氣を替へて

ア、思ふまい〳〵。心の穢れを打拂ふ、香の薫りは煩惱菩提。さうぢや〳〵。

ト胡弓入りの合ひ方。植込みの所にて蟲の音數多鳴く。代々衣、守り袋より香包みを出して莨盆へつぎ、香をきくこなし。自來也もフトこれをきいて、こなしあつて

自來　この薫りは、ムウ。

ト思ひ入れあつて、ヂッと代々衣を見て

いま燻らしたは親の形見か。但しは外より貰ひしか。

代々　サア、問はれて語るも面伏せ。わたしが實の母様は信州上田の宿屋の娘、また父様は鎌倉にて、由緒正しいお侍ひ様。旅路の夢の假枕も、度重つてわたしを身ごもり、産まれて程なく御歸國遊ばし、音信とても絶え果てしと、成人の後母様のお話し。それを苦にして遂には御病氣、今端の際の御遺言には、この一木こそ父御様のお形見、これを證據に鎌倉の、父上様を尋ねよと、くれぐ

れ仰しやつて間もなう御臨終。まだその時はやう〳〵と
わたしが丁度七つの年。それから今の母様の、手鹽に育
ちて十二の年、この越路なる新潟の、廓へわたしを傾城
奉公。苦界の中の憂き年月、送るうちにもどうぞして、
只逢ひたいは實の父樣。便り音信聞からにも、儘になら
ぬは勤めの身の上。ほんに思へば味氣ない、辛い悲しい
身の上ぢやわいなア。

トこなしあつて、しいをりとなる。

自來　ハテナア。

ト思ひ入れあつて、煙草入れより香包みを出し、我が
前の莨盆の火入れへ香をつぎ、代々衣が側へやりて

ソレ、きいて見やれ。

ト代々衣、香をきいて見て、こなしあつて

代々　こりやコレ正しく一木の名香。

自來　聞く度に珍らしければ時鳥、いつも初音の心地こそ
すれ、斯く詠じたる古歌に依りて、初音と名けしその名
木。

ト代々衣、こなしあつて

代々　わたしが所持の銘も初音。もしや由縁の

ト自來也を見る。

自來　妹、無事で居つたよな。

トこなし。代々衣、思ひ入れあつて

代々　エ、、アノ、わたしを妹とはえ。

自來　サア、斯うばかりでは合點がゆかぬも尤も。元某
は鎌倉の英勇、三好彈正長重公の家臣、尾形將監が悴、
同苗周馬寛行と云ふ者。

代々　エ、。

ト恟りする。合ひ方になり

自來　その名香こそ父の秘藏、半分つて我れに賜はり、御
病床にて我れへのお話し。いつぞや信州旅行の砌り、
フトせし縁にて女に手をかけ、程なく出産なせしは女子。
腹は變れど汝が妹、後の印と彼の名木、半を與へて歸
國なし、直さま鎌倉表へ呼び迎へ、養育なさんと存ぜし
かども、主人の手前、家中の思惑、折もあらんと逡らふ
うち、公用繁く心に任せず。然るに思はぬこの度の病、
所詮本腹覺束なし、何卒其方を呼び寄せて、兄弟の名乘
りさせ、末の事ども賴まん爲、密かに家來を上田へ遣は
し、在所搜せど母は歿り、其方とても行くへ知れずと、
歸りし家來が物語り。程なく父には御臨終。尾形の家督
はこの寛行。父に代つて主君へ忠節、盡す甲斐なき無道

の我が君。三度諫めて身退く、例しに習ひ諫め兼ね、當越後なる妙香山、この身を暫し蟄居なし、時節を窺ふ折も折、主君長重逆意を發し、矛盾の色を顯はし給ふ。この事早く武將へ達し、即時に討手を差向けられ、今合戰の眞最中と、聞くと等しく馳けつけ見れば、無慘や主君長重公、はや亂軍の中にて討死。家の子郎等或ひは討たれ、又は逃げ失せ生捕られ、悔むに甲斐なき主家の滅亡。既に自害なさんとせしが、よく／＼思へば主家の再興、行くへ知れざる主君の公達、尋ね求めんその爲に、斯く身をやつすは形寛行。さはさりながら今日前、覺えの名香所持する其方。さては親人樣の忘れ形見。腹は變れど胤は一つ。我が妹にてあつたよなア。

ト こなし

代々 エヽ、そんならいよ／＼父上は、三好の御家來、尾形將監さまでござんしたよなア。さうした事とは露知らず、お名も由緒も聞いたが初めて。それさへ今はなき人の、數に入るとはなんのその、知らで暮らした不孝の罪、お免しなされて下さりませ。ほんに思へば、不思議の緣で

自來 廻り逢うたは親は泣き寄り。

代々 兄樣。

自來 妹。

代々 よう名乘つて下さんしたなア。

ト 嬉し泣きに泣く。

自來 オヽ、その喜びは道理々々。斯く同胞と名乘りし上は、其方に、改め申しつくる仔細あり。その故は、今申したる主家の公達、何卒御在所尋ね出して、當の敵たる足利の、四海を覆さんその爲に、盜賊自來也と變名なし貪り集める金銀は、まさかの時の軍用金。然るに先頃彌彥山の谷間にて、手に入つたる水子の面體。よく／＼見れば主君の伜、合點行かずと改め見れば、右の肩先に七つの黒子、しかも七星。疑ひもなき、これぞ誠の主君のお胤。すは時こそと思ふゆゑ、短兵急に事を計り、一つの謀計設けん爲、うづ蟲めらにのめ／＼と、斯く召捕られ、この所へ來りし仔細は、足利家代々秘藏の淺綠、これを手に入れ、旗上げせん我が存念。それにつけても其方事、尾形將監が娘でないか。女ながらも仇敵、左門之介が緣を切りしも、却つて幸ひ、父への教養、この上は左門之介に騙し寄り、一思ひに刺し殺し、君父の無念晴らしてよからう。これこそは覺えの業物。

ト懷中より守り刀を出して、代々衣の前へ抛り
ソレ、それをくれるぞ。
ト代々衣、泣きながらこなしあつて
代々　悲しい事を云はしやんす。例へお主の仇敵でも、比翼と契りし殿樣に、なんと刃が當てられませうぞいなア。
ト泣く。
自來　ヤア、未練千萬。色に溺れて、父への孝を捨てる心か。
代々　ア、勿體ない、なんのさうでは。
自來　然らば左門之介を、物の見事に討取る所存か。
代々　それぢやと云うて、そんな事が。
自來　不承知なれば同胞の、緣を切らうか。
代々　サアそれは。
自來　但しは討つか。
代々　サアそれは。
自來　不孝者の名を取りたいか。
代々　サアそれは。
自來　サア。
代々　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。
自來　緣に引かれて忠孝の、道に背くか。こな不孝者めが。
トきつと云ふ。代々衣、泣き入り、いろ〳〵こなしあつて、フト心附き、短刀を取上げ、立ち上がつてこなし。自來也、これを見て
すりや、得心して左門之介を。
代々　山川の先に流るゝとちからも、身を捨てゝこそ浮む瀬もあり。
自來　フム。さもあらう。
代々　さうぢや。
トついと奧へ入る。自來也、後見送りこなし。蟲の音やみ、常の合ひ方になり、これにて自來也、こなしあつて
自來　千草にすだく蟲の聲、悉く音を止めしは、組子を伏せ置き我れを捕らん、市正めがあざとき手段。ハテ、小ざかしい。ハヽヽヽ。
トこなし。この時植込みより喜文太、捕り手の形にて十手構へ、キツと出て、自來也とちよつと顏見合し、ちやつと引込み、また衝立の後より伴作、同じ形にてヌツと出て

作作　自來也、捕つた。

ト かゝるを、居ながら銚子にて、よろしく押へ

自來　うぬらが手に合ふ盜賊樣ぢやないわい。

ト 突き放すを

作作　なにを。

ト 又かゝらうとするを

自來　すさり居らう。

ト きつと云ふ。此うち喜文太、ツカ〳〵と出て

喜文　ヤア、飛んで火に入る夏の蟲。國守の威光で岩瀨喜文太が、搦め捕らん、腕廻せ。

自來　ヤア、猪口才な蜻蛉めら。ならば手柄に搦めて見居らう。

兩人　なにを。

ト 兩人かゝるを、左右へ投げつける。喜文太、起き上がつて行かうとするを、眉間目がけ長柄打ちつける。襖の間より權平、爪作、皆々一緒になつてかゝるを、よろしく立廻つて、皆々を投げつける。序の舞烈しくなり、また皆々自來也に組みつきながら緣側へ出る。作作を投げつける。また双方よりかゝるを、左右へ投げつける。このはずみに板敷落ちて、自來也、片足踏み込むを、作作、下家より足首を捉へて

作作　ソリヤ、占めたぞ〳〵。

ト これにて上の人數、無理に押しつけうとする。自來也、其まゝ權平を投げ、爪作を捻ぢつける。喜文太、かゝらうとするを睨みつけて

自來　何を小癪な。

ト きつと見得。バタ〳〵にて、チヨン〳〵返し

造り物、見付け三間の二重、前側一面に障子たてあり、東西網代塀、よき所に手水鉢、筧より水出る仕掛けあり、よき所に左門之介、刀に手をかけ、キツとなつて居る。丈助、その外近習大勢、これを留めて居る。矢柄、下手に平伏して居る。この見得よろしく、早舞ひにて道具納まる。

丈助　若殿樣には御短慮千萬。先づ〳〵お靜まり

皆々　あられませう。

ト 此せりふのうち、道具納まる。空へ月出る。序の舞になり

左門　ヤア、留めな〳〵、目通り遠慮申しつけ置きたる破魔之助、出仕なぞとは推參千萬。手討に致す。サ、こ

れへ呼べ〳〵。

矢柄　ハッ、斯くあらんと推し、お次の間へ扣へさせござれば、先づ〳〵お靜まりあられませう。

ト此うち向うより、近習二人走り出て

近一　ハッ、申し上げまする。破魔之助お次に差し留め、出仕の儀、いろ〳〵と支へますれど、一向に聞入れもなく、我れ〳〵を押し退け

近二　推して出仕召されんと、理不盡に御前へ通らんと、以ての外の狼藉。なか〳〵我れ〳〵が手に合はず、是非この所へ參られます。

兩人　如何計らひませうな。

ト左門之介、キッとなる。皆々留めて

丈助　出仕無用と留めさつしやれ。

近二　ハッ。

ト入る。引違へて又、近習二人走り出て

近一　ハッ、破魔之助どの、代々衣太夫が云ひ譯の爲とあつて、お目通りへ來らるゝを、一向に聞入れもなく

近二　決して御前へは差出す事罷りならん、其方よりはこの破魔之助、出仕のなさんと互ひの爭論。

近一　それゆゑ我れ〳〵ども持てあまし

近二　甚だ迷惑に存じまする。

兩人　如何仕りませうな。

左門　氣儘の振舞ひ。上を恐れぬ破魔之助。苦しうない。邪魔いたさば討つて捨てい。

近二　ハッ。

ト引返し入る。戸屋の内にてバッタリ首討つ音する。これにて左門之介、ギックリとこなし。バタ〳〵にて戸屋の内より、近習を投げ出し、破魔之助、着付け上下、肩衣を脱ぎかけ、女形の切り首を持ち、片手に血刀提げ、近習大勢附き添ひ出て來る。本舞臺の人數これを見て

皆々　ヤア、破魔之助どの。

ト左門之助、これを見て、破魔之助、目がけ行かうとする。兩人留める。近習、破魔之助へかゝるを、立廻りながら引退け、本舞臺へ來る。近習皆々キッと擬勢して

皆々　御前でござる。

丈助　尾籠の眞劍。

皆々　扣へ召され。

ト此うち始終早舞ひ。

破魔　ハツ。

ト首を捨て、刀を納め、どつかと座す。鳴り物かすめる。左門之介、キツとなる。

左門　蟄居申しつけし破魔之助、目通りへ推しての推參。また諫言の申すのでがなあらう。聞く耳持たぬ。慮外者めが。

破魔　ヤア、愚か〳〵。千度百度諫めるは、臣たる者の常の習ひ。ましてや武將義尙公の、お目鏡を以て守護の役を蒙むる破魔之助。忠義の諫言耳に逆らひ、お用ひなきと察せしゆゑ、御放埒の根ざしたる、代々衣太夫に自害を勸め、首になしてこの通り。

ト切り首を取つて差しつける。左門之介、見て

左門　チエ、。

ト口惜しきこなしにて、行かうとするを、皆々留める。

破魔　先ツその如く、女が色香に迷ひ、魂ひ亂れて前後を忘ず。斯くまで愚將短才の、馬鹿に仕立てし妲妃褒姒に、おさ〳〵劣らぬ賤しき傾城。見るもなか〳〵穢らはしい。このしやツ面を、カウ〳〵〳〵。

ト扇にて首を打ち据ゑ、打ちつけて

サア、斯う打ち据ゑたるが當座の刑罰。とくと骨身にこたへましたか。

トきつと云ふ。左門之介、いろ〳〵無念のこなしあつて

左門　ヤア、云はして置けば樣々の雜言過言。緩怠とや云はん無禮とや云はん。うぬ、臣下の身として、主の非をあげるのみか、餘が愛女代々衣太夫に自害を勸め、我意の有り條、言語道斷不屆き至極。目前の仇、生けては置けぬ。イデ、この世の暇取らしてくれん。うぬ。

ト行かうとするを、また皆々留めて

矢柄　こは御短慮千萬。お叱りは格別、お手討とはあるまじき御振舞ひ。

丈助　ソレ、破魔之助どの、早くお次へ

皆々　扣へさつしやれ。

破魔　イヤ、扣へませぬ。

左門　なんと。

破魔　義に依つて命を果すは、武士たる者の望むところ、お手討とござらば、イザ、御勝手次第に遊ばせ〳〵。

左門　オヽ、云ふにや及ぶ。只一討ちに。

ト皆々引退け、切つてかゝるを、よろしく留め

破魔　待つた我が君。
左門　コリヤうぬ、手向ひ致すか。
破魔　おんでもない事。人間五常の道に背きし木石魂ひ、腐りし刃物では誠の武士は、いつかな〱。歪んだ根性矯め直すまで、滅多に命は落し申さぬ。
左門　まだ〱。イデ、その悪口を。
　ト振り解き、切りつける。破魔之助、掻い潜り立廻り。皆々支へるを引退け、また切つてかゝるを、破魔之助左門之介を引きつけ
破魔　及ばぬてんがう、取措かつしやれ。
　ト突き放すを、また直ぐに
左門　その舌の根を。
　トいらつて切つてかゝる。皆々捨ぜりふにて留める。破魔之助を無理に下手へやる。破魔之助、どつかと下に居て
破魔　ハヽヽ、狼藉者、騒ぐワ〱。
　トせゝら笑ふこなし。
左門　うぬ。
　トまた行かうとするを、皆々留めて
矢柄　逆上すれば御身のお障り。先づ〱

皆々　お鎮まりあられませう。
　ト皆々宥める。左門之介、胸を叩き、息切れして、動気鎮まらぬこなしにて
左門　水々。
矢柄　ハツ。
　ト矢柄、筧の側へ行き、筧の詰めを抜く。本水出る。柄杓にてこれを受ける。此うち近習皆々左門之介を留めて居る。破魔之助、始終左門之介をヂツと見詰め居る。此うち矢柄、水を持つて来て差出す。左門之介、取つてグツと一口呑む。柄杓を捨て、また破魔之助を見てキツとなる。皆々留めるを一々引退け、破魔之助へ切つてかゝるを、掻い潜つて後へ廻りて、後よりしつかと抱へて
破魔　殿。
　ト左門之介、振り切らうとあせるを、キツと抱き留め、動かせぬこなし。此うちだん〱左門之介、腹中へ水の廻りしこなしあつて、ヂツとなる。破魔之助、これを見て
　お心は鎮まりましたか。
　トこなし。

左門　なんと。

トこれにて見附け障子一面に引拔く。國久、立ち身にて居て

國久　今ぞ難病御平癒と相見ゆる。破魔之助、大儀々々。

破魔　ハッ。

ト落ちてある鞘を取上げ、左門之介へ渡す。

國久　そこは端近。先づ〳〵これへ。

ト合ひ方になり、左門之介、刀を納め、二重へ上がる。小姓、褥を敷く。矢柄、丈助、近習皆々左右へ並ぶ。左門之介、こなしあつて

左門　一滴の冷水、五臟六腑に廻るや否、怒氣鎭まりて忽ちに、恰も醉の覺めたる心地。ハテ訝かしい。

國久　ホ、ウ、その御不審な御尤も。元聰明にはましませども、當館へお入りの後は、性急短慮の御病惱。つくづくこれを考ふるに、虎肝と名け、虎の生肝に人參を交へ用ひる時は、忽ちに心を破つて、肝の臟に痼疾短氣の難病發する由、博物志にこれを記す。察するところ佞人輩、諸人に君を疎まさん爲、斯く計らひしゆゑならんと、察せしゆゑに某が、心氣火動を鎭むる一藥、唐土隋の陽、市廣王の庭前に、始めて生ぜし西天草、百病治するの即効ある由、その後雲間と云へる唐人、干草となして日本へ持ち渡りしより、信濃の國園原山に種を殘す。我が朝にては箒木と云ふ。ありとは見えて手に入らぬ、古歌に詠ぜし奇代の藥草。然るにこの頃新參たる、勇源吾が信州にて、計らず猛獸を組み伏せしも、怒氣を散ずる藥草を所持せし奇特。さりながら、これを用ゆるその時は、忽ち平癒疑ひなしと、典醫の指圖。その一藥を服するには、自然と心に怒りを發し、臟腑を破つて逆上の、その折ならでは驗しなく。

破魔　さるに依つてこの破魔之助、御赦免は得ざれども、推して御前へ出仕なし、諫言のうち惡口雜言、心に思はぬ慮外の段々。案に違はず御短慮の、日頃に增る呼吸の得給ひ、御咽喉乾かせ詰められ給ふ。折こそよけれと一滴の、筧にしつらふ右の良藥。斯く計らひしもこの場の即効。

國久　心盡しも空しからず、君の難病今日今宵、御平癒の遊ばされしは家中の安堵。破魔之助にも、さぞ喜ばしう思はれん。某とても、滿足いたしてござる。

矢柄　國家の大幸、足利の御長久、唯々

皆々　おめでたく存じ奉りまする。

左門　方々の心勞、祝着に思ふぞよ。さはさりながら代々衣太夫、殺害までには及ぶまじもの。これぞ一つの殘念殘念。

破魔　ハツ、恐れながら代々衣が最期は、全く某が無理に勸めし事にはあらず。仔細と申すは先達て、亡び失せたる三好が家臣、尾形將監が娘なる由、添はれぬ仇敵。血筋を引きたるその身を悔み、孝と操を全うせん爲、女に稀れなる健氣の生害。とくと見聞き仕る。

ト切り首を取上げて、塵打ち拂ひ、よき所へ直して

お云ひ號けたる玉琴さま、御縁組みの一條を、首尾よく調へ我が君に、御歸國いたさせ奉らん爲、事を分けての拙者が頼み。引くに引かれぬ義理になり、心に思はぬ愛憎盡かし。これと申すも君への貞操。傾城に誠なしとは申されぬ。天晴れ出かせし傾城代々衣。未來の御縁はせめてもの追善御供養。

左門　すりや、つれならうもてなせしは、予を大切に思ひしゆゑか。出かした代々衣。未來は必らず一つの臺。半座を分けて待つてくれるぞ。とは云ふものゝ不便の有樣。

ト憂ひのこなし。バタ／＼にて橋がゝりより爪作、返し前の形にて走り出て

爪作　ハツ、申し上げまする。盜賊自來也、縁側の落ち穴へ陷る所を、磐石にて捕つて押へ、土中へ落つて出る所は牢屋の內。難なく虜に仕つてござりまする。

國久　手だれの曲者、逃げ出さんも計り難し。番の儀嚴しく警固いたせ。

爪作　ハツ、畏まつてござります。

ト引返し入る。

國久　この上は一刻も早く、御歸館あつて然るべう存じまする。ソレ、近習の者ども、鎌倉へ御出立。お供の用意申しつけてよからう。

近習　ハア、。

左門　破魔之助、女が死骸、よきに葬り、後より參れ。

破魔　ハツ、承知仕つてござります。

左門　國久、健固で。

國久　君にも益々御安泰。

左門　さらば。

ト合ひ方になり、左門之介、近習附き添ひ、丈助は破魔之助より首を受け取り、續いて奧へ入る。國久、眞中へ居直る。四ツの時計鳴る。國久、こなしあつて

國久　最早亥の刻。フム。

ト こなし。奥より源吾、出て來りて

源吾　不思議に手に入る藥草にて、我が君樣の御用に立ちしは、冥加にあまる拙者が大慶。如何ばかりか喜ばしう存じ奉りまする。

國久　オヽ、さこそあらん……破魔之助どの。

破魔　ハッ。

國久　淺緑の劍紛失の一儀、存ぜし者は御邊ばかり。然るに先刻入込みし盜賊自來也、彼の者劍を乞ひ受けんと、望みをかくる不敵の魂ひ。もしや三好の殘黨ならんと、思ひながらも差當る、劍の紛失の申し譯、君の御發駕その先へ、詮議猶豫の日延べの願ひ。某直さま鎌倉へ、直々願ひを上げん爲、發足なさんが、さりながら、心にかゝるは後の一條。某歸國の其うちに、何卒御邊當地に殘り、劍の在所、萬事の手配り、偏へに頼む、破魔之助どの。

破魔　ハッ、その儀は氣遣ひ召さるゝな。身不肖ながら破魔之助、當地にあつて粉骨碎身、草を分つて詮議仕出し、やがて吉左右お聞かせ申さん。

國久　それ聞いて、某も安堵仕るて……イヤナニ、勇源吾。

源吾　ハッ。

國久　斯く主從となりしも、僅かの時日にありながら、其方が忠心天に通じ、計らず君の御難病、平癒なせしは西天草の奇特。汝が大功これに過ぎず。今こそ改め願ひの如く、暇を遣はす。父が敵に廻り逢ひなば、本意を達し、忠孝ともに全く致せ。心得たるか、勇源吾。

源吾　ハッ、こは有り難き御厚恩。念頭ござれば仰せに從ひ、お暇頂戴。

國久　まつた自來也が刑罰の儀は、鎌倉どのゝ御沙汰に及ばん。事急なれば直さま發足。

破魔　劍の詮議。

源吾　敵の行くへ。

兩人　路次を分つて

國久　馬引け。

ト 内にて供廻り大勢

大勢　ハア、。

ト 橋がゝりより乘馬を引き出る。矢柄も出て來りて

矢柄　すりや、御前には。

ト 此うち源吾、破魔之助、身拵らへする。

國久　火急の發足。後供を申しつけい。

矢柄　ハッ。
ト走り入る。此うち國久、馬に乘る。
破魔　然らば此まゝ。
源吾　拙者も出國。
ト行かうとするを敵役諸士四人、窺ひ出る。
敵四　うぬ、覺悟せい。
ト二人づゝ双方へかゝるを、立廻つてよろしく留め
源破　惡事の荷擔人。
國久　切つてしまやれ。
兩人　ハッ。
ト見事に双方、ポン／＼と切る。これを見て
國久　フム。見事。
ト感心のこなし。
兩人　おさらば。
國久　さらば。
ト國久は馬に鞭をあて向うへ、源吾、破魔之助は東西へ、三方よろしく別れ入る。ト合ひ方になり、下手柴垣より軍八、ツカ／＼と出て後見送り、キッとこなし。奥より團之丞、腹卷き、股立ち、鬘鉢卷にて、ツカ／＼と出て、軍八を見て

團之　軍八。
軍八　團之丞さま。
團之　我が大望の時節到來。今宵の一擧。市正は多勢を以て、直さま追ひ討ち、引ッ括つて討ち取る手筈。ハテ、心地よき手番ひぢやよな。
軍八　まつた勇源吾と云ふは、喜樂齋めが忰とあれば、生け置く時には後日の妨げ。
團之　殊に彼の者、西天草を所持する上は、これを奪ひ取り、汝が働らき。
軍八　大手の門より間道廻つて、先へ駈け拔け、平幡の野原で待ち伏せ、物の見事に。
團之　オ、サ、夜詰めの勝負は長柄が屈竟。ソレ。
ト長押の手鎗を取つて渡す。軍八、取つて鞘を外し、引きしごき、キッと構へ、空を見て
軍八　一天曇つて闇夜も幸ひ。
團之　もし手にあまらば、加勢を以て。
軍八　云ふにや及ぶ。やがて吉左右。
團之　首尾ようしやれサ。
トこの時、ツカ／＼と侍ひ出て
侍ひ　曲者、うぬ。

軍八　トかゝるを、石突きにて跳ね返し、よろしく押へて
團之　オヽサ、合點。ちつとも早う。
軍八　然らば此まゝ。
ト此うち侍ひ、起き上がつて
侍ひ　やらぬ。
ト又かゝるを、見事に鎗にて突き倒し、向うを見て
軍八　さうぢや。
ト向うへ走り入る。團之丞、見送り、こなしあつて
團之　ハレ、心地よやなア。
トにつたり笑ふ。この見得よろしく、チョン／＼返し
造り物、見付け、二間餘り牢屋、後に内より碎く仕掛け。うしろ黒幕張りあり、牢屋の東西高塀忍び返し、上手に番所行燈、下手に長柄突棒、刺叉など飾りあり、上手寄りに松の立ち木、すべて牢屋の見得。權平、爪作、番人にて眠り居る。常の合ひ方。割り竹、鈴の音にて道具納まる。
ト喜文太、橋がゝりより、法被、股立ち、相印の提灯持ち出て來りて

喜文　ヤイ／＼、其方達は如何いたしたものだ。牢屋番を致しながら、又どぶさるとは怪しからぬ事だ。コリヤ、目を覺ませ／＼。
權平　オヽ、これは喜文太どのか。夜廻りの役目、御大儀御大儀。
爪作　イヤモウ、強力無双の自來也でも、騙すに手なし。斯うした所は正眞の、地獄落しも同然でござるての。
權平　そりやその筈、鐵の鎹を以て、大丈夫にしつらうたれば、拔け出でん事思ひも依らず。
爪作　サア、そこを思うて氣をゆるし、ツイとろ／＼とやつたのでござるて。
喜文　イヤ／＼、さうでない。油斷大敵、既に今朝三寸繩にて縛し上げたを、何の苦もなく引き切つたところ、なかなか人間業とは思はれず。斯様な科人は、ちつとも早う息の根を留めたがよいての。
爪權　それがいつち上分別ぢやて。
トばた／＼にて橋がゝりより伴作、早枝を引立て出て來りて
伴作　女郎め、動きあがるな。
早枝　ア、コレ、狼藉しやると、爲にならぬぞえ。

喜文 何を小癪な。新潟の傾城、口說き落して取持ちくれよと、軍八どのゝお頼み。
伴作 夫と云ふは勇源吾、四の五と云はゞ源吾諸とも、この世の暇を取らしてくれんが、それでも否か。
早枝 サアそれは。
喜文 軍八どのゝお心に、應と云うて從ふか。
早枝 サアそれは。
伴作 但しは息の根留めてくれうか。
喜文 サア。
三人 サア〳〵〳〵。
ト早枝、逃げうとするを、兩方より取卷いて
喜文 返事はドゞ
兩人 どうぢや。
トきつと云ふ。
早枝 エ、口惜しい。
トこなしあつて、口惜しき思ひ入れ。この時内にて
大勢 エイ〳〵オ、。
ト遠責め打つ。喜文太、こなしあつて
喜文 あの貝鉦太鼓は。
トこなし。上手より團之丞、弓矢手挾み、出て來りて

團之 オ、、皆の者、これに居つたか。
喜文 團之丞さま。
團之 兼ねての手筈圖に當り、家中を討取るあの貝鉦。市正めは鎌倉發足、追手を以て途中に於て、討取る手段は袋の鼠。追ッつけ吉左右知らすは治定。まつた殘れる者共めは、遠矢を以て一々に、射留めて置けば大願成就。當北國は身共が押領。思ひの儘に我が計略。
喜文 お出かし召された團之丞さま。まつた當家の重寶たる、摩利支天の黄金佛、この喜文太が所持いたせば、これを以て家督の御教書。
伴作 天晴れ手番ひ上々吉。猶この上にも足利家、數代傳はる淺緑、彼の御劍を奪ひ取る工風が。
團之 その儀も疾より盗み取り、肌身離さず所持せしかども、市正めが密かの詮議。それゆゑにこそ、あの土中へ。
兩人 すりやアノ疾より、あなた樣が。
團之 オ、サ、腹心たるわれ達にさへ、包み隱すは軍法の奥の手。所存を漏らさぬ身共が工風。
兩人 天晴れ妙計、流石の御主人。
喜文 それにつけても兎に角に、面倒なるは勇源吾め。

作作　出凶せしとは聞いたれど
權平　彼奴生け置いては後日の妨げ。
爪作　次手に討ち取る御思案が
皆々　ござりますかな。
團之　イヤ、その儀もぬからぬ團之丞。軍八に申しつけ、城下のはづれ平幡の、野原に待ち伏せ、たつた一討ち。
早枝　エヽ。
　ト悔りのこなしにて、向うを見る。
團之　猶この上にも、ぬからぬやうに心を附けよ。
皆々　ハッ、畏まつてござりまする。
早枝　エヽ、云はうやうなき大惡人。先づ差當る夫が身の上。斯う云ふうちも心元ない。オヽ、さうぢや。
　ト行かうとするを、皆々隔て
喜文　イヤ、大事と聞いたその上に、軍八どのゝお賴みと云ひ
作作　滅多に逃がさぬ。さう思へ。
　ト早枝を繩にて縛り上げる。此うち團之丞、刀の小尻にて松の本を掘り、白木の箱を取出し、中より袋入りの劍を出し
團之　これこそは淺綠の御劍。エヽ、忝ない。
　ト戴く。此うち丈助、後より窺ひ出て
丈助　さてこそ御劍。それを。
　ト取りにかゝるを右の劍にて、ポンと拔討ちに切る。雨車、風の音烈しく、番所行燈の灯、仕掛けにて消える。皆々こなしあつて
皆々　これは。
團之　俄の車軸は、不淨を拂ふ劍の威德。
　ト刀を拭ふ。雨車少しかすめる。刀を鞘に納める。
　一先づ館へ。
皆々　そんなら直さま。
團之　ソレ、女めを引立てい。
皆々　ハッ。サア、立たう。
　ト早枝を引立てにかゝる。遠責め烈しく、矢張り雨車にて、正面の牢屋、メリ〳〵と云ふ。これにて皆々こなし。自來也、右牢を內より碎き出て、皆々と立廻つてのめらす。團之丞、寄らうとするを、右の劍を引ッたくりて投げつける。これにて團之丞、ウンと悶絶する。自來也、手早く早枝が繩を解いてやる。雨車かすめ、靜かに遠責めばかり殘る。早枝、自來也を見て、こなしあつて

早枝　ヤア、こな樣は。
自來　不審は尤も。盗賊自來也と云ふ者。汝夫婦が拾ひ取り、育て上げたる水子こそ、我が爲には主人の公達。
早枝　エヽ。
自來　養育の恩、報ずべき時節もあらんが、それよりは先づ差當る、源吾が安否、此まゝ直ぐに。
早枝　心も急けば、お禮はゆるりと。
　ト行かうとするを
自來　イヤ待て。路次の用意。
　ト伴作が差添取つて
　ソレ。
　ト早枝に渡す。早枝、取つて
早枝　エヽ、忝ない。
　ト戴き、腰に差して身拵らへする。
自來　ちつとも早う。
早枝　ハイ／＼。さうぢや。
　ト向うへ走り入る。團之丞、心附き、起き上がつて
團之　ヤア、憎くい盗賊。牢屋と云ひ剰さへ、劍を奪ひ取る烏滸のしれ者。サア、尋常にその劍、元へ返さば見遁がしくれう。もしあらがはばこの世の暇。キリ／＼劍を渡し居らうぞ。
自來　ハヽヽヽ、ほざいたり毛二才め、あざとい手段にうまうまと、乘つたる顔にてこの獄屋、踞んで居たは劍の在所、ほざかさんが爲ばつかり。物した物を物するは、盗人冥利常の世渡り。手間費しに命は取らぬ。道押ツ開いて通し居らうぞ。
團之　さう云ふうぬを。
　トちよつと立廻つて團之丞を突き退け、行かうとする。と橋がゝりより捕り手大勢、バタ／＼と出て來りて
捕手　動くな。
　ト取卷く。自來也、見て、肩にて笑ふこなし。
團之　者ども、そりや。
捕手　ハツ。捕つた。
　トこれより立廻りになり、また雨車、風の音になり、皆々を取つて投げる。此うち喜文太、伴作、權平、爪作、皆々心附いて、熊手、刺叉にて捕へにかゝる。自來也、劍を腰に差し、立廻つて皆々拉がれ、血を吐き死ぬる。雨車の音止む。此うち團之丞、上手へ逃げて入る。矢張り遠責め。これを見て

自來　馬鹿め。

ト行かうとするを爪作、起き上がつて又かゝるを、毆り倒す。顎はづれ、ウンと反る。續いて伴作、權平、かゝるを伴作を膝に組み敷き、權平を締める。權平、目の玉飛び出る。喜文太、同じく組みつかうとするを、片手にて當てる。ウンと云うてタヂ／＼と後へ寄り、番所行燈へ轉げかゝる。但し繪面通りよろしく皆々悶絕する。自來也、ヂロリと見返るをチョンと木の頭。肩にて笑ふをキザミにて、この仕組みよろしく　幕

ト後本釣り鐘、道具出來次第、次の幕明くる事。

造り物、一面の淺黃幕、板松のあしらひ、この見得よろしく、矢張り本釣り鐘にて、道具出來次第幕明く。

ト向うより五太夫、傳助、着付け袴、白襷、鉢卷、素綱にて、龕燈持ち出て來る。少し後より銀平、角藏、同じ形にて出て來りて、花道よき所にて

五太　銀平どのでござるか。

銀平　さ云ふ貴殿は五太夫どのか。

傳助　何れも御大儀千萬。して軍八どのには、何れにござるな。

五太　イヤ、軍八どのには、疾より彼の所に待つて居召さるでござる。それにつき我れ／＼、斯く手分けを致し、この邊を徘徊いたすも、軍八どのゝお賴みばかりでござらぬ。團之丞さまよりの仰せつけ。

銀平　何卒勇源吾めを、物の見事に討ち取る手筈。必らず共にぬかり召さるな。

角藏　さりながら、彼奴も名に負ふ一騎當千。武藝なども鍛錬いたし居れば、なか／＼我れ／＼どもが手には、合ひ憎うござらうての。

五太　イヤ／＼、その儀はお氣遣ひ召さるな。左樣な時にはこの一品、煎砂を玉子の中に仕込み、これを以て面體目がけ眼潰し。さある時には盲目同然。

傳助　例へ如何ほど働らくとも、討取らん事手裏にあり。必らず後れを取り召さるな。

角藏　イカサマ、天晴れの御計略。それ承つて我れ／＼も、一つの安堵。

銀平　猶この上にも臨機應變、計略の圖を外さす

五太　何かの手段は木蔭に於て。

銀平　申し合せの仕らん。イザ、何れも。

二人　先づ〳〵。

ト皆々上手へ入る。本釣り鐘、一セイになり。返し造り物、一面の草土手、うしろ五段ばかり並木の松、奥深に飾る事。眞中に木地の燈籠、火を灯し、舞臺先、東西、戸屋口三方とも板松を突き出す。すべて城下外れ、廣野の見得よろしく、平舞臺眞中に源吾、旅の形にて、侍ひ二人を取拉ぎ居る見得。五太夫、傳助、銀平、角藏、後板松の側に窺ひ居る。この見得よろしく、バタ〳〵、本釣り鐘、三重上げにて、道具納まる。

〽次第なり、平幡村の松原に、多勢を屈せぬ源吾が働らき、勇ましくも又目覺ましゝ。

源吾　ヤア、小ざかしき佞人輩。軍八に荷擔の者ども、我れに遺恨を差挾み、待ち伏せのして討たんとは、片腹痛き腰拔け侍ひ。ならば手柄に、討取つて見居らう。

侍皆　細言云はずと、くたばつてしまへ。

〽爰の松影、彼處の茂み、顯はれ出づる一味の多勢、用意の煎り砂源吾が眞向、眉間に當つて飛び散る砂石、眼暗んでたぢ〳〵〳〵。

源吾　ヤア、我れ一人に卑怯の振舞ひ。多勢を以て圍むと云ひ、目潰し行ふ未練千萬。例へ兩眼くらむとも、やはかやみ〳〵討たれんや。寄らば一々撫切りぢやぞよ。

五太　面倒な。疊んでしまへ。

皆々　合點ぢや。

〽云ふ間あらせず左右より、無法の切尖手練の太刀筋、只一人に切り立てられ、途を失ひて見えけるが、斯くと見るより軍八は。

ト此うち皆々立廻り。軍八、松影より出て、源吾が懐へ手を入れ、守り袋の西天草を取らうとする。源吾、渡すまじと紐を持ち取り合ふ。五太夫、切り込む拍子に、守り袋の紐切れて、軍八の方へ守入る。

〽有無を云はせず取り出す藥草、渡さじものと爭ふ兩人、打込む太刀先、命の瀬戸際、ふつゝと切れし守の紐、この世の縁も切り立てられ、叶はぬ免せと多勢は、逸足出して逃げ散つたり。

源吾　卑怯者め。返せ〳〵。

ト行かうとする後より、軍八、手鎗にて突く。源吾、振返り、立廻つて、キツと留まり

軍八　如何に源吾、武術自慢の其方でも、軍八さまがお手の内。なんと骨身に堪えたであらうが。

源吾　何意趣あつて騙し討。なぜ尋常に勝負せぬ。近頃以て未練の振舞ひ。

軍八　イヤ、未練でない、この軍八、大望のある大事の身の上。それにつけてもらぬが一命、生け置く時は後日の妨げ。不便ながらも娑婆の引導。細言云はずと、くたばつてしまへ。

〽また突きかくる上段下段。飛びしさつて發矢と留め。

源吾　大望などとは及ばぬ企み。さう云ふうぬから、この世の暇。

軍八　なにを。

ト床の合ひ方になり、兩人立廻り。此うち軍八、度々切りつけられながら、疵の附かぬこなし。着付け所々切れる事。源吾、けしとむ所を疊みかけて、また突く。本釣り鐘。

〽脊骨をぐつと手練の穂先、無念々々とあをち死、無慘と云ふも類なき。

ヤレ／＼、餘程骨折らし居つたわい。それにつけても今の場合。幾度となう切りつけられしが、その度毎にこの如く、衣類は元よりずた／＼に、裂き破られしに、この身には、かすり手一つも負はぬと云ふは。フム。

トこなしあつて、我が體を見る。

〽思案に落ちざるばかりなり、以前の守にキッと目を附け。

トこなしあつて、最前の守を出し見て

傳へ聞く西天草は、世にも稀れなる良藥なれば、奪ひ取らんと思ふゆゑ、僅か一人の源吾めに、一味徒黨を語らひしも、何卒首尾よくこの藥草、我が手に入れん爲ばかり。まつたこの一藥を所持する時は、常期ならず死したる者は、今目前に稀代の不思議。ハテ、靈草もあればあるものだなア。

〽初めて知つたる藥草の、奇瑞は茲に著し。

かゝる奇藥の手に入ると云ひ、いつぞや彌彦山にて、喜樂齋めを打ち放し、今また忰源吾めを返り討。餘ッぽど運の強いと云ふは、これぞ武道の開くる瑞祥。この上は、先づこの身の納まり。どうしたものであらうぞ。

ト思案のこなし。此うち橋がゝりより四人の敵役、皆皆出て來りて

五太　軍八どの

皆々　まんまと首尾よう參りましたな。
軍八　オヽ、何れも御苦勞。夜明けぬうちに、一先づこの場を。
皆々　心得ました。
軍八　早くござれ。
皆々　おさらば。
ト東西へ別れ入る。
〽別れ〳〵に落ちて行く、後に軍八只一人、とある岩根に腰打掛け、思案の煙草仇し野の、煙と消えし夫鳥と、いざ白露を踏み分けて、獨りたど〳〵女房早枝、歩み惱みて立ちどまり。
ト一つ鉦入りの合ひ方になり、向うより早枝、前幕の形にて、一腰差し出て來りて、花道にて
早枝　エヽ、折も折とて眞の闇。このマア暗い事わいなア。その上、後の茶店から、怪しからぬ胸騷ぎ。もしや夫源五郎どのゝ、お身の上ではあるまいか。アヽコレ、心がかりな事ではあるぞ。
〽足もしどろに道芝の、躓く石も三世の緣。
ト本舞臺へ來て、死骸に躓き
オヽ、これはしたり、わたしとした事が、滅相な事いたしました。どうぞお免しなされて下さりませ。ちつと心急きにもござります上、殊には明りがござりませぬに依つて、思はぬ麁相を致しましたわいなア。シタガ、マア滅相な、往來に寢て居ると云ふ事か……ハヽン、大方酒にでも醉はしやんしたのかえ。但しは又、病でも發つたのかいなア。何にしても、門中に寢ると云ふ事が。
〽定かにそれと燈籠の、暗き灯影に透し見て。
ヤア、こりやこちの人、源五郎どのか。
〽ハツと驚ろき駈け寄つて、引起して抱きしめ。
源五郎どのいなう。衣重でござんすわいなう。
〽呼べど叫べどその甲斐も、冷え凍えたる夫の死體。
此やうに云うても答へのないは、もう絆が切れたかいなう。ハアヽ。
〽餘りの事に淚も出ず、立つたり居たり只うろ〳〵、前後しどろに見えけるが、軍八そろ〳〵立ち寄つて。
軍八　お衣重、源吾を殺され、さぞ悲しからうな。
早枝　ヤア、さう云ふ聲は。
軍八　イヤ、おれぢや。鹿野苑軍八ぢやわやい。
〽聞くよりきつと詰め寄つて。
早枝　フム。其方が爰に居るからは。わたしが事を根に持

つて、さては源五郎どのを。

軍八　オヽ、好い推量ぢや。麻績の里に居る時から、ぞつこん惚れて居たこの軍八。喜樂齋を勸めて、我れを新潟へ賣つたも、また左門之介をそゝのかし、身請けさしたも皆我が爲す業。これと云ふも、どうぞ首尾よう口說き落して、抱いて寢たい身共が望み。ところで思はず開いたあの源吾、われが男と知つたゆゑ、殺らしてしまふはわれへの心底。いろ〳〵苦勞すると云ふも、われゆゑにするこの軍八。今日から後家のわれが身の上。後家と聞いては猶好もしい。四の五の云はずと今爰で、日頃の思ひ晴らさしてくれよ。コリヤ早枝、どうぢやぞいやい、どうぢやぞいやい。

早枝　エヽ、云はうやうない人非人めが。聞くもなか〳〵穢らはしい……コレ、こちの人、氣遣ひしやしやんすな。女子でこそあれお前の敵、この場を去らず討取つて、修羅の妄執晴らさせまする。おのれ軍八、覺悟しや。

〽用意の一腰拔くより早く、切り込む利腕しつかと捉へ。

軍八　猪口才な刃物三昧。シタガ早枝、わりや惡い料簡ぢやぞよ。ようマア物を思うても見い。阿房力の源吾めでさへ、なんの苦もなう打ち殺した、この軍八さまだ。それに女郎の分際で、蟷螂が斧、けち太い。及ばぬてんがうさらすない。

〽立ち蹴にはつたと蹴飛ばせば、むつくと起きて。

早枝　エヽ、憎さも憎しその廣言。せめて一太刀なりと。

〽眉間目當てに切りつけるを、ひらりとかはして、しつかと押へ。

軍八　ヘヽ、そんなで行くのぢやないわい。ヤイうぬ、いよいよおれを切る氣か。こりや面白い。おれを切るならどこを切るのぢや。爰を切るか。サア〳〵切れ〳〵。

〽ひやうま討つたる面魂ひ、憎さに躍り上がり飛び上がり、切つても突いてもこは如何に、衣服ばかりは切り破れ、只鐵石の如くにて、呆れ果てたるばかりなり。

なんと、どんなものぢや。名作でも名劍でも、しぶり一つ剝けはせんぞよ。サア、これぢやに依つて得心して、おれに從うたがよいわい。マア、ちよつと手附けに、ドレ。

〽ひつたり抱きつく傍若無人、石を摑んで打つ礫、はつしと當つて燈籠の、灯火消えて眞の闇、きつくり胸へ差込む癪。

ヤア〳〵、なんとした〳〵。
早枝　ア、コレ、折の悪い持病の癪、手足絡んで働らかれず。夫の敵討たぬのみか、やみ〳〵姿で返り討に、非道の刃に消え行くこの身。思へば〳〵口惜しい。
軍八　なんぢや、癪が發つたのか。ヤレ〳〵、可哀さうに。何も案じる事はないぞよ。ハテ、金輪際惚れて居るこの軍八さまぢや。返り討にしてよいものか。奈落の底までも口說き落して、抱いて寢る料簡。シタガ、その死太さでは、どうで一應では得心すまい。オヽ、それ〳〵、待て待て。コリヤ、ぐにや〳〵するない。
〽抱へをほどきぐる〳〵卷き、並木の松に縛りつけ。
サア〳〵、しつかりとしてよう聞けよ。われが舅の喜樂齋のひんこ親仁めが、新潟からの戻り道、彌彦山の山中で、出ッくはしたるこの軍八。われが身の代奪ひ取り、親仁めは攫み殺し、餓鬼めは谷底へ蹴飛ばし、身の代は着服して、その金で身の廻りを拵らへて、椎津家へ有りついたのぢや。併し、親仁と云ひ悴源吾めまで、おれがお世話でこの世の苦患、救うてやつたその代り、われが身の代にて軍八が、お役に立つも何ぞの因緣。これが卽ち惡緣契り深しの譬へぢや。オヽ、イヤ、その通り、又いざこざ吐かしや一生懸命、この場を去らず息の根を留めてくれるが、それでも否か。早枝、返事はどうぢやぞいやい。
早枝　さては舅御の敵と云ふも、軍八おのれであつたよな。チエ、知らなんだ〳〵。夫が生ある其うちに、さう云ふ事と露ほども、知つた事なら兎も角も、又この仕儀にもなるまいもの。エヽ、口惜しい、殘念なわいなう。よし〳〵、例へこの身は切り刻まれ、ずた〳〵になるとても、無念の凝つたる女子の一心、生き代り死に代り、其方をおめ〳〵安穩で置かうと思ふか。エヽ、恨めしい。
〽口惜し涙恨み顏、血走る眼のすさまじき。
軍八　ハテ、執念な事吐かすわい。これ程に事を分けて、大事の事まで打明けて、心底見せても得心せぬからは、不便ながらも生けては置かれぬ。覺悟いたせ。
〽目先へ突き出す氷の刃。
早枝　殺さば殺せ。とても亡き身と覺悟のこの身。とは云ふものゝ、思へば〳〵。
ト泣く。軍八、こなしあつて
軍八　サア、命が惜しからうがな。それぢやに依つて得心

さらせ。色よい返事してくれやい。
早枝　エヽ、否ぢや／＼。早う殺しやいの。
軍八　よいワ。これ程までに口説いても、得心せすば望みの通り、この世の暇このだんびら。おれが體には立たねども、われが體の切れ味は、例して見せう。これを見い。
〽小腕高股一寸二寸。
ソレ、どうぢや、痛からうがな。オヽ、苦しからう。サア、苦しくば心に隨へ。否と吐かしや、この通り。
〽五輪五體を明きまなく。
サア、どうぢや。此やうに苛なんでも、わりや得心せぬか。人我れに辛ければ、我れ又人に辛しの譬へ。可愛さ餘つて憎さが百倍。思ひ知らしてくれうわい。
〽切り苛なむは牛頭馬頭が、地獄の苛責目前の、苦痛につれてせきのぼす、息もかよわき疵所の痛み、頼み少く見えけるが。
ソレ見たか。これが否さにいろ／＼と、詞たらしてこましたに、われが得心せぬばつかりで、此方も餘儀なう云ひがゝり、一も取らす二も取らず、あつたら者をむざむざと、殺すは餘ッほど惜しいもの。コレ、どうぞ仕様が。

オヽ、あるぞ／＼。切つても突いても疵の附かぬ、不思議の藥草西天草。こいつを持たしたら萬に一つ、甦へらぬと云ふ事はあるまい。何をするも物は試し。オヽ、さうぢや。ドレ／＼。
〽取出す守、早枝が懷。
ト守を取出し、松の露を手に受け、口に含み早枝が額へかけ、守を持たし、介抱するこなし。
〽實にも三國傳來の、奇藥の驗目、顏振上げ。
早枝　エヽ、恨めしい軍八。思へば／＼口惜しい。
軍八　そりやこそな／＼。
早枝　苦痛を見るが面白いか。一思ひに殺し居れやい。
軍八　オヽ、面白い／＼。滅多に殺さぬわれが體。例へ何遍息絶ゆるとも、源吾が所持せし西天草、我が手にあれば生けては殺し、また殺しては甦へらし、得心するまで苛なむ料簡。今われに渡せばその通り、息吹返す稀代の妙藥。最前われがだんびらで、切つても突いても通らぬは、この藥草を所持するゆゑ。刃物は愚か二つ玉でも、滅多に通らぬ鐵壁同然。なりや大概で思案を極め、この軍八に抱かれて寢い。否と吐かせば、カウ。
〽守取上げ切り苛なみ、嬲り殺しの折こそあれ、道端迷

うて雅次郎、やうやく來かゝる提灯の、灯影に驚ろく鹿野苑、物をも云はず切りつける、提灯消さじと取り直す、透を切り込む右手の肩口、さしつたりと拔き合せ、二打ち三打ちてう〳〵。

ト此うち雅次郎、前髮、旅の形にて、向うより提灯持ち出て來り、本舞臺へ來る。軍八、切りつける。兩人立廻つてキッと留まりて

雅次　ヤア、何者なれば理不盡に、詞もかけず切りつけしは、意趣切りの人違ひか。但しは山賊夜盜の類か。もしそれならば、討つて捨てるが旅人の爲。サア、返答は、なんと〳〵。

軍八　イヤ待つた。急かつしやるな。如何にも人違ひ。此方の不覺でござるぞ。

雅次　なんと。

軍八　御覽の如く、意趣ある者を手にかけし折から、來かかる貴殿ゆゑ、もし助太刀の者ならんと、存ぜしゆゑに只今の仕儀。切りつけましたは拙者が誤まり。必らず聊爾下されますな。

〽詞の中にも目配り氣配り。

雅次　フム。見れば其方も浪人體。武士の詞に僞はりもあるまい。人違ひとあれば咎めるに及ばぬ。

軍八　然らば先づ、そのお刀を。

雅次　イヤ、其方から。

軍八　サア。

雅次　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽さつと引いたる刀と刀、鞘に納めて。

軍八　見請けますれば御自分樣は。

雅次　武邊修行の旅人でござる。

軍八　後日に必らず、この場の樣子を

雅次　他言いたさぬ。氣遣ひ無用。

軍八　心も急けば、身共は此まゝ。

雅次　早く落ちさつしやれ。

軍八　おさらば。

〽いづくともなく落ちて行く、後見送りて雅次郎。

雅次　ハテ、世にうろたへ者もあるものぢやなア。畢竟、此方に思意あつて、とくと實否を糺せばこそ。只山賊とのみ心得なば、一刀の下に兩斷となる奴。ハテ、危ない事の。

〽云ひつゝふつと疵の口。

南無三、提灯を消されまじと、誤まつて切尖のかすり疵。淺手ながら、劍毒皮肉に殘りなば、後日の禍ひ。ソレ。

ト薄ドロ〳〵。

〽絞る血汐の滴りは、大地へ傳うてこは如何に、流るゝ血汐に交る有様、正輝はきつと眼をつけ。

ト始終床の合ひ方。

ハテ心得ぬ。我が金瘡より滴る鮮血、この場の血汐に合體して、外へも散らず、アレ〳〵……すべて同胞の生血は、年月經ると雖も、一つに混じて放れざるが、卽ち親子兄弟の印。フム、何にもせよ、ソレ。

〽死骸はいづくと提灯の、明りに見附ける源吾が亡骸。

面體血汐にまみれたれば、しかと相好分らねど、天晴れなる壯年の武士。さては意趣切りの相手よな。數ケ所の手疵は多勢を以て、討ち留めしと覺ゆる。ハテ、無慘の有様ぢやよなア。

〽それと知らねど天然と、心に堪え茫然と、暫し佇み居たりしが、やゝ吹き渡る夜嵐に、疵に貫く早枝が苦痛。

ト雅次郎、フト早枝に目をつけ

女と見ゆるか苦痛の有様。フム、さては由緣の者ならん。見捨てゝ通るも本意ならず。何にもせよ、ソレ。

〽手早に縛しめ解きほどき、足の大陰手の大陰、呼吸の出入りをとくと考へ。

深手なれども急所を外れ、殊に六脈慥かなれば、言語通ぜぬ事よもあるまじ。

〽後へ廻つて死活の生け、耳元へ口を差寄せ。

旅の女中いなう〳〵。

〽聲をばかりに呼び通せば、息吹き返し目を見開き。

早枝　おのれ軍八、いづくまでも。

〽立ち上がつてはよろ〳〵、しつかと抱きしむ雅次郎。

雅次　コレお女中、身共は只今この所へ、參りかゝりし旅人でござる。曲者ではござらぬぞや。

〽明り片手に顏と顏。

ソレ、よく顏を見さつしやれ。

早枝　ほんに、あなた様は。

雅次　曲者でござるまいがの。急所は外れた。手疵は淺うござるぞ。心を慥かに持たつしやれ。コレサ女中。

〽云ふにやうやく心を靜め。

早枝　どなた樣かは存じませぬが、御深切なる御介抱、有り難う存じまする。

雅次　イヤ女中、あれなる死骸は、こなたの夫か。但しは又御兄弟か。意趣の次第、討たれし樣子、承つたその上では、武士たる者は相互ひ。義に依つてはお力ともなり申さん。サヽ、包まず樣子お話しなされ。仔細はなんと。如何でござるぞ。

〽情の詞に手負ひの早枝、苦痛を凌いで嬉しげに。

早枝　重々厚きお志し。御推量の通りあれなるは、わたしが夫。元は當國能績の里にて、源五郎と云ひし百姓。仔細あつて稚津家に仕へられまして、只今の名は勇源吾と申しまする。

〽聞いて大きに驚ろく正輝。

雅次　ナニ、源五郎どのとな。して、源五郎どのを夫と云はるゝからは、さては書狀で承つた、お衣重どのとはこな樣よな。

早枝　如何にも衣重と申しまする。それにつけてもあなたは、どうしてわたし等夫婦を

雅次　知らいでならうか。兄者人。

早枝　エヽ、源五郎さまを兄上樣と仰しやるからは、そんならお前は

雅次　幼少にて家出なしたる實の弟。

早枝　アノ、雅次郎さまでござりますかいなア。

雅次　如何にも。

〽これは／＼とばかりにて、兎角詞もなかりしが、死骸の側に駈け寄つて。

誠に兄者人、幼少にてお別れ申し、年月經ると云ひ、殊に面體朱に染みなし、衣類は立派なお姿ゆゑ、灯影にそれと見分ねど、正しく血汐の合體せしも、骨肉同胞の因みであつたか。ホイ。

〽ハッとばかりに心も亂れ。

さては今の曲者めが、兄者人の敵。後ぼッ駈けて只一討ち。ソレ。

〽駈け出せしが。

イヤ／＼、兄嫁の必死の體。見捨て行かんも本意ならず。とあつて現在兄の仇、爰も氣遣ひ。

〽討たぬも殘念、行きつ戻りつ二河白道。

最前より餘程の時刻。例へ追ッ駈くるとも知れまじ。殊には何處を差してと目當もなく、敵の名苗字知らざれば、討ち留めん事不覺の甚。とくと實否を相糺し、その

上にては討ち取らん事、よも難かるまじ。さうぢや〳〵。
〽立戻つてどつかと座し。
お衣重どの、兄者人の横死と云ひ、こなたの深手、敵の名苗字。仔細が聞きたい。なんとでござるぞ。
〽問はれて涙の聲顫はせ。
早枝　モシ、雅次郎さま、舅御喜樂齋さまのお身の上、お前は何にも御存じあるまいなう。
雅次　ナニ、親人のお身の上とは氣遣はしい。如何なされた。様子はなんと。
早枝　申しまするも口惜しい。舅御様にもやみ〳〵と、人手にかゝつてお果て遊ばしましたわいなア。
ト泣く。雅次郎、悄りのこなし。
〽始めて聞いて悄り轉倒。
雅次　エヽ、、。
ト篠入りの合ひ方になり
早枝　オヽ、その驚ろきは御尤も。様子話せば長物語り。舅御様には一月十六日の夜、彌彥山にて非業の御最期。夫源五郎どのには様子あつて、椎津家へ有りつき、後にて聞きし父御の横死。殿様へ仇討の、お暇願ふ折も折、思ひも依らぬお家の騷動。見捨てゝ直ぐに發足の、後を慕うて共々に、敵の行くへも尋ねんのと、遲れ走せに來かゝる松原、無慘や夫も返り討。
〽この平幡の秋の露、消えて果敢なき夫の死骸。
雅次　して〳〵、親人を討つたる敵、兄者人を殺せし仇、姓名御存じござるかな。
早枝　サア、舅御様を殺せしも、また源五郎どのを討取りしも、同じ椎津の同家中、新參者の鹿野苑軍八と、云ふ者でござりますわいなア。
雅次　フム。すりや鹿野苑軍八とな。
早枝　遺恨の元は軍八が、主あるわたしに無體の戀慕。隨はぬとて根に持つて、討ち果せしと惡口雜言。この場を去らず出會つた敵、討たんとあせれど女業。
〽かすり手さへもえゝ負はせず。
却つて敵の手にかゝり、切り刻まるゝ口惜しさを。
〽推量あれと身を悶え、血汐たばしる悔み泣き。
雅次　ア、、是非もなき世の成行き。我れは八歳の頃より、親人様の仰せにより、醫道修行に上京せしが、父は故ある足利の近臣、今民間に落入つて、此まゝ朽ちんは先祖へ不孝、何卒家名引起さんと、思ふよりして師の法橋に、暇を告げて四ケ年以前、都を立ち出で諸國を經廻り、

武術を試す武者修行。然るにこの程江州に、暫らくこの身を寄するところ、頻りに故郷の忘じ難く、父の安否を伺はん爲、歸る道筋思はずも、道に迷うて來かゝるこの場。父が横死は夢にも知らず、今また重なる兄者人。その御最期にまで後れしこの身。

〽神ならぬ身の淺ましや。

今一足早くんば、兄者人と云ひ兄嫁御寮。斯くやみ〳〵とは討たすまじきを。返す〴〵も、チエ、殘念な。

〽拳を握り齒咬みをなし、無念の涙はら〳〵、落ちて流れて道の邊の、血汐に色を爭へり、やゝあつて氣を取り直し。

これとても、悔んで詮なきこの場の有樣。只この上は敵を討ち、恨みを報ふが敎養ならん。こなたとても手疵は淺い。とくと保養の加へし上、例へ軍八、鐵桶の內に隱れ忍ぶとも、尋ね出して共々に、本意の遂げんはなんの手間隙。心を慥かにお持ちなされ。コレサ、お衣重どの。

〽勵ます詞に手負ひは這ひ寄り。

早枝　オヽ、勇ましい雅次郎さま。我れも心は逸れども、裏を掻いたるこの手疵。なんと長らへ居られませうぞ。不思議にお前に巡り逢ひ、委細の譯をお話し申せば、最早敵を討つたも同然。この世に思ひは更になし。とは云ふものゝ敵軍八、夫源五郎どのが取り得られし、西天草と云ふ藥草を、奪ひ取つて所持なせば、刃物を通さぬ不死身同然。必らず御油斷なされますなえ。云ひ置く事もこればかり。早おさらばでござります。

〽云ふより早く側なる一腰、取る間遲しと健氣の生害。雅次郎も驚ろきながら。

雅次　ハ、ア、この上は力なし。未來へござつて親人や、兄者人へも正輝が、これまでの不孝のお詫び。また二つには時日移さず、敵軍八が首引提げて、位牌へ手向け申さんと、くれ〴〵傳へて下されよ。

〽聞くに手負ひは嬉しげに。

早枝　オヽ、そのお詞が未來へ土産。必らず共に吉左右を、草葉の蔭から待ちまする。

〽云ふ聲さへも息切れて。

兩人　南無阿彌陀佛々々々々々。

〽次第に消ゆる野路の露、草の茂りを押し分けて、灯影を目當に窺ふ軍八。

ト早枝、苦しむ。雅次郎、いろ〳〵介抱する。此うち

軍八　向う戸屋の口、松原へ軍八、窺ひ出て
　　エイ。
ト小柄打つ。提灯消える。雅次郎、キツと向うを見込む。軍八、ツイと走り入る。早枝、がつくりと落入る。これにて雅次郎、見送り、こなしよろしくある。
〽哀れ果敢なや。
三重にて

幕

四段目

淨國寺の場
柳ヶ淵の場

役名　住僧、智覺禪師。所化、樂入。同、西念。同、雲穴。同、辨長。朝妻歌之助。乳母、おきと。腰元、おれん。同、およし。同、おさわ。下男、與六。名越娘、美鳥。逸見雅次郎正輝。

造り物、見附け三間の間、大燈籠、これに禪林講額掛けあり、上手、塗り骨障子。下の方、筋交ひに唐紙、所々に金字聯掛け、上手舞臺先に萩の花見事に咲いてあり、幕の内より、同宿の形にて、樂入、西念、雲穴、腰衣にて、味噌摺りて居る。その外松茸揃へたり、又は膳などを並べ、いろ／＼法事の拵らへして居る。この見得よろしく、大太鼓入り、禪樂にて、幕明く。

樂入　この松茸は餘り香が高いゆゑ、愚僧が鼻は、どうやらもげさうになつて來たわい。
雲穴　ハテ、卑しい事を云ふ僧連れではあるまい。
西念　おりやこの摺鉢が逃げ歩くので、とんと味噌が摺れぬわいの。
樂入　マア／＼、愚僧の膳組みは片付いたと云ふもの。貴僧達も、ちやつと片付けてしまやいの。
兩人　オツと合點だや／＼。
ト始終禪樂にて、向うより、歌之助、振り袖、羽織、袴、小姓の形にて、杜若を提げ出て來りて、花道にて、ちよつと捨ぜりふあつて、直ぐに本舞臺へ來て
歌之　オヽ、これは／＼お僧達、臺所のお手傳ひでござるかな。御苦勞々々々。
ト云ひながら、上手へ通る。鳴り物止む。
樂入　イヤ、歌之助どの、只今お歸りでござりますかな。

西念　見ますれば、美しいお花を御持參と云ひ

雲穴　いつとても優しいお姿。さうして、その杜若は、どうなされましたのでござりますな。

歌之　されば、この杜若は、學寮に咲きし四季咲き。餘り見事に咲きしと云ひ、秋の半には珍らしからんと思ひしゆゑ、今日の供養の書院の役に、して、名越氏の御一家衆は、まだ佛參は召されぬかの。

樂入　イヤ、程なうお入りと使ひが見え、それゆゑにこそ俄かの騷動。

西念　八百膳の混雜、愚僧どもが忙しさ。この通り坊主頭を振り廻して、味噌を摺るやら料理拵らへ。

雲穴　それにつけても、この間から、喰ひ潰して居るあの客人。日がな一日寢てばつかり。

樂入　いつそ起して、手傳うてもらはうではあるまいかの。

二人　ほんに、こりやよからう。さうせう〳〵。

歌之　アイヤ〳〵、そりや惡うござるぞや。尤もあの仁は、年若なれど武士の浪人、左樣な事は不得手にござらう。僕つたこの歌之助とても、朝妻十太夫と云ふ武士の倅、親ども相果てゝより、當寺の小姓になつたれども、父が系圖正しければ、朝夕に武藝を忘れず。それゆゑあの客人とは徒然語る詞敵。好い知音を求めて、此やうに喜ばしい事はござらぬわいの。

樂入　イカサマ、劍術は元より歌の道。

西念　香の道から茶の湯俳諧。

雲穴　何につけても御器用な歌之助どの。

三人　羨やましう存じまするての。

歌之　アヽ、これはしたり、其やうに餘り褒めてもらふまい。高木は風に折らるゝの諺。人の嫉みは萬事の妨げ。身を愼むが肝要と、師匠の戒め、その身の心得。

三人　成る程御尤も。

歌之　諸人のさぞ羨やみ、偏頗の儀もあらんかと、只これのみ氣遣ひでござるての。

三人　それは氣苦勞にござりまするなア。

西念　イヤ、兎角申しますうち、味噌もちやんと摺りましたて。

樂入　シタガ、もうお客のお越しに間もあるまいぞや。

雲穴　あるどころぢやない。噂をすれば日代と。アレ〳〵、向うへ見えるは、慥かに名越氏の。

西念　ドレ〳〵……ほんに家内のお衆達か、御參詣と見え

るでの。

歌之　誠に。ソレ、その品を片付け、お師匠樣へこの由を。

三人　畏まりました。

歌之　早う〳〵。

三人　ハツ。

ト三人、膳摺鉢を持ち、奧へ入る。禪樂になり、向うより、美鳥、振り袖抱へ帶、小吟帽子、娘の形。乳母おきと、腰元おれん、およし、おさわ、下男與六、風呂敷包みを持ち出て來る。此うち、歌之助は花活を取つて來て、右の杜若を活けて、いろ〳〵こなしある。

皆々　花道にて

れん　申し、御寮人樣、この程よりのお煩らひ。今日はこのお寺での御法事ゆゑ、お駕籠に召しござるのも、さぞお氣詰まりと存じますゆゑ

よし　お勸め申して、おひろひ遊ばしました。定めておしんどう

三人　ござりませうな。

美鳥　イ、ヤイナウ、今日は大分氣合ひも良し、何時に優つて心も晴れやか。案じたよりはしんどうもなかつたわいなう。定めて顏の色も直つたであらう。ナウ乳母。

きと　左樣でござりまする。内にばかりござると、うつらうつらと御寐なつてばかり。それゆゑ腰元衆も共々に、お勸め申した寺詣り。

與六　殊に今日はお家樣の一周忌。あなたの爲にはお母樣の御法事。大方方丈樣にも、お待ち兼ねでござりませうわい。ナウ、お乳母どの。

きと　それ〳〵、ちやつとお寺へ行て、マア、御緩りとなされませ。

美鳥　さうしませうわいなア。そんなら皆の衆。

皆々　マア、お出で遊ばしませ。

トまた禪樂になり、皆々本舞臺へ來る。ト奧より、智覺禪師、住職の形。鼠衣、ていめい頭巾、拂子を持ち、後より小僧付き添ひ出て、皆々を見て

智覺　これは名越氏の御息女、ようこそ〳〵御參詣。マアマアこれへ。

ト上座へ坐る。引下がつて、美鳥、皆々座に着く。此うち歌之助、花活を好き所へ直し、智覺が後へ坐り、衣紋繕ろひ、いろ〳〵美鳥へ思ひ入れ。鳴り物止む。おきと、こなしあつて

きと　和尙樣にも御機嫌の樣子、喜ばしう存じまする……申し御寮人樣、ちやつと御挨拶をなされませぬか。

ト美鳥、こなしあつて

美鳥　ハイ、御院主樣、その後はお久しうございまする。

ト恥かしきこなし。

智覺　ホヽ、これは〳〵御挨拶。この程は不快の樣子聞きましたが、氣合ひも好ささうで先づは珍重。して、御親父長兵衞どのは、何ゆゑ見えませぬな。

きと　イヤ、旦那長兵衞どのには、村方の檢見何やら彼やら、御公用に付きまして、昨日より泊りがけの他行、折節お家樣の一周忌の祥月、命日にも相成りましたれども、何を申すも主の留主中。それゆゑお寺へお賴み申して今日の入佛事。心ばかりのとひ弔ひ。せめてはお墓へなりと、詣りたいと仰しやるゆゑ、ナウ腰元衆。

れん　左樣でございまする。この程よりの御病氣、結句お氣ほうじにもなりませうかと存じまして、私しどもも共共に

よし　お勸め申して今日の御參詣。御寮人樣よりわたしらが

さわ　どうやら氣ほうじのやうに存じまする。

與六　所で我れらがお供を付け込み、なんでも今日は强かに、法事料理を十分にしてやらうと思うて出かけたこのお供。どうぞ早う喰ひたいものぢやて。

れん　これはしたり、お上人樣もこれにお出で遊ばすに、そんなさもしい事は云はぬものぢやないかいなア。

よし　ほんに行儀の惡い。ちと嗜なんだがよいわいなア。

與六　ハテ、さうではござりませぬ。喰はう吞まうの奉公ぢやわいの。

さわ　アレ、まだいの。

ト此うち歌之助、こなしあつて、少し前へ出て

歌之　イヤ、美鳥さま、朝妻歌之助でござりまするが、この間より御病氣のお噂を承りまして、蔭ながらいかう案じて居りましたが、見ますれば、お顏色もよし、御全快の御樣子をお見受け申しまして、如何ばかりか喜ばしう存じまする。

美鳥　これはマア、結構な御挨拶、お嬉しう存じまする。

歌之　あなたは嬉しう思うて下さりますか。その心を聞く上は、胸の思ひを隱し歌……我が妻と云はれて見たき朝妻や、柳腰なる美鳥女郎に。

智覺　コリヤ〳〵歌之助、そりや何を申すのぢや。

歌之　エ、、イヤサア、これは、オ、、それ〳〵、庭の柳を題にして、フト浮んだる三十一文字。お師匠樣へ御添削を願はうと存じまして。

智覺　ハ、、、、ハテ、一興千萬。

ト美島、こなしあつて

美島　イヤ申し、御院主樣、わたしや少とお願ひがござりまする。

智覺　ナニ、愚僧に願ひとは。

美島　サア、外でもござりませぬが、母樣にお別れ申してより、早一周りの今日の御佛事。どうぞお位牌の前でお髮を下ろし、尼になりたい私しがお願ひ。

きと　ア、、これはしたり、マア、何を仰しやるのぢやぞいなア。

美島　乳母、叱つてたもんな。わしや尼になりたいわいなア。

きと　これは又興がるぞ。

トこなし。

れん　イヤア、御寮人樣、そんな事、旦那樣のお耳へ入らば、大抵や大方の事ぢやござりませぬぞえ。

よし　それ〳〵、その上わたしらまでも共々にさわ　どんなお叱りを請けうやら知れませぬわいなア。

與六　そりやあなた、惡い思ひつきぢや。マア第一、坊主になると、肝心の旨い肴が食べられませんぞえ。

きと　イヤ申し、美島さま、お前樣は、なんと心得てござるぞいの。あなたが七つにおなりなされ、暮れにお暇貰うて、在所へ引きましたわたしなれども、母御樣がおかくれなされたについて、旦那樣のお頼み。又立戻つてあなたのお世話。一つには又お内の賄ひ。それにつけてもお子とては、天にも地にもお前お一人。ア、コレ、どうぞ好き聟取つて、名越のお家を立てさしたいと、朝夕思ふは乳母ばかりか、旦那樣にもその通り思うてござるに、尼になりたいお髮が下ろしたいのと、如何にお年が行かぬとて、ようマア物を思うて見さつしやるがよいわいなア。

歌之　イヤ、とんとその通りでござりまする。莟の花をむざむざと、尼になるとは無分別。それについてお師匠樣、私しも少とお願ひがござりまする。

智覺　ナニ、其方も願ひとは。

歌之　ハイ、あの美島どのには尼が望み。私しは又出家が嫌ひで、どうぞ出家せぬやう、お暇頂きたうござりま

す。

智覺　ハテ、様々の願ひぢやなア。

歌之　何を隱しませう、これなる美鳥どのに、日頃からの執心。人を以て長兵衞どの方へ云ひ入れも致し置きましたれば、例へ彼方は不承知にもせよ、此方の方は本得心、なりや、むざ／＼と出家して、佛の五戒保たうより、矢ッ張り私しは元服して、女子の貝が保ちたう存じまする。

きと　イエ／＼、そりやなりますまい。

歌之　ナニ、ならぬとは、なぜなりませぬ。

きと　さればでござります。この頭手前の裏隣へ、轉宅して見えられし、五十嵐典膳さまと云ふ御浪人様が、美鳥さまを御妻女に申し請けたいと、せき／＼のお頼み。達てお望みの事なれば、聟どのゝ儀は此方が先約でござりますれば。

美鳥　アヽ、コレイナウ、例へ先約があらうがあるまいが、こちや矢ッ張り尼になりたい心ぢやもの。殿御を持たう筈がない。さう思うて居てたもいなう。

きと　それではお家を御相續がなりませぬぞえ。まだあなた御存じはあるまいが、その御浪人様から一昨日、頼みの印をおこされまして、是非にとの事。旦那様にも旅用意の折柄で、お聞入れはござりませねど、無理に押しつけて、頼みの印を置いて歸りましたぞえ。

れん　わたしらも側で聞いて居りましたれど、もしこの事を御浪人様へお話し申し上げたら、却つてお氣縺れにもならうかと存じまして

よし　それゆゑわたしらも、今日まで默つて扣へて

きと　居りましたわいなア。

美鳥　それなれば猶の事。たんと義理のかゝらぬうち、早う變替へしてたもいなう。

歌之　さうとも／＼、こりや變替へ召さるゝが、よいと云ふものでござる。

與六　シタガ、なんでもあの浪人めは、えらう飢ゑて居る様子。何も功德ぢや。振舞うてやつたがようござりますぞえ。

歌之　これはしたり、大事の美鳥御寮の聟詮議。下男の差出る所ぢやない。すッ込んで居らう。シタガ、こりや今云ふ通り、變替へがようござるぞや。それともその浪人が兎や角申すならば、此方には朝妻歌之助と云ふ、歴とした花聟がござる。しかも娘が戀ひ慕うたる戀聟でござ

ると、ツイ一口に斷わつてしまはつしやれ。

智覺　コリヤ〳〵、何を申す。名越氏は鄕士の家柄。輕々しう婚姻の取結びがならうと思ふか。控へて居らうぞ。

歌之　イヤ、名越が鄕士ならば、私しも武士の身分。

智覺　まだ〳〵。扣へ居らぬか。

ト　きつと云ふ。

歌之　ハイ〳〵。

ト　こなしあつて、扣へる。

智覺　ハ、、、イヤ、御息女の儀は長兵衞どのゝ御所存もござらう。何れの道にも、名跡を相立てねばならぬ身でありながら、出家なぞとは存じも依らず。左樣な望みはフツ〳〵と、思ひ切るのが即ち孝行。この後とても心得らるゝがよいぞや。

美鳥　ハイ、左樣ならば、お指圖に任せませう。

智覺　オヽ、それがよい〳〵。追ッつけ勤行の始まれば、先づ客殿へ。

美鳥　左樣ならばお座敷へ。

きと　暫らくのうち御休息。シタガ、世間はまだ暖かでも、病ひ揚句。

れん　おしつらひの出ませぬやう、お小袖をお召し替へ

皆々　なされませい。

美鳥　イヤ、其やうにもないわいなう。

與六　そんなら、包みは爰に置いて、おれんどの、臺所へ行て休まうかえ。

ト　凭れるを突き放し

れん　何をわつけもない。知らんわいなア。

與六　これは惡い受けぢや。

皆々　サア、御寮人樣。

歌之　ドレ、この花筒を床の間へ。

ト　美鳥、こなしあつて

美鳥　思ふ事、儘ならぬこそ浮世なれ。

歌之　なぜに屆かぬ我が心かな。

ト　美鳥へ氣味合ひ。顏見合はせ

美鳥　サア、皆おぢや。

皆々　マア、お越しなされませ。

ト　唄になり、智覺禪師へ目禮して、奥へ行かうとする。歌之助、花筒を持ち、美鳥の側へ行かうとするを、おきと隔て、皆々こなしあつて、奥へ入る。歌之助、奥を見送り、うか〳〵として思はず智覺禪師に行き當り、顏見合せ、恟りして、ツイと奥へ入る。智覺禪師、

後見送りて

智覺　ハテ、大いてんばではあるわい。ハ、、、。イヤ、それは格別、お客人には御寢なつてござるか。辨長、見て參れ。

辨長　畏まりました。

ト行かうとする。ト上手屋體より

雅次　アイヤ／＼、お出でに及ばぬ。それへ參つてお目にかゝりませう。

ト合ひ方になり、上手より、速見雅次郎正輝、刀を提げ出て來りて、好き所へ座に着く。

智覺　これはお客人、市中と違ひ、寂寞たる寺院の滯留。さぞ御窮性にござりませうての。

辨長　お茶お上がりなされませう。

雅次　イヤ／＼、お構ひ下されな……さて、不思議の御緣で、何かの御厄介に相成りますての。

ト此うち、辨長、煙盆を持つて行く。

智覺　なんの／＼……マ、お煙參りませ。

雅次　イヤ、忝なうござる。サテハヤ、去る頃拙者が兄、まつた兄嫁諸とも所も替へず非業の横死。旅中の儀なれば取片付け、弔ひまでも心に任せず、其まゝ野邊の煙りと致したなれども、せめては白骨なりと納めんものと、參りかゝりし道筋にて、當寺院をお見請け申し、委細の儀を申し入れお願ひ申せば、取敢へず無緣なれども、御承知下され、戒名なども殘る方なう、御回向にあづかると申し、殊にはその頃より金瘡の惱み。先づ足を止めて養生を致すべきやう、段々と御懇切なお詞に甘へまして、滯留のうち、日數も早二十日餘り。格別の御昵懇にあづかり、斯樣な喜ばしい儀はござりませぬて。

智覺　これは御挨拶。お世話申すは出家たる身の役柄。なかなか麁略には存じませぬ。見受けますれば、まだお年若と申し、殊に武者修行とは御奇特たる思し召し立ち。まつたその砌り、狼藉者にお出合ひなされしとござつて、餘程の深手。この一兩日はお惱みも散じたるやうに相見えまするが、如何でござりますな。

雅次　左樣でござりまする、併しながら、武士たる者が手疵を受けしかと、さぞお蔑しみも思し召されうが、餘程手利きと相見え、疵は淺うござれども、急所にかゝりました。その節は一向に惱みましたところが、諸所の名醫のお世話下され、程なう快氣いたして、昨今になりましては常體の通り。コレ、御覽下されい。

ト右の腕を出し、振つて見せて
斯くの通りでござります。これと申すも、偏へに貴僧のお庇。御禮の申し様もござらぬ。この上は最早明日頃には、發足の仕らうと存じますての。
智覺　イヤ、苦しからずば今少し、御滯留なされて、とくと御保養が肝要でござるて。それにつけても、御案内でもござらうが、すべて金瘡と申すものは、平癒して程經ざるうち、冷水など注ぎまするると、疵口破れ、再發いたすとやら承りますれば、必らず水などを注がぬやう、お心掛けが專一かと存じまする。
雅次　成る程、その儀も承り及べば、隨分相愼んでござりまする。
ト この時、内にて、知らせの太鼓打つ。
智覺　最早勤行の時刻。お客人には御時分でござらう。ドレ、湯漬を上げませい。
雅次　アイヤ〱、まだ望みにはござりませぬ。欲しくば此方より乞ひませう程に、お構ひなくとも、マア お越し下されい。
辨長　御用ござらば、遠慮なうお呼びなされませう。
雅次　これはおしをらしい。
智覺　然らばお客人。
雅次　暫時、拙者はこれにて休息。
智覺　御緩りとなされませ。
ト 目禮する。杢魚入りのツトメになり、智覺禪師、辨長、こなしあつて、奥へ入る。雅次郎殘り、煙草盆引寄せ、こなしあつて
雅次　ホ、ウ、最早お勤めが始つたと相見える。誠や杓子に佛性なしとは、凡夫を覺せし禪家の悟り。如何なればこそ某は、繦褓のうちに母に後れ、父が膝元を遠ざかり、宮仕へさへ心に任せず。それさへ今はなき人と、知らで暮らせし不孝の怜。南無父尊靈、兄者人御夫婦尊靈、未來は佛果を得さしめ給へ。出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。
ト 愁ひのこなし。杢魚入りの勤め止み、好みの合ひ方になり、秋草の茂みへ蝶二羽飛交ふ。雅次郎、氣を替へて
ア、これとても詮なき悔み。けれう、あたりに聞く人がなければこそ。ハ、、、、。
ト 貰吸ひつけながら、ツト蝶に目を付けて
まだ咲き殘る秋の野の、時知り顏に蝶の戯れ。花に餘念

のなき有様。ハテ、しをらしい。昔大和の國に、佐國と云ふ者ありしが、父母常に草花を好み、死しての後は父母の魂魄、雌雄の蝶とその身を化し、佐國が夢にありありと、庭の草花に舞ひ遊ぶ。正夢により彼の佐國、花のまに〳〵蜜を注ぎ、戯るゝ蝶を慈しみ、在すが如く仕へしは、これぞ全く子たる道。その胡蝶には似もやらで、刃にかゝりし親どもは、この世からなる劒の花壇。修羅の巷の有様を、思へば莊子が空言も、迷ふがゆゑに三界火宅。胡蝶の夢の世の中ぢやよなア。

ト こなし、この時、内にて

美鳥　どのやうに云やつても、こちや嫌ぢや〳〵。嫌ぢやわいなア。

ト 右の合ひ方へ杢魚を打込み、禪のツトメになり、奥より、美鳥、奥を振り返り見ながら出て、好き所へ座に着き、雅次郎に心の付かぬこなし。雅次郎も蝶に見惚れ、美鳥を知らぬこなし。美鳥、雅次郎の方と脊中合せになり居て、こなしあつて

聞くもうるさい嫁入りの噂。なんぼう乳母でも、これつかりは云ひ兼ねて、隱して居たが今での悔み。家が立たぬと父様が、お叱りなさるゝは悲しう思へど、心に染まぬ殿御に、なんと一生連れ添はうぞ。無理にとあれば生きて居ぬ。わしが思案は、疾から覺悟極めて居るわいなう。

ト 奥を見て云ふ。

雅次　草花の露を餘念なう、我か物顔に遊ぶワ〳〵。

美鳥　願ひをかけた觀音様、なぜま一度その時の、お方に逢はして下さんせぬ。ほんに聞えませぬわいなア。

雅次　しかも番ひの翼を並べ比翼連理と思ふもの

美鳥　露に一夜の宿借るは

雅次　なぜに彼方へ心が屆かぬ事ぞいなア。

美鳥　ア、何れ割りなき妹脊の愛情。

雅次　どうぞ逢ひたい。お懐かしい。

美鳥　實に風情ある

雅次　ほんに辛氣な

美鳥
兩人　事ぢやわいの。

ト 蝶飛び去る。雅次郎フト美鳥を見て

雅次　ヤア、女中、こなたは何時の間に。

ト これにて、美鳥も心付き

美鳥　ハイ、たつた今參じましたが、あなた様には。



初畫の



繪番付

雅次　イヤ、此方は先刻より、これに居りましたが、草花に遊ぶ蝶に見惚れ、こなた樣のお越しは存ぜなんでござるての

美鳥　ホヽヽ、ほんにマア、わたしとした事が、あなた樣のござることも存ぜず、この身の憂さに取紛れ、あられもない事をお聞かせ申しまして、お恥かしう存じまする。

雅次　イヤ〳〵、此方とても蝶に心引かされ、何を仰せられたやら、とんと耳へは入りませなんだての。併しながら、斯うお見請け申したところが、フム、さては當寺の檀家衆でござるかな。

美鳥　ハイ、左樣でござります。今日は母樣の一周忌で。

雅次　さては入佛事でござるよな。

美鳥　ハイ、左樣でござりまする。

雅次　それは御奇特な事でござります。

ト此うち、フト雅次郎を見て

美鳥　ヤア、あなたは。

ト惘りして、よく〳〵顏を見て、こなしあつて

オヽ、さうぢや〳〵。その時のお侍ひ樣ぢや。なんの見違へませうぞ。過ぎし皐月に石山詣で、なされたでござりませうがな。

雅次　如何にも當夏の頃、近江路へ立越え、三井寺より石山へ參詣なし、武運を祈る佛の結緣。

美鳥　その時わたしも石山へ詣でまして、こなたが休らうてござる床几のほとりに、アノナ。

雅次　見渡す湖水の波も靜かに

美鳥　てもマア可愛らしい

雅次　小さう見ゆる沖の小舟。

美鳥　焦るゝ胸の夕日影。

雅次　宿求めんと氣も夕陽。

美鳥　腰元端下女に急がれて

雅次　大津の驛にてその夜は一宿。

美鳥　本意なうお別れ申したあなた。

雅次　イヤ、手前は存じませぬが、すりや、こなた樣には。

美鳥　ハイ、大抵や大方、お知る人ではござりませんわいなア。

雅次　イヤモウ、何所の浦、何國の里に、知るお人がないとも申されませぬての。して御住宅は、この邊でござりますかな。

美鳥　ハイ、このお寺からツイ十丁餘り、吳堅村の鄉代官、

父様の名は名越長兵衛。わたしの名は美鳥と申しまする。

雅次　これは〳〵、左様な儀でござつたよな。シタガ、お連れもござらう。お構ひなくとも、サア、お越し下され。

美鳥　イエ〳〵、わたしや何所へも行く事ぢやござりませぬ。何時までもあなたのお側に。

雅次　イヤ〳〵、左様ではござらぬ。男女七歳にして席を同じうせずとは聖の教へ。殊に未だお年若と申し、あなたがこれにござらば、私しは次へ参らう。

ト立たうとするを

美鳥　ア、申し、マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。

雅次　御用でござるかな。

美鳥　ハイ、御用も御用、それは〳〵大抵や大方の御用ではござりませぬわいなア。

雅次　して、御用と申すは、如何體の御用でござるな。

美鳥　サア、その御用と云ふは。

雅次　承りませうか。

美鳥　サア、その御用と申しまするは、オヽ、それ〳〵、あなたをお侍ひ様とお見請けまして、お頼みがござりまするわいなア。

雅次　身共へお頼みとはな。

美鳥　ハイ、それはアノ、斯うでござりますわいなア。急に嫁入りをせねばなりませぬが、その嫁入りが嫌で〳〵なりませぬに依つて、どうぞあなたが變替へになつて下さりますやうに。

雅次　これはしたり、何を仰せらるゝ。興がる事。お頼みとは、その事でござりますかな。

美鳥　ハイ、ツイちよつとあなたが、變替へなされて下さりませいなア。

雅次　ハヽヽ、後先存ぜぬから、とんと合點が參らぬての。何は格別、其許の縁談を、旅人の身共が、なんと申されうぞ。こりや外々を頼まつしやれ。拙者は

ト又行かうとするを

美鳥　ア、申し、そんなら、まだ外にお頼みがござりまする。

雅次　まだござるかな。

美鳥　サア、どうあつても、その嫁入りが嫌ぢやに依つて、矢ッ張りあなた様が。

雅次　アノ、身共が。

美鳥　わたしの
雅次　其許の
美鳥　殿御に。
雅次　エヽ。
美鳥　なつて欲しう……ござりますわいなア。
ト袖にて顔隠し、俯向く。雅次、行かうとするを裾を捉へて
姫御前の身で恥かしい、假にも嘘にもこんな事、云はれませうか、コレ申し。
雅次　イヤ、拙者は旅人、行くへ定めぬ身は雲水。
美鳥　サア、それぢやに依つて、どうぞわたしが願ひを。
雅次　妻は持たぬ。
美鳥　エヽ。
雅次　當所の名殘も今宵一夜。女中
ト振り切つて
お別れ申す。
ト獨吟になる。
〽物思ふ、身は浮草の寄る邊なき、田の面に鳴きし蛙さへ、今は心も秋の空。
ト右唄のうち、雅次郎はこなしあつて、上手屋體へ入る。美鳥は後見送り、本意なきこなし、唄の切れにてト泣き落す。右唄の合ひ方になり、いろ／＼こなしあつて
美鳥　ハアヽ。
過ぎし皐月の中空に、フト戀ひ染めたその日から、あなたを退けて外の殿御は持つまじと、心で結ぶ比翼連理。觀音様や神々へ、お願ひ申した甲斐あつて、思ひも依らぬ今の逢瀬。喜んだのも水の泡。それさへ今は枯れ／＼に、ほんにつれない胴慾な。如何に武家衆の慣ひとて、物堅いにも程がある。情を知るもお侍ひ。わたしやあなたに焦れて死にまする。如何に浮世と云ひながら、あるは嫌なり思ふはならず、内へ去んだら父様や、乳母が共共家の爲、あの浪人面と連れ添へと、仰しやるまいとも云はれぬ仕儀。もしその時はなんとせう。わたしやどうせう。どうせうぞいなア。
トいろ／＼思ひ入れあつて、後また氣を替へて
今更詮ない悔み事。とてもこの身は露と消え、長らへ果てぬ覺悟の命。味氣ない身を瀬川へ。
ト思ひ入れあつて
せめて死後に父様へ、不孝のお詫びの申し譯……さうぢ

やく／＼。
〽はや立つ影も傾きて、所詮この身を亡き世ぞと、思ひ諦らめ雲隠れ。

ト右獨吟のうち、最前の包みの中より、白の下着を取出して、これに書置き書きながら、向うを見て、さぞ父上樣がと云ふこなしあつて、ちよつと泣き、又氣を替へ、書置を書き、始終右唄の合ひ方よろしく、書き終つて、こなしあつて

去年の今日は母樣に死別れ、今日は身を捨て父上が、後にてお開き遊ばしたら、さぞやお歎き不孝の罪、憎い奴とも思し召されん。申し父上樣、御堪忍なされて下さりませいなア。

ト大泣きに泣き落す。暮れ六ツの鐘、チヤン／＼と鳴る。内にて

きと　いとはどれへござつたぞ。

皆々　御寮人さま／＼。

トこれにて恟り、書置の小袖を捨て、一間へ心意氣あつて、花道へウカ／＼としながら行く。

〽夜半の事どうせうもがな。

さうぢや。

ト禪樂忙しくなり、ツイと向うへ走り入る。と奥よりおきと先に腰元皆々出て來りて

きと　わしや看經をして居たが、こなた衆は側に居たぢやないか。

れん　何を云はしやんすやら。わたしらは又、お前樣が付いてござると思うて、落ちついて居ましたわいなア。

皆々　與六どの、お前知らずかいなア。

與六　おりや臺所で、ちよつと茶づツて居たのぢやゆゑ、なんのおれが知らうぞいの。

皆々　ハテ面妖な。何所へお出でなされたやら。

ト云ひながら、フトおれん、書置を見付けて

れん　ヤア、このお小袖に、何やら御寮人樣のお手で書いてござりますぞえ。

ト開き見るを、おきと見て

きと　ナニ、いとの手蹟とは、ドレ／＼……書置の事。

皆々　エヽ。

まと　こりや只事ではあるまい。どうやら胸騒ぎがする樣子。皆さん、來て下さりませ。

トうろ／＼する。奥より、智覺禪師、同宿を連れ、歌之助も出て

智覺　騷がしい。何事でござるの。
きと　エヽ、何事どころか、いとさんの書置でございますわいな。
歌之　ヤア、書置とは氣遣はしい。ドレ。
ト小袖を取る。
きと　サア〱、なんと書いてござります。ちやつと讀んで下され〱。
歌之　涙に氣もたど〱しながら、せめての便に書き殘しまゐらせ、我が身事は深き心の誓ひ在せしゆゑ、それとは云ひ兼ね案じ暮らし候ふうち、緣づきの噂聞くもうるさく。
きと　ヤア、そんなら嫁入りを勸めたが、お心に障つたのかいなア。
歌之　さては隣裏の浪人を嫌ひ、この歌之助を戀ひ慕うての書置か。ア、可哀や〱。
智覺　して、その後は
皆々　どうぢや〱。
歌之　緣付きの噂聞くもうるさく候へども、家が立たぬと父上樣のお叱りの程、なんぼうか悲しく、任せぬ浮世を恨み候ふまゝ、美鳥と名付ける我が名より、柳ケ淵にこの身を沈め、底の藻屑となりまゐらせ。
皆々　ヤア〱〱。
ト皆々こなし。おきと書置を取つて
きと　そんならアノ身を投げて。ホイ。
ト泣く。
歌之　それと知つたら留めようもの。殘念〱。
智覺　程もあるまい。其方達も手分けして
與六　皆も一緒に尋ねて下され。
同宿　オッと合點ぢや。
智覺　凶事なきやうに佛間で祈念。マア、歌之助も參れ。
歌之　イヤ、私しは。
ト思ひ入れ。おきと、こなしあつて、書置を打捨て
きと　こりやマアどうした事だぞいなア。
ト足の立たぬこなし。
同宿　ハテマア、ごんせ〱。
トおきとを無理に引立て、與六、腰元、同宿、皆々、向うへ入る。智覺禪師は歌之助が手を引立て、奥へ入る。と上手屋體より、雅次郎、出て來りて
雅次　最前の詞と云ひ、今の有樣。大事を抱へし身を以て、色に溺るゝ正輝ならねど、今眼前に

ト書置を取上げ見て
色香に迷はぬ心は潔白。此まゝ殺すは殺生の至り。入水
とあらば水練を以て、片時も早う助け得させん。ムウ。
ソレ。
ト行かうとする。歌之助、ツカ／＼と出て

歌之　待て。
ト支へるを、ちよつと立廻つて

雅次　聞き及んだる柳ケ淵。
ト歌之助をよろしく投げて
オヽ、さうぢや。
ト一聲ひしぎになり、雅次郎、向うへ走り入る。と歌
之助、起きて

歌之　エヽ、酷い目に遭はせ居つた。オヽそれよ。今聞い
た柳ケ淵。
ト辨長、出て

辨長　歌之助さま、お師匠樣より召します。
ト留める。投げうとして、小僧ゆゑ引ッ捕へて、ソッ
と投げて

歌之　さうぢや。
ト向うへ入る。辨長起きて

辨長　今聞いた柳ケ淵。
ト西念、出て

西念　先刻の仕返し。
トかゝるを、ポンと投げて

辨長　さうぢや。
ト向うへ走り入る。チョン／＼、返し。
造り物、浪幕を切つて落す。舞臺、花道共一面に
高く、一尺ばかりの浪手摺りをセリ出す。兩棧敷、
堤波の打寄せになり、始終一セイにて、道具納ま
る。
ト浪の音にて、東西より、小舟に百姓大勢、松明を灯
し、出て來りて

百一　大方爰らでありさうなぞよ。

百二　イヤ／＼、どうやら爰が氣ぶさいな。ソレ、鵜ぢや
鵜ぢや。

皆々　オッと合點ぢや／＼。
ト鵜を川へ流し、死骸を尋ぬるこなし。

百一　根つから鵜が啼かぬぞよ。

百二　啼いたところが、底が深いので、なんにも知らんわ

い。

百三　據つたら、この世の暇乞ひぢや。

百四　オツと危ないぞ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて、東西へ別れ入る。始終セリになり、チヨン〳〵にて、浪手摺り四尺ばかりセリ上がる。これにて、一緒に本舞臺好き所へ、岩組み、柳の大木セリ出す。空より見事に柳の吊り枝下ろす。道具納まる。ト一セイ烈しく、浪頭、風の音になり、柳の吊り枝、風の吹きそふ體にて、東西へ靡かす。と向うより、歌之助、齎付け一枚になり、泳ぎながら出て來る。但し水心知らぬこなし、振り袖へ水の溜りて、ずぶずぶと沈む。此うち、美鳥、吹替への胴人形、浮きつ沈みつ流れ出る。このあたりへ水煙立ち、歌之助、浮き上がり、いろ〳〵苦しみながら泳ぎ入る。ト又岩組みの蔭へ、雅次郎、水練の形にて、大小差し、美鳥を片手に抱へ、柳の木に手をかけ、岩組みへ上がり、水を吹き、いろ〳〵あると、内にて大勢

百姓　ソリヤ、死骸が上がつたぞ〳〵。

皆々　助け舟ぢや〳〵。

ト捨ぜりふにて、花道より、百姓、小舟に乗り、松明を持つて漕ぎ出る。此うち、歌之助、浮き上がり、岩に取りつき昇らうとする。雅次郎は右の舟に乗らうとするを、歌之助、支ゆるゆゑ、美鳥を百姓に渡し、續いで乗らうとする。歌之助、雅次郎を引退け、乗らうとするを引廻して、水中へ投げ込み、舟に飛び乗り、美鳥を介抱する。此うち、舟は花道へ行きかけるを、歌之助、柳に取りつき、又岩組みへ這ひ上がり、舟の繋ぎ綱を取る。雅次郎、ポンと綱を切る。歌之助、ぺつたり尻もちつく。舟は向うへ走り入る。歌之助は向うを見込む。この途端、よろしく浪の音、一セイにて。

幕

五段目

名越屋敷の場
與膳假宅の場

役名――五十嵐與膳實ハ鹿野苑軍八。熊井五太夫。唐橋傳助。島形角藏。坂田銀平。乳母、おきと。腰元、およし。同、おさわ。同、お菊。同、おれん。下女、お鍋。下男、與六。奴、宅助。とんと

こ坊。庄屋、きよと作。百姓、鍬作。同、豐作。同、万作。同、麥作。淺妻歌之助。名越長兵衞。同娘、美鳥。逸見雅次郎正輝。

造り物、三間の二重、綺麗なる藁葺き。見附け納戸口。上手に押入れ。よき所に長押、これに鎗を掛け、竹刀など刀架にかけて、よき所に飾りあり、臆病口の方、筋違ひに廊下傳ひの見得、上手へ奥深に飾り、下の方は塀續き、隣り門口、竹簀戸入り、表札張りあり、これに五十嵐典膳宅と書いてあり、いつもの所に縄張り、屋根付きの門構へ、門口に見越しの松、用水桶あり、すべて郷代官住宅の見得。幕の内より、乳母おきと、おれん、およし、おきわ、お菊、腰元の形。與六、下男の拵らへ。おなべ、下女の拵らへ、お梅は近所の娘の拵らへ、この人数皆々、身投げの筋にて、騒いで居る見得。宅助は隣り屋敷の奴にて、來合はし、共々うろついて居る體。よき所に行燈を灯しあり、在郷唄にて、幕明く。

與六　サア／＼、珍事ぢやうやう、途方もない事になつて來た。

きと　今にも旦那様がお歸りなされたら、なんと云ひ譯があらうぞいなア。ひよんな事して下さつたなう。

うめ　ほんにマア、おいとしい事でござんすわいなア。

なべ　マア／＼、其やうに騒がずと、ヂッとして居やしやんせ。お庄屋さんが戻らしやんしたら、様子が解らうわいなア。サア皆、坐らしやんせ／＼。

皆々　ほんに、それもさうぢやわいなア。

ト皆々下に居る。

きと　ぢやと云うて、落ちついても居られず。早う様子が

皆々　聞きたいものぢやがなア。

トまた立騒ぐ。宅助、こなしあつて

宅助　なんだか騒々しいばかりで、とんと譯が解らぬ。コリヤ下人よ。ちよつと來をらう／＼。

ト與六を引ツ張り、よき所へ連れて出て

われも知る通り、この裏隣りは、おらがお旦那、五十嵐典膳さまのお屋敷だ。そこで只今お旦那のお使ひに參つたところが

ト此うち、與六、ウロ／＼して居て

與六　エヽ、そこどころぢやござんせぬわい。

ト振り放し、ウロ／＼する。

宅助　これサ、お乳母どの、ちよつと來たり〳〵。
　トうろ〳〵しながら、おきとを引提へ出て
今申したお旦那のお使ひは、爰な美鳥女郎を、此方の旦那が貰ひ受けうと、一昨日から結納の印を持つて參つたところが、善の急げとやら、丁度明日は最上吉日だから、そこで好い返事を承はつて參れと
　ト此うち、おきと、ウロ〳〵して居る。宅助、付き歩く。
それは〳〵お待ち兼ね。
きと　サア、待たるゝとも待つ身になるなとやら、庄屋さまは遲い事ぢやなア。
　ト表門へ出たり、いろ〳〵ウロつく。宅助もウロ〳〵しながら、思はずおれんに行き當るを、其まゝおれんを引提へて
宅助　是非とも今夜は、長兵衛どのにも歸らるゝであらうから、とくとこの由申し入れて
れん　ハイ〳〵、それはようお出でなされました。
　ト彼方へ行くを、宅助、又お鍋を捉へ
宅助　息女にも直ぐ申し入れ置きたいが、して、美鳥どのは、どれにござるな。

なべ　エヽ、アタ鈍くさい奴どのぢやわいなア。御寮人様は、お果てなされましたわいなア。
宅助　ヤア、なんと申す。アノ美鳥どのは。
　ト悔りする。
うめ　これはしたり、奴どの、お前まだ美鳥さまの事を知らずかいなア。
宅助　イヤ、知るも知らぬもない、今朝までも、なんの事もないアノ美鳥どのが。
れん　サイナア、今日お寺へ御參詣なされたが、どう云ふ譯やら知らぬけれど
よし　御病氣擧句のその上に、まだお年若な御寮人様。
さわ　何がお心に染まぬにや、只突き詰めたお心で
きく　書置殘して柳ケ淵へ。
宅助　ヤア〳〵〳〵。
うめ　サア、わたしや美鳥さまの友達。今朝内方で琴の組を、互ひに浚へて遊んだが、今で思へば、別れの端であつたわいなア。
きと　こんな事と知つたなら、仕様模様もあらうもの。
うめ　ほんに果敢ない
皆々　別れぢやわいなア。

ト皆々泣く。

宅助　そいつは大抵な事ぢやないわい。これをお旦那へ聞かしたら、定めて恟りさつしやらうての。

ト始終在鄕生けころし。向うより、庄屋のきよろ作、庄屋の形。後より、豐作、麥作、萬作、百姓の形にて、皆々松明を灯し出て來て

きよ　サア／＼、皆の衆、ござれ／＼。なんとマア、なんさくな事が出來た事ぢやないかいの。

豐作　イヤモウ、なんさくどころぢやない、いろ／＼の事で村中が、上を下へと、大抵迷惑ぢやないわい。

麥作　イヤ、此方の迷惑よりは、名越どのゝ家は、長兵衛どのは留守の事ゆゑ、お乳母どのや奉公人衆も、さぞ心配であらうわいの。

萬作　長兵衛とのが戾らんしたら、定めてお目玉であらうわい。

きよ　とかう云ふうち、もう名越氏の側へ來た。大方皆が待つて居やう。サア／＼、ござれ／＼。

ト捨ぜりふにて、皆々本舞臺へ來り、直ぐに內へ入る。

皆々見て

きと　オヽ、お庄屋樣でござりますか。何はしかれ、樣子が聞きたい。

皆々　待ち兼ねましたわいなア。

きよ　イヤモウ、待ち兼ねた甲斐もない事ぢや。マア、聞かつしやれ。聞くと其まゝ駈けつけて見たところが、何が後の祭りと見えて、岩の上に落ちてあるは櫛簪。南無三、こりやいよ／＼身投げに相違ないと、思ふにつけても、ナウ皆の衆。

豐作　サイナウ、せめて死骸なりと上げうと思うたれど、何がモウ五十丁四方の柳ケ淵。

麥作　鵜を入れて彼方此方尋ねて見たが、なんの知れうぞ。

萬作　何が靑み切つて、柳を動かす風の音。そこらあたりは物凄き柳ケ淵。

きよ　殊にあの淵に、主が住んで居るとやらで、嵌るが否や直ぐに往生。これまであの淵へ嵌つた者の、助かつて戾つた事はないわいの。

豐作　シタガ、水で死ぬるとは粹な死やう。

麥作　とは云ふものゝ、さぞ切なかつたでごんせうわい。

萬作　何にしても、氣の毒なは長兵衛どの。

きよ　ヤレ／＼、いとしい事をしましたわいの。

きと　そんならいよ〳〵。
宅助　お娘は死んだか。
皆々　ホイ。
　ト皆々、顔見合せ、こなし。
百姓　ひよんな事になつたわいの。
　トこなし。向うバタ〳〵にて、歌之助、口籠の形、着付け振り袖、大小にて走り出て、直ぐに内へ入つて
歌々　どうぢや。美鳥どのゝ死骸は、戻つたか〳〵。
きよ　オヽ、戻つた〳〵。
歌之　さうして、その死骸は。
きよ　サア、死骸はなんぼう尋ねても知れぬゆゑ、詮方盡きて、せう事なう、皆が寄つて、手振りで
百姓　戻つた〳〵。
歌之　エヽ、なんの事ぢや。拙者は美鳥どのが、入水召されたと聞くと等しく、何卒助け得させんと、思ふ心は只一圖。日頃覺えし水練を以て、淵へ飛び込み拔手を切つて、泳いだと思はつしやれ。
きよ　それは勇ましい〳〵。
歌之　聞かつしやれ。所でこの頃、寺中に滯留いたして居る浪人者が、これも同じく美鳥どのを助けんと、彼の水底に入つたなれど、何が水心を知らぬ悲しさ、浮きつ沈みつ、イヤモウ、かゝつた態ではなかつたての。
きよ　オヽ、さうであらう〳〵。
百姓　さうして、どうぢやな〳〵。
歌之　所を程なく拙者めが、美鳥どのゝ死骸を擔ぎ上げ、柳に取りつき昇き上げれば、手柄を推む浪人者、支ゆる所を何の苦もなく、彼の水中へ取つて投げ込み、來かかる小舟へ死骸を乘せ、我が身も諸とも飛び乘つたと、マア思うたが、何が風が烈しく浪は高し、それから後はとんと覺えぬ。ハテ、合點のゆかぬ。
きよ　エヽ、なんの事ぢやい。
歌之　フム、さては夢であつたか知らん。
きよ　ハヽヽヽヽ、それですつぱりと、なんにも解らんわい。
きと　ほんに、約束事でもあらうけれど、現在所は知れたから
れん　お體さへも知れぬと云ふは
きと　よく〳〵深い罪障の、緣か業か情ない。
うめ　思へば〳〵おいとしい。
れん　それにつけても旦那樣、夢にもさぞや御存じあるま

い。
よし　今にもお歸りなされたら
きく　お側に付き添ふわたしらも
さわ　なんと云ひ譯いたされませうぞ。
與六　と云うて云はずにも濟まされず。
なべ　云ふも憂し、云はぬも辛い今日の忙しさ。
宅助　貰ひかゝつたお娘はどんぶり。
歌之　せめて佛間で回向の稱名。
きと　ソレ、御燈火を。
れん　ハイ、畏まりました。
歌之　佛はなくとも葬ひの營み。
豐作　お寺へ一走り。
宅助　ドレ、この樣子を旦那へ注進。
きと　思へば果敢ない
歌之　生死不定。
きよ　有爲轉變の
　ト皆々顏見合せ、こなしあつて
皆々　世の中ぢやなア。
　ト唄になり、おきと、歌之助、庄屋、腰元、皆々、お鍋、與六、付き添ひ奧へ入る。百姓皆々橋がゝりへ入る。と向うより、長兵衞、股引、脚絆、合羽がけ、大小、三度笠を持ち、後より、下人、雨掛け、挾み箱を擔げ、付き添ひ出て、花道好き所にて
長兵　三助、草臥れたであらう。思ひの外遲うなつた事ぢやて。
三助　左樣でござりまする。
長兵　最早程なう歸つたと云ふもの。さぞ家内の者も待つて居らう。家へ歸つてゆつくりと、休息の致さうわい。
三助　それがよろしうござりまする。
長兵　オ、サ、もそつとぢや。足早に供いたせ。
三助　ヘイ〳〵。
　ト氣急きの思ひ入れにて、門口へ來て
長兵　今歸つたぞよ。
　トずつと内へ入り
皆居らぬか。いま戻つたぞよ。
　ト納戶より、お梅、先におれん、およし、お菊、おさわ、お鍋、皆々出て來りて
うめ　小父樣、只今お歸り
皆々　なされましたか。
長兵　オヽ、今ぢや〳〵。

なべ　マア、お御足をお洗ひ申しませう。

ト盥に水を汲んで來て、足を洗はす。皆々手傳うて、脚絆、草鞋などを直すこなし。

長兵　三助、用はない程に、ちやつと休んでくれ〳〵。

三助　ヘイ〳〵、左樣なら、暫らくお暇貰ひませうか。

ト荷物を好き所へ直し、納戸へ入る。此うち、長兵衞は絡げを下ろし、二重へ上がる。おれんは大小を受取り、刀架へかける。腰元皆々、茛盆茶などを持つて行く。長兵衞、家内を見廻し、皆々の顏を見る。これにて、皆々思ひ入れ、しいんとなり俯向く。長兵衞、

こなしあつて

長兵　夜前は石瀨の大庄屋に泊つて、今朝未明から、何とやら胸騷ぎの致して、家内の事が氣がゝりに思うたなれども、領內檢見は公の御用。等閑にもなり難く、漸くに相片付き、立歸る途中にて、思ひがけない娘の入水。とり〴〵の噂のみ、聞くに付けても親の身で、驚ろくまいものか、悔りせまいか。とあつて、早刻限も過ぎたれば、今更悔むに詮なき體裁。して、水中より死骸でも、取上げ歸つたか、まだか、どうぢや〳〵。

れん　さればでござりまする。お下の百姓衆が大勢集まつて、柳ケ淵の弓手右手、いろ〳〵と探して下さりましたれど

長兵　骸は知れぬか。

れん　どう云ふ事やら。

長兵　フム……ハテ、是非もない……見れば、乳母が見えぬが、どう致した。

よし　ハイ、おきとどのは奥の佛間で

きく　御燈火を上げて、泣いてばつかり

皆々　居られまする。

長兵　さもあらう。シタガ、いつぞやより病に犯され、心氣衰ふその上に、女心の突き詰めて、聊かの事をも案じ過し、大方死神にでも誘はれしものならん。ハテ不便千萬……イヤ、不所存者の娘美鳥、第一親に嘆きをかけ、名越の名跡絶えさす不孝。血筋の切れ目を思はぬ不屆き。憎しと思へば泣きもせぬ、悔みも致さぬ。家內の者、愁傷いたすな。娘でないぞ。

皆々　ハアイ。

ト皆々愁ひのこなし。

長兵　泣くな。

皆々　ハアイ。

長兵　悔むな。
皆々　ハアイ。
長兵　身共も悔まぬ。只何事も因緣事。
ト莨を吸ひつけ、愁ひを隱すこなし。合ひ方になり、向う戸家の內より、百姓大勢
百姓　サア〳〵、ござりませ〳〵。
ト松明を灯し、鍬作先に立ち、雅次郞、旅形に改め、菅笠を持ち、後より百姓大勢、戶板に美鳥を乘せ、これを舁き出て、花道へ來て
雅次　各々方には、御苦勞に存じまする。
鍬作　なんのいの。わたしらは所の者ゆゑ、何も構ふ事はごんせぬわいの。シタガ、あなたのお庇で、淵から上げたこの死骸。
百一　向うに見える門構へが、吳堅村の鄕代官。
百二　名越長兵衞どのと云うて、この女中の父御の家でござりまする。
雅次　さぞ家內には混雜であらう。ちつとも早う、ソレ、案內を。
鍬作　合點でござります。マア、ござりませ。
ト門口へ來て
長兵衞どのは、もうお歸りでございますか。
皆々　長兵衞どの〳〵、早う爰を明けさつしやれ〳〵。
長兵　けたたましい。折も折とて家內の愁傷。村方の願ひなら、明日の朝まで待つたがよいわい。
鍬作　イヤ、明日まで置かれぬ娘御のお死骸。
ト此うちおれん心得、門を明ける。百姓、戶板を持ち込んで
百姓　後懇ろに弔らはつしやれや。
長兵　ナニ、娘が骸か。ドレ。
ト下へ降りる。奧より、おきと、走り出て
きと　ヤア、いと樣か。エヽ、淺ましいこのお姿。ハアア。
ト取りつき泣く。長兵衞、いろ〳〵體を改め見て、脈を取り見て
長兵　胸膈を塞ぎ、六脈を絕ちたれば、助命なぞは存じも依らず。ハテ殘念千萬。
雅次　イヤ、御免下され。名越長兵衞どのとは、其許でござるよな。
トずつと內へ入る。女形皆々、雅次郞を見る事あつて、こなし。長兵衞を見て、こなしあつて

長兵　其許は。

雅次　イヤ、お見知りはござらぬ筈。拙者儀は鎌倉の浪人、仔細ござつて姓名は申しませぬ。

鐵作　こちとら始め大勢が、寄つてかゝつて探しても、探し當らぬその死骸を

百一　このお侍ひ樣が、水の底から引上げて下さつた大事のお客。

百二　今時稀れな水練のお達者と云ひ

百三　殊に立派なお侍ひ樣。

百四　其所へよろしう何かのお禮を

鐵作　とつくりと仰しやつて

皆々　下さりませや。

長兵　ナニ、すりや娘が骸を

鐵作　それぢやに依つて、キッとお禮を。

長兵　そりやお禮を申さねば相成らぬ。何は格別、先づ先づあれへ。

雅次　然らば、御免下され。

　ト二重へ通る。此うち、死骸を戸板より下ろし、少し後へ寄せて、おきと、外女形取廻し、泣いて居る。

長兵　只今承はれば、娘が儀につき、何かと御辛勞下され、故なら骸を水底より、お取上げ下されしとの儀。存ぜぬ事とて暫時の無禮。眞平御免にあづかりたう存じまする。

雅次　これは／＼御挨拶。拙者儀は武者修行と、マア申すも烏滸がましくはござれども、當所國路を遍歴の折から、金瘡の惱みに依り、山際の禪林淨國寺に止宿いたし、日數を經るうち、存じがけなき今日の仕儀。御息女の入水聞くに忍びず、聊かの水術も斯樣の時ぞと、淵に飛び入り、水底潜りて死骸を求め、肌にしつかりひん抱へ、幸ひ來かゝる船にて介抱。程近ければ淨國寺へ連れ歸り、水を吹かせて小袖を取替へ、焚火を以てさま／＼と、療治いたせど早縡切れ。必死の有樣是非に及ばず、せめて亡き骸お渡し申し、お弔ひをも進めん爲、あの人達に骸を持たせ、又某は旅の用意、寺中を立つてこの奥堅村へ來りしは、次手ながらも右の段々、お話し申さんその爲に、わざ／＼參りしこの場の仕合せ。御息女の御變死、御愁傷の程も、さぞあらんと、貴殿の胸中、御推察仕つてござるて。

長兵　イヤモウ、不便な者と申しましてからが、斯く相果てましては、千萬悔んでも役に立たざる未練の繰言。生

死二つは天命の爲す所と存ずれば、なか／＼涙はかけませぬ。

ト愁ひを隱すこなし。

きと　さうこそ仰しやれ、天にも地にもたつたお一人の大事のお子樣。コレ申し、死ぬ程の譯ならば、斯う／＼云ふ願ひがあると、なぜこの乳母には明かして云うては下さりませなんだぞいなア。母御が生きてござつたら、こんな事はあるまいもの。乳母を隔てゝ下さつたが、エヽ、恨めしうござるわいの。

れん　サア、その譯も私しらは。

ト顏見合せ、雅次郎へ思ひ入れ。

よし　知つては居れど兎や角と

さわ　何を云うても後の祭り。

きく　こんな事なら共々に

うめ　仕樣模樣もあつたもの。

きと　思ひ廻せば廻す程

うめ　悲しい事に

皆々　なりましたわいなア。

ト大泣き。長兵衞、こなしあつて

長兵　ヤア、めろ／＼と何を吠えると、マア叱れば叱るものゝ、藁の上より手しほにかけ、蝶よ花よと慈しみ、我が寄る年も構はどこそ、成人するを待ち侘びし、その甲斐もなき今日の體裁ゝかゝる憂き目を見るにつけ、去年死にやつた奧は仕合せ。若木の花を先立て、殘る老木の胸の內、泣かぬ心の苦しさは、どのやうにあらうぞ。

ト堪え兼ねたるこなしにて、ハラ／＼と泣く。また氣を替へて

ハヽヽ、お客人もござるに未練の悔み。必らずお笑ひ下さるゝな。イヤナニ、われ達もさぞ疲れたであらう。宿へ歸つて休んでくりやれ。

鍬作　ハイ／＼、イヤモウ、流石は所の御代官樣程あつて、現在獨り娘の死骸を見ても、めろ／＼と泣かつしやれぬは、なんと感心なものぢやないかいの。

百一　イヤ又、その泣かぬ涙が猶ほ倍。

百二　長兵衞さまの名代には、お乳母どのや家內の衆。

百三　皆寄合つて存分に、ナウ皆の衆。

百四　それ／＼、おいらも去んで夜と共に

鍬作　嬶アと一緒に泣きませうわい。

百一　サア、そんなら行きませうか。

皆々　ござれ／＼。

ト捨ぜりふにて、皆々上手切り幕へ入る。此うち、雅次郎、弓手を抱へ疵の痛むこなし。長兵衛、フトこれに目を付ける。

雅次　金瘡癒えて程を經ざるうち、水を注げば疵口破れ、忽ち再發なすとの俗說。ハテ、爭はれぬものぢやなア。

長兵　ナニ、金瘡のお痛みとな。それはハヤ御難儀でござりませう。その儀ならば手前方に、御滯留なされて、とくと御保養を。

雅次　イヤ／＼、金瘡とは申しながら、聊かな手疵。ナニこれ式の儀、行く先とても心急きに存じますれば。

長兵　左樣ではござらうが、娘が儀につき、何かと御辛勞にあづかり、お禮も申したくござれば、せめて今宵一夜は御一宿下され、澁茶なりとも差上げたう存じまする。

雅次　イカサマ、左樣仰せらるゝを、辭退申すも如何。然らばお詞に從ひ、一宿の仕り、お世話にあづかるでござらう。

長兵　御承知下され、先づは喜ばしう存ずる。シタガ、爰は取散らして見苦しくもござれば、ソレ、われ達はお客人を、あれなる離れ座敷へ。

うめ　アイ／＼。私しがお伴ひ申しまする。

長兵　身共も旅具を改め、それへ參るでござらう。

雅次　イヤ／＼、必らず御心配な御無用に存じまする。

長兵　女どもは娘が骸を、佛間へ直して香花なりとも。

きと　そりや私しが手向けの稱名。

雅次　然らば御亭主。

長兵　お客人。

雅次　後刻。

兩人　御意得ませう。

ト唄になり、お梅、手燭を持ち、雅次郎、後より、お菊、莨盆持ち、上手廊下へ入る。長兵衛は納戸へ入る。後におきと、その外腰元皆々、矢張り死骸に取りつき泣いて居る。橋がゝりより、とんとこ坊、道心者にて、銅鑼を持ち、次に萬作、豊作、麥作、百姓大勢、影燈籠、旗、天蓋、棺桶などを持ち出て來る。納戸より、きよろ作、出て來りて、とんとこ坊を見て

きよ　オヽ、道心坊のとんとこ坊、皆の衆も御苦勞々々々。

とん　なんの／＼、こんな事は此方の商賣。シタガ、思ひがけない今夜の葬禮。マア、今夜の所は假にして、明日本葬の積りで來ましたわいの。

きよ　それはよう氣が付きました。何分今夜は急の事。ほ

んまの葬禮は、明日の八ッ時の心積りぢやての。

豐作　私しもさうあらうと思うて、棺桶も持つて來ましたぞや。

萬作　サア〱、大方これで今夜の內葬は出來ると云ふもの。籏や天蓋は何所へ置きませうな。

きよ　されば、爰に置いては邪魔になる。マア、佛間へ直して置いて下され。

皆々　オツと、合點ぢや〱。

ト皆々道具を納戸へ持つて入る。此うち、きよと作、おきとを見て

きよ　これはしたり、どうしたものぢや。佛に淚をかけぬものぢや。サア、退かつしやれ〱。

ト無理におきとを退ける。此うち百姓皆々、納戸より出て來る。この時、隣り門口、竹簀の內より、典膳、着流し、大小、浪人者の形にて、出て來り、門口より窺つて居る。

きと　イエ〱、これがどう退かれるものかいなア。この世の別れと云ひ、まだ廿四時も經たぬ、葬禮はならんわいなア。

れん　さうでござんす。御寮人様を渡す事は

皆々　ならぬわいなア。

きよ　ハテ、困つた事を云ふわい。なんぼう別れたうなうても、どうで葬禮せにやならん體。

豐作　さうぢや〱。こなさんも死人を庇うて何になるぞい。

麥作　何はしかれ、湯灌が肝心ぢや。

きよ　マア、とんとこ坊、お剃刀から合點か。

とん　オツトショ。

皆々　サア〱、退いたり〱。

ト皆々寄つて、女形を引退けうとする。と表口より

典膳　待て〱百姓ども、待ち居らうぞ。

ト云ひながら、ズツと內へ入る、

きよ　ヤア、こなさんは隣りの御浪人。

豐作　出かけた葬禮を、なんでこなさん。

皆々　留めさつしやるぞ。

典膳　オ、サ、留めるには仔細ある。批判打たずと扣へて居らう。

きよ　扣へてよくば、ナウ皆の衆。

皆々　さらば扣へて居ませうかい。

典膳　入水の様子、詳しく承はつたが、それについて亭

主に逢ひたい。名越氏は何所にござるな。
れん　ハイ〳〵、只今の先歸られまして、奥へ參つて居られます。
典膳　然らば、早くこれへ呼ばつしやれ。
れん　畏まりました。
ト納戸へ入る。此うち、典膳、皆々を引退け、死骸を改め見て
典膳　人死して後、四十九日がその間、魂魄我が家の棟を離れず。ましてやこれは僅かの時刻。ムウ。
ト笑壺のこなしにて、好き所へ居直る。此うち、長兵衞、着付け改め、出て來りて
長兵　これはお隣りの御浪人、典膳どのには、ようこそ御入來。
ト二重眞中へ座に着く。
典膳　イヤ、長兵衞どの、お留主中に不慮の一儀、さぞ御辛勞、察し入りましてござる。併しながら、定業ならぬ御息女の一命。拙者一術を以て蘇生いたささうと存じまするが、この儀は如何でござるな。
長兵　イヤ、御厚志の段は忝なう存ずる。なれども、斯く御覽の通り、六脈を失ひ、呼吸を止めしその骸、耆婆扁鵲でも、何として〳〵。
典膳　所を活かすが家の秘法。長兵衞どの、息女が蘇生いたされなば、望みの縁談、いよ〳〵妻に申し請けますぞや。
長兵　ハテ、助かるべき手段もござらば、先づその時の仕儀に及ばん。
典膳　イカサマ、さらば蘇生を致さして見せうか。
ト合ひ方になり、死骸を引起し、こなしあつて
河伯の神靈、水藥を立退けて、蘇生の印を見せしめ給へ。
ト懷中より守り袋を出し、美鳥に持たす。ドロ〳〵にて、美鳥、心付く。
正氣が付いたか、美鳥どの。
トきつと云ふ。美鳥、あたりを見廻して
美鳥　爰は何所。
ト合點のゆかぬこなし。長兵衞、ギヨツとする。皆々愕りして
きと　ヤア、いとさんが活き返らしやんした。ヤア〳〵、サア〳〵、皆喜んで下され。コレ申し、乳母でござるわいなう。
れん　皆も爰に居りまする。旦那様もあれにお出でござり

ますれば
よし　ちやつとお逢ひ
皆々　なされませいなア。
ト美鳥、不思議さうに、あたりを見廻して
美鳥　ヤア、お父様。
長兵　娘、盲龜の浮木、優曇華の花。ハテ、眼前の
ト典膳を見る。典膳、ちやつと守を取り、懐中へ隱す。
不思議ぢやよなア。
トこなし。美鳥、我が身ながら合點のゆかぬこなしあつて
美鳥　死んだ骸がこの世にあらう筈もなし、冥途かと思へば、父上様始め乳母も居やると云ひ、見れば馴染みのこの住居、死んだと思うたが夢であつたか。活きたと思ふが現であらうか。わしや根ッから譯が解らぬわいなア。
きと　オヽ、お道理でござります。成る程あなたは柳ケ淵へ、身をお投げ遊ばして、お果てなされたに違ひはござらぬわいなう。
美鳥　それに又、どうして爰へは。
れん　サア、御合點が參りますまい。譯と申すは、あなた様、お果てなされたその後で、柳ケ淵の水底から、やうやうお體引上げて、介抱なされたお侍ひ様。
よし　せめては野邊の送りもと、連れてお出でなされたを
さわ　あの典膳さまがお越しなされて、何やら奇妙な禁厭で
きと　必死と見えたお命を
れん　蘇生なされたお仕合せ。
よし　旦那様のお喜び。
きと　乳母が嬉しさ。
さわ　お命に恙もなう
れん　様子と云ふは、この通りで
皆々　ござりまする。
美鳥　ヤア、なんと云やる。そんならわしや、甦つたのかいなう。
きよ　なんでもめでたい。仇の命を助かつた祝ひの事には、なんでもズッシリ、明日は鱈腹飲めると云ふもの。ナウ皆の衆。
豐作　さうとも〳〵。こりや一番、祝ひ事にはずまにやならんての。

典膳　イヤナニ、美鳥どの、蘇生召されて、さぞ喜ばしう
ござらうの。
美鳥　お父樣、堪忍して下さんせ。わたしや矢ッ張り死に
たうございますわいなア。
れん　エヽ、何を仰しやります。あなたはまだ、何も樣子
御存じないに依つてゞございまする。腰も肌もあらはに
おなりなされお體を。ナウ皆さん。
よし　殿御の肌にしつかりと、抱き締めなされたお方と云
ふは
さわ　ソレ、あなたが日頃、御信心遊ばしました、ナ。
れん　それ〳〵、石山詣でのその折に、觀音樣のお引合せ
なされた、ナ。
よし　ナア申し、ソレ……今のでな。
皆々　ございますわいなア。
美鳥　ヤア、なんと云やる。そんならその時の
れん　お侍ひ樣で
皆々　ございますわいなア。
美鳥　ヤア、そんならアノほんまに。
　トいそ〳〵して
さうしてマア、そのお方は、何所に居やしやんすぞいな
う。
れん　ハイ、今夜はお內に御滯留。あの離れ座敷にお休み
でございます。
美鳥　エヽ、ツヽとモウ、こんな嬉しい事はないわいの。
申しお父樣、わたしやモウ、死ぬる事は止めにして、そ
の代りに、わたしが願ひを。
長兵　オヽ、サ、聞き屆けたその上で、望みの通りに致して
もくれうが、何は格別、乳母、奧へ伴ひ、亂れし髮でも
取上げて遣はせ。
きと　コレ、お父樣のお指圖。ちやつとお髮を。
美鳥　そんなら乳母、お父樣、今の事を後に聞いて下さん
せいなア。乳母、奧へ行て、ちやつと結ひ直してたも。
きと　ハイ、そりやわたしが、あんぜう致して上げまする
……其方達は、お客人へもこの樣子を。
皆々　畏まりました。
　ト美鳥は離れ座敷を見て、今更恥かしきこなし。
皆々　サア、お出でなされませ。
　ト合ひ方になり、おきと、美鳥を連れ、納戸へ入る。
　おれんは離れ座敷へ入る。
典膳　長兵衞どの、この上は約束通り、美鳥どのは、いよ

いよ身共が妻女に申し請けますぞや。

　ト この時、奥より、歌之助、出て來て

歌之　イヤ、花聟の談合なら、此方が先約でござるぞ。

きよ　ヤア、こなたは淨國寺のお小姓。

百姓　歌之助どの。

腰元　そんならあなたも。

歌之　疾から申し込んで置いたのぢや。

典膳　イヤ、入水なして死したる息女、蘇生いたせし上からは、命の恩が緣のきづな。美鳥どのゝ夫と云ふは、取りも直さず五十嵐典膳、身共より外夫はないぞ。

歌之　ヤア、愚か〳〵。この名越の家は、代々續きし郷代官、他行の節は帶刀なし、武士の交り侍ひ同然。さすれば武藝の心掛け、太刀筋知らぬ身を以て、名越の聟にはなられまいかと、憚りながら存じまするて。

典膳　ハヽヽ、あくちも切れぬ寺小姓と相見ゆるが、武藝は元より體術、柔術、いま日の本に一人たる、武術師範の五十嵐典膳、あの表札が眼に見えぬか。

歌之　勸學院の雀は蒙求を囀り、智者の邊りの童子は習はぬ經を讀むと聞く。我れとても武士の身分、朝妻歌之助業久、お望みとならば、お相手になりませうか。

典膳　辻放下の業を以て、誠の武術に立合はんなぞとは、叶はぬ事ぢや。打ち据ゑられて恥をかかうより、前髪の身分相應、やんまなりとも釣つて居をらう。こな大馬鹿者めが。

歌之　ヤア、云はして置けば、出る儘の法外。無益の論に口手間入れうより、勝つか負けるか試合の一手。マア、立ち上がつて勝負〳〵。

典膳　オヽ、望みならば立合つてもくれうが、身が一流は木刀たりとも眞劍同然。一寸でも觸るが否や、忽ちうぬが命が無いぞよ。

歌之　ヤア、その廣言は後での事。サア、立ち上がつて用意用意。

典膳　ナニ、これ式になんの用意。思ふ存分構へ來よサ。

歌之　うぬ、今にその息の根を……ソレ、女中達、その竹刀持たつしやれ。

皆々　アイ〳〵。

　ト 竹刀を眞中へ直す。長兵衞、此うち莨のみ、思案のこなし。きよと作は眞中へ入り、扇を開き

きよ　東西々々、只今の晴れ勝負。片や五十嵐、こなた朝妻。

ト相撲の名乘りのやうに云ふ。此うち歌之助、提げ緒にて襷かけ、手拭にて鉢卷締め、前へ出て

歌之　イザ、參らうか。

典膳　サア、存分に打つて參れ。

ト典膳は其まゝ竹刀の側へ行き、歌之助をキツと見る。これにて、氣を呑まれ、慄ふこなしあつて

典膳　サア。

歌之　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト白囃子になり、歌之助、無二無三に打つてかゝる。典膳、身を交し、素股を打たし、其まゝ竹刀を取つて跳ね退ける。歌之助、ウロ〳〵して、一生懸命と云ふこなしにて、また打つてかゝる。皆々笑ふこなし。トドなんの苦もなく歌之助を打ち据ゑる。此うち、隣りより、宅助、出かけ見て居る。

典膳　なんと身共が一流、胴骨に應へたか。

歌之　アイタヽヽ、應へた〳〵。所を又斯う。

ト竹刀を拾ひ、足を掻かんとするを、典膳蹴倒す。又來かゝるを竹刀にて、脾腹を當てる。これにて、歌之助、タヂ〳〵と後へ寄つて、ベタツリ下に居て苦しむ。皆々立ちかゝつて

とん　歌之助どの、これはしたり、氣を慥かに持たつしやれ。

百姓　お客人樣いなう。

ト介抱する。歌之助、苦しみ、物云はれぬこなし。此うち宅助、門内へ入り

宅助　天晴れ〳〵、今に始めぬお旦那のお手の内。何は格別、彼の美鳥どのを。

典膳　オヽサ、善は急げ、連れ歸つて抱いて寢る。ソレ宅助、合點か。

宅助　心得ました。

ト奥を目がけ行かうとするを

長兵　コリヤ、何所へ參る。

トよろしく留めるを

宅助　ハテ、知れた事、美鳥どのを。

長兵　默らう此奴。名越が家内へ一寸でも切り込んだが最期、手は見せぬぞ。

宅助　何を小積な。

ト又行かうとするをよろしく留めて

長兵　こな盛切り野郎め。

ト平舞臺へよろしく投げて
退り居らうぞ。
　トきつと云ふ。典膳詰めかけて
典膳　身が家來を、何ゆゑ手籠めに致し召さるゝ。死したる娘を蘇生させたる大恩と云ひ、兵書を諳んじ武術へ通り、拔け切つて居る典膳、聟に取つて不足のあらう筈もなし。望みかゝつたこの縁談。不承知とあれば、此方にも又思案がある。サア、返答はドヽどうでござるぞ。
長兵　承知いたした。
典膳　得心とあれば、何ゆゑお渡しは下さらぬ。
長兵　婚禮は萬政の始め。娶る時には媒人を以て事を定む。こりや申さずとも知れた格式。
典膳　すりや、媒人が無いに依つて、違變召さるか。
長兵　イヤ、違變は仕らぬ。娘にもとくと云ひ聞かせ、納得させたその上で、めでたう送るは吉日良辰。
典膳　ムウ、面白い。しかと詞を番ひましたぞ。
宅助　嫁御寮のお迎ひに、參りかゝつた奴めは、思ひがけない痛い御馳走。
　ト腰を抱へこなし。此うち、歌之助、苦しみ居て、トドウンと云うて悶絶する。皆々見て

きよ　ヤア、こりや眼が廻つたさうな。
　トいろ〳〵介抱して
こりやモウ、何所も彼も冷え切つて、ほつくり往生、脈も上がつたわい。
皆々　ヤア〳〵。
宅助　お旦那〳〵、かゝり合ひの來ないうちに、早くお歸りなされませう。
典膳　イヤ、苦しうない。うぬが心からその身の自滅。斯樣な事は打捨て置くがよいて。
宇助　然らば此まゝ。
典膳　罷り歸る。
　ト宅助、草履を直す。典膳、草履を穿き、行かうとして
イヤナニ長兵衞どの、有無の返事は明朝未明、必らず待つて居るぞや。宅助參れ。
宅助　ネイ。
　ト唄になり、こなしあつて、隣りの家へ入る。
きよ　時に皆の衆、お娘が甦つたので、持ちになつた葬禮の道具。いつその事この佛を、野邊送りとはどうあらうの。

とん　ほんに、こりや好い思ひ付きぢや。
皆々　オヽ、さうぢや〳〵。それがよい〳〵。
きよ　そんなら皆、手傳つて下んせ。
皆々　オツと、合點ぢや〳〵。
ト皆々手傳ひ、歌之助を上着脱がせ、長襦袢一つにして、棺桶へ入れて、繩をかけて
きよ　サア〳〵、これで棺も、ザツと濟んだと云ふものぢや。
とん　併し、この佛は、いつそ土葬にして、葬はうではないか。
皆々　さうせい〳〵。
豐作　そんなら、これから念佛ぢや〳〵。
とん　オツトシヨ。なまいだ〳〵。
きよ　そんなら長兵衞どの、祝ひ事を忘れまいぞや……サア、皆の衆、やりかけうか。
皆々　オツと、合點ぢや〳〵。
萬作　待て〳〵。體がしやちばつて、半分出かけて居るぞよ。
きよ　エヽ、半分出ようが皆出ようが、そんな頓着はない。サア〳〵、此まゝやりかけた〳〵。ソレ女子衆達、門火ぢや〳〵。そつこでしつかり坊さん、ちりゝん。
とん　オツと承知ぢや。ぐわん〳〵。
ト銅鑼を叩き、棺桶を擔ひ、皆々向うへ入る。お鍋、箒にて掃き出す。
なべ　エヽ、起緣の惡い。山へ行け〳〵。
長兵　コリヤ、其方は座敷へ參り、お客人が御寢なつてござらずば、それへ參つて、ちとお物語りが致したうござるが、苦しうないか、尋ねて來よサ。
なべ　ハイ〳〵、その通り申して參ります。
ト上手へ入る。
長兵　未だ壯年とは見ゆれども、一器量あるべき骨柄。娘が願ひの譯と云ふも。
トこなしあつて
先づそれはそれにしても、合點のゆかぬ典膳が只今の振舞ひ。六脈絶えし娘が骸、蘇生させしは、傳來の秘法と云へど、よく〳〵思へばさにあらず。懷中させし守の内如何なる所や、ハテ訝かしい。
ト思案のうち、上手の内にて
皆々　旦那樣がお尋ね申せと、申されましてござります。
雅次　イヤ〳〵、お出でに及びませぬ。拙者がそれへ推參

いたさうて。

ト合ひ方になり、雅次郎先に女中皆々付き添ひ出て

イヤ、これは御亭主、これにござるか。

長兵　これはお客人、先刻よりちと內用ござつて、甚だ失禮。御容赦にあづかりたう存じまする。

雅次　これは御挨拶。只今承りますれば、何か一術のござつて、御息女には蘇生召されし由。先づは重疊。御親父の儀なれば、さぞかしお喜びでござりませうて。

長兵　なか〳〵御推察下さりませう。

ト此うち、美鳥、髮を結ひ直し、着付けも改め、納戸より出て來り、雅次郎を見て、嬉しきこなし。女中皆皆側へ行けと云ふ仕方。美鳥、雅次郎に見惚れ、うかうかとして、思はず長兵衞に行き當り、恟りして、ちやつと彼方へ向き、好き所へ坐る。

雅次　イヤ御亭主、一宿とは申したなれども、御息女の御安否も見屆けし上からは、最早拙者、お暇仕りませう。

長兵　アイヤ〳〵、お待ち下され、一宿と申した所が、夜明けまでは今暫し。殊にまだ夜更けの儀でござれば。

雅次　イヤ、御懇志の段は、忝なう存ずれども、心急きにもござる上、結句夜中の往來が、勝手にござる程に、御緣もござらば、又々お目にかゝりまする儀もござらう。

長兵　成る程、お心急きとござれば、達てお留め申すも如何なれども、等閑ならぬ金瘡の惱み。打捨て置かるゝと得て風などを含みまして、破傷風に相成りませう程に、暫時爰に御在宿あつて、とくと御保養の加へられ、その上にて旅行いたさるゝも、さのみ遲かるまじき儀と存じまするて。

美鳥　お父樣、さうでござんす。どうぞマア、十年も百年も、私しが內で、とつくりと御保養遊ばして、つツとモウ……申し、あなた、ようお出でなされましたなア。

雅次　オヽ、これは御息女、御一命に恙もなくて、喜ばしう存じまする。

美鳥　ハイ、私しも喜ばしう存じまする。それにつけても先刻には、いろ〳〵お世話樣になりましたやうに聞きまして、それは〳〵、たんと〳〵、お嬉しい事ぢやさうにござりまする。

トいろ〳〵こなしあつて云ふ。

雅次　これは〳〵、痛み入つたる御挨拶。猶この上は御親父樣へ御孝行が第一。家名相續なさるゝが、肝要と存じ

まする。
美鳥　ハイ、私しも左樣に存じまして、急に殿御を持ちまして、この名越の家を立てまするが、マア、お父樣のお氣休めにもなりませうかと、ナウ皆の衆、わしやさう思ふわいの。
きと　左樣でござりまする、と云うてアノ典膳さまは、お嫌でもあらうし。
れん　オヽ、おさとさんとした事が、お前樣は何にも譯を知らしやんせぬが、御浪人樣の思惑は、ソレ、そこらあたりに
ト顏にて、雅次郎ぢやと云ふこなしにて
ぢやわいなア。
きと　フム、そんなら。
ト雅次郎を見て、美鳥、恥かしき思ひ入れ。
れん　石山詣でをなされた時
よし　觀音樣へ深いお願ひ。
きく　叶へて欲しいと仰しやつたは
れん　このお願ひで
皆々　ござりまする。
ト皆々こなし。長兵衛、こなしあつて

長兵　イヤ御浪人、近頃卒爾にはござれども、當國蒲原郡、八ケ村の代官たる名越長兵衛、男子とてはこれなく、たつた一人の娘美鳥、生れついて不束なれども、袖振り合ふも他生の緣とやら。お心には染みますまいが、なんと聟になつては下さるまいか。
トこれを聞いて美鳥、喜ぶこなし。皆々もこなし。
雅次　イヤサ、その儀は。
長兵　武者修行とござれば、御由緒もさぞかし。俤しながら我れとても、以前は鎌倉に於て、足利家の仕官にて、兵書の表、武の道も、少々は空んじて罷り在りし者。なんとこの儀、御承知は下さるまいかな。
雅次　成る程、重々の御懇切は、この身に取つて忝なう存じまするが、行くへ定めぬ旅路でござれば、幸ひの緣談、兎も角もと、サア、お請けも申したけれど、ちとこの身には大望の儀がござつて、その願ひの立たざるうちは、妻女を申し請くるも又、他家相續の儀も、御容赦にあづかりたう存じまする。
長兵　フム。すりや、お氣に叶ひませぬか。
雅次　何とも近頃以て、お氣の毒に存じまする。
長兵　フム。

トこなし。これを聞いて、美鳥、刀架の刀を持つて來て

美鳥　さうぢや。

ト死なうとするを、よろしく留め

長兵　娘、其方は何ゆゑ相果つるぞ。

美鳥　何ゆゑとは父上樣、殿御を持たねば家が立たず、と云うて頼みを入れて、娶らんと云うて下さんすお人はあれど、どうした事やらフツ〳〵と、わたしが心に染まぬゆゑ、それぢやに依つて。

長兵　親に先立ち、不孝者の名を取りたいか。

美鳥　エヽ。

長兵　さうでなくば扣へて居らうぞ。

美鳥　それぢやと云うて。

ト又死なうとするを

長兵　こな、たわけ者めが。

ト刀を引取り、こなし。美鳥、泣き、思ひ入れあつて

美鳥　お父樣の常々から、お示しなされた御教訓、わたしやよう覺えて居りまする。貞女兩夫に見えずとやら、二人の殿御に肌觸るゝは、女子の身では不義徒ら。恥辱のこれが第一と、仰しやつたではございませぬか。尤もあなたに枕は交さねども、あの衆達が云やるを聞けば、柳ケ淵の水底から、肌と肌とを打合せ、抱いてもらうて御介抱。なりやコレあなたに肌觸れし、わたしが體は今更に、又のお方に肌觸れぬ、女子の操、命を捨てゝ貞女の道が、立てたうございますわいなア。

ト泣きながら云ふ。

長兵　日頃の教訓忘れざる、其方が貞節、よく云つた。オオ、出かした〳〵。イヤナニ御浪人、只今お聞きの譯でござれば、緣組み御辭退下さるゝと、アレあの娘めが相果てますがと、サア、申しても御不承知の緣談、達てとも申されず。さりながら、只今の先仰せらるゝには、何か御大望の思し召し立ちあるとの儀。仕儀に依つては、お力とも相成りませうが、して、その御大望とは、如何やうな儀でござる。何卒仔細をお明かし下さるまいか。

雅次　ナニサマ、御入魂のお詞と申し、御息女の御貞節、この上は是非に及びませぬ。如何にも仔細お物語りも仕らうが、何分他聞を憚る一儀でござれば。

長兵　御尤も……イヤナニ女ども、われ達は次へ。

皆々　畏まりました。

長兵　サア、行け〳〵。

皆々　ハ、イ。

ト合ひ方になり、皆々納戸へ入る。長兵衛は顔にて、表を締めと云ふこなし。美鳥、心得、門口を締める。雅次郎は下舞臺へ下りる。長兵衛も差添持ち、同じく平舞臺へ座に着く。引添うて美鳥も座に着く。皆々こなしあつて

長兵　密事とござれば、他言すまじき某が潔白。

ト合方打して

斯くの通り。

トこれにて、雅次郎、こなしあつて

雅次　この上は、何をか包み隠しやうもござらぬ。拙者親どもは鎌倉の昵近。仔細ござつてお暇蒙むり、當越後の國へ蟄居いたし、父は醫道を業となす。その頃兄弟二人の男子。兄は十三歳の折、我が父末の爲にとて、某事を京都へ差上せ、書生の數に入れ置かれしが、早立つ月日成人に從ひ、よく〳〵思へば武士の倅、書生の業にて朽ち果てんより、武道を辨まへ父が家名、先祖の遺跡を起さんものと思ひ立つより、師に乞うて暇を取り、京地を立退き、諸國を經廻る武者修行。それにつけても、我が存念、父にも告げんと先月半、四ケ年振りにて當國へ、歸つたる折も折、平幡村の松原にて、思はず行き合ふ曲者が、打込む手疵は則ちこの金瘡。粗忽の段を詫びるがゆゑ、是非なく其まゝ相別れ、後にて見れは旅人の死骸。我が身に受けし手疵の血汐、一つになつて混ずる有樣。こは訝かしと思ふにつけ、その仔細を聞かんも早縁切れ、必死の有樣。兎やせんと思ひがけなき傍へにも、また血に染みて苦しむ女。立寄り見ればこれも手負ひ、介抱なしてよく聞けば、討たれし旅人は我が兄者人。手負ひし女は即ち嫂。當國神津家へ召し出され、仕官に有りつくその砌り、親人には彌彦山にて、人手にかゝり御最期ありしと、聞くに五臟六腑も碎くる思ひ。その仇敵を報はん爲、出國ありし兄者人を、途中に待ち受け又ぞろや返り討にと聞くにつけ、さては只今出ッ會せし、曲者ならんと察せしながら、時刻移れば追ひつかん、日當も失ひその上に、深手に惱む嫂も、遂に果敢なきその場の臨終。兄嫂の亡骸を、一つに寄せて烟となし、父が恨み、兄夫婦が修羅の鬱憤、晴らさんは只一人の、鹿野苑軍八、おのれやれ、假へ時日は過すとも、尋ね當てゝ、ずた〳〵に、切り苛なみて手向けんと、片時も忘れぬ我が大望。それゆゑにこそ御懇志の、御意に背きし縁談を、

否み申すも右の仕合せ。お尋ねに依つて長物語り。拙者が無念さ本意なさを、御推察下され、長兵衞どの。

ト此うち長兵衞、いろ〳〵こなしあつて

長兵　フム、さすれば以前は鎌倉の……して、父御の御姓名、こなた樣のお名は。

雅次　鎌倉に在りし頃は、父が名は逸見權藤次正武。蟄居の後は醫業となつて喜樂齋。兄は源五郎正村。拙者は逸見雅次郎正輝と申す者。

長兵　ナニ、逸見氏の御子息雅次郎どのとな。誠に、年月は經るれども、幼な顏に見覺えあり。ても健やかに成人召されしよな。

美鳥　エヽ、そんならあなたを、御存じでござんすかいなア。

長兵　オヽ、サ、知らいでならうか。

ト ずつと立つて、押入れより、袱紗包みの印籠を取出して

雅次郎どの、これ見知つて居召さるか。

ト好き所へ直すを、取上げ見て

雅次　こりやコレ木瓜の高蒔繪。正しく我が家の定紋にて父が秘藏のこの一品。我れその頃は幼稚と云へど、見覺えのあるこの印籠。所持し召さるゝその仔細は。

長兵　娘喜べ。其方が爲には、云ひ號けの夫なるぞ。

美鳥　エヽ。

雅次　ア、イヤ〳〵、長兵衞どの、御息女と云ひ號けとは。

美鳥　お父樣、これにはなんぞ

雅次　樣子がござらう。仔細はなんと。如何で

兩人　ござりまするぞ。

長兵　ホヽ、斯うばかりでは御合點ゆくまい。元、某は鎌倉の住人、世に在りしその時は、松江新左衞門宗久と相名乘り、貴殿の御親父權藤次どのとは、竹馬の朋友、無二の入魂。その頃は御邊は七歲、これなる娘は三歲、成人なさば嫁に貰はん、如何にも進上いたさんと、ソレその印籠を當座の結納。親と親とが詞の金打。然るに程なく御邊等御親子、豈計らんや蟄居いたされ、間もなく我れも佞人の、讒にかゝりてお暇賜はり、聊かの所緣に依り、當地へ立越え、いま鄕代官の家を繼ぎ、名も改めて名越長兵衞。それにつけても折々は、逸見氏には如何成行き召されしぞと、過ぎ越し方を數ふれば、早十四ケ年の經つ月日。變り果てたる權藤次どのゝ横死より、御舍兄夫婦も非業の刃に、世を早う過し召されしとは、始め

て聞いて今更殘念。さはさりながら、親が結びし二人が妹脊。宿世の縁の歸せるところ。思へば不思議に今日の名乘り合ひ。變つた縁であつたよなア。

美鳥　エヽ、そんならいよ〳〵あなた樣と。

長兵　オヽサ、天下晴れて其方が戀聟。

美鳥　さうとは知らず戀ひ慕ひ

長兵　巡り〳〵て思はず今宵。

雅次　因みを結ぶこの場の有樣。

美鳥　思ひがけない

長兵　一家の縁で

三人　あつたよなア。

　ト三人こなし。

雅次　この上は違背に及ばず、御息女を申し請けんが、さりながら、彼の願ひを達するまでは、舅どのへお預け申す。

美鳥　アレ申しお父樣、今のをお聞きなされましたか。夫婦になつてやらうと仰しやるわいなア。

　トいそ〳〵として喜ぶ。

長兵　オヽ、さぞ其方も滿足であらうの……シタガ、聟どの、して、その敵の行くへ尋ぬべき、手がゝりとてもござるかな。

雅次　さればサ、出合はせし砌り、提灯は所持し居つたれど、とくと面體見とむるにも及ばず、後にて聞いたる拙者が殘念。さりながら、兄源吾どのゝ所持召されし、西天草と云へる一品。これを所持なすその身には、身體髮膚に疵を受けず、まつた死したる者も定業ならずば、蘇生いたさす稀代の靈草。彼の者これを奪ひ取りしと、今際に聞いたる嫂が物語り。これぞ詮議の種ならんと、千々に辛勞仕り居ります。

　ト長兵衞、これを聞いて、思はず膝を打ち

長兵　フム、さては最早六脈絕えし、娘が必死のその砌り、守と覺しき一品を、肌に添へれば忽ち蘇生。もしやそれが今仰せられし、西天草にてはあらざらんや。ハテ、何ともハヤ。

　トこなし。

雅次　フム。して〳〵、その者は何國の何者。

長兵　二十日以前よりこの地へ參り、武術の師範、五十嵐典膳と名乘る者。

美鳥　わたしをくれいと無體の有り條。あの壁一重隣り同士、名もあり〳〵と書いた表札。

雅次　さてこそな。
　ト刀を持ち、立ち上がらうとするを
長兵　イヤ待つた聟どの。例へ西天草に極まるとも、もし別人にて他人の手より、譲り受けまいものにもあらず。粗忽あつては後日の妨げ。とくと實否を糺した上、いよ〳〵敵に極らば、何時討たうとも儘な事。必らず早まり召さるゝな。
雅次　イカサマ、御尤も。そんなら仰せに從ひ、何かの手筈は。
長兵　奥へござつてとくと密談。
美鳥　わたしが願ひも
雅次　二世の契約。
長兵　萬事は奥にて
美鳥　いつ〳〵までも
雅次　變らぬ印は、ソレ。
　ト印籠を抛つてやる。美鳥、取つて
美鳥　エヽ、お嬉しうござりまする。
　ト喜ぶを見て
長兵　ハテ、嬉しさうな顔わい。
雅次　イザ、舅どの。

長兵　聟どの……娘、御案内。
美鳥　アイ〳〵……サア、斯うお出でなされませう。
　ト唄になり、三人こなしあつて、納戸へ入る。合ひ方になり、橋がゝりより、夜番、鳴子を振り、出て來て
夜番　火の廻り〳〵……今日は思ひがけない、お代官様のお娘が身投げで、村中がひつくり返して、えらい騒動をした事ゆゑ、肝心の宵寐する間がとんとなかつた。併し、ちつとの間トロ〳〵やつたが、どうやら寢過したやうにもあるし、早いやうにも思ふが、とんと時が何時ぢや解らん。困つたものぢや。ア、儘よ。誰れぞ來たら尋ねて見ようわい。火の用心〳〵。
　ト云ひながら、花道へ鳴子振り入る。割り竹、鈴の音、合ひ方。戸家の内にて頻りに犬の聲する。とバタ〳〵にて、向うより、歌之助、最前の形にて、走り出て、後先見廻し
歌之　ヤレ〳〵、恐ろしや〳〵、既の事に蒸焼きに遭はうとした。シタガ、斯う云ふ形で、とても寺へ去ぬる事は出來まい。と云うて此まゝに我れ死にたりと聞くならば、後に殘りし娘が嘆き、本意なう思ふもこれも不便。ア、コレ、どうぞ密かにこの様子、娘にちよつと知らしたい

ものおやかなア。

トこなしあつて、そろ〳〵門口へ來て、表を明けうとしても明かぬこなし。こと〳〵と人音する。これに驚ろいて、ソツと花道へ引返し、窺ひ居る。始終合ひ方。奥より、雅次郎、窺ひ出て、ソツと表を明け、隣りの表札を透かし見て、戸を探り、締りあるゆゑ、塀際の見越の松より、内へ忍び込む。始終右の腕の痛むこなし、トゞ隣りの内へ忍び込む。歌之助、窺ひ出て、ソロソロと戻つて來て

思はず戸の明きしは天の與へ。エヽ、忝ない。

トそつと内へ入り、直ぐに奥へ行かうとして立戻り、ちよつと思案して

イヤ〳〵、一筋繩では行かぬ親仁め。家内の奴等が寝込みを考へ、お娘に直ぐに猿轡。有無を云はさず引ツかたげ。

ト行燈を吹き消し、こなしあつて

へヽ、占めたぞ〳〵。

ト笑壺のこなし。砧の合ひ方になり　　返し

造り物、三間の屋體、右屋體の内、下手にて一間仕切り障子を立て、二間の間、後ろ鼠壁、納戸口、上手、返し前の塀裏の體。入り口に框を落せし書割り。返し前の見越しの松、根元を見せ、その前、寄せ垣。下手、藪疊、後に内より切り破り入るやう、屋體の下手、見切りかづま塀、右二重の上に、典膳、寝卷。銀平を相手に碁を打つて居る。側に五太夫、見て居る。よき所に行燈灯し、長押に竹刀、刀架に大小を掛けあり、平舞臺に、傳助、角藏、酒肴を並べ、酒を呑んで居る。宅助、酌をして居る見得。遠砧の合ひ方にて、道具納まる。

宅助　いづれも樣、お肴が少なうて、上がり憎うござりませうて。

傳助　イヤ〳〵、さうでない。何が酌人が好いので、甚だ醉が廻つたと云ふもの。

角藏　拙者などは餘程酩酊いたしての。

五太　お娘の白石切つて押して、せしめるとは、巧いた巧いな。

典膳　さればサ、この黒石が、媒人と云ふ中手を入れて、四鳥にかけた嫁の談合。

銀平　寺小姓めが隅の方から、目を以て覗ふと致しても
典膳　斯う跳ね上げて續かせぬが先手後手。
　ト傳助、下より及び腰に見て
傳助　南無三、一目押された先生の本望。
角藏　銀平が負けだ／＼。
典膳　ハ、、、先づ幸先ようて、めでたい／＼。
宅助　イヤ、お二人樣、碁は暫らく取措いて、ちと御酒でも參りませぬか。
銀平　イヤ／＼、酒どころではない。肝心の勝負を返り討に致された。
五太　返り討とは面白い。
皆々　ハ、、、こりや出來た／＼。
宅助　イヤ、肝心の儀を失念いたし居る。先刻團之丞どのよりの密書到來いたしたれど、お留主中ゆゑ、文箱の儘預かり置きました。イザ、お受取りなされませう。
　ト文箱を出して、前へ置く。
典膳　ナニ、團之丞どのより。
　ト狀を出し、披き見て居る。
宅助　當地にござるも氣ぶさいに存じますれば、一刻も早く彼の地へお出であるやうにと、使ひに參りし者が申しましてござりまする。
典膳　よし／＼。
　ト狀を卷き納め、懷中して
各々方の助力を以て、彼の者を安々と討ち留めましたれば、最早氣ぶさいな儀はござらねど、椎津家より我れ我れが行くへ、密々詮議いたすとの風聞。これとても恐るに足らねど、血氣に逸るは匹夫の勇。何を致すも命が物種。
五太　我れ／＼とてもその場より、逐電いたして所々を經廻り
銀平　然るに計らず貴殿の御住居、聞くと等しく我れ／＼四人。
傳助　彼の下世話で申す居候ふとやら。
角藏　風來者の天竺浪人、さぞ御面倒に
四人　ござりませうな。
典膳　なんの／＼、話し相手が出來て、身も喜ばしう存ずるての。
宅助　時に何れも樣。このお杯は、もう一遍廻して、取りませうではござりませんか。
傳助　イヤ／＼、廻すまでもない。その邊で納めて下さ

れ。
角藏　それがようござる。イヤ、兎角申すうち、餘程夜も深更に及びましたて。
典膳　もう拙者にお構ひなく、何れもには休まつしやれ。
五太　然らば先生、我れ〳〵どもは
典膳　明朝又々御意得るでござらう。
四人　お先へ參りまする。
典膳　サヽ、ござれ〳〵。
ト合ひ方になり、四人、目禮して納戸へ入る。
宅助　もうお旦那にも、御寢なりませぬか。
典膳　何を申すやら。彼奴が返事聞くまでは、寢るにも寢られず、辛氣辛苦の小手枕サ。
宅助　イヤ、お旦那も餘程お好き樣ぢや。
兩人　ハヽヽヽ。
宅助　然らば御酒でも參りませぬか。
典膳　酒よからう。持つて來い〳〵。
ト碁盤へ凭れ、石を並べて居る。
宅助　ネイ〳〵。
ト德利を取つて、ちよつと振つて見て
南無三、皆明けてチンチロリンになつて居ります。ドレ、ちよつと一走り。
典膳　イヤ〳〵、無くば飲まずともよいのサ。
宅助　お旦那はよくても、おらが腹の蟲めが、酒と聞いてはグウ〳〵と吠え居りますての。と云うたところが又、御用があらうも知れず、おらは行かれず、こんな時に人遣ひのないは、さりとは不自由なものぢやて。
トこなし。この時、寄せ垣の後より、雅次郎、返し前の形にて出て
雅次　イヤ、そのお使ひに行て參りませうか。
ト云ひながら下手へ廻り、ソツと刀を下家へ隱す。
宅助　ヤア、わりや何者。何時の間に何所から來たぞ。
雅次　イヤ、ツイ其所から參りました。
宅助　ナニ、外からとは、ハテ、合點がゆかぬ。戸口には樞落してあれば、明く筈はないに、外から來たとは、自體何所から參つたぞ。
雅次　ナニ、ツイあの見越しの松から塀を乘り越え、小隅に屈んで居ましたて。シタガ、なんと戸を明ける世話が要らいで、手廻しでござりませんか、
宅助　これは興がつた事。さては盜人流の案內だの。
雅次　左やう〳〵。

宅助　ハヽヽヽ。シタガ又、この深更に及んで、忍び込んだ樣子はどうだ。

雅次　ハテ、近い頃からこの在所へ、引ッ越してござつた武藝の達人。

宅助　五十嵐典膳さまと云ふ、お旦那のお名を聞き傳へてか。

雅次　如何にも。柔術の一手も御指南にあづかりたさ。

宅助　それゆゑ弟子に參つたか。

雅次　どうぞ先生へお取次を頼みます。

典膳　イヤ、取次までもない。對面いたしてくれう。

雅次　これは先生。

トこなし。これにて、宅助、扣へる。

典膳　イヤナニ若者、弟子入り致す者が、夜中と云ひ、深更に及び、塀を乘り越え、人も無氣なる不敵の振舞ひ。ハテ、小ざかしき奴。して其方は何國の何者、稽古の下地があるか。但しは無手か。どうぢや。

ト此うち、雅次郎は典膳に目を付け、さてこそと云ふこなし。

雅次　イヤ、拙者は近國を徘徊いたし、一家一門もない天竺浪人。世の營みは切取り強盜。夜中を往來いたすうち、フト目に付いた表の標札。何卒先生の一流が、奧床しう存ずるから、萬更無手でもござらぬ。拙者一手二手御指南にあづかりたさに、斯くの仕合せ。何卒お聞入れ下さりませうや。

典膳　ハテナア。

トこなし。此うち宅助、竹刀を取つて來て

宅助　無手でなくば、先づお目見得の下稽古。ちよいとおらが斯う。

ト打つてかゝるを

雅次　夜盜を働らく身分相應。少しばかりは心掛け居ります。

ト宅助を引廻しながら、ちよつと腕に響くこなしにて、腕を抱へる。

宅助　所を、うぬ。

ト又かゝるを、よろしく竹刀を叩き落し、手早く小柄を出して、典膳、目掛け、エイと手裏劍に打つ。典膳、キッとなつて

典膳　童め、こりや何をひろぐ。

雅次　先生と相頼む目見得の印。

ト宅助を見事に投げる、典膳、小柄を見て

典膳　この小柄はどうやら。
　トこなし。
雅次　慥かに返濟仕る。
典膳　なんと。
　トよく〳〵見て、悄りして
　こりやコレ先月平幡に於て
雅次　不意に出會ひし粗忽の狼藉。
典膳　人こそ來りて打込む切尖。
雅次　心得たりと扣ゆる提灯。
典膳　互ひの面體それぞとも
雅次　朧ながらも
典膳　骨柄恰好。
雅次　なんの忘れうその時の
典膳　云はねど知れし旅の侍ひ。
雅次　思ひがけなう
典膳　巷つた所で
雅次　不思議の出合ひ。
典膳　ハテ珍らしい
兩人　對面ぢやよなア。
　ト兩人、心意氣こなし。

宅助　イヤモウ、何國に近付きがあるまいとも申されぬ。シタガ、その夜の旅人とあらば、お旦那、御油斷あられますな。
典膳　人を殺めて立退く身共。他言せまじと口止めなしても、もしやと存じて小柄の手裏劍。ハテ、命冥加な幸運ぢやなア。
雅次　ハ、、、、命は萬寶、その身の隨一。只あれ式の儀で、滅多に犬死はよう仕らぬ。
　トこなし。典膳、宅助へ目配せする。これにて
宅助　さほど大切な一命でも、騙すに手なし。まツ斯う。
　ト刀に手をかけるを、ちよつと立廻つて、宅助をちよつと當てる。典膳、これを見て、刀架の刀を取り、キツとなる。雅次郎これに目を付けるゆゑ、チツと控へる。合ひ方、きつぱりと替り、雅次郎、隱し置きし刀を取つて、キツとなつて
雅次　サア、有やうに云はつしやれ。
典膳　云へとは、そりや何を。
雅次　非道の段々、盜賊の所業。
典膳　なんと。
雅次　典膳とは假の名。誠は椎津家に新參たる鹿野苑軍八。

典膳　すりや某を軍八と。

雅次　汝が俗性具さに語りし、お衣重どのゝ御遺言。彌彥山にて喜樂齋どのを殺害なし、まつた平幡に於て源五郎どの夫婦を返り討、西天草を奪ひ取りし、極惡不道の鹿野苑軍八。名越氏の必死の息女、蘇生させしは件の藥草、あさる雉子の夫乞ひに、おのが在所を知らるゝ不覺。これぞ全く天命の、歸する所と知らざる粗忽。我れこそは喜樂齋が末子、京都の書生に生ひ立ちし、逸見雅次郎正輝と云ふ者。父と云ひ兄夫婦まで、重なる敵は鹿野苑軍八、遁がれぬ所ぢや、尋常に覺悟いたして恨みを受けよ。

典膳　フム、さては喜樂齋が末子たる、雅次郎にてありしよな。斯く露顯の上は何をか包まん、遺恨の元は汝が嫂、衣重に戀慕、それゆゑに喜樂齋始め、悴源五郎お衣重諸とも、殺らして、難なく手に入る西天草。その夜汝に切りつけし、我が一刀は今に於て、惱みと見えて最前より、金瘡に惱む其方が振舞ひ。なんと骨身に應へたであらうがな。殊には西天草を所持する軍八、切つても突いても鐵石同然。兎の毛程でも身には立たぬぞ。要らざる意氣精打張つて、又返り討にならうより、逃げるが勝だ。とつとゝこの場を立去り居らうぞ。

雅次　ヤア、愚か〱、異論に及ばず討つて捨つべき奴なれども、おのが口より非道の段々、白狀させんその爲に、猶豫なせしは武道の本意。打ち打たるゝはその身の天命。西天草を相渡し、サア、尋常に勝負〱。

宅助　ヤア、憎くい廣言。お旦那のお手を下ろさるゝまでもない。おらが手並で刀の引導。覺悟極めてそれへ出をらう。

雅次　うぬ、妨げなさば手は見せぬぞ。

宅助　何を小癪な。

典膳　よいワ、望みに任せ、敵討の勝負いたしてくれうサ。

宅助　マア、その先に、このだんびらを。

ト拔打ちに切つてかゝるを、立廻り。大小入り合ひ方になり、典膳、碁盤を取つて、雅次郎の痛手を目がけ打ちつける。雅次郎、身を交す。典膳、二重より飛び下り、拔打ちに打つてかゝる。立廻り烈しく、この物音に奧より、四人の侍ひ、押取り刀にて出て、有無を云はさず切つてかゝる。皆々敵役手を負ふ。右立廻り、好き所にて、宅助、行燈に行き當る。これにて火消え、

暗がりになり、忍び三重になり、皆々探り合ひ、同士討ちの立廻り。典膳、ちよつと思案して、二重へ探り行き、手箱より、路銀を出し懐中へ入れる。雅次郎、この足音を目當に切つて行く。皆々支へる。典膳、障子を蹴放し、下手へ飛び込む。直ぐに正面の藪を切り破り、橋がゝりへ走り入る。雅次郎行かうとするを、皆々支へ、キツとなり、見得になる。チョン／＼。返し。

造り物、元の道具戻る。典膳、返し前形にて、奥を目がけ、行かうとして居るを、名越長兵衛、二重の上にて、見得よく支へ居る。バタ／＼にて、道具納まる。常の合ひ方になり

長兵　典膳どの、こりや何所へござるな。

典膳　イヤサ、これは。

トこなしあつて

名越氏には、まだ御寝なりませぬか。

長兵　されば、今宵はどうか寢苦しう存じますゆゑ。

ト下に坐り、莨盆を扣へる。典膳、二重へ行き、座に着く。

典膳　イヤ、長兵衛どの、ちと仔細あつて一兩日、他行いたしたく存じまするが、美鳥どのは得心召されしか。明日まで待たれぬ有無の返答。それ聞き切つてから旅立たうと存じて、わざ／＼推參。

長兵　すりや、急々旅立ち致さるゝとな。

典膳　如何にも。

長兵　その儀ならば改めて、頼みの印が申し受けたい。

典膳　なんと。

長兵　娘が蘇生は所持の一品、正しく西天草の

典膳　ヤア。

トぎつくりする。

長兵　サア、その藥草が申し受けたい。

典膳　イヽヤ、所持の守は家の秘符。西天草とやらは身共存ぜぬ。アヽ聞えた。こりや何か。この緣組みを破談せん爲、身共に難題申しかけ、それを附に變替へ致さるゝのか。イヤサ、緣談變替へ致すのだな。さうはならぬ。一旦武士が番ひし詞、殊に死切つて居る娘美鳥、家の秘法で蘇生させたるこの典膳。娘一人拾はせた大恩、こりや云はいでも知れた事。恩を見て恩を知らぬは犬畜生、オヽ畜生だ。もうこの上は、其方から頼んでももう嫌

だ。緣組みは此方から變替へだ。又斯うなるからは互ひに五分々々、美鳥が息の根留めた上、元の如くに死人にしてくれろ。オ、さうだ。

ト ずつと立ち上がつて行かうとするを、よろしく留め

長兵 イヤ、さうはなるまい。

典膳 ナニ、ならぬとは。

長兵 ハテ、殺してよくば親が殺す。他人のお世話に……なり申さぬぞ。

典膳 默れ長兵衞。云はせて置けば出る儘の法外。細言吐かさば、先づうぬから眞ッ二つにぶッ放すぞよ。

長兵 鈍刀刃金が身に立たうか。措かつしやれ。

典膳 その頤骨を。

ト 拔かうとするを、居ながら煙管にて留めて

長兵 ハテ、及ばぬ事を。

典膳 なにを。

ト 振り解き、切つて行くを、長兵衞、支へながら、ヂリヂリ後へ寄り、押入れの前にて、身を交し、片手にて押入れを明ける。これにて、典膳、タヂタヂとなつて、思はず押入れの內へ入るを、長兵衞、バッタリ戸を締め、煙管を戸尻へ栓にかつて

長兵 袋の鼠。ハヽヽヽ。

ト 側に落ちてある狀を拾ひ、口の內にて讀み

さては。

ト 押入れの方を見て、こなしあつて、懷中へ入れる。バタバタにて、隣りの內より、角藏、傳助、手を負ひ、逃げて出る。雅次郎、追ひかけて出る。長兵衞、驚ろきながら表を窺ふ。此うち雅次郎、兩人を切つて

雅次 風を喰ひし鹿野苑、うぬ、何國までも。

ト 行かうとするを

長兵 雅どの、待つた。

雅次 イヤ、敵の行くへを。

長兵 追ふに及ばぬ、軍八は疾より我が家に。

雅次 なんと。

ト きつとなる。

長兵 娘美鳥が餌にかゝつて、立戻つたるあの押入れ。

雅次 ナニ、すりや押入れに。ソレ。

ト つかつかと行かうとするを、長兵衞隔て

長兵 待つた。西天草を所持すると云ひ、今刃向ふは危ふい〳〵。

雅次 でも、目前に。

長兵　イヤ、待たつしやれ。

ト支へるうち、奥より、美鳥、ツカ／＼と出て、長押の鎗を押取り、鞘を外して

美鳥　夫の加勢。

ト押入れを突く。雅次郎見て

雅次　出來された。其奴をこれへ。

美鳥　アイ／＼。

ト押入れ明ける。後の壁、切り破りある。兩人見て

ヤア、こりや壁を切り拔いて

長兵　逃げると知つて逃がせしは、娘が蘇生、一旦の恩返し。時節を待つて西天草を取返し、首尾よく本意を遂せられよ。

雅次　とは云ふものゝ、チエヽ、口惜しい。

長兵　逃げ行く先は。ソレ。

ト最前の狀を抛つてやる。雅次郎、開き見て

雅次　すりや、上總の國音信山へ。

美鳥　わたしも一緒に。

雅次　イヤ、敵討は戰場同然。本望達して歸るまでは。

長兵　親の身共がしつかと預かる。

雅次　然らば拙者は、此まゝ直ぐに。

ト美鳥、手傳うて雅次郎の旅支度する。奥より、女中皆々手燭を持ち出て來て

れん　聟君の門出、めでたう御祝言の

皆々　色直しを。

トこの時、歌之助、ツカ／＼と奥より出て

歌之　その花聟へ喜ぶ石打。

トあたりにある小石を打つ。雅次郎、よろしく留めて

雅次　イヤ、御祝儀なれば受けたも同然。

ト右の石を歌之助へ打ち返す。これにて、歌之助、くつたり下に居る。この途端、雅次郎、腕を抱へる。美鳥、これを見て

美鳥　ヤア、お手の痛みが。

トこなし。

雅次　ナニ、これしきの。

長兵　やがて青左右。

皆々　お待ち申して居ります。

ト此うち宅助、窺ひ出て

宅助　雅次郎め、うぬ。

ト切つてかゝるを、立廻つてよろしく、宅助の首筋を押へ、腕に響くこなし。長兵衛見て、

長兵　その惱みでは心元ない。
雅次　イヤ、敵に出合へば、まッこの通り。
ト突き廻して、ポンと切る。前なる石の上へ本首出る。
長兵　見事。
ト手を上げる。皆々こなしよろしく、
幕

六段目　多智山兩替屋の場

役名――中邑留藏實ハ奴橋平。女房、お澤實ハ自來也妻檜垣。下女、お松實ハ傾城三千歳。番頭、彥兵衞。仲仕、嘉八。八代村傳兵衞。韋駄天早介實ハ天眼磯兵衞。手代、喜六。同、茂八。同、清助。丁稚、太郎松。盜賊、自來也實ハ尾形周馬寬行。

造り物、一面の淺黃幕、暮れ六ッの鐘、鳥刺しの鳴り物になり、子供大勢、注連繩を持ち居る。この見得よろしく、幕明く。
子供　旦那さまお家どん、お注連繩を下んせ〳〵。
ト わや〳〵云うて、橋がゝりへ入る。と向うより、百姓傳兵衞、ぼつとせ、木綿やつし、旅の形にて、出て來りて
傳兵　ヤレ〳〵、久し振りで在所近くへ戾つたと思うたら、がつくりと草臥れが來た。マア、少つと休んでから行きませうか。
ト又向うより、早介、木綿やつし、股引、草鞋にて
早介　エッサッサ〳〵〳〵。
ト走り出て、傳兵衞に行き當り
御免なされ〳〵。
ト突き飛ばして、上手へ走り入る。傳兵衞、愕りして
傳兵　途方もない奴があればあるものぢや。道中に立つて居る者を、踏み散らかして失せ居つた。忌々しい。シタガ、この次手に一服やらかさうか。
ト笠を敷き、火打を出し、莨を吸ひ、こなしあつて
家を出てから三月越しになれど、今に尊像の手懸りも知れず。それにつけてもお松さまや、さぞ母者人がお待ち兼ねであらうと、戾る事は戾つたが、此まゝ去んでは詰まらぬものぢやわい。
ト思案のこなし。向うより、嘉八、仲仕の形にて、風

呂敷包みを擔げ出て

嘉八　何んでもかでも、好い玉を捉まへたいものぢやが。

ト云ひながら本舞臺へ來て、傳兵衞を見て

ヤア、わりや八代村の傳兵衞ぢやないか。

傳兵　オヽ、こなさんは新田の嘉八どの、變つた所で逢ひましたの。

嘉八　サイナウ、聞いてくれ。おれも今ではこの多智山の町で、中村へ仲仕奉公。大方彼れこれ小一年も働らいて居るての。

傳兵　そりやマア達者で、めでたい〳〵。わしも據ろなう長々の旅へ行て、やつと今日爰まで戻つて來た所ぢやわいの。

嘉八　さうかいの、そりや定めし草臥れたでごんせう。在所へ去んだら茂右衞門に、よう云うてくれよ。

傳兵　オツと、そりや合點ぢや〳〵。

嘉八　そんならおりやモウ別れるぞよ。こなさん、靜かに去なんせ。

ト行かうとして、フト心付いたるこなしにて

ア、傳兵衞々々、おりやこなさんにちつと頼みたい事があるが、なんと頼まれてはくれまいか。

傳兵　こなさんの頼みなら、どうで碌な事ぢやあるまいぞや。

嘉八　イヤ〳〵、さうでない。貴樣にも錢儲けさす事ぢや。

コリヤ。

トちよつと囁く。傳兵衞、恟りして

傳兵　ア、コレ滅相な。おりやそんな小氣味の惡い事は嫌ぢやわいの。

嘉八　ハテ、マア、とつくりと聞いたがよいわい。

ト又囁く。傳兵衞、聞いて

傳兵　なんと云はんす。そんならその鍄像を。

トこなしあるを

嘉八　コリヤ。

ト又囁く。

傳兵　待たつしやれや。カウツ……少つと此方にも心當りの事もあるが、一番頼まれて見やうかい。

嘉八　そんなら、得心してくれるか。

傳兵　サア、呑み込む事は呑み込んでも、おりや覺えが惡いに依つて、どぎ〳〵して、とんと解らぬわいの。

嘉八　オヽ、さう云ふ事もあらうかと、委細はこの手紙に、何もかもとつくりと書いてあるぞや。

ト懐中より帳を出して渡す。

傳兵　そんなら、これを讀むと、筋がしやんと解るか。こいつは役者の臺詞書の理窟ぢやの。

嘉八　身の廻りは、この風呂敷包みに入れてあるワ。

傳兵　オツとよし／＼。シタガ、もしも行き損なひさうな時には。

嘉八　ハテ、そりや、おれが引請けてやる程に、必らず慌てゝしくじるまいぞよ。

傳兵　そこはどうも、しつかりと請合ひ憎い。

嘉八　隨分手早うして、ちやつと來いよ。

傳兵　そんなら、マア、やらかして見ようわいの。

ト行かうとして、思ひ入れあつて

悪い事とは知りながら、寶の手懸り。

嘉八　ヤア。

傳兵　ドリヤ、工面してこまさうか。

トついと向ふへ入る。矢張り右の鳴り物にて

嘉八　彼奴を騙りの玉に造うて、尊像を繰り出し、それを彼奴にやつて抱いて寢るワ。もししくじつたら彼奴は馬鹿者ゆゑ、どうせうと斯うせうと、此方の儘なりや、科人は傳兵衞め、一人引ツかぶつてしまふは定の事。オツと、これもよし／＼。

トこなし。上手より、早介、又走り出て來りて

早介　エツサツサ／＼／＼。

ト行かうとするを、嘉八、見て

嘉八　コリヤ／＼、わりや韋駄天ぢやないか。何所へ行くぞい。

ト寄らうとするを

早介　急ぐぞ／＼。

ト突き飛ばし、向うへ走り入る。嘉八、こけながら

嘉八　アイタ、、、、途方もない奴ぢや。向う脛擂剝かしてけつかる。忌々しい。

ト云ひ／＼起き上がりて

さりながら、マア、何は然れ、當るとは起緣もよし。なんでもこの引續きに、首尾ようやりつけたいものぢやが。

ト思ひ入れながら上手へ入る。返し。

造り物、一面の豪家、表側の體。白壁の塀、忍び返し、番所用水、眞中に門口、中邑と書いたる暖簾掛け、後ろ大戸締めるやうにしてあり、すべて、雪持

ちの書割り、この見得よろしく、鳥刺しの鳴り物にて、道具納まる。

ト橋がゝりより、幕明きの子役、筵に竹を差し、擔ひながら

子供　お家さま旦那さん、注連繩を下んせ〳〵。

ト云ひながら出て來る。門口內より、彥兵衞、手代の拵らへにて、松の鉢植を持ち出て

彥兵　エヽ、アヾ喧ましい餓鬼めら、何を喧ましう吐かすぞい。

子供　おつさん、お注連繩下んせんか。

彥兵　エヽ、なにを、わいらにやる注連繩があるものかい。

子一　でも、えらい吝嗇坊ぢやわいなう。

子二　あんな人に貰ふより、他所へ行て貰ふわいの。

子三　さうぢや〳〵、あんな人に物云ふも損が行くわい。

彥兵　何を餓鬼めら、小言吐かしやアがる。とつとゝうせ居らんかい。

皆々　ソリヤ、吝嗇坊が怒つた〳〵。

ト手を叩き、向うへ逃げて入る。彥兵衞、見送りて

彥兵　エヽ、忌々しい子忰め。あんな餓鬼產みやアがつた親の面が見たいわい。イヤ、見たいと云へば、このお松めは、もう戾りさうなものぢやが。

ト鉢植を下に置く。

霜月頃から此方の內へ、奉公にうせたあのお松め、ちよつと當つて見たところが、いつぞやから質に取つてある黃金作りの尊像が欲しいと吐かす。そこで昨日旦那の居間へ、掛け物を出しに行た次手に、兼ねて拵らへて置いた合鍵を以て、なんの苦もなう歪みの權太とやらかして、肌身離さず、爰に在します結ぶの神。

ト懷中よりちよつと出して

シタガ、斯うおれが持つて居るは危ないもの。どうぞ好い留め所がなと、思ひ付いたはこの鉢植。これはお家が大事の松ゆゑ、家內の者が觸ると喧ましい。そこを見込んで尊像の留め所。誠に我れながら天晴れ〳〵。孔明も裸足と云ふもの。斯う云ふうちも危ないワ。人の來ぬうち、オヽ、さうぢや。

ト右の松の根元へ尊像を匿す。

斯うして置けば……オッとよし〳〵。

ト松を眺め、こなしあつて、在鄉唄になり、向うより、お松、下女の形にて、籠に紙を入れ、持ち出て來り

まつ　思ひの外隙がいつたが、お家様がお叱りなされにやよいが。

ト云ひながら本舞臺へ來る。彦兵衞、見て

彦兵　オヽ、お松、いま戻つたか。おりや貴様の戻りを、爰で最前から待つて居るのぢや。

まつ　エヽ、番頭さんとした事が、ほんに好い口な。大方何所ぞの女中さんの、顔を見ようと思うて、爰へ出て居やしやんす所へ、わたしが戻つて參りましたゆゑ、それで間に合ひな事云はしやんすのでござんせうがな。

彦兵　これは又氣の惡い。おれが待つて居たは其方の事。マア、嘘か誠か、コレ〳〵、おれが心はこの通り。お家が秘藏のこの鉢植、松と云ふ名にわが身と思ひ、少つとのうちも側を離れぬと云ふ、おれが心底。なんとマア、よう凝つたものであらうがな。其方が留主になると、この通り門中を持ち歩くは、其方と手を引いて、道行して居る心ぢやわいの。

まつ　例へ嘘にでも、其やうに云うて下さんすりや、わたしや大抵嬉しい事ぢやござんせん。けれど、いよ〳〵それがほんまの事なら

彦兵　オツと、皆まで云やんな。今のナ、ソレ、のゝさんの事であらうがな。

まつ　サア、わたしが願ひさへ叶へて下さんすりや、こちやどうなりとするわいなア。

ト凭れかゝる。彦兵衞、いそ〳〵して

彦兵　サア〳〵、それは承知の助で、ソリヤ、ツイ。

ト鉢植にこなしあつて

イヤサア、ツイ、どうぞして渡さう程に、さうなつた時には、否應云はさぬが合點ぢやな。

まつ　そりやモウ、わたしやさうならうと、飛び立つやうに思うて居るけれど、マア、其所に少つと難儀な事があるわいなア。

彦兵　ナニ、難儀な事とは。

まつ　サア、その難儀な事と云ふは、アノ仲仕の嘉八さんが、それは〳〵アタ舌たるい事ばつかり。わたしやモウわたしやモウ、嫌で〳〵ならんわいなア。

彦兵　なんと云ふ。アノ仲仕の嘉八めが。

まつ　アイナア。わたしやお前さんに惚れて居るに依つて、嫌で〳〵ならんけれど、新參者の事なり、朋輩のお方に憎まれてはならんに依つて、附合うては居るものゝ、ひよつとお前とわたしが、さうなつた事を聞いたら、ど

んな仇をせうも知れぬゆゑ、どうやらわたしや氣味が惡いわいなア。

彦兵　大事ない〳〵。戀の敵の嘉八め、この番頭さんの威光を以て、直ぐにこの家をしくじらし、ぼいまくつて見せるは、おれが口先。なんにも案じる事はないわいの。

ト此うち嘉八、大戸口より出かけ、これを見て、ムツとして、ちよつと思案して、内を招くと奥より、丁稚太郎松、出て來るを、嘉八、ちよつと囁く。太郎松、頷き、彦兵衛が側へ行き、耳の側にて

太郎　コレ、番頭さん。

ト大きな聲で云ふ。彦兵衛、悄りする。嘉八、暖簾より首を出し、見て居る。

彦兵　エ、、何奴ぢや。

太郎　イヤ、此奴ぢや。

ト我が鼻を敎へる。

彦兵　忌々しい。土阿房め、悄りするわい。

太郎　旦那樣が呼んでぢや。

トまた大きな聲で云ふ。

彦兵　エ、、おりや聾ぢやないわい。

太郎　なんでも構はぬ。ちやつとごんせ〳〵。

ト手を取る。

彦兵　エ、、折の惡い。其所へ行くと云うて置け〳〵。

太郎　イヤ〳〵、一緒に行かぬと、おれが叱られるわいの。サア〳〵早う。

彦兵　エ、、忙しない。今行くわい。

太郎　そんなら早うごんせ。

彦兵　サア、行くは行くが、マア待てやい。

ト鉢植を取りにかゝる。

太郎　イヤ、待たん〳〵。

彦兵　イヤ、待て〳〵〳〵。

太郎　待たん〳〵。

ト兩人せり合ひながら、彦兵衛、鉢植を持ち、太郎松に引立てられ、大戸口へ入る。引違へて、嘉八出て、お松を見て、ツンとこなし。お松、思ひ入れあつて

まつ　オ、、嘉八さんかいなア。

嘉八　嘉八さんも凄まじい。ア、、お樂しみでござりますな。

まつ　何がいなア。

嘉八　何がとは、なんぢややら、人を嬉しがらすやうな事ばつかり云うて置いて、あんまりで阿房らしいわいの。

ト ゆかりの月の合ひ方になり、嘉八、籠を取つて、煙草盆の心にて持ちながら、こちらへ來て、拗ろこなし。お松、側へ行き

まつ　コレイナア、お前、なんぢやぞいなア。

嘉八　エヘン／＼。

ト ついと立つてこちらへ來る。お松、付いて來て

まつ　何をマア其やうに、腹立てるのぢやぞいなア。

嘉八　ハイ、何も腹は立ちませぬ。腹を立てるは皆、此方が粗相。番頭さんと云ふ、歴としたお方の衿に付くのが當世と云ふもの。こちらがやうな仲仕風情の、汚れた衿に付かぬも尤もかい。ちやつと番頭さんの側へお出でなされませえ。

ト また立たうとするを、よろしく留め

まつ　エヽ、ツッとモウ、あの番頭の彦兵衛づらの事かいなア。

嘉八　事かいなアも、よう云はれたわい。

まつ　ア、コレ、よう聞いて下さんせ。あの彦兵衛づらが常々から、わたしを口説いて居ると云ふ事は、お前も疾から知つてぢやないかいなア。

嘉八　サア、知つて居りやこそ腹も立つと云ふもの。今時の女子と云ふものは、とんと油断がならんわいの。

まつ　サイナア、お前も疑ひ深い。わたしが心を知らんかなんぞのやうに、其やうな事云うて下さんす。今も今とて、あの彦兵衛づらが、わたしを捉へて、なんの彼のと云ひくさるし、憎さも憎し、いつそおかみへ告げてこまさうかと思うたなれど、もしもの事で意地になつた時には、わしが體はいとはねど、何を云うてもあつちは番頭、窪な所へ水とやら、ひよつとお前の難儀にならうかと、辛いうるさい辛抱を、ヂッと堪える心の切なさ。ちつとは思うてくれもせで、愛想づかしは胴慾な。そりやあんまりぢや／＼、あんまりぢやわいなア。

ト 空泣きする。嘉八、こなしあつて

嘉八　ハアヽ。

ト 泣き落し

お松、堪えてたも　堪忍してたも。さう云ふ事とは露知らず、おれが僻んだ心から、思はず云うた愛想づかし。アヽ、あやまりました／＼。必らず恨んでたもるなや。

まつ　そんなら、疑ひ晴れたかいなア。

嘉八　オヽ、疾から晴れ切つてあるわい。

まつ　それにマア、人を悔りさしてからに。オヽ、憎。

ト膝を抓る。

嘉八　アイタヽヽヽ。

まつ　誰れに逢ひたいえ。

嘉八　おのれに。

まつ　嘘ばつかり。

嘉八　イヤ、ほんまに。

まつ　オヽ、嬉し。

トひつたり抱きつく。と向うより、早介、丸に村と云ふ字の飛脚提灯とぼし、走り出て

早介　エッサッサ〳〵。

ト本舞臺へ來り、兩人を突き飛ばし、大戸口へ走り入る。

嘉八　エヽ、忌々しい。また閙りさしやアがつたわい……それはさうと、眞實おれを思うてくれる其方が又、なぜに。

まつ　サア、お前の心の眞底が知れぬに依つて。

嘉八　それでアノ繪像を。

まつ　アイナア、いよ〳〵わたしを女房に持つて下さんす心なら、なぜに願ひを叶へては下さんせぬぞ。

嘉八　サイヤイ、その事で大抵おりや、苦勞して居る事おやないわい。シタガ、それもやう〳〵の事で、是非今夜中には其方に渡し、兼ての願ひ叶へる料簡。マア、落ちついて居たがよいわい。

まつ　そんなら、いよ〳〵今夜中に。

嘉八　オイヤイ、なんと嬉しいか〳〵。

まつ　これが嬉しうなうて、なんとせうぞいなア。

嘉八　わが身が嬉しけりや、おれも嬉しい。その嬉しい次手に、もう一遍抱きつかせ。サヽ、抱きつきや〳〵。

まつ　アイ〳〵、斯うかいなア。

ト抱きつく。嘉八、現になる。

嘉八　可愛い奴なア。

トこなし。手鞠唄になる。向うより、清助、下男の形にて、丸に村と云ふ字の弓張り提灯を持ち、後より、お澤、綿帽子、世話女房の形にて、出て來りて、花道にて

さわ　清助、もう初夜でもあらうかの。

清助　ヘイ、大方そんなものでござりませう。

ト云ひながら本舞臺へ來て、清助、兩人を見て

ヤア〳〵。

ト指さしする。お澤も見て

さわ　これは怪しからぬ。

ト氣の毒なこなしにて、バタ／＼と足音する。兩人、これに氣の付かぬこなしにて、矢張り抱きついて居る。清助、堪え兼ね、もう堪らぬと云ふ思ひ入れにて、お澤に抱きつかうとして、顏見合せ、ちやつと扣へる。お澤、いろ／＼こなしあつて

エヘン／＼。

トこれにて、兩人心付き振り返り、お澤を見て恟り、ちやつと飛び退く。お澤わざと透かし見て、こなしあつて

其所に居るは誰れぢや。

ト嘉八は逃げて入る。

まつ　ハイ、わたしでござります。

さわ　オヽ、松か。

まつ　ハイ。

トもぢ／＼する。

さわ　暗いので、何が何やらとんと解らぬわいの。

まつ　お家樣、あなた、いかうお隙がいりましたなア。

さわ　サイナウ、今日は十四日、年越しゆゑ、氏神樣へ詣つたれば、神主さまがきつい御馳走で、つい日が暮れての。

清助　日が暮れたので仕合せ。あれが日の內なら、一向徑體ぢや。

まつ　わたしもやう／＼たつた今、お使ひから歸りましてござります。

さわ　オヽ、さうであらう。旦那どのも、さぞ待ち兼ねてゞあらう。サア、二人とも一緒におぢや。

ト矢張り右の唄にて、大戶口の內へ皆々入る。と引違へて、早介、出て

早介　エッサッサ／＼／＼。

トまた向うへ走り入る。とチョン／＼にて、返し。

造り物、通り二重、上手、店戶棚、眞中、赤壁納戶口、この續き、注文刺し、帳面の書割り、帳箱、すべて、兩替屋店先の體。右二重上手に、留藏、木綿やつし、澁前垂れにて、前に澁紙を敷き、小判大分並べ、絹布巾にてこれを拭いて居る。この側に丸行燈を灯しあり、下手に彥兵衞、帳箱を控へ、帳合ひして居る。その側に返し前の鉢植直しある。けつかいの內に、喜六、茂八、天秤に丁銀を掛けて居る。

平舞臺に莫蓙を敷き、太郎松、錢刺しを綯つて居る。右見得よろしく、矢張り手鞠唄、天秤の音にて、道具納まる。

留藏　彦兵衞、佐々木の村借銀百二十貫匁の利息は、どうなつたの。

彦兵　ヘイ、それは大節季の殘りが九貫四十匁、晝受取つて、只今改めさして居りまする。

ト此うち太郎松、ふら／＼居眠る。留藏見て

留藏　ヤイ／＼太郎松、日が暮れるか暮れぬうちに、居眠つてどうする。

彦兵　コリヤ／＼太郎松。エヽ、また居睡り居る。死太い奴ぢや。

ト算盤にて頭喰はす。太郎松、悄りして

太郎　アイタヽヽ、朝は明け六ツ打つや打たずから引起され、使ひの間には水も汲んだり、割木も割つたり、また日が暮れると錢刺綯へと吐かすし、ほんにモウ、三荘太夫そこのけぢや。

留藏　コリヤ、何吐かすのぢや。日に三度づゝ喰はして、養つて置く親方ぢやもの、遣はいでよいものか。顋叩くと縛し上げるぞ。

太郎　いつそ縛し上げられて、三日程寐たいわい。

留藏　さう吐かしや、いつそ。

ト立ちかゝるを、お澤、奥より出て、よろしく止め

さわ　旦那どの、もうようござんすわいなア。形は大きうてもまだ子供、もう料簡してやらしやんせいなア。

留藏　イヤモウ、あの阿房めにはホッと困るわいの。

太郎　イヤ、又おれも、あの吝嗇坊には、ホッと困るわい。

留藏　まだ口返し居るか。

ト行かうとするを

さわ　エヽ、これはしたり、其方もどうした事ぢや。また叱られうと思うて。サア／＼、ちやつと奥へ行きや／＼。

太郎　オットショ。

ト逃げて入る。お澤、坐らうとするを

留藏　アヽ、待ちや／＼。

ト手拭にて、舞臺を拂ひ

着物が汚れるわいの。

さわ　これはお慮外でござりまする。

ト好き所へ坐る。橋がゝりより、嘉八、弓張り提灯を持ち出て

嘉八　とつくりと火の用心を見廻つて參りました。

ト提灯を下に置くを

留藏　アヽ、これはしたり、その手で直ぐに消して置け。蠟燭が堪らぬわい。

嘉八　ヘイ〳〵。

ト火を消す。此うち喜六、茂八、天秤を片付けて

茂八　ヘイ、私しの方は七包みのうち七匁二分、かんがござりました。

喜六　イヤ又、私しが當りました包みは、五厘程足りませぬ。

留藏　よし〳〵。ソレ、彥兵衛、聞いたか、明日直ぐに取りにやれよ。

彥兵　ヘイ〳〵、畏まりました。

さわ　オヽ、皆大儀ぢやなう。シタガ、旦那どの、明日は小正月でもあるし、今夜はマア早う終うて、皆休ましてやらしやんせぬかえ。

留藏　其方とした事が、巧い事を云やるわいの。この暗い世界に、晝ばかり働らいては、滅多に水も呑めるものぢやないわい。おれがこれ程きめ細かにすればこそ、僅か三年立つや立たぬうち、五十里四方へ聞える程の身上になつたは、始末と働らき、金の冥加。なんと手代ども、さうではないか。

喜六　左樣でござりまする。分けて去年の冬から奉公に參りました。あの早介と云ふ奴は、一日に七十里宛歩くと云ふ早足。

茂八　その上、力は五人前もあり、其所で誰れが云ふともなしに、韋駄天の早介と、異名を取つたえらい代物。

喜六　イヤ、又それなれば旦那のお氣に入るも道理。諸式の相場は世間より、一番に聞いてくる。近廻りの商ひは、五人前も七人前も、獨りして駈け歩くと云ひ

茂八　下地が大身代の上、譬へに云ふ鬼に金棒。イヤモウ、怪しからぬ事でござりまする。

ト此うちお澤、こなしあつて

さわ　コレ〳〵、なんぞ火にくばつて居ないか、氣を付けて見や。

嘉八　ほんに、こりやかんこ臭いわい。

トこなし、皆々慌てる。

留藏　オツと騷ぐな〳〵。こりやおれが莨の業ぢや。

茂八　旦那のお莨は、妙な薫りぢやなア。

留藏　サイヤイ、庖丁府を貰ひにやつて吸ふに依つて、いろいろ訝しい匂ひがするわい。

ト此うちお澤、鉢植を見て

さわ　オヽ、わしが大切の鉢植を、誰れが爰へ持つて來たのぢや。

ト云ひながら取りにかゝる。彦兵衛、恂りして

彦兵　アヽ、申し〳〵、滅相な。あなた、この鉢植を、どうなされます。

さわ　彦兵衛とした事が、きよと〳〵しい。こりやわしが大切の松ぢやわいの。

ト取らうとするを、ちやつと持つて退き

彦兵　イヤ、こりや斯うでござります。私しもこの松がきつい好きでござりますゆゑ、どうぞ少つとの間、お貸しなされませ。

さわ　イヤ〳〵、人が觸ると葉が茂るわいの。マア、此方へたもいの。エヽ、フツとモウ、おこしやいの。

ト無理にこちらへ持つて來て、葉を透かして居る。嘉八、此うちムツとしたこなしにて

嘉八　エヽ、聞えた。松が好き〳〵……イヤ、番頭さん、イヤ、彦兵衛さん、彦兵衛どの、貴樣、あの松が好きか。

彦兵　オヽ、おりや大好きぢや。

嘉八　アノ、いよ〳〵。サア〳〵、怪體ぢやぞ〳〵。

ト算盤を打ちつけうとする。留藏、恂りして、引ツたくり

留藏　ヤイ〳〵、たわけ者めが。彦兵衛が松が好きぢやとて、算盤が知つた事かい。一匁八分、棒に振らうとした。勿體ない。

トそつとこちらへ直す。彦兵衛、ムツとして

彦兵　嘉八、わりや異な事が腹が立つな。おれが松好きなら、わりやなんで怪體が惡いぞ。

嘉八　サア、それは。

彦兵　おりや又、われが腹立てる譯が聞きたい。

嘉八　オヽ、聞きたくば松好きの譯云ふぞよ。

彦兵　オヽ、聞かうかい。

嘉八　云はいで。

ト兩人せり合ふを

さわ　これはしたり、二人ながらどうした事ぢや。旦那どのゝ前とも憚らず、松が好きなら、どうぞするのか。

嘉八　イエ〳〵、お家、あなたの事ぢやござりません、

さわ　でも、わしが松を寵愛するに依つて、耳に觸つて聞き惜い。マア、靜まつたがよいわいの。

嘉八　イヤサ、それでは。

ト彦兵衞へこなしあつて
あんまり阿房らしいわい。
　トこなし。向うより、早介また走り出て
早介　エッサッサ〳〵〳〵。
　ト直ぐに本舞臺へ來て
ハイ、只今歸りました。
　ト提灯を下に置く。留藏、見て
留藏　オッと、ソレ、直ぐに提灯の火を消した……して、手つがひはよかつたかの。
早介　イヤモウ、よい段ぢやござりません。笠田の山川屋の油を、三百七十匁で五百五十樽買ひつけますと、後へ松崎の治郎兵衞が參りまして、九十八匁で此方へくれいとせがみますれど、景氣の好い相場ゆゑ歸りましたが、たつた一足で、十二貫目ばかりの浮でござります。
留藏　それは大儀ぢや。市場の平右衞門が注文、四百目内外は堅いわい。
さわ　さぞ飢じからう。誰れぞお膳を持つておぢや。
太郎　オッと、合點ぢや〳〵。
　ト奥より、膳を持つて來て
サア、喰へ。
　ト突き出す。早介、草鞋脱ぎながら
早介　オイ〳〵……旦那、お家、下さりまする。
　ト飯を喰ひにかゝる。萬歳の合ひ方になり、傳兵衞、ぶッ裂きを片前下りに着て、大小右へ差し、首筋へ扇を差し、出て來て、ズッと通らうとする。嘉八、見て悔り。それでは行かぬと云ふ仕方。傳兵衞、どうせうと云ふこなし。嘉八、大小を左へ差せと云ふ仕方。傳兵衞心得、大小を差し替へ、これでよいかと云ふ思ひ入れにて、手帳を出し、ソッと讀んで見て、仔細らしう衣紋繕ろひ
傳兵　エヘン〳〵……イヤ、中邑留藏宅はこれか。
嘉八　ヘイ〳〵、即ち留藏これに居ります。先づ〳〵お通りなされませう。
　ト傳兵衞また手帳をちよつと見て
傳兵　罷り通る。
　ト上手へ行き、ウロ〳〵して小聲にて
爰らか。爰にせうか。
　ト嘉八の顏を見る。嘉八、二重へ上がれと云ふ仕方。
　これにて、傳兵衞、二重へ坐る。留藏、こなしあつて
留藏　ついぞお見請け申さぬお侍ひ樣。私しには何の御用

ございまして、お越しなされましたな。
　ト又傳兵衛、手帳を見て
傳兵　エヽ、アノ、身共事は越後の領主、椎津市正が家來、大間樂右衛門と云ふ者。此方の寶たる魔利支天の尊像につき、草を分つて詮議するところ、即ちこの家へ質物に取りある由、注進あつて慥かに聞く。尋常に渡せばよし、異議に及ばゞ當國の地頭、陶壹岐守に申しつけ、家内殘らず缺所に及ぶ。急ぎ寶を差上げとの御上使。
　ト右のせりふ書いた物を讀むやうに云ふ。此うち嘉八、口の内にて、えらい〳〵と云ふこなし。この止りに顏見合せ
どんなものぢや。
嘉八　巧い。
　ト云はうとして、ちやつと我が手に口を押へる。
留藏　それは近頃御苦勞に存じまする。如何にも寶を差上げませう。コリヤ嘉六、おれが居間の小簞笥の抽斗にある。取つて來い。
喜六　畏まりました。
留藏　して、金子御持參なされましたか。
傳兵　エヽ。
留藏　元金百兩に利息が二十兩餘り。イザ、お受取り申しませうか。
傳兵　サア、それは。
留藏　御持參はなさりませぬか。
傳兵　サア、その金はアノ。
　ト嘉八を見る。嘉八、こなしあつて
嘉八　アイヤ〳〵、旦那樣、元は盗み物の黄金佛、椎津家のお役人樣とござれば、こりや吐き出さにやなりませぬぞえ。
留藏　ヤイ〳〵、たわけ者め、そりや何を云ひ居るぞ。假令へ盗み物にもせよ、置き主請け人の印形を取つて、此方の金子借りたなれば、一分一厘でも此方に損する術がない。また盗賊の詮議ならば、置き主請け人をお糺しなされたら、何もかも知れさうなもの。木は本とやら、根本をとつくりと糺して置いて、お出でなされます方が、よかりさうな事。マア、今宵はお茶でも上がつて、お歸りなされました方が、よろしうござりませう。コリヤお松、お茶持つて來いよ。
まつ　ハイ〳〵。
　ト納戸より、お松、茶臺に茶を汲み載せ、持ち出て

ハイ、お茶をお上げ申しませう。

ト何心なく傳兵衞へ差出す。

傳兵　こりやお慮外さまでござります。

ト取らうとして惘りして

ヤア、お前さんは。

まつ　わが身は。

トこれにて、お松も傳兵衞を見て、惘りして

傳兵　アィヤ、知らんぞ〳〵。

まつ　コレイナア、傳兵衞。

傳兵　イヤサア、ついぞ逢うた事もない女子の女中。おりや侍ひ。コレ、この長いと短いのと、二本まで差して居るぞ。

トこなしあつて、キツとしやきばる。

まつ　ほんにマア、思ひかけない。

傳兵　知らん〳〵。ハテ知らんぞ。

太郎　番頭さん、見やしやんせ、植木屋が呆れるワ。ハ、ハ、、。

ト此うち留藏、かけ硯にて半紙へ何か書いて、お澤に見せる。お澤、見て、また何やら書いて留藏に見せる。早介、箸を下に置く。

早介　岡目八目とは、よう云うたものぢや。何もかも見え透いてけつかるわい。

ト云ひながら眞中へ出て

オイ、お侍ひさん、ちよつと逢はうかい。

傳兵　エ、、アノ私しに。

ト惘りして後へ寄る。氣味の惡いこなし。

早介　オイナウ。

ト嘉八、大事ないと云ふこなし。

なんぢや。猫に紙袋着せたやうに、後じさりする事はない。爰へ出やつしやれ。

トこれにて、傳兵衞、覺悟極めしこなしにて、二重より下りしなに踏み外し、猿返りして、其まゝ早介が側へちやんと直り

傳兵　出たが、なんぢや。

トこなし。

早介　イヤ、外の事でもないが、こなさん、いつ頃越後を立つて、この國へござつたぞ。

傳兵　さればなア。お月樣と一緒で、慥か十三日であつたわい。

早介　アノ、この月の十三日に。

傳兵　如何にも。それがどうした。
早介　アノ玆な大騙りめが。
傳兵　ヤア、。
早介　今日は十四日。越後から房州までは百七十里餘もある道程。わりや一日一夜さに飛んで來たか。イヤサ、どうして來た。
傳兵　エ、。
早介　イヤサア、わりや天狗か、どう云ふ脛ぢや。よもや步いては來られまいがの。
傳兵　サア、それは。
早介　韋駄天と異名取つて、凡そ日本に續く者のあるまいと自慢して居るおれでさへ、晝夜かけて七十里、後先揃はぬ詞のてん〴〵。こりやうぬばかりの思案ぢやあるまい。これには外に賴み手があらうがな。
傳兵　アイ、その
　ト嘉八を見る。嘉八、睨むゆゑ
　サア、それは。
早介　サア、痛い目せぬうち、何もかも語り述べい。云うてしまへ。
傳兵　サア、それは。

早介　吐かさぬと酷いぞよ。
傳兵　アレエ。
　ト後へ屈む。太郎松、汁を持つて來て
太郎　オイ、早介どの、汁が冷める。
早介　合點ぢや〳〵。
　トこちらへ來て、また飯を喰ふ。
彥兵　韋駄天、そのぐるは知れてあるわい。れき樣に違ひないわい。
　ト嘉八へこなしあつて
嘉八　番頭さん、イヤ、彥兵衞どの、こなさん、訝しい事云はんすな。この同類を誰れぢやと云ふのぢや。
彥兵　ハテ、何奴ぞ氣に當る奴があらうぞい。
嘉八　イヤ、こりや訝しい物の云ひやうしなんすの。
さわ　コレ〳〵嘉八、何もせり合ふ事はない。この騙りの同類と云ふは、爰に居る下女のお松。わが身が賴んだのであらうがな。
まつ　お家樣の勿體ない。なんのマア、親方さんのお目を掠める騙り事。なんのわたしが。
さわ　その又覺えのない其方が、あの人と顏見合して、互ひに悄りして、お前はわが身はと心安う、なんで物を云

やつたぞ。

まつ　サア、それは。

さわ　よもや云ひ譯は、あるまい〳〵。

留藏　コレ〳〵女房ども、可哀想に、常々から正直なあのお松、なんのそんな惡企みせうぞいの。コリヤお松、其方に覺えのない事を、其所へ出て云ひ譯せい。どうぢやどうぢや。

ト お松、俯向いて居る。これを聞いて、お澤、ムッとして

さわ　イヤ、旦那どの、お前變つた事云はしやんすなア。なんで又其やうに、あのお松を贔屓なされますえ。

留藏　イヤサア、別に贔屓はせぬけれど、まだ年若な女子の事、惡企みをせう筈がないわい。

さわ　ハ、ン、聞えたわいなア。この間からのお前の素振り、どうやら合點がゆかぬと思うて居たが、これで何もかも譯が知れたわいなア。コレ

ト 胸倉を取つて

お前、あのお松に手をかけて居やしやんせうがな。

留藏　ヤイ〳〵〳〵、内外の者が見て居る前、男の胸倉取つて見苦しい。放しやれ。

ト 振り放し

着物を皺だらけにしをるわい。

ト 我が着物の皺を延ばす。

嘉八　イヤ申しお家様、ちよつと來て下さりませ。

ト お澤を平舞臺へ引ッ張り來る。これにて彦兵衛、ちやつと最前の鉢植をこちらへ持つて來る。

今あなたが仰しやつたお詞では、いよ〳〵旦那があのお松に、手をかけてござるのに違ひはござりませぬか。

ト 急いて云ふ。

さわ　サア、慥かに見付けたと云ふ事はなけれど、てつきり違ひはないわいなう。

嘉八　シタが、どうも合點がゆきませぬ。全體親方には

ト こなしあつて

無いぢやござりませぬか。

さわ　何がいの。

嘉八　イヤサア、そりやアノ、件の物が無いぢやござりませぬか。

さわ　何を云やるぞいの。

嘉八　サア、旦那のあるないは、お前樣より外に、誰れも知らう筈はないが、但しはあるのかいなア。

トこなし。

さわ　あるか無いか、なんぢや知らんが、わしや腹が立つて立つてならんわいの。

太郎　あの腹の立ちやうでは、矢ッ張りどえらいのがあると見えるわい。

早介　たわけめ、飯ぢやわい。

ト茶碗を出す。

太郎　オットショ。

ト茶碗を持ち、納戸へ入る。彦兵衞、ムッとして

彦兵　ヤイ、お松め、ようおれを代物にしやがつたな。忌忌しい。

ト行かうとして、鉢植を見て

アノ、この松づらめが。

トこなし。お澤、見て

さわ　オヽ、わしが大切の松を、また取りやつたかいなア。

ト取らうとすると

彦兵　ア、申し／＼それを。

トこなしあるを

さわ　ハテ、何にもせよ、其方の構うた事ぢやないわいなう。

トこちらへ持つて來る。嘉八、お松が胸倉取つて

嘉八　ヤイ、どう畜生め。

ト留藏を見て、ちやつと放して

こりやモウ、怪體が惡うて、どうも堪えられぬわい。

ト莨盆を振り上げる。傳兵衞、惘りして逃げる。留藏、及び腰に二重よりその手を取つて

留藏　ヤイ／＼、これを提げたらめげるわい。

ト引ッたくり、ソッと直す。

彦兵　イヤ又、おれも業が沸えて堪えられぬわい。

トかけ硯を抛らうとする。留藏、慌てゝよろしく止めて

留藏　コリヤ、どう暴れさらすのぢや。

ト取つて、よろしく直す。

さわ　わしが目を掠めて、よう阿房にしてたもつたの。

ト取り鉢を打ちつける。

留藏　エヽ、情ない。家内中が色狂人ぢや。

ト顔しかめる。

彦兵　忌々しいぞ／＼。

ト算盤を打ちつける。

嘉八　イヤモウ、怪體ぢやぞ〳〵。
ト取り鉢を打ちつける。
さわ　エヽ、腹が立つわいなア〳〵。
ト茶碗を抛り付ける。
留藏　こりや、困つた事ぢや。詰まらん〳〵。
トあたりにある小道具を手當り次第抛り付ける。早介は太郎松に膳を持たせ、逃げながら飯を喰ふ。傳兵衛は始めの間はびく〳〵して居て、中程より鉢巻して、片肌脱いで
傳兵　サア〳〵、こりや面白うなつて來た〳〵。
ト先繰り三人に道具渡して廻る。
まつ　マア〳〵、よろしうござりまする。
ト止めて廻る。留藏は段々片付けて廻る。この事よろしくあつて、留藏、ホッとして
留藏　ヤイ〳〵、何奴も此奴も待ち居らんか。
嘉彦　イヤ、待たんぞ〳〵。
留藏　おれが云ふ事聞かんかい。
さわ　オヽ、聞かん〳〵。
留藏　そんなら、おれもモウ自棄ぢや。わいらに碎かれるより、おれが碎くのぢや。
傳兵　サア、お出でた〳〵。
留藏　マア、この鉢植からやりかけうわい。
ト鉢植に手をかける。お澤、彦兵衛、慌てゝ
さわ　ア、コレ、待つて下さんせ〳〵。
彦兵　これを打ちつけられて堪るものかい。
留藏　イヤ、留めな〳〵。
彦兵　サア、留めはしませぬが、こればつかりは留めにやなりませんわい。
留藏　そんなら、わいらも留めるか。
彦兵　イヤモウ、これが留めずに居られませうか。
留藏　キッと留めるか。
さわ　マア〳〵、放して下さんせいな。
留藏　ア、嬉しや。どうやら斯うやら鳴りが鎭まつた。
ト胸撫で下ろす。此うち喜六、小簞笥の抽斗を持つて、奥より出て來りて
喜六　サア〳〵〳〵、えらい事が出來ました。亂騒ぎぢや亂騒ぎぢや。
皆々　何がどうした〳〵。
喜六　サア、どうしたどころか、旦那のお居間の小簞笥の抽斗に、入れてあつた尊像がない。コレ、この通り箱は

空殼でござりまする。

皆々　サア〳〵〳〵。

留藏　フム、大概そこらでありさうなもの。この通り錠前も損ねぬは、合鍵をして盜んだと見えるわい。コリヤ、この盜人は内輪にあるわい。

嘉八　ハイ、左樣なものでござりまする。この盜人は

ト　お松を引立て出て

即ち此奴でござりまする。

ト　傳兵衞、寄らうとして、氣味惡いこなし。

まつ　嘉八さん、お前はマア胴慾な事云うて下さんす。この譯は何もかも、お前の心に覺えて居さんす筈。なぜ云ひ譯をして下さんせぬ。ほんにわたしが思ふやうにもない、酷い氣なお方ぢやなア。

ト　わざと心意氣あつて云ふ。

嘉八　措けやい。モウ〳〵、その手は喰はぬ。サア、うぬが盜んだ尊像を、キリ〳〵爰へ出しやアがれ。

ト　喰はさうとするを、彥兵衞、嘉八を引退け

彥兵　これはしたり嘉八、盜人はお松ぢやない。その證人はこの彥兵衞ぢや。

ト　こなし。嘉八、さうでないと云ふこなしにて

嘉八　ハテサテ、これは惡い合點ぢや。こなさんがなんぼう贔屓してもな。

ト　留藏とお松を顏で敎へて

サア、貴樣もおれも、たろにかゝつて居るのぢやわいの。

ト　これにて彥兵衞ちよつと思案して

彥兵　オヽ、さうぢやなア。如何にもおれが云ふ通り、この盜人はお松ぢや。オヽ、お松と云ふ證人は、おれぢやぞ。

ト　嘉八またお松を引きつけて

嘉八　ヤイ、茲などち女郎め。生馬の眼も刳り拔くこの嘉八を、ようも〳〵あんぜうやりやアがつたな。イヤサ、よう一杯やりやアがつて、尊像を盜みさらしたなア。斯うなつたら、可愛さ餘つて憎さが百倍。

彥兵　オヽ、さうぢや〳〵。たろにかけさらした腹癒せに、どづき廻して、泥吐かせ〳〵。

嘉八　オヽ、合點ぢや。おれが又カウ〳〵〳〵。

ト　天秤のちぎを取つて來て、散々に打ち据ゑる。傳兵衞、堪り兼ね、中へ割つて入る

傳兵　待たんせ〳〵〳〵。この喧嘩は貰ひぢや。オヽ、八

代村の傳兵衞が顔立て、喧嘩は一番貰うた〳〵。

ト大肌脱ぎ、鉢卷締めて我が胸を叩いて見得する。

嘉八　エヽ、たわけづらめ。全體おのれが不器用から、しくじつての事ぢやい。エヽ、忌々しい。

ト突き倒す。彦兵衞に突き當る。彦兵衞、首筋を引提へて引きつけて

彦兵　ヤイ、茲な大騙りめが。サア、繪像は何所へ吐かした。それを吐かせ。吐かさにや痛くするぞよ。

傳兵　アヽ、これはしたり、こなさんも無理な事云ふ人ぢや。おりやその繪像は知らぬ。ツイ賴まれて來たけれどいきなりに失策つてしまつたぢやないかいの。

嘉八　サア、女郎め、何所へどめた。キリ〳〵と吐かせいやい。

まつ　何を隱しませう、成る程、繪像に望みはあれど、盜んだの隱したのと、其やうに怖い事しました覺えはござりませぬ。もう堪忍して下さんせいなア。

嘉八　エヽ、土死太い衒妻め。さう吐かしや、カウカウ。

ト打ち据ゑる。傳兵衞、寄らうとするを、彦兵衞、引きつけて

彦兵　われも同類ぢや。カウ〳〵。

ト双方にて打ち据ゑる。早介、此うちに飯を喰ひしまつて、ツカ〳〵と寄つて、ちぎを引ツたくり、兩人を見事に投げ退ける。兩人、惘りして

嘉彦　アイタヽヽヽ。

ト腰を抱へながら早介を見て

嘉八　ヤア、わりや韋駄天。

彦兵　盜人騙りの詮議をする、おいらをなんで貴樣は

兩人　邪魔するのぢや。

早介　オヽ、邪魔するワ。親方の爲、貴樣達への深切と云ふものぢや。

兩人　ヤア、なんと。

早介　サイヤイ、斯う見た所が一人は女子、一人は見るから知れた甲斐性なし。

傳兵　イヤモウ、お目利きの通り、とんと違ひなし。

早介　萬一の事に目鼻でも舞うた時は、わいら二人は、云はずと知れた下手人になるぞよ。

兩人　ヤア。

早介　ソリヤ檢使ぢやの見屆けのと、さうなる時は親方は大物いり。其所を思うて、おれが親方への忠義、わいらの爲。

留藏　さうぢや〳〵。彼奴等が下手人になる分は構はぬが、おりや物いりが悲しいわい。
早介　ぢやに依つて留めに出た、おれが誤まりか。どうでごんすの。
兩人　サア、それは。
傳兵　こりやあなた、御苦勞に存じまする。
早介　なんと誤まりぢやあるまいがの……マア一服せう。
ト二重へ腰掛け、莨のむ。此うち鉢植の松、仕掛けにて、雪、段々消える。お澤、これに目を付けて
さわ　ア、旦那さま〳〵、不思議な事がござんすわいなア〳〵。
留藏　エヽ、けたゝましい。びく〳〵するわい。
さわ　サア、この鉢植を見やしやんせ。見るうちに段々と雪が消えましたわいなア。
留藏　何を云ひ居るやら。このマア冷えるのに。
ト云ひながら、フト見付けて
ヤア〳〵〳〵、ほんに消えた。
さわ　二月の末か三月の、差入れ頃のこの松の木、今見るうちに緑も伸び〳〵と
留藏　美しう立伸びたワ。

早介　ほんに、稀有けれゝつと云はうか。
傳兵　因果はけれけと云はうか。
さわ　ハテ、不思議な事も
皆々　あるものぢやなア。
ト留藏、横手を打つて
留藏　したり、皆喜べ。尊像の在所が知れた〳〵。
さわ　ナニ、在所が知れたとはえ。
留藏　オイヤイ、外を尋ねるまでもない。即ちこの鉢植に。
さわ　エヽ。
留藏　黄金を以て鑄上げたる尊像たれば、金氣の德で松の緑、立伸びたるに違ひはない。ソレ、そのちぎをおこせ。
茂八　畏まりました。
トちぎを渡す。留藏、松の根を掘りにかゝるを
彦兵　南無三、それを。
ト寄らうとするを、早介、首筋を捉へて
早介　オッと、番頭さん、ぴこ〳〵せずと、ヂッとして居やうぞ。
ト此うち留藏、鉢植より尊像を掘り出して

留藏　ソリヤこそ見たか。尊像が出たワ。
茂八　そんなら盗んで
喜六　隱した奴は。
嘉八　サア、その隱し手は、この女郎め。
留藏　イヤ、この盗人は外にある。最前からの仕儀、女房と云ひ合せの悋氣喧嘩で、盗人の本人も、騙りの同類も明らかに知れてあれど、明らさまには云はぬぞよ。主と家來となるも、前生からの因縁づく、不便なと思ふゆゑ、おりや何事も心に納め、チッと料簡して居るぞよ。始末をするは今日の、天道樣へ心の冥加。慈悲も情もよう辨まへて居るこの留藏。有り難い事と思うて、以後はキッと嗜なみ居らうぞ。
さわ　ほんに、いろ／＼の事で、お前もホッとなされたであらう。もう彼れこれと夜中、お居間へ行て寐やしやんせぬか。
留藏　イヤ、まだ寐られぬ。今朝からの金の出入り、帳合ひして置かねば、明日の勘定がごて／＼する。ソレ、手代どもは帳を持つて、おれが居間へ來い。
喜茂　畏まりました。
留藏　早介は草臥れたであらう。部屋へ行て休め／＼。
早介　左樣なら。お先へ臥ります。
留藏　アヽ、人を使へば、苦を使ふぢやなア、
　ト唄になり、留藏、茂八、喜六、彦兵衛、帳面なぞを持ち、嘉八も付き添ひ、納戸へ入る。早介は橋がゝりへ入る。後にお澤、お松、傳兵衛、殘り、傳兵衛、こなしあつて、そろ／＼逃げうとするを
さわ　アヽ、コレ、若いお人。
傳兵　エヽ。
　ト慄ふ。
さわ　マア／＼、待たんせ。
傳兵　ハイ、ちよつとしゝして參じまする。
さわ　ハテ、何も怖い事はない。マア、爰へござんせ。
傳兵　ハアイ。
　ト怖々後へ戻り
　御用でござりますか。
　トよき所へ控へる。お澤、お松を見て
さわ　マア、わが身も其所へ出や。
まつ　ハイ。
　ト正月の合ひ方になり、お澤、莨盆提げ、向うへ出て

さわ　コレお松や、最前からの立振舞ひ、其方衆は親しい樣子。殊にあの繪像を望むには、深い譯のありさうな事。品に依つたら旦那どのに願うて、貰うてもやるまいものでもないが、隱さずと有體に、譯を話して聞かしやいの。

まつ　お情深いお家樣のお詞。お恥かしいわたしらが身の上話し、一通りお聞きなされて下さりませ。元私しは越後の國、新潟と申します廓で、三千歳と云ふ流れの身の上。二世までもと云ひ交したお方さんが、殿樣から預からしやんしたあの繪像、何者とも知れず盜み取られ、その科ゆゑにお國を追放。樣子を聞いてはあるにもあられず、後を慕うて去年の秋、廓を拔け出で、由縁あつてこの國へ、さまようて來かゝる道筋、怖い事悲しい事の樣樣と、憂き艱難はなか〳〵に、お話し申すやうな事ぢやござりませぬ。シタガ、フト風の便りに聞きますれば、その繪像は内方の、質物に入つてあるとの事。どうぞ寶を手に入れて、お國へ歸參がさせたいと、傳手を求めてお家へ奉公。折を見合せこの事を、お願ひ申したその上で、繪像の質請けを、お願ひ申し上げたいと、心に思うて居るものゝ、何を云うても大枚の、金の才覺仕樣はなし、昨日と暮らし今宵の仕儀。樣子と云ふは、この通りでござりまする。

傳兵　ハイ、私しめは八代村の傳兵衞と申しまして、このお子さんの乳母の伜。去年の九月差入れ頃から、二人連れの居候ふ。中に一人はお主と云ひ、どうぞして繪像を取戻して、お國へ歸參させましたいと、明けても暮れても泣いてばかり。ア、おいとしや、どうぞして願ひが叶へて進ぜたいと心に思へど、人並の智惠ではゆかぬ寶の詮議。マア、なんであらうと、その寶の在所から聞き出して、後は又後の事と、後の月から家を出て、行き着き次第にうろ〳〵と、探し歩けど闇に鐵砲。さぞ待ち詫びて案じて居やしやらうと、戻りかゝつた多智山の町外れ。フッと出合つた内方の……イヤマア、こりや云うて惡いやら知れませぬ。サア、このお子が奉公してござるとは、夢にも知らず、繪像の手がゝりにもと、ツイ頼まれ、へ、、埒もないこの形で、とんとモウ、なんぢややら、根つから譯が解りますまいけれど、其所へよきやう御推量なされて、どうぞ御堪忍なされて下さりませ。

　トこなしあつて云ふ。お澤、ホロリとして

さわ　樣子を聞けば二人とも、氣の毒なやらいとしいやら、

殊には松が優しい心底。男ゆゑの憂き艱難とは、誰れしも女子は同じ事。我が身のやうに思はれて、貰ひ涙を滾しましたわいなう。シタガ必らず案じる事はないぞや。旦那どのにはわしが願うて、望みの尊像貰うてやる程に、二人ともに落ちついて居たがよいぞや。

傳兵　エヽ、そんなら、アノ尊像を只でも下さりますか。コレ〳〵、ちやつとお禮、云はしやりませ〳〵。

兩人　エヽ、有り難うござりまする。

さわ　オヽ、嬉しいは道理〳〵。併し、置き主判人のある物なれば、明日は早々付け屆けさせて、その上で手渡しせう程に、もう夜も更けたれば、其方も松が部屋へ行て、緩りと今夜は寢たがよいぞや。

傳兵　それはあんまり。私しはもうお暇と、云うたところがもう夜半。怖うはないが少し氣味が惡し。

まつ　お家樣のお志し、お泊め申してもらやいなう。

さわ　何事も明日早々。松も休みや。

まつ　ハイ。サア、傳兵衞、おぢや。

　ト行きかゝらうとして、こなしあつて

なんぼうお慈悲深いとて、厚かましい事を、ナウ傳兵衞。

傳兵　ハテ、ようござります。其所を氣強う貰ふが當世。

まつ　それぢやと云うて。

傳兵　マア、ござりませ。

　ト唄になり、兩人、橋がゝりの門口へ入る。あと彈き流し合ひ方。お澤、後見送りて

さわ　君傾城の果でさへ、男ゆゑの憂き艱難。それにつけてもわしが身の、昨日に變る。

　トちよつと奥を見て、こなしあつて

アヽ、思へば夢の

　ト吸殼をトンとはたくをチョンと木の頭。

世の中ぢやなア。

　トこなし。チョン〳〵にて返し。

造り物、元の表側の道具になる。但し大戸締めあり、靜かに、本釣り鐘にて、道具納まる。

　ト右道具納まると、暫らく舞臺をしんと鎭め、好き程に、向うより、中通り、大部屋、皆々好みの形、盜人にて、龕燈、獲物を持ち、靜々と出て來りて、本舞臺へ見得よく並ぶと、小凄き合ひ方になり、自來也、着附け、ぶッ裂き野袴にて、靜々出て來り、花道にて、

自來　きツととまり、空を見て
今宵の分野は。

ト指を繰り、こなしあつて

歴星は東に當つて、その光り至つて清く、斗星翼星に合して、なん〳〵たるは利運の勝端。ハテ、面白い。

ト懷中より、紙を出して、自來也と書いて、手下に渡す。手下、取つて門口に貼る。と大戸口を明け、内より、早介、凜々しき形にて、ズツと出て

早介　谷。

皆々　峯。

早介　シイ。

トこなし。

自來　天眼磯兵衛。

早介　お頭の指圖に付き、二月越しに構つて居るこの磯兵衛、何もかもとつくりと、頑張つて置きやんした。

自來　ナヽ、出かす〳〵。家内の奴輩、男女に限らず、一々に縛し上げ、息の根留めて動かすな。何程高金の物にもせよ、衣類家財に目をかけな。二重壁、落し穴、釣り天井に心を付け、油斷して過ちをすな。心を配つて働らけ〳〵。

皆々　合點でごんす。

自來　天眼、手引き。

早介　合點でごんす。斯うごんせ。

ト始終本釣り鐘、合ひ方にて、早介、先に手下皆々。後より自來也、靜々と大戸口へ入ると、チヨン〳〵、表側の道具引いて取る。返し。

造り物、元の二重へ戻る。茂八、清介、喜六、太郎松、喜八、彥兵衛、皆々寢て居る。橋がゝりより、手下二人、龕燈を持ち出る。直ぐに、茂八を引立てる。物云はうとするをポンと當て、縛し上げ、引立て入る。次に又手下二人出て、清介を引立てる。清介、悄り、足の立たぬこなし、ぐる〳〵卷きにして引摺つて入る。また手下二人出て、喜六を寢て居る上より馬乘りにして縛し上げ、猿轡を入れて引立て入る。また手下二人出て、太郎松を前へ引立て出る。

太郎松、寢恍けながら

太郎　ア、、眠たいに、何奴ぢや〳〵。

手一　イヤ、何奴でもない、盜人ぢや。

手二　聲立たさらしたら擲ち殺すぞ。

太郎　おつさん、なんぞおくれんか。

ト手を出す。

手二　エ、土阿房め。なに吐かすぞい。

手一　サア／＼、うせう／＼。

ト引立て入る。此うち彦兵衛、ソツと目を覺まし布團をかぶる。と手下二人出て、彦兵衛を蒲團の上より押へる。彦兵衛、蒲團の裾へ拔ける。兩人、枕の所を押へる。所を裾より蒲團を兩人にかぶせる。ちよつと立廻りのうち嘉八、枕を上げて、ソツと箒を取つて身構へする。此うち彦兵衛、兩人と立廻つて居るうち、手下一人出て、後より彦兵衛を一かせ切る。ワツと云ふを其まゝ口を押へ、橋がゝり入口へ引立て入る。次に手下二人、探りながら出て來る。嘉八、箒にて手下の額を撫でる。手下、愕りして後へ寄り身構へする。一人の手下は探り寄つて箒を引ツたくり、これより三人面白き立廻りになる。嘉八、我が足に我が褌を踏まへ、目を廻してしやき張る。兩人、これを知らず、探り寄つて取つて押へ、撫でゝ見て

手三　ぶつたさうな。

手四　脆い奴ぢやな。

ト死骸を蹴返し、橋がゝりへ入る。と早介先に自來也、その他大勢付き添ひ、橋がゝりより出て、臆病口の方へ靜々と歩む、チョン／＼返し。

造り物、平舞臺、見附け東西とも金藏、後へ段々藏の屋根覆ひ重なり、幾戸前も見せかけ、眞中に一間半の數寄屋、三方とも吹寄せ障子、廻り本緣付き、矢張り、本釣り鐘、合ひ方にて道具納まる。皆々並よく並び

早介　谷組の者どもは、亭主留藏が居間を圍へ。

皆々　合點ぢや。

早介　峯組の手合ひは、おれに付いて金箱を爰へ出せよ。

皆々　合點ぢや。

早介　皆來い／＼。

皆々　オ、イ。

自來　天眼、待て。

早介　なんでごんす。

自來　盜賊を渡世にすれど、非義の寶は貪らぬ自來也。名もなき夜盜跳り込み同然に、さんぴんばらすは大人氣なし。亭主めに應對して、快う渡せばよし。否と云はゞ是

非に及ばず、手を下ろして働らくまで。貉、蟒、主め
を目通りへ引出せ。

手下　合點ぢや。

ト行かうとすると、屋體の内にて

留藏　苧環の書來る事のならざれば

さわ　夜手にかゝる蜘蛛の糸。

留藏　中邑留藏それへ参り、お客人に對面いたさう。

ト大小入り鳴り物になり、屋體前側、障子一面に引拔
くと、留藏、着附け、野袴、鎗を構へ、床几にかゝり
居る。お澤、襷、鉢卷、長刀を掻い込み、凛々しき形
にて、繪面通りに引添うて居る。側に短檠を灯し、松
の鉢植を置きある。自來也、こなしあつて

自來　一器量ある中邑留藏、聞きも及ばん某は、六十餘
州を横行して、豪家長者の金銀を押借り、貧者なる族に
施す、自來也と云ふ盗賊のお頭様だ。見る通り大勢の手
下を抱へ、この頃の不仕合せ。金銀に乏しいから、今宵
わざ／＼無心に参つた。大儀ながら合力にあづかりた
い。

さわ　ヤア、さう仰しやるは、別れて程經し、夫尾形周馬
どの。

自來　ト自來也、透かし見て
誠に其方は女房檜垣。

留藏　ナニ、お旦那とな。

ト兩人、ツカ／＼と平舞臺へ下りて、自來也を見て

さわ　矢ッ張りさうぢやわいなア。

留藏　モシ、お旗持ちの橘平めでござりまする。

自來　誠に思ひも依らぬ。

留藏　待ち設けたる今日の珍客。先づ／＼これへ。

ト合ひ方になり、自來也、靜々と二重へ上がる。手下
皆々、東西へ別れ並ぶ。

自來　堅固の對面、先づ以て重疊々々。

さわ　ほんにマア、何から角から云はうやら、元は三好の
一家老、お主の非道を諫め兼ね、御出國のその後は、
阿り諂ふ者ばかり。誰が一人抽ん出て、御諫言申す者も
なく、いよ／＼募る惡逆無道。淺緑の銘劍を賜はらぬが
遺恨とあつて、武將に背く謀叛の企て。足利家より討手
向ひ、初度の軍に味方は敗北。淺ましや永重公、遂には
無念の討死を、遊ばしましてござるわいの。

ト自來也、無念のこなし、吐息つく。

留藏　サア、その後をお聞きなされて下さりませ。ソリヤ

軍よと云ふが否や、一家中の佞人輩、牛蒡程な尾を振つて、皆我れ先にと逃げ廻り、僅かに殘るは拙者と奥樣。何が奥樣の事なれば、夫に代つて討死と、小具足に身を固め、御秘藏の鎬月毛に、ヒラリと乘つて驅け出し給ふを、轡づらに取りついて、マア〳〵お待ちなされませ、イヤ放せイヤならぬと、互ひにせり合ひ御諫言。ようマア物を思うても御覽じませ、智勇揃うたお旦那が、御出國のなされたは、深い御思案なうて叶はぬ。一旦この場を逃げ延びて、お旦那樣の在所を尋ね、お目にかゝつて兎も角も、その時こそはお心任せ、マアそれまでは落ち給へと、無理に引立て落ちて行く道筋。ソリヤ落人よ逃がすなと、彼方からは弓鐵砲、こちらからは薙長刀で、エイエイオ、に煽てられ、薄の茂み藪の影、隠れては落ち、逃げては忍び、命から〳〵やう〳〵と、落ちつく所はこの多智山。尤も下郎が故鄕なれども、兩親には疾に死別れ、僅かの知るべに身を寄せて、二疊敷の宿入り、世間の聞えを思ふゆゑ、勿體ないと思へども、マア奥樣は女房分、後日に旦那へ申し譯には、男と生れた大事の物を。

トこなしあつて

サア、すつぱりとぶち切つてしまひました。然るに程なく足利家より、自來也と云ふ盜賊を、お尋ねなさるゝ觸符の繪姿。寸分違はぬ旦那の人相。ハアン聞えた、さては古主永重公の、御無念を察し給ひ、弔ひ軍の軍用金、又二つには味方を招く、御計略と思つたゆゑ、日蔭の主人へ奉公は、今この時と心付き、金を溜めるに如く事なしと、夜を日に繼いで働らく錢も、三貫溜れば高利で貸し、五貫溜れば高歩に廻し、天狗程に狂うたところが、やう〳〵銀で一貫目餘り。イヤ〳〵こんな事では埒が明かぬと、それから地獄谷の一足飛び、乘るか反るかやつて見んと、かゝつた相場の手が合つて、買へば上がる、賣れば下がる、五日ばかりに凡そ千兩。サアしてやつた忝ない、これと云ふも下郎めが、忠義を知つて天道樣が、憐れんで與へ給ふお惠みならん、してこい任せと油木綿、或ひは藥種鹽絹布、世界にあるとあらゆる品々、賣つては買ひ買つては賣り、その度々に儲ける金が、昨日は銀で三百貫、今日は小判で七千兩、ほんに湯水が湧くやうに、溜れば溜る俄分限者。働らく中にも吝嗇坊の、始末人おや乞食おやと、人が誹るが構ひなく、聞く耳澄まして稼ぐが忠義。三年立つや立たぬうちに、大身代に

なるにつけ、腹心の者に云ひ含め、あなたの隱れ家方々と、尋ねさせれど知れぬも道理。昨日は陸奥今日は四國と、慥かな事を聞き知らねば、尋ね當らう目當もなく、晝は人目を忍び、夜に入つては奥様へ、心ばかりの宮仕へ。お足揉んだり腰擦り、お伽話をする中にも、あなたの事を云ひ出して、何所にどうしてござるやら、さぞ御不自由にござりませうと、奥様と申し出し、泣いてばつかり居りました。せめてはお心の慰みにもと、あなたがお好きの松の鉢植、高金にて買ひ求め、旦那にお側にござる心で、御大切になされませと、差上げましたもお心ゆかせ。この頃人の噂を聞けば、あの自來也が當所へ入込んだと巷の風聞、エ、忝ない、人も知つたる大金持ち、中邑留藏、今日は入つて下さるゝか、明日は盜みにござるかと、家内の者にも知らさぬやう、表の門、戸の締り、障子襖や裏口切り戸、不用心を第一とし、待ちに待つたる甲斐あつて、今宵不思議にこの松が、寶の奇瑞で立伸びたは、さては旦那のお便りを、聞かるゝ知らせか神佛の、お告げならんと心にて、祝ふ幸先福丁子、今日と云ふ今日は、久し振りにて御機嫌の好きお顔を拜し、忝ないやら嬉しいやら、熱い涙が胸先へ、ツ、突ツ張り返つてどうとも斯うとも、申し上げやうもござりませぬ。よう跳り込んで下さりましたなア。

トいろ／＼こなしあつて云ふ。自來也もこなしあつて

自來　誠や南山の瓦石は捨つべからず、必らず名玉を得る事ありとは汝が身の上。下郎に稀れた忠義の心底。ホヽウ、神妙々々。

トお澤、こなしあつて、鉢植を自來也の前へ置く。

さわ　周馬どの、お前の寵愛なされしこの松の勳し、只今の思し召しは。

自來　フム、松樹千年遂に朽ちぬと、末を思うて諫言か。

さわ　杣人のいつぞや斧の後つけて、松はそれより雪折れにけり。先祖は名におふ平相國、清盛公の末葉たる、尾形周馬寛行とも、云はるゝ武士があるまじき、如何に忠義と云ひながら、山賊夜盜は何事ぞ。以前の正しきお心も、いつしか替り果てたる有樣。末代までも惡名を、云ひ傳へるが御本望か。今にも足利家より討手の人數向つた時は、例へ百人の味方にて、これを防げば千人にて取圍み、また千人の手下あれば、一萬人と勢ひを増し、多くの敵を引受けて、なんと御勝利が得られませうぞ。身の成る果は巷に曝し、鳶や烏の餌食となる、淺ましき

死恥に、汚名を殘す御所存なるか。左樣の事を辨まへなき、お心にてはなかりしが、如何なる天魔の魅入りしか。時世に連れて其やうに、賤しき心になるものか。何卒今日より改めて、惡心飜へして、善心になつて下さりませ。コレ、拜みます／＼、拜みますわいなア。

ト いろ／＼こなしあつて泣く。

白來　女心に思ふは理り。只情なきは主人の無道。諫め兼ねて身退き、妙香山に影埋み、蟄居なしたるこの寬行。然るに計らず主人の逆意、武將に敵する旗上げと、聞くより南無三是非もなし、いでこの上は善惡ともに、君に從ふ臣下の道と、驅けつけ見れば早落城。チエ、口惜しや死なしたり、殘念至極と悔むに甲斐なき主人の討死。共に死なんと思ひしが、よく／＼思へば主君の遺恨、せめては弔ひ合戰なし、義兵の旗を飜さんと、その日よりして山賊野武士、浪人者を語らふうち、その徒に交れば三人四人、荷擔の者ども、頭々と敬ひ／＼、次第に手下人數は殖ゆれど、浪人の何貯へなきその上に、多くの部下をはぐくまん、活計無ければ切り取り強盜。計らず去年八月十六日、夜陰に及び彌彦山、通りかゝりし間道にて、不思議に手に入る主君の公達。これぞ亡君長重公の、導きならんと拾ひ取り、はごくみ上げる其うちにもつく／＼思ひ廻すにつけ、科なき人を殺害し、奪ひ集むる金銀の、報ふこの身は八逆罪。逆磔刑の刑罰も、忠義の道に分け迷ふ、これを思へば直實が、出家をせしも實に理り。捨つべき物は弓矢なりけり。心の內の苦しさを、推量せよ、女房、橘平。

ト 少し愁ひのこなしにて云ふ。

さわ　オヽ、お道理でござります。さうあらうとは知りながら、女子の淺い心から、もしや非道にお心の、傾く事もあらうかと、疑うたのは勿體ない。御免なされて下さりませ。

ト こなし。留藏もこなしあつて

留藏　イヤモウ、惡と知つて惡を企むも、未來の主人へ臨ち忠義。下郎めは又お旦那へ、御奉公に溜めた金藏、數を合して十七戸前。イヤ申し韋駄天どの、あなたは勝手をよう御存知。ソレ、皆さんへお指圖なされて、旦那の前へ金箱を、殘らず積んで下さりませ。

ト 早介、こなしあつて

早介　ヘイ、これは御叮嚀な御挨拶でござりまする。餘り結構過ぎた跳り込みで、どうやら得手勝手が違うたやう

で、ナウ皆の衆。

手一　さればやい、どうか拍子抜けがしたやうなわい。

手二　シタガ、折角御亭主の志し、もどくもどうやらをかしなもの。

早介　左樣ならばお辭儀なしに、みんな盜んで

皆々　歸りませうわい。

留藏　それはどなたも御苦勞でござりまする。ドレ、戶前の鑰を。

ト立たうとする。

早介　アイヤ〳〵、私しどもはツイこち〳〵、鍵では結句邪魔になつて、とんとよう明きませぬて。

留藏　イカサマ、これも御尤も。そんならそこへ、好きやうに賴みます。

皆々　合點でごんすわい。

ト二代鑑、六俵入りの合ひ方になり、早介、案內して、舞臺手下皆々土藏より千兩箱を追ひ〳〵持ち出して、前へ見事に積み上げる。此うち自來也、矢立を出し、鼻紙へ何か書いて居る。お松、傳兵衛、おづ〳〵出て

傳兵　段々樣子を聞きますれば

まつ　どうやら怖いやうな。

傳兵　また勇ましいやうなお話し。

さわ　お松傳兵衛、二人の者。

留藏　わいらが望みの錢像は、ソレ。

ト懷中より出して、お松へ遣る。お松見て

まつ　ヤア、こりやコレわたしが願ひの

傳兵　そんならそれを私しども へ。

ト兩人、留藏を見る。

留藏　イヤ、遣りはせぬ。盜んで行け。

兩人　エ、。

留藏　何程大切の質物でも、盜賊に鼠喰ひは存じ申さず候。

まつ　エ、有り難うござりまする。

ト喜ぶ。傳兵衛、こなしあつて

傳兵　どうでも旦那は得心で、盜ます事がお好きと見えるわい。

ト本釣り鐘七ツを打つ。早介、こなしあつて

早介　ありやモウ七ツ。頭、そろ〳〵と

皆々　引きやんせんか。

自來　オ、なんぼ應對づくの盜賊でも、夜が明けては世間へ不遠慮。

ト云ひながら、そろ／＼平舞臺へ下りる。

留藏　もうお歸りでござりますか。

さわ　せめて今宵は。

自來　旗上げまでは女が身の上。

留藏　しつかりと預かりました。

傳兵　このどさくさに私しどもゝ

留藏　暇をやつた。早う出て行け。

傳松　エヽ忝ない。

さわ　逢ふは別れの始めとやら。

ト寄らうとするを、留藏、隔て

留藏　ハテ、今暫らくはこの鉢植、旦那と思うて御大切に。

自來　彼の最明寺道崇が、寒夜を凌ぐ三木は

さわ　それも鉢の木。

留藏　これも鉢の木。

自來　相違なき條、安堵の一書。

ト最前の鼻紙に書いたる書き物を留藏が前へ抛つてやる。留藏、取上げ、開き見て

留藏　ヤア、こりやコレ軍中の御感狀。

自來　イヤ、今宵の金銀借請け證文。

留藏　エヽ、有り難う存じまする。

さわ　隨分御無事で、この松の

留藏　齡を壽く聲高砂。

早介　さす腕には武名を振ひ

自來　治まる手には義兵の旗上げ。

傳兵　千秋樂には

まつ　人を惠み

早介　萬歲樂には

皆々　高名手柄。

さわ　やがて夫婦が

留藏　相生の松風、勝閧の聲ぞ樂しき、颯々の聲ぞ樂しき。

ト謠にて云ふ。

エヽ、おめでたうござりまする。

自來　オヽ。

トこなし。チヨンと木の頭。

過分。

ト皆々よろしく、

ト幕外、本釣り鐘、合ひ方になり、手下皆々、千兩箱を擔げ、段々と向うへ入る。この人數繰返しにて何遍

もあるべし。トヾ入り切る。合ひ方納まり、本釣り鐘
打切る。

大詰

音信山新御殿の場
鏡ケ浦仇討の場

役名――足利左門之介。神道者、鈴太夫實ハ織殿屋新三郎。白山大學。淺妻歡之助實ハ荒山隈五郎時綱。寺侍ひ、藤次。同、逸太。瀧山の巖妙院。蠻軍太。犬山丑藏。奴、土手平。萬里破魔之助。鬼薊勇軒實ハ鹿野苑軍八。手下、天眼礒兵衛。同、蟒の三。同、幽靈の八。同、大木胴七。同、波淵の仁三。同、物見の松。腰元、小礒實ハ破魔之助妹渚。同、千歳實ハ傾城三千歳。同、紅葉。同、小萩。長兵衛娘、美鳥。石堂妻、玉木。鴻見雅次郎正輝。盜賊、自來也實ハ尾形周馬寛行。

造り物、向う黑幕、眞中に稻村、好き所に乘り物下ろし、その側に、輪法の紋つけたる箱提灯など、奴達出し居る。寺侍ひ、藤次、逸太、上下、股立ちにて、反り打つて居る。下手に、幽靈の八、大木胴七、波淵の仁三、物見の松、蟒の三、盜人にて、拔身を構へて居る。股立ちの侍ひ大勢、乘り物を取卷いて居る。この見得よろしく、本釣り鐘、合ひ方、バタ〳〵にて幕明く。

逸太　國主の嚴命に依つて、瀧山の巖妙院どの、音信山の新御殿へ、お越しなさるゝ路次を塞ぎ
藤次　途中の狼藉、妨げ致す憎くい盜賊。
逸太　達て妨げ致すか否、一々首を切つて捨つるぞ。
皆々　キリ〳〵道を通し居らう。
八　何を猿松めら、いま北國中で怖ぢ恐るゝおいらが仲間。
胴七　聞けば足利の左門之介が、病氣について、祈禱に行く巖妙院と見たに依つて
仁三　何か知らねど、用事がある、引立て來いと頭の云ひつけ。
松　四の五の吐かすと、この大刀、わいらが腹へグッシヤリぢやぞよ。
三　痛い目せぬうち三拜して、おいらに付いてうせればよし

八　達て否ぢやと云ふが最期、直ぐにこの世の暇乞ひ。
胴七　息の根留めうか。
仁三　但しうせるか。
松　サア、返答は。
皆々　どうぢやい。
藤次　ヤア、云はして置けば憎くき廣言。イデ一々に生けては置かぬ。
逸太　ソレ、何れも、ぬかり召さるな。
侍ひ　心得ました。
八　さう云や。ソリヤ。
皆々　オヽ、合點ぢや。
　ト幽靈の八、提灯を切り落し、皆々立廻り、トヾ皆々東西へ逃げて入る。手下皆々、追つて行く。乘り物の内より、巖命院、官僧の形にて出て
巖命　命が物種、逃げるが勝ち。オヽ、さうぢや。
　ト行かうとする。内にて
大勢　アリヤ〳〵〳〵。
　トこれにて、また上手へ行かうとする。内にて又
大勢　アリヤ〳〵〳〵。
　トびく〳〵して、花道へ行きかける。
巖命　こりや、堪らぬ〳〵。
　ト花道へ行きかける。好き所にて、ポンと本鐵砲の音して、巖命院に當る。ウンと倒れる。合ひ方きつばりとなる。向うより、萬里破魔之助、股引、脚絆、大小、合羽、旅の形にて、笠と提灯を持ち、右の筒音に驚ろきし心意氣にて、笠にて提灯を隱し、窺ひながら、上の方松の蔭へ忍ぶ。正面の稻村より、自來也、着流し、大小、種ヶ島を持ち、火繩にて、死骸を探り、また息のあると云ふこなしにて、グツと踏みつける。巖命院、苦しみ落入る。自來也、窺ひ見て、着附け衣を剝ぎ取り、こなしあつて
自來　新たに營む音信山の假御殿。入込むには最屈竟。フム。ソレ。
　ト行かうとする。破魔之助、ツカ〳〵と出て
破魔　曲者。
　ト提灯を差出す。自來也、叩き落さうとする。破魔之助、身を交して、キッとなり、早繩扱くと、手下バラバラと戻つて來て
皆々　お頭か。
自來　息の根留めて、後から參れ。

皆々　オヽ、合點ぢや。

ト ばら／＼と破魔之助にかゝる。自來也、靜かに花道へ行きかゝる。よき所にて、破魔之助、皆々をよろしく留めながら、向うをキッと見込んで

破魔　盜賊詮議に自ら來る也。

自來　なんと。

破魔　イヤ、自來也待て。

ト 自來也、想ひ入れあつて、ツイと向うへ入る。破魔之助、皆々を引廻し、落ちてある種ヶ島を取上げて

詮議の一條、行く先は音信山。

皆々　なにを。

ト 又かゝるをよろしく投げて

破魔　ソレ。

ト 向うへ走り入る。チヨン／＼、返し。

造り物、一面の高二重御殿の體。見附け金襖、竹の節、半御簾折り廻り、御簾下ろす事あり、橋がゝり、落間、後へ寄せ、塗り骨障子屋體、前側、植込み、この見得よろしく、朝妻歌之助、着附け、上下、使者の見得。腰元千歳、同しく小磯、同じく紅葉、同じく小萩、皆々屋敷風、使者を出迎へて居る。この見得、所々に燭臺數多灯し、序の舞にて、道具納まる。

千歳　團之丞さまよりのお使者、お役目御苦勞に

皆々　存じまする。

歌之　なにサ／＼、この度鎌倉にござる白山團之丞さまのお見出しにあづかり、仕官を致せし朝妻歌之助。主人の仰せを受けて、この音信山へ使者の役目。

小磯　當上總の國は、團之丞さまの兄御、白山大學さまの御領分。

紅葉　足利左門之介さまを御招待申さん爲、新たに營む音信山の新御殿。

千歳　この千歳を始め、爰に居やしやんす小磯どの、琴柱どのも新參の腰元。

小磯　お國風の事は御勝手知らねば、何かに付けて初々しい御奉公。

紅葉　又わたしらは椎津家より、若殿樣の御遊興に、遙々と爰へ

小萩　召し寄せられました

皆々　腰元どもでござりまする。

歌之　若殿樣には、御簾中玉琴姫を御同道にて、當御殿へお入りの前、姫君樣には御不例とあるゆゑ、お見舞ひの使者は表御用、役目も相濟む上は、さてこれからは暫時の暢氣。サア、女中達、近う〳〵。

ト眞中へ居直る。女形、兩方より取卷き、誂らへの鳴り物になり

千歳　都に恥ぢぬ鎌倉の、秦の詠めは江の島の、磯の景色に桐ケ谷、驪龍櫻もさぞやかし。

小磯　大磯小磯化粧坂。

紅葉　當世風の女中の風俗。

小萩　定めしあなたも、その色里へ。

千歳　折にふれては、お通ひなされたで

皆々　あらうなア。

歌之　オヽ、通うたとも〳〵。傾城の水上は、近江の國の朝妻舟、その白拍子の朝妻を、苗字に取つた歌之助、色一通りは業平に、おさ〳〵負けぬと云ふ心で、取りも直さず拙者が名乘り、業久と呼ばるゝも、なんと無理ではあるまいがの。

千歳　さつてもきつい色里の、粹の根本艶男、定めて濡れの痴話文が、たんと降つたであらうの。

歌之　オヽ、降つたとも〳〵、外を歩けば濡れ文句、文が降るので門中は、陣笠着ねば歩かれず、こりや叶はぬと思ふにつけ、筑紫の果の鬼界ケ島、鬼住む浦の隅までも逃げて行たれど情ない、矢ツ張り鬼界ケ島の傾城どもが惚れ居つてなう。

小磯　エヽ、アノそんなら、鬼界ケ島にも傾城があるかえ。

歌之　イヤモウ、あるの無いのと云ふやうな、御仁體はないわいの。先づその傾城の聲音と云ふものは、怪しからぬものぢやての。

皆々　どう云ふ聲おやぞいの。

歌之　サア、その聲音は……モウ……。

ト牛の眞似する。

紅葉　エヽ、そりや牛の鳴くのぢやわいなア。

歌之　サア、その牛のやうに、傾城に追ひかけられて、逃げ行く先は蝦夷松前、先づこの廓は格別違うて、昆布で屋根を葺いて、揚屋々々は膃肭臍の所、其所で付け文を書いたところが、また藝子めが惚れ居つて、付け文をしおつたが、その又文句の可愛らしさ。

皆々　して、その文句わえ。

歌之　サア、その文句は斯うぢや。餘り堪えに堪え兼ねろくをやるべいに候、ちよらまちよけば、わちよれとのしちよろめきりせを、ちよろとつなぎ腹ははひぶッぽれ參らせ候、いやたもさごた〱はりめさなく、眼玉のほへつぶれべいに候。

小萩　なんの事ぢやぞいなア。

歌之　サア、その奧に一首の歌が書いてあつたわいの。

皆々　なんと云ふ歌ぢやぞいなア。

歌之　その歌は、けん〱とけんによがられてけんけんそ、おけゝらけんのけんけらけん〱。

ト此うち皆々、囁き合ひ、歌之助に引裂き紙を頭へ付ける。

千歳　ほんにマア、聞けば聞く程、濡れの利いた色男。ドレ、ちよつと耳を引かうか。

ト耳を引ッ張る。

歌之　アヽ、コレ〱、どうさつしやるのぢや。

ト顏顰める。

小磯　わたしらも肖るやうに。

トまた耳を引く。

歌之　待つてくれ〱。

紅葉　ほんに、見れば見る程、可愛らしいお若衆樣。

小萩　わたしらも皆一統に

皆々　惚れましたわいなア。

ト皆々こなし。

歌之　アヽ、これはしたり、惚れ手は大勢、色男は一人。アヽ、好い男に生れたも、ハテ迷惑なものぢやわいの。

トこなし。

千歳　色好い返事はコレ。

皆々　どうぢやぞいなア〱。

ト皆々寄つて、歌之助を突き倒し、頭を叩いたり、抓つたり、いろ〱嬲り者にする。

歌之　アヽ、コレ〱、さらしられては、あつたら色男が皺苦茶になるわい。よい〱、この上は、惚れられたが因果、一々選り取りぢや。マア、そもじから。

ト千歳に抱きつくを

千歳　そんな氣の多い事は嫌ぢやわいなア。

ト突き放す。

歌之　そんなら、貴樣を。

ト小磯の側へ行く。

小磯　オヽ、嫌ひ。

ト ちやつと逃げる。

歌之　差詰めわが身を。

ト琴柱にかゝる。

琴柱　嫌ぢやわいなア。

ト突き放し、逃げ退く。

歌之　さては皆斟酌かいやい。否でも應でも對座一面、引ツ浚へて取つてくれよ。

ト鳥刺しの合ひ方になり、皆々を追ひ廻す。トゞ二重へ逃げて行くを、追ひかけ上がる。皆々寄つて、上より突き落す。歌之助、二重より轉んで落ちる。皆々見て

皆々　オヽ、をかしやの。

千歳　サア皆さん、この間にござんせいなア。

ト皆々逃げて入る。ト橋がゝりより

鬼簓、勇軒出仕。

ト太鼓謠になる。奥より、白山大學、着附け上下、ふんでん。玉木、衣裳、襠裲、橋がゝりより、勇軒、散髮、黑紬、長下にて出て來る。此うち歌之助、砂を拂ひ、膝を擦り居る。

大學　鬼簓勇軒、只今參つたか。

勇軒　これは白山大學どの、石堂の奥方玉木どの。

玉木　先づ〳〵これへ。

勇軒　御免下されい。

トまた居直りになり、大學は二重の上、勇軒は下手、皆々座に着く。

大學　使者に參りし歌之助、見苦しいその態、扣へ居らぬか。

歌之　扣へようと思うても、縁から落ちて腰が抜けたか知らん。アイタヽヽヽヽ。

トもぢ〳〵して片脇へ扣へる。玉木、こなしあつて

玉木　若殿左門之介さまには、安房上總の浦の景色を御遊覽とあつて、遙々お越しにつき、領分なれば饗應の、お役目は白山大學どの、我が君守護はこの玉木、即ち石堂晴近が名代。

大學　御簾中玉琴さまには、道中の疲れと覺しく、御不例に依つて醫療さま〴〵。それは格別、手前弟、團之丞より、申し越せし仔細に依つて、召し寄せし勇軒と申す者。聞きしに優る武藝の達人。

勇軒　ハツ、仔細ござつて去る秋まで、在郷に身を潜め、いま時至つて斯ばかりの立身。卞和が玉も用ひざれば、

土塊に等しく、また取上げる時は四海の寶。文武兩道を兼備したるこの勇軒、拙者如きの英雄世に顯はるゝと申す事は、實に天下泰平の基と申すもの。イヤ、これは申さずとも知れた事。ハヽヽヽ、玉木どの、なんと左樣ではござらぬか。

玉木　成る程、御尤もに存じまする。

　トこの時、フト歌之助、勇軒を見て、恟り。

歌之　ヤア、其方は吳堅村の浪人、五十嵐典膳。

　ト勇軒も見て

勇軒　朝妻歌之助、さては汝は。

歌之　園之丞さまに抱へられ、鎌倉屋敷へ御奉公。さう云ふこなたも

勇軒　當地へ立越し、大學どのゝお客分。名も改めて鬼薊勇軒。

歌之　思ひ廻せばその時は

勇軒　擲ち捕ふられた遺恨が晴れぬか。

歌之　なんのマア、強い者には從かれう。意趣も遺恨も、柳に〳〵やらしやんせと云ふ唄の通りぢや。

大學　ハヽヽヽ、楠正成は泣き男を以て謀計をなす。かゝる阿房の歌之助、密々の使ひとは最屈竟。弟方へ申し送る仔細もあれば、次へ參つて扣へて居らう。

歌之　扣へて居りませうが、大學さま、阿房々々と仰しやるけれど、阿房には得て女が付き物ぢやが、それが女子に嫌はるゝと云ふは、阿房も阿房に依るものかいぢや。ほんにあんまり阿房らしいでならんわい。

玉木　申さば大事のお使者樣、腰元どもに云ひつけて、キツと馳走をさせませう。

歌之　アイヤ〳〵、その女中達は懲り〳〵ぢや。圍へ行て薄茶なりとたべませう。どなたもこれに、御緩りとござりませ。

　ト合ひ方になり、歌之助、ちが〳〵して、奥へ入る。

　大學、こなしあつて

大學　イヤ、暫時の積欝、一獻酌まう。誰そ居ぬか。銚子杯を持て。

大勢　ハア、。

　ト近習、長柄の銚子杯を持ち出る。ト向うより乘り物、これに磯兵衛、麻上下、股立ち、蒔繪の箱を持ち、付き添ひ出て、花道にて

磯兵　ハツ、お召しに依つて瀧山嚴妙院、參上仕つてござりまする。

玉木　それ待ち兼ねし。玉琴さまの御不例は、物の怪の爲す業なれば、これを鎭むる祈念の役目。

大學　中門の小庭より、あれなる護摩壇へ廻り、早々祈念勤めてよからう。

磯兵　ハツ、お乘り物を早う〳〵。

ト これにて、乘り物、橋がゝりへ入る。磯兵衞、本舞臺へ來り

ハツ、拙者は巖妙院が家來、磯兵衞と申す者。御祈念のお供物、主人へお取次を下さりませう。

ト 右の箱を差出す。近習受取つて

近習　承知いたした。

ト 箱を持ち、奥へ入る。

大學　勇軒、さゝうか。

ト 杯を差出す。勇軒、取つて

勇軒　ハツ、お戴き申しませう。

ト 近習酌する。磯兵衞、あたりを見て

磯兵　かゝる邊鄙へ新御殿を建てられしは、足利の公達を設けの爲とやら。兎角世界は金さへあれば、自由なものぢや。イヤ、手前は持參の瓢簞酒。さらば爰で樂しみかけうか。

ト 腰に提げて居る瓢簞を取出し、馬杓にて、酒を飮む。

大學　片田舍の濁酒、せめて肴は、ハテ、何をがな。

ト 橋がゝり内より

破魔　お肴の一種、只今持參仕るでござりませう。

ト 合ひ方になり、破魔之助、着付け上下に改め、三方に返し前の種ヶ島を載せ、持つて出る。この時、上手の御簾卷き上げると、上段に不動の繪像を掛け、壇を築き、自來也、僧烏帽子にて、後向きになり、鈴を振り、水晶の珠數を持ち、護摩を焚き、祈禱して居る。破魔之助は右の三方を勇軒が前に置く。平舞臺よき所へ座に着く。大學、見て

大學　其方は萬里破魔之助保利。

破魔　ハツ。

玉木　去秋より國遠と聞きましたが、存じがけなき只今の對面。

勇軒　この飛び道具を肴の一種とは。

破魔　四海の重寶、淺緑の劍紛失、詮議の爲に某は國遠。まつた越後の領主、椎津市正どのには、鎌倉表へお越しあつて、百日が日延べのお願ひ。首尾よう御赦免ありしかど、その日數とても早切れ果て、今に至れど劍の在所、

手がゝりも取り得ざるうち、我が君さまには當御殿へお入りに付いて、玉琴姫さま御不例の儀につき、御祈禱所の高僧お入りと

ト上段の自來也へ目を付ける。自來也もこれに耳を留めて、また鈴を振り、こなし。兩人、こなしある。

開き、さぞ御祈念もと推量り、それにつけても今、北國に横行なす、自來也と云ふ盜賊の張本。彼れを召捕り、劍の詮議なさんずものと、思ふ折節、計らず今朝物見の松原にて、拾ひ取りたるその種ケ島、なんと勇軒どの、御酒のお肴にはなりますまいかな。

勇軒　如何にも、この肴氣に入つた。ずんと勇軒が氣に叶うた。彼の自來也と云ふ奴、數多の手下を從へ、雲に隱れ霧に紛れ、召捕らんこと容易からず、餘人の目には見えずとも、我が眼力に遮ぎる盜賊、手の下に落入る罪人、いでと思はば、この飛び道具を以て、行く先かけてどつさりと、ハヽヽヽ、命を果しに自ら來る盜賊自來也、なんの苦もなく討取つて見せうワ。

大學　成る程、奇妙不思議の盜賊なれども、其方が手練では、打ち捨てんこと難きにあらず。

玉木　大鵬と云ふ大鳥も、南方の鯤には及ばざるの喩へ。物には上へ〱のあるものでござりまする。

磯兵　ハヽヽヽ、人も無氣なる口先の似非廣言。得て斯やうな衆達は、まさかの時は人一番に、牛蒡程な尾を振つて、逃げるものでござりますて。ハヽヽヽ。

勇軒　ヤイ〱、うづ蟲め、勇軒が前とも恐れず、出る儘の雜言過言。あぐちも切れぬ似たやま侍ひ。小隅へなりと、ちよつちよこなつて扣へて居らうぞ。

磯兵　イヤ、すッ込んでは居りますまい。この磯兵衞、生れ付いて追從が大嫌ひ。侍ひ顏をなされても、知行を貪る犬侍ひ、私慾に耽る爪揉根性。盜賊とは云ひながら、仁義を施し、貧者を憐れむ自來也に比ぶれば、雲と泥程違うた根性。

破魔　磯兵衞とやら、其方は自來也を存じて居るか。

磯兵　イヤ、全く。

破魔　檢校法師に遣はるゝ身を以て、いかう盜賊の贔屓いたすが、わりや自來也が知音か、但しは手下の者か。

磯兵　ア、滅相な。自來也とやらは存じは致さぬ。只今のやうに申したは、こりや世間の風說を申したのサ。

破魔　すりや、世間の風說。

ト自來也の方へこなしあつて

ハテ、風說ぢやよなア。

トこなし。合ひ方、バタ〳〵にて、向うより、美鳥、振り袖、抱へ帶、菅笠を持ち、一本差し。奴土手平、美鳥を引立て出る。花道よき所にて

土手　胡亂な女め、腕廻せ。

美鳥　ア、申し、必らず聊爾なされますな。私しは越後の國から、安房の國へ便船を致します者でござりまする。何も御詮議に遭ふ覺えはござりませぬ。

土手　イヤ、その覺えない者が、何ゆゑあつて女の身で、刃物を帶せしぞ。

美鳥　サア、それは〳〵

土手　拙者と咎めたが誤まりか。

美鳥　でも、身に覺えない無體の御詮議。

土手　いよ〳〵怪しい旅の女。キリ〳〵白狀いたしてしまへ。

大學　待て〳〵、一刀を帶ぶればとて高が女、苦しうない、これへ通せ。

土手　ハツ、御意ぢや。お目通りへキリ〳〵出ませい。

美鳥　ハアイ。

トこなし。

玉木　聊爾はあるまい。近うおぢや。

美鳥　ハイ、左樣ならば、お許しなされて下さりませ。

ト本舞臺へ來る。土手平、キツと圍ふ。美鳥、油斷せぬこなし。勇軒、美鳥を見て、驚ろくこなし。玉木、こなしあつて

玉木　只さへ旅は物憂きに、見れば連れの衆もなささうな。そもじ一人か。連れでもあつてか。

美鳥　ハイ、さればでござりまする　安房の知る邊へ參りかけ、道にて思はず召連れました、供にはぐれて行くへ知れず、勝手は知らず、ツイうろ〳〵とさまよふうちに、このお館の御門前にて見咎められ、思はず爰へ。

ト思はず勇軒を見て

ヤア、こなたは。

ト恟りする。

勇軒　美鳥、無事で居つたな。

美鳥　思ひがけないと云はうか。

勇軒　雅次郎に巡り逢うたか。

美鳥　エ、。

勇軒　惡緣に絡まれて、ハテ、苦勞を致すよな。

玉木　すりや、この女中も。

勇軒　よう存じて罷りある。
美鳥　美々しい出世を見るにつけても、雅次郎さまのお行く末が、味氣なうござんすわいなア。
ト　しいなりとなる。この時、自來也、祈念をしまひ、正面に居直り
自來　護摩の煙りに障化を除き、惡魔邪神を降伏なせば、御病氣御本腹の期も近からん。何れも、御滿足あられませう。
破魔　巖妙院どのでござるよな。
自來　承り及びし破魔之助どの。
破魔　して、貴僧の勤行はな。
自來　天上天下唯我獨尊。
破魔　五戒はなんと。
自來　酒肉、妄語、殺生、偸盜、邪淫。
破魔　イカサマ。シタガ、その五つのうち、四ツは保つとも、只保ち難きは偸盜戒。
自來　なんと。
破魔　越路なる千草の濱の風暴れて、音信山へ寄する白浪。
勇軒　自來也、捕つた。
ト　種ヶ島を投げつける。自來也、中啓にて、叩き落し

自來　勇軒どの、これは。
勇軒　盜賊自來也めに出逢ひなば、先ッその如くこの勇軒が、打留めうと存じて。
自來　ハヽヽヽヽ、鷄卵を以て大山を打たんとは、及ばぬ及ばぬ。
破魔　ナニサマ、及ばぬ譬へ。身を滅ばすは愚かとや云はん。近くは先年亡びたる三好長重、その家臣たる尾形周馬、亡主の仇を報はん爲、盜賊山だちとなつて軍用金を集むるとの風聞。なんと撿校どの、彼の周馬と云ふ奴、善であらうか、惡でござらうかな。
自來　世の中の苦患を聞くが嫌さに、世間を離れし出家沙門。その尾形とやら周馬とやら、名さへ知らねば、まして善惡なんの存ぜう。知らぬが佛、宗師の戒め。
勇軒　こりや、知つたとは云はれまい。古主へ對し忠義なぞと、忠義ごかしに金銀財寶、貪る盜賊國賊は、大身鎗の成敗、狂ひ死を見るやうに、今のうちから思はるゝて。
ハヽヽヽヽ。
ト　自來也は構はず、珠數爪繰りて居る。磯兵衞、こなしあつて
磯兵　お口の達者な勇軒さまへ、生物をお肴に進上申さ

う。
ト勇軒の胸先へ小柄を打つ。仕掛けにて、勇軒の胸先へ小柄立つ。これに構はず、嘲笑うて居る。破魔之助、キッと見て
破魔　呼吸を目掛けし小柄の手裏劍。瞬ぎも召されぬは、世俗に申す不死身の性か。ハテ不審千萬。
ト磯兵衞、ギョッとする。美鳥、こなしある。
勇軒　こゝにも立たぬほてゝんがう。如何程に踠いても、某が五體は鐵石。鈍刀が身に立たうか。
ト小柄を拔き取り
馬鹿な事を。
ト破魔之助へ打つ。よろしく留めて
破魔　ハヽヽヽ、馳走のはね箸、滅多に油斷は仕らぬ。
美鳥　思へば典膳。
ト勇軒目がけ行かうとするを
土手　尾籠な女め。
ト引立てうとするを、磯兵衞、留めて
磯兵　ハテ、女子を相手に大人氣ない。
ト土手平を見事に投げる。
大學　手向ひひろぐか。うぬ。
ト刀に手をかけるを
玉木　ハテ、騷々しい。大學どの、お鎭まりなされませう。
ト支へる。
大學　フム。
トこなしあつて扣へる。
自來　若殿へもお目見得いたし、今宵はこれにて一宿いたさう。
破魔　齋の料理は工風の獻立、手を替へ品を替へて、饗應の致すでござらう。
勇軒　連れにはぐれて難儀とあれば、其方もこれにて一宿いたせ。
ト美鳥、こなしあつて
美鳥　成る程、袖振り合ふも他生の御緣。
破魔　何か仔細のあるべき女。その儀もとくと聞き屆けて遣はさう。
美鳥　兎角よろしう。
磯兵　お次へ參つて、トロ〳〵とやらかさうか。
玉木　善惡二つを
自來　悟れば直ぐに邪正の一如。

破魔　星の光りも晝は隱れて
勇軒　夜目に輝く身共が英名。
美鳥　今宵一夜は
　ト勇軒の方へ行かうとするを、磯兵衞、引廻して
磯兵　泊り合すも千差萬別。
玉木　マア、それまでは其方も次へ。
美鳥　畏まりました。
大學　土手平も休息いたせ。
土手　ネイ。
勇軒　巖妙院。
破魔　勇軒どの。
自來　後刻面會
皆々　仕るでござらう。
　ト唄になり、自來也が前の御簾下りる。美鳥、勇軒へ心意氣。土手平、美鳥へ行かうとするを磯兵衞隔てる。大學は破魔之助へ擬勢するを勇軒、顏にて押へる。破魔之助は顏にて、美鳥に次へ行けと云ふこなし。皆々引ッ張りよろしく、磯兵衞、土手平は橋がゝり、美鳥は下手屋體、皆々は奥へ入る。トあと在郷唄になり、向うより、鈴太夫、神道者の形にて出て來りて

鈴太　ヤレ／＼、怖い事／＼。既の事に酷い目に遭はうとした。惡い奴等は祓ひ給へ清め給へ。
　ト御幣にて身を清め、本舞臺を見て
　ハヽン、聞き及んだ新御殿と云ふは、慥かに。オヽ、さうぢや。
　ト本舞臺へ來て、差足にて、ソッと奥へ行かうとする。轡軍太、犬山丑藏、近習侍ひにて、東西より出て
兩人　待て。うぬ、どれへ參る。
　トきつと云ふ。鈴太夫、悄りして
鈴太　ハアイ。
軍太　當所に見馴れぬ神道者。
丑藏　自體うぬは何國の
兩人　何奴ぢや。
　ト双方より挾み、キッと云ふ。この時、奥より、小磯出て
小磯　アヽ、イエ／＼、その神道者はお上より、お召しに依つて最前、お使ひをおやりなされた者。其方はそれで爰へおぢやつたのであらうがの。
　ト鈴太夫、こなしあつて
鈴太　エヽ、成る程、左樣でござりまする。お召しに依つ

て鏡鈴太夫、只今參上いたしましたのでござりまする。
小磯　オヽ、さうであらう。お上にもお待ち兼ね。お二人はこの樣子を、お姫樣へ仰せ上げられい。
軍太　イヤ〳〵、非常を糺すは我れ〳〵が役目。
丑藏　何とも心得難き儀もござれば、いつかなこの場は動きませぬぞ。
ト兩人、下に居る。小磯、辛氣なこなし。この時、奧にて
千歲　ハイ〳〵、畏まりました。
ト云ひ〳〵出て、鈴太夫を見て愕り。
ヤア、お前は新さま。
ト云ふを
鈴太　アヽ、コレ〳〵、如何にも新、イヤサア、神道者の鈴太夫、このお館へ御用があつて、召し寄せられましたハイ、神道者でござりまするぞ。
千歲　さては小磯さん、お前が。
小磯　アイ、お上の御用で呼び寄せましたが、マア、爰でわたしらが身の上も、占うてもらはうぢやないかいなア。
千歲　さうでござんす。神道者さんなら、占ひもさぞ上手であらうわいなア。
鈴太　イヤモウ、五運六氣は云ふに及ばず、人相手の筋、相性、產れ性、失せ物、待ち人、夢判じ、末の固めの緣結び、相場の高下、病の吉凶、今占うて今謝禮を申し請けうと云ふではなし、合うたならばお禮になり、合はねば元々、損德なしの占ひでござる。
軍太　丑藏どの、聞かつしやれたか。いま謝禮を取らぬとは、さては占ひをかけ、商ひに致すと相見えますて。
丑藏　何にしても、裸で物を落さぬと申すものではござらぬか。
軍太　左樣でござるて。
鈴太　マア、女中方から占うて進ぜませう。サア〳〵、爰へ爰へ。
小千　アイ〳〵。
ト三味線入りの神樂になり、兩人の眞中にて、鈴太夫、算木を出して
鈴太　サア〳〵、心を取つて投げて御覽じませ。
小磯　アイ〳〵。
ト小磯、戴いて、算木を投げる。鈴太夫、見て
鈴太　ハヽン、こりやコレ天通親と云うて、この卦は日上

のお方に、久し振りでお逢ひなされましたと云ふ、占ひの表。して、今の首尾はどうであつた。イヤ、どうでござりますな。

小磯　成る程、さうでござんす。目上のお方に巡り逢ひまして、段々詫びを致しましたら、一旦は武士の面、廣い世界に指折り數ふ同胞なれば、好いた所へ嫁入りさせてやると、それは／＼有り難いお詞。お前も喜んで下さんせいなア。

鈴太　それは／＼重疊々々。さて、こちらの女中さん、お前さんも心を凝らして。

ト筮木を渡す。千歳、取つて

千歳　アイ／＼。

トまた投げる。鈴太夫、見て

鈴太　水火狆。ハアン、この卦は狆は犬なり、これでは人に頼まれて、事をなさうと云ふ占ひの表ぢやが。

千歳　サレバイナア。この館へ入込んで、いろ／＼と心を盡し謀ぬれど、今に於て淺緣の、イヤサア、淺い水上が知れぬゆゑ、お前に逢うて談合せうと思うて。

鈴太　オッと、離中斷と放れて居たが、爰で逢うたが金生水。

千歳　サア、この家の様子を窺へば、惡の根ざしは白山、イヤサア、人に知らさぬ企みゆゑ、危ふい所を

鈴太　大行心と變化して

千歳　イヽエイナア、心替らぬ二世も三世も。

鈴太　サア、その相性も至極よいぢや。

小磯　それでは、わたしが。

鈴太　ハテ、右と左に陰陽和合が、どちらも捨てなと卦の表に、顯はれてあるわいの。

トこれにて、兩人寄り添ひ

兩人　それ聞いて、落ちついたわいなア。

トあたりを見て、こなし。

軍太　ヤア、最前よりの詞の端々。

丑藏　合點のゆかぬ神道者め。

軍太　キリ／＼御前へ

兩人　うせ居らうぞ。

ト引立てうとするを、ちやつと飛び退き

鈴太　イヤ、嘘は申しませぬ。神は正直。

軍太　ヤア、細言云はずと

兩人　とつとゝうせう。

ト引立てるを、小磯、千歳、よろしく留めて

小磯　イヤ、このお方より其方衆二人。
千歳　大學さまへ一味の惡者。
軍太　それ知られたら百年目。
兩人　覺悟さらせ。
　ト拔打ちにかゝる。早舞ひになり、鈴太夫、御幣にて支へる。千歳、小磯、隔てゝ、帶を持つて、ぐる／＼と振り廻す。好き所にて、兩人を一かせ切る。兩人、ウンと反る。
小磯　アレ、切れたわいなア。
　ト千歳、悸へながら
千歳　大事ないかえ。
　ト此うち兩人、起き上がり、又切つてかゝるを、御幣にて刀を叩き落す。小磯、刀を拾ひ、鈴太夫に渡す。
　トゞ兩人を切り殺し、止めを刺す。
千歳　留藏さまのお情で、無事に手に入る摩利支天の尊像は、即ちこれに。
　ト尊像を出す。
鈴太　チエ、忝ない。國久さまの御閉門も、御赦免と聞き及ぶ。清さまはこの品を携へ、其方も一緒に越後へ立越え、新三郎が汚名を雪ぐ大事の役目、
　ト小磯へ渡す。
小磯　そんなら、これより。
千歳　家來傳兵衞を誘うて、無事に彼の地へ知らせの便りを
鈴太　必らずともに、ぬからぬやうに。
兩人　合點ぢやわいなア。
　トこの時、丑藏、起き上がりて
丑藏　さてこそ寶を。
　ト取りにかゝるを、鈴太夫、留めて
鈴太　爰構はずと、ちつとも早う。
兩人　アイ／＼。
　ト小磯、向うへ走り入る。千歳も行かうとするを、丑藏、引ッ捕へるゆゑ
千歳　アレエ。
　トこの時、後より、丑藏を切りつける。
鈴太　ソレ。
　ト顏にて行けと云ふこなし。
千歳　アイ／＼。
　ト向うへ走り入る。鈴太夫は兩人の死骸を井戸へ抛り込み、刀も抛り入れて、少し怖氣の立つこなしあつて

また氣を替へて、奥を見て、思ひ入れあつて

鈴太　オヽ、さうぢや。

ト臆病口へツイと入る。と空へ月出る。序の舞になり、下手より、美鳥、出て來り、こなしあつて

美鳥　思ひも依らぬ敵典膳、この音信山へ入込みしとは、雅次郎さまにもよう御存になれども、この舘に居やうとは、お心づかぬは知れた事。さぞ今頃ば所々方々と尋ねてござらう。よし又御存じあつてからが、討つ事ならぬ不思議の一品。どうぞ思案がありさうなものぢやなア。

ト思案のこなし。この時、勇軒、刀を提げ、長袴にて、奥より出て

勇軒　それに居るは美鳥でないか。

美鳥　ヤア、お前は典膳どの。

典膳　嫌はるゝ程思ひも百倍。ハテ、心の外ぢやなア。

トこなし。

美鳥　そんなら矢ッ張り。

典膳　オヽ、一旦穢れた心は替らぬ。金輪奈落の底までも。

美鳥　なにを。殿御の心は飛鳥川、變り易いものぢやげな。

ト心意氣あつて云ふ。典膳、こなしあつて

典膳　近う來い。

美鳥　アイ。

ト序の舞止む。

典膳　ハテサテ、來いと云ふに。

美鳥　ハアイ。

ト和らかな合ひ方になり、美鳥、こなしあつて側へ行く。

典膳　イヤナニ美鳥、只今申せし其方が五音は、通つた雲行き。もしや身共が戀を叶へる。

美鳥　ハイ、不束なわたしをば、捨てぬあなたのお心が、なんと無下になりませうぞいなア。

典膳　イヽヤ、呑み込めぬ。

美鳥　そりや、なぜにえ。

典膳　雅次郎が爲には仇敵たるこの典膳、共に身共を狙はん爲、肌身離さぬ、ソレその一腰。

美鳥　エヽ。

典膳　身共が五臘に劍戟は立たねども、心の劍にハヽヽヽ、滅多に肌は許されぬ。

美鳥　エヽ、疑ひ深いお方ぢやわいなア。この脇差がお氣に染まずば、斯う捨てゝしまふわいなア。

ト好き所へ刀を抛る。

勇軒　こりや、大分話せるわい。

トこなしあつて

サア、抱かれて寢る氣なら、幸ひ爰に銚子杯、祝言の心持ちで、女の方から一つ飮んで

ト杯を前へ置く。美鳥、こなしあつて

美鳥　アイ〳〵、ほんに思へば變つた御緣で

勇軒　仲人なしに酌は身共が。

ト銚子を取る。

美鳥　こりや、御慮外でござります。

勇軒　なんの〳〵。

ト酌する。美鳥、飮んで

美鳥　左様ならあなたへ。

ト勇軒へさす。

勇軒　千箱の杯を、こりやお戴き申さうか。

ト杯を取上げる。

美鳥　そんなら、あなたもお一つ。

ト酌する。

勇軒　オヽ、サ、存分に注ぎやれ〳〵。

ト美鳥、こなしあつて、空を見て

美鳥　アレ、御覽じませ。月は隈なきを見るものかはと、徒然草にも書いたる通り、秋の詠めは又一入。

勇軒　三五夜中新月の色と、詩にも賦したる通り、どうも云へぬ。

ト酒を飮み乾す。

美鳥　アレ、あの月影は。

トこなし。勇軒の懷中を窺ふこなし。

勇軒　ドレ。

ト目をやる。美鳥、勇軒が懷中へ手をやらうとする。勇軒、思はず見返るゆゑ、ちやつと紛らし

美鳥　村雲がかゝりましたわいなア。

勇軒　ハヽヽヽヽ、雲井の網にかけられても、兎角絲には目のない奴よ。

美鳥　モシ、わたしやちとあなたに、賴みたい事があるわいなア。

勇軒　ナニ、賴みたいとは、そりや何を。

美鳥　サア、いつぞやわたしが柳ケ淵へ、身を投げて死にました所を、甦へつたはあなたの秘法、お守とやらの奇特とやら聞きましたが、どうぞその時のお守を、もう一度戴きたうござりますわいなア。

勇軒　それは何より易い事。その時の秘符の守は、即ちこれに。

ト懷中より守を出すを

美鳥　さては。

ト取らうとするを、ちやつと持ち替へて

勇軒　戴きたくば、抱かれて寢たその上で。

美鳥　イヽエ、マア、それよりは先へちよつと。

ト取りにかゝるを引廻して、よろしく留める。此うち後へ、磯兵衛、窺ひ出て、好き所にて、守を引ッたくり、飛んで下りる。勇軒、恟りして行かうとするを、美鳥、支へる。

磯兵　これこそ正しく西天草。エヽ忝ない。オヽ、さうぢや。

ト戴き、向うへ走り入る。勇軒、美鳥を引退けて

勇軒　南無三、彼奴韋駄天と聞き及ぶ。

ト云ひながら向うを見込み、袴を脱ぎ捨て、平舞臺へ飛び下り行かうとする。美鳥、素早く最前の一腰を拾ひ取り

美鳥　卑怯未練な五十嵐典膳、逃がしはせぬぞ。

ト支へるを

勇軒　面倒な、其所退け。

美鳥　イヽヤ、やらぬ。

勇軒　なにを。

ト引退け、行かうとする。美鳥、支へるを、トヾ美鳥を當てゝ

うぬ、何國までも。ソレ。

ト向うへ走り入る。合ひ方になり、橋がゝりより、胴七、幽靈の八、手下の形にて、ツカ／＼と出て、美鳥を引起し、介抱して

八　氣を付けさつしやれ。

胴七　女中。

兩人　美鳥どの。

トこれにて、美鳥、心付き、キッとなつて

美鳥　典膳め、さうぢや。

ト行かうとする。自來也、出かけ居て

自來　イヤ、追ふに及ばぬ。汝が夫雅次郎諸とも、敵討つべき時節到來。

美鳥　エヽ。

自來　我が主君の公達を、守り育てる喜樂齋と云ひ、源吾夫婦がその恩義を報ぜん爲、雅次郎へ心の加勢。天眼磯

兵衛に申しつけ、西天草を取らせたれば、今ぞ滅ぶる彼
れが命數。

胴七　雅次郎どのは、洲の江が濱より便船して

八　鏡ケ浦へと間者の知らせ。

美鳥　エヽ、そんなら夫は鏡ケ浦へとな。

自來　オヽサ、ソレ兩人、船をしつらひ、彼所へ伴ひ、ちつとも早う、雅次郎に逢はしてやれサ。

兩人　合點でごんす。

美鳥　エヽ、段々のお情。

自來　禮には及ばぬ。ちつとも早う。

美鳥　そんなら此まゝ。

ト身拵らへする。

兩人　サア、行かつしやれ。

美鳥　ハイ〳〵。

トいそ〳〵して兩人連れ立ち、橋がゝりへ走り入る。自來也、後見送りて、こなしあつて

自來　若殿の御寢所、夜詰めの面々、怠りなきやう警固召
され。

大勢　ハアヽ。

ト返事する。自來也、空を見て

自來　今宵の分野は

ト指を繰り

フム。

トこなし。前側の御簾下りる。と奥より、大學、歌之助、諸士四人出て

歌之　大學さま。

ト序の舞、額にて向うへと云ふこなし。兩人、平舞臺へ來て

鎌倉の手筈に依つて、この歌之助が密事のお使ひ。

大學　如何にも。短兵急に計らはんとは思へども、兎角邪魔になるはあの椎津國久。

諸一　先づ差當る破魔之助め。

諸二　油斷を窺ひ

皆々　我れ〳〵どもが。

大學　手柄次第に首尾よう致せ。

皆々　心得ました。

歌之　それは格別、先達て團之丞さまのお手に入つたる、淺緑の一腰も、横取りなしたる盜賊自來也。慥かに館へ。

トこなし。

大學　入込みしこそ自然の屈竟。その儀は我れに打任せ、汝は直さま鎌倉へ馳せ歸り、弟に諜し合し、彼の地の手筈、合點か。

歌之　ハッ、首尾よう仕負ふせ、やがて吉左右お聞かせ申さん。

大學　隣國の諸武士を語らひ、味方に招きし徒黨の連判。我が弟に密かに渡せよ。

ト連判を出す。

歌之　すりや、この連判を圓之丞さまへ。

ト歌之助、連判を取る。

大學　しかと預ける。油斷なきやう。

ト歌之助、連判を懷中へ納め

歌之　ハッ。然らば拙者は鎌倉へ。

大學　オ、サ、早う行け。

歌之　おさらば。

ト向うへ行かうとする。と破魔之助、奥より、出て

破魔　歌之助大儀。連判慥かに手に入つたか。

歌之　ハッ。

トつか／＼と戻つて

イザ、破魔之助どの。

ト連判を渡す。破魔之助、受取つて

破魔　ソレ、大學を圍へ。

皆々　ハッ……動くな。

ト皆々取卷く。大學、恟りして

大學　ヤア、こりやどうぢや。

破魔　ホ、ウ、愚かや大學。汝兄弟が惡心たる事、疾より上聞に達し、椎津市正鎌倉へ立越え、糺問の上圓之丞に詰め腹切らせ、鎌倉の騷動も疾に鎭まる。まつた當國の音信山に御殿をしつらひ、若殿を請招せしは、失ひ奉らん計略と、それと覺つてお供申し、わざと左門之介さまをおもてなしと披露をせしも、逆意の族を釣り寄せん爲の我が計略。

歌之　まつた朝妻歌之助と、名乘りを付けて馬鹿となり、所々方々を徘徊なすも、謀叛の族を見出さん爲。案に違はず肌を容し、うま／＼渡せし連判狀。

大學　フム。さてはうぬらが手段であつたか。チエ、、口惜い。シタガ、自體汝は何者。

歌之　ホ、ウ、未だ部屋住みゆゑ存ぜぬも尤も。我れこそは足利家の家臣、荒山隈五郎時綱と云ふ者。

破魔　サア、この上は先非を悔い、切腹なすか。



初演の繪番附

大學　サア、それは。
歇之　但し押へて繩をかけうか。
大學　サア。
破魔　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
破魔　大學返答はド、
皆々　どうぢや。
大學　斯くなる上は死物狂ひ。惡く寄つたら死人の山だぞ。
皆々　何を小癪な。
ト皆々、キッとなる。バタ〳〵にて、臆病口より、侍ひ出て
侍ひ　ハッ、盜賊自來也、若殿の御寢所へ切り入り、詰所の面々防ぎ候へども、なか〳〵手に餘つて見えまする。早々御加勢下さりませう。
ト云ひ捨て入る。
破魔　さてこそ時綱。ソレ、早う加勢を。
歇之　心得ました。
ト臆病口へ走り入る。
破魔　この上は大學を廣見へ引出し、疵つけぬよう召捕れ。
諸士　ハッ。捕つた。

トこれより立廻つて、トゞ立廻りながら、橋がゝりへ入る。
破魔　心元ない。ソレ。
ト股立ち取り、臆病口へ行かうとする。土手平、窺ひ出て
土手　破魔之助。うぬ。
ト切つてかゝる。兩人、立廻つて、土手平を切り倒し
破魔　さうぢや。
ト上手へ凛々しく走り入る。返し。
造り物、向う一面の網代塀、植込み、燈籠などのあしらひ。すべて庭先の模樣。自來也、着附け脱ぎかけ、差込み、切り首を持ち、片手に拔身を提げ、眞中にキッと立つて居る。この見得よろしく、合ひ方にて、道具納まる。
ト自來也、こなしあつて
自來　去る秋椎津の館にて、淺緑の劍を手に入れ、今また足利左門之介を、思ひの儘に討取つて、亡君三好長重卿の恨みを散じ、未來佛果を得さしめ給へや。ハテ、嬉しや喜ばしやなア。

ト心地よきこなし。バタ／＼にて、向うより、蜘の三、着込み裃纏にて、走り出て

三　お頭、これに居やんすか。妙香山の隠れ家へ、攝津國久討手を差向け、俄かの騒動、味方の混雑。この事頭に知らさん爲、わざ／＼爰まで尋ねて來やんした。

自來　して／＼、若君に凶事はないか。なんと／＼。

三　ハツ、若君樣には、奥方楢盾どのが守護あつて、黒姫の手へお出であれば、御安泰と見えまする。

自來　それなれば先づは安堵。この上は油斷なきやう、討手の奴輩ぼツ散らせよ。

三　畏まつてござりまする。

自來　早う行け。

三　ハツ。

ト引返し入る。自來也、あと見送り、空を見て

自來　南方の宿星耿々として光りを增すは

ト切り首を見て

さては。

ト切り首を捨てる。ドンと遠責めの頭打つ。自來也、こなしあつて

多勢を以て召捕らんとは、ハテ、小ざかしい。

トこの時、捕り手二人窺ひ出て

捕手　捕つた。

トかゝるをポン／＼と拔打ちに切る。花道へ行かうとする。と向うより、破魔之助、好みの形にて、鎗を持ち、ツカ／＼と出て、キツと立ち塞がる。これにて、チリ／＼と本舞臺へ押し戻す。ト上手より、歌之助、凛々しき形にて、鎗を持ち出て、双方より鬪ひ

破魔　三好が殘黨、尾形周馬寬行。

歌之　最早遁がれぬ。

兩人　覺悟々々。

ト始終靜かに遠責め合ひ方。

自來　面倒な蚊蜻蛉めら、妨げ致すと命がないぞ。

兩人　何を小癪な。

ト立廻りよろしく、トヾ自來也、後の網代塀へ踏ん込みにて消える。兩人、キッとなつて

破魔　南無三、風を喰つて。

歌之　遠くは行くまじ。塀の裏手へ。

破魔　如何にも。ござれ。

ト兩人走り入る。チヨン／＼にて、淺黃幕を振り落す。返し。

造り物、一面の淺黃幕、東西より、板松を突き出す。好みの合ひ方にて、道具納まる。

トばた／＼にて、向うより、磯兵衞、返し前の形、脱ぎかけにて、逃げて出る。後より、典膳、追ひかけ出て、トゞ追ひついて

典膳 西天草を此方へ返せ。

磯兵 イヽヤ、滅多に返してよいものか。

典膳 何を猪口才な。

トせり合ひ、トゞ磯兵衞、摺り拔け、本舞臺へ逃げる。典膳、追ひ詰め、磯兵衞を引据ゑ、守を取返さうと焦る。この時、木蔭より、胴七、幽靈の八、頰冠りにて、ズッと出て、典膳へかゝる。此うち磯兵衞、守を持ち、橋がゝりへ逃げて入る。典膳、二人を投げ退け、また追ひかけ入る。兩人起き上がつて

胴七 八よ、まんまと首尾よう。

八 この通りお頭へ知らさう。來い。

胴七 合點ぢや。

ト兩人、橋がゝりへ入る。チョン／＼、淺黃幕切つて落す。返し。

造り物、向う打拔き、富士の山、絹張りの霞一面にかゝりあり、後ろ手摺り三段とも浪の書割り。前側、浪の打寄せ。すべて鏡ケ浦の體。典膳、キッと身構へして居る。側に、雅次郎、美鳥、敵討の形にて、西天草を持ち、詰めかけて居る。この見得よろしく、合ひ方、バタ／＼にて、道具納まる。

雅次 最早叶はぬ鹿野苑軍八。

美鳥 遁がれはあるまい。尋常に

兩人 勝負々々。

典膳 さては西天草を奪うたも、うぬらが同類めであつたよな。

雅次 オヽサ、云ふにや及ぶ。汝が行くへは音信山と聞きしゆゑ、尋ね廻れど奥深き山林なれば、在所も求めず、無念ながらも過ぎ行く月日。

美鳥 知れぬも道理、先ッその如く姿を替へて、大學が家來となりし其方が身の上、今日計らずも行き合ひし、自來也どのゝ情の計らひ。西天草を奪ひ取らせ・雅次郎さまのお手に入る上は、所詮遁がれぬ其方が一命。

雅次 今朝明方兄の靈魂、本意を遂ぐべき時節到來、急ぎ

攝州鏡ヶ浦へと、まざ／＼見たるは正しく正夢。天命の程思ひ知つたか。

典膳　さては韋駄天野郎めが、この所へそびき出し居つたよな。併し、如何やうに跪いても、又敵は天下一流の御法度。手向ひひろがば身の上だぞよ。

トこの時、内より

玉木　イヤ、敵討お赦しなるぞ。

典膳　なんと。

ト上手より、左門之介、着附け上下にて、後より、玉琴姫、玉木、隼人、左近、その外諸士大勢付き添ひ出て

左門　珍らしや鹿野苑軍八。我れ當所の景色一見せんと、流々下向の折も折、我れに代つて新三郎、尾形周馬が手にかゝり、不便の最期も我れへの忠節。

玉木　これに在しますお方は、左門之介さまの御簾中たる玉琴姫さま。

左近　我れ／＼は足利の昵近、仁木左近。

隼人　桃井隼人之介。

左近　非道非義の其方なれば、刑罰にも處すべき所なれども、孝子の志しに愛で、尋常の勝負は武門の情。

隼人　武將よりの嚴命に依つて、即ち兩人は檢使の役目。

左門　曠れの仕合ひを、予もこれにて見物いたさう。

左近　早く勝負を致してよからう。

典膳　フム、せう事がない。用意いたすうち、早まるまいぞ。待ち居らうぞ。

ト典膳、拵らへする。雅次郎、美鳥は左門之介へ目禮して、好き所へ扣へる。此うち上手浪打際へ、苫船出る。橋がゝりより、破魔之助、歌之助、出て、左門之介を見て

破魔　ハッ、我が君さまには御安泰の體。

歌之　如何ばかりか喜ばしう

兩人　存じ奉りまする。

ト目禮する。この時、苫船の内より

磯兵　尾形寛行、只今着岸。

自來　それへ參つて、何れもへ見參いたさう。

ト抱子を抱へ、着附け野袴、ぶッ裂きに改め、後より、磯兵衛、その外手下大勢付き添ひ、苫船より出る。皆皆見て

皆々　さてこそな。

トきつとなる。自來也、こなしあつて

白來　似せ首ながら左門之介を討取れば、亡主の恨みも晴るるの道理。まつたこの公達を、三好の跡目に取立てんと、椎津國久が仁義の計らひ。情に刃向ふ所存はない。淺緑の劍、今こそ改め返し申す。

ト劍を左門之介へ渡す。

破魔　ホヽウ、敵ながらも義心の寛行。この御劍こそ歸國の賜物。我が君、イザお受取りあられませう。

左門　オヽ、流石の計らひ。慥かに返納。

白來　イデこの上は敵討の一埒。これにて見物。

ト三人、向うへ出て

雅次　父喜樂齋、本名は逸見權藤次、同じく惣領源吾正村、女房衣重、重なる鬱憤。末子雅次郎正輝。

美鳥　同じく女房美鳥、舅小舅姑御のお恨みも、一度に晴らす鹿野苑軍八。

雅次　サア、尋常に

兩人　勝負々々。

典膳　孫の果まで返り討ちやぞ。

雅次　何を小細な。サア、參らうか。

典膳　サア。

雅次　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

トきつとなる。と大小入り合ひ方になり、三人、立廻つて、トヾ典膳を切り伏せ

雅次　親兄の敵。

兩人　思ひ知つたか。

ト止めを刺す。向うへ、絹張りの朝日出る。

左門　天晴れ手柄。出來た〳〵。

白來　富士に朝日の登る如く

破魔　輝やく英名、家の規模

歌之　足利の御世は萬々歳。

玉木　急いで國入り。

白來　めでたし〳〵。

皆々　この場はお立ち。

ト皆々よろしく、チヨン〳〵、めでたし〳〵打出し、

幕

柵自來也談（終り）

三七全傳 南柯夢

新刻刀筆 鸞水箴

左衛門藤綱 模稜案

曲亭馬琴

著述共儘

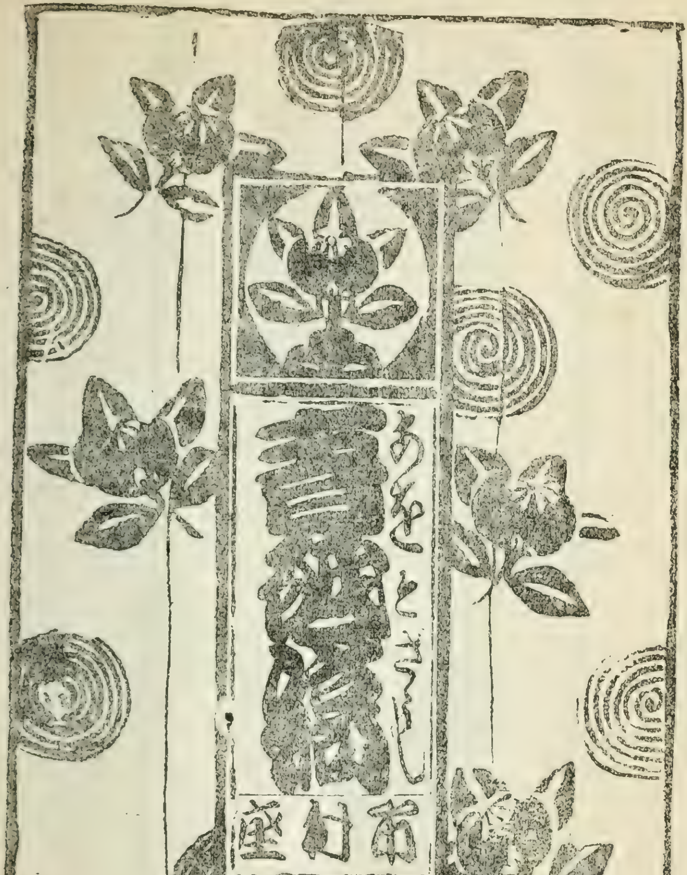
拙筆編合

廿五段續

畫入本

青砥稿

早朝より不殘奉入御覽



初演給番附表紙

青砥稿

發端　米谷山の場

序幕　大佛前の場

　　　岩屋谷の場

役名——赤根半六。同女房、おなみ。同一子、半七。座頭、丹波市。同娘、おさん。庄屋、杢兵衞。杣、島八。同、元助。同、市五郎。同、三太郎。笠松平三郎。

本舞臺、眞中、奥へ入れて莫大なる楠の立ち樹、松の吊り枝。向う山幕、上下、崖の張り物、清水の流れ。爰に島八、元助、市五郎、三太郎、いづれも杣の拵らへにて、臺枕、手斧、掛矢などを持ち、額へ膏藥を貼り、手足を縛り、立ちかゝり居る。上手に庄屋杢兵衞、褒美の高札を持ち、立ちかゝり居る。

聖天の囃子にて、幕明く。

皆々　この事ばかりは、どうぞお免しなされて下さりませ。

杢兵　イヤ、和州江州の兩國の御領主、筒井公よりの御上意にて、この楠を切つて出だせば、褒美は望み次第たるべきものなりと書いてある。この高札が目に見えぬか。

島八　申し、お庄屋様、誰れでも褒美は、望み次第と云ふ事だから、斧初めをしようと思つて、先月の初め、あの通り足場綱を張り

元助　仲間の者と、この楠の裏へ登つて、斧を振り上げると一時に、どこともなく震動して、百人餘りの杣仲間瞬く間に振り落され、即死が十五人。その外、怪我のない者は、一人もござりませぬわいなう。

市五　私しは向う脛、きよろ作は額と、皆々熊野平三郎の膏藥を貼つて、やう／＼直つたれど、千年餘り經つた楠ゆゑに、山の神様が、憎んでの事であらうとの噂でござる。

三太　イヤモウ、死んでしまうては詰まらぬ事ゆゑ、どうか體が滿足で、金の出來る事が

皆々　致したうござる。
杢兵　さう聞けば尤もだ。併し、茲ぢやて。何を云つても御領主様の厳命、いよ〳〵この楠を伐らぬと云はゞ、杣めらを引ッ縛つて、首を討てと仰しやつたら、なんと致す。
元助　あて事もねえ。悪い事もしねえで、首を切られると云ふ事があるものか。
島八　お前が云はつしやる事が無理だ。
杢兵　なぜ無理だ。先月は山の神様へ、沙汰もなしに始めたから、怪我があつた。それゆゑに、お代官の云ひつけで、あの通りに笛、太鼓で囃し立て、小豆飯を供へたれば、もう祟りはあるまい。又この楠を伐り出して、御領主様が御堂の天井を、一枚板で張ると云ふ思ひつきだ。して見れば、死んでも未来は極楽往生、これほど有り難い事は、あるまいではないか。
市五　成る程、極楽往生する程、結構な事はあるまいから、なんと皆の衆、マア、試みに、庄屋様を木の上に
三太　上げようではござらぬか。
皆々　成る程、こいつはいゝ思ひ附きだ。
杢兵　イヤ、さま〴〵な事を吐かす。わいらは商賣ではないか。
島八　杣は商賣でも、死ぬのは商賣でござらぬ。
皆々　サア〳〵、登つたり〳〵。
杢兵　エヽ、コレ、よせと申すに。ヤア、人殺しだ〳〵。
　ト杢兵衛を無理に吊り上げる。争ふ所へ向うより半六、杣の拵らへ、斧を腰に差し、瓢箪を附け、小桶を下げて出て、足早に舞臺へ来りて、皆々を引分け
半六　仲間の者、庄屋様を捕へて、どうせうと思ふのだ。
島八　ヤア、こなたは赤根の
四人　半六どの。
杢兵　よい所へ来てくれた。マア、聞いて下され。この度御領主様から、この楠を伐つて出す者には、莫大の御褒美を下さつて、侍ひに取立てゝ遣はさうといふ事。例へ、先頃は怪我もしたにしろ、さう〳〵怪我もするものでもないから、共々に伐つて出せと申せば、おれに木登りをしろと申して
半六　成る程、解りました……コレ、こんな衆も、庄屋様に、無理な事を云ふと云ふがあるものか。
四人　それだつて、死んでもいゝと吐かすから。
半六　ハテ、何もかも、おれに任せて置きやれ……ハヽ、

ハ、イヤ、モウ定めてハヤお氣に障りましたらう。どうぞ御料簡なされて下さりませ。併し、この楠は、今日手斧始め致して、五日のうちに伐木して、御領主様へ御覽に入れます。

島八　コレ〳〵半六どの。滅法界な事を請合つて

半六　ハテ、えいわいなう。

杢兵　半六、そりや安請合ひではないかよ。

半六　ハテ、私しは、腹からの杣なれど、先祖は源家の何某の末葉、家に傳はる蟇目の法を以て、例へ神木にせよ、人夫に怪我もなく、速かに伐り出してお目にかけませう。

島八　成る程、常から高慢の事を云ふ程あつて

元助　さういふ法も、知つて居るであらう。

市五　怪我のないといふ證據が見えたら

三太　仕事をさして下されや。

半六　われ達が命を惜しむは尤もぢや。今に證據を見せるから、精出してもらはねばならぬ。

杢兵　イヤ、それならおれは、この由を、多賀の郡司さまから、御家老の典膳さまへ、申し上げてもらひませう。

ト上手へ高札を建てる。

島八　我れらは峯の上の松薪を束ねて

元助　仕事を片附けて來ようではないか。

半六　そんなら庄屋様。

四人　半六どの。

杢兵　また後方に

四人　逢はうわいなう。

ト庄屋先に、四人附いて上手へ入る。半六、思ひ入れあつて

半六　今この楠を伐る時は、この高札に書いてある通り、御褒美を貰つた上、侍ひに取立て、作事向きの役の司に、一足飛びの立身出世。先月あの木の空から、熊笹の中へ落ちて、氣絶したのが勿怪の幸ひ。千年に餘る楠を、伐る法を夢ともなく、寐て居て慥かに覺えるとは、運は寐て待て、何は兎もあれ、この根元へ汁を。さうだ〳〵。

ト楠の煎じ汁を、楠のぐるりへ掛け、後へ廻る。在郷唄になり、向うより、おなみ、世話女房の拵らへにて、半七、若衆鬘、脚絆、草鞋がけ、小風呂敷包みを負ひ出で來り

半七　申し、母様、向うへ見えるが、米谷山の楠であるかいなう。

なみ　オヽ、ほんに、父さんの事を案じながら來たゆゑ、早う來ましたわいなう。
半七　昨日、友達衆の話しに聞いたが、三輪山の杉と、米谷の楠とは、夫婦ぢやといふ事。誠の事でござりまするかや。
なみ　サイナウ。千年に餘る樹には、魂ひが入つてあるゆゑ、伐る時には、祟りをなすといふ事を知りつゝ、半六どのゝ、いつにない無得心。斯う云ふ間も氣遣ひな。
半七　ちつとも早う。
なみ　サア、來やいなう。
　ト舞臺へ來る。此うち半六は、下の方より件の煎じ汁をかけながら、出て來り
こちの人。
半六　エヽ。愕りするわい……ヤ、嬶、悴、なんと思うてうせたのぢや。
なみ　コレ、半六どの。半七も、このわたしも、あれ程云うたに、もう止めにすると嘘云うて、拔けて來て、そんならどうあつても、この楠を、伐る氣でござんすかえ。
半七　父樣、この間も大勢の衆が、怪我をさつしやつたではござりませぬか。それをお前一人して、この木を伐れば、又とのやうな悲しい事にならうやら知れぬ。どうぞ止めにして下さりませいなう。
なみ　もしや、お前の身に怪我が
半六　ハテ、ないと云ふ、キッとした事覺えたゆゑにする仕事……コレ、わいら二人に云つて聞かす。必らず人に語るなよ……先月の七日、御領主樣始め、御家老典膳さまの御上覽で、百人餘りの杣が、この木の空に登つて、斧を振り上げると、其まゝ五體が竦んで、眞逆さまに落ちて、枝で腹を打つやら、斧に當つて即死するやら、御領主には早速歸館。多くの杣も舁かれて戻りしが、おれ一人は熊笹の中へ落ちて、誰れも見付けぬゆゑ、氣を失つたまゝ夜が更け、露が口に入つたやら、フッと氣が附いて、ヤレ嬉しや、この分では女房や悴に逢はれる事ぢやと、起き上がらうとすると、つい側に怪しげなる朧の姿。よくよく聞けば、三輪山の杉の精と、米谷山の楠の精が語り合ふ樣子。耳引立てゝ聞いて居たら、楠の精が云ふには、なか〱杣が何百人かゝるとも及ばぬ事、併し、蟇目を以て封じ込め、ひじきの煎じ汁を掛けられては敵はぬと云へば、杉の精が、必らず其やうな事は云はぬもの、人間に聞かれたら、一期の大事と忽ち消えた。

おれも先祖は弓の達人、譲り受けたる蟇目を以て、七日の間垢離を取り、忍んで來てひじきの煎じ汁をかけたれば、最早祟りをなす事、いつかな〳〵。先祖の家名上ぐるのみか、半七が後の榮えを見るが樂しみ。コリヤ、嬉しいか〳〵。

半七　成る程、さうした事なら、尤もな事ではござるけれど、御領主樣の御威勢でも、伐る事ならぬものをなア。

なみ　サイナウ。いま云はしやつた事が誠でも、いつしか祟りのあるは必定。兎に角、時節を待つとして、この木をば伐る事ばかりは

兩人　思ひ止まつて下さりませ。

トこの時風の音して、吊り枝所々、仕掛けにて枯れ葉になり、木の葉散る事。

半六　さてこそ利き目が顯はれて、忽ち枝葉の枯れたるは……オヽ、蟇目に精の滅した印。コレ、今のを必らず他言するなよ。

兩人　すりや、どうあつても。

半六　ハテ、今日まで心を盡したゆゑ、思ふまゝに枯らしたを、捨て置けば枯れたに目を付けて、誰れでも請合うて伐るのは必定。また斯う一度枯木になつたからは、生き返る法はなし。ハテ、半七、案じるな。惡いやうにはせぬわい。ドレ、斧始めをしてくれう。

なみ　云ひ出した事は、後へ引かぬお前の氣性。殊に枯れたとあるからは。

半七　山神樣へ、父さんの怪我せぬやう、お願ひ申さうではないかえ。

なみ　オヽ、よう氣がついたわいなア……ドレ、お參りをいたしませう。

ト半六は斧を腰に差し、實木の空へ登る。おなみ、半七、氣遣ひながら、上手へ入る。在郷唄になり、向うよりおさん、田舍娘の拵らへにて、袋入りの三味線を脊負ひ、檜木笠をかぶり、座頭の丹波市の手を引き、出て來り

さん　ソレ、爰に木の根があるぞえ。

丹波　オツと合點だ。イヤ、おさんよ、今朝からは餘程の道、わが身は、よう歩いた事ぢや。併し明後日は、京都へ着く程に、ソワ〳〵して、怪我でもしてはならぬぞよ。

さん　こちや、その京都とやらへ早う行て、母さんに廻り逢ひ、顏が見たうござんすわいなア。

丹波　わが身に逢はさう爲、遙々と上つて來たのぢやもの
尋ね負ふせいで置くものかいの。
ト手を引かれ、舞臺へ來り
待て〳〵、草鞋がちぎれたやらぢや。ヤットコショ。
ト兩人坐る。この時、日覆にて音して、ばつたり斧の
刃抜けて、落ち來り、丹波市の頭より、肩先へ切り込
む。丹波市、アッと倒れる。
さん　アレ、父さんが、アレエ。
ト あわてる。この時、おなみ、半七、上手より出て來
り
なみ　オヽ、どこの誰れやら。こりやマア、どうして。
半七　ヤヽ、肩先に斧の刃が。
さん　この木の上から、落ちて來たのぢやわいなア。
なみ　ナニ、この木の上から……半七、あの清水を。
半七　アイ〳〵。
なみ　旅人いなう〳〵。
ト介抱する。半七、清水を汲んで來て飲ませる。丹波
市、心附き
丹波　コレ、おさんはどこに。
さん　オヽ、父樣、氣が附きましたか。

丹波　オヽ。
ト探つて、おさんに取りつき
わが身は、どこも怪我はせぬか……これは〳〵、どなた
樣か存じませぬが、御介抱なされて下さりまして……ア
ア、苦しや〳〵。
さん　こりやマア、どうぞ仕樣はないかいなア。
ト また丹波市の氣絶するを見て、泣き落す。半六、楠
の上より下りて、つか〳〵と丹波市の側へ來り、引ッ
抱へ
半六　コレ、旅人、わしはこの佐保の莊にて、赤根半六と
いふ杣でござるが、この國の御領主の云ひつけゆゑ、楠
の枝を下ろさうとして、思はず斧の柄が抜けて、谷間に
落ちたと思つたが、斧がこなさんに當つてこの大怪我。
併し、わしが家に引取つて、療治する程に、心丈夫に
思はつしやれや。
なみ　さうしてお前は、何國のお人ぢや……心を慥かに持
つて下さんせいなア。
丹波　ハイ〳〵、忝なう存じまする。
半六　エヽ、なんの禮どころか。堪忍して下されや。
丹波　なんのマア、あやまる事はござらぬ。木を伐る斧に

命を落すも、みんな前世の約束事。もと私しは、鎌倉の管領職、扇ケ谷へ仕へて、丹波太郎孝基と云ひし者。故あつて浪人なし、夫婦密かに談合づくで、このおさんが三つの年、妻は都方に奉公して、また世に出づる時もあらば、再び巡り逢はんとて、離別なしたる次の年、計らず眼病にて盲目となり、娘を育む手段なければ、嗜なみたる三筋の糸に、親子の命を繋ぎとめ、丹波市と名を替へて、娘を連れて伊勢路へ赴き、足掛け九年、妻の便りを待ち暮らせど、今に住居の沙汰もなし。娘も母親を戀しがるゆゑ、京都といふをしるべにて、親子の名乗りもさせんものと、爰までは來たれども、この痛手では、所詮存命思ひも依らず。

さん　エヽ、そんなら父さんは、死なしやんすか。わたしや嫌ぢや／＼嫌ぢやわいなア。

なみ　オヽ、尤もぢやわいなう。

丹波　コリヤ娘、われも元は侍ひの胤、聞分けのない。取亂すな……ナニ、御夫婦の衆。娘は十三歳とはいへ、年弱の十一月七日の出生、丹波太郎が娘おさんと、父が手で、自ら書きつけたる臍の緒書は、此奴が守の内にあり。脊負ひし三味線と撥を證據に、母に巡り逢ふ割符なれば、失はぬやう、娘にお渡し下され。何とぞ小女郎、小者と思し召され、お育てなされて下さりませ。

半七　父様の身の上に、怪我過ちがあらうかと、山神様へ願うて戻れば、思ひがけなう此お人の怪我。これも矢ッ張り楠の

なみ　アヽ、コレ……サア、娘御は、私しらが育て上げ、母御に巡り逢はしまする、その證據には、幸ひ似合ひの年格好な、おさんどのとやらを、悴半七に娶合して、行く末長う添はすれば、恨みを晴らして下さりませ。

半六　オヽ、よう心が附いた。さうでもせずば、過ちとは云へ、下手人に立たねばならぬ。親御さへ得心なれば、直ぐにこの場で固めの杯。

丹波　御夫婦のお心にさへ叶うたら、どうぞ今際の思ひ出に

なみ　直ぐにこの場で

半六　幸ひの瓢簞酒。サヽ、おさんとやら、こなたが飲んで

ト泣き居るおさんに、腰の水吞みを取つて渡す。

丹波　ヤイ／＼、娘、半七どのとやらと、仲ようして、成人の後、早く初孫見せ申せよ。よ、よ。

さん　アイ〳〵、そんなら、どうでも死なしやんすのかえ。
丹波　エヽ、われが親は、このお二人。
なみ　めでたう飲んで、半七へ。
半六　サヽ、早う〳〵。
　ト半七へ取次いで、おなみ酌する。
丹波　嬉しや〳〵。聟どのはどこに。
半六　忰は爰に。
　ト半七を丹波市の側へ押しやる。丹波市は、おさん、半七を側へ引寄せて
丹波　アヽ、嬉しや。斯うした過ちないならば、かゝる立派な聟がねを、娘に娶合はす事もなるまい。目かいは見えねど、音聲の健やかさにて、容顔端相は鑑定せり。コリヤ、おさん、親には産れ勝つたる、仕合せ者ぢやなア。さはさりながら、たつた一目見て死にたい。御夫婦、推量して下されいなう。アヽ、苦しや。もう、これがこの世の
　ト本釣り鐘を打つ。
半六　こりや、どうでも丹波市どのは
なみ　今を限りの息遣ひ
半六　生死無常の
なみ　思へば夢の
さん　父様いなう。
なみ　アヽ、モシ。
　ト丹波市の落ち入るを、木の頭にて皆々合掌する。おさん、縋りついて泣き落す。よろしく山颪しにて拍子　幕

　幕、引きつけると、山颪しになり、ツナギ。木直ると、幕外に口上出て、東西々々、只今仕りましたるは、狂言の發端にござりまして、これより後、何ヶ年立ちたる狂言と觸れあつて、口上入ると、禪のツトメになる。孫六、浪人の拵らへにて、早助、菖蒲革の股立ちにて、密書を奪ひ合ひながら、橋がゝりより出て來り
孫六　猪口才な下郎め。爰押ツ開いて、通すまいか。
早助　イヤ、御主人寶田曾太夫さまの、留守を窺ふ怪しい浪人。密書を渡して繩にかゝれ。
孫六　さう吐かしやア、この世の暇だ。
早助　なにを。

ト密書を枷に立廻り、トヾ早助を當て、逸散に幕の引きつけへ入る。早助は心附きて

早助　南無三、曲者、後追ひ駈けて。

ト向うへ走り入る。

本舞臺、向う淺黄幕、眞中に、床見世を掛け、熊の膏藥の太鼓、暖簾、幟を立て、下手茶屋。上の方、松の並木、開帳の萬部札。すべて南都大佛前の體。爰に、熊野平三郎、ほくそ頭巾、袖なし羽織にて、前へ熊の生皮を敷き、膏藥貝を詰めて居る。仕出し大勢立ちかゝり、買つて居る。この模樣よろしく、双盤の音の責めにて幕明く。

平三　サア、瘡切り瘤、癰疔、根太、腫物には、たつた一つけで直ぐ治る。一子相傳、他家に無類の熊の膏藥。本家熊野平三郎とは手前が事。お試しなされ。正眞の熊の油に、家傳の藥種を調合したれば、第一、お召し物に附かず、かぶれなどの愁ひがない。

仕出　爰へも、一貝下され〳〵。

平三　一度お用ひなされたお方が證據ぢや。御當所が定店。熊野平三郎でござい。

仕出　ほんに、利くと云ふは、この膏藥ぢや。

同　わしは遠方だから、二百ぶり買ひませう。

ト此うち、大勢買ふ事あつて

仕出　これから大佛樣へお參り申して、天神へは戻りに參詣いたしませう。

同　サア、皆ござれ〳〵。

ト上手へ入る。

平三　ヤレ〳〵、今朝から莨をのむ間もなかつた。オイ、茶見世の、ぬるくして一杯……オヽ、茶店の小母さんは、水でも汲みに行つたか。

ト下手へ來て、茶瓶を取り、茶碗につがうとする。バタバタにて向うより、孫六走り出て來り、土瓶を矢庭に引つたくり、口より呑む。

滅法界な。人の持つて居る物を。

孫六　アヽ、旨い〳〵。とてもの事に、これが酒なら。

平三　膏藥ぢやいけねえかね。

孫六　ナニ、膏藥……オヽ、お主は熊野平三郎。いま若黨のやうな奴が通りはせなんだか。

平三　今まで商ひが盛つたから、どんな人が通つたか知りません。

孫六　ムウ。何にしろ、もう茲までは來はしまい。

ト橋がゝりより、早助、拔き足して出て來て

早助　ソレ、來た。

孫六　ヤア、もう來たか。

早助　密書を渡せ。

ト孫六の懐中へ手を入れ、密書を引き出し、立廻り、トゞ、早助、密書を取り、上手へ逃げて入る。孫六は追ひ駈けて入る。

平三　ヤレ〳〵、途方もない変せッ返しで、氣を揉ませやアがつた。その所爲か、ちつとお腹がお出でなすつた。ドレ、辨當と仕るべいか。

ト双盤になり、向うより、半六、羽織、袴、大小。後より半七、若衆鬘。羽織、袴、大小。おさん、振り袖、屋敷娘の形。絹羽織の侍ひ、附き添ひ出て來り

半六　ヤレ〳〵、今日は好い天氣に相成つたので、歩行も一段と心よいではないか。

半七　左やうにござりまする。わが身に邪慾の曇りなきは、おのれと晴るゝ胸の雲。お心構とて、世を暗く……イヤ、暮れるを急ぐ秋の日なれば、少しも早う。

さん　お墓参りをなされたが、よろしうござりまするわいなア。

半六　ハヽヽヽ、今時の子供らは、口賢しい事を申すものだ。併し、その心掛けなら、末頼もしう思ふわい……向うの店にて、足を休めて參らうか。

侍ひ　それがよろしうござりまする。

半六　サヽ、來やれ〳〵。

ト皆々舞臺へ來る。

身共はちと用事もあれば、半七、其方はおさんを連れて先へ參り、墓の掃除など致して置きやれ。

半七　左やうなれば父上様

さん　お先へ參じますわいなア。

ト半七先に、おさん、侍ひ附いて上手へ入る。平三郎は、此うち、辨當を使ひしまつて、こちらへ來る。半六は床几に腰をかけ、平三郎と顔見合せ

半六　オヽ、そちや平三郎ではないか。

平三　あなたは赤根半六さま。それにお出でなさつたを、一向に存じませなかつた。whom平御免下されませう。先日は、僅かな膏藥を差上げ、お金を頂戴いたしまして、誠にお氣の毒にござりまする。お禮の狀も認め置きましたが、なんぞ又、御用がござりましたら、御遠慮なう、仰

せつけられて下さりませ。
半六　オヽ、頼もしいその詞。その氣性を見込み、一大事を頼まうと存じて、罷り越したは……先づ、これを受納しやれ。
ト包みの金を出す。
平三　ヤア、これは小判で五兩……フム、一大事と仰しやるからは、問はずと知れた惡事の荷擔人。こりやお斷わり申しませう。
半六　なんと。
平三　私しも、こんな商賣こそして居れ、これまで惡企みをした事はございませぬ。五兩の金が尊いとて、横つ倒しにするやうな事は、マア、よしにしませう。それとも又、眞直ぐな御用なら、助けませぬものでもございませぬが、先づ、その譯を承はりませうかい。
半六　身共の邪正を糺し、頼まれんとは舌長な。いつそ斯うして
ト拔きかゝるを
平三　どつこい。邪と聞いて頼まれぬも、命が惜しさ。滅多に油斷は
ト拔打ちに切つてかゝるを、平三、側の行李にて受けとめる。これにて、手紙バラリとぶら下がる。
半六　ナニ、赤根半六さまへ、笠屋平三郎。
平三　五兩の金で面をはり、一大事を頼ふといふ、後穢ないお侍ひの心とは、ちつと違つた此方の魂ひ。僅かな金でも恩に着た。その禮狀の文言にも、身に叶うたる御用なら、勤めやうと云ふ心底。その魂ひを御存じなく、こりや、ちとお目鏡違ひかと存じまする。
半六　ホヽ、さほどの平三郎とも辨まへず、失禮は手前が誤まり。幾重にもお詫び申す。
平三　アヽ、それでは却つてお氣の毒。併し、錢金に目がくれて、大事の御用を頼まれるやうでは、あんまりお役にも立ゝぬもの。例へ金子は下さらずとも、見込んでのお頼みなら、善惡ともに、この身に引請け。
半六　すりや、仕負ふせてくれるぢやまで。
平三　命にかけても。
半六　チエヽ、忝ない。さりながら、報いをせねば、申し出し難い。
ト小柄を拔いて
サア、これ受取つてくりやれ。
平三　こりやコレ、三つ柏に大の字は

半六　身共が秘藏のその小柄。

平三　御秘藏の小柄まで、下されますとは、喜ばしうござりまする。して、あなたのお頼みは。

半六　斯やうぢやわい。

ト床几に腰をかけて、平三に囁やく。この模樣よろしく、双盤にて道具廻る。

本舞臺、向う玉椿の塔婆垣。この前に、石の玉垣したる石塔。左右大小の石佛。上の方、瓦燈にしたる庫裏の横手を見せ、下手、橋がゝりへかけて、藪疊。爰に半七、おさん、以前の若黨中間、墓場に香花を手向けて居る。禪のツトメにて、道具納まる。

半七　父上には、もうお出でがありさうなもの。

さん　今日に限つて、御用のあるといふは、どうした事ぢやぞいなア。

中間　先刻大佛前で、直さま參るから、左やう申せとの事でござりましたが。

半七　其方は、御納所へ參つて、御齋席にお出でなされて、御回向なされて下さりませいと、申して參れ。

中間　畏まりました。

侍ひ　左やうなれば私しが。

半七　大儀ながら、お迎へに行てくりやれ。

中間　ドレ、行て參りませう。

ト中間は向うへ、侍ひは上手に入る。

半七　アヽ、コレ、その次手に、手前の紙挾みが、客殿にあつたから、持參してくりやれ。

さん　半七さん、わたしや、お前に問ひたい事がござんすわいなア。

半七　問ひたい事とは、何事ぢや。

さん　サア、最前蟻松さまの御家來がござんして、父さんに話をするを、一間の内で聞いて居たれば、御家老の娘、蘭花さまをなア、お前の嫁に上げたいと、親御さんの願ひでござんすと云うたら、父さんの仰しやるには、此方に否やはない。また預かつて居るおさんは、半七の云ひ號けではない程に、よしなに賴むと仰しやつたは、お前に蘭花さまを、娶合はすお心であるかいなア。

半七　その事を最前、父上に承はつたゆゑ、其方は親御丹波市どのと、今端の際に約束した夫婦仲。それでは義理に背くがと申したら、其方が心を引き見る爲の、拵らへ事とのお話し。安心するがよいわいなう。

さん　さうした事ならよけれども、何程、親々の許した女夫ぢやというて、年も取らいで身重になり、今にも人目に立つやうになつたら、なんとせう。と云うて、外の人に云ふも恥かしく、母さんがござんしたら、さぞ喜んで下さんせうに、去年の今日お果てなされ、わたしが實の母さんも、今以てお行くへ知れず。もし最前の事が誠なら、わたしやマアどうせうぞいなア。

半七　これはしたり、父上には行く末を案じなされての拵らへ事。わが身が可愛いからの事ぢやわいなう。

さん　わたしや、心が濟まぬ程になア。父さんがなんと仰しやらうと、お前の心が變らぬと云ふ、なんぞ慥かな……

……オヽ、幸ひ。

ト守り袋を出し

いつぞや、父さんがお果てなさんとした時、わたしの臍の緒書の入つた守り袋、これをお前のその守と、變らぬ證據を取替へて、肌身に添ふるが互ひの證據。

半七　さて、疑ひ深い。さりながら、其方の心の濟むやうに、そんなら、斯う取替へて

ト同じ守り袋を出して、取替へ、懷中して

さん　そんならこの後、必らず見捨てゝ

半七　ハテ、よいものかいなう。

ト上手より以前の中間、走り出で來たり

中間　若旦那樣、只今お旦那が方丈へ、お出でゝござります。

半七　ナニ、父上がお出でとな。

さん　待ち兼ねて居たわいなア。

ト橋がゝりにて

大勢　ヤア〳〵、此方へ來た〳〵。

ト橋がゝりより、縫ひぐるみの熊、駈けて來る。後より、術の若い者二人、寺男、以前の侍ひ、仕出し大勢棒や縫ひぐるみを持つて、後追うて出る。半七は身構へする。おさんは驚ろき、逃げんとするを、熊はおさんを引ッ抱へ、仕出しを蹴返し、橋がゝりへ入る。皆皆追つて入る。

半七　南無三、後追ひかけて

ト上手より半六、出かゝり居て

半六　ヤレ待て、悴、いづれへ行く。

半七　見す〳〵おさんを獸物に取られ、なに面目に歸宅いたさう。取返さいで置くべきか。

半六　ホ、ウ、幼なけれども流石は我が子。尤もなる所存

なれども、すべて戰の極意にも、その身の力を計らずして、逸る者を猪武者と云ふ。熊は日本の猛獸にして、これに近寄るは、石を抱いて淵へ望むに異ならず。又ぞろ汝も命を落さば、親は兎もあれ、主君へ不忠。

半七　ちやと申して。

半六　生は難し、死は易し、側に見て居るこの親が、惡い事を申さうか。併し、手延びにならぬこの場の仕儀。其方は屋敷へ馳せ行き、獵人等を召し集め、用意いたせ。身は岩家谷の獵人を呼び集め、直さま此ほとりの山々を、狩り出す程に、當所へ向けて、早く〳〵。

半七　然らばこれより。

半六　急いで行きやれ。

半七　ハツ、

ト向うへ走り入る。

半六　俳優渡世いたしたる、平三めに云ひつけ、まんまと首尾よく仕負ふせたれば、悴半七を納得させ、典膳どのの息女を貰ひ、直ぐに家老に經上がる魂膽。ハテ、人の出世は……あるものだなア。

ト思ひ入れ。この仕組みよろしく寺鐘にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、向う黑幕、上手、山の張り物、この後に杉の木、同じく吊り枝。すべて、岩屋谷、夜の體。爰に氣を失ひしおさんを、平三郎、熊の皮を冠りしまゝ、介抱して居る。山颪にて道具納まる。

平三　おさんどのいなう〳〵。

ト腰の胴亂より藥を出して吞ませ、活を入れる。おさん、氣が附きしこなし。

どうぢや、心が附いたか。コレ、氣を慥かに持たつしやれ。

トおさん、平三郎を見て

さん　アレエ、。

ト飛び退く。

平三　こんな物を冠つて居るから

ト皮を脫ぎ捨て

サア、おりや人間ぢやわいなう。

さん　そんなら、熊と思うたが、盜人さんでござんしたのか。かどわかしといふお人で、わたしを勸め奉公にでも、やらしやんす心でござんせうが、それよりいつそ一思ひ

に、早う殺して下さんせいなア。

平三　侍ひの子ほどあつて、流石は見上げたその覺悟。わしは盜人でもない。かどわかしでもなけれども、人に頼まれ、熊の眞似して連れて來たのぢや。

さん　そりや又、誰れに。

平三　フム。深い樣子はコレ。

ト以前の小柄を出して

この小柄に覺えがあるか。

トおさん取つて見て

さん　ヤヽ、三つ柏に大の字は、こりや紛ふ方なき養ひ親、半六さまのお差し料……して、この小柄が、どうしてお手に。

平三　サヽ、その不審は尤も。おさんとやら、聞かつしやれ……その頼み手は半六どの、密かにこなたを連れ退いて、殺してくれいと我れへの頼み。否と云へば我れをも生けては置かぬ權幕。その仔細は、子息半七とやらに御家老の娘をば、娶合せたいと慾の一字に迷ひ、半七どのに申せども、義理を云ひ張り得心せぬゆゑ、こなたさへ亡き者にすれば、嫌とも出來る縁組みと、頼まれたが、わしも因果。二つには、わしが斷わるとも、いつか一度は人知れず、殺さるゝは知れた事ゆゑ、心を極め、姿を替へ、少しのうちも偸りさせたは、こなたを助けて進ぜたさ。わしは、笠屋平三郎と呼ばれて、芝居渡世をする者なれど、これまで盜んだ事はせねど、人を損ねて人を助くるは、善根功德と心を定め、こなたを奪ひ取つた譯。所詮無得心な半六どのゝ所へは、戾らぬ料簡をさつしやれや。

トこれを聞き、おさん、思ひ入れあつて

さん　馴染みもないに御深切、よう云うて下さりました。母さんには、三つの年に生き別れ、父さんは敢へなき御最期。賴みに思ふ半七さんの、母さんもお果てなされ、たつた一人の養ひ親、孝行をせんものと、思ふに甲斐もなく、殺さんとまで憎ましやんすも、所詮わたしがあつては、半七さんの御出世の、妨げとあるからは、叶はぬ縁。それも結びし縁なれば、また廻り逢ふ事もやあらん。とは云ひながら、これからマア、誰れを便つて。

平三　オヽ、氣遣ひをさつしやるな。子も女房もないおれなれど、其方さへ得心なら、これより直ぐに鎌倉へ下り、身に覺えたる俳優渡世、舞をこなたへ傳授して、一先づ舞子にした上で、こなたの望みも叶へてやらう。

さん　サア、年丈けるまで夫を持たず、遊女妾にさへならぬ事なら。
平三　オヽ、それも合點。例へ、この上に落ちぶれるとも嫌な勤めなどさすおれぢやないわい。案じるな。
さん　そんなら今から、わたしが父さん。
平三　不肖であらうと、其方は娘。
さん　夜更けぬうちに
平三　オヽ、早速の承知、嬉しうござるわいなう。
　ト下手にドンチャン烈しく打込み、人聲する。
さん　アレエ。
平三　イヤ、驚ろくには及ばぬ。ありや半七どのへ心ゆかし、半六どのが獵人を頼み、獸物狩りをすると見えた。道を違へて山越しに
さん　人目にかゝらば、何かの妨げ。
平三　サア、ござれ。
　トおさんの手を引き、行きかける。下手より杣一人出て
杣　怪しい奴め。
　トかゝるを
平三　ナニ、猪口才な。
　ト見事に返すが木の頭。
うづ蟲めが。
　トこの仕組みよろしく幕。あと山颪しにてツナギ、道具出來次第、直ぐに引返す。

二幕目

赤根邸の場
妻籠宿の場
筒井館の場

役名——筒井吉稚。厚倉新十郎。赤根半七。同妻、關花。醫者、馬場南庵。森村屋和五郎。同娘、おろく。貝屋善吉。

本舞臺、中足、本緣付き、大和葺きの二重。向う襖壁、茶立て口。下の方、床の間、掛け物を掛け、生花をあしらひ、上手、障子屋體。下手、建仁寺垣、石燈籠、秋草の土手板、いつもの所に、枝折り戸、爰に中間二人、水手桶を持ち、掃除して居る。白囃子にて幕明く。

中一　ヤヨンヤショ。サア〳〵、これで朝掃除は濟んだと

いふものだ。
中二　若旦那様は、昨夜お泊り番であつたが、もうお下がりでありさうなものだ。
中一　その若旦那半七さまは、御親類のお娘御を養ひ取つて、御夫婦にする積りであつたさうなが、どういふ譯やら、園花さまを。
中二　さればサ、御家老の典膳さまが、なんでも半七さまの嫁に遣りたいと云うておやけれど、お云ひ號けの娘御があるゆゑ、延引してゐたところが
中一　娘御の行くへが知れなくなられたゆゑ、それであの御新造様が。
中二　さうよ。その娘御が、先年母御の一周忌に、お寺參りの歸りがけ、迷子になられ、行くへが知れぬので、御家老様のお娘御を貰はつしやつたのだが、いま威勢の強い典膳さまと御縁者といひ、益々若旦那も御出世なさるであらう。
中一　さうなりや、おいら達までが、肩身が廣いといふものだ。
ト唄になり、奥より園花、屋敷女房の拵らへ。後より下女おまつ、紫の褥を抱へ出て來り、二重に敷き、机を出して直す。
中二　オヽ、御新造様。
兩人　ヘイ、お早うお目覺めでございました。
園花　いつもながら、御苦勞でござんした。お下がりが遲いゆゑ、大儀ながら、お迎ひに行てたもらぬか。
中一　ヘイ、只今、お噂を申して居りました。左やうなら私しどもは
園花　少しも早う。
二人　ドレ、お迎ひに參じませうかい。
ト橋がゝりへ入る。園花、封じ文を出し
園花　其方は、玄關に居やる、南都の母さんの所から來た使ひの者に、この狀を渡してたもいなう。
まつ　畏まりました。併しながら、このお文の中に、もしや若旦那樣の事を
園花　なんのマア、母さんへ御苦勞させ申すやうな事、書いてよいものかいなう。
まつ　それで安心いたしました。
園花　早う渡してたもいなう。
ト　おまつ、狀箱を持つて奥へ入る。
半七さまに添ひたいと、やうやう嫁入つては來たれども、

お心に叶はいでか、ついに一度……サア、いつしか洩れて母さんの、お案じあつて日毎の文、夢さらさうした事ぢやない、恥かしい程睦ましいと、嘘を飾つてお返事を書く陰氣に胸塞がり、涙にじむ墨色を、筆にとゞむる命毛と、思へば果敢ない身の上ぢやなア。

ト また唄になり、向うより半七、継上下、大小。紬羽織の侍ひ、挾み箱持ち、草履取り、附いて出て來り

半七　お夜詰めの遲いので、御番明けも遲なはつたやうに思はるゝ。

侍ひ　左やうにござりまする……御免。

ト 先へ駈け拔けて、門口へ來り

若旦那さまのお歸り。

ト 半七、舞臺へ來る。下女おまつ、奥より出る。

闌花　只今、お下がり遊ばしましてござりまするか。

半七　ムウ、闌花、夜前は親人にも、お泊り番で、さぞ淋しうお居やつたであらう。

ト 上下を脫ぐを、闌花、おまつ、疊みながら

闌花　その上、今朝のお下がりが遲いゆゑ、きつうお案じ申してござりまする。

半七　昨夜は、お引けが遲うなつたで……其方どもは、休息しやれ。

侍ひ　ハッ。

ト 供廻り、下手に入る。闌花、おまつに囁き、おまつは、上下を持ち、奥へ入る。闌花は、半七の前へ、茶を出し、床の間の見臺を出す。

半七　これは、よう心が附かれた。すべて在番に上りてより、お上向きのお首尾もよく、終日の勤めゆゑ、いつしか讀書も無精に相成つた。併しながら、好きの道とて、これぱつかりが手前の樂しみでござるてや。

ト 闌花は、物を云ひたき思ひ入れあつて、茶臺に茶碗を載せ、差出して

闌花　左やうではござりませうが、餘所外のお方々は、川狩りぢやの、月見ぢやのとお出でなさるゝに、御本ばかり御覽なされて、もしや、おしつらひでも出やうかと、お案じ申し上げますわいなア。

半七　イヤ／＼、手前は諸家の記錄、軍法の奥義集などを讀むと、忽ち鬱散の致す。これも生れ性であらうわい……イヤ、身共はさて措き、てまへこそ、ちと朋友を誘ひ、名所の多き京地なれば、見物に行きやればよいに。

闌花　その物見遊山も神參りも、心に曇りのないならば、

面白うもありませうが、僅かの間も忘られぬ、私しが心の内。

半七　なんとお云やる。

園花　拙ないこの身を顧みず、お恨み申すと思し召すも耻かしながら、親々の許しを受け、祝言の日も極まりしに、火急に當所へ御在番。願ひを立てゝお後を慕ひ、嫁入つて來て百日餘り、ついに一夜のお情も……サア、只一筋に辛からで、晝は餘外外の御夫婦よりも、睦まじうお心附けて下さる程、猶また結句恨めしく、出て行けがしの謎々か、貞婦兩夫に見えぬといふ、女子の操を罪もなく、破らし給ふお心かと、思ひ續けて長の夜を、泣き明かす胸の内、御推量なされて下さりませいなア。

ト思ひ入れ。半七、こなしあつて

半七　その恨みは尤もなれど、一つ臥床に寐ぬ譯は、御身をいとしう思ふがゆゑ。その仔細　疾より知らさうとは思へども、親の非をあぐるに似たり、恥やせん角と延引なし、これまで包む我が心、只今明かし聞かす程に、必らず他聞に洩らしては相成らぬぞ…　某が十四歳の秋、父の麁相に斧の刃を、旅人に當て、深手を負はせ、今端の苦しみ、その者に、娘あるを貰ひ受け、成長の後、某に、娶合はす程に、心殘らず、臨終あれと約定なして野邊の營み。その後、母も病に臥し、この女を見捨てては、世の義理立たずと、我れへの教訓、遂には重なり御病死となり、一周忌の佛參の歸るさに、彼の女を熊に攫はれ、生死の程も分らぬうち、そもじとの縁談は、父が再三の勸めなれど、女の親に誓ひし詞、母の遺言重ければ、遮つて斷われども、親人は只御親父の惠みにほだされ、汝は母の遺言を立て、父の面皮を捨てるかと、理詰めの詞に是非もなく、其許を娶りしかど、枕さへ交さねば、科なきそもじに疵つけず、其まゝに歸すとも、再縁の女なりと、人の譏りもなき道理。小者の目にも立つやうに、わざとつれなくもてなすも、御身の爲を思ふがゆゑ。さりながら、彼の女の愛情に引かされ、そもじを離縁なすにはあらず、生死の未だ知れざるうち、二度妻を娶つては、世の中の義理相立たず。サア、玆の道理を聞き分けて、本國奈良の親里へ、一先づ歸つて某が、後しての便りを待つてお居やれ。

園花　さうした事を露ほども、知つたなら思ひも増すまいに、幼い時からお姿を、見るより深く思ひ染め、あゝしたお方と添ひたいと、思ふ心が穗に出でゝ、母さんの嬉

しい仰せ。願ひ叶うた甲斐もなう、添ふ事ならず親里へ、どの顔さげて歸られませう。云ひ號けのお方の生死の程知れるまでは肌觸れぬと、仰しやるもお道理。この上のお情には、どうぞお寢間の夜着の褄、蚊帳の外にも夜を明かし、人目ばかりは妻と呼び、夫と云はせて下さらば、それ樂しみに心よう、お宮仕へ致しまする。お慈悲でござりまする。聞き分けてたべ、半七さま。

ト愁ひの思ひ入れ。半七もホロリとして

半七　ホヽウ、さほどにまで思はるゝを、なんの離別いたさうぞ。

閨花　只この上は諦らめて、心の內は尼法師。

半七　さはいへあたら蕾の花。これを思へば世の中に

閨花　義理と女子の操ほど

半七　切ないものが

閨花　あらうかいなア。

ト兩人思ひ入れ。調べになり、橋がゝりより祚天、紐附けの股引、大小にて十手を持ち、六人、ツカ／＼と出て來り

侍一　赤根半七どの、若殿のお召し

侍二　急いで御前へ。

半七　フム、こは心得ぬ何れもの出立ち。十手捕り繩御持參あるは、何お疑ひあつて某を

侍一　事の仔細は、御前にて申し聞けん。

侍二　服改めて

六人　出仕おしやれ。

半七　ハツ……女房ども、麻上下を。

閨花　ハア、。

ト麻上下を着せながら

何かあなたのお心に、お覺えがござりまするか。

半七　奉公に私しなき某なれど、世には無實の……イヤ、何れも、御苦勞千萬に存ずる。

侍一　支度がよくば

半七　イザ、御同道。

閨花　どうやら心に

半七　アヽ、コレ。

六人　立たう。

ト十手を振り上げる。閨花、心遣ひのこなし。半七は目を配り、キツとこなし。この仕組みよろしく、調べにて道具廻る。

本舞臺、三間の間、藁葺き反古貼りの障子屋體。この前、破れたる玉椿の垣。上手、九尺の入り口、奥深く落間、この前へ床几を直し、下手、正面を向けて、崩れたる冠木門、よき所に松の立ち樹、同じく吊り枝。下手に、木曾街道妻籠驛と記せし傍示杭。爰に馬場祐庵、田舍醫者の拵らへにて、床几に煙爐を置き、藥を煎じて居る。驛路入りの馬士唄にて道具納まる。

祐庵　何を云うても、看病人にも、働らき人にも、たつた一人のおろくめが、宿引きに行てしまうたゆゑ、お醫者樣が御自身に、藥を煎じて服ませねばならぬ……サア、上がつた。これを立てつけに服まつしやれ。

ト下手の障子を明けて、藥土瓶を渡す。爰に和五郎、白髮鬘、病鉢卷にて、やつしを引ッかけ、夜具にもたれながら居る。

サヽ、愚老がついでやりませう。今日は加減をした程に、今宵は痛みも遠退くであらう。

和五　有り難うござりまする。何かにつけてあなたのお世話、お禮の申しやうもござりませぬ。これにつけても憎いは、女房のあのおそや、妹娘のおうしを連れて、家財からおろくの着類まで持つて行くとは……ゴホンゴホン。

祐庵　アヽ、コレ、そんな事を思ふのが、病氣の障り。風に當つては苦しみが増す程に、ドレ、障子を閉めてやりませう。

ト障子をさし

爰の内の後添ひの、おそやといふ女程な、惡人はあるまい。六七年後までは、森村屋和五郎というて、脇本陣も勤めて居たれど、先妻の娘のおろくを置き捨て、おのれが產んだおうしを連れ、屋財家財、有り金まで、引ッ浚つて驅落ち。それから身代もしもつれ、今では親子二人暮らし。あの又、おろくが孝行な事わいなう……コレ和五郎どのや、今に安樂になるであらう。必らずキナキナ思はぬがよいぞや……オヽ、又こみ上げて來たのか。ドレ、撫でゝやりませう。

ト上手の入り口より、內へ入る。馬士唄になり、向うより貝屋善吉、木綿やつし、ぼつと鬘、脚絆草鞋がけにて、桐油包みを割掛けにして、菅笠を肩にかけ、後より木曾のおろく、田舍染めの振り袖、褄からげにて出て來り

ろく　お客さん、お泊りでござんすかえ。
善吉　わしは、美戸野まで越す積りだが、たつた一里ばかり、明日また入れ合はせる事だから、どうでもいゝ。お前の内は綺麗かえ。
ろく　ハイ、隨分綺麗でございます。どうぞ、お泊りなされて下さりませ。
善吉　併し、一人旅だと思つて、狭い所へ押込まれては、あやまるの。
ろく　イエ、合ひ宿はございませぬ。
善吉　旅籠はいくらだ。
ろく　どうでもよろしうございますわいなア。
善吉　そいつは奇妙だ。夜具は新らしいかえ。
ろく　隨分、綺麗なを借りて……サア、氣をつけまする程に、お泊りなされて下さりませ。
善吉　そんなら泊りませう。有やうは御嶽から立つて、足を痛めた。姐え、晩にやア撫つてくれるだらうなう。
ろく　どうなと致しませうわいなア。
善吉　それは有り難い。さう聞いたら草臥れが治つたやうだ。ソレ、泊りだ〳〵。
　トおろくに包みを渡し、足を引いて舞臺へ來り、榜示杭を讀む。おろくは包みを、床几の上へ置き
ろく　父さん、お客さんをお連れ申したわいなア。
善吉　お前の内は爰か。
ろく　ハイ。
　ト氣の毒なるこなし。
善吉　エヽ、これが綺麗か。こいつは飛んだ食はせものだ。足が痛くつても仕方がねえ。先の宿まで越さにやあならねえ。併し、茶代を置くよ。ヤレ〳〵恐ろしや、買ひかぶりを。
　ト立ち上がるを留めて
ろく　お客様、成る程、嘘を申したゆゑ、お腹も立ちませうが、あなたがお泊りなされて下さりますと、今日が立ちゆかれまする。お助けなさると思し召して、一夜を明かして下さりませ。
善吉　ナニ、おれが一晩泊ると立ゆきが出來る……さういふ事なら泊つてやりませう。今夜一晩、野宿したと……ハヽヽ、イヤ、何にも心遣ひするに及ばねえ。飯も一人だ。炊かずとも、香の物に茶漬でいゝよ。併し、足は洗はせておくんなせえ。
ろく　そんならお泊りなされて下さりまするか。エヽ、有

り難うござります……ドレ、お濯ぎの湯を。

祐庵　オッと、藥の後へ湯を掛けたれば、それで早速、間に合ひだ。サア、使はつしやれ。

ト奥より祐庵、盥へ湯を入れて、持つて出る。

ろく　オヽ、お前樣はお醫者樣。

祐庵　病人には藥を煎じて、愚老が服ませた。その所爲か咳も遠退き、今スヤ〳〵寐入つた程に、あの儘にして置くがよい。

善吉　ハア、病人があるのか。

ト足を洗ふ。

祐庵　イヤモウ、長々の煩らひに、この娘が何もかも賄つて居ります。イヤ、誠に孝行者でござりまする。

ろく　お客樣に、其やうな事を。

祐庵　ハヽヽ、イヤ、愚老はまだ病家を見舞はねばならぬ。お客さん、ゆるりと休まつしやれ。

ト橋がゝりへ入る。善吉、床几の上にて帶を締めかへる。おろく、濯ぎの水をこぼしながら、心付きたる思ひ入れにて、頭を捜し、櫛を落せしこなしあつて

ろく　お客樣、私しはお願ひがござります。

善吉　なんだ。旅籠を先へ拂つてくれろと云ふのかえ。

ろく　イエ、左樣ではござりませぬ。最前、野中と追分との間で、あなたをお見請け申した時、うろたへて、ツイ大事の櫛を落したさうにござりまする。失うてはならぬ品。尋ねて參りたうござりますゆゑ、暫しの間、御膳をお待ちなされて下さりませ。

善吉　ムウ。それは昔風な、斑甲ではねえかい。

ろく　ハイ、あなた、よう御存じでござります。

ト鼈甲の櫛を袂より出し

善吉　お前の落したのは、これぢやねえか。

ろく　オヽ、どうしてあなた、この櫛を。

善吉　ソレ、お前に逢つたツイ先の道祖神の曲り角に落ちてあつたゆゑ、聞いたら主が知れやうと、袂へ入れて忘れてしまつた。お前のにしては、大分古風だな。

ろく　ハイ、これは幼ない時別れた、母さんの筐でござりまする。

善吉　そんならお前は、阿母も無いのだの。

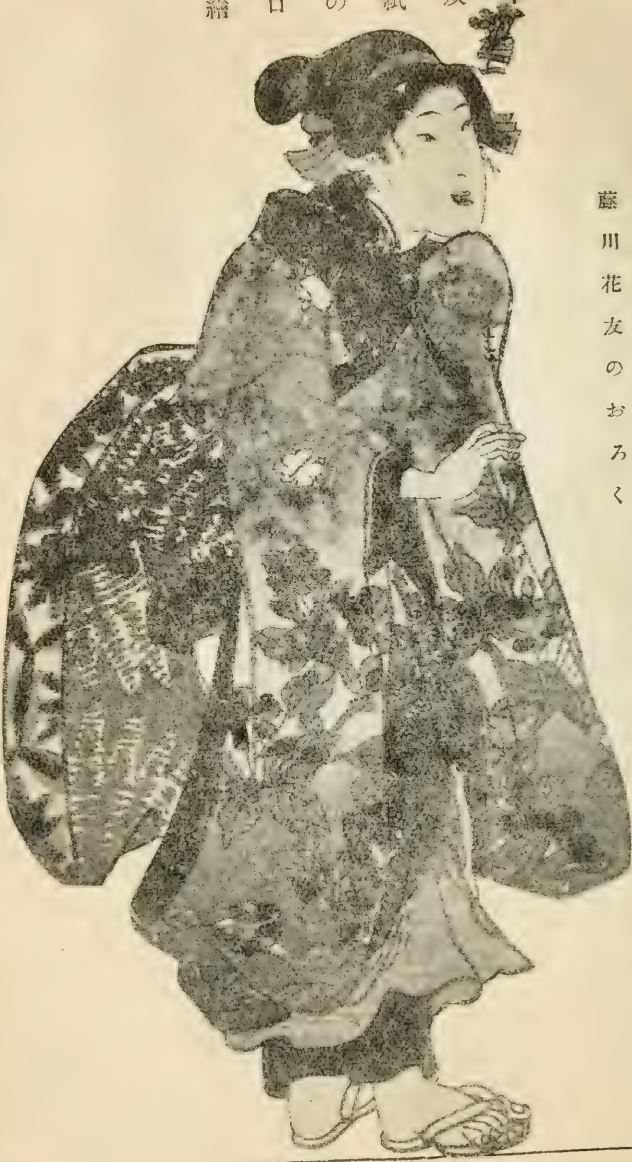
ろく　ハイ、この櫛につきまして、果敢ないわたしが身の上、お聞きなされて下さりませ……あの一間に病み勞れて居やしやんすは、父さんでござりますが、わたしの幼ないその頃は、この宿の脇本陣を勤め、何不自由なく暮

初演當時發行



中村歌右衛門の善吉

草双紙の口絵



藤川花友のおろく

らしましたが、三つの時に母さんに死に別れ、それより後の母さんがござんしてから、次第に内も手もつれて、父さんの長の煩らひ、その看病に愛想を盡かし、自分の産んだ娘を連れて、僅かなれども用意の金、着類着そげを夜のうちに持つて、駈落ちをなさんした、その跡は、親しき人も遠ざかり、馴染みの得意も顏を背け、何を手段の世過ぎもなう、たゞ旅人の袖に縋り、僅かな旅籠でやうくと、親の命を繋ぐ悲しさ。それゆゑ、誠の母さんの、筐といふてはその櫛一つ。身に替へ難きその品を、落してあなたのお手に入つたも、よくく深い……サア、不思議な事でござりまするわいなア。

ト善吉これを聞き、憂ひのこなしあつて

善吉　ア、哀れな話を聞き、身につまされて涙がこぼれた……姉え、さりとはお前は孝行者だなア。永の年月親御の看病、年も行かねえで其やうにまで苦勞するといふは、大の男も及ばぬ事だ。丁度おれも一對の因果話し。聞いて下さい……おれは江州の二夫川の者だが、親仁どの、代までは、名主役も勤め、田地も澤山あつたれども、小さい時に父親に別れ、伯父御の鴻臺源次といふ人が、阿母をいろくと騙し、田地田畑殘りなく賣り拂はせ、母者人はそれを氣病みに去年病死。今ではほんの水呑み百姓。伯父御は次第に立身して、村役人も勤める勢ひ。近しい仲も遠ざかり、いつか身内も他人向き。おのれやれ見返してと、思へど甲斐ない身貧ゆゑ、尋ねて來た母方の伯母を留守居に、二三年鎌倉へ下つて奉公なし、つましくなしてその金で、無くした田畑の百分一、買ひ戻して家を興すが、亡き兩親へ孝行と、遙々下る東路の、旅の哀れを妻龍で、袖振り合はす因果話し。併し、おれは男だけ氣が輕いが、こなさんは獨り身ならず、さぞ心細く思はつしやらう。爰に僅かな路用がある。これを半分譲いて行くから、父さんの藥の足しにでもしてやりやれ。

ト打がへを出し、一分二つを出す。おろく、思ひ入れあつて

ろく　お志しはお嬉しうござりまするが、行く先遙かな旅なれば、これぱつかりは、お納めなされて下さりませ。

ト返す。

善吉　イヤ、案じてくれるは有り難いが、わしは鎌倉まで下られる程、路銀は爰に持つて居る。わしがこなたへ遣

るではない。天道様が孝行を、憐れんで恵む金。これは
どうぞ納めて下され。

ろく　それ程までに仰しやつて下さりますれば、お詞に従ひまして

善吉　納めてくれるか。それでわしの心も届いたといふもの。コレ、必らず貧乏を苦にしなさるな。今の艱難を昔語りにするは今の間だ。

ろく　有り難う存じまする……オヽ、身勝手な事ばかり云うて、肝心の御膳の支度を。

善吉　イヤ、なんにも入らねえ。香の物で茶漬の方が勝手だ。

ろく　そんなら自由ながら有り合せ物で、御料簡なされて下さりまして、奥へお出でなされませ。

善吉　イヤ、病人と一座より、矢ッ張り爰で御馳走に。

ろく　それぢやといふて、門中で。

善吉　イヤ、寐るのはどこぞの隅にして、飯は矢ッ張り爰にします。

ろく　それでは、お氣の毒にござりまするが。

ト上手より飯櫃、椀に鮎の串ざしを持ち、土瓶を提げて

お茶も熱うなつて居りました。

ト飯を盛り、出す。

善吉　なんだ。こりやア鮎か。何よりの御馳走だ。

ろく　よろしうお上がりなされませ。

ト善吉よろしく喰ふ事あつて、フト胸につかへしこなし。

オヽ、飯が剛いゆゑ、お胸につかへて。サア、これをお上がりなされませ。

ト茶を汲んで出す。善吉呑んで、やう／＼通りしこなし。

モシ、お静かにお上がりなされませ。

善吉　アヽ、思ひがけねえ御馳走ゆゑ、ツイうつかりと胸につかへた。イヤ、急いたばかりぢやない。あんまり切なる話しに迫り、コレ姐え、すんでに飯と心中しようとした。

ろく　わたしや、どうしようかと存じました。サ、お茶に漬けてお上がりなされませ。

善吉　ほんに、さうしませう。

トおろく、土瓶を取つて茶をかける。差し金の蝙蝠、大ぶん舞ひ下がる。

ワア、氣味の悪い。なんだ〳〵。
ろく　蝙蝠でござりますわいなア。
善吉　ナニ、蝙蝠、エ、。
ト拂ひ退けるを木の頭にて
イヤ、いろ〳〵な御馳走だ。ハヽヽヽ。
ト箸を取り、飯を掻ッ込む。馬士唄にて、道具廻る。

本舞臺、常足、四間通しの上段の欄間ゆ戲込み、花の丸の張りつけ。向う金張り彩色畫の御簾襖。中の舞にて道具納まる。

ト正面の襖、一時に開き、奥より茶道一人、小姓二人、刀架、脇息、褥を持つて出て、二重の眞中へ直す。奥より筒井吉稚、若殿の拵らへ、麻上下の諸士大勢付いて出て來り、二重へ住ふ。

侍一　ハッ、若殿へ申し上げまする。この程、御所勞に依つて、大殿始め、奥方の御心安からず。
侍二　種々と醫藥を盡すと云へども
侍三　何分、御病體定かならず。さるに依つて、御保養の爲、鎌倉へお下り遊ばすにつき
侍四　赤根半六が悴半七を、御乳人役に取立てよと、大殿の御意。半七は元御領分、佐保の莊の木樵なれば
侍五　武家の嗜みも如何あらんと、今日我れ〳〵相手を仕り
侍六　彼れが手並を試みよと、大殿の御内意なれば
侍七　若殿にも、勝負の程を
皆々　御一覽遊ばされませう。
吉稚　ナニサマ、父よりの御内意、委細は承知罷りあり。殊に、予が鬱散にも相成らう。心を附けて試し見よ。
皆々　ハア、。
ト向うにて
六人　キリ〳〵立たう。
ト鳴り物になり、以前の六人、半七を圍ひ出て、舞臺へ來て
若の御前、下に居らう。
半七　ハア、……して、拙者めに御用の筋は。
侍一　火急のお召しは外ならず、もと御貴殿は佐保の莊、山家に育つ者なるゆゑ
侍二　文學は兎も角も、武藝は我流を基として、でも兵法を高慢すれば
侍三　他家への聞え、當家の恥。試し見よと御前の御意。

侍四　この場に於て
皆々　立合ひ召され。
　ト半七、思ひ入れあつて
半七　御尤もなる御疑ひ。さりながら、例へ山林幽谷に育つとも、仕官なす上からは、元より未熟の者にはあれど、臣たる道に二つにござらぬ、召し出されて今日まで、お尋ねもなきものを、俄かに武藝の御吟味は、拙者を妬む者あつて、悪しざまに申せしか。何とも以て、合點が參りませぬ。
　トこの時奥にて
新十　ホヽオ、その仔細、申し聞かすであらう。
　ト厚倉新十郎、熨斗目、麻上下、老けたる拵らへにて出で來り
　ナニサマ、赤根氏の疑念、尤も至極、構へて殿へ讒言の、申し上げし者にあらず、若殿吉稚君、この程よりの御所勞ゆゑ、典藥の申し上げしは、此まゝに日を重ぬれば、癆病の御病症となれば、欝散が第一とあつて、今日火急に鎌倉へ、欝散の爲め御發足。貴殿の器量を御覧あつて、吉稚君の御守人役を、仰せ付けられん大殿の思し召し。それゆゑ、若殿の御前にて、晴れの立合ひ御覧に入るゝも、御氣欝を散ずる爲。辭退いたさず用意のおしやれ。
半七　ハツ。左やうござれば、御免を蒙むり、この場に於て
吉稚　支度がよくば、立合はせい。
新十　ハツ……ソレ、方々。
半七　心得ました。
　ト以前の六人いきなりに木太刀にて打つてかゝるを、半七、身を伸ばし、柄元を押へ、肩衣を脱ぎかけ、木太刀を引ッたくつて投げ返す。六人、たんぽの手鎗を持つて、一度に突きかゝるを、刎ね返し、面白き立廻り、鳴り物を傳ひ、存分にあつて納まると、新十郎、手早く手鎗を持つて突いてかゝる。半七、扇にてあしらひ
半七　元より未熟な某を、お相手とは、近頃以て
新十　なにを。
　トまた立廻り
半七　師に學ばざる我流の某。
新十　所をカウ。
　ト立廻り、半七下がつて

半七　御一覽に供へ、恐れ入り奉りましてござりまする。

新十　その技練を見る上は、新地五百石御加增あつて、吉稚君の御乳人役を仰せつけらるゝ。有り難くお請け致されてよからう。

半七　ナニ、身不肖なる某へ。ハ、ア、有り難く存じ奉りまする。

吉稚　父君の內意の御書。

ト書き物を出す。新十郎、取次いで半七に渡す。半七、讀み下し

半七　こりや、お家相傳、北辰の尊像の詮議をば。

新十　コリヤ。

半七　イヤサ、警固に油斷なく、吉稚君の御供、仕るでござりませう。

新十　たゞ何事も、お家の浮沈に關はる一條、御遊興に事寄せて、餘所ながらの詮議を。

半七　身を粉にしても、この御用。

新十　しかと貴殿が。

半七　昨夜計らず詰め所にて、手に入る密書。

ト懷中より密書を出すを、諸士一人、上手にて、これに目を付け居て

侍一　南無三、それを。

ト立ち上がるを、半七、遠當てに當てる。

皆々　これは。

半七　若殿のお氣欝を散ずる爲、習ひ覺えし未熟の手の內。

新十　天晴れ見事。

ト侍ひ、見事にかへる。半七、扇を開き

半七　若殿樣には、イザ御出國遊ばされませう。

ト吉稚に目禮しながら、埃を鎭めるこなし。この仕組みよろしく、鳴り物にて、

ひやうし幕

三幕目

滑川藪屋の場
半七假宅の場
若宮小路の場
白澤越道の場

役名——筒井吉稚。今市奎八郎。布施長九郎。藪屋亭主、白眉の長。舞子、小夏。同、小勝。仲居、おくま。同、おなべ。同、小花。同、小妻。同、

お蝶。女郎、小藤。伊加留源治。奴、和五平。笠屋平三郎。駕籠屋、足平。同、歸平。厚倉新十郎。笠屋三勝。藪座若い者、善吉。赤根伴七。

本舞臺、三間の間、後ろ高欄付きの緣づらを見せ、向う打拔き、建仁寺垣、萩の盛り、所々に朝顏付きの燭臺を照らし、上手、折り廻し障子屋體。下手、折り廻し昼暖簾、すべて鎌倉、滑川藪屋、奥座敷の體。爰に吉稚、羽織、袴形にて、褥の上に住ひ、脇息に寄り添ひ、側に袴、一本差しにて、今市金八郎、布施長九郎、附き添ひ、次に小藤、女郎の拵らへ。おくま、おなべ、小花、小傘、お蝶、仲居の拵らへにて、酒肴の臺を並べ、酌をなし、小夏、小勝、振り袖、烏帽子、水干の形にて控へて居る。賑かなる唄にて幕明く。

なべ　ほんにモウ、小夏さんに小勝さん

小藤　いつもながら、面白い事で

女皆　ござんしたわいなア。

長九　イカサマ、舞子のうちで名にしおふ、三勝が舞ひ始めたる男舞。殊に美人の二人の者

吉稚　サヽ、これへ參つて、一つ飲みやれ。

金八　若殿のお杯、小夏も小勝も、お側へ寄つたり〳〵。

小勝　サア、小夏さん、お前から

小夏　なんのマア、小勝さんは、兄弟子ぢやゆゑ、お前から先へ。

金八　ナニ、女に兄弟子とは、間違つて居るやうだわえ。

小藤　それでも、男舞と云ふ名もござりますわいなア。

女皆　ホヽヽヽ、こりや出來たわいなア。

長九　それにしても、若殿のお目にとまつた、あの三勝、あんまり勿體の附けやうだわい。

小藤　サア、三勝さんは、方々のお座敷方へ、上がつておや程に

小勝　今宵は、なんぢややら、ナア小傘さん

小傘　ほんに、氣合ひが悪いと云うてゞあつたわいなア。

小夏　その上、例へどのやうな事があつても、男に肌は觸れまいと云ふ、願立てぢやさうにござりますわいなア。

くま　いつぞやも、雪の下の質店、島影屋藤次さんと仰しやる方が、金の山を積んで、女房にしたいと仰しやつたが、聞入れなさせぬとの事。

小夏　ほんに、あの藤次さんのお内儀さんは、悪い死やう

を、さしやんしたとの事ではないかいなア。
小花　サイナア、若宮小路のゆたへとやら云ふ、お盲さんが、お金をたんと持つてござんしたゆゑ、女房に持つて、質店を出し、むがう殺したといふ事でござんすぞえ。
金八　ハヽヽ、當時この鎌倉には、青砥左衛門といふ、むづかし屋が見張つて居る所で、其やうな事があつて料簡するものか。
長九　この滑川へ、たつた六文の錢を落したを、人夫をかけて、取上げたといふ野暮な老人。
金八　イヤ、その野暮と申したら、なんと若殿、あの赤根半七が達者で居つたら、この面白い事は出來ますまいがな。
吉稚　さうぢや。若いに似合はぬ、堅苦しい事ばかり申して居るゆゑ、道中のうちさへこの分では、例へ鎌倉へ參つても、保養になるまいと存じ居つた。
長九　ところが當所へ着くと、癪を煩らひ、旅宿に逗留しては御前へ濟まぬと、帷子ケ辻で借座敷を借り、今だに煩ひ居ると申すは、我れ／＼が爲には仕合せな儀でござる。先づ、若殿の合ひ方は三勝と極めて、我れ／＼はこの三人のうちにて、思ひざし居つたのに極めねばならぬ。

コリヤ／＼、小夏、そもじは身共に、味な目遣ひを致すから、身が色になつてくりやれ／＼。
小夏　有り難うござりまするが、舞子のうちは、左やうな事は、なりませぬわいなア。
金八　此奴、四角四面な事を申すな。コリヤ、高が舞子、白拍子ではないか。曾我兄弟の虎少將でも、客の伽を致したではないか。手前は小勝と極めうかい。
小勝　ホヽヽ、その虎さんや、少將さんぢやとて、嫌なお方には、肌が觸れられうかいなア。
長九　さう云へば、此方も意地づく。
金八　ちよつと斯うして。
ト長九郎は、小夏、金八郎は、小勝に抱きつかうとする。
小藤　マア、お待ちなされませ。舞子は茶屋方へ呼ばれても、お客樣のお側へも坐るなと、嚴しい云ひつけ。それゆゑ素氣なう申したのでありませう。必らずお氣におさへなされて下さりますな。
長金　憎い奴だ。
吉稚　コリヤ、長九郎も、金八郎も、女子の事ぢや。料簡してやれ。

兩人　ハツ。

ト唄になり、向うより源治、着流し、刀を提げ、醉うたることなし。善吉、おづ〳〵付いて出て來り

善吉　モシ、源治さま、お前さんのお尋ねなさるは、このお方々でござりますか。

源治　アレ〳〵、あれに疑ひあるべからずサ。

善吉　左やうならば私しは

ト行きかゝる。

源治　ア、コレ善吉、先も侍ひ、初めての對面。其方、案内してくれ。

善吉　ちと、私しはお座敷へは。

源治　なぜ參られぬと申すのだ。

善吉　ヘイ、最前から三勝さんの迎ひに參りまするが、今晩は扇ケ谷の、お屋敷へ行かねばならぬとて、參りませぬゆゑ、お座敷へ參ると私しにばかり、小言を仰しやりますゆゑ。

源治　ナニ、それしきの事を。どうでも云つて置くがいゝ。サア、ちよつと申し入れてくりやれ。

善吉　誠にハヤ、迷惑な。

ト舞臺へ來る。

長九　コリヤ、善吉とやら、大儀であつた。

仝八　して、三勝は如何いたした。

善吉　サア、その三勝は。

吉稚　參つたと申すのか。

善吉　ヘイ、お出でなされませぬが、その代り、誰れかお出でなされました。

仝八　ナニ、代りが參つたか。誰れぢや〳〵。

ト源治、よろめきながら、舞臺へ來て

源治　申し入れてくりやつたか。

善吉　ヘイ、お出での樣子は、申し上げました。

源治　オヽ、大儀々々……各々方、眞平御免下され。

ト下へ坐る。

小藤　ヤア、お前は伊加留源治さん、どうして爰へは。

源治　ヨウ、小藤功、爰へ來て居たか。道理こそ、表座敷に見えぬと思つた。

長九　ヤイ〳〵、若い者。我れ〳〵が呼んで參れと申したは、斯やうな醉倒れではないぞ。

源治　イヤ、酩酊はいたしたが、醉倒れとは、ちと御挨拶でござるぞ。

仝八　おのれ、武士たる者を嘲弄いたすな。

長九　こりや、どうした譯だ。
善吉　イエ、なか〳〵嘲弄いたすといふ譯ではござりませぬが、この源治さまが。
吉稚　エヽ、憎い奴。手討に致せ。
兩人　心得ました。
ト立ちにかゝるを
善吉　アヽ、御免なされませ〳〵。
ト詫びるを、突き廻す。源治は、酒が廻つて腰が立たぬこなし。小藤とめて
小藤　マア〳〵、待つて下さりませ。さうしてマア、三勝さんを呼びにおやりなされた所へ、あなたがお出でなされたは、なんぞ譯がござりませう。一體、この伊加留源治さまは、金澤の御家中でござりまするが……モシ、源治さんえ。一體、何しにござんした。
源治　名草劇齋といふ人の事について來たのだ。アヽ、切ない。マア、水を一杯くりやれ。
ト小藤にもたれ、他愛なき思ひ入れ。
金八　イヤ、ハヤ、とんだ醉倒れでござるが、何を申すも斯やうな遊里。
長九　併し、金澤の藩中と申し、劇齋と申す名につき、此方、ちと承はりたいが、斯く醉うて居つては仕方がござらぬて、
金八　コリヤ〳〵、其方が同道いたしたからは、樣子を存じ居らう。
兩人　申せ〳〵。
善吉　私しも、深い樣子は存じませぬが、その劇齋さまと申すお方が、表座敷にお出でなさりまして、これにお出で遊ばします殿樣へ、お目見得をなされたいとやら、それで御同道申しましたが、只今三勝さんをと仰しやりました所へ、このお方をお連れ申し、お腹を立てさせまして、恐れ入りましてござりまする。
源治　イヤ、その仔細は、手前申し上げるでござらう。名草劇齋と申す醫師が、筒井家の若殿、御保養の爲に、この鎌倉へお下り遊ばし、丁度好い折柄なれば、何卒お目見得をしたいと、傳手を以てお願ひ申しては置きたれど、御旅館へ出るも手重い事ゆゑ、手前を以て、各々へ願ひくれ候へと、餘儀なき頼み。それゆゑ、推參いたしてござるが、ちと酩酊したところは、平に御容赦々々々。
長九　すりや、劇齋と懇意とな。手前も劇齋老が、御前へお目見得が願ひたいと申す事は、さる方より聞き込んで

罷りある。
吉稚　すりや、その劇齋とやらが、予に目通りが致したいとて、其方、頼まれて居ると申すか。
長九　御意にござりまする。
金八　若殿が爰にお出でと承はり、お目見得を願ふは、なか〳〵一見識ある者と見えまする……して、その者は。
善吉　へイ、追ッつけ、これへ見えますでござりませう。
長九　それなれば、折を見合せ、お目見得の儀を。
金八　左やうでござる。醫師とござれば長袖の事、苦しうもござりますまい。
善吉　イヤ、あなた方がさう仰しやれば、それで源治さまがお出で甲斐も、あると申すものでござりますが、只今のやうに手討にするの、切るの突くのと云はれると、生きた心地はござりませぬ。
源治　イヤ、只今これへ參るや否、承れば三勝を、この善吉に迎ひに遣はされたその所へ、拙者が參つてさぞ御不興。何分よしなに、殿樣へお詫びをお願ひ申す。
長九　得て斯樣な席には、間違ひも有うちでござる。この入合せに善吉とやら、三勝を今一應迎ひに遣はせ。

金八　その代り、只今の悧り賃、若殿樣から下さるぞ。
　ト判粒を包んで善吉に投げてやる。
善吉　どうして〳〵、不調法を致しました私しが、お金をお貰ひ申しましては。
小夏　善吉どん、あなた方が折角の思し召し、御辭退申すは失禮ぢやわいなア。
善吉　左やうなら、頂戴いたしまするでござりませう。
小藤　ほんにマア源治さん、よい加減にあちらへござんせいなア。
源治　オヽ、そもじの云ふ事なら、唐天竺へでも行く。
小藤　ソレ、善吉さん。
善吉　へイ……サア、源治さま、お出でなされませ。
源治　オヽ、いつも貴樣の世話になる。先刻の悧り賃を遣らう。
　ト包み金を遣る。
善吉　最前から皆樣に、頂戴いたしましたれば。
源治　皆樣のは貰つて、おれ樣のは貰はぬでは濟まぬわい。
善吉　へイ、でも、いつも左やうな事は。
源治　なんと申す。いつでも遣るではないか……ナニ、各

各、手前宅では親どもがやかましう申して、酒は呑ませませぬ。それゆゑ、斯やうな所へ參つて、つい過し御免下され。

ト立ち上がり、ヒョロ〳〵とする。

善吉　わたしにお取りつきなされませ。

源治　取りつけのなんのと、幽靈ではあるまいし。

小藤　ハテマア、ござんせいなア。

善吉　左やうなら、御免なされて下さりませ。

ト源治を肩に掛け、小藤附いて橋がゝりへ入る。

長九　あれ程までに取亂すとは、馬鹿々々しい儀でござる。

全八　イヤ、酒の上では、貴殿も退いた仲ではあるまい。ハヽヽヽ。

長九　斯やうに申しまするも如何なれど、若殿には斯く御遊興なさるれども、お國元には大殿樣、この程の御不例。

全八　昨日お飛脚が到來いたせしところ、種々御療治の盡さるれど、更に驗なしとの事。

長九　その儀につき、只今の名草劇齋と申す醫者へ、大殿御病氣の容體を申し聞かせ、彼れが醫案を承はつては、如何でござりませう。

吉稚　成る程、予も左やう存ずれど、また家老の典膳や、病氣なりとも半七が、何かと申しは致すまいか。

全八　外の事とは事變り、誰れがなんと申しませう。

吉稚　然らば、これへ呼び出し、問ひ合はせ致して見やれ。

長九　併し、先刻から堅い事ばかり。あれなる兩人に、今一指し所望いたし、一獻召し上がられませう。

全八　劇齋とやらにお目見得許すは、別間で計らふでござりませう。

吉稚　サア、女子ども。今一指し所望いたすぞ。

ト小勝、小夏、支度をする。

全八　サア、御所望だ〳〵。

なべ　御前樣のお好み。

くま　サア〳〵、早う。

小夏　そんなら、これから臺拍子。

小勝　家の手振りの男舞。

夏勝　お許し受けて

ト小勝、小夏、幣束、中啓を持ち、立ち上がり、眞中へ出る。これを地へ取り、男舞の振り、一くさりあつ

て、振りの止まりにて、兩人見得。これを道具替りの知らせにて

皆々 やんや〱。
ト囃し、男舞の唄にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、上手へ寄せて、二間の障子屋體。向う床の間。下手、九尺の障子屋體、眞中、書心に見せたる廊下、この飾りつけよろしく、道具納まる。
ト上手より、長九郎、全八郎出て

長九 イヤナニ、全八郎どの、劍齋老がお目見得の儀は、最早間もなく相濟みませうが、この上は、國元へ發足の儀を願はねば相成らぬ。それより前に、此方の樣子を逐一、劍齋どのより、典膳どのまで申し達してもらはねば相成らぬて。

全八 左やうでござる。力と頼む御家老、蜂松典膳どのと同腹中の劍齋どのなれば、我れ〱が心も打明け、工風を借らねば相成らぬが、それにしても、若殿が心をかける笠屋の三勝、未だ色好い返事も致さぬか。

長九 今だに三勝が靡きませぬと、申し送るも餘り智惠のない話しでござる。

全八 殊に、病氣養生の致し居る赤根半七、追ひ〱全快に赴くと申す事。

長九 最早三勝が事は、延び〱には相成らぬ。明日にも御前へ出勤いたさば、若殿へ諫言いたすは必定。

全八 三勝が今以て參らぬは、奇ッ怪至極。

長九 師匠がそれぢやに依つて、その弟子の小夏、小勝まで、同じやうにぴんしやんと致し居るは、よく〱女子に好かれぬ質と相見えるわい。

兩人 ハヽヽヽ。
ト上手より小花出て來り

小花 オヽ、あなた方、お國元から、お飛脚がお出でなされました。

長九 して、その者は。

小花 待たせて置きました。

全八 爰へ呼んでくりやれ。

長九 併し、餘り人目に懸らぬやう。

小花 ハイ、畏まりました。
ト行きかけるを

長九 アヽ、コレ、一口呑ませてやりたいが、酒肴をこれへ、寄越しておくりやれ。

小花　畏まりました。
全八　成る程、それは好い所へお氣が付きました。
長九　その席へ、あの小勝と小夏を呼んではくれまいか。
全八　我れ〴〵と云はずに呼んでくりやれ。
小花　畏まりました。
ト上手へ入る。
長九　我れ〴〵へ内々の飛脚とは、蟻松どのより密事の御狀と相見えまする。
全八　如何にも左やうでござらう。密事の御狀と申せば、いつぞや若殿御出國の砌り、半七めが懷中して居つたあの密書。
長九　彼れが所持して居る時は、自然と他聞に洩れるは必定。取り得たいと存ずれど、荒立てゝは何かの妨げ。
全八　あの半七も、列に加へる手段が肝心。
長九　その儀は、彼れが親半六、典膳どのと同心にござれば、兎も角も相成りまするて。
全八　イヤ又、半六が悴には似合はぬ、堅苦しい事ばかり申して居るが。
長九　あれが所謂る、親の心子知らずでござらう。
ト上手にて小勝、小夏
勝夏　ハイ〳〵、お呼びなされましたは、どなたでござりまする。
ト何心なく出て來る。
長全　オヽ、呼びにやつたは、身共ぢや。
勝夏　ヤ、お前でござんすかいなア。
長九　如何にも。ちと話したい事があるが。
全八　なんと聞いてはくれまいか。
小勝　又てんがう云はしやんすか。
小夏　よしにして下さんせいなア。
ト行きかゝるを留めて
長九　イヤ〳〵、てんがうでない。最前も申す通り
全八　我れ〴〵が心に隨へば、浮み上がる穿鑿だ。其やうに野暮を云はずと
全長　應と云やれ〳〵。
ト小夏、小勝を捕へる。
夏勝　エヽ、爰放して下さんせいなア。
長全　どつこい、放してなるものか。
ト兩人を追ひ廻す。橋がゝりより飛脚、狀箱を首に掛けて出て來り、この中へ入る。小勝、小夏、上手へ逃げて入る。兩人飛脚を捕へて、悚りして

全八　ヤア、小勝か、小夏と思つたに。
長九　御身は、國元の飛脚だな。
飛脚　御兩所様、ありやなんでござりまする。
全八　イヤハヤ、面目次第もない。
飛脚　火急の密事の御狀、委細はこれに。
ト狀箱を長九郎に渡すと、手早く封を切り
長九　ナニ〳〵……一先達てより、度々申し送り候ふ名草劇齋儀、未だ此方へ發足の沙汰もこれなく、大殿の御容體、益々惡く候へば、日ならず當地へ歸國の儀、取計らひ然るべく候ふ。
全八　猶また劇齋老、此方へ到着いたし候はゞ、兼ねての謀議も早速、成就いたすべくと存じ候ふ間、吉稚君を日日に淫酒に増長させ、猶も殿に慣らせ、自滅させ候ふやう、くれ〴〵も御兩所の才覺を賴み入り候ふ……ムウ、劇齋老が發足あらば、早々大望成就とあるからは
長九　若殿を自滅さす手段が肝要。
全八　事の仔細を詳しく認め、鯖松どのまでお返事を。
飛脚　お早くお願ひ申しまする。
全八　オヽ、合點だ。
長九　最前、女どもに申しつけ置いたれば、下へ參つて、一口呑みやれ。
飛脚　それは御馳走。
全八　大儀であつた。
ト飛脚は橋がゝりへ入る。
さて斯うなつたら、今一應三勝を、呼びに遣はしたその上にて
長九　いよ〳〵參らぬその時は
全八　若宮小路の內へ仕掛けて
長九　まんまと首尾よう
全九　コレ。
ト制するを木の頭。
密かに〳〵。
トこの仕組みよろしく、騷ぎ唄にて道具ぶん廻す。
本舞臺、上手へ寄せて二間の障子屋體、向う床の間、前障子。下手、九尺の障子屋體、眞中、盡心に見せたる廊下、下手の屋體に屏風を立て廻し、誂らへの莨盆を枕元に置き、懷中物を取散らしたる儀、道具納まる。
ト內より屏風を明け、爰に源治、搔卷を着て、寝て居

たる心。矢ッ張り醉ひたるこなしにて手を叩く。廊下より仲居小花出て來り

小花　ハイ〳〵。

源治　オイ〳〵、大きな物に水を持つて來てくれ。

小花　畏まりました。

ト行かうとする。おくま、水呑みを盆の上へ乘せて持ち來り

くま　オッと、その水なら持つて來たわいなア。

小花　流石は、藪屋のおくまさん。

くま　お前が呼ばしやんすは、水であらうと思つて、この通り酌んで參りました。

源治　おくまか。有り難い〳〵。待て〳〵。久しくこんたに禮をせなんだ。

ト枕元の紙入れを取出して

ヤア。サア、無い〳〵。この中へ五兩入れてあつたが、一つ無しになつた。

くま　エヽ。そりや、ほんまの事でござりますか。

小花　ひよつと、お覺え違ひではござりませぬか。

源治　コリヤ、身共は武士だぞ。僞はりを申すやうな者だと思やアがるか。その上、あの小藤め、奥の一座へばかり行つて、宵から面出しもせぬ。呼べ〳〵。

くま　ハイ〳〵。モシ、小藤さん〳〵。

ト奥より小藤、出て來り

小藤　源さんでござんすかえ。

源治　ござんすかいねえものだ。子供ぢやアあるまいし、否がる者を抱いて寐るといふのではあるまいし、コレ、なぜ、おれが醉つたのを、介抱してくれうとはしねえで、奥の座敷ばかりに付いて、胸が惡いぞ。サア、料簡しねえ料簡しねえ。

小藤　そりやわたしも惡うござんしたが、據ないお客なり、お前がよう寐て居やしやんすゆゑ。

源治　コレ、よく寐て居るから金が五兩、今の間に無くなつたワ。

小藤　エヽ、そりやマア、どうして。

くま　サア、お手が鳴るゆゑ、來て見たら、お懷中物をお枕元に、取散らしてあつたわいなア。

小花　小藤さん、どうしたらようござんすえ。

源治　エヽ、亭主を呼べ〳〵。濟まねえぞ〳〵。

ト大きな聲にて云ふ。皆々なだめる。廊下より善吉走り出て來り

善吉　何事でござります。マア、お靜かになされて下さりませ。

くま　善吉どん、大變が出來たわいなア。

善吉　オヽ、源治さま、どう遊ばされました。

源治　ヤイ、おのれは今夜の寐ず番か。日頃から正直者でも、外に盜人があるに違ひねえ。たつた今、詮議して金を出せ。出しやうが遲いと、この屋體骨を安穩に置かねえぞ。

善吉　御尤もでござりまする。小藤さん、金は如何程でござります。

小藤　五兩ぢやと云はしやんすわいなア。

源治　金高は僅かでも、合點しねえ。亭主を呼べ〳〵。

善吉　お腹立ちは御尤もでござりまするが、その金の事なら、私しが行き屆かぬのでござります。

小藤　お前、覺えがござんすかえ。

善吉　ツイ、お心安立てに、其まゝにしたゆゑ、失うたと思し召したのでございませう。先刻、臺の物を下げた時、屏風の外に何もかも、取散らしてあつたゆゑ、一つ所へ纏めようとしたれば、お金入れより、お金がこぼれて居たから、お起し申しましたれど、よく寐てお出でなされましたから、また金入れへ入れてもどうかと、紙へ包んで私しの胴卷へ、しつかりとしまつて置きました。

源治　ナニ、すりや、其方が取散らしたるを、預かつて置いたと云ふのか。

善吉　左やうでござります。まだ帳場の勘定から、お客樣の預かり物、いろ〳〵金子を持つて居りますから……お待ちなされませ。

ト胴卷を出しかけ、こなしあつて

あなたのお金は、胴卷の奧へ入つて居りますから、金は外のでもよろしうござりまするか。

源治　エヽ、なんでも同じ事だ。

善吉　左やうなら、爰に帳場の預かりが

ト出して數へる。

小藤　ソレ見やしやんせ。七度尋ねて人を疑へと、わたしや今のやうに云はしやんしたので、今だに癪が治まらぬわいなア。

くま　ほんに、拾ひ手が善吉どんで、わたしらも仕合せであつたわいなア。

源治　誠に身共は穴にも入りたい。どうぞ堪忍してくれ。

小花　なんの、外のお客樣ではござりませず。

小藤　わたしや、實に愛想が盡きたわいなア。
源治　コレ、さう云つてくれちやア、いけめえでねえか。
ト善吉、五兩出して
善吉　五兩、慥かに、お受取り下さりませ。
源治　誠に面目ない。コレ／＼善吉、必らず今云つた事を、氣にかけてくりやるな。畢竟、只今のやうに申したも、ありやア酒だ。おれより酒が惡いのだ。ハヽヽ。
ト皆々へあやまる拍子に、水呑みの水、こぼす。
善吉　ソレ、水が溢れました。
くま　なんぞ拭くものを。
源治　オツと、爰に澤山仕込んである。先刻も茶を溢し、鼻紙を濡らしたゆゑ、莨盆へこの如く、乾かす爲に入れて置いた。
ト莨盆の火入れを出し、紙屑を摑み出す。小藤、これにて拭かうとして
小藤　待ちなんせ。この堅い物は、なんでござんすえ。
源治　ドレ／＼……ヤア、こりや金。オヽ、さうだ。思ひ出した。
善吉　エヽ、恟りしました。
小藤　何をそんなにうろたへなさる。
源治　これがうろたへずに居られるものか。最前、茶を呑まうとして、紙入れの上へぶちまけ、びしよ濡れになつたゆゑ、金入れを出して金を捻るまでは覺えて居たが、雜物を莨盆の上へ干して置いたと思つたが、それからは夢中……そんなら善吉が仕舞つて置いてくれたと云つたのは。
善吉　ヘエ、有やうは、一向に存じませぬのでございますか。
小藤　エヽ、そんなら覺えのない金を
くま　なんで又、仕舞つて置いたと、云はしやんしたのでござんすえ。
善吉　サア、源治さまへはお氣の毒でござりますが、申さねば理が聞えませぬ、一通りお聞きなされて下さりませ……私しが爰のお内へ、風呂焚きの奉公に參り、御膳焚きから若い者と、だん／＼出世いたしましたる、大恩のある御主人。今宵源治さまの金子が紛失いたしまして、亭主に逢はうとの御立腹。左やう致しまするると、お座敷を預かる私しが第一の麁相。主人にも迷惑が、かゝりや繋がる女中方まで疑ひを受け、世間へパツと知れますと、おのづとお客樣のお運びも遠くなり、主人の家名の汚れ

る事。いつそ人に知らさずに、私しが貰ひ溜めたので償へばと、思ひ定めて償ひましたのでござります。

皆々　エ、、、。

　ト皆々惘り。源治、善吉の下手に平伏し

源治　チエ、誤まつた／＼。善吉どの、誠に砂の中の玉とは御身が事。それに引替へ、如何に酒興の上なればとて、手前の麁相に人を疑ひ、剰へ、僅かな給金の其方に、償はせたる心穢なさ。斯やうな場所でなくば、切腹も致さねばならぬ誤まり。何卒、この儀はこれきりに、料簡の致しておくりやれ。

善吉　これはしたり、其やうに慇懃に仰しやつて下さりましては、私しの致し方がござりませぬ。あれへお出でなされませ。

源治　イヤ／＼、これでも過ぎる。なか／＼おてまへと同席のならぬ某。

　ト件の金を出し

さて、これは其方が償ひくれた五兩の金。これは又、失ひしと思うた手前が金。兩様とも受取つてくりやれ。

善吉　ア、、モシ、お立替へ申しましたお金は、お貰ひ申しますが、あなたのお金を、お貰ひ申さうやうがござりませぬ。

源治　サ、、おてまへの氣性ゆゑ、左やうには云はれうが、この五兩の金を心よう受けてくれねば、手前存生では居られぬ。例へ如何ほど包むとも、忽ち誰れ云ふとなく、金澤の藩中に、斯やうな侍ひが斯やう／＼と、直さま身が主人へ聞えれば、切腹は愚か、縛り首にもなる某。何卒、受け憎からうが、只今の麁忽を謝する爲、この金も故なく受納してくりやれ。

善源　どう致しまして、紛失いたした金子が出ますれば、私しの金も戻り、あなたのお心も晴れ、三方四方よいと申すもの。

源治　左やうある時は、手前、切腹いたさねばならぬ。

善吉　滅相な。其やうな事を。

源治　それなれば、受取つてくれるか。

善吉　ぢやと申して

源治　切腹さすか。

兩人　サア／＼／＼。

源治　どうぞ、納めて下されと云ふに。

善吉　此やうに困つた事はござりませぬ。

小藤　善吉どん、主の云はしやんすも尤もなれば、不肖で

あらうが、貰うて上げて下さんせいなア。
善吉 でも、大枚のこのお金、お貰ひ申すいはれが
小藤 ござんすわいなア。
善吉 エヽ。
小藤 サア、いつぞやから源治さんが、お前を頼んで、わたしの事を、いろ〳〵云うて下さんしたれど、怖らしいお方ぢやと思うて、これまで素氣なう云うたれど、今お前に詫びなさんす、そのお心にほだされて
源治 ヤア、そんなら、焦れて居たアノ身共の心に
小藤 從はいでよいものかいなア。
ト寄り添ふ。
源治 エヽ、忝ない。これと云ふも、結ぶの神の善吉大明神、これだ〳〵。
くま ほんにマア、正直なお方々ゆゑ、わたしらまで仕合せをしましたわいなア。
源治 サア、善吉。小藤さへ手に入らば、これしきの金どころか、しつかりと禮をせねばならぬわい。
小藤 不肖であらうが善吉どん。
皆々 お貰ひ申して置かしやんせいなア。
善吉 こりやマア、なんとも申しやうがござりませぬ。源治さま、小藤さま、有り難う存じまする。
くま 僅かな物の間違ひから、事起つたが緣となり
小花 日頃兎や角云はしやんした、小藤さんがお手に入り
源治 これが世に云ふ過ちの功名。
小藤 元の起りは善吉どん、一生恩に着るわいなア。
善吉 滅相な。私しこそお世話になりました、お禮は詞に。
くま 盡きぬ緣はお二人さん
善吉 今宵はしつぽり
小藤 エヽ。
善吉 御ゆつくりお休みなさりませ。
ト前づらの障子を立て切る。
此やうに澤山、わしばかり貰うては濟まぬ。お前方にも分けて上げねば。
くま ア、滅相な。その金をわたしらが、貰うてよいものかいなア。
善吉 それだと云つて
小花 モシ、それよりはナ……ソレ、最前の。
くま オヽ、ほんに善吉どん、お前また腹を立てなさんすか知らぬが、藝子のおさきさんが、それは〳〵、いつぞ

やからのお頼み。どうぞ讀んで見て上げて下さんせ。
善吉　又わしをなぶりなさる。モウ〳〵堪忍して下さりませ。
ト廊下よりおなべ、小夏、小傘、小勝出かゝり居て
なべ　おくまさん、その事なら、わたしらが先役ぢやぞえ。
小夏　わたしとても、善吉さんが奉公に來なさんした時から、この小傘さんに頼まれて。
なべ　わたしも小勝さんに取持つて上げようと、請合うたら、甲が舍利になつたとて
くま　イエ、外のお方の云ふ事を聞かしやんす位なら
はな　今の事なア、おくまさん。
小勝　わたしが願ひを
小傘　どうぞ叶へて下さんせいなア。
善吉　これはしたり、冗談かと思うたら、ほんまに目に角立て……モシ、實は國元に伯母の娘と、從妹合せの女房がござりまする。山猿のやうな女でも、一旦約束したからは、女も男も外心出しては、今日樣へ濟みませぬ。殊にはお前樣方は、お歴々樣方のお側へ上がつて、どのやうな御出世をなされうも知れぬお身。又この内で其やうな、みだらがあつたとござりましては、大恩受けた旦那樣の渡世にもかゝはり、濟みませぬ程に、この後フッツリと、其やうな事は、どうぞ御免なされて下さりませ。
皆々　それではあんまり。
ト廊下より白眉の長、細帶形、茶屋の亭主の拵らへにて、莨盆を提げ出て來り
白眉　もう、よし〳〵。大儀であつた。
皆々　ヤア、いつの間にやら旦那さん。
白眉　部屋へ行つて休みやれ。
皆々　そんなら奥へ。
白眉　サア、行つた〳〵。
ト女形、皆々奥へ入る。
善吉、ちよつと爰へ來やれ……最前の一部始終、隣り座敷で殘らず聞き、涙で袖をグッスリ濡らした。さてもさても世の中に、こなたのやうな主思ひな、正直者が又とあらうか。大勢の奉公人ゆゑ、さう、つど〳〵に構ひもせぬものを、内外の失費から、事細かに心を附け、剰さへ、家の名前へ疵を附けまいと、自分の金を出して償ふとは、なま若いにこんな商賣の内に居る者ゆゑ、たしかまらうと思ふても、堪忍ならぬは女の事。有やうは今の

手合ひは、貴樣の心を引いて見ようと、おれが云ひ付けて口說かせた譯。それとても受けつけぬ心底。疾から國へ歸りたいと、暇を願つて居れど、こなたに暇を取られてはと、無理無體に延ばしたなれど、今宵の始末を見て、誠に臍がでんぐり返つた。如何にも其方が願ひの通り暇をやる。これまでの給金外に、金五十兩、貴樣に遣る……ハテ、行く〳〵は別家でもさせようと思つた事なれば、五十兩が百兩でも惜しくはねえ。どうぞ少くとも、國へ土產にして下さい。

ト金包み二つ出す。善吉、思ひ入れあつて

善吉　勿體ない。何一つ仕出かした事もない私しに、お給金の外、大枚のお金をお貰ひ申しては、冥加の程が恐ろしうござりまする。こればつかりは。

白眉　ハテ、こんたも親の代までは、村役も勤めたを、不仕合せゆゑの奉公と聞いたから、田の一反でも餘計に買ひ戻したなら、死んだ親達や、又は世間への肩身も廣からうと思つてのこの餞別。また女房や女どもも、貴樣がいよ〳〵國へ立つと云へば、それ〴〵に餞別せにやあならぬと云つて居たに、おれがこれしきの事、否應なしに納めて下せえ。

善吉　有り難う存じまする。實に淚が溢れます。それ程にまで思し召して下さりまする、お志しばかりで、この金子はお貰ひ申したも同然でござりまする。

白眉　コレサ、おれの氣性を知らぬか。それぢやア深切を無にするといふもの……サ、、そんな事云はずに、受納して下せえ。

善吉　御辭退申さば、却つてお心に違ふやうなもの。有り難う頂戴いたしまする。仰せの通り不仕合せゆゑのこの奉公、僅かな間にお客樣方よりお貰ひ申したお金から、お給金を合せて、六十金程も頂戴いたしました。これと申すも御主人樣の皆お庇。ところへ又五十兩頂戴いたしますれば、合せて丁度百兩餘りのお金。國元にて失ひました、田地田畑を買ひ戻し、故鄕へ飾るは錦より、御主人樣の七光り、やがて改めこのお禮に。

白眉　イヤ、兩親の年忌を弔らひ、田地を買ひ戻し、人に預けてその伯母や、女房を連れて、この近所へ世帶を持ち、此方の内を切り廻はしてくれたら、キッとした給金は遣らうし、又お客樣方もお主が事だから、惡うもさつしやるまい。おりやアお主に別れる事は、どうもならぬ。どうぞ直さま下つて來てくれ。コレ、手を下げて賴むわ

いなう。

善吉　取り所もない私しを、其やうに仰しやつて下さりますれば、一先づ國へ立歸り、私の用事を調へ次第、又ぞろ御厄介になりに參ります程に、お召使ひなされて下さりませ。

白眉　エヽ、忝ない。そんなら女房にも聞かせて、安心させてやらう。

善吉　左やうなら私しも、おかみさんにお暇乞ひを

白眉　これまでの返禮に、立振舞ひも賑やかに

善吉　イエ、其やうになされて下さりますと、實に涙が溢れまする。

白眉　イヤサ、おれも今まで、多くの奉公人も使つたなれど、貴樣のやうな實體な者があらうか。そんなら今夜はゆつくりと。

善吉　支度をして一先づ國へ。

白眉　歸るにしても、また來る折に

善吉　飾る錦は故郷へ曠れ、又來る春の花のお目見得。

白眉　オヽ、それが肝心、隨分無事で

善吉　僅かなうちに國元まで

白眉　長の道中氣を付けて。

善吉　左やうなれば、旦那様。

白眉　おれと一緒に

善吉　マア、お出でなされませ。

ト唄になり、善吉、白眉に付き添ひ入る。障子を引きぬく。爰に源治、小藤、蒲團の上に掻卷を着て、小藤煙草を吸ひつけて居る。道具納まる。

小藤　マア、一服呑みなさんせいなア。

源治　有り難い〳〵……ア、今日は如何なる吉日なれば、酒の相手をするさへも、いゝ顔した事のねえお主が、フトした事の張合ひで、斯うした譯になるといふは、こりやマア、夢ぢやねえか知らぬ。

小藤　今までお前の心を疑うて居たけれど、今日心も知れたに依つて、此やうな嬉しい事はないわいなア。その嬉しいにつけ、悲しいにつけ、思ひ出すのは兩親の事。

源治　さうよ。親ほど有り難いものはねえ。

小藤　お前は、兩親とも達者で居やしやんすかえ。

源治　達者どころか、ぴん〳〵して居る。

小藤　そりやマア、羨しい事でござんすなア。わたしなどは幼ない時にかどわかされ、ろく〳〵お顔も知らぬわいなア。

源治　して、お主の生れ故郷は。

小藤　恥かしい事なれど、故郷も親達の名も、知らぬわいなア。

源治　併し、何か印がありさうなものだが。

小藤　只幼ない時に、帶に付けたるこの守り袋。中にはこの守よりござんせぬわいなア。

ト守り袋の中より守を出す。

源治　この中に書付けのやうな物はないかえ。

小藤　その中は明けて見ぬわいなア。

源治　産神の守としてあれど、大方この中に、慥かな證據でもあらうわい。

小藤　わたしや又、勿體ない物ぢやと思うて居たゆゑに。

源治　ドレ〳〵。

ト封を切り

ナニ、江州多賀の神社……そんならお主の生れは、江州の多賀といふ所ぢや。

小藤　さうして、江州とやらは、どちらの方でござんすえ。

源治　爰から江州までは、百里餘りの道だが、そこへ行つて樣子を聞いたら、知れねえ事もあるめえ。

小藤　嬉しや〳〵。と云うて、今は勤めの身、わたしの體は自由にならず。

源治　イヤ、そりや抱へ主へ渡つて、お主の身の代を突いて、親達に逢はしてやるから、さう思つて居さつしやれ。

小藤　エヽ、嬉しうござんすわいなア。

ト廊下より若い者喜助出て來たり

喜助　源治さま、お屋敷からお迎ひが參じました。

源治　そりやア大變だ。小藤、おらア歸らにやならねえ。いづれ明日來て、詳しい相談をしよう。

小藤　喜助どん、お履物を。

喜助　畏まりました。

ト入る。

小藤　お前、忘れ物はござんせぬかえ。

源治　大小は下に預けてあるし、何も忘れた物はねえ。

小藤　そんなら明日、待つて居るぞえ。

源治　承知だ。

ト流行り唄になり、源治、小藤、橋がゝりへ入る。この仕組みよろしく、騒ぎ唄にて道具廻る。

本舞臺、二間中足、大和葺きの亭屋臺。向う鼠壁、茶立て口。上の方、中窓に庇付き。この前に石燈籠、下草のあしらひ、下手、建仁寺垣、いつもの所、枝折り戸、二重に夜具を敷き、屏風を疊み置き、爰に新十郎、羽織、袴にて煙草盆を控へ居る。平舞臺に三太郎、町人の拵らへにて、帳面を控へ、合ひ方にて道具納まる。

新十　すりや、おてまへが、この家の者でござるか。

三太　ヘイ、私しは貸物屋でござりますが、この座敷の諸道具を、先達て上方あたりから、殿樣のお供でお出でなされました、赤根半七さまと仰しやるお方が、御病氣にてこの座敷をお借りなされましたが、最早御全快なされ、明日は殿樣の方へお出でなさるゝについて、諸道具を受取りに參り、調べて居りまするのでござりまする。

新十　すりや、いよ〳〵半七には、病氣でお居やつたとな。

三太　御病氣も、瘧の重いのでござりましたが、やうやう御全快になりまして、只今入湯にお出でなされましたが、もうお歸りでござりませう。

新十　これはハヤ、おてまへの厄介になりました。

ト橋がゝりより半七、五十日鬘、着流し、大小にて、手拭を持ち、庭下駄にて出て來り

半七　ヤレ〳〵、貸物屋どの、長湯いたして、さぞ待ち遠にござつたの。

三太　イエ、私しはよろしうござりまするが、お客樣がお出でなされました。

半七　ナニ、お客樣が。

新十　イヤ、半七どの、厚倉新十郎でござる。

半七　これは〳〵、思ひがけない。いつお下りでござりましたか。手前、當所へ着いたしまするると、煩らひつき、一向に存じませいで、失禮の段、眞平御免下さりませい。

新十　イヤ、手前事は、極く密々にて下りましたれば、存じた者は一人もござらぬ。

半七　ナニ、密々とは、何ゆゑで。

ト云ひさして三太郎の方を見返る。

三太　何か御遠慮なお話しと見えます。私しは又、後方に上がりませう。

新十　氣の毒ながら、左やう致してもらひたうござる。

三太　左やうなればお客樣、お緩りとなさりませ。

ト橋がゝりへ入る。

半七　して、密々の仔細は。

新十　先達て若殿、當地へお下りなされてより、おてまへを始め、布施今市の名前を以て、國元へ度々御用金を申し越さるゝを、大殿深く怪しまれ、聞者を以て糺せしところ、若殿には以ての外なる、御行跡と申し上げたるゆゑ、殊の外なる御立腹。半七を乳人役に申し遣はしたるに、彼れを始め、諫言を申さず、共に踊り狂ふ憎くい奴、汝參つて見屆けた上、主從とも引立てゝ、歸國いたせと嚴しき御諚。當地へ着し、密かに其許を呼び出し、仔細を吟味せんと思ひしところ、到着の翌日より、この所に病氣養生なすと承はり、わざ〳〵尋ね參つた仕合せ。

半七　すりや、お國元へ御用金を……フム、それにて思ひ當つた事がござりまする。人別の印鑑が要る程に、手前の實印を渡すやうにと、差上げたまゝ、今以て戻さぬは、皆兩人が企みし事と存じまする。平常より油斷ならざる方々と、心を配りお供なせしに、某がお側に居らぬを幸ひ、若殿を勸め込み、面々の放蕩に、某が印鑑まで、取上げるとは言語道斷の兩人。その分に差措かうか。

新十　サ、、立腹はさる事ながら、某が引立て立歸れば、殿には手づから首を刎ねずば、鎌倉より御沙汰あらば家門の滅亡と、御親子の愛情をも捨てゝござれど、右の連書に印鑑は据りあれど、おてまへの手蹟なきゆゑ、申し譯いたす便りあり。また親子を和合に致す計略もござれど、誰れあつてこの事ばかりは。

半七　それは如何なる儀でござるか。手前、身不肖なれども、殿のお見出だしにあづかりし自分。切腹いたしてなりと、御親子の御仲、取結ばるゝ事にござらば、何卒、手前へ仰せつけられて下さりませう。

新十　ナニサマ。左やう思はるゝは尤もながら、不忠不義の汚名をいとうては、勤まらぬ計略。

半七　ナニ、不忠不義の汚名を取るとは。

新十　若殿が淫酒に心を亂されし、元はと云へば、當所の舞子、笠屋の三勝。さま〳〵と申し入るれど、その者承引なきゆゑ、人に人をかけての入用金と承はる。それゆゑ今宵にも三勝を奪ひ、何國の果へも連れ參つて、影を隱す者あらば、某が若殿の御供なし、大殿へは全くは若殿の御放埒ならず、若殿の御名を騙つて、誰れ〳〵が金子をこもうなし、三勝と申す舞子を纒ひ慕ひ、遂に女を連れて逐電いたし候ふと申し上げれば、若殿の身は潔

白に晴れる道理。左やういたして若殿の御代にならば、誠は彼れが忠臣にて、御親子めでたく和熟なりしと披露なし、再び家を興す 某が胸中。なんと、これより外に手段はござるまいがな。

半七　ホヽウ。天晴れ御計略。その不忠者に拙者が罷りなりませう。養ひ君の御誤まり、身に引受けるは臣下の常。不便ながらも、その女に、義の爲と云ひ聞かせ、刺殺なして 某は、所を替へて切腹なさん。

新十　ア、イヤ、そりや一途の料簡。三勝とやらも、何條殺すに及ぶべき。其許が妻女となし、隠れ忍んで彼の一品の詮議仕出し、再勤の時を待つが武士の本意。また彼れに親ありと承はりしゆゑ、その者へは三勝が身の代を與へ、老を養ふ方便は、手前が胸にござるぢやに依つて、必らずともに短慮な事は。

半七　イヤ、その儀は某、幼少の砌りより、云ひ號けの妻あつて、未だに生死も知れざれば、婦妻とは思ひも依らず。左やうな事は兎も角も、これより參つて、女が住家を聞き糺し、今宵のうちに。

新十　ホヽウ、それにて身共も安心いたした……さりながら、くれ〴〵も短氣を出さず、流浪のうちにも心を附けて

半七　紛失なしたる北辰の尊像。

新十　身を粉にしても詮議が肝要。

半七　先づそれまでは、御堅勝で

新十　其許にも身を大切に

半七　只この上は、若殿の御身の納まり、くれ〴〵も

新十　氣遣ひあるな。今宵密かに 某が御供なし、直さま御歸國いたし申さん。

半七　左やうござらば厚倉氏。

新十　いづれ、其うち。

半七　父半六が行く末も。

新十　それも、合點。

半七　やがて吉左右

新十　相待ち申す。

ト新十郎、足早に向うへ入る。

半七　ア、思ひがけない若殿の御身持ち。病氣ゆゑとは云ひながら、心付かざる我が落度。それにつけても、科なき女を、殺すも義理と忠義の刃。

ト刀の目釘をしめし

思案の極意は

ト拔き放して、ヂツと見て

これおやわい。

ト鞘へ納める。この仕組みよろしく、好みの鳴り物にて道具ぶん廻す。

本舞臺、三間、常足の屋臺。向う茶壁、納戸口、押入れ、上の方、一間の障子屋臺、いつもの所、門口。下手、腰障子、これに大きなる柏の紋を書き、笠屋と書いてあり、爰に、笠屋平三郎、飯を喰つて居る。側に三勝、他所行きの形にて鏡臺に向ひ、髮を撫でつけて居る。流行り唄にて道具納まる。

平三　ヤレ〳〵、急いで行つて來たら、素敵に飯が入つた。

三勝　お前も子供を皆連れて、戻つて行きなさんすりやよいに。

平三　それでは、あんまり愛想がないゆゑ、小夏と小勝だけは、座敷が引け次第、送らせて寄越す積りにして來た。

三勝　なんのマア、始めて呼ばれた時から、あの今市、布施といふ憎體な侍ひが、嫌らしい事ばかり云うて、あのやうな辛い座敷は無かつたわいなア。

平三　サア、それも先刻斷わりに行つたれば、金の山を築くのなんのと吐かし居つたゆゑ、此方の三勝は、男の肌は觸れませぬと云うてのけた。あゝいふ侍ひを抱へて置く、主人の顏が見たい。

三勝　それに引替へ、今宵上がる扇ヶ谷のお屋敷は、殿達ばかりなれど、てんがう一つ仰しやらぬ。あれが誠の侍ひでござんせうわいなア。

ト鏡を片附ける。向うより、折敷に橘の紋つきたる箱提灯を灯し、和五平、中間にて出る。跡より全八郎、長九郎、尻端折り、頰冠りにてつけて出て來る。

和五　跡の番太郎で聞いて來たが、慥か笠屋と書いた障子が建てゝある内が……オヽ、あそこだ〳〵。

ト舞臺へ來る。兩人も窺ひながら、付いて來る。

ハイ、御免なさい。笠屋三勝さまと仰しやりますは。

平三　ハイ、こちらでござります。

ト提灯の紋を見て

オヽ、お前は扇ヶ谷のお屋敷から。

和五　ハイ、左やうでござりまする。役人衆には、提灯が目印ゆゑ、私し一人で參つても、胡亂には思し召さぬか

ら、直ぐに横町の駕籠屋へ云ひつけろと申されました。

平三　それはマア、御苦労さまでござりました。

三勝　もうお迎ひの時分ぢやと、お待ち申して居りました。

和五　さうでござりましたか。さうして今宵は、衣裳、葛籠には、及ばぬとの事でござりました。

平三　ヤレ〳〵、それは、わしが助かりだ。

和五　ドレ、私しは、駕籠を申しつけて参りませう。

ト橋がゝりへ入る。長九郎、全八郎両人、囁きながら跡を追ひ駈け入る。

平三　最前、行きがけに、里親の所へ、お通の顔を見に寄つたら、可愛い奴ぢやないか、跡追うて泣き居つたわえ。

三勝　ほんに、着物にする裂れを、退けて置いてござんした。

平三　エヽ、また明日でも持つて行つて、顔見て来るわい。

ト長九郎は和五平の紺看板と着替へ、件の提灯を持ち、後より駕籠舁き二人、四つ手駕籠を舁げ、この後より全八郎、頬冠りして出て、駕籠舁きに囁く。

長九　ハイ、駕籠を申しつけて参りました。

平三　それは御苦労でござりました。

三勝　そんなら父さん、行て来るぞえ。

平三　何も忘れたものはないか。

三勝　よいわいなア。皆さん、御苦労でござんす。

駕籠　サア、お召しなされませ。

ト三勝、駕籠に乗る。

平三　お前様、お願ひ申します。

長九　ハイ、左やうなら……急いでやつて下せえ。

駕籠　合點でござります。

ト長九郎先に、全八郎、後棒を押して、向うへ走り入る。

平三　縁といふものは味なものだ。いつぞや奈良で赤根半六に頼まれ、熊の皮を冠つて、あのおさんを引ッ滾ひ、譯を話して、身持ちで居るを、この鎌倉へ連れて来て、産み落さして里に預け、三勝と名を變へて舞を教へたところ、繁昌して、なに不自由なく斯うして居るも、皆三勝がお庇。成る程、人の行く末は解らぬものだやなア。

ト橋がゝりより、和五平、散らし髪、眞裸、血にまぶれて出て来り

和五　ハイ、お願ひ申します〳〵。

平三　どなたか、お入りなさい。

和五　ハイ、私しでござります。

　ト門口を明け。

扇ケ谷の屋敷から、使ひに參つた者でござりするが、いま駕籠を云ひつけに、そこらまで行くと、後から侍ひが來て、髮を摑んで、脾腹を蹴り上げたゆゑ、聲も立てられず前へのめつたら、わしが着物を引ッ剝いで、提灯を持つて、どつちへか行つてしまひました。

平三　そんなら初手に三勝を迎ひに來たは、いよ／＼お前か。

和五　ヘイ。

平三　ムウ、さては藪屋の二人の侍ひ、遠くは行くまい。ソレ。

　ト押入れより、一本差しを出し、ツカ／＼と門口へ出る。

和五　モシ、わしに着物を。

平三　エヽ、それどころぢやござらぬわえ。

　ト振り拂ふ。これにて、見事に返る。平三郎は、向うへ走り入る。この仕組みよろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、常足、通しの土手、上の方、土橋、この下蘆間の土手板、正面、松並木の道具幕、この前、玉椿の垣、柳の立ち樹、同じく吊り枝、爰に長九郎、全八郎、立ちかゝり、四つ手駕籠を下ろし、足平、鷹平、駕籠屋にて汗を拭いて居る。禪のツトメにて道具納まる。

全八　ヤレ／＼、爰まで、一息に來たので、がつかり致した。

長九　手前は又着つけぬ着物を着て、なんだかむづ／＼と氣味が惡うござる。

足平　空身でさへ、それだもの、若宮から、小動まで、駈けて來た、おいら達は、どうしたものだ。

鷹平　足平、馬鹿云ふな。まだこの上に、何もかも賴むと云はつしやるから、御如才があるものか。

全八　コレサ、わいらの骨を盜んで、何を致さう。

長九　しつかりと禮をするわい。

鷹平　そいつを力に、片瀨まで走るべいか。

足平　やッつけろ。

　トばた／＼にて、向うより、平三郎走り出で來り

平三　この駕籠待つた。

全八　ヤア、わりや、笠屋平三郎だな。
平三　オヽ、娘を渡して、消えてなくなれ。
長九　叩きしめろ。
足駈　合點だ。
ト打つてかゝるを、見事に投げる。全八郎、長九郎、刀を抜き、立廻りある。上手より半七、頬冠り、尻端折りにて出かゝり窺ふ。
長九　全八どの、御身は三勝を。
全八　オヽ、三勝は、おれが斯うして。
ト駕籠の垂れを上げる。猿轡、扱帶にて縛られし三勝を引き出す。半七は全八郎を掻きのけ三勝を捕へる。全八郎は平三郎と心得、掴みつくを、半七、捻ぢ上げる。
アイタヽヽヽヽ、長九郎どの、平三めか邪魔をして
長九　ナニ、平三は爰に居る。同士討ちするな。
足平　なんでも構はぬ。
ト半七へ打つてかゝるを、土橋の下へ投げ込み、平三郎は駈平を切り下げる。
駈平　ヤア、切つた／＼。
全八　エヽ、眞暗で。

ト立廻はる。足平は、泥にまぶれて這ひ上がり、全八郎に抱きつく。間違ひの立廻り。半七は三勝を引ツ抱へ、長九郎を投げ返し、土橋を渡つて、上手へ走り入る。平三郎は、全八郎、長九郎と立廻り、トヾ、兩人は、橋がゝりへ逃げて入る。駈平、組みつくを、身を交し。足平の上へ乘つかゝるを、上よりグツと刀を貫く。この見得よろしく、この道具ぶん廻す。
本舞臺、眞中に三尺四方の破れたる庚申塚、上下、禿げ山の張り物、この後、杉の立ち樹、柳の大樹、空より同じく吊り枝、向う黑幕、下手に相州白澤越と記せし榜示杭、爰に、半七、白刃を振り上げ、下手に三勝これを支へ居る。山颪し、凄き合ひ方にて道具納まる。
三勝　マア／＼、待つて下さんせ。命はさら／＼惜しまねど、殺される覺えはないわいなア。
半七　その嘆きは尤もながら、お主の大事には替へられぬ。忠義の爲に刃にかゝり、命を捨つるも前生の、約束事と諦らめて、どうぞ命を、身共におくりやれ。
三勝　忠義の爲に殺すのなりや、覺悟極めて死ぬ程に、た

つた一言斯ういふ譯と、樣子を聞かせて下さんせいなア。

半七　イカサマ、事の仔細を申さずに、討ち果さんと致せしは、心急くゆゑ。某が誤まり。今申す事よく聞きやれ……この度、身共が主君、御保養の爲鎌倉へ、お下りなされしその日より、某は癪の病に御前を恐れ、養生の其うちに、奸佞、邪慾の者どもが、若殿に淫酒を進め、其方を囮に御用金をこもうなすを、お國元には御存じなく、皆若殿の科なりと、大殿の御立腹。他家へ聞えも武門の恥、手討になすとの御上意ゆゑ、某が不忠者となり、三勝と申す舞妓と密通なし、行くへ知れずと申し上げ、主人の罪をこの身に引請け、御親子和合を取結ばんとの心遣ひ。緣ゆかりなき其方を、忠義なりとて討ち捨つるは、無道人とも思はんが、汝一人の命にて、一國の騷亂も治まる道理。また親の半三には、それとも知らさず養育金は、我が朋友より貰ふ契約。不便ながらも忠義の太刀風、彌陀の利劍と觀念し、迷はず成佛してくりやれ。

ト三勝思ひ入れあつて

三勝　忠義の爲と一筋に、思ひ詰めてのその詞、なんの命を惜しみませうぞいなア。

半七　ホヽ、女ながらも天晴れ覺悟。云ひ置く事があるならば、心靜かに申し聞かせよ。

三勝　いま云はしやんした半三と云ふは、わたしの實の父さんならず、もと私しは、鎌倉の武家に育ち、三つの年に母さんに別れ、その跡慕うて都に上る、途中にて父さんは斧に討たれて敢へなき御最期、便りなき身を、仇ある人に養育されて人となり、その又父に疎まれて、殺してくれいと頼まれた、半三どのの情にて、命助かり世を送るも、云ひ號けした夫に逢ひ、果敢ない女子の手一つにて、夫の胤を養育せし、艱難を語りたさ。里に預けて置くうちも、男嫌ひと云ひ觸らし、夜の目も合はぬ心遣ひ、涙の雨の絶間なく、笠屋三勝が身の果てを、夫に聞かせてたつた一言、うい奴ぢやと云うてもらふが、千萬の經陀羅尼より、この身の手向け。サア、云ひ置く事はこれ限り。とても逢はれぬ命なりや、忠義のお役に立ちませうわいなア。

ト半七、合點のゆかぬこなしあつて

半七　孫子に稀れなる孝心苦節、殊に今の詞の端々。もしや其方の幼な名は、おさんとは云はざりしや。

三勝　エヽ、それをどうして。

ト寄らうとして、白刃を見て

アレエ。

ト飛び退く、本釣り鐘を打ち込み、空より半月を下ろす。

半七　サヽ、紛ふ方なき幼な顏。

三勝　疑ひもなき半七さん

半七　女房おさんでありつるか。

三勝　焦れ／＼てこの年月

半七　尋ね求めし甲斐あつて、巡り逢ふのも盡きぬ奇緣。

三勝　逢ひたかつた／＼わいなア。

半七　オヽ、尤もぢや。さりながら、存命なりし事の仔細を、これまで我れに知らさゞりしは、父と一つと恨みしゆゑか。

三勝　なんのマア、勿體ない。恨めしう思ふ心なら、文狀筆にて云はんなれど、事の仔細を云ふ時は、舅御さまの惡企みを、知らす程の淺はかでは、父の讒奏云ひ觸らし、夫に恥を與ふる女と、思し召すも恥かしく、嬰兒を形見と大切に、養育なして今日が日まで、蟲腹一つ病ませぬも、逢うて褒められたいが身の願ひ。モシ、御推量なされて下さりませいなア。

半七　すりや、別れたるその砌り、懷妊にてありつるが、人の情にて出產なし、この年月の養育せしか。それにつけても賴もしきは笠屋平三、以前は如何なる者なりしか。

三勝　元より賤しい世渡りなれど、金銀に心を寄せず、仁心厚き人なれば、我が子の事には氣遣ひなし。サア、この上は、わたしを殺して、お前の忠義を。

半七　イヤ、さほど貞節なる其方を、殺すと云ふは義に違へり。其方は平三どのに身の上を賴み、娘が行く末見屆けよ。死すべきは某一人。

ト刀に手をかける。

三勝　コレ、お前は氣ばし違うてか。忠義の爲に身を殺さば、なぜ諸ともに死ねとは云うて下さんせぬ。わたしと死ぬるが、それ程までに嫌ならば、覺悟極めしこの身を先へ。

半七　ヤレ待て、早まるまいぞ。

三勝　そんなら一先づ爰を落ちて、お前も長らへて。

半七　イヽヤ、武士が一旦誓ひし詞、長らへて道が立たうか。

三勝　そんならどうぞ、わたしも共に。

半七　それおやと云うて。
三勝　そんなら落ちて下さんすか。
半七　サア、それは。
兩人　サア〳〵〳〵。
三勝　モシ、よう思案をして下さんせいなア。
半七　ナニサマ、我れながら早まつたり。殿の御内意蒙むりし、お家の守護神北辰の尊像、詮議をなして差上ぐるも忠義の一つ。密かにこの地を立退いて、一日なりとも妻と呼び
三勝　夫と云うて愛し子の、お通に父と知らしたら、さぞや喜び慕ふであらうと、思へば今さら死にともない。
半七　然らばこれより里親の、家へ立越え僞はつて
三勝　お通を連れ出し、知る邊の方へ。
半七　夜更けぬうちに
三勝　ちつとも早う。
　ト足平窺ひ出て
足平　慥かに三勝。
　トかゝるを
半七　エヽ、命冥加な
　ト投げるのが、木の頭にて
三勝、來やれ。
　ト兩人、氣味合ひ、この仕組みよろしく、
　　　　　　　ひやうし幕

四幕目

野上宿屋の場
淨瑠璃夢の場

淨瑠璃一邯鄲一常磐津連中

役名——赤根半七。同女房三勝。同娘、お通。笠松平三郎。道具屋利助。厚倉新十郎。若薫、治郎平。布施長九郎。雲助、關の孫六。同、東院の友次。盜賊、佐栗宇太郎。下女、おまつ。木曾のおろく。仕丁、五郎又。賤の女、おみつ。貝屋善吉。

本舞臺、向う、並木松の道具幕。所々に松の立ち樹下手へ寄せて稻村、掛け稻、六地藏を据ゑて、上の方、一里塚。爰に伊勢參り、順禮及び旅人二人、笠を敷き、煙草をのんで居る。大坂離れての唄にて幕明く。

順禮　おいらは、大坂に親類も近附きもたんとあれど、何

所の内でも世話をしてくれぬか、お觸れでも廻つたかしらん。
旅一　お觸れが廻らなくつても、どうせ碌な事をして來るのでもねえと思ふからサ。
旅二　順禮どのは、どうだえ。
順禮　わしは、下總の潮來でござりますが、夫婦約束した女郎めが、大坂の新町へ鞍替して行つたから、それを尋ねて參りましたが、大坂は決して座敷で話しをさせねえ。
旅一　ホヽ、そんな事があるものか。
旅二　そりやア、お前が間拔けだからだらう。
順禮　どうかさうと見え、隣り座敷で、都々逸を唄つて居ました。
伊勢　なんと云ふ唄だえ。
順禮　大坂屋敷で話しはならぬ、いたこ間拔けの心意氣。
三人　何を云はつしやる。
伊勢　何にしろもう、日が暮れるだらう。
順禮　そろ〳〵、巣を作りやせうか。
四人　それがいゝ〳〵。
ト支度する。向うより平三郎、油紙へ目鼻の切り拔いたるを顔に當て、そぼろなる拵らへ、脚絆にて、風呂敷包みを背負ひ、三味線をかたげ、淨瑠璃を鼻唄にして出て來り。
平三　オイ〳〵、お前方は、何所へ泊るのだ。
順禮　何所と云つて、おいらや、こなさんのやうな者の泊る内は、野上の宿にやア、たつた一軒しきやない。
旅一　松山與惣と云ふ、とつつきの内よ。
旅二　コレ〳〵、あそこの内は、大名衆でも泊るぢやねえか。
順禮　それも、あそこの亭主は心願とやらで、どんな物貰ひでも、木賃で泊めてくれるとサ。
平三　イヤ、そいつは奇妙だ。上段の間を取り、貸切りの合ひ宿は能りならぬと、むづかしい事を云つてくれべいか。
伊勢　ハヽヽヽ、おいら達の寐る所は、別段離れて、薄穢ない所よ。
四人　虫のいゝ事を云ふ男だ。
平三　そんなら、宿の内を稼いでから行から。
四人　そんなら、後からござれ。
ト橋がゝりへ入る。

平三　イヤ、氣散じな手合ひだ。併し氣散じでねえのは、おれだわえ。三勝の似せ迎ひを追ひ驅けて、小磯の橋で取戻さうとして、むざんこに引ッこ拔いて、叩き散らすはずみに、二人ばかり手ごたへして殺したゆゑ、もう內へも戻られず、孫のお通を里にやつた先へ行つて、急に遠方へ行くと云ひ殘し、その場から姿を變へ、こんな物で顏を隱して、足手に任せ、三勝が行くへを尋ねて歩けど、今以て手がゝりもなし。アヽ、さぞや今頃は、困つて居るであらう。可哀さうな事をしたなア……ドレ、村の內を、ちつとんばかり稼いで、塒につからうか。

ト上手へ入る。向うより若黨治郎平、中間、柿の脚絆に、釣り竿、魚籃をかたげ、出て來る。後より長九郎非人の形にて附いて出て來り。

長九　旦那樣、御合力をお願ひ申しまする／＼。

治郎　アヽ、附くな／＼。

長九　お願ひ申します／＼。

ト舞臺へ附いて來り

長々の煩らひに、難澁な者でござります。御一錢お願ひ申します／＼。

治郎　エヽ、附くなと申すに。

中間　うるさい、どう乞食めが。

治郎　ヤ、あなたは布施長九郎さまではござりませぬか。

長九　ムヽ、さう云ふは、若黨の治郎平どの、これは面目次第もござらぬ。

治郎　イヤ、人の盛衰は知れませぬもの……して、何ゆゑに、その御身分に。

長九　されば、聞いておくりやれ……先つ頃、鎌倉表にて若殿を唆かして、金銀を湯水の如く使ひし報いで、お國へ歸ると阿房拂ひとなり、今この姿……して、おてまへは、どういふ譯で、この所へ。

治郎　御主人厚倉どの、所用あつて當所の本陣に逗留を致し居られますが、何は然れ、拙者の主人へ、右の譯を申し入れ、少しの路用は御用立て申すでござりませう。

長九　これは忝なうござるが、厚倉氏へこの體たらくをお目にかけるは。

治郎　なんの／＼、古傍輩のよしみ、惡しうは計らひも致しますまい。

長九　左やうなれば、よしなにそこを。

治郎　よろしうござりまする……サア、御一緒に。

長九　イヤ、斯う致さう。今晩、夜に入らば、御旅宿まで

罷り出でます程に。

治郎　然らば、これにてお別れ申します。

ト上手へ入る。

長九　いつぞや、典膳どののお頼みゆゑ、あの三勝めを引ッさらひ、身にかゝるとも白澤越し、赤根半七に三勝を引ッたくられたのみならず、全八郎は平三が爲にこの世の暇。それを野面でお國へお供。御主人の御罰でこの身のお暇。使ひ果してこの體裁……そんな事云はうより、髮でも結つて厚倉どのに、オヽ、さうだ〳〵。

ト上手へ入る。馬士唄になり、向うより善吉、半合羽一本差し、旅形にて行李と包みを割掛けにし、隣の孫六、東院の友次、善吉の胴倉を取つて出て來り

孫友　なぜ爰まで連れて來やアがつたのだ。

善吉　ハテ、これしきの包みを、頼む事もないゆゑ、人足には及ばぬと云つたではないか。

友次　ヤイ、人足は荷を持つのが商賣だ。それだから持たせろと云つたが惡いと吐かすのか。

孫六　サア、この宿の關の孫六だ。持たしてもらはにや、商賣にならねえ。寄越しやアがれ。

ト荷を取らうとする。

善吉　そりや無法と云ふもの。人に持たせられぬ荷物……イヤサ、勿體ない物が入つて居るから。

友次　勿體ねえ物は、雲助が持つちやア惡いと吐かすか。

善吉　酒手を遣るから、この荷物は放して下さい。

孫六　イヽヤ、酒手代りに荷物は貰つた。

ト引ッたくる。善吉、それをと寄るを、友次、引据ゑて叩く。孫六、包みを取つて、上手へ行かうとする。上手より宇太郎、三度笠、半合羽の旅形にて出て來り、荷物を引ッたくり、孫六を投げる。友次、打つてかゝるを、手を捻ぢ上げる。

二人　アイタヽヽ。

善吉　有り難う存じまする。

二人　この彌次馬めが。

ト振り解き、かゝる兩人を投げ退け

宇太　やうやう追ひつきました。

善吉　ヤア、お前さんは。

ト悄りする。

宇太　ア、コレ、おれが來たからは、ギウの音も出さしやしませぬ。ヤイ、うぬらは太え奴等だ。喧嘩を仕掛け、追剝ぎをしやアがるな。コレ、鎌倉にばかり、青砥さま

がござりやしねえぞ。この節、巡檢に歩かつしやつて、追ッつけ爰らへもござる。その時、吠え面しやアがるな。

孫六　オヽ〳〵、追剝ぎを、いつわッちらがしやんした。

宇太　しねえ者が、なんで酒手の代りに、荷物を引ッたくり、持つて行かうとした。コレ、この男はおれが連れだ、おれは年中行き通ひをする道中、うぬらにこめられて詰まるものかえ。

孫六　親方、お前のお連れさんと思やア、こんな事は云やアしませぬ。

友次　ほんの間違ひだから、料簡しておくんなせえ。

孫六　モシ、お若いの、眞平御免なさいませ。

宇太　いま喰はしたその代り。

ト縫ひぐるみにて打つてかゝる。兩人、上手へ逃げて入る。

善吉　イヤモウ、好い所へ來て下さつて。

宇太　お前、怪我でもしやアしねえか。野尻の宿で泊り合せた時、いゝ連れだから、明日から一緒に行かうと云つたのに、わしを胡亂に思ひ、まいて來たから、あんな目に遭ひなすつた。わしは、年中京の代物を、信州路へ持つて行き、信州の代物を京へ持つて行つて、賣つたり買つたりして居る者だが、どうしてうつかりとは、道中も出來るものではねえのサ。

善吉　左やうにござりまする。この中、野尻でお目にかゝりました時、實は連れが先へ參りましたゆゑ、御挨拶も致さずに立ちましたが、今日も連れが先へ參り、大方、もう宿を取つて居りますだらう。

宇太　さうして、今夜は何所泊りだえ。

善吉　ヘイ、何所でござりまするか。

宇太　もう、日の暮れるのに、まだ極まらすかな。

善吉　エ……イエナニ、この宿の、慥かとッつきの内が泊りでござりました。

宇太　そいつア、丁度いゝ。わしも、あそこの内が定宿サ

善吉　イエ、慥かに二軒目の松山とか。

宇太　それ〳〵、二軒目であつた。あつちから來れば、とッつきサ。あそこはいゝ宿さね。早く行つて、湯へでも入りやせう。

善吉　ヘイ……左やうなら、お前さん、お先へ。

宇太　遠慮なしに、サア、行きなさいと云ふ事サ。

ト善吉は氣味惡きこなしにて先に立ち、宇太郎、追ひ

立て、通ひの歩みへかゝる。此うち馬士唄にて、舞臺の道具、ぶん廻す。

本舞臺、三間、常足の二重、敷臺附きの玄關。向う羽目板。爰に、諸侯の御泊りと記せし札を掛け、上の方、冠木門、下手、白壁に丸に松山と記し、この下手、海鼠壁。すべて野上驛旅籠屋の體。よろしく道具納まる。

ト此うち、中の歩みを通りながら

宇太　お前の調掛けは、片荷づゝで、待ちなさい、爰が解けさうになつた。

善吉　よろしうございます。今また直ぐにほどくのでございます。

宇太　そんなら明日は、兩方同じやうにしなせえ。それぢやア肩が痛むよ。

善吉　ヘイ、有り難うございまする。

ト兩人、舞臺へ來り

宇太　アイ、この間はお世話になりました。

ト奥より手代、出て來り

手代　これはお早うございました……オイ〳〵、お客様だよ。お茶を持つて來な。

ト奥より下女おまつ、丸盆へ茶碗を乘せ、持ち來り

まつ　ようお出でなされました。

ト下手より木曾のおろく、留め袖、襷がけにて、駒下駄を穿き、濯ぎ盥を持つて出て來り

ろく　ちと、おぬるうございませうかな。

手代　なぜ熱いのをお上げ申さぬ。

ろく　つい水をうめ過ぎまして。

宇太　イヤ、これで丁度ようございます。

善吉　お若い衆、先へわたしの連れは、來やしませなんだか。

手代　ヘイ、お下りのお客様は、お泊りでございますが、まだ上りのお方は。

宇太　なにサ、爰と極まつて居りやア、遅くとも來るだらうよ。

ろく　お脚絆を、わたしが洗うて、お預かり申しませうわいなア。

善吉　これは憚りだな。

ト顏見合して

オヤ、お前はどうか。

ろく　ほんにあなたは。

宇太　見た筈、年中おいらとこの海道を、行き歸りして居る者だ……おいらの脚絆も一緒に。

善吉　ア、モシ、わたしの脚絆は、別にして置いて下さりませ。連れが今に來るから。

まつ　それでは、あなたはお一人さんで。

宇太　なんの一緒サ。湯は直ぐによからうの。サア、飯前に、一杯氣を附けなくつちやならねえ。オツと、お前の脇差も、一緒に持つたよ。

善吉　これは憚り……イエ、包みはわたしが持つて參じます。

皆々　サア、お出でなされませ。

トみな／＼奧へ入る。おろく、殘り、盥の湯にて脚絆を洗ふ。橋がゝりより半七の娘お通、切繼ぎの形にて水飴の曲げ物を持ち、出て來る。

ろく　オヽ、お前は、離れ座敷に逗留して居やさんす、御夫婦のお子ぢやなア。何所へござんしたえ。

つう　アイ、水飴を買ひに行つたわいなア。

ろく　ようお使ひにござんした。その代り、たんとお上がりなさんせ、

つう　イエ、こりや父さんが飯を食べぬゆゑ、食べさすのぢやわいなア。

ろく　オヽ、ほんにマア、この中木賃で泊めてくれいとてござんしたその時は、さほどの病氣とも思はなんだが、飯も進まず、體も自由にならぬ樣子。それをお內儀さんが介抱さしやんすその上に、此やうな娘御があつて、さぞ身も世もあられまいになア。御夫婦とも、定めてよしあるお方の果ぢやあらうに、人の身の上ほど、果敢ないものはないわいなア。

トほろりとする。

つう　姐さん、なぜ泣かつしやるのぢやえ。

ろく　エヽ、なんのマア泣きはしませぬ。これは、アノ、オヽ、昨夜お前が謳うた、唄の眞似をして見たのぢやわいなア。

つう　父さんの足を擦つてしまうて、また謳うて聞かさうわいなア。

ろく　それはマア、嬉しい事でござんす。

ト橋がゝりより孫六、友次出て來り

孫六　オイ、姐え、いま此方の內へ宇太郎……ナニサ、お飛脚のやうな人が泊つたらう。

ろく　お一人さんでござりまするかえ。
友次　さうよ……イヤ、二人連れだつた。
ろく　アイ、横座敷にござんす。
孫六　側に居る人に差支へるから、ちよつと呼び出してくんな。
友次　コレ、おいら達だと云はずに。
ろく　サア、お前も一緒に。
孫六　どうしておいら達が。
ろく　エヽ、お前ではないわいなア。
友次　コレ、頼む〱。
　トおろくは、お通の手を引いて奥へ入る。
孫六　彼奴は、ひけ人足だから、この道へ、來たらな。
　ト兩人囁く。
友次　オヽ、よし〱。
　ト奥より宇太郎、帶ひろ解けにて、手拭を持ち出て來り
宇太　べら坊に早く來やアがつたな。
孫六　二三日、雇人のおいどゝ出來て居るから。
　ト宇太郎、一分包みを出し
宇太　ソレ。
友次　たつた一分か。
宇太　おらア、ひけ人足だから。
孫六　親方、お前の事ぢやアねえ。腹を立つちやアいけねえぢやねえか。
宇太　腹は立たない代りに、割はちつとだ。
友次　それが悪い。
孫六　もうちつと。
宇太　エヽ、まだ仕上げもしねえうちに。否ならよせ。
友次　なんの、お前が見込んだに、いきそくねえがあるものか。
孫六　オイ、巧くいつたら頼むぜ。
宇太　慾張り切つて居やアがらア。
　トおまつ出かゝり居て
まつ　お客さん、湯が明きました。
宇太　オイ、合點だ……コレ、口を叩くな。
友次　大丈夫だ。
二人　そんなら親方。
宇太　一昨日うしやアがれ。
　ト孫六、友次、橋がゝりへ入る。おまつ付いて奥へ入る。

ト向うより治郎平、中間、矢張り釣り竿に魚籃を提げて出て來る。後より道具屋利助、着流し、小風呂敷を持ち出て來り

利助　それへお出でなされますは、厚倉さまの御家來衆ではござりませぬか。

治郎　ムウ、昨日見えた道具屋どのか。

利助　旦那様に、昨日お目にかけました北辰の尊像、お求めなされて下されますかな。

治郎　イヤモウ、あれを餘所へ賣られては、ならぬと云つてゞござつた。

利助　それでは、五兩金御勘辨下さりまして、三十兩にお買ひなされて下さりませうか。

治郎　マア、身共と一緒にござつて、旦那に逢はつせえ。

利助　左やうなら、何分お願ひ申しまする。今日は釣りにお出でなされましたか。

治郎　有やうは、こなたが、あの尊像の話しをしたゆゑ、旦那も爰に御逗留。我れ〳〵は所在がないから、今日は釣りに出かけた。

中間　その尊像とやらの片が附いたら、立たつしやるであらう。

治郎　そんなら道具屋どの。

利助　サア、お供いたしませう。

ト舞臺へ來る。奥よりおまつ出て來り

まつ　只今お歸りでござりましたか。しつかり御漁がござりましたらう。

治郎　こんな大きな鮒が三枚。

利助　こりや、結構な鮒が

中間　お酒は、私しがはずみませう。

治郎　そんなら女中、この鮒を

まつ　直ぐに拵らへて上げますから、奥へ行らつしやいませ。

利助　トレ、前祝ひと出かけませう。

ト奥へ入る。この模樣よろしく馬士唄、驛鈴にて道具ぶん廻す。

本舞臺、平舞臺、一間の床の間、通しの塗り骨障子。上手、障子屋體。下の方、黒心に障子、爰に善吉、荷を解き、包み直して居る見得にて道具納まる。

ト下手より按摩出て來り

按摩　按摩はよろしうござりますかな。

善吉　アイ、ようございまする。
按摩　又お願ひ申しまする。
ト出て行く。善吉は行李の内より金の入りしうちがへを出し、包みへ入れようとして、また懐へ入れたり、いろ／＼するうち、野上宿と記せし弓張り提灯を持ち町人出て
帳付　お早うお着きでござりました。
ト善吉、恟りして
善吉　ハイ、お早うござりました。
帳付　エヽ、お上りでござりますか、お下りでござりますか。
善吉　ハイ、上りでござりまする。
帳付　どちら様でござりまする。
ト矢立を出し、帳面を開く。
善吉　ハイ、江州二夫川村、貝屋善吉と申しまする。
帳付　へイ、お連れ様もお同所でござりますか。
善吉　アヽ、イエ／＼、ありや知らない人でござりまする。どうしてあんた人……イエサ、湯に入つて居りますから、お聞きなされませ。
帳付　畏まりました。
善吉　筆墨代はそれへ置きました。
帳付　ハイ／＼、これは御きんとう。左やうなら。
善吉　御苦労でござります。
ト帳付けは出て行く。
それはよいが、彼奴が離れたいゆゑ、こんな苦労な事はない。
ト奥より枕二つ持ち、おろく出て来り
ろく　お客様、お草臥れでござりませう。ちとお横におなりなされませ。
善吉　そこへ置いて下さりませ……オヽ、お前は先刻の姐さんか。どうもお前は見たやうな。
ろく　わたしもいろ／＼と考へて居りますが、もしやあなたは、木曾の妻籠へ、お泊りなさんした事はござりませなんだかえ。
善吉　オヽ、さうだ。お前は森村屋の娘、おろくさんぢやねえか。
ろく　ほんに、お前さんは二夫川村の、善吉さんでござりましたか。
善吉　思ひがけない所ゆゑ、忘れて退けたが、今度あそこを通つたから、尋ねたら、一昨年内は人に譲つて、どこ

へやら行つたと云はれたゆゑ、本意なく通り過ぎたが、好い所で逢ひました。さうしてどうして爰へ來たのだえ。

ろく　それはマア、有り難うござりました。父さんはあの年の暮れに、なくなられまして、少しの縁ある妾の内へ引取られ、水仕奉公同然に參り居りますが、その節下さんしたお金二つは、未だに封じて此やうに、肌身に附けて居りまする。

善吉　ほんにマア、孝行なお前があれ程までにしたれど、定命なれば仕方がねえ……イヤ、仕方がねえと云へば、おれが道連れになつて、一緒に泊り合はせた人は、なんだらう。

ろく　サア、道中を稼ぐ、惡い人ぢやと云ふ事でござんす。

善吉　エヽ、おれもさう思ふから、野尻から心安う口をきくゆゑ、どうぞして別れようと思うて、やう／＼二三日後に見えなくなつたから、嬉しやと思つたら、先刻雲助に喧嘩を仕掛けられ、困り切つて居るを助けてくれたゆゑ、嬉しやと顏見たら、矢ツ張りあの男。無理に連れになつて爰へ一所に泊つた……コレ、お前だから話すが、爰に金が餘ツぽどあるゆゑ、見込まれたに違ひはない。

ろく　道理こそ最前、惡い若い衆が二人來て、何か騷ぎ合つて、金貰つて行つたのは、矢ツ張り喧嘩仕掛けも、拵らへ事でござんせうわいなア。

善吉　サア／＼大變。どうしたらよからう。

ト　いろ／＼うろたへ廻る。

ろく　モシ。

ト　囁く。

善吉　ムウ、成る程、合點。

ト　帶ひろどけにて、うちがへを着物をたくれし中へ入れる。宇太郎、出て來り

宇太　上臈様だ。入つて見なさい……オイ、姐え、怪しいの。

ろく　イエサ、御膳を直ぐに出してもよろしうござりますか。

宇太　さうよ。今に立込んで來たら。ごまかすだらう。併し、連れの衆が。

善吉　イエ、私しは後の方が、勝手でござります。

ろく　そんなら、おまつどん、お一人さんの御膳を持つてござんせ。

まつ　アイ〳〵。

ト下にて返事する。

善吉　それでは風呂へ入つて來ませう。

宇太　ゆつくり入つて來なさい。

ト靜かにこの道具ぶん廻す。

本舞臺、二間の間、板羽目、眞中に角風呂を据ゑて、八方を照し、上下、障子、合ひ方にて道具納まる。

トおろく案內して、善吉、下手の障子明け、廻りに附いて出て來り

善吉　ヤレ〳〵、お前に逢つたは地獄で佛。先刻はどうしたらよからうと思つた。行きがけに約束したゆゑ、なんでも仕合せのよかつた話もしようと、又お前に金も上げようにと思つたに、行くへが知れぬゆゑ、本意なく爰まで來たが、鎌倉に行つてから好い主人に使はれたゆゑ、百兩餘りの金を持つて上つて來たを、あの護摩どのに魅入られた譯だが、もう爰まで來たからは、在所へも僅か五六里、今宵無難に明かしさへすれば、明日は仔細はないと云ふもの。

ろく　イエ、そりやお前の心得違ひといふもの。すべてあの衆の働らきをするには、五日も六日も離れ〳〵しうして、在所へ近附くか、行く先の方へ近寄れば、旅人衆ももう心丈夫ぢやと、思ふ所へ付け込んで、盜みするものぢやとの事なれば、明日の日が油斷がなりませぬわいなア。

善吉　エヽ。

ろく　そりやモウ、今宵はわたしがどうなとすれど、明日は遁がれはござんすまいなア。

善吉　こりやマア、どうしたらよからうなア。

ろく　斯うなさんせ。その金をわたしに預けて、今宵九ツ過ぎに、わたしが合圖をする程に、背戸から拔けて向うの高い松山を行かしやんすと、關の松山へ出る近道なれど、夜道は猶物騷ゆゑ、その山の半には、山神の古社、それで一夜を明かした上で、心靜かに二夫川へ戾らしやんしたがよからうわいなア。

善吉　イヤ、なか〳〵こんな時になつては、智慧も料簡も引込んで、途方に暮れるにこなさんは、女に稀れな智慧者だ。

ト金を出し

そんなら、この品を預けます。ヤレ嬉しや、のう〳〵した。
ト前へ出す。おろく、うちがへを懐に納めて
ろく　さりながら、わたしから好んで預かるも濟まぬ譯。どうか仕様もない事か……オ、さうぢや。
ト頭の櫛を拔いて
これは三年以前、お前さんが拾うて下さんした、母さんの筺の櫛、わたしの爲には身にも命にも替へられぬ、大切な物でござんすゆゑ、これを預かつた證據に、持つて行て下さんせ。
善吉　なんの、お前の氣心を知つて預けるに、證據も何もいるものか。
ろく　イエ、それではわたしの心が濟まぬわいなア。その上に、もし入用の時は、この櫛を證據に、キッとしたお方をお寄越しなさんしたら、渡して上げるその爲の、證據でござりますわいなア。
善吉　成る程、親に孝行と云ひ、男も及ばぬお前の料簡、感心いたしました。コレ、この恩は一生忘れはせぬ。いづれその時、キッとお禮に。
ろく　なんのお禮に及びませう。

善吉　併し、湯の後がつかへて居るだらうに。
ろく　そんなら後に。
善吉　キッと合圖を。
ト帶を解き、風呂へ手を入れて
オ、熱。
ト手を振るのが道具替りの知らせ
ア、、素敵に沸いたなア。
ろく　それはお氣の毒に存じまする。
トこの仕組みよろしく、合ひ方にてこの道具ぶん廻す。
本舞臺、一面、松並木の中、遠見、時の鐘にて道具納まる。
ト向うより孫六、友次出て來り
友次　あの宇太郎といふ野郎も、人にさんざつぱら骨を折らして置いて、たつた一分とは、意地ぎたねえ野郎ぢやアねえか。
孫六　どうでひけ人足だからよ。
友次　オッと、それが割の少ねえ云ひ草だぜ。
孫六　違えねえ。
友次　併し、あんな野郎の下に居ちやア、濁酒も吞まれね

えから、明日は此方でやッつけよう。

孫六　さうだ。それぢやアこれから、海道で網を張らう。

友次　おれは松山へ引返へし、とつくりと樣子を窺つて來よう。

孫六　ムウ。さうしてくれろ。

友次　それぢやア、孫六。

孫六　東院。

兩人　ドレ、出かけべえか。

ト上下へ別れて入る。これにて道具ぶん廻す。

本舞臺、元の座敷へ戻る。上手に善吉、木綿蒲團、搔卷にて寢て居る。下手に宇太郎、寢入つて居る。眞中に丸行燈を灯し、時の鐘にて道具納まる。

ト下手の障子を明け、おろく、拔き足して出て、仕切りの障子を覗き、菓子袋の口を明ける。これにて差し金のとんぼ飛び出し、行燈の中へ入り、灯消える。善吉、冠つて居た搔卷をまくる。おろくは探り寄り、善吉の手を取つて、手の平へ文字を書く。善吉は呑み込み、脇差を持ち、拔き足して下手へ來る。おろく、行李を一つ探り取り、善吉の手を取り下手の障子を明けろ。木なしにてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、先の風呂場の道具に戻る。廻りについて兩人歩み出る。合ひ方にて道具納まる。

ろく　オヽ、二つかと思うて抱へて來たら、これぱつかりゆゑ、ちよつと取つて來る程に、待ちなさんせ。

善吉　イヤ〳〵、あの包みには、別しての物はござりませぬから、大事ござりませぬ。

ろく　そんならわたしが預かつて置からわいなア。

善吉　よいやうに願ひます。わしはこれから

ろく　紛れのない一筋道。草履を穿いて行かしやんせ。

善吉　忝なうござる。

ト行李を抱へ、向うへ走り入る。おろくは上手の屋體窺ふこなし。この仕組みよろしく、道具廻る。

本舞臺、三間の間、中足、古びたる屋體、向う反古張り障子。下手へ折り廻し、緣側付き隣り座敷。この前、四つ目垣、朝顏搦みつき、下草、生ひ茂りし薄の土手板、下手、建仁寺垣、同じく枝折り戸、すべて松山離れ座敷の體よろしく、爰に焜爐、土瓶、

土間など置き、角行燈を灯し、二枚折りの屏風を立て薄き木綿蒲團を敷き、踏臺にやつしなかけ、これに半七、切繼ぎの衣裳、床鉢卷にて寄り添ひ居る。三勝、切繼ぎの拵らへにて、半七の脊中を撫でゝ居る。お通、繼ぎ棹の三味線を置き、寝て居る。合ひ方にて道具納まる。

三勝　最前より、きつう息遣ひが惡いではござんせぬかえ。

半七　ヤ……イヤ、大きに胸先が樂になつた。必らず案じてくりやんな。

三勝　わたしや又、今朝から顔色が惡いから、案じて居たわいなア。

半七　その事は、醫者どのも、病の直り際には、また一盛り顔色や、息遣ひが惡うなるものと、斷わつて行かれたが、最前からの様子といひ……こりやモウ、不快に及ぶと見えるわい。

三勝　嬉しや／＼。妾の内へ逗留してから、身内までが自由にならぬやうにならしやんしたが、どうぞ本腹させねばならぬと、この宿の後ろ町に、御嶽山の遙拜所がござんすゆゑ、朝夕お参り申して、嚴しい願懸めをしたほどに、やがてよくなるでござんせう。

ト橋がゝりより、道具屋利助、足早に出で來り

利助　御免なされませ。御病人はどうでござりますな。

半七　これは／＼、この中見えた道具屋どの。

三勝　サア、こちらへお出でなされませ。

利助　イヤ／＼、お構ひ下さりますな。早速ながら、この間お目にかけました、黄金佛の北辰の尊像は、外に値をよく買ふ仁がござりますから、お氣の毒ながら、お斷わり申しまする。

半七　ア、コレ／＼、あの黄金佛を外へ賣られてはならぬに依つて、あれ程堅く頼み置いたではござらぬか。

利助　サア、あなたからお頼みがなければ、私しの代物ゆゑ、私しが勝手に致しますが、是非買はねばならぬと仰しやるゆゑ、今日まで賣らずに置きましたが、さう／＼はお待ち申す譯にも参りませぬ。

半七　ハテ、それでは甚だ迷惑いたす。さういふ事なら直ぐに求める程に、どうか手前の方へ。

利助　そんならどちらへ賣るも同じ事。併し、金は今日出來ますか。

半七　今日と云うてはどうも……イヤ、ようござりまする。

ちと心當りもござれば、今宵五ッまでお待ち下さるまいか。

利助　そんなに仰しやるなら、五ッまで待ちますが、五ッまでに御挨拶がなければ、もうお斷わりには參りませぬから、さう思し召して下さりませ。大きにおやかましうござりました。

三勝　マア、よろしうござりますわいなア。

利助　ヘイ、左やうなら。

ト橋がゝりへ入る。

三勝　モシ、こちの人、心當りがござんすかえ。

半七　ハテ、外へ賣ると云はれるゆゑ、一寸遁がれに云うたのぢやわいなう。

三勝　それぢやと云うて、五ッまでに挨拶がなければ、斷わりなしに外へ賣ると云うたぢやござんせぬか。

半七　それまでには、また好い思案が出やうも知れぬ。其やうに案じやるな。

三勝　さうは云はしやんしても、お前の心の中は、どのやうに苦しい事で。サ、また病氣に障り、ひよんな悲しい事にでもなりはせまいかと、案じられてならぬわいなア。

半七　なんのマアこれしきに、全く體の痛むのは、幼少の頃武術の稽古で、幾度となく打つたる打ち身、それゆゑであらうかい。

三勝　ほんに侍ひ程、怖いものはない。これにつけても、このお通が大きうなつても、武家方へ嫁づける事は嫌ぢやぞえ。それに仕合せと、三味線が好きぢやゆゑ、稽古仕込んで有德なる、町家へ嫁づけ親子二人、左團扇で暮らさうぞえ。

ト半七、思ひ入れあつて

半七　イヤ、一度筒井家へ抱へられ、若殿の乳人役、なに暗からぬ身で貞節な、妻や子供に憂き目を見せる切なさは、重る病に苦しむより、五臟を絞る我が思ひ。その艱難に怯げもせず、晝は終日看病なし、夜は忍んで門に立ち、その三味線に合力を、受ける扇は名も高き、舞の太夫の爲す事か。これが世に云ふ藝が身を、助くる程の不仕合せ。本國に在りし頃、めでたうお通が生れなば、お乳や乳人にかしづかれ、綾や錦を飾らんもの。

三勝　綿さへ薄き古布子、八ッ口どめの紅絹を見て、よい服着たと人に吹聽。それを聞き居る親が身は、どのやうにあらうぞいなア。

初演當時發行



市村羽左衛門の半七

草双紙の口絵



坂東しうかの三勝

ト愁ひの思ひ入れあつて、氣を替へ
ホヽヽヽ、思ひもつかぬ事云ひ出して、そりや何を云はしやんす。此やうな事になつたは、若殿の御放埒が、お國へ知れて濟まぬゆゑ、お前の身に引受けて、わたしと二人立退いたゆゑ、今は斯うした艱難も、忠義ゆゑぢやと思うたら、此やうな心の凉しい事はござんせぬ。人の身の成行きは、あざなへる繩とやら、唄の唱歌にある通り、若殿樣の世とならば、故郷へ飾る伊達道具、今の間でござんすぞえ。

トこれにて半七も氣を替へ

半七 成る程、こりやおれが惡かつた。堪忍しや。それといふのもお通が可愛さ。愚痴が胸へ浮んだゆゑ。忠義の爲と思つて居れば、しがない暮らしも人間の最上…併し最上なれど、今宵こなたが出てくれずば、明日の最上に困るであらう。一遍歩いてくりやれ。

三勝 丁度お通もよう寐て居るゆゑ、この間に一二丁、貰うて來ませうわいなア。

ト立ちかゝり

七輪に湯もぬるんで居ますぞえ。手燭も爰にあるゆゑ、手水場へ行かしやんすなら、お通を起して、あれに持たせて行かしやんせ。明日はお前の上へ、引ッかける物が出來上がる程に、寒い思ひもさすも今宵一夜、料簡して下さんせ。

ト三勝、三味線を取る拍子に、糸へ障る。この音にてお通、目を覺し

つう 母樣、三味線持つて、どこへお前は行かんすのぢや。

三勝 オヽ、お通、目を覺ましやつたか。

つう それ持つて行ては、嫌ぢや／＼。

三勝 これはしたり、昨夜も云うたぢやないか。此やうに皮が破れてゐる程に、餘所の小父さんに、美しう拵らへ直してもらうてやらうと、持つて行つたれば、そのお方が留守ぢやゆゑ、また今宵、直しに持つて行くのぢやわいなう。

つう そんなら、付いて行くわいなう。

半七 コレ、お通、よしにしや。父を見い、夜歩きして病犬に足を嚙まれ、此やうになつた程に、わが身は留守して母の戻りを待つて居や。

三勝 その代り、おみやを買うて來てやるわいなう。

つう そんなら、早う戻つて下さんせ。また父さんが胸が

苦しいと云はしやると、わしやどうしてよいやら、知れぬわいなう。

ト三勝、思ひ入れあつて

三勝　まだ頑是のない子心にも、よく〳〵親を思へばこそ。

半七　これはしたり、何を云やる……サア、わが身は爰へ來や〳〵。

つう　アイ〳〵。

半七　可愛い奴ぢや。父が病氣を案じやつて

三勝　母樣早う戻つてと、慕へるものを親は又

半七　燒野の雉子、夜の鶴。

三勝　ほんに子ゆゑに……闇を幸ひ、一二丁……行て來るぞえ。

ト三勝、思ひ入れあつて、三味線を持つて出て行く。

半七　コレ、お通や、面白い話しをしてやりませう。

つう　父樣、わしや最前、爰の女中さんに、面白い草双紙を貰うたぞえ。

半七　ドレ、いつも優しうして下さる、おろくどのが下さつたか。さても〳〵いたいけな。ドレ、父にもちやつと見せいやい。

つう　アイ〳〵。

ト手遊びの箱より草双紙を出して

これ見やしやんせ。小父樣が、車に乘つて居るわいなう。

半七　オヽ、こりや小栗一代記、ムウ、面白さうぢやなう……この草紙にある小栗兼氏、それに劣らぬ我が身の上、片輪車の足腰立たず、いつぞや白澤越にて相果てなば、斯うした苦勞を妻や子に、さすまじものを生中に、この半七があるゆゑに、世話する人もない道理、我れさへこの世を去るなれば、思ひがけなき出世もせん。親はなくとも子は育つ。子を思ふ程に親を思はぬと、それにつけても親人は、如何なされてある事やら、また嫁入りした園花も、さぞやこの身を恨んで居らう。新十郎どのの思惑と云ひ、世に味氣なき身の果ぢやなア。

ト思ひ入れ、この時、本釣り鐘。

ヤヽ、ありやもう初夜、ハテ、なんとしたものであらうなア。

ト爰へ利助出て

利助　先程お約束の通り、御挨拶もございませぬゆゑ、先樣へ渡してしまひました。さう思うて下さりませ。

半七　イヤサ・あれを手放されてはならぬ。爰へ持つて來て下され。
利助　ハテ、金子までこの通り、受取つて參りました。またあんな物が拂ひに出たら、その時お願ひ申します。
ト止むる半七を振り切つて入る。半七、こなしあつて
半七　ヱ、、何を云ふにもこの病氣、頼みの綱も切れ果てしか。彼の品ゆゑにこの年月、心を碎くこの半七、俄かに人手へ渡りし上は、所詮存命思ひも依らぬ。身を捨ててこそ妻や子が、また浮む瀬のありもやせん。三勝が戻らぬうち、せめて一筆。さうぢや／＼。
トいろ／＼あつて、獨吟になり、硯を磨り、行燈へ書置を書かうとして、書かれぬ思ひ入れ。
宿世如何なる業病やら、死後に一筆書き殘す、事さへならぬこの慄へ、よく／＼因果な事ぢやなア。
ト思ひ入れ。お通、側へ寄つて
つう　父樣、また胸が切ないかや。
半七　アイヤ、何ともない。今父が云うたのは、ありや唄を唄うたのぢやわいなう。
つう　面白い唄なら、わしに教へて下されいなう。
半七　オ、、教へてやる程に、よう覺えて、母が戻つたら謳うて聞かしや。さうするとよい物をたんとくれるぞや。
つう　嬉しい／＼。何と云ふ唄ぢやえ。
半七　サア、その唄は……かき
つう　かきと云ふ唄かや。
半七　イ、ヤ、書置と云ふ唄ぢやわいなう。
つう　早う教へてや。
半七　オ、。
ト半七、お通を抱きしめる。この仕組みよろしく、この道具ぶん廻す。
本舞臺、一面の黒板塀、見越しの松、時の鐘にて道具納まる。
ト上手より利助出て來り。
利助　あの黄金佛の尊像は、自分の代物でありながら、松山に逗留の浪人どのが、泣くやうに云うて頼むゆゑ、それも氣の毒と思ひ、今夜まで待つてやつたれど、マア、あの侍ひに賣つてしまひ、浪人どのに斷わりを云つて來たれば、あれで此方は安心と云ふものぢや。ドレ、去んで休まうか。
ト橋がゝりへ入る。向うより三勝、三味線を持ち出て

三勝　半七さんの病氣が、心にかゝるせいか知らねども、今夜に限つて胸騒ぎがしてならぬが、もしや病氣が重りはせぬか。もう少し貰うて、早う今夜は歸らうわいなア。

ト舞臺へ來る。烏笛になり、空にて烏群がり飛ぶ。

折も折とて、このマア、烏啼きの惡い事。こりやモウ、いつそ歸つた上、別條なければ又、出直して來ようわいなア。

ト引返へさうとして、躓いて草履の鼻緒切れる。

アレ又、草履が。

ト草履を取上げるが、道具替りの知らせ

變つた事がなければよいがなア。

ト足早に入る。この仕組みよろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、元の世話場の座敷へ戻る。上手にお通、下手に半七、唄を教へて居る。獨吟にて道具納まる。

つう　こちや覺えたゆゑ、こちら向いて、ちつさう謳うて見るぞえ。

半七　オヽ、さうしや〳〵。

ト半七、脇差を出し、左にて逆に腹へ突き立てようとする。向うより三勝、足早に戻り來て、これを見て駈け上がり、半七の手に縋り

三勝　こりや、お前、氣ばし違うてかいなア。

半七　エヽ、爰放なせ〳〵。止立てして怪我するな。

ト爭ふはずみに、少しの米と端下錢、二重より下へ溢れ落ちる。

三勝　怪我をするが怖いとて、夫を殺してよいものか。サア、譯を云はしやんせ。

半七　その譯は、お通が知つて居る程に、死んだ跡で聞きやいなう。

三勝　なんのお通が、知つた事かいなア。

半七　コリヤ〳〵、今の唄を、父が死んだ……イヤサ、後に謳うて聞かせや。

つう　母様、わしや書置と云ふ唄、覺えたわいなア。

三勝　フム、さては、筆持つ事が叶はぬゆゑ、この子に教へて云はさうでな……コレ、お通、父さんが胸が痛いと云はしやんすゆゑ、この手がどうも離されぬ。サア、覺えた唄、早う謳うて聞かしや。

つう　それでも、三味線彈かにや、わしや否々。

ト下手の屋體にて三味線を彈き出す。

三勝　アレ、隣りのお方が彈いて居やしやんす。あの三味線、節はなくとも謳やいなう。

つう　アイ〳〵……世の中にありて甲斐なき美濃の國、野上の宿の露霜と、消えなば立たん妻戀ひて、末頼もしき人に身を、寄せて榮えを賴もの雁、悲しめでたく候かしく。

三勝　すりや、生きて甲斐なきゆゑ、腹切つて死ぬ程に、賴もしい人に身を寄せて、娘の養育賴めとか。そりや胴慾ぢや〳〵わいなア。

半七　エ、、聞分けのない。そこ退け〳〵。

ト爭ふ。下手の障子を蹴はなし、平三郎、三味線を持ちしまゝ、緣側づたひに走り出て來り

平三　ヤレ、早まつて下さるな。

ト白刃をもぎ取る。

半七　ヤア、さう云ふこなたは。

三勝　オ、、父さんでござんしたか。

平三　娘、これが聟どのか……オ、、お通、ようマア無事で居てくれたなア。

半七　すりや、兼ね〳〵話しに聞いた、平三どのとはこの人か。

平三　ホ、、不思議な緣にて三勝と、親子になつた笠屋平三郎と、云ふ者でござるわいなう。

つう　祖父樣、よう來て下さんしたなア。

半七　思ひがけないと云はうか、面目もないこの仕合せ。只一言の譯も申さず、連れ退きし不屆き者、さぞや憎しと思し召されうが、これには段々仔細のある事。

平三　なんの〳〵、駈落したは、わしの方が先ぢやわいなう。

三勝　そりや、何ゆゑでござんすえ。

平三　オ、、わが身が迎ひに連れられて行たその跡で、扇ケ谷の目印した、法被を剝がれた中間が、まづ斯う〳〵と云ふ事ゆゑ、一本ぼツ込み跡追うて、小動橋で、やつさもつさ、たうとう二人は殺めたれど、三勝の行くへが知れず、今一度逢うて、お通が事も賴まんと、夜半に紛れて爰そこと、尋ねあぐんで里親の、內へ行たれば昨夜お通は三勝どのに、手渡しなしたと聞いて悔り、さては夫の故郷を尋ね、遙々大和へ上りもせんと、尋ね來りし念が屆き、めぐり〳〵て一つ宿、泊り合せて聟どの、、問はず語りに思はずも、障子の透から覗いて見れば、孫のお通、さては娘が話しに聞いた、半七どのに疑ひなし。先づ遺言の譯聞いてと、思ふ折からお通が唄ふ、三味線

弾けと云ふを其まゝ、狂ふ調子に彈きながら、忍び聞きして居れば、其方が生害を止める聲。捨て置かれずと止めしが、半七どのでござつたか。チエ、忝ない。

三勝　そんならわたしゆゑに人を殺め、日蔭のお身にならしやんしたかえ。

半七　おてまへの慈悲は、三勝より承はる。その上人殺しの汚名を請けしも、皆某がなせる業、左やうあつては我が朋友、厚倉どのの扱ひも、屆かざりしか。

平三　その扱ひとやらは知らぬと、三勝の行くへを尋ねると、油紙を額へ當て、初瀬寺の門前にある、伏屋の門に休んで居たら、立派な形のお侍ひが、辨當の殘りをくれたゆゑ、この飯行李へ入れて貰ひ、觀音堂の脇へ來て、開いて見れば百兩包み。上には三勝身の代金、書いてあるゆゑ悶りして、大切にかけて持つて來た。

ト飯行李を出す。上に三勝身の代金と書いてある。

此まゝにしては、科に科の重なる道理と、急ぎかしこへ行つて訊いたれど、何國のお方か名も知れず、所々方々とさまよひしが、この金には手を附けず、其まゝ持つて來ましたが、半七どの、覺えがござりますか。

半七　如何にも、その金子は某が、若殿の科を身に負ひ、三勝を連れ退くゆゑ、厚倉新十郎と申す人と語り合せ、人知れずおてまへゝ、手渡しなさん兼ねての契約。まつた三勝を、女房のおさんとは、白澤越にて初めて仔細を聞き、其まゝ連れて立退きしが、金が其許の手に入つて、先づは滿足。なぜ用に立てゝは下さらぬぞ。

平三　例へ餓ゑて死ねばとて、素性の知れぬ金に手が附けられうか。舞子に娘をしたなれど、遊女賣女の眞似さして身過ぎせうと云ふやうな、さもしい心をわしは持たぬ。三勝が身の代と書いた金を、一へらなりと遣うては、子の肉を喰ふ鬼も同然。さりながら、金の出所が知れたれば、これを元手に親子夫婦孫諸とも、大坂長町の知るべを便り、貧しくとも世を送り、半七どのが歸參の時節を、待たうではあるまいか。

半七　御厚志忝なう存ずる。さりながら、筒井家代々の守護佛、北辰の尊像紛失なせしを、詮議なさんとこの年月尋ね暮らせし甲斐あつて、この程三十兩の賣り物に出たれども、貯へなき身の上なれば、日限りも盡きて、最前外へ賣り渡せしとの事なれば。

平三　イヤ、無くて叶はぬ品なれば、この金で何との仕樣はあるまいか。

半七　御身の貢ぎになしたる金を、我れ〳〵が、たゞくにしては道ならねども、暫しの間、借用いたし、譯を申して此方へ、買ひ戻すと致しませう。

平三　さういふ事なら片時も早う……ソレ金を。

半七　チエヽ、忝ない。然らば直ぐに。

ト この時、新十郎、橋がゝりより出て、門口に窺ひ居て

新十　アイヤ、その品、身共が賣つて進ぜう。

半七　さういふ聲は。

ト 新十郎、內へ入り

新十　赤根氏、その後は打絕え申した。

半七　ヤヽ、貴殿は厚倉新十郎どの、先づは御健勝で。

新十　御邊も御無事で……それはさて置き、イザ、賣つて進ぜう。

半七　すりや、その品をアノ貴殿が。

新十　如何にも。

ト 懷中より袱紗に包みし尊像を出す。

半七　こりや、コレ、尋ねるお家の守護佛。これがどうして。

新十　拙者が爰に逗留して、計らず手に入るその尊像。

半七　すりや、最前道具屋が、外へ賣り口あると云ひしが、買ひ求めたる御仁と云ふは。

新十　厚倉新十郎、身共でござる……いつぞやより、絕えて生死も知れざるおてまへ。さりながら、我が手に入りし上からは、在所を尋ね、手渡しなさんと思ふうち、道具屋の話しに、斯やう〳〵の夫婦の者、逗留なして居るとの噂、もしやと餘所ながら窺ひ居て、最前よりの一部始終、承つて先づは安堵。さりながら、彼の三勝はおてまへと、云ひ號の御妻女であつたよな。

半七　面目もなきこの場の仕合せ。紛失なしたるその日より、身に引請けたる寶の詮議。最早その品手に入る上は、手前はあつて詮なき體。この場に於て切腹なさん。死後のお詫を。

新十　ハテ、忠義ゆゑに其許も、不忠不義の汚名を受け、斯くまで辛勞召さるを察し、この品を買ひ求めしも、金子を以て貴殿へ讓り、その上にて殿へ差上げ、吉稚君にも跡目の願ひ。その時こそは改めて、歸參のおてまへ、それぢやに依つて、この尊像の卽ち價は三十兩。

半七　ハツ、忝なし。御深切のその一品、御意に任せて、三十兩。

ト件の百兩包みの内を三十兩渡す。

新十　然らば尊像お渡し申す。

ト半七、尊像を受取り

半七　計らず手に入る尊像を、求める金も貴殿より、舅へ手當の一包み。

平三　ヤア、そんならいつぞや初瀨寺にて、飯行李へ金を入れて下されたお侍ひは。

新七　如何にも某。その時の非人平三は、御身であつたか。

三勝　知らぬ事とてお禮さへも。眞平御免下されませう。

ト新十郎、金包み出し

新十　イヤ、ナニ半七どの、些少なれども若殿より、また再勤のお支度金。

半七　重々のお心添へ。エヽ、忝ない。

新十　身共はこれより若殿の、御家督相續なさしめて、半七どのゝ再勤を。

三勝　先づそれまでは

平三　長町裏にて

半七　暫しの隠れ家。

新十　御歸參までは。

半七　大事の御寶。

ト懷中する。薄ドロ／＼になり、半七放心する。

三勝　ヤヽヽ

平三　こりや何ゆゑに。

ト布施長九郎、窺ひ居て

長九　身共が貰つた。

ト懷へ手を入れる。半七心附き、長九郎を、見事に投げる。

新十　ヤヽ、半七お身は。

三勝　オヽ、手足が自由に。

半七　ヤヽ、今まで惱みし五體も、元の

新十　さてこそ、お家の守護佛を

平三　懷中なせし、奇瑞にて

三勝　忽ち全治なしたるか。

新十　奇妙。

ト立ちあがるを木の頭

半七　チエヽ、忝ない。

ト皆々よろしく思ひ入れ。勇ましき鳴り物にて

ひやうし幕

本舞臺、松並木の道具幕。爰に孫六、酒菰を着て寢て居る。時の鐘にて幕明く。

ト向うより友次、走り出て、舞臺へ來て孫六に躓き

友次　アイタヽヽヽ。

孫六　オヽイタヽヽヽ。

友次　飛んだ所にどぶさつて居やアがる。行き倒れか、なんだ。

孫六　このどら盲目めが。なんぼ暗闇でも、人の寢て居るのが。

友次　ヤイ、孫の野郎ぢやねえか。

孫六　おりやア又、いゝ仕事が出て來たと思つたに。さうして、あの鳥は、明日はこの道へ來るか。

友次　來るどころぢやねえ。殺らしてしまつた。

孫六　ナニ、宇太郎が荒療治でもしたか。

友次　イヤ、野郎めが氣取つて、夜立ちしてしまつて、宇太郎めは猿眼を剝いて居やアがつたが、あの離れの木賃泊りの夫婦が、素敵と金を持つて居やアがつたから、むさんこに引ッたくつた。

孫六　巧い事をしやアがつたな。

友次　イヤ、取らうとしたら、その亭主めが病人であつたれど、五六間先へ投げられたから、逃げて來たのだ。

孫六　間拔けな野郎だ。おれを連れて行け。

友次　イヤ、てめえ達や、おいらではいけねえ。

孫六　ハテ、行かねえまでも、やるのが商賣だ。

友次　イヤ、痛い目をするだけ損だ。

ト爭ひながら向うへ入る。これを時の鐘になり、打上げると頭取出て、淨瑠璃名題太夫連名役人觸れあつて入ると、知らせにつき、正面の道具を切つて落す。

本舞臺、向うに秋草の道具幕。よき所に柳の立ち樹、同じく吊り枝。下の方、枕川と記せし榜示杭。この後ろ土手の蹴込み。下通り浪の打寄せ。この上に、常磐津連中居並び、直ぐに前彈きになる。

〽明日も來む野路の玉川萩越えて、色ある浪とうたかたの、姿景色のうつろひて、爰にも宿り澄む月の。

ト知らせに付き、道具幕切つて落す。

本舞臺、上下、彩色の川岸、眞中、川の浪次第に奥深く、岸通り一面、萩の花盛り、爰に善吉、烏帽子、狩衣、小さ刀にて、連錢月毛の飾り馬に乗り、これな仕丁五郎又、脊割り羽織、武者裁附け、草鞋がけ、

腰に小柄杓をさし、馬の口を取つて居る。この見得よろしく道具納まる。

〽夜晝なき樂しみの、榮華も暫し邯鄲の、枕川にぞ着きにける。

トよろしくあつて

五郎　枕川に着いたしましてござりまする。御上覽、然るべう存じまする。

善吉　何を云はつしやるか、わしには解らぬ。大方、馬から下りて、この景色を見ろと云はつしやるのか。

ト善吉、馬より下りる。

五郎　先づ〱。

ト上手の竹床几へ腰をかけさせる。

善吉　ハア……結構な涼み臺ぢやなア……時にお若いの、一體、わしはどうするのぢやの。

五郎　ハ、ア、その御不審は御尤も。この度、兄君御惱みにつき、御前に御世を讓り候ふとあつて、御迎ひに罷り越したる私し。何はさておき御前樣には、急ぎ御昇殿あつて然るべう存じまする。

善吉　ナニ上樣がお體樣が惡いから、わしに跡目を讓らうとて、迎ひにごんしたと云ふのか。有り難いやうなれど考へて見れば窮屈さうな。出來る事なら、やつて見せうが、一體、爰はなんと云ふ所だえ。

五郎　これは江州の野路の玉川に續く、枕川と申す所なり。見渡す水の岸にあるは、これぞ所謂る近江八景……里人これに來るを待ち、名所のあらまし、尋ね申すでござりませう。

善吉　オ、、さういふ間に、向うへ在所の女子が參る。問うて見ませえ。

〽豆を苅りやらば月夜に苅りやれ、月夜耻かし、こちや闇がよい。このしよんがえ、盥抱へて、きりゝとしやんと、からげた褄の染め模樣、いよ大和屋と譽められて、ぴらしやらもので歩み來る。

トこれにて向うより、おみつ、在郷娘の拵らへ、褄からげにて盥を抱へ、出て來り、花道にてよろしくあつて舞臺へ來り

みつ　所に見馴れぬお方々。爰へはどうして。

五郎　ムウ、これにましますは、この度君となり給ふ御方。見渡す名所を一々に、物語つてお聞かせ申しやれ。

みつ　わたしの父樣は、もと都にあつて、計らず遠國に流され、その先で生れ、やう〱この頃爰へ來た者ゆゑ、

所の事は存じませぬが、大内山の事なら父の話しで、少し位は存じて居りますわいなア。

五郎　ナニ、大内山の事なら存じて居ると申すか。

善吉　そいつは丁度幸ひだ。二人して大内の事を、教へてくれまいか。

五郎　ハ、ア、御意にはござれども、なか／＼一朝一夕に、申し上ぐるやうな事にはござりませぬ。先づ豐の明りの起りといつぱ。

〽豐の明りのその始め、高麗唐土より捧げたる、明珠の光り御車を、照らすに依つて名づけたり。

トおみつ、前へ出て

〽その後君が三芳野へ、みゆきまします御遊の調べ、夜遊の曲も聲澄みて、調べ床しき爪琴に、ひかれ御容の天乙女。

トよろしくあつて

〽佳姿と戀すてふ、雲のうは氣ぢやなけれども、實に君が色香のいとしさに、焦れて爰へ來給ひし、心の戀の情知り、直ぐにお寐間へ手を取りかはし、あの〻ものゝとさゞめ事、嬉しがつてゞあらうぞいなア。

五郎　さて又、御遊は小松曳。

みつ　ソレイナア。

〽二葉の松の千代かけて、君に捧げる壽を。

善吉　オツと待つたり。

〽こちの在所で云はうなら、仲よい友と打連れて、くはへ煙管で大根引、春陽の春の朝には、白馬を牽いて一年の邪氣を避けるの例しとかや〽時は違へど出來秋に、年貢積み出す飾り馬〽桃花の節會とり／＼に、歌も手爾葉の曲水は。

思ひ出した。

〽振舞ひのぐるり廻りの盃を、相の押へのお手元も、ひねり上戸と誹られて、腹立つて見つ、泣いて見つ、笑ひ壽くあやめ草、六つの司も葺き祝ふ、乞巧殿や組み糸の、誰れ文月の歌開き、更けては蟲の音も冴えて。

ト五郎又、おみつ、前へ出て

〽千種にすだく秋蟲に、浮かれて思ひ月影に、誰れを松蟲、焦れていとゞ、爰に機織り立ち明かす。

トよろしく振りあつて、善吉、烏帽子の上より後ろ鉢卷して、五郎又と袖を廣げて前へ出る。

〽きりはつたり、てう／＼、番ひの蝶の睦まじや、妻こうろぎのさむしろに、甲斐なく立たん、馬追ひ蟲よ、轡

りん〳〵鈴蟲の、聲も淸しく澄み渡り〽面白や。
ト善吉、五郎又、おみつ振りよろしくあつて
みつ　ほんにわたしも、もう內へ戾りませう。お前方、もし二夫川へござらつしやるなら、狐の渡るまでは向うの氷が、馬でも車でも案じはない程に、わしが案內して上げるゆゑ、斯うござんせいなア。
五郎　然らばこれより。
〽いざ、お歸りと進むるにぞ、かなたの馬を引き寄せて珊瑚の鞍にのりの道、供奉なしてこそ〽行く空の、不思議や一天晴れ渡り、顯はれ出し二つの日輪、昇ると見れば忽ちに、落ちて氷とくだんの人馬、共に行くへは白鷺の、羽音に夢は覺めにけり。假寐の夢は覺めにけり。
ト此うち五郎又、善吉を馬に乘せ、おみつ案內して上手へ廻つて、二の手の上へ廻はり、眞中へ來ると、大ドロ〳〵になり、高欄の中より鍍金の日輪現はれ、ちよつとあつて切り穴へ引き落し、三人、馬ともセリ下げ、山の張り物になり、上より杉林の道具を振り落す。太神はあふつて植込みに替り、上手の萩の茂みを下げて、眞心に見せたる古社に替り、吊り枝、打ち返して松になり、東西の窓蓋を下ろし、社の內より善吉、前幕の形にて走り出て、ホッと思ひ入れ。
善吉　オヽ、そんなら今のは夢であつたか。晝間から護摩の灰めに氣を揉まされ、おろくが指圖でこの社に、夜を明かさうと思ふ間に、氣勞れがして、ついトロトロとしたら、公卿さまになつて……なんぼ夢だつて、餘り馬鹿馬鹿しい。初めのうちは嬉しかつたが、氷が裂けて、がうがう〳〵。アヽ、思ひ出してもおつかない。
トこの時、梟鳴く。善吉恟りして
エヽ、怖い〳〵と思ふゆゑ、羽音に膽を冷させ居つた。さては梟めだな。
ト本釣り鐘。
ハア、鐘が鳴るが、もう何時ぢや知らぬ。アヽ、早う夜が明けてくれゝばよいがなア。
ト身を慄はす。この模樣よろしく、山颪し、時の鐘にて、

幕

五幕目

善吉住居の場
梓河原堤の場

役名……鴻臺漂二。鴻臺昌九郎。善吉伯母、おそ

や。同娘、おうし。伊加留源治。藪屋の小藤。盜賊、佐々宇六郎。百姓、勘太。同、豐作。同、峯七。同、久根作。同、幸八。同、三津六。同、卜作。多賀の郡司。白眉の長。木曾のおろく。貝崎善吉。

本舞臺、藁葺き、常足の屋臺。向う風壁。下手へ寄せて暖簾口、下手、佛壇、押入れ戸棚、上の方、貝屋の横を見せ、下の方、障子屋臺、いつもの所に門口、橋がゝりへかけて藪疊、すべて江州二大川の里、貝屋善吉住居の體。爰におそや、角行燈の掃除して居る。側におうし、世話女房の拵らへにて、髮を結ひしまひたる見得。隣り柿の木の唄にて幕明く。

うし 髷に惡い癖が付いたに依つて、獨りで結ふと、内の方へ捻れて……エヽ、自烈たいねえ。

そや コレ〳〵、おうし、善吉が久し振りで歸つたに依つて、今までのやうにつん〳〵物を云やるな。物和らかにして見せぬと、いろ〳〵惡い事があるぞよ。

うし いつ、わしがつん〳〵物を云つたえ。まだ歸りはしまいと思つたに、ほんに、こんな馬鹿々々しい事はないわいなア。

そや 成る程、如何に若いとて、あんまり慾を知らぬ奴。これまで奉公して居ても、鎌倉から親子二人、不自由なく暮らす程送つて寄越すは、わしを親身の伯母と思ひ、また其方を從妹合せの女房と思うてするばかりでもあるまい。定めて有り餘る程の金になる所に、奉公して居たからの事。なんでもあゝして戻つて來れば、しつかり持つて居るに違ひない。いま愛想を盡かされると、おれが思惑が違ふ程に、隨分ともに、ちやほやせにやならぬぞや。

うし コレイナア、お前ばかりさう思つても、持つて戻つた物は風呂敷ばつかり。中は着替へが二枚程と、後はせうどもない物ばかり。あんまり不思議でござんすゆゑ、先刻着物を着替へる時、懷を探つて見たれど、胴卷一つ持つては居ぬぞえ。

そや エヽ、鎌倉から百里餘りの道中するに、胴卷も財布も持たず、何を路用にして來やうぞ。まだ、わが身は、餘ッぽど人が善いわい。

うし エヽ、わたしだとて如才はなけれど、金などゝいふものは。

そや　ハテ、あのやうな奴ぢやもの、うつかりと本銭を拝ませるものかいなう。
うし　そんなら、今夜は久し振り、首ッ玉へ嚙りついても、なんでも持つて來た金高を聞かにやならぬ……聞かにやならぬと云へば、この中、無心に寄越した宇太郎とは、わたしが兄さんでござんすかえ。
そや　オイヤイ、わしが鎌倉に居た時、佐栗久平と云ふ人に連れ添うて、宇太郎と其方を産んだれど、野郎めは自由にならず、久平どのと喧嘩して、其方を連れて木曾の妻籠の、森村屋へ嫁づいて、その後で久平どのは、女の子を貰つたといふ事。どうなつた事やら。
うし　それでも淨瑠璃とやらを語るゆゑ、時松文字石とか名を取つて、稽古所を出して居るとの事ぢやござんせぬか。
そや　マア、なんでも構ふ事はないが、うるさいのは兄の宇太郎め、今度は斷り／＼するやう返事を出してやつた程に、もう寄越すまい……オヽ、もう善吉が戻るであらうぞや。
うし　母さん、早く今夜は寝ようぞえ。
そや　そこは好いやうに幕を切つてやる程に、いま云つた事忘れやんな。
うし　何にしろ、褌を一筋と笄を一本。それより先に半纏を一枚拵らへてもらはねばならぬわいなア。
そや　何にせい、飯の支度はよいかや。
うし　食べるやうにしてある程に、床も取つて置かうわいなア。
そや　それが肝心ぢや。
二人　オホヽヽヽ
　ト押入れより木綿蒲團を出して敷く。おうしは膳を拵へにかゝる。向うより下男勘太、鴻臺と記せし弓張り提灯を持ち、後より善吉、着流しにて出て來り
善吉　お忙しないに、送つて下さつた氣の毒千萬。モウ、モウ、歸つて休まつしやれ。
勘太　お内まで送つて行けと云ひつけられましたから、途中から歸ると、又どんなに叱られるやら知れませぬ。
善吉　今に伯父貴がやかましうござるかの。
勘太　イヤモウ、お前樣の伯父御ではござれど、村中では強慾馮二と申します。現在、甥のお前さんが、詰まらなくなつた時は寄せつけず、出世して戻つてござれば、冷汗の出るやうな追従。よくあんなに云はれたものだ。

善吉　コレ〳〵、ひよつと伯父御に聞えでもしたら、こなたばかりか、わしまでが憎しみ、兎角、人の噂は云はぬものでござる。
勘太　成る程、お前さんのやうな、正直なお方に引替へ、内の息子の昌九郎といふ野郎の、根性玉の惡い事といふものは。
善吉　これはしたり、又かいなう。
勘太　イヤ、本當の事だから……ハヽヽヽ。サア、參りませう。
　ト舞臺へ來り
ハイ、おうしさん、善吉さんのお歸りでござりまする。
うし　オヽ、これは御苦勞でござんした。
そや　入つて茶でも呑んで行かんせ。
勘太　イヤ、遲いと小言でござります…　左やうなら善吉さん。
善吉　大きにお世話になりました。伯父貴へも昌九郎どのへも、よろしう申して下さい。
勘太　畏まりました。おうしさん、三年餘りの未進を、一時に取立てると、善吉さんが迷惑。隨分細く長く苛めたがよいぞや。
うし　エヽ、モウ、そんな事ばかり、こちや嫌ぢやわいなア。
勘太　成る程、さうらしい顏付きぢや。ハヽヽヽ……左やうなら。
　ト引返へし入る。
善吉　もう、お床が廻つたの。
そや　イヽヤイノ、其方が草臥れたであらうと、おうしが氣を利かしたのぢやわいなう。
善吉　イエ〳〵、お前も知つての通り、わしは臆病者ゆゑ、道中早うから宿を取り、無理な道を歩かぬ上、今日は野上から五里足らずの所ゆゑ、ちつとも草臥れは致しませぬが、村中を廻つたところ、方々で呑めもせぬ酒を強ひられ、ほつとりしました。
うし　さうでござんせうと思うたゆゑ、迎ひに行かうかと云うて居た所ぢやわいなア。
そや　おうしに聞いたら、何も預かつた物はないと云ふゆゑ、さては懷の物を出すのを忘れて去んだか。前方と違つて物騷ゆゑ、案じて居りました。さうしてわが身、持つて居やらうなう。
善吉　そりや、何を。

そや　ハテ、金をいなう。

善吉　ムウ、忘れて居りました。

うし　ドレ、わたしがよい所へしまふ程に、出しなさんせ。

善吉　イヤ、爰には無い。

兩人　ヤ。

善吉　その事に付いて、恐ろしい話しがあるわいの。女房伯母貴も聞かつしやりませ。手紙でも云うて寄越した通り、鎌倉の藥屋といふ料理屋に、奉公いたしまして、客人はいふに及ばず、藝子衆や舞子衆に、心付けを貰ひました上、旦那から大枚五十兩餞別に下され、合せて百二十兩程になりました。なんでも早う國へ歸り、お前や女房に喜ばせ、失した田地も買ひ戻さうと、包みの中へ入れて、割掛けに致して參りましたを、惡い奴につけられてまして、二晩一緒に泊りましたが、やう／＼寢覺の里でその惡者が晝寢のうち、駈け拔けてヤレ嬉しやと思ふと昨日野上で、すんでに金を取られうとしたを、宿屋の下女めに胴巻のまゝ預けて、夜立ちにして、山中の辻堂で夜を明かし、危ふい命を助かりましたわいなう。

そや　そりやマア、ひやい目に遭うた事ぢや。シタガ、わが身は働らき者ぢや。アノ百二十兩、そつくりあるのかや。

うし　なんにせい、お前も又、宿屋の下女位に、大枚の金を預けるといふが。

善吉　イヤ／＼、その氣遣ひはない。女子の正直な事は、よう知つて居る。その上に、まだ慥かに、預かつたといふ證據に、この鼈甲の櫛をおこした……これを持たせてやれば、わしが行かいでも寄越す積りにして置いたわいなう。

そや　内はなんと云ふ宿屋ちやえ。

善吉　野上の松山與惣といふ内で、その女の名は、おろくと云ひます。

うし　さういふ事なら、間違ひもござんすまい。併し、寢越しにして、よい氣味でござんしたなア。

善吉　なんにせい、この櫛を氣の附かぬ所へ、しまつて置いてたもいなう。

そや　オヽ、佛壇の下段がよからうぢやないか。

善吉　ほんに、それがようござんせう。それはさうと、母者人の位牌へ挨拶もせなんだ。櫛をしまひながら、ちよつと回向いたしませう。

そや　オヽ、さぞ、姉貴も喜ぶであらう……オヽ、おうしよ、油がなかつたぢやないか。

うし　ちよつと、買うて來ようわいなア。

ト善吉は佛壇へ柄をしまひ、回向をしながら

善吉　アヽ、コレおうし、わが身、油を買ひに行くなら、村の歩きの所へよつて、明日は晝前から、村中の衆へ、御酒一つ上げたいと、觸れてもらつてたも……南無阿彌陀佛々々々々々……オヽ、その次手に、莨を買うて來てくれ……南無阿彌陀佛々々々々々。

うし　アイ／＼、合點でござんすわいなア。

ト油さしを持ち、橋がゝりへ入る。

善吉　ほんに、母者人の祥月であつたなア。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

そや　イヤモウ、月日の經つは早いもの。ホヽ、善吉どの、明日、村の衆を呼ぶなら奧の座敷がよからうぞや。

善吉　それがようござります。南無阿彌陀佛々々々々々々。

そや　拜んだら、飯を食べるであらう。ドレ／＼。

ト茶碗を落す。これにて茶碗割れる。

善吉　どうなされました。

そや　割れたわいなう。

善吉　ホイ、南無阿彌陀佛々々々々々。

ト鉦を叩く。この仕組みよろしく　　ひやうし幕

本舞臺、善吉住家の道具にて、これに淺黄幕を下ろし、幕外へ百姓豐作、爲作、米七、久根作、森八、三津六、いづれも羽織、着流しの拵らへにて立ちかかり居る。在郷唄にて幕明く。

豐作　時に皆の衆、勘太どのは、どこへ行かれたな。

爲作　いま源田新田の十作どのを誘ひに行かれた。

米七　その外、村中一統を呼び集めると云つて、行かれたわいなう。

久根　それについても、あの貝屋の善吉どのは、鎌倉へ稼ぎに出かけられたは

森八　丁度足掛け四年前。

三津　月日の立つのは、早いものではござらぬか。

豐作　それにつき、善吉どのから今日正九ツに、打揃うて來るやうにとの事でござるが、定めて馳走も

皆々　叮嚀な事でござらう。

三津　コレ／＼、兎やから云ふうち、振舞ひの刻限。
粂七　定めて新家の畑穴の所へ、皆の衆が待ち合せて居るであらう。
豊作　そんなら皆の衆。
皆々　サア／＼、ござれ／＼。
ト橋がゝりへ入る。これにて淺黄幕を切つて落す。爰に善吉、脚絆を當てゝ、おうし、羽織を着せて居る。おそや、履物を出し
善吉　アヽ、今朝は寢過したと見えるわい。ドレ、一走り行つて來う。おれが戻らぬ其うちに、村の衆を呼んで御馳走してくれ。どうで夜に入らう程に、急いで戻つて來る。
ト門口へ出かけて
オヽ、あの佛壇の櫛を持つて行かねばならぬわい。
うし　わたしも、さつぱり忘れて居た。
そや　よう思ひ出したなう。
ト　おうし、佛壇の抽斗しを尋ね
うし　ヤア、こりやマア、どこへやつた事やら。
善吉　ナニ、櫛が見えぬ。わしは昨夜袋の所へ、紙に包んで……こりやどうしたのであらう。

うし　アヽ、油染みた櫛ゆゑ、ひよつと鼠が引きはせまいか。
そや　いたづらな畜生ゆゑ、引いて行つたに違ひない。
ト下の押入れを明けて、あちこちを見る。
善吉　あのやうな櫛ゆゑ、盜人が入つたとて、氣の附く事もあるまいに。
うし　斯ういふ事なら鏡臺の、抽斗しへでも入れて置けばよかつた。と云つたところが後の祭り。
そや　なんにせえ、あの櫛が無くては、金を渡さぬと云ひはせまいか。
善吉　イエ／＼、決して其やうな事はござりませぬ。わたしが參つて譯を云へば、金は渡してくれますが、母の筐だと云つたあの櫛を……マヽ、それも是非がない。金を遣つてあやまつたら、料簡してくれるであらう。そんなら伯母者人、おうしよ。
うし　櫛は後で搜して置く程に
そや　早う、取つておいや。
善吉　ドレ、行て來ようか。
ト向うへ入る。
そや　ほんに憎い鼠めぢやわい。天井へでも啣へて行つた

か。
うし　なんの鼠に引かれたとて、惜しくもない代物だ。
そや　櫛はどうでもよけれど、金と釣替へだから、やきもきするのおやわい。
ト橋がゝりより、勘太先に十作、以前の百姓皆々出て來り
勘太　昨夜はおやかましうござりました。サア、皆の衆、入らつしやれ。
ト皆々内へ入り
十作　さて、おそやどの、善吉どのが戻られて、さぞ、おうしどのも喜んでござらう。
そや　オヽ、皆さん、よう來て下さんした。マア、此方へござらつしやれ。
豊作　今日は又、招きにあづかり、忝なうござるぞや。
爲作　昨日逢つたが、善吉どのは好い男になつて歸られたなう。
三津　どうでも、鎌倉の水が染みて、水際の立つた器量になられた。
春八　仕合せな者は、嫁女のおうしぢやの。
久根　定めて善吉どのを久し振りで、ひどい目に遭はせるであらう。
米七　これから滅多に冗談は云はれまい。
うし　なんにせい、奥の座敷へ行つて、ゆつくりと上がつて下さんせいなア。
勘太　今夜は夜明かし御馳走になつて、おうし女郎の邪魔をしてやらねばならぬ。
そや　いつもながら、勘太どのゝおどけた事ばかり。
うし　サア／＼、ござんせいなア。
十作　そんなら皆の衆。
ト十作、立ちかけて疊に躓づき、下にへたるを道具替りの知らせ。
アヽ、痺れが切れた。
皆々　サア、行きませう。
トこの見得よろしく、道具ぶん廻す。
本舞臺、向う、通しの玉椿の生垣、所々に立ち樹、上手に出茶屋、下手に掛け稻、爰におろく、床几に腰をかけ、茶を吞んで居る。茶店の亭主、盆を持ち、立ちかゝり居る。この見得よろしく道具納まる。
茶亭　二夫の里と申しましても、なか／＼廣い事、この二

里四方は皆、一つ村でござります。
ろく　貝屋善吉さんと申すお方の内は、御存じござりませぬか。
茶亭　それは、坂を越しまして、松並木がありますが、それを眞直ぐにお出でになりますと、川がござります。その岸を十町ばかりお出でなされますと、左手の大きな内が、貝屋でござりまする。鎌倉から昨日歸られたさうだが、その喜びにござらつしやつたと見えますな。
ろく　イエ、外に用向きがござんして、遠方から參りましたゆゑ、きつう草臥れましたわいなア。
茶亭　左やうでござりますか……オヽ、あそこへござるは慥か善吉どの。
ろく　ほんにさうでござんす。嬉しや〳〵。
　ト向うより、善吉、足早に出て、上手へ行きかけるを
ア、申し、善吉さんではござりませぬか。
善吉　オヽ、お前はおろくどのか。ヤレ〳〵、野上に行く所でござつたに、どうしてお前は。
ろく　サア、お前に聞きたい事がござんして、それでわざわざ來たわいなア。
善吉　それはマア、遠い所を御苦勞でござつた。
　ト茶店の亭主、茶を善吉に酌み、入る、
わしも急いで行く譯は、いつぞや妻籠の宿にて、譯を聞いたあの櫛、野上から持つて歸り、昨夜佛壇へしまつて置いたが、鼠の業か、どう尋ねても知れぬゆゑ、面目もない事ぢやが、こなさんの望みの通りの品を取らする程に、どうぞ料簡して下され。其うちには、どうなとして尋ね當てる程に。
ろく　そんなら櫛は、昨夜のうちに、失うたと云はしやんすかえ。
善吉　サアそれゆゑに。
ろく　モシ、その櫛は、今朝早う戻つて、爰に挿して來たわいなア。
　ト善吉、愕りして
善吉　そりや又、どうした事で。
ろく　さては、お前は、また惡い人に騙かられたのぢやな……今朝早う、年の頃は三十あまり、鼻筋の通つた、賤しうもない人が來て、わたしを呼び出し、わしは善吉どのゝ隣の、彌太八と云ふ者でござるが、一昨日はお前の世話で危ふい所を遁がれて、首尾よう内へ着きました。禮ながら來るのぢやが、伯母貴が夏中から煩らつて居た

ところが、戻ると心がゆるんだやら、直ぐに往生したゆゑ、行く事ならず、先立つ物は金ぢやゆゑ、櫛を證據に頼まれて、取りに參りましたと云はしやんしたゆゑ、約束なれば櫛を取つて、金を渡したが、後でつく／＼考へて見るに、どうも心に落ちぬに依つて、お前に聞き合はせに來たのでござんすわいなア。

善吉　そんなら、櫛を證據に金を渡してしまつたか。ヤ、ヤ、、。

　ト大悄り。おろく、思ひ入れあつて

ろく　そんなら、お前が寄越したのではござりませぬか。

善吉　その上、この二夫の里には、彌太八と云ふ人はござらぬわいなう。

ろく　そんなら、騙りでござんしたか。

善吉　また百姓衆も達者でござるもの。なんにせえ、内の樣子を知つた者に違ひない。併し、櫛の事を話す時には、女房と百姓者人の外に、聞いて居た者はないに、此やうな不思議な事は。

ろく　こりや、マア、ひよんな事になつたわいなア。

善吉　なんでもこの盗人は、近所にあるに相違ない。幸ひ今朝から村中を集めて、振舞ひをして居るゆゑ、御苦勞ながら。

　トおろくに囁く。

さうすれば、解るは治定。

ろく　合點ぢやわいなア。

善吉　禮にも行かいで、いろ／＼な事を……その上での。

　トまた囁く。

ろく　そんなら、これから。

善吉　ア、、コレ。

　ト押へるのが木の頭。

エ、、靜かにしやれ。

　トこの仕組みよろしく、在鄕唄にて道具ぶん廻す。

本舞臺、平舞臺、向う鼠壁、下手へ寄せて納戸口。上手、九尺の障子屋體、下手、飼屋の體を見せ、爰に以前の勘太、十作始め六人居並び、酒肴を取散らし、おうし、おそや、馳走拵へをなして居る。甚九の合ひ方にて道具納まる。

勘太　サア／＼、もう一拳ゆかう／＼……ヤア、ヨイヨイヨイ……又おれが呑むのか。エ、、口惜しいわえ。

十作　それはさうと、大庄屋の鴻臺鴻二どのは、なぜ遲い

事やら。
豊作　イヤ、馮二どのは、年寄りの事、遅いもいゝが、息子の昌九郎め、何をして居るか知らんて。
勘太　慥か昨夜遅う、釣りに行くといふ事であつたが。
渠七　何にしろ、善吉どのとは從弟同士の事、來て取持ちをしさうなもの。
爲作　夜釣りに行つて戻らぬとは、人を馬鹿にした男だ。それで人の束ねが出來るものか。
豊作　なんの、元は善吉どのの親御が、村の支配をしてござつたのを、馮二どのが引ツたくつたやうなものぢやて。
渠七　なんでも構ふ事はねえ。叩き潰るがいゝ。テウ、おうしどの。
うし　イエ、此方の内であの衆の、蔭口を云うては惡いわいなア。
そや　善吉は身寄りなれども、わしらは他人ぢやゆゑ、惡う云ふかと思はれてはならぬわいなア。
うし　まして、あそこに勘太どのも聞いて居るのに。
勘太　イヤ、その斟酌には及ばぬ。叩き潰るなら、助鐵砲に出る心ぢや。

十作　コレ／＼、人の善し惡しは云はぬもの。マア、大きな物で始めようではござらぬか。
皆々　それがようござる。サア／＼。
ト酒盛りになる。在鄕唄にて、向うより馮二、木綿袴、羽織、一本差し。昌九郎、同じく、羽織、着流しにて出て來り
昌九　親仁樣、急いで行くには及ばぬ。どうせ碌な物は喰はしやせぬわい。
馮二　エヽ、馳走が喰ひたうて行くのぢやない。善吉はおれが甥、われが從弟。久しう義絶して居たが、鎌倉で金も澤山儲けて來たといふ事ゆゑ、もう附合ひしても惡うはあるまいと思ふからだ。
昌九　イヤモウ、あんな奴に附合うて、德のゆくものではござらぬ。併し、折角の馳走だ、喰ひながら胡麻を摺つて、嬉しがらしてやらうかい。
馮二　サヽ、來やれ／＼。
ト舞臺へ來る。
勘太　イヤ、叮嚀の上に、第一今日は、おいらが内のむづかしやが居ないから、何よりの馳走ぢや。
十作　ほんに、あの馮二親子が居ぬと、何よりでござる

皆々　大きに左やうサ。

ト馮二、昌九郎、門口に窺ひ居て、内へ入り

馮二　何が大きに左様だ。

勘太　ソリヤ、來たぞ。

十作　オヽ、お前はお庄屋様。

皆々　ようお出でなされました。

馮二　勘太、おのれは、ソリヤ來たとはなんぢや。主に向つて

昌九　親仁様、おいら親子が來たのが、氣に食はねえのだらう。

うし　又そんな事を。默つて居やしやんせいなア。

そや　大庄屋様が坐らつしやらぬと、御馳走が實にならぬと云うて居た所ぢやわいなア。

馮二　さうなくつちやア、ならぬ筈ぢや。

昌九　水呑み百姓め、をかしい事を吐かしやアがると、年貢の時に、ひどい目に遭はしてやるぞ。

皆々　イエ／＼、私しどもは

ト馮二、昌九郎、上座へ直る。おうし、茶を酌んで出し、おそやは、兩人へ吸ひ物膳を据ゑる。

馮二　コリヤ／＼、久根作、お主の座は、そこぢやあるまい。

久根　祭禮の振舞ひの時は、傳之丞が次に坐りました。

昌九　エヽ、なんであらうと、親仁どのが云はれるのに、下がりやアがらぬか。

久根　それでも御領主様の。

十作　ハテサテ、大庄屋どのゝ指圖、否を云うてなるものか。

ト久根作、下へ下がる。

うし　マア／＼、一つお始めなされませ。

豐作　サア、庄屋の御親子から

皆々　お箸をお取りなされませ。

ト奥より善吉出て

善吉　オヽ、こりや皆の衆。

うし　もう歸らつしやつたのか。

そや　早う戻らつしやつたなう。

善吉　ヤ、伯父様、昌九郎どのも、よう來て下されました。

そや　ヤア、其方は、もう野上まで行ておぢやつたか。

善吉　なんの、道まで行つたれど、村の衆を招いて置いて、わしが居ぬも失禮ゆゑ、戻つて參りました。

うし　それでは、金を取つてはござらぬかえ。

善吉　ハテ、おれが物ぢや。今日に限つた事もない……おうし、この脚絆や脇差を片付けてくれい。ドレ、お相をいたしませうか。

皆々　サア〳〵、ござらつしやれ。

善吉　これは伯父貴始め村の衆、よくござらつしやりました。

馮二　善吉、思ひがけない馳走になりました。

ト善吉、眞中へ出る。

昌九　さて、善吉どの、從弟同士は内證の事。改めて、村中の者の總代に、挨拶いたします。先づ以て、其方樣には、恙なく歸國さつしやれて、此やうなめでたい事はござらぬ。就ては、厚き御馳走になり、村中一統、よろしくお禮を申しまする。

皆々　エヽ、おめでたうござります。

善吉　これは〳〵、御叮嚀な御挨拶にあづかりまして、甚だ痛み入りまする。御存じの私しゆゑ、何も御馳走はござりませぬが、せめてものおもてなしに、三年の間いろいろな面白い私しが身の上話、お話しを致しませう。

馮二　イカサマ、鎌倉は繁昌所で、いろ〳〵珍らしい事があつたであらう。

昌九　ゆる〳〵話して聞かさつしやれ。

皆々　面白い事であらうわいなう。

善吉　伯父貴を始め、皆の衆、お聞きなされて下されませ……不器用な私しゆゑ、鎌倉へ下りまして、これといふ奉公も出來ず、滑川の藪屋と申す、料理屋へ米搗に入りまして、大切に勤めましたを、主人の目にとまり、飯焚と風呂番とを兼帶で致すやうにとござりましたゆゑ、鹽噌薪の入費をいとふやうに致しましたが、また主人の氣に入りまして、若い者に出世しまして、サアそれからは客衆は元より、内へ出入る藝子衆や、舞子衆の心附けを貰ひ、僅かな間に六十兩餘りの金子が出來ました。それを主人へ預け置きましたれど、どうぞ一度は國元へ歸り、失うた田畠を少しでも買ひ戻して、伯母や女房にも心を安うしてやりたさ、また皆樣にお目にかゝりたさ、やうやうと御主人に、お暇を貰ひましたら、餞別ぢやとて、また五十兩くれられました。

皆々　イヤ、心の大きい人でござるなう。

善吉　その上、内儀を始め、内外の者の餞けで、路用は澤山、それゆゑ、百二十兩の金を割掛けに致し、戻つて來る道で護摩の灰に附かれ、一昨日の晩は、その盜人と一

緒に野上の宿へ泊りましたが、賴もしい宿屋の女子に、その金を預け、櫛を證據に持つて戻りまして、先づその難は遁がれました。

昌九　そりや、いゝ鹽梅に遁がれさつしやつたなう。

善吉　イヤ、それは遁がれましたが、又その預けた金を、今朝方盜まれました。

皆々　ヤア〳〵。

うし　そりやマア、ほんまの事でござんすかえ。

そや　わが身、野上へも行かずに、どうしてそれが知れたぞえ。

善吉　サ、それは……ムウ、ソレ、いま手紙に詳しう書いて來ました。佛壇の抽出しへしまつた櫛を盜んで、今朝早う金を受取りに行つたゆゑ、櫛は恙なく、その下女の手へ戻つて居りますわいなう。

勘太　そりや、早く詮議をしたら、知れさうな事でござるの。

十作　なんでも、内の勝手を知つた者でなければ、出來ぬ業ぢや。

昌九　何にしろ、甘口な事では知れる事でない。

豊作　その盜人が知れたら、村中寄つてかゝつて

米七　恐ろしい目に遭はしてやらうに

爲作　これから、いつそ手分けして

皆々　わしらが詮議しませうわいなう。

馮二　アヽ、コリヤ、どうしてそれが解るものか。この馮二が鑑定には、その旅籠屋の下女が盜んだに違ひない…………ハテ、善吉が櫛を失つたと云うたゆゑ、似寄りの櫛を出して、金はこれと引替へに渡したと云ふ云ひ拔け。この上は、手前がその女を呼び上げて、責め問はゞ、直ちに白狀いたすは必定ぢやてや。

昌九　成る程、村長を勤め居らるゝ程あつて、親仁樣の隈の附け所。違ひはない。善吉どの、直ぐに支度して、親仁樣と同道さつしやれ。

そや　これはしたり、善吉、斯うした時には、村長を伯父さまに持つたが強身ぢや。

うし　なぜ、其やうに考へて居やしやんす。その上、手紙位で、大枚の金を盜まれた事、どこでお前、知らしやんしたえ。

善吉　ハヽヽヽ、今日樣がお出でなさらずばいざ知らず、盜んだ事をせずに溜めた金、行くへが知れいでならうか。伯父者人、其やうに案じるには及ばぬ。金を掠めた奴は、

知れてあるわい。

皆々　ナニ、知れてあるとな。

善吉　サア、櫛を盗んで金を掠めた奴は、伯母者人の惣領息子、昌九郎、お主ぢやわい。

皆々　ヤア〳〵。

昌九　ナヽ、なんと申す……コレ、善吉、わりや氣が狂つたか。村長を勤むる鴻臺馮二の忰昌九郎を、騙りだと云つたな。それにはなんぞ證據があらう。サヽ、それを聞からかい。

馮二　アヽイヤ忰、此やうな無法者に構ふと、われまでがたわけ者になる、これに任して置きやれ……ナニ、善吉、わりや、マア、どう致したものだ……ア、聞えた。われが親は、この二夫村の大庄屋を勤めて居たれど、長長の煩らひに身代もしもつれ、相果てたる後は、この伯父に後役を仰せ付けられしを、家に傳はつた役目を、伯父に取られたなどゝ、嫉ましく思ふゆゑ、なんぞに付けて恨みを晴らさうと云ふ心立て。イヤハヤ、身内ながら呆れ返つた大たわけ。それとも、なんぞ證據があるか。

昌九　サア、ぞれを吐かせ。

兩人　キリ〳〵と吐かし居らう。

善吉　ハテ仰山な。見す〳〵科もない者を、盗人騙りと云はれうか。慥かな證據をお目にかけう。

ト上手の障子屋體へ向ひ

おろくどの、御苦勞ながら爰へ來て、證人に立つて下さい。

ト奥にて

ろく　ハイ〳〵。

ト奥より出て來り

左樣なら、皆樣、御免なされて下さりませ。

そや　ヤ、其方は娘。

うし　オヽ、妻籠の姉さん。

ろく　母さん、妹、よう無事で居てたもつたなア。

勘太　母さんと云ふからは、そんならお前は。

ろく　ハイ、元わたしは、木曾海道の妻籠宿、森村屋和五郎と申す者の娘、幼ない時に母さんに別れ、その頃、鎌倉から娘を連れて、雇はれてござんした、このお人が、いつとなう、わたしの母さんに直つたなれど、父さんの長の煩らひを見限つて、おうしを連れて、駈落ちしなさんしたが、その後の母さんが、善吉さんの伯母樣にて、妹のおうしを女房といふ事は、夢にも知らず、ほんにマ

ア、これが命あればなんとやら。

善吉　このおろくどのを同道して戻り、見覺えの人はないかと尋ぬれば、昌九郎ぢやと云はれたれば、サア、昌九郎、この女が來たからは、知らぬとは云はれまい。こなたがこのおろくに櫛を渡し、隣りの彌太八と云ふ者だと拵らへ事。また留守居に伯母貴を頼んで置いたが、わしが鎌倉より歸つたのを、ヤレ嬉しやと、心がゆるんだやら、死去しられたので、先立つ物は金子ゆゑ、頼まれて櫛を持つて來ましたから、どうぞ金と引替へにしてくれろと、百二十兩の金を騙り取つたと、吐かしてしまへ。

昌九　うぬ、血迷うて何を吐かす。こりやア女と馴れ合つて、おれに無實を云ひかけるのだな。おれは昌九郎と云ふ名は持つて居るが、彌太八と云ふ名は知らぬわい。また世の中に、似た者はいくらもある。サア、善吉に頼まれて、拵らへ事と吐かしてしまえ。

ろく　ホ、、、なんぼ雪を墨と云ひ通しても、遁がれぬ證據は、ナア、善吉さん。

善吉　サア、おれも、伯母者人と、繋がる縁の女房、おうしが悪事を云へば、この身の耻と堪えて居たが、是非がない。昌九郎、お身が今朝野上の宿で、金を奪取り、うろたへ廻つて歸つた跡に、あぢいな物が落ちてあつたわい。

昌九　イヤ、此奴、さま〴〵な事を拵らへ、科に落さうでな。サア、拵らへ物の證據見よう。

善吉　ソレ、これに覺えがあらう。

　ト文を出す。

昌九　ヤ、南無三。それを。

　トおうし、昌九郎、取りにかゝる。昌九郎を突き飛ばし、おうしを當て

善吉　アイヤ、ちつとさうもあるまいかえ。ハ、、、皆の衆の思惑に、文言讀んで疑ひを

馮二　アイヤ、何か譯は存せぬが、罪の疑はしきは、輕く計らふのが世界の掟。

十作　イエ、後の心得でござる。

皆々　讀んで下されい。

善吉　「文して申し上げまゐらせ候。先刻ちよつと申し上げ候ふ、金子を預け候ふ印に、持ち歸りし櫛は、佛壇の下へしまひ候ふ事ゆゑ、御前樣仰せの通り、今宵善吉が寢込みを、わたしが盗み出し、お手渡し申すべく候ふ間、夜更けて裏の背戸口まで、ちよつとお忍び下さるべく候ふ。

所は先刻申し候ふ通り、野上の宿、松山と申す旅籠屋の下女おろくと申す女、これをお忘れなく、よろしく御願ひ申し上げまする。首尾よく金を取り得候ふ上は、その金にて約束通り、一先づ、この地をお連れ退き下され候ふやう、願ひ上げまする……昌九郎さま參る。うしより」。

皆々　ヤア〳〵。

善吉　善吉が留守のうち、昌九郎と密通いたし、鎌倉より貢ぎし金も、おのれが榮耀に使ひ捨て、剰さへ、持ち歸りし大枚の金を騙り取りし上、二人駈落ちしようとまで、細々書いた返す書。コレ、昌九郎、覺えがないとは云はれまい。

昌九　サア、それは。

善吉　殊さら文の樣子では、其方がおうしに櫛を盗んで渡せよと、云ひ付けたるこの文體。

兩人　サア〳〵〳〵。

善吉　騙りの根ざしの大惡人、コレ、天道樣が見てござるわいやい。

昌九　ムウ。

十作　そんなら騙りの本人は、大庄屋の息子。

豐作　昌九郎どので

皆々　ござつたか。

トこれにて昌九郎、おうし、面目なき思ひ入れ。

勘太　おれも、もうそんな人は主人に持たぬ。これから内へ行て、息子どのゝ手箱を改め、その金子を持つて來ようわい。

皆々　オヽ、わしらも同道して行きませう。

勘太　サア、ござれ〳〵。

ト勘太、橋がゝりへ走り入る。百姓、皆々も行かうとするを

昌九　うぬ、主人の手箱を搜す、憎き奴め。

ト立ちかゝるを、馮二、衿髮を取り、扇子にて打ち据ゑ

馮二　ヤア、云はうやうなき獄卒め。おのれ、村長の子と生れては、理非善惡の差別を、辨まへねばならぬ筈を、從弟の善吉といふ主ある女と、密通せしのみならず、金子まで掠め取りし極重惡人、七生までの勘當ぢや。

うし　そんなら、昌九郎さんを勘當とな。

トおそや、おうしを引きつけ

そや　コリヤヤイ、人でなしの恥知らず、おのれが始末をこの母も、知つて居るかと皆さんの、思惑も耻かしい。

三年この方留守を守つて居たのが、皆仇事となつたわやい。おのれ、子でないぞ。斯うして。

ト煙管を振り上げるを、おろく止め

ろく　コレイナア、待ちなさんせ。この文を善吉さんに渡したは、お前を後の母さんとも、おうしが爰の女房とも知らぬゆゑのこの始末。さら／＼二人に恥かゝさうと、した事ではござんせぬ。さりながら、この書き物が出ぬ時は、證據なければ水掛け論。剰へ、わたしまでを科に落さんとさしやんすゆゑ、それゆゑおうしが讒奏も、滿座の中で云はねばならず、併し、その文と、騙られた金と替へ／＼にして、この場の事はこれぎりに、皆さん、必らず洩れぬやう、お頼み申し上げますわいなア。

善吉　何がさて、元を糺せば皆親類、金が戻れば遺恨もこれぎり。

豐作　成る程、善吉と云ふ名の通り

皆々　感心な人でござるなう。

ト橋がゝりより勘太、大肌脱ぎにて、件の胴卷を持ち出て來り

勘太　息子どのゝ葛籠の底に、金があつた／＼

皆々　金がござつたか／＼。

ト勘太は胴卷を憑二の前に出す。

憑二　善吉、面目もなき仕合せながら、盜人を捕へて見れば我が子とは、いま身の上に覺え申した。コレ、昌九郎、今日が日までも、それ程までの、悪い奴ぢやと知らずに居たのが面目ない。定めてこれも出來心。イヤサ、見下げ果てた不孝者めが。

昌九　イヤモウ、なんと詫びる詞もござりませぬ。これと申すも、主あるおうしと不義密通、それからの出來心。それが顯はれ親仁樣の御勘當、今さら後悔いたします。どうぞ赦して下さりませ。

憑二　エ、、モウ／＼、そんな奴には、おりや構はぬ……善吉どの、面目ないがこの金に、ちちうがないか、よう改めて受取つて下され。

ト出すを、善吉、胴卷の中より出し

善吉　これはマア、暫しの間も、伯父者人に心勞をかけ、眞平御免下さりませ……金子は、わたしが封を付けし儘、四十兩包みが三つ、相違ござりませぬ。併し、昌九郎どのとて從弟同士、恥を與へたなんぞ報いを……オ、、さうぢや。

トおうしの側へ來て

ヤイ、おうし、夫婦の縁もこれ限り。おのれが書いたこの文を、去り狀代りに受取り居らう。、

ト件の文を投げつけ

ナニ伯父者人、主なき馬あれば、買ひ取つてこれを養ひ、里に主なき女あれば、これを娶る。いま善吉が捨てた女を、伯父者人の情にて拾ひ取り、昌九郎どのゝ心が直つたなら、娶合はせて下さらば、伯母貴も路頭に迷はぬ道理。聞き屆けては下さるまいか。

馮二　ナニサマ、おうしは兎も角も、おそや後家は、今更この家にも居られまい。おそや親子は身が引取り、養育して遣はさう。

善吉　エヽ、忝ない。私しも、考へて見ますれば、料理屋でお客の貰ひ溜めで、失くした田地を買ひ戻さうとは、心得違ひ。草葉の蔭の親達の、心に叶はぬ金ゆゑに、此やうな仕儀になつた道理。この金を三つに分け、一包みをば伯母者人の養育金、一包みは勘當受けられし、昌九郎どのゝ手當。殘り四十兩はわしが元手と、斯うしたなれば、念も殘らず、恨みもない。サア、心よう、納めて下され。

昌九　ムウ、すりや、この四十兩の金をくれるか……その志しを聞けば聞く程、穴へでも入りたい。この金を受取つては濟みませぬ……と云ふ所ぢやが、斷わりを云ひ切つては、折角の深切を背き、實意をもどくは冥利が惡い。勘當請けて便りない身の上ゆゑ、折角のこの金、わしが貰つて置きまする。忝なうござりまする。

ト財布へ納める。

勘太　イヤモウ、善吉どのゝ料簡、誠に感心しましたわい。

豊作　併し、おうしどのも、今度はじゆんじゆくしませうわい。

馮二　コリヤ〳〵。この畜生めを村境より、叩き出してくりやれ。例へ打ち殺しても、恨みとは思はぬぞよ。

爲作　締めた〳〵。今までの意趣返し。

春八　脚も腰も立たぬやう。

皆々　叩き出せ〳〵。

善吉　コレ〳〵皆の衆、手荒くしなさるな。

勘太　サア、昌九郎どの、今までは村長どのゝ若旦那、ゑぢりちらした返報を、今するぞよ。サア〳〵。

皆々　立たつしやい〳〵。

昌九　エヽ、コレ、てまへ達も、そんなに云ふなえ……親仁樣には勘當請け、善吉どのへ對しても、長居が出來る

ものか……併し、善吉どのゝ志しの金、それを元手にどうともして。

トおうしにこなしあつて

マア、村境の庚申堂の、庵主の所へ行て、支度をした上。

ト馮二へ思ひ入れ。

皆々　サア、行かつせえ〳〵。

昌九　親仁様、随分お達者でお出でなされませ。

皆々　歩まつしやれ〳〵。

ト昌九郎先に、勘太、十作、百姓皆々付いて向うへ入る。

馮二　子は三界の首枷とは、よく云うたものぢや。ナニ、善吉も知つて居やらう。いま一人、娘があつたれど、六つの年にかどはかされ、また悴めを勘當したれば、世に便りなきこの馮二、随分ともにこの上は。

善吉　なにが疎かに致しませう。昌九郎どのゝ事も、やがて皆の衆を頼みまして。

馮二　イヤ、あの畜生が事、構つて下さるな。

そや　そんなら、わたしら親子の者は。

馮二　今日から、おれが預かりまする……サア、行かつしやれ。

善吉　左様ならば伯母者人。

馮二　イヤ、いろ〳〵の苦勞を掛け申した。

善吉　ハテ、これも内輪の

ろく　少しの間違ひ。

馮二　そんなら善吉。

善吉　お靜かにお出でなされませ。

ト馮二、おそや、おうし、向うへ入る。

さて、おろくさん、この金の事に付いては、こなさんのいろ〳〵とお世話になりました。なんと禮を云はうやら、忝なうござりまする……伯母貴は、心立てのよからぬ人なれど、養育金に四十兩添へてやつたも、一家のよしみ。あの伯母がこなさんの父御へ、二度添ひに入つた後に、衣類その他持ち退いて、お前に難儀かけし不人情。詫びの爲め、且は今までの禮心。爰に殘つたこの金は、ほんのわしが心休め、どうぞ納めて下さるまいか。

ト金を出す。

ろく　善吉さん、そりや、お前の詞とも覺えませぬ。お前の伯母御さんは、心の惡しい人にせい、わたしが一旦母さんと頼んだお方、幼ない時から育てられた恩がござんす。貯への金着類、着こそげ持つて退かしやんしたとて、

なんで恨みと思ひませう……また父さんの病氣手當に、お前に嘘云うて、無理に泊めたその時に、お前は貯への其うちから、惠んで下さんしたあのお金、その恩返しと思ふゆゑ、お前の力となつたのでござんす。伯母御さんの事につき、父さんへの義理立ても、それで事は濟んである。お禮を受けうとお世話をば、した事かと思はしやんすは、そりや胴慾ぢやわいなア。

善吉　イヤ、決してさう云ふ心でない。一昨日の夜、生死にかゝはる所をば、お前に救はれたれば命の親、金錢を何程出したとて、お禮は盡されぬ。これはほんの志し、どうぞ納めて下さい。

ト奥にて

白眉　アイヤ、その譯、わしが附けてやりませう。

ト白眉の長、一本差しにて出る。

善吉　ヤ、あなたは鎌倉の旦那樣、爰へはどうして、いつの間に。

白眉　オヽサ、さぞ恟りであらう。思ひがけないと云はうが、我が身ながらも不思議に思ふ。マヽ、掻摘んで話して聞かさう……おれには一人の兄があつて、身状が惡さに鎌倉を出奔し、どこへ行たかと思つて居たところが、わが身の立つたあの日の晝頃、飛脚が持つて來たは兄貴の手紙、今は美濃の野上にて、松山與惣と云ふ旅籠屋へ入り聟に入つて居るが、去年からぶら／＼煩らひ、今度は暇乞ひかも知れぬゆゑ、もし伊勢參宮にでもござるなら、今一度逢ひたいと云ふ文面。隣國ゆゑ、兄の死目に逢うて、善吉が在所も尋ね、一緒に鎌倉へ連れて歸らうと、直ぐに立つて、今朝四ツ頃に兄貴に對面、いろ／＼の話しのついで、今朝斯ういふ事があつたゆゑ、內のおろくと云ふ女を、やつたと聞いて金高と云ひ、さては其方の災難と、後を追つて尋ねて來て、表から立ち聞けば、大勢の聲でやつさもつさ。さては、金の一件での事であらうと、裏へ廻つて殘らず聞いた。善吉、今に始めぬ天晴れな料簡ぢや……この女中が、兄貴の所のおろくと云ふ人か。こなたの身の上も聞きました。イヤモウ、若いに似合はぬ、揃うた實體な手合ひぢやなう。

善吉　すりや、あなたの實の兄御樣は、おろくが主人、松山與惣どのでござつたか。

ろく　ほんに、緣と申すものは、不思議なものでござりますなア。

善吉　何は兎もあれ大恩の上、見る影もない私しの、先の

先までお案じなされ、この江州までお尋ね下されまするとは、冥加の程が恐ろしうござります。何は兎もあれ、御酒一つ。ドレ、お肴を。

ト立ちかゝる。

白眉 アヽ、コレ、馳走なら食べたも同様、必らずともに構やるな。マヽ、下に居やれ。時に、人の家に女房がなければ渡られぬ。そこを思うておれが思ひつき、なんと相談に乘る氣はないか。

善吉 あなたの仰せなれば、如何やうな事なりと、背きませうやうはござりませぬ。

白眉 外でもない。兄貴に聞いたおろくが眞實、なんと夫婦になつてはくれまいか。

善吉 エヽ……これはマア、思ひがけない御存心。愚鈍な私し風情が、どう致しまして、發明なおろくどのゝ心に叶ひませう。

ろく あのマア、云はしやんす事わいなア。どうしてマア、善吉さんに、わたしのやうな、不束者がお氣に入りませうぞいなア。

白眉 サヽ、兩方が辭退ばかりしては、譯が解らぬ。それとも心に叶はぬなら。

善吉 どう致しまして、私しに於きましては、この上の喜びはござりませねど、おろくどのが迷惑でござりませう。

ろく なんのマア、親兄弟もなく、世に便りないわたしゆゑ、それ御承知なら、どうぞよろしうお願ひ申しまする。

白眉 ナニ、得心か。それでわしも安堵しました。サヽ、殘り物で、ちよつと祝言の眞似をしませう。

善吉 あなたにお仲人をお頼み申して勿體ない。

白眉 なんの、おれは、實の子ぢやと思つて居る。どのやうな事でもせねばならぬ。

ろく 有り難う存じまする。

善吉 ちよつとお待ち下さりませ。いま離別いたしましたる伯母の娘は、死なれました母の心に叶はぬゆゑ、斯うした事になりましたかと思はれまする。その上、まだ母の墓參りも致しませぬ程に、祝言の前に墓所へ參つて、あなた樣のお心遣ひ、おろくどのゝ實心を申しまして、杯を致しましたらと存じまする。又一つには一昨日の夜、おろくどのに救はれ、山中の古宮で夜を明かし、不思議な夢を見ましたゆゑ、お住持に逢うて、判斷をしてもらはうと存じまするが。

白眉 そりや、どんな夢を。

善吉　サア、所はどことも覺えませぬが、私しが烏帽子狩衣を着て、結構な飾り馬に乘つて、廣い野に出ましたところが、そこに枕川と記した榜示杭が立つてござりまして、水の上は、一面に厚氷が張つてござりますゆゑ、北から南へ渡りかけると、川の中から天道さまが、二つ並んで出たかと思ふうちに、また水中へ入りまして、一時に氷が裂け、水が二筋に流れると、人馬諸とも水底へ、沈みましたと思ひまするると、目が覺めました。餘りの不思議に今以て胸が納まりませぬゆゑ、判斷してもらひませうと存じます。

白眉　お主が正直な心では、氣になるも尤も。その上、墓參りしてから杯せうとは、よう氣が附いた。

善吉　それでは、暮れるに間もあれど、もし、遲うなつたら、臺所の棚に附け木もある。行燈も最前、お前が居た所にある程に、灯して下されや。

ろく　合點でござんすが、なるたけ早う戻つて下さんせ。

善吉　オヽ、直ぐに行て來るわいなう。

白眉　こりや、祝言せぬうちから、長う連れ添うた夫婦のやうぢや。ハヽヽヽ。

ト これにて二人思ひ入れ。

善吉　左樣なら旦那樣。

白眉　氣を附けて行かつしやれ。

善吉　ドレ、行て參りませう。

ト 善吉は向うへ、おろく、白眉の長は奧へ入る。この仕組みよろしく、在郷唄にて道具ぶん廻す。

本舞臺、向う、土手松の並木、後ろ浪幕、上手、杉の立ち樹、よき所に稻村。下の方、樋の口、爰におうし、立ちかゝり居る。時の鐘にて、道具納まる。

うし　このマア淋しい所に、わし一人待たせて置いて、薄氣味の惡い。早う來てくれゝばよいに。

ト 橋がゝりより、小藤、旅形にて、宇太郎に引立てられ、出て來り

宇太　うしやアがれ〳〵。

小藤　そんなら、あの馬士を追ひ散らして、深切に云はしやんしたは、皆嘘でござんすなア。

宇太　知れた事だ。あのべら坊を追ひ散らし、うぬを引ッ張つて、一昨日野上で逃げられた、野郎の埋草にするのだ。そのべんべらを脫いでしまへ。

小藤　そんなら、お前は盜人であつたか。このマア、源治

さんは、どこに居やしやんす事やら。源治さん〳〵。

宇太　いくら怒鳴つても二三里も道が違つて居るから、間に合つた話しぢやねえ。キリ〳〵脫いでしまやアがれ。

ト小藤の帶を解きにかゝる。此うち、おうしは慄へ居る。小藤は合口を拔いて

小藤　慮外さんすと、これで切るぞえ。

宇太　ナニ、切る……オヽ、刄物を持つて居るな。われが拔いたら、おれもこれだ。

ト脇差を拔く。

小藤　アレ、人殺しぢや。

宇太　エヽ、靜かにしやアがれ。

ト小藤を捕へようとするを、搔い潜る。おうし、慄へ慄へ下手へ逃げ出すを、小藤と心得、衿髪を捕へる。

うし　アレ、人殺しぢや。昌九郎さん、早う來て下さんせいなア。

小藤　源治さんいなア。

宇太　オヤ、いつの間にか二匹になつた。手當り次第に、うぬから。

うし　アレ、昌九郎さんいなア。

トちよつと立廻り。おうし、逃げようとするを、裾を踏まへ、思はず小藤を一かせ切る。向うより昌九郎、足早に出て來り

昌九　おうし、さぞ待ち遠であつたであらう。

うし　早う來て下さんせ。人殺しぢやわいなア。

昌九　ナニ、人殺しだ。

ト窺ひ寄つて、拔討ちに宇太郎を一かせ切る。

宇太　うぬ、切りやアがつたな。

ト切つてかゝる。

小藤　人殺しぢや〳〵、源治さんいなア。

トよろめきながら逃げ廻り、宇太郎の脇腹へ合口を突込む。これにて宇太郎、稻村の蔭へ倒れる。昌九郎、小藤を切る。これより兩人、立廻りあつて、小藤を切り倒し、止めを刺す。おうし、窺ひ寄り

うし　昌九郎さん〳〵。

昌九　オイ〳〵……もう氣遣ひはねえ。

うし　ヤレ〳〵嬉しや、お前が早う來ておくれたなら、こんなひやいな目には遭ふまいに、それだから野上から歸つた時、直ぐにわたしを呼び出しておくれだと、百二十兩手附かずだつたに。さうして、阿母アの所から持つてお出でかえ。

昌九　取りに行つて、取つて來ねえと云ふ、氣の利かねえ事をするものか。

うし　先刻の手際ぢや、あんまり氣の利いた方でもないぞえ。

昌九　そんなに云ふな。あんまり輕はずみをしたからの事よ。併し、今に仕返しをしてやるワ。そりやアさうと、物騷だから、この三兩の金も、四十兩の金も、一緒に纏めて置かう。

うし　三兩位は小遣ひに、出して置いてもよいわいなア。

昌九　べら坊め、この時節に、うつかり金を遣つてなるものか。

ト三兩の金を一緒に財布へしまふ。橋がゝりより馮二、留守居提灯を灯し出で來り、血に辷り、提灯にて見て

馮二　オヽ、この血……ヤ、悴ぢやないか。

昌九　オヽ、親仁樣か。

うし　どうして爰へは。

馮二　おそやに聞いたら、たつた今出たとの事ゆゑ、跡追ひ駈けて參つたが、この體たらくは。

うし　わたしは爰に昌九郎さんを待つて居て、始めから譯を知つて居りますが、オヽ、この稻村に倒れて居る男が、その女を連れて來て、着物を剝がうと爭ふゆゑ、恟りして逃げ出すわたしを捕へ、既に切られやうとした所へ、昌九郎さんがござんして、命は助かりましたわいなア。

昌九　おれは又おうしの聲がしたゆゑ、黑白も知れねど切りなぐつて、たうとう仕留めました。

馮二　オヽ、悴、出かした／＼。

昌九　して、お前さんのお出では。

馮二　オヽ、われを勘當した事を、寺へ屆けて置かぬと、後になつては悪いゆゑ、屆けて戻つて來る道へ、向うから來るは善吉ゆゑ、道を交してよく見れば、花を提げて行き居つたは、彼奴も寺へ參つた樣子。今にこの道を通るは知れた事……コレ

ト囁く。

昌九　ムウ、そんなら、この二人に着物を着せ替へ……コレ／＼親仁さん、そんな廻り遠い事をしようより、恨みのあるあの善吉、ばつさりといはせる方が。

うし　エヽ。

馮二　アヽ、コレ、そんな事をして顯はれては、親子の難儀……ハテ、おれが悪いやうには致さぬわい。

うし　モシ、どうするのでござりまする。

馮二 コレ。
ト囁く。
うし そんなら、着物を脫ぐのかえ。
馮二 早く脫いで、包みの中のと着替へるがよい。
うし アイ〳〵。
馮二 その帶も、置いて行かねばならぬぞや。
うし 帶もかいなア。
昌九 脫いでしまつたら、てめえは、村境の酒屋の内で、待つて居や。
うし アイ、合點ぢやが、着物や帶まで。
昌九 エヽ、けちな事を吐かしやアがるな。
うし おやと云うて、道中で。
昌九 エヽ、早くしやアがれ。
馮二 コリヤ、密かに〳〵。
トこの仕組みよろしく、道具ぶん廻す。
本舞臺、松並木の道具。空より同じく吊り枝。馬士唄にて道具納まる。
ト上手より源治、半合羽、大小、脚絆、草鞋の拵らへにて出で來り

源治 是非、この道へ出て來ねばならぬが、こんな不思議な事はねえ。
ト見廻し居る。向うより善吉、小田原提灯を灯し、足早に出て來り、上手へ行かうとする。
モシ〳〵、爰へ來る道で、女中が乘つて居る、馬にはお逢ひなさらぬか。
ト善吉、よく〳〵見て
善吉 あなたは、源治さまではござりませぬか。
源治 オヽ、貴樣は藪屋に居た善吉どの。暇を貰つて國へ歸つたと聞いたが、この近所でござるか。
善吉 お前樣も、御機嫌よろしうお出でなされまして。さうしてお尋ねなされます、お女中さんと申しまするは。
源治 五兩の金の間違ひから、手に入つた小藤、あの晩に姉分の三勝も、抱へた主人の平三も逐電したゆゑ、手前が引取つたところが、小藤は元かどはかされた者で、生れ所も定かに知れず、守り袋の産神のお守に、書いてある紙包みの中に、多賀の神社とあるからは、尋ねて行つたら實の親に逢はれるだらうと、湯治の願ひをして、小藤を連れ、この江州へ參つたが、最前の村雨にあひ、宿り致すうち、馬に乘せ置いたが、僅かのうちに見失つた。

善吉　馬に乘つて、先へお出でなされたとて、夜に入らば今頃は、宿で待ち合はすか、柏原では是非下ろさねばならぬに、合點のゆかぬ事でござりますな。どうやらその馬方が、胡散に思はれますて。

源治　手前は、先に驅け拔けて見るゆゑ、もしこなさん逢つたなら、醒ケ井の宿に居ると、言傳して下さい。マア、とんだ事をしたわい。

ト向うへ走り入る。

善吉　そんなら、夫婦になつたと見える。ハテ、緣といふものは、妙なものぢやなア……イヤ、その緣と云へば、藪屋の旦那樣の媒介で、おろくと祝言すると云ふも、フトした事が緣になり、ア丶、これが出雲で結ぶ、神事であらうわい……マア、此方の事より、小藤を乘せて來た馬方も、容易ならぬ奴だわい。どうぞ無難に尋ね逢はつしやるやうにしたいものだが。併し、こちらの內も敎へて置いたら、なんぞの時の相談相手にならうもの……アア、ひよんな事をしてのけた……オ丶、さぞ旦那樣が待つてござらう。早う內へ歸りませう。

ト足早に上手へ入る。この道具、ぶん廻す。

本舞臺、元の土手の道具に戾る。爰に昌九郞、吹替へと着物を着替へ、立ちかゝり居る。馮二は提灯を持ち、あたりを窺ひ居る。時の鐘にて道具納まる。

ト二人の死骸の首を切り

昌九　親仁樣、して、二人がこの首は。

馮二　これなる流れへ。

昌九　ムウ……斯うしてしまへば。

ト堤より川の中へ投げ込む。

馮二　ヤ、あれへ見えるは……慥かに善吉。

昌九　オ丶、成る程、見覺えのある寺の提灯……いつその事に。

馮二　ハテ、なんであらうと、爰に忍んで。

昌九　しめた〳〵。

ト馮二、提灯を消し、兩人、上手へ小隱れする。上手より、善吉、足早に出て來り、

善吉　さぞ內で待つて居るであらう。

ト思はず、血のりに辷り、提灯を消す。

エ丶、この道は、なんで此やうに辷るのぢや知らぬ……提灯は消えてしまふし、こりや、益體ぢやわい。

トそこらを探り、死骸に手が障り

ヤ、、どうやら、人が。

ト恟り、思ひ入れ。馮二、木陰より出て、善吉の取落したる提灯を取らうとする。昌九郎は、善吉へ切りかかるを、善吉、摺り抜ける。馮二は切らせじと、留める心組み。善吉は逃げようとする。立廻りあつて、トド、善吉、花道へ行くを、口へ手を當て

昌九　人殺し。

ト善吉、恟りして、どつと坐るを木の頭にて、昌九郎、馮二、よろしく見やる。この仕組みよろしく、拍子幕。

ト善吉、幕外にて向うへ入る。あと時の鐘にてツナギ、早幕にて引返す。

本舞臺、前幕、幕明きの道具。好みの唄にて幕明く。

ト奥より、白眉の長、おろくを連れ、出て來り

白眉　先づ、有り合せた鯣女に勝男節、好い折柄に來合せて、事も丸う納まれば、わしが心のよろ昆布、祝言の支度はよいといふものぢやわい。

ろく　誠に不思議な御緣と申さうか。松山の旦那樣と、お前樣とは、お兄弟でお出でなされまするとは、今日までも存じませず

白眉　名乘り合つて、斯うした取持ちするとは、深い緣であらう……イヤ、また善吉と云ひ、そもじの氣質、これが誠に、似た者夫婦ぢやわい。アハヽヽヽ。

ろく　それにしても、早う戻つてござんすればよいに。

白眉　きつう手間の取れる事ぢやてなう。

ト向うより善吉、無提灯にて出て來り

善吉　ヤレ〳〵、二丈の堤で、出合ひ頭に提灯は消えてしまふ。所へ光つた拔身。やう〳〵爰まで逃げて來たが、行き違ひの喧嘩であつたか……ヤレ、危ない事であつた……戻つても此やうな事は、沙汰なしにして置かうわい。

ト門口へ來り、内へ入り

ハイ、只今戻りましてござりまする。

白眉　ヤア、善吉、待ち兼ねた。サア〳〵、早う。

ろく　大さう手間が取れたゆゑ、案じて居りましたわいなア……この闇に提灯を、持つてござんすりやよいに。

善吉　オヽ、ほんに……イヤ、提灯も借りようとおもつたが、又戻しに行くも面倒ゆゑ。

白眉　さうして、道で何も變つた事はなかつたかや。

善吉　サア、これへ戻るその道で……イエ、マア、寺へ參りまして、これで心がゝりがござりませぬ。又お話しは

ゆる／＼申しませうわい。
白眉　おろくも最前から、待つて居た事なれば……コレ、何も恥かしい事はない。爰へ來やれ／＼。
ろく　ハイ／＼。
白眉　善吉は爰へ。
　ト兩人を坐らせ、銚子杯を出す。
善吉　どうやら、今さら改まりまして。
ろく　なんと申してよい事やら。
白眉　ハテ、此やうな、めでたい事はない……サ、おろくが飲んで善吉へ。
　ト杯事あつて
これで納まる三々九度……千秋萬歳の千箱の玉を奉る。
兩人　有り難う存じまする。
白眉　これで何より、おれが喜び。併し、こなたも、爰に住居がしたからうが、あの村長が又、どのやうな企みをしようも知れぬわいなう。
善吉　段々の御厚情、左樣ならば、お指圖に任せ
ろく　よろしうお願ひ申し上げまする。
白眉　ハテ、心を措く事はない。オヽ、それはさうと、善吉が夢の事、お住持に判斷をしてもらつたか。

善吉　サア、その判斷は、日輪が二つ出るは、陽氣に陽を重ねると云ふ。また乘つたる馬も、春に象り、陽氣の獸物、それに乘つて、氷の內へ落つると見たは、陽氣が勝つて、陰氣少なく、位官の衣服を着ると云ふ所へ、心を留めて見ると、滿つれば缺くる道理ゆゑ、信心堅固に身を愼しみなば、災ひはあるまいと云ふ、判斷でござりましたわいなう。
白眉　さういふ事なら案じる事はない。二人ともに正直なこの氣質、假へ、祈らずとも、神佛の御利益で、どうマア、惡い事があらう。兎も角、物は祝ひから。めでたいめでたい……なには兎もあれ、この上は、おろく、奥へ床を敷いて、枕並べるが肝心々々。
ろく　わたしは、左樣な事は。
白眉　エヽ、なんの、おれに斟酌が要らう。サア、早う、善吉。
善吉　左樣なれば、旦那樣。
白眉　ドレ、仲人は開きませう。
　ト此うち馮二、頰冠りにて、以前の草履を持ち出で來り、門口へ血の足跡を捺して行く。この時、向うより、捕り手、六人引連れ、多賀の郡司、半纏、鞭先大小に

て出て來て、
郡司　ソレ。
ト捕り手、内へ入り
捕手　動くな。
善吉　ヤ、、こりや何ゆゑに、私しを。
郡司　ヤア、何ゆゑとは横道者。最前梓川の邊りに於て、男女二人を切り殺し、その首を隱せし者は、汝といふ事、よつく存じて、召捕りに向うたり。尋常に腕廻せ。
善吉　ア、、申しお役人樣、幼少の時分から、雑魚一匹殺した事のない私し。そりや、人違ひでござりませう。
郡司　斯く云ふは多賀の群司、自身に搦め捕りに參りし上からは、遁がれはない、陳じてもその手は食はぬ。汝、二ケ年以前、伯母の娘おうしと娶合はせしところ、その女を嫌ひ、鎌倉へ下り、おろくと云ふ下女と懇ろ致し、村長鴻臺馮二が悴、昌九郎と密通なせしやうに云ひなし、離縁なしたる上、兩人を闇討ちになし、それなる女と祝言いたす極惡人。この家の入り口に、血汐の足跡あるが證據。
善吉　ナニ、入り口に、ドレ。
ト門口を見て
オ、、こりや、マア、恐ろしい血。ヤ、、、。
白眉　コレ、善吉、覺えない趣き、お役人樣へ、しつかりと申し上げい。
ろく　早う云ひ譯して下さんせいな。
善吉　イヤモウ、墓詣り致して戻りがけ、成る程、梓川の邊りを通りましたら、黒白も知れませぬが、慥か男と女が殺されて居りましたゆゑ、慄へ〱駈けて戻りましたのでござりまする。大方それゆゑ、草履に血が附いてあつたでがなござりませう。昌九郎や、おうしを殺す位なら、初手に四十兩といふ金を遣りは致しませぬ。
郡司　コリヤヤイ、その金子を遣はしたるは、其方の計略、殺して取返す所存なければ、四十兩と申す金を、遣はす譯がない。また夜中に墓詣り致す者、曾て聞きし事がない。誠汝が殺さずば、なぜその足で村長まで屆けて出ぬ。この上は、身内を改め、ソレ、者ども。
捕手　ハツ。
ト提灯にて改め
さてこそ〱。遁がれぬ證據は、衣類の血糊。
善吉　ア、、モシ、この血糊は。
郡司　詮議に及ばぬ。ソレ、繩打て。

捕手　捕つた。
ト善吉に繩をかける。
ろく　こりや、マア、なんとした事ぢやぞいなア。
ト泣き落す。
白眉　お役人様へ申し上げます。大方最前の事を根に持つて、馮二どのとやらが、善吉に濡れ衣を着せて、訴人した事と思はれます。この者に限つて
郡司　ヤイ、如何に馮二が、善吉に恨みがあればとて、おのれが悴や、おうしまで切り殺して、善吉を下手人に取るたわけがあらうか。併し其方も、身寄りの者と相見えるが、力落さず、善吉が命乞ひに出ませい。
ろく　そんなら、どうでも、こちの人は、科人になる事かいなア。
善吉　コレ、おろく、嘆きやんな。一昨日の夜の夢は、どうでも斯うした災難に遭ふ知らせであらう。わしは知らねど裾の血汐、云ひ譯を云うたとて、その疑ひは晴れますまい……旦那様、これまでは御恩を受け、始めてお出でのその際に、よからぬ事をお聞かせ申し、それも納まり、あなたのお世話で、只今、おろくと杯するや否や、この有様、面目次第もござりませぬ。

郡司　ヤア、かゝる慥かな證據があれば、遁がれはない。サア、キリ〳〵と引立てい。
白眉　コレ、善吉、覺えない事に、なんで命を捨てる事がある。おれも、爰に足を留め、おろくを連れて、お慈悲を願ひに出る程に、しつかりと心を持つて居や。
ろく　身に覺えさへない事なら、云ひ譯して下さんせいなア。
善吉　コレ、おろく、其方とも旦那の仲人で、祝言はしたれども、一夜も枕も交さぬこそ幸ひ、一先づ野上の親方へ戻つた上で、外に男を持つてくれ……ア、ひよんな事になつたわいやい。
白眉　エヽ、氣の弱い。其やうな事云はずと、早う出ようとしてくれいやい。
ろく　どうぞ、云ひ譯して、早う戻つて下さんせいなア。
善吉　もし戻られぬその時は、旦那様、おろくどの、これがこの世の、お顏の見納め。
郡司　ソレ、引立てい。
捕手　立たう。
善吉　左様ならば、旦那様。
トおろくは、善吉に取りつくを、郡司、拂ひ退け

郡司　キリ〳〵、うせう。

善吉　ヘイ。

ト立ち上がるを、おろく、また行かうとする。白眉の長とめて、おろくを下に据ゑるのが木の頭。

御苦勞に存じまする。

ト善吉は、顏を背ける。白眉の長、手拭にて涙を拭ふ。おろく、泣き落す。この仕組みよろしく、

ひやうし幕

大詰

摺針峠頂の場
小野河原の場

役名――貝屋善吉。同女房、おろく。鴻臺馮二。鴻臺呂九郎。後家、おそや。同娘、おうし。百姓、十作。同、勘太。同、豐作。同、僞作。同、久根作。同、三津六。白眉の長。伊加留源治。雲助、關の孫六。同、東院の友次。伊皿子七郎。淺羽十郎。多賀の郡司。青砥左衞門藤綱。

本舞臺、通し高足の土堤、上下、山の張り物、この蔭、杉の樹の裏を見て、後ろ淺黃幕、よき所に、摺針峠と記せし榜示杭、所々に杉の立ち樹、同じく吊り枝、爰に百姓四人、麁朶を背負ひ、立ちかゝり居る。山颪しにて幕明く。

豐作　これだから、あんまり正直にするのは損ぢやなう。

僞作　イヤ、又あの善吉ほど、律義まつぱうにして、人殺しの無實を受けるといふは、天道樣も譯が解らぬなア。

久根　大方、天道も晝寢でもして、見はぐつたといふやうな事でござらう。

三津　それに又、村長の馮二づらめが、役柄を笠に、辯に任せて吐かし居らうから、猶々罪が重うなるぢやて。

豐作　それに、公事裁斷を聞く多賀の郡司さまが、馮二と話しが出來ると云ふ事ゆゑ、善吉の助かるやうはないぢやて。

皆々　ヤレ〳〵、笑止な事ぢやなう。

ト向うより十作、羽織、尻端折りにて、懷中に訴狀を入れ出て來り

十作　オヽ、皆の衆、そこにござつたか。さて、あの善吉が命乞ひに出るに付き、村の者が五六人、差添うて出ねばならぬゆゑ、一遍と尋ねたわいなう。

豐作　待たつしやれ、今日は善吉の今度の女房と、鎌倉から來て居る、藪屋の白眉の長とか云ふ人が、お慈悲願ひに出るではござらぬか。
十作　ハテサテ、あの衆はあの衆、また村の者は村の者で願ひに出て、一日も壽命を延ばしてやりたいわいなう。
爲作　おいら達が願つて、一時でも善吉が苦痛の助かる事なら
久根　どのやうにしてもやりたい。自由になるなら、鎌倉の青砥さまとやらの、お捌きを受けさしたらなう。
三津　イヤ、先刻、村の歩きが云ふには、鎌倉の嚴命にてなんとか云ふお殿樣が、諸國御巡檢にて、今日こそ、御領分へもお立寄りぢやと云うて居たぞよ。
十作　ムウ、そりや今云うた、青砥藤綱さまに相違はない。多賀の郡司が我まゝの捌きを、へこましてもらひたいものぢや。なんにせよ、首のない死骸を善吉が殺したとて、責めつけると云ふがあるものでござらうか。
豐作　イヤ、首と云へば、先刻梓川の下で侍ひが、首を引き上げて泣いて居たと云ふ話しであつたが、これも不思議ではないか。
十作　マア、なんにせい、早く命乞ひに、行てやらうではないかや。
三津　そんなら炭釜の前へ、この麁朶を置いて
久根　連れ立つて行きませう。
十作　御大儀ながら。
皆々　サア、行きませう。

ト堤へ上がり、上手へ入る。山颪し、合ひ方になり、向うよりおろく、懷中に願書を入れ、白眉の長と出て來り

白眉　これはしたり、おろく、わが身のやうに氣を落してばかり居てはならぬ。ハテ、蟻の思ひも天へ通ずると云ふではないかいなう。
ろく　サア、心得ては居りますが、火水の責苦に堪え兼ねて、もしも、無實の罪に落ちたら、なんと致しませうと思へば涙が先立つて、云ふ事さへも申されませぬわいなア。
白眉　サア、無理ではない／＼が、今わが身やおれが力を落すと、善吉の氣に張りがなくなる。泣かぬ算段が肝心ぢや。この上は、かゝつてござる郡司さまを差措いて、外のお役人樣へ、願ふより外に仕樣はない。ちつとも早う步んでくれ。

ろく　ハイ。

白眉　エヽ、しつかりと、しやれと云ふに。

ト舞臺へ來る。上手より勘太、空手桶を天秤棒に引ツ掛け出て來り

勘太　オヽ、そこへござつたは、貝屋のお客。お前は、おろくどの、アヽ、命乞ひにござるのかや。

白眉　左樣でござりまする。

勘太　わしは村の牢見舞ひに、物を持つて行て、善吉どのに逢うて來たわいなう。

ろく　ナニ、こちの人に逢うてござんしたかえ。

白眉　それは御苦勞でござりました。善吉は、達者で居りまするか。なんぞ內へ言傳はござりませなんだか。

ト勘太、もぢ〳〵して居てワッと泣く。

エヽ、泣いてござつては解らぬ。例へどのやうな事があらうとも、このおろくも、わしも力を落すといふ未練な者ではござらぬ。サヽ、聞かして下されいなう。

勘太　必らず泣かつしやるな。

ろく　キッと泣きは致しませぬ。

白眉　サヽ、早う聞かして下されいなう。

勘太　サア、善吉どのの姿を見るや、胸一杯になつて、一言も物が云はれぬ。總身の肉は破れ爛れ、ほんのあれが蟲の息なれども、獄屋の格子に取りついて、コレ勘太どの、よう顏見せて下さつた。どうぞおろくと、鎌倉の旦那樣に、よう言傳をして下され。わしも覺えのない事ゆゑ、昨日までは云ひ張つたれど、この苦痛をせうよりも、死ぬる方が遙かに增しと觀念して、昌九郎おうしを殺しましたは、私しでござりますと、云うてしまうたといなう。

白眉　エヽ、すりや、もう罪に伏して。ムウ。

ろく　旦那樣、こりやマア、どうせう〳〵ぞいなア。

勘太　それ見やつしやれ、泣かぬと云うて置いて、泣くぢやないか。まだ〳〵、いろ〳〵な事云うたが、それでは話す事がならぬ。

白眉　サア、尤もぢや。もう泣かぬ程に、サア、その後をその後を。

勘太　所で、くれ〳〵云うてもらはにやならぬは、鎌倉の旦那樣に申すは、譬へやうのない御厚恩にあづかり、剰へ此やうな、成行きまでお世話になり、御恩も送らず、殺されまするが誠に無念、口惜しうござります。ようお禮申して下されとの事でござりまする。

白眉　エヽ、なんの禮に及ぶ事ぞい。

勘太　又おろくどのには、野上へ戻り、いづ方へなりと身を定め、わしが事に構はずと、死なれた母の忌日を弔らうて下され、不思議な緣で夫婦となつて、いかい苦勞をさしました。どうぞ料簡してと云うたわいなう。

ろく　エヽ、モウ、それどころかいな。そんなら、もう、どのやうに願うても、助かる事はならぬかいなア。

白眉　イヤ〳〵、それも人の運次第。何は兎もあれ、外のお役人様へ手を入れ、一日も餘計に、この娑婆へ置いてもらふ手段をせにやならぬ。

勘太　オヽ、さうとも〳〵。高くは云はれぬが、馮二どのからは、毎日のやうに付け屆けするゆゑ、郡司めが善吉を、罪に落した事と見えるわいなう。

ト上手より、十作駈けて出て來り

十作　オヽ、おろくどの、客人も爰にござつたか。大事でござるわいなう。

皆々　ナニ、大事とは。

十作　サア、善吉どのが、今日首を切らるゝとて、俄かに小野の辻の仕置場へ、矢來したを見たゆゑ、命乞ひの願ひも打捨てゝ、手分けして村の者へ知らせに行くのぢや。

ろく　エヽ、すりや、もう死罪に。ムウ。

ト悶絶する。

白眉　オヽ、尤もぢや〳〵。コレ、氣をしつかりと持つてくれ。

十作　待て〳〵、この清水を。

ト水を呑ませ

兩人　おろくどのやアい。

トおろく、氣が付きしこなし。

白眉　コレ、心を慥かに持つてな。夫の死目に逢はにやならぬぞ。

ろく　チエヽ、口惜しい。現在無實の科なるを、無理に首を切らるゝとは、神も佛もない事かいなア。

白眉　コレ、この金にて、手段を以て、叶はぬまでも、善吉が命、延ばしてやらいで置きはせぬ程に、マア、心强うして居てくれいやい。

十作　わしらも村中集めて、邪が非でも、命を延べしてやらねばならぬ。

勘太　そんなら、わしも駈け廻つて

白眉　エヽ、深切な。そんなら早う。

兩人　サア、ござれ。

ト向うへ駈けて入る。

白眉　サヽ、これから多賀へ行き、根かぎり願ふのぢや。

ろく　アイ〱。

ト上手へ上がる。爰へ上手より孫六、友次、窺ひ出て白眉の長の懐へ手を入れ

孫六　この金、借りたのだ。

白眉　ア、コレ、なにを。

友次　やかましいわえ。

トちよつと立ち廻り、友次、金を引ツたくり、上手へ逃げて入るを、白眉の長、追うて入る。おろくは、孫六に縋るを蹴飛ばす。これにて、おろくは山蔭の切り穴へ落ちる。孫六、後を追うて走り入る。後、知らせにつき、この道具、セリ上げ、これと一時に、青砥藤綱、棒茶筅。伊達羽織。武者袴付け、切り緒の草鞋。小さ刀にて、本塗りの陣笠を持ち、立ち身。側に七郎半天、ぶッ裂き羽織、大小にて、藤綱の刀を控へ居る。下手におろく、悶絶して居る。誂らへの鳴り物、薄ドロ〱にて、舞臺眞中へセリ上げ、止めの木にて正面の山幕を切つて落す。

本舞臺、向う、嶮岨なる山の張り物。所々に杉の立ち樹、清水の流れ、爰に侍ひ大勢、一對の半天、紐付きの股引、大小にて、小筥、馬柄杓を持ち、列を正して控へ居て、道具納まる。

ト藤綱、おろくにこなしあつて、空を見上げ

藤綱　如何に七郎、西北の中空に當つて、忽然と殺氣立つたるは、刑罪の者これある印、まつた、これなる賤の女、摺針峠の半腹より、轉び落ちて氣絶せしは、全く死刑に遭ふ者の由緒にて、我れに危難を訴へんと、心迷つて踏途を失ひ、落ち來つたる者なるか。ソレ、呼び生けい。

七郎　ハツ。

ト刀を諸士に渡し、おろくを抱き起し、印籠の薬を含ませる。一人は馬柄杓にて、水を汲んで含まし

ヤア女、藤綱公の御前なるぞ。

皆々　心を慥かに持ちませい。

トおろく、心付き、手を突き

ろく　これは、マア、いづれのお殿様か存じませぬが、御介抱にあづかり、有り難う存じまする。

七郎　して、何ゆゑに山上より落ちたるぞ、仔細を早く申し上げい。

ろく　お尋ねに甘へまして、申し上げまするが、私しの夫二夫川の善吉と申す者、無實の汚名を受けまして、今、刑罪に相成ると承はり、駈け行かんと思ふ道にて、惡者に金を奪はれ、この谷底へ落されましてござりまする。

藤綱　ナニ、其方の夫善吉と申す者、無實の難を受け、いま死刑に相成ると申すか……さてこそ、今朝より降りみ降らずみ、時ならぬ雲合ひはこれなり。その善吉、正直の善人なるを、無實にて成敗に遭ふがゆゑ、天怒り人恨み、今日の仕儀と覺えたり。某は時の執權、北條どのゝ内命を蒙むる、青砥左衞門尉藤綱と申す者。いま諸國、を巡歴なして、民の愁訴を聽かん爲、この度の旅行、包まず仔細を申し出しやれ。

ろく　冥加至極の御仰せ。さりながら斯う云ふうちにも、夫の身の上、何卒御憐愍をもちまして、暫しの間死罪をお延ばし下されますやう、偏へにお願ひ申し上げまする。

藤綱　ナニサマ、よくぞ申したり……ヤア／＼七郎、其方小野の辻へ馳せ行き、二夫川村の善吉が死罪、暫時延期いたすやう、申し渡して參れ。

七郎　心得ました。御免。

　ト向うへ走り入る。

侍一　善吉が妻、ろくとやら、心靜かに我が君へ

侍二　事の仔細を、御訴訟申し

皆々　上げてよからう。

ろく　事の樣子を認めたる、この願書。何卒御披見下さりませう。

　ト懷中より出すを侍ひ、取次いで藤綱に渡す。藤綱、讀み終つて

藤綱　願ひの趣き、聞き屆けた。コリヤろく、其方は善吉へ、いつ頃に嫁入りせしぞ。

ろく　ハッ、夫の主人、鎌倉の藪屋の主人、白眉の長と申す者の媒介にて、先月の初め、祝言の相濟むや否や、夫善吉には、多賀の郡司さまに召捕られましてござりまする。

藤綱　ハテ、貞節な者ぢやの。一日の添臥しもせず、世にも優しき志し。何は然れ、これより直さま、刑罪の場へ立越えん。コリヤ女、善吉は助けて得さすぞ。

ろく　すりやアノ、夫の一命を……オヽ。

　ト嬉しき餘り悶絶する。

初演當時發行



藤川花友のおろく

草双紙の口絵



中村福助の七郎

中村歌右衛門の藤綱

皆々　ヤヽ、この體は。
藤綱　オヽ、流石は女……ソレ、介抱いたせ。
侍ひ　ハツ。
ト兩人して介抱する。
侍ひ　イザこの上は刑場へ、お立越え
皆々　遊ばされませう。
藤綱　オヽ。
ト藤綱、膝の塵を拂ふが知らせにて、淺黄幕を延せる。
直ぐに向うより孫六、友次、紙入れを奪ひ合ひながら走り出て、舞臺へ來り
孫六　ヤイ〳〵、その金は二つ山と云ふ、初手からの約束ぢやねえか。
友次　やかましいわい。判證文した金でさへ、取れねえ世の中。盗んだ物に義理があるものか。
孫六　馬鹿を云へ、キリ〳〵と、割り前を寄越しやアがれ。
ト掴み合ひの立廻りあつて、財布を孫六引ツたくり、上手へ逃げて入るを、友次、追つて入る。向うより百姓大勢、出て來り

豊作　なんと皆の衆、あゝやつて産神へ百度參りしたが、たうとう死罪に極まるとは、なんと因果な事であらう。
爲作　あの意地くねの惡い鴻臺馮二めが、どんな呪ひをしたか、多賀の郡司どのが、大層惚れて居るではござらぬか。
久根　今でも無理な取立てをしをつたら、竹鎗で突ツ殺してやらうではござらぬか。
旅人　モシ〳〵、今日小野の辻とやらで、お仕置者があるではござりませぬか。まだ餘程の道のりでござりまするか。
三津　ナニ、五六丁山手の方へ入ると、矢來が結つてござるわいなう。
春七　お前方は見物にござつたら、よう念佛申してやつて下さい。
久根　あれが無實の難で、殺されるのぢやわいなう。
旅人　ヤレ〳〵、それはマア可哀さうに。
ト向うより十作、片肌脱ぎにて走り出て來り
十作　オヽ、皆の衆、もう今切られると云つて、知らして來た。早う行て、念佛申してやつて下され。
豊作　それでは、仕置場へ引かれたのか。

僞作　斯うしては居られぬわい。

旅人　わしらも一緒に。

十作　サヽ、來てやつて下され。

ト皆々上手へ入る。後、知らせにて、淺黄幕を切つて落す。

本舞臺、通し常足の土堤、向う、漏斗に竹矢來を結び、後ろ松並み木の道具幕。所々に枯の立ち樹、同じく吊り枝。六十六部の供養塚。上手、薄の土手板、すべて小野の辻、仕置場の體。二重、眞中に、杭をちきりに打ち込み、この前に善吉、五十日、附け鬘淺黄の着附け、荒繩にて縛り付けられ居る。上手に郡司、ぶッ裂き野袴、大小にて、床几に掛かり、立て文を開き、下手に、絆天紐付きの股引にて三人、扣へ居る。東西の矢來外に十作、勘太、泣いて居る。その外、仕出し、惣出にて見物し居る。時の太鼓にて、道具、納まる。

郡司　如何に善吉、承はれ。其方こと離別いたせし女房を嫉み、再緣の昌九郎もろとも闇討ちに致せし罪、重々不屆きに付き、只今、死刑に取行ふものなり……多賀の郡司、これを承はる。

ト讀み終り

我が支配下の汝なれば、人手に討たすも不便の至り。この節求めし新身の業物、試しながらこの郡司が、手づから成敗してくれる。有り難いと觀念いたせ。

善吉　ハッ、この期に及んで愚痴なれど、見物の方々、お聞きなされて下されませ。この善吉ほど世の中に、因果な者がござりませうか。幼ない時、親仁樣に別れ母親を便りにして、孝行を盡さうと、思ふ甲斐なき身代のしもつれ。田畑も散々になつたのが、いつしか母の耳に入り、それを氣病みに果敢ない最期。おのれやれ、百分の一なりと、先祖の田地を買ひ戻して、亡き兩親に喜ばさうと鎌倉へ下り千苦萬苦し、金調へて戻りしが、僅かな慾に目をかけて、昌九郎の惡企みを、露顯さしたが遺恨となり、現在甥を此やうな、憂目に遭はして殺すのが本望でござるか。チエヽ、情ない心ぢやな……アア、これとても、前世からの約束事と諦めたれば、誰れに恨みも報いもない。御苦勞ながら、お切りなされて下さりませ。

ト此うち、郡司、羽織を脱ぎ、提げ緒にて襷をかけ

郡司　オヽ、よい覺悟だ。

善吉　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト向うより、庄屋、扇を開き、招きながら駈け出て來り。

庄屋　アイヤ、御成敗、お待ちなされませ。藤綱さまの御上意でござりますと〳〵。

トまた向うより、七郎、走り出て來り

七郎　村役人　多賀の郡司どのとは。

庄屋　ハッ、卽ち、あれにお出でなされますお方。

七郎　ムウ。

ト舞臺へ來り

貴殿は、筒井の家來、多賀の郡司どのとな。某主人、青砥左衞門尉藤綱、北條どのゝ仰せを蒙むり、諸國巡歷の途中にて、暫時罪人の苦痛を助けよとの申し付け。疾々計らひ召され。

郡司　すりや、善吉が一命は。

善吉　フム

ト氣ゆるみてガックリとせしこなし。東西の矢來にて

勸皆　エヽ、有り難い〳〵。

侍三　ヤア、鎭まり居らうぞ。

郡司　藤綱公の上意とあれば、ソレ、善吉を彼處へ連れ行き、藥湯を與へさつしやれ。

侍ひ　心得ました。

トちきりの繩を解き

キリ〳〵立たう。

ト善吉を歩ませて、上手へ連れ行き、侍ひ三人戻つて下手へ扣へる。この時、善吉吹替はる。

郡司　靑砥公の巡歷の儀は、承知仕つてはござれども、昨日今日とは思ひも依らず、それのみならず、かゝる場所へ御登駕の由、畏れ入り奉つてござりまする。して其許は。

七郎　某事は、藤綱が郎等、伊皿子七郎と申す者。罪の邪正は兎もあれ、善吉が妻、ろくと申す者、途中に於て訴へ申せしゆゑ、藤綱自身に問はんが爲、暫時刑罰を止めし段、御高免下されい。

郡司　すりや、善吉が女房ろくが。エヽ、惡い所へ……イヤサ、若い者の無分別より、大それた事仕出かし、恐れ多くも藤綱公へ、訟訴などゝは憎くい奴。何は兎もあれ藤綱どの　お入りには間もあるまい。あれなる茶店で……ソレ、お出迎ひの致せ。

侍ひ　ハッ。

ト郡司の後へ居並ぶ。向うより、藤綱、以前の家來を隨へ、足早に出て來る。

郡司　これは〳〵、藤綱公には、非常の場所へ御登駕、恐れ入りましてござりまする。

藤綱　多賀の郡司とは其方か。

郡司　ハッ、藤綱どのには、イザ先づあれへ。

藤綱　然らば、許さつしやれ。

ト二重へ上がり、床几へ掛ける。侍ひ左右へ扣へる。七郞、平舞臺へ住ふ。

役目とは申しながら、自身に罪人を成敗する事、感心いたすぞ。

郡司　ハヽ、身不肖には候へども、某、筒井の一族として兩郡を預かれば、成敗を人に讓らず、それゆゑ遠くお迎へに、參上も致さぬ段、眞平御宥免の下さりませう。

藤綱　何がさて、我れ人ともに政道を預かる身は、斯くてもあるべき事。それに付き某、この度北條どのゝ仰せを蒙むり、巡檢いたすは、國々政道の理非を問はんが爲。然るに、最前摺針峠にて、惡者の爲に谷間へ落ちし女を呼び生け、仔細を問へば、善吉が妻なる由。夫は無實の罪を着て、只今首を刎ねらるゝと聞き、駈け附けて今生の、別れを惜しむ者なりとの答へ。無實と聞いて捨て難く、先づ伊皿子七郞を以て、善吉が死刑を止め申したり……只今來りし鎌倉の町人もろとも、ろくをこれへ呼び入れい。

侍ひ　畏まりましてござりまする。

ト下手へ向ひ

鎌倉の町人白眉の長、おろく諸とも出ませい。

白眉　ハア、。

ト兩人、出て來り

ヤア善吉どの、よう無事で居てくれたなア。

善吉　オ、、三浦屋の親方樣。

ろく　こちの人。

善吉　オ、、女房ども。

ろく　淺ましい姿にならしやんしたなア。

トおろく、行かうとするを

役人　扣へて居らうぞ。

ろく　ハイ。

郡司　コリヤ女、其方も罪に行ふべきところ、格別のお慈悲を以て宥し遣せしに、恐れ多くも藤綱公へ、何事を申し上げたか。コリヤ、善吉には、白狀いたしたぞ。

藤綱　イヤ、火の責苦に堪へ兼ねて、罪なくとも苦痛に迫り、白狀せし者、世になきとも申されまじ。善吉が着類の裾に血汐の附きしと、入り口に血汐の拭ひし、跡を證據に責め苛なみ、苦痛に堪へ兼ね、罪に伏せし者ならずや。善吉、誠に昌九郎、おうしを切り殺し、その血が迸り、衣服にかゝらば、或は衿先、袖袂にもかゝるべきに、裾ばかりとは心得ぬ。まつた梓川より二丈までは、凡そ道程廿町にも及ぶべきに、草履に染みたる血汐、善吉が宅へ歸るまで、染み廻り居らうか。これは善吉を恨む者あつて、企みし事と思はるゝ。凡そ罪の疑はしきは輕き刑罰と申すに、その夜、善吉が墓參り致したとあらば、なぜ寺僧を召し出だし、參詣の時刻を調べぬ。まつた、彼れが所持の脇差は元より、出刄、小刀に至るまで吟味も致さず、首なき死骸を昌九郎おうしと定むる事、何とも以て合點が參らぬ。

郡司　こは、御諚には候へども、昌九郎、おうしを深く恨む者は、善吉の外にあらうとも覺えず。鏡にかけて見拔きし某。

藤綱　さりながら、郡司には、善吉が人殺しと申す事、人傳に聞いて、悟られしか。

郡司　その儀は、殺されし者の親ども、馮二そやの兩人より、申し出でしゆゑ、承知仕つてござる。

藤綱　默れ、郡司、その馮二おそやは、善吉に遺恨あるものならずや。然らば善吉を罪に取つて落さんと、謀るは治定。善吉には鎌倉にて、千辛萬苦に貯へたる金を、おうし昌九郎と密通し、騙りし金の露顯せし時、緣者の因みと件の金子を、三つに分けて與へしならずや。その善吉が、何しに昌九郎等を殺さんや。先づ、この一埒から糺す時は、馮二、おそやの親子は、輕からざる罪人なるに其まゝに村長を勤めさせる郡司の心底。

郡司　ヤ。

藤綱　汝も罪科は遁がれぬぞ。

郡司　ムウ。

藤綱　ナニ、者ども、最前より、この群集の中に、予に恐れをなして、隱れんとする者あり。正しく馮二、おそやならん。急ぎこの場へ召し連れ參れ。

七郎　心得ました。

ト立ちかゝる。十作、勘太、百姓、皆々、おそや、馮二を捕へ。

勘太　ハイ／＼、鴻台馮二どのは、茲に居られます。

十作　おそや後家も逃げうと致しました。
瀬二　これはしたり、何もこちらが。
皆々　エヽ、出さつしやい。
　ト上手の口より、兩人を無理に押込む。
役人　下に居らうぞ。
七郎　おそやとは、汝等よな。
瀬二　左樣さうにござりまする。
七郎　去る夜、梓川の邊にて、切り殺されし死骸は、首無しと承はりしが、汝等は、如何いたして銘々の子なりと見極めしぞ。
瀬二　ハヽ、恐れながら着類は元より、帶、脚絆まで菖九郎、おうしなどが所持の品に相違なく、その上、兩人とも、その夜より立歸りませぬが、慥かな證據でござりまする。
藤綱　イヤ、同じ衣服を着たる者もあるべきに、後日に菖九郎、おうしが歸り來らば、死刑になりし善吉は、蘇生さす事ならぬと申す事は、辨まへ居やう。その時、汝等の子供を殺して、無實の罪を購なふとも、成敗うけた善吉に、なんの益がある。重ね〳〵胡亂の奴……ナニ、白眉の長、おろく。善吉は、又何ゆゑ夜に入つて、墓所へ參詣いたせしぞ。
白眉　恐れながら善吉は、鎌倉に奉公いたし居るうちも、一方ならぬ主人思ひ。殊さら家内の事も取仕切つて、働らきくれたるゆゑ、その忠義忘れ難く、野上の兄に對面ながら、彼れが家へ尋ね參りしところ、申し上げました通りの混雜にて、留守居などござりませねば、幸ひろくの心底も、よく存じ居りまするゆゑ、似合の夫婦と勸めましたれば、物堅い善吉ゆゑ、兩親の墓所へ、事の由を告げての上、祝言の取結びを致したいと申し
ろく　その上、先程申し上げましたる、山中の古宮に、夜を明かしましたる時、心にかゝる夢を見ましたるゆゑ、寺のお住持樣に、判斷をしてもらひたいと申しまして、參られましてござりまする。
藤綱　フム。して、その夢とは、如何やうな夢なるか。
ろく　サア、所は何國とも、定かなりませねど、枕川と記したる杭を建てたる小川がござりまする。これに、一面の氷が張つてあつたと申しましてござりまする。
白眉　その所にて善吉が、烏帽子狩衣を着て、飾り馬に乘りまして、北より南へ渡りまする頃、川の中より日輪が、二體並んで上ると思ふ間に、また水中へ入ると其まゝ氷

が裂けまして、馬人ともに入水いたし、目が覺めました
と申しましてござりまする

藤綱　ムウ、水を左に、馬を右にし、その水、氷りしとは文字によれば、これ、馮字にして馮字は即ち馮二なり。枕川と記せしは、枕は即ち、頸の豪。馮臺馮二親子に計られて、善吉は、罪を着るべき前表の夢なり……茲を以て汝等が巧みは明白、昌九郎と謀し合はし、密かに男女を切り殺して、その首を隱し、兩人の衣服を骸に着せ、入り口の土間へ血形を留めしならん。サア、馮二、おそや。尋常に申し上げい。

馮二　こは御諚とも覺えませぬ。取り所もなき事を、世に夢物語りと申すに、それをお取上げ遊ばされるは、恐れながら、片手打ちなる御詮議かと存じられまする。

七郎　流石は村長を勤むる程あつて、辨まへたる申し條、いよ／＼以て、善吉の成敗を願ふのぢやな。

馮二　仰せまでもござりませぬ。只一人の悴ゆゑ、無念骨髓に徹し、恨めしう存じます。

藤綱　アイヤ、其方、悴の外に、ふじと申す女子ありしが如何いたした。

馮二　こは、親さへ忘れ果てましたに、娘が事、よく御存じ居らせられますな。

藤綱　その國の政道を糺さんには、領主臣下は申すに及ばず、社寺村長に至るまで、素性を分たず、何を以て吟味を遂げんや。いよ／＼善吉の成敗を願はゞ、その方に逢はす者あり……ヤア、淺羽十郎、申し付けたる者ども、同道いたせ。

　ト橋がゝりにて

十郎　ハツ……早く參れ。

　ト昌九郎、おうしに繩をかけ、十郎侍ひ四人、十手を持ち、引立て居る。後より、源治、首桶を抱へ出る。

捕卷　下に居らう。

郡司　ヤア、其方は。

馮二　オヽ、悴。

そや　エヽ、情ない。

昌九　足手纏ひの女ゆゑ、後れを取つて繩目の耻。その上におびやかされ、何もかも、この女が。

馮二　白狀なしたか。

昌九　がらり殘らず、ぶちまけてしまつた。これといふもお前の指圖、とんだ目に遭はしたなう。

うし　わたしばかりは、實に惡い事は致しませぬ。お赦し

なされて下されませいなア。

十郎　イヤ伊加留源治とやら、今朝、殿へ訴訟の趣き、今一度、演舌さつしやい。

源治　ヘイ〱、今朝願書にて申し上げましたる通り、女房を同道いたしまして、當多賀領の親を尋ね上りましたるところ、計らず悪者の爲に女を奪はれ、それを尋ねまするうち、梓川の川下へ浮み上がりましたる首級は、疑ひもなく女房小藤。いま一人は、道連れになりましたる旅人。小藤めは目尻に黒子。また旅人には、耳の脇に刀疵。しかと見覺え、寸分相違はござりませぬ。

藤綱　オヽ……如何に馮二。昌九郎うしが蘇生を見屆け、さぞ滿足にあらうな。その上、汝に目利きさすものあり。

ト懐中より紙封の守を出し

ソレ、見分けさせい。

十郎　ハツ。

ト馮二へ渡す。

フヽ……これこそ、某が手蹟に相違ござりませぬ。

藤綱　それを所持する者こそ、汝が娘、六歳の時かどわかされて、鎌倉にて人となり、その名を舞子の小藤と云ひこれなる伊加留源治に連れ添ひしと申す事……それに抑へしおそやとやら、汝鎌倉にありし時、佐々久平方へ嫁入つて、二人の子供を儲け、兄を宇太郎と申せしが、定めて行くへを存じ居らうな。

そや　お尋ねにあづかり、面目もござりませぬ。持てあまし者ゆゑ、勘當いたしましてござりまする。

藤綱　その勘當いたせし者が、野上の松山方へ取落したるこの返書。コリヤ、其方が手蹟ではないか。ソレ。

十郎　ハツ。

ト取次いで渡す。

そや　こりや、無心におこしたを、斷わり云うてやつた、わたしが手紙。

藤綱　汝等、この世の思ひ出に、親子の對面いたさしてくれう。ソレ、兩人へ。

源治　心得ました。

ト件の首桶を、馮二、おそやの前へ出す。兩人、蓋を明け

馮二　こりや、何者。

藤綱　ヤイ、耳をさらつてよつく聞け。過ぎつる月、梓川にて悪者にかどはかされ、衣類を剝がんと爭ふを、小藤

も身の上必死となつて、その惡者を仕留めし折柄、來かかりし親馮二、計らず惡念增長し、小藤を殺し、二つの首を川へ投げ捨て、昌九郎おうしが着類を骸に着せ替へ善吉が殺せしと企めど、因果は廻るこの惡報。その殺したは馮二が娘、その盜人はおそやが惣領。コリヤ、馮二おそや、恩義は深き善吉を、罪に落さんと計りし非道、白眉の長が金子を奪はれし事ども、昌九郎、おうしが白狀、馮二、おそやは云ふに及ばず、多賀の郡司も遁がれぬ大罪。

郡司　アイヤ、これまで二郡の政道を預かり、私しなき某と云ひ、殊に國法、村法もござれば。

藤綱　然らば罪ある者を助け、無實を殺すが國法なるか。

郡司　サア、それは。

藤綱　但し、これでも、馮二親子は罪なきと申すのか。

二人　サア／＼／＼。

藤綱　ド、、どうぢやい。

郡司　ムウ。

藤綱　ソレ、者ども、縛し上げい。

ト皆々して郡司の大小を取り、繩をかける。

藤綱　コリヤ、善吉、面を上げい。

善吉　へイ。

藤綱　元より汝に罪なき事、明白に相成り、さぞ滿足にあらうなう。

善吉　ハア、、これと申すも皆、藤綱さまのお情。

ろく　そんなら、夫の汚名も晴れ

白眉　助命なされて下さりまするか。

七郎　汝等が眞心屆き、只今善吉、御赦免なるぞ。

皆々　エ、、有り難う存じまする。

藤綱　伊皿子、淺羽の兩人は、重罪人を引立てい。

七郎　畏まつてござりまする。

藤綱　我れも直さま、觀音寺の城中へ。

七郎　ソレ、お乘り物。

ト橋がゝりにて

駕舁　ハア、。

ト乘り物を、舁き出す。

藤綱　コリヤ、ろくとやら。

ろく　ハイ。

藤綱　この一藥は、筋骨の惱みを癒す秘法の良藥。善吉に服ませて遣はせ。

三人　有り難う存じまする。

藤綱　アヽ、悪事は天が許さぬなう……ソレ。
七郎　ハアヽ。キリ／＼立てう。
敵皆　ハアヽ。
藤綱　これにて、梓川人殺しの一件、事落着の上は、善吉
善吉　ハヽア。
藤綱　ろく。
ろく　ハアヽ。
藤綱　白眉の長。
白眉　ハアヽ。
藤綱　皆、めでたいなう。
三人　ハアヽ。
藤綱　ムウ。
ト扇を開くを、木の頭にて
めでたい。
ト三人は、平伏する。縄付き三人は、上手へ廻り、浅
羽、縄を持ち、よろしく居並らび。
ひやうし幕

青砥稿（終り）

解題

渥美清太郎

昔の劇壇文壇では、小說と戯曲とは相犯さぬといふ暗默の契約があつたらしい。殊に江戸では割に嚴格だつた形跡がある。併し、双方ともに段々進み、行き詰まつて來ると小說で當つたものを、見す／＼芝居ですれば大入にきまつて居るし、芝居で賣つた狂言を小說の材料に仰げば、賣れる事は請合ひであるだけに、いつかこの契約は破れてしまつた。それは大坂の方が先で、文化頃には流行の讀本類を脚色上演するのが、流行した後であつた。江戸でもその頃から、小說の筋を借りる事は、折々作者がやつても居たが、大びらに名乘りをあげて、小說を脚色上演したのはズツと後で、天保七年四月森田座の「八犬傳評判樓閣」であらう馬琴の八犬傳は、江戸で小說脚色狂言の最初だつた譯である。勿論八犬傳はその頃の流行小說であつただけに、この興行は大當りを得た。以來、折々この趣向が現はれ、嘉永以後はザラに現はれるやうになつたのである。

本篇には、小說を脚色した狂言の中で、有名且重要なるものを三篇收めた。

花魁莟八總

馬琴の八犬傳を最初に脚本に仕組んだのは小芝居で、天保五年十月、大坂若太夫芝居の「金花山雪曙」であつた。この時の役割を、秋葉芳美氏に調査して頂いて、次に記して置く。

犬坂毛野、上杉左衞門、山林房八（市川白藏）伏姬（坂東勇次郎）犬塚信乃（市川森之助）犬川莊助、犬山道節、鍵崎照文（市川橘太郎）網干左母次郎、古那屋文五兵衞（市川熊十郎）馬加大記、栗雪奈四郎　大谷門藏）犬田小文吾、金森大助、舟蟲（坂東彥三郎）

大劇場で上演したものは、天保七年正月二十四日初日の大坂中の芝居で、卽ち本篇「花魁莟八總」である。作者は西澤一鳳はじめ、金澤吾輔、奈川政楠等であつた。傳奇作書に據つても、一鳳が筆を取つた事は明かだが、なぜか第一回興行の番附には名が無く、三月に至つて增補再演した分の番附へ初めて名を出してゐる。一鳳は八犬傳の筋を菅原の書替へにして、早くから脚色の腹案があつた後だから、無論この脚色にも深い關係はあつたに違ひない。最初の上演は俳優の病氣が相次いで起つて、芳流閣まで出して短日に終り、三月十六日から更に對牛樓までを增補し、前を奈

し抜いて揃へて見せたので、この方は大入であつた。本篇はこの初日後日を引ッくるめたもので、從つて非常に長い。
八犬傳の脚色は、江戸でも[illegible]田治[illegible]始め、いろ／＼た作者がやつてゐるが、大抵犬塚信乃の件から始まる事になつてゐるのを、この脚本では忠實に最初から脚色して、五篇位までの題目の個所は、大體抜かさずに收めてあるのでこの方を採る事にしたのである。尤も序幕なぞは、並木五瓶の「袖簿播州廻」をソックリ拜借し、その外の場面にも大分小說の筋を破壞して、大坂狂言らしく改めてはゐるが、當時の脚色として、これは止むを得なかつたであらう。

第一回興行の時の役割は左の通りであつた。

犬塚信乃、金輪大助（嵐璃寛）杉倉氏元、大塚番作犬川莊助（關三十郎）犬山道節、堀内藏人（坂東壽太郎）槇木朴平、女房龜篠（大谷友右衛門）赤岩一角、下人背助（嵐璃珏）安西景連、妻立戸五郎（中村歌十郎）大塚蟇六（淺尾爲十郎）里見義成、鮎原[illegible]度（中村歌十郎）姉曳手、五十子御前 山下金作）里見季基（中山文七）傾城玉梓、番作妻手束、下女おなか（中山南枝）山下柵左衛門、網干左母次郎、百姓糠助、犬飼現八（片岡市藏）里見伏姫、娘濱路（中村富十郎）山内顯定、橫堀在村（片岡仁左衛門）

この役割で發表されたが、三十郎が病氣になつたり、爲十郎が死んだりしたので、市川鰕十郎を入れて番作と莊助をやらせ、三十郎は氏元だけ勤め、蟇六は中村歌十郎がやるやうな騷ぎであつた。

第二回の役割は、増補したものだけを記して置く。多少變更されたものもある。

大塚番作、犬川莊助、堀内藏人（市川鰕十郎）杉倉氏元、犬山道節、犬田小文吾（關三十郎）馬加常武（大谷友右衛門）里見義成、犬村角太郎（嵐璃珏）大塚蟇六（中村歌十郎）稱古の七郎、坂田金六（市川新十郎）里見義成、里見義實、蜑崎照文（中村歌十郎）紅梅毬お竹（山下金作）古那屋文五兵衛（中山文七）[illegible]おりき（中山南枝）山林房八（片岡市藏）犬坂毛野（中村富十郎）

房八の役なぞは最初璃寛のつもりであつたところが、病氣で辭退したので、市藏へ持つて行つた爲に、立役が敵役に變つてしまつた次第である。

原作の「南總里見八犬傳」は、申すまでもなく曲亭馬琴の傑作で、文化十一年に初輯を出し、天保十二年にやうやく完結した、（全部百六册の大長篇である。

柵自來也談（やへむすびじらいやものがたり）

「自來也說話」は支那小說の翻案で、文化三年に出た十

二册本、作者は感和亭鬼武である。流行の仇討物に、自來也の義俠を加へた趣向大當りで、翌四年九月には、大坂角の芝居で脚色上演されたのが本編である。作者は近松德三だが、奈河篤助もいくらか手傳つたらしい。芝居としても大當り、團藏の家の狂言になつて、明治になつてまで盛んに舞臺に現はれたものである。義太夫にもなつた事がある

初演の役割は左の通りであつた。

椎津市正國久、淺見雅次郎正輝、中邑留藏（嵐吉三郎）妹渚（藤川勝次郎）白山大學、岩瀨喜文太、番頭彥兵衞（桐の谷權十郎）勇源吾正村。天眼礒兵衞（嵐猪三郎）足利左門之介、織殿屋新三郎（市川八百藏）傾城代々衣、娘美鳥（藤川友吉）醫者喜樂齋乳母おきと（三保木吉左衞門）角屋お傳、石堂與方玉木（市川おの江）傾城三千歲（澤村田之助）白山園之丞、淺妻歡之助、仲仕嘉八（淺尾友藏）萬里破魔之助、八代村傳兵衞（市川市藏）鹿野苑軍八（大谷友右衞門）女房お衣重、自來也妻檜垣（芳澤いろは）盜賊自來也、名越長兵衞（市川團藏）傾城碑、王琴姬（嵐龜三郎）

猶、「道行利生の旅路」といふ景事の一場があつて、新三郎と三千歲が道行場で難儀にあふのを、金毘羅の神靈に救はれるといふ筋であつたが、底本に缺けて居たので入れられなかつた。

美圖垣笑顏が、この自來也を、田舍源氏の光氏風の兒雷也に直し、草双紙で當つてから、芝居でも脚色して、この方が今に流行してゐるが、直接本編と關係はない。

靑砥稿（あをとさうし）

弘化三年七月、市村座に上演したもので、文化五年に出版された曲亭馬琴の「三七全傳南柯夢」と、文化八年に出た同じく馬琴の「靑砥藤綱模稜案」のうち貝屋善吉を加へたものに、更に文政三年出版、櫟亭琴魚作の「鸞水箴語」を添へた、三世櫻田治助の脚色であつた。尤も前二者は、大坂では早くから脚色され、當りを取つたものを江戸風に改作したので、「鸞水箴語」だけがこの時の新らしい加へ物であつたが、この方の筋が一番評判が悪く、全部出揃はないうちに削られてしまつたので、本篇にもこの件だけは省く事にした。

この狂言は大當りで、以來度々上演された。世話物の不得意な歌右衞門も、これだけは例外といふ好評で、大坂へ歸つた後のお名殘狂言もこの貝屋善吉であつた。脚本としても、小說の筋通り一本で、餘計な枝葉を加へず、今で云へばレビュー式に、トン／＼と運んでゆく形式が、當時としては非常に新らしい。臺詞なぞも洗練されたもので、治

助の作の中では、上位に置くべき脚本だと思ふ。

元が小說を脚色したものだのに、今度は芝居で演じた臺帳を種に、藤本吐蚊が小說に還元した「勸善靑砥譚」が弘化四年から六篇續きで出て、これも歡迎されたものである。後に全盛を極める芝居小說の、魁をなしたものと云つてよろしい。

初演の役割は左の通りであつた。

赤根半七、仕丁五郎又（市村家橘）笠松平三郎、鴻臺昌九郎（關三十郎）座頭丹波市、厚倉新十郎、白眉の長（三枡梅舍）序幕の半七、伊皿子七郎（中村福助）序幕のおさん（玉三郎）庄屋杢兵衞、女房おうし（松本小次郎）伊加留源治（坂東三八）布施長九郎（中村鶴助）後家おそや（松本虎五郎）若黨治郎平（中村イ四松）關の孫六（關孫六）東院の友次（中村島八）馬場兩庵、百姓十作（關十藏）笠屋小夏（松本にしき）笠屋小勝（中村歌女太郎）百姓勘太（中村歌太郎）今市金八郎（坂東大二郎）多賀郡司（關歌助）筒井吉稚（坂東三田八）藪屋小藤（吾妻藤藏）半六女房おなみ（嵐小六）娘園花、木曾のおろく（藤川花友）赤根半六、佐栗宇太郎、鴻臺馮二（中村芝十郎）笠屋三勝、賤の女おみつ（坂東しうか）貝屋善吉、靑砥左衞門藤綱（中村歌右衞門）

例に依つて、役割カタリ押繪にまでわたつて、山形の秋葉芳美氏に、大變お世話になつたお禮を、末尾ながら申し述べて置く。

編輯校訂責任
渥美清太郎
鈴木倪

日本戯曲全集・第二十五巻
小説脚色狂言篇・第十六回配本

編纂者検印

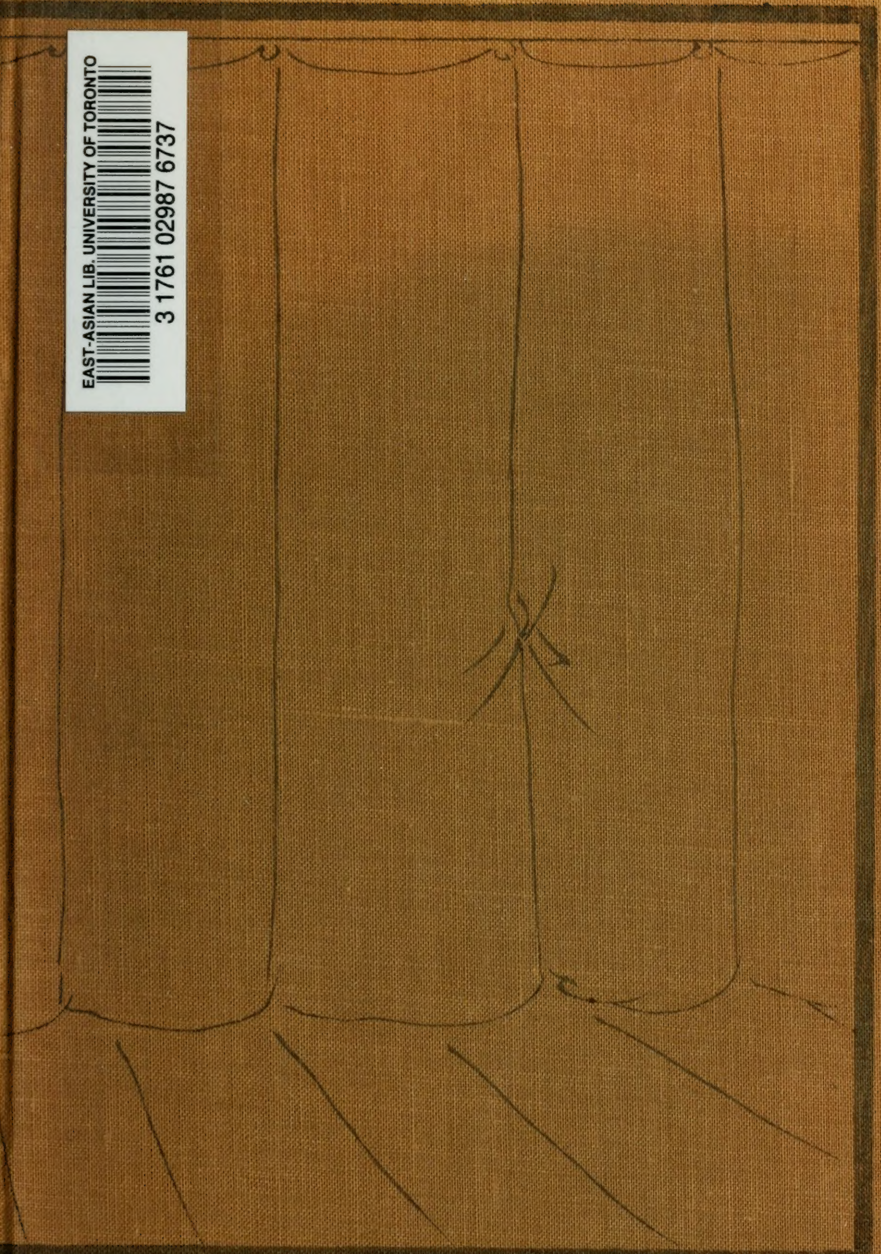
昭和四年十月十七日印刷
昭和四年十月二十日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一
三七八八
振替東京一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社）



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02987 6737